

大乱闘スマッシュブラザーズ Stern des Lichts

アヤ・ノア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大乱闘スマッシュブラザーズSPECIALのアドベンチャーモード「灯火の星」を題材にした二次創作小説のハーメルン版です。

※注意※

- ・ 原作では参戦しないキャラクターがファイターになっています
- ・ 原作には登場しないオリジナルキャラクターがいます
- ・ 一部のキャラクターが登場しません
- ・ pixiv版とは一部キャラクターが異なります
- ・ パロディが多々あります
- ・ ネタバレも多々あります

これらが苦手な方は閲覧をおやめください。

pixiv版はこちらになります←

<https://www.pixiv.net/novel/series/1037980>

目次

プロローグ	1
第一部：光の世界	
1 〽 病弱メイド・アイシヤ	5
2 〽 異世界の魂	14
3 〽 灯火の星	19
4 〽 動物の魂を解放せよ！	23
5 〽 マリオを救え！	33
6 〽 囚われし三人の戦士	39
7 〽 おてんば娘は憎めない	46
8 〽 レース場には戦士がいっぱい	53
9 〽 はどうポケモン・ルカリオ	59
10 〽 再びレース場に	64
11 〽 ヨツシーを救え！	70
12 〽 一意専心の槍歩兵	78
13 〽 お医者さんを探して	83
14 〽 フオックス発見！	89
15 〽 街の中で	98
16 〽 ソレイユとリユヌ	107
17 〽 溪流を渡る	113
18 〽 ねずみポケモン・ピカチュウ	119
19 〽 森の中で	124
20 〽 ジャングルの王者	134
21 〽 森のバナナにご用心	139

4 6	〜	クール&ビューティーな賞金稼ぎ	322
4 5	〜	大魔王・ギガクツパ	315
4 4	〜	溶岩城へ	307
4 3	〜	その目は何を見る	299
4 2	〜	光の神殿	292
4 1	〜	氷山にて	285
4 0	〜	ほんわかアシスタント	280
3 9	〜	タツマイリに住む少年	275
3 8	〜	魔弾の射手・ストーム	269
3 7	〜	キノコの谷	262
3 6	〜	小さな体に大きなパワー	253
3 5	〜	電力プラントの攻略	246
3 4	〜	深緑の密林	238
3 3	〜	自然王ナチュレ	230
3 2	〜	霧の森	224
3 1	〜	最後のスマブラ四天王	213
3 0	〜	異世界の剣士達	207
2 9	〜	二振りの剣	201
2 8	〜	魅惑のふうせんポケモン	195
2 7	〜	シャドウ大活躍？	186
2 6	〜	ほんの少しの休息	180
2 5	〜	伝説の傭兵	170
2 4	〜	基地への潜入	159
2 3	〜	青きメタルヒーロー	151
2 2	〜	黄色い伝説・パックマン	145

47 乱闘 その道化の名を呼べ

48 穏やかじゃない冒険

49 ラプラスにのって

50 一狩り行こうぜ！

51 DKアイランド

52 雲の上で

53 拳を磨く男達

54 スペース・トラベル

55 光の化身キーラ

第二部：闇の世界

56 バラバラの仲間達

57 戦闘！ ガオガエン

58 聖地突入

59 謎を解け

60 絶望の青と希望の黒

61 アドベント・チルドレン

62 悪魔の子と呼ばれし勇者

63 小さな大魔王（候補）

64 蘇る魔王・ガノンドロフ

65 大魔王・ガノン

66 左手の従者は魔法を操る

67 未来を知る王女

68 突入！ ドラキュラ城

69 狡猾の死神

70 ダッシュユフアイターズ

326

335

346

355

362

370

379

387

397

404

412

418

425

435

444

449

453

458

466

471

477

484

494

501

71	〜	囚われの師	509
72	〜	夜の伯爵、ドラキュラ	517
73	〜	謎の空間	526
74	〜	星を見るもの	533
75	〜	クイズに答えてちよーだい！	539
76	〜	仲間を助けて	552
77	〜	闇を闇から救え	567
78	〜	マルク	580
79	〜	闇の化身ダーズ	587
80	〜	キーラとダーズの過去	593
第三部：最終決戦			
81	〜	光と闇が混ざる道	599
82	〜	狂気の左手	609
83	〜	創造の右手	616
84	〜	ホントの最終決戦へ	621
85	〜	光と闇を倒せ	626
86	〜	天秤は傾かない	635
87	〜	戦いの果てに	648
88	〜	命の灯火	656
エピソード	〜		666

プロローグ

数多の可能性と戦士達が住む、争いの世界。

今までも多くの危機が襲い掛かって来たのだが、戦士達によって、その全てを乗り越えてきた。

「今日こそ決着をつけてやる！」

フォックスが、ブラスターを構えて言う。

他の戦士達も、来る敵に備えていた。

そして、空から無数のマスターハンドらしき手と、赤や青、白の翼に包まれた白い光が現れた。

「一人で10体くらい倒せればいけるか……?」

「ここまで来たら、やるしかないでしょう」

マルスとゼルダが、真剣な表情で戦闘態勢を取る。

普段はどちらかというと大人しい性格の二人だが、いざという時の行動力は凄まじいのだ。

「僕達なら、きっと勝てる！」

ピットが、パルテナの神弓を構えながら言う。

彼の言う通り、この危機も、戦士達は「予定通り」乗り越える事ができる。

その、はずだった。

「!?!」

突然、無数の手のはがれ、青い光に変わる。

その時、シユルクは未来視ビジョンを使った。

無数の光が戦士達を貫き、ソニックはピカチュウより速いにも関わらず、

ピカチュウを助けようとしたが間に合わず、そしてソニックも光に貫かれる――

その未来が、シユルクに見えていた。

「みんな、逃げて!!」

シユルクは戦士達に警告した。

だが、その警告が来るよりも早く、戦士達を無数の光が襲った。

「くそ！ なんだよ、こいつは！」

リンクは剣と盾で光を防御していく。

だが、数の多きに対処できず、リンクは光に貫かれた。

「私の攻撃が通用しない!？」

サムスの射撃攻撃も通用せず、彼女もまた、光に貫かれた。

「はっ！」

「ぬうん！」

ゼルダとミュウツーが、バリアを張って光を防ごうとする。

だが、光はバリアを貫通し、ゼルダとミュウツーを飲み込んだ。

「俺の手に掴まれ、ピカチュウ！」

「ああ、ソニ……うわあ!？」

なんだかんだで仲間思いのソニックは、ピカチュウを助けるために手を伸ばした。

「のああ！」

しかし、二人とも間に合わずに光に飲み込まれた。

「そんな光、私には効かないわよ！」

ベヨネッタは光が当たる直前で蝙蝠に変身し、攻撃を回避した。

「……っ！ また来た!？」

だが、次に来る光には対処できず、ベヨネッタは光の中に消えた。

「行けっ！ トルトウ、ファイオーレ、ブレイズ！」

「我輩もこんなところで負けてはいられないのだ！」

ロートのポケモン、ゼニガメのトルトウ、フシギソウのファイオーレ、リザードンのブレイズと、クツパの攻撃が光を打ち消そうとしている。

それでも、四人の攻撃は光に通用せず、彼らも光の中に消えていった。

「ぐおっ!？」

ブルーファルコンに乗ろうとしたファルコンも、光に飲み込まれる。

「ふっ」

「お前とまた、こうして戦えるとはな」

ルカリオとゲッコウガは、光と対峙していた。

そして、ルカリオが攻撃をしようとする、ルカリオは光に飲み込まれる。

「ルカリオ！ く……残ったのは俺だけか！」

ゲッコウガは飛び上がって光を回避するが、彼も光の中に消えた。

「まずい、光が……きやあああああ！」

インクを塗っていたマールは急いでインクの中に潜る。

しかし、光は容赦なくインクごとマールを貫いた。

「ちっ……！」

「きやあああ！」

「うわあああ！」

その後も、ファルコが光に貫かれ、バリアを張っていたパルテナが光に貫かれた事で、

奇跡を失ったピットとブラックピットは墜落し、光に飲み込まれた。

スネークも、ダンボールごと光に飲み込まれた。

その後も、空を飛んでいたデイデーコングとロゼッタとチョコ、

逃げようとしたソレイユ、リユンヌ、ダック、ハント、りょうも光の中に消えた。

「逃げなきや！ 逃げなきや……！」

カービィは、ワープスターに乗りながら無数の光から逃れていた。

あれに当たれば、自分もああいう風になってしまうと感じたカー

ビィは、

どんだんスピードを上げていった。

「うわっ！」

もう少しで光が当たる……その直前で、カービィは宇宙に避難した。

そして、争いの世界を、眩い光が包み込んだ――

エアシューズの音が、荒野に流れる。

カチャリ、カチャリと、鎌の音も聞こえてきた。

「ねえ、シャドウ……！」

「……これはどういう事だ？」

そこには、誰もいなかった。

その場に残っていたのは、黒きハリネズミ・シャドウと、若き死神・ベルだけだった。

「僕以外……誰も生き残っていない……？」

「みんな……どこに行っちゃったの……？」

シャドウとベルが呆然としてみると、空から何かが降ってきた。

「うわあああああああ……！」

それは、ワープスターにしがみついているカービイだった。

「いったあ……うい！」

そして、墜落したカービイを、シャドウとベルが見つめる。

「うう……くらくらする……。ね、ねえ、な、何が起こったの……？」

「それは私達にも分からないわ。」

でも、分かっているのは、私とシャドウ、そしてあんたがいるって
いう事実だけ」

「僕はあるんじゃないかってカービイだよ！」

ベルに「あんた」と言われて怒るカービイ。

「ごめんごめん、名前で呼ばなきゃダメだったのね」

「……それで、何をすればいいか、だが……。まずは、いなくなった奴
を探そう」

「うん！」

「光のカービイに、闇のシャドウに、中立の私。これって結構いいパー
ティーじゃない？」

幾多の世界の危機を潜り抜けた、争いの世界。

その世界に、ついに、破滅の時が訪れた。

今や、その危機を救えるのは、星の戦士と、究極生命体と、死神だ
けとなっていた。

第一部：光の世界

1 病弱メイド・アイシヤ

カービィ、シャドウ、ベルの三人は、身体を失ったファイターを助けるため、立ち上がった。

ちなみに、カービィ以外の二人が生き残った理由としては、

シャドウはカオスコントロール、ベルは魂を守る魔法で光線を防いだからだ。

「行方不明とはいったけど……なんか、魂が凄く集まってない？」

「魂？」

ベルは死神であり、魂や生命の気配には敏感だ。

そんな彼女が、この場の異変に気付かないわけがなかった。

「そうよ。この世界に散らばった魂……これが異変の原因じゃないかと」

「確かに、戦士が魂になったという可能性はある。だが、それを証明できるか？」

シャドウの言葉に、カービィは「あ！」と思い出したように叫ぶ。

「僕見たんだよ、リン兄やマルっちが光に包まれて消えたところを！」

「やっぱり！」

もしも、リンクやマルスが光に包まれて魂になっていれば……

この異変も、その光が原因かもしれない。

ベルは真剣な表情で、強く鎌を握っていた。

「これはまずいわね……。このままじゃ、この世界が滅茶苦茶になるわ……」

「じゃあ、僕がみんなを助けに行こう！」

「待て。僕を置いていくつもりか？」

「カービィ……私達はどうなるわけ？」

「あ」

カービィは、シャドウとベルの存在をすっかり忘れていた。

「あー、忘れてたよ。とりあえず、僕とシャド兄とベルベルは、チーム

でいい?」

「……その言い方は好きではないがな」

「ベルベルじゃなくてベルよ」

カービイがシャドウとベルにつけたあだ名は、二人には不評なようだった。

とはいえ、今戦えるのは三人しかいないため、チームを組む羽目になるのだった。

「じゃ、チームは決まったし、役割分担を決めましょう。まず、私は魂を探す係」

「僕はみんなを助ける!」

「……そして僕は邪魔な敵を倒す係、か」

「あんだ、この中で一番強そうだしね」

カービイは仲間を助ける役、シャドウは敵を倒す役、ベルは魂を探す役となった。

今ここに、光と闇と死神のチームが結成された。

「さて。まずは、この世界に散らばった魂を探すわ」

「お前にできるのか?」

「私は死神よ? 魂の感知くらい朝飯前なんだから」

そう言つて、ベルは鎌を掲げ、精神を集中した。

「……………ここから10時の方向に、魂があるわ!」

「そこが、僕の目指す最初の場所か」

「よーし、待っててね!」

カービイはバタバタと走り、シャドウはエアシューズ、ベルは魔法で加速してその方向に向かった。

道中で、サブスペーサーのプリムが襲い掛かってきた。

サブスペーサーは元々は異界の住人だったため、今回の異変の影響は受けていない。

このプリムは武器を持たず、パンチとキックのみで攻撃するため、三人にとっては相手ではなかった。

「まったく、私達に襲い掛かってくるんじゃないわ」

「もう二回も亜空軍が来たのに、懲りないね!」

「この辺に落ちているものは、何もな……ん？」

シャドウが辺りを探索していると、足元に拳銃が落ちていた。

「これ……銃じゃない！ 一体誰のものかしら？」

「うーん、分かんない」

「……ともかく、拾っておいて損はないな」

そう言つて、シャドウは拳銃を持つていった。

「うーん、かさばるだけだと思っただけどねえ」

三人が歩いていると、ブーメランプリムがカービイに向けてブーメランを投げてきた。

「ひゃー！」

カービイはブーメランを回避するが、ブーメランはカービイがいた方に戻ってくる。

「そこだつー！」

シャドウは狙いを定めて、ブーメランプリムのブーメランを拳銃で撃ち落とす。

「ありがとう、シャド兄！」

「勘違いするな、ブーメランプリムを倒しやすくするためだ」

ブーメランを落としたプリムの戦闘能力は大きく落ちていた。

プリムは急いでブーメランを拾おうとするが、

そこにベルの一闪が入ってブーメランプリムは倒された。

「それ、かさばるだけだと思つたのに、意外に使えるのね。私、こういうの苦手なのよ」

ベルは銃器のように、複雑な構造の武器を使用するのが苦手だ。

死神のほとんどが大きな鎌を使うのも理由の一つかもしれないのだが、ベルは手先が不器用だ。

「ま、それは私には使えないから、あんたが持つてなさい」

そう言つて、ベルはシャドウに拳銃を任せ、彼とカービイと共に歩いていった。

「……ん？」

その時、ガサツ、という音がした。

とても小さい音だったため、カービイは気付かなかつた。

「どうしたの、カー……」

「うわああああああああああ!!」

突然、三人の足元で巨大な陥没が発生した。

僅かに浮遊していたシャドウとベルは影響がなかったが、

カービイはうっかり地面に足を着けていたため、

ホバリングする暇もなく遙か下に転落してしまった。

「あらー、希望の光が落ちちゃうとはねえ。

ったく、タイミングが悪い時にぼんやりなんだから」

「仕方あるまい。あまり行きたくはないが、僕もあいつを探しに行こう」

「よし、レッツゴー!」

シャドウとベルはカービイを追うため飛び降りた。

「これで落ちたのは二回目だよ……」

「大丈夫、カービイ」

「来てやったぞ」

転んでいるカービイを、ベルが引き上げる。

高いところから落ちてきたため、ホバリングをしないと脱出はできない。

「私とシャドウを掴んでホバリングできるかしら?」

「うん……やってみる!」

ベルとシャドウは、カービイの手を掴んだ。

カービイは大きく息を吸い込んで膨らむと、手を掴んでいた二人が宙に浮かんだ。

同時に二人を持っているのか、もう片方の手を強くバタバタさせる。

カービイは一生懸命に二人を運んでいた。

「う、うう、重いよお……」

「頑張つて! もう少しよ!」

「うん……頑張る!」

そして、10分後、カービイは二人を運んで地上に戻る事に成功した。

「ああ、疲れた」

二人を一度に同時に運んだのか、カービィはぺたんと座り込んだ。

「お疲れ様。よく運べたわね。あんたは、しばらく休んでなさい」

「でも、どうやって休むの？」

「私に任せなさい！」

そう言つて、ベルは魔物除けの結界を張った。

「この結界は『死』の気配が強いから、魔物が近づかないわよ」

「中にいる僕達は平気なのか？」

「当たり前でしょつ、ちゃんと調整したから」

三人が休憩を終えて15分後、魂のある方向を目指して歩いていった。

道中は歩きにくい道だったが、ホバリングや技などを駆使して乗り越えていった。

そして、しばらく歩いていくと、アイシヤが倒れていた。

「ちよ、アイ姉!?! 身体がないはずじゃ……」

「それが、抜け殻で見つかったのよね。……ねえ、アイシヤ?」

アイシヤの近くには、桃色の髪の毛のメイドらしき女性の魂……スピリッツが浮かんでいた。

ベルは、じつとその魂を見ていた。

「……」

「どうしたの? ベルベル」

「……」

カービィの言葉に、ベルは全く反応しない。

四分後、三人の前に文字が現れた。

フェリシア

出身世界：戦記の世界

性別：女性

カムイに仕えるメイド。フローラの双子の妹。

うっかり屋な性格で、軍の中で一番、破壊神。

メイドだが、料理の腕は壊滅的。

「これ、なーに?」

「ああ……ここにいる魂の説明よ。出身世界や簡単な説明を見る事ができるわ」

「そうか……」

「凄いでしょ……と言いたいところだけど」

ベルが自身の能力についてカービィとシャドウに説明すると、
フェリシアのスピリッツはアイシャに入り込んだ。

すると、倒れていたアイシャが、むくりと起き上がった。

「アイ……姉？」

「……ス……」

スピリッツに憑依されたアイシャの目は、赤く染まっていた。

「……ケ……ス……」

「どうやら、この魂がアイシャの抜け殻に憑いたようね。倒して、魂を解放しましょう！」

「うんー」

「ああ」

ベルの号令により、カービィとシャドウは戦闘態勢を取った。

「カオススパア！」

シャドウが二発のエネルギー弾をアイシャに向けて飛ばし、牽制する。

「バーニング！」

「リーパー！」

次に、カービィが炎を纏ってアイシャに体当たりをしてダメージを与えた。

アイシャが怯んだ隙に、ベルは鎌を振って彼女を斬りつけた。

「あまり傷つけたくはないけど……ちゃんと戦うしかないみたいね」

「……ケ、シ、マスワ……」

アイシャはナイフをカービィとベルに投げつける。

カービィとベルはいくつかは弾いたが、いくつかは当たってダメージを受けた。

「来なさい」

ベルは鎌を持っていて、何も見えないように見える。

アイシヤはそのままベルに突っ込んでいったが、次の瞬間、アイシヤに無数の棘が刺さった。

「グ……!?!」

「トラップには気付かなかったみたいね。私の必殺技、ダークマジックよ！

さあ二人とも、やっちゃいなさい！」

「おっけー！」

カービイとシャドウはアイシヤに突っ込んでいき、体術でアイシヤを攻撃していった。

アイシヤは体力がないため、すぐに瀕死状態になった。

「……ウ……」

「とどめを刺すか」

シャドウがアイシヤを倒そうと拳銃を構えた時、ベルが止めに入る。

「待ちなさい、アイシヤを殺しちゃダメ。私達は魂を解放するために戦っているのよ。

だから、それを希望の光に託すために……リーパー！」

ベルはカービイにとどめを刺してもらおうべく、鎌でギリギリまでアイシヤの体力を削る。

「カービイ、とどめはあんたがやりなさい！」

「よし、いくぞ！ ファイナルカッター!!」

「……」

カービイが飛び上がってカッターを振り下ろすと、

アイシヤの身体を乗っ取っていたスピリッツが彼女から抜け出した。

同時に、戦っていたアイシヤもぼたりと倒れた。

「……」

「さつき、抜け殻って言ったよね、ベル姉……。ねえ……アイ姉をどうするの……?」

「このままにしておくわけにはいかないし……一応、こうするしかないさそうね。

……ソウルリバーズ！」

ベルは、勢いよく鎌をアイシャに突き刺した。

「はあ……。はあ……。あれ、ここは、一体どこですの……?」
すると、気絶していたアイシャはゆっくりと起き上がった。

スピリッツに憑依されていた時の記憶は、アイシャには残っていないようだ。

「ね、ねえ……。なんでアイ姉が起き上がったの?」

「私が死神の力でアイシャに仮の魂を与えたのよ」

ベルが小声でカービィに説明した後、アイシャに事情を話す。

「あんたがどうなったのかというと、私達が……正確にはカービィが、あなたの身体を乗っ取っていた魂を取り出したのよ」

「どうだ!」

カービィがえっへんと胸を張る。

アイシャは「ありがとうございますわ」とカービィにお礼を言った。

「それで……マスターハンド様はどちらに?」

アイシャは主人のマスターハンドがない事に気が付き、辺りを見渡す。

カービィは、アイシャに事情を説明した。

「マスターハンドは、みんなでたくさん光になって襲い掛かってきて、生き残ったのは僕とシャド兄とベルベルだけなんだ」

「ええ……!?!」

現在の生き残りが、自分を除くと三人しかいないという事実
にアイシャは驚いた。

「もしかして、ファイターはあなた達以外、全滅したんですの!?!」

アイシャの言葉に、三人は静かに頷く。

沈黙は、肯定の証だった。

「……はあ、まったく、大変な事態になりましたわね……」
アイシャは荒廃した争いの世界を見て溜息をついていた。

「……わたしは、いつ休めるんですの……?」

「さあな」

果たして、カービィ、シャドウ、ベル、アイシャは、

絶望に満ちた争いの世界に、希望の光を灯せるのだろうか。

2 異世界の魂

「フェリシアの魂を解放し、アイシャを仲間にしたカービー、シャドウ、ベルは、

次の魂を探して荒野を歩いていた。

「シャドウ、そんなの持ち歩いて、かさばったらどうなるの?」

ベルは、シャドウがまだ拳銃を持ち歩いている事に不満のようだった。

「以前に使った事があるし、手に馴染むしな。」

ソニックは『俺にはそんなおもちゃ、必要ないけどな』と言っていたが

「しようがないわねえ……」

「どうやら、シャドウは以前に銃器を使った事があるらしい。」

ベルは「やれやれ」と言いながら、彼が銃器を使う事を渋々許可した。

「あ、あの、傷ついたらわたしが治しますので、安心してくださいねっ」
アイシャがキラキラと三人を見つめる。

それは間接的に「傷ついてください」と言っているようだが、もちろんアイシャに自覚はなかった。

「後、お腹空いたらご飯お願いね!」

「はい、分かりましたわ。……あんまり長くは動けませんけど、ゴホッ!」

アイシャが話した後には咳き込む。

それは、彼女が病気であるという証拠であった。

「あまり無茶はするなよ。君が倒れたら、どうなるんだ」

「あれ、シャドウさん。どうしてわたしの心配を?」

「放っておけなくなっただけだ」

シャドウはアイシャを心配するように声をかけた。

あの時の未練は残っていないはずだが、何故か、放っておけなくなったらしい。

「さて、そろそろ魂を探そうかしらね……」

毛虫怖い毛虫怖い毛虫怖い毛虫怖い毛虫怖い毛虫怖い毛虫怖い毛虫怖い毛虫怖い」

カービィは、大量の毛虫に出会った事により、精神にダメージを受けてしまった。

そのため、このように狂気に陥ってしまったのだ。

「あくあ……こんなにくさくさん毛虫がいたのね。カービィのためにも、これは排除！」

道には大量の毛虫がいて、これがカービィを発狂させた要因だろう。

ベルは、大鎌を構えた後、毛虫の群れに一閃して真つ二つにした。

「カービィ、もう大丈夫よ」

毛虫を全滅させたベルは、怯えているカービィをポンポンと叩いた。

「も、もう、大丈夫、な、の?」

「信じて! ほら、もう毛虫は……って、え?」

ベルが道を指差すと、長い黒髪の、露出度の高い衣装をした女性のスピリッツを発見した。

毛虫を一閃したらスピリッツが出てくるとは、

パツクンフラワーがファイターになった時のような衝撃を受けた。

「こ、これってスピリッツ!? ま、待って! 私が見るわ」

ベルは、いきなり見つけたスピリッツの詳細を三人に見せた。

ティファ・ロックハート

出身世界：こことは異なる世界

性別：女性

アバランチに所属する女性。クラウドとは幼馴染。

ザンガン流格闘術を使い、腕はなかなかのもの。

抜群のスタイルとは裏腹に控え目な性格で、料理上手なため、母親のような存在。

「……」

スピリッツとなったティファは、言葉を話さず、こちら側に敵意を見せていた。

これも、あの光の影響なのだろうか……とベルは唾を呑む。

「……解放するわよ」

「うん！」

「ああ」

「分かりましたわー！」

カービィ、シャドウ、ベル、アイシヤは、

ティファアのスピリッツを解放するために戦いを挑んだ。

「……」

「うわああああー！」

ティファアはカービィに突っ込んで掌底を三発叩き込む。

格闘技が得意なだけありその威力はなかなか高い。

「お怪我はありませんか？」

「う、うん。いただきますー！」

アイシヤはカービィに薬草で作ったお茶を振る舞った。

あまり好き嫌いをしないカービィはそのお茶を飲んで、体力を回復した。

「ありがと、アイシヤ。楽になったよ」

「どういたしまして」

「行くぞー！」

「やい！ 解放するわよ、ナイトメア！」

シャドウはティファアに拳銃を撃って牽制する。

ベルはその隙に、闇を纏った大鎌を振るってティファアを勢いよく斬りつけた。

「そー、れっ！」

カービィはカッターを呼び出して勢いよく飛び上がった後、振り下ろして衝撃波をティファアに飛ばす。

攻撃はクリーンヒットしてティファアに大ダメージを与えた。

「ハアッ！」

シャドウは指を鳴らして時空の歪みをティファアにぶつけ、ティファアをこちら側に引き寄せる。

「デイバウアー！」

「……」

ベルはティファアを思いつき切り裂き、同時にティファアも水面蹴りを放った。

「あいたたた……でも、今度はそうはいかないわ！ ヴォーパルサイズ！」

ベルはティファアの急所を狙って大鎌で斬りつける。

そして、ティファアがよろめいた隙に、炎を纏ったハンマーを構えたカービィが突っ込んだ。

「食らえーっ！ 鬼殺し火炎ハンマー!!」

そして、カービィがハンマーをティファアに振り下ろすと、

ティファアのスピリッツは炎に包まれる。

やがて炎が消えると、ティファアのスピリッツは天に昇るのだった。

「よし！ おーわりっど！」

ティファアのスピリッツを解放して喜ぶカービィ。

一方で、ベルはちよつと辛そうな顔をしていた。

「どうしたの？ ベルベル、元気ないよ？」

「はあ……異世界のスピリッツもいるのね……」

「シャド兄がいる時点で、ね」

「あ」

「あ」

ベルは、カービィに言われて、シャドウが異世界の住人である事を思い出した。

カービィは、意外と鋭いところもあるのだ。

「……ま、まあ、スピリッツを解放できてよかったわね。さ、次行きましょ、次」

「うんー」

とりあえず、スピリッツの解放には成功したため、ベル達は次のスピリッツを探すのだった。

3 〽 灯火の星

さして、ここまでのあらすじといこう。

無数のマスターハンドを従え、新たなる創世を狙うキーラ。反抗勢力であるファイター全軍との最終決戦は――

圧倒的な光に包まれて、終焉を迎えた。

かくして“この世界”――争いの世界は、キーラの手には落ちた。

戦えるファイターは、全滅した。

他のものは全て身体を失い、“スピリット”と化した。

生き残ったのは、たった三人。

星の戦士と呼ばれる少年(？)、カービー。

人の手により生まれた黒き究極生命体、シャドウ・ザ・ヘッジホッグ。

現世と常世の秩序を守る死神、ベル・クリープ。

“希望の星”は、混沌の中で、か細く瞬いていた。

「つてなわけで、とりあえず魂を使って、情報をいくつか集めておいたわ」

ベルは、キーラについての情報を、魂を操る力を使って探った。

「私達がキーラ……つて呼んでる奴は、ファイターの母体を使ってボディを生成したわ。」

それで、支配下に置いたスピリットの力を使ってボディを操ったの。

だから、キーラは圧倒的な数と力の軍勢を持つわ。

私達はこの世界を覆うスピリット達を、キーラの手から解放し、

力を借りて、ファイターの母体を救うのよ」

「なるほど……そういう事だったのか」

「というわけで、ありがとね、魂さん♪」

そう言って、ベルは魂を解放した。

ちなみに、彼女が呼び出した魂は、スピリッツではない事をここで記す。

「さあして、スピリッツをどんどん探すわよ！」

「はいー！」

ベルを先頭に、カービィ、シャドウ、アイシヤは、スピリッツを探していた。

魂の感知が得意なベルは、きよろきよろと辺りを見渡していく。

「うーん、この辺に魂はあるのかしら？ あー！」

「どうした？」

「ベルベル〜？」

突然、ベルが立ち止まり、目をキラんと光らせる。

カービィとシャドウも落ち着いて、彼女の目線の先を見た。

すると、宙に黒い生き物が浮かび上がっていた。

「スピリッツみつけー！」

「おお、これで三体目だねー！」

「よし、説明を見るわー！」

ベルは、自身の能力を使って、スピリッツについての説明を見た。

ドドロ

出身世界：とある惑星

性別：不明

深緑と黒の身体と、気化した下半身を持つ不気味な原生物。

ピクミンを犠牲にしたくなければ、絶対に下半身にはピクミンを近づけさせない事。

「このスピリッツは、マリオのボディに入っているようね」

「マリオさんを攻撃するのは気が引けますけど……」

「だーめ！ スピリッツを解放するのよ！ ね？」

ベルはやる気満々で大鎌を構える。

シャドウも冷徹な表情で、戦闘態勢を取った。

「うんー！」

カービィも、満面の笑みを浮かべて、ドドロ in マリオと戦う準備をした。

「あああ〜もう！ 皆さん、本当に好戦的なんですからー！」

アイシヤはハラハラしながら、ドドロとの戦いに臨んだ。

「カオススパアー！」

シャドウはドドロに混沌の矢を放ち、ドドロの急所を突いて大ダメージを与える。

「ナイトメア！」

「えーいっ！」

ベルは闇を纏った鎌でドドロを斬りつけて怯ませた後、アイシャがビンタでドドロを攻撃する。

病人のものとは思えないほど、威力は強烈だった。

「バーニング！」

カービィは炎を纏った体当たりをドドロにぶちかました。

「その攻撃は、僕には届かない」

ドドロはシャドウに衝撃波を放ったが、シャドウはワープして攻撃を回避した。

「すごい、シャドウ兄！」

「ふっ、これが究極の力だ。さらに……！」

シャドウはドドロに狙いを定めて拳銃を撃った。

銃弾は吸い込まれるようにドドロの急所を貫いた。

「シャドウさんは、射撃が得意なのですね」

「流石は究極生命体ね。私もあなたに追いつくんだから！」

「デイバウアー！　からの、ダウンリーパー！」

シャドウの活躍で闘志に火がついたベルはドドロを鎌で引き寄せた後、

鎌を大きく振り下ろして真つ二つにした。

何度も攻撃を食らったドドロは逃げようとするが、

カービィが目を光らせてドドロを追いかける。

「僕からは逃げられないよ。大人しく捕まれ！」

そう言って、カービィはドドロに組み付いた。

そして、ドドロにとどめを刺す準備に入る。

「零距离鬼殺し火炎ハンマー!!」

カービィは零距离から炎を纏ったハンマーを振り下ろし、ドドロのスピリッツを解放した。

それと同時に、マリオのボディが消滅した。

「わあい！ これで3つ目のスピリッツが解放されたぞ！」

「よかった……もう大丈夫よ」

「僕達の勝ちだな……」

「はい。う、ゴホツ、ゴホツ！」

天に昇っていくスピリッツを晴れやかな表情で見上げるベルと、
ぴよんぴよん跳ねて喜ぶカービー。

シャドウとアイシャも、この戦いに勝てた事に安心して。

「うう……勝てたには勝てたんですが、ちよつと、休ませてくださいませ……」

「ええ、分かったわ。ゆっくり休みましょ」

身体の弱いアイシャは、少し戦っただけでも疲れてしまうようだ。

ベルはアイシャのためにも、安全な場所で休む事にした。

「お腹空いた……むにやむにや」

「Z z z……」

「Z z z……」

「……」

果たして、カービー、シャドウ、ベル、アイシャの四人は、

キーラの手から世界を救えるのだろうか。

この四人の冒険は、まだ始まったばかりである。

4 〵 動物の魂を解放せよ！

「ふう……疲れが取れましたわ」

「よかった」

敵に見つからない場所で疲れを取った四人は、散らばったスピリッツを探す旅を再会した。

「やはり、人の気配はありませんわね」

「まあ、こんな状況じゃあ、ね」

現在、キーラの襲撃によって、戦える者は非常に少なくなっている。マスターハンドに仕えるメイドのアイシャを助けたばかりではあるが、

まだ、こちら側の勢力はキーラ側の勢力より遥かに少ない。

キーラはファイターやスピリッツ、さらにはマスターハンドまでも手駒にしている。

逆に言えば、彼ら以外の戦力は少なめという事になるため、

四人はファイターやスピリッツを解放してキーラ側の戦力を減らすという作戦を実行したのだ。

「ふん、所詮は自分だけじゃ何もできない奴ね。」

私が全部解放するから、待ってなさいよキーラ！」

「ああ……相手が光の化身だろうと、僕の究極の力で全て潰してみせる」

ベルとシャドウは、にやりと口角を上げて、今はいないキーラに宣言布告をした。

カービーとアイシャは、呆気に取られていた。

「ベルベル？」

「まったく、シャドウさんったら……」

ベルとシャドウは、変なところで気が合うのであった。

「おっと！ イーブイの魂を見つけたわ」

こうして四人が次のスピリッツを探していると、

目の前に四足歩行の生き物のスピリッツが浮かんでいた。

ベルはそれを見逃すわけがなく、三人にこれがイーブイのスピリッツ

ツダという事を説明する。

「後、あわはきポケモンのシャワーズ、かみなりポケモンのサンダース、

ほのおポケモンのブースターがいるわ」

「つまり、僕達と四対四で戦うって事？」

「そうよ。……ほら！」

ベルがそう言うと、イーブイ、シャワーズ、サンダース、ブースターのスピリッツが、

ヨツシーのボディに入り込んだ。

ヨツシー、いや、イーブイズはむくりと起き上がり、四人に襲い掛かった。

「せいっ！」

「やあっ！」

シャドウは手から混沌の矢を放ってブースターを牽制し、

ベルは怯んだブースターに鎌を振ってダメージを与える。

「ファイアだよ！」

カービイはブースターが吐いた炎を吸い込んでファイアをコピーした。

ブースターとシャワーズは炎に強いため、カービイは体力が低いイーブイを炎の息で攻撃した。

「ブイッ！」

しかし、イーブイは根性を見せてファイアカービイの炎を耐えた。

「うわ、イーブイ、耐えるの?！」

「多分、キーラに操られて強くなってるのよ。」

ただのイーブイやその進化形だと思わないようにしなきゃね。こっちは少数戦力だしね」

「……そうだな」

「油断大敵ですわ」

イーブイ、シャワーズ、サンダース、ブースターのスピリッツは、キーラの支配下にあり、能力が強化されている。

ベルは真剣な表情で鎌を構え直し、シャドウとアイシャも気を引き

締めた。

「どうか、目覚めてください」

アイシヤはイーブイに近づき、包丁を構えてイーブイに突き刺した。

包丁はリーチが短い、アイシヤの技巧により上手くイーブイに命中し、

イーブイは戦闘不能になった。

「やりましたわ。……でも、これで倒したなんて……」

「アイ姉！ 刃物なら、マルつちやリン兄、僕も使ってるから平気だよ！」

イーブイを倒し、喜びながらも包丁でとどめを刺したために暗くなるアイシヤ。

そんな彼女を、カービィは元気良く慰めた。

「ありがとうございますわ、カービィさん……」

「えへへ」

これで残るはシャワーズ、サンダース、ブースターの三匹だけだ。

「ブー、スターー！」

「遅い」

ブースターの体当たりをシャドウはかわし、回し蹴りで反撃し、混沌の力で時間を遅くして連続攻撃をブースターに叩き込んだ。

「サンダーツス！」

「くうっ！」

だが、シャドウがいた場所にサンダースが10万ボルトを落ととしてシャドウに大きなダメージを与えた。

「シャドウさん、治します！」

アイシヤは遠くからシャドウに回復薬を投げ、ダメージを回復する。

「別に、助けられたくは……」

「ダメですわ！ 傷ついては困りますもの。回復役がいなかったらどうしますの!?!」

「やれやれだな」

アイシャは優しい性格だが、お節介な部分があり、また意外に考えを譲らない人物だ。

シャドウは呆れながらも、体術や混沌の力でスピリッツ達を攻撃していった。

「ブイブイー！」

「ヨシ君の顔でブイブイ鳴くなんて、変わってるね」

カービィはイーブイズのスピリッツが入ったヨツシー達を見てその感想を述べる。

「あら、ドドロやフェリシアの時もそうだったわよ？」

「あれは身体と中身が違うだけよ、カービィ」

「へーっ、そうなんだー」

ボデイは別のファイターだが、あくまで中身はそのスピリッツである。

まだ幼いカービィは、それがあまり分からなかったようで、ベルは彼に詳しく説明した。

だが、説明している間にシャワーズ、サンダース、ブースターが四人に襲いかかってきた。

「油断も隙もないんだからー！」

「スキって美味しいの？」

「いや、そういう意味じゃなくて……もう！」

「奴らは正々堂々という言葉を知らないのだろうか。ならば、僕も同じ手を使うだけだ」

「手段を選ばないですよ！」

シャドウは混沌の力でサンダースの背後に回り込み、手刀をサンダースの急所に叩きつけた。

ベルはシャワーズとブースターの攻撃を鎌で往なしつつ、闇魔法で反撃する。

「バーニングー！」

そして、シャドウが体力を減らしたサンダースを、

カービィがバーニングでとどめを刺し、サンダースを撃破した。

「さあ、後はシャワーズとブースターだけよ！」

「うん！　まずは、こうしてっ」と

カービィはファイアの能力を捨て、能力星をブースターにぶつける。

「ベルベル、あの青いのの動きを止めて！」

「分かったわ！　ダークマジック！」

「カオスマジック」

ベルとシャドウがシャワーズの動きを止めた後、

カービィはシャワーズを吸い込んでウォーターをコピーした。

「よおーし！　ウエーブショット！」

カービィはブースターに水の塊を放った。

水属性に弱いブースターは弱い威力の攻撃で大ダメージを受ける。

「この調子でいくよ！　なみのり！」

さらにカービィは波を呼び出してそれに乗り、ブースターに突っ込んで大ダメージを与えた。

「これで終わりだ！　かんけつせん！」

「デイバウアー！」

そして、カービィの水柱がブースター、ベルの鎌がシャワーズにクリーンヒットし、

ブースターとシャワーズも倒れ、戦闘は終わった。

残ったヨツシーのボディは全て霧になって消え、

シャワーズ、サンダース、ブースターの魂はイーブイと一体化して元に戻った。

「はあ……まさか四体も来るなんて……」

「イーブイだけだと思ったのに、進化したのが三匹も来たよ。

ベルベルが言わなかったら、僕達、負けてたよ」

「だって私、死神だもの。あんた達の死の運命をあいづらに押し付けたのよ」

「……」

死神だという事をアピールするベル。

「そういえば、こいつは死神自慢をしたな……とシャドウは思った。「スピリッツ、結構解放したわね」

カービー達が解放したスピリッツは、フェリシア、ティファ、ドドロ、イーブイの四体だ。

こんな状況なので、こちらできちんと管理しなければ、再びスピリッツはキーラに奪われてしまうだろう。

「で、ベルベル、スピリッツをどうやって守るの?」

「こんな事もあるうかと、これを用意したのよ」

そう言っってベルが取り出したのは、モンスターボールにそっくりな箱だった。

「これはスピリッツボールよ。解放した魂を入れておくものよ」

「箱なのにボールって言いますの?」

「ダンボールもボールっていうのと同じよ。さ、みんな出なさいー!」

ベルがそう言うと、フェリシア、ティファ、ドドロ、

イーブイのスピリッツが四人の目の前に現れた。

「呼びましたか、ベルさん?」

「あなたがベルっていうのね」

「……?」

『ブーイ!』

「呼び出してごめんなさいね。実はかくかくしかじかで……」

ベルは、スピリッツ達に今回の事情を説明した。

「そんな! カムイ様はどちらに……ああ……」

『クラウドはどこにいるのかしら?』

『……』

『ブイブイ、ブーイ』

カムイがおらずおろおろするフェリシアと、クラウドに会いたがっているティファ。

ドドロは無口なままで、イーブイは離れたくないよとベルにすり寄る。

「大丈夫よ、守ってあげるから。さ、スピリッツボールに入りなさい」
ベルがスピリッツボールを開けると、四体のスピリッツは光になり、箱の中に吸い込まれた。

その力は、有無を言わさない強力なものであった。

「……凄い力だね、これ……」

「……」

「……さ、さあ、他のスピリッツを探しますわよ!」

「う、うん!」

四人は気を取り直して、次のスピリッツを探しに歩いて行った。群がる雑魚を倒しながらしばらく歩いていくと、白い雲が行く手を塞いでいた。

雲は分厚く、四人の力では通れそうになかった。

「どうするの、これ。みんなを助けられないよ」

「どうするの、と言いましても……わたしは雲を払えませんし……」

「う……ん……」

カービィとアイシャが考え込んでいると、

ベルは鼻のスピリッツがプリンのボディに入り込むのを目撃した。

「あ、待って! スピリッツだわ! こいつを助ければいいかもしれない! 確か、名前は……」

ベルはスピリッツを解析して三人に情報を見せた。

このスピリッツの名前はフーコといい、フータの妹に当たる鼻だ。

「わ……たし……は……フーコです」

「あれ? ボディのプリン、フーコと声似てない? 気のせいかしら

……」

「気のせいだよ」

フーコの声がボディのプリンと似ているため、ベルは首を傾げた。

一方で、シャドウはフーコをじっくりと観察し、戦闘力を計っていた。

「このスピリッツにしては、大して強くはなさそうだな。カービィ、お前一人で十分だ」

「え、僕だけ?」

「こんな奴に無理して皆で戦わなくてもいい、という意味だ」

つまり、歴戦の勇者が、雑魚相手に複数で挑む必要はないのだ。

カービィは少し狼狽えながらも頷いて、フーコのスピリッツに戦いを挑んだ。

「勝ったよ!」

「当然だったな」

結果は、シャドウの言う通り、あっさりとフーゴに勝利した。

この呆気ない終わり方に、ベルとアイシヤは啞然とした。

カービィがフーゴのスピリッツを解放すると、分厚い雲はゆっくりと晴れていった。

「ほら、ね」

「ホントだ! ベルベ……え?!」

カービィがベルに感謝しようとする、彼はとんでもないものを目撃する。

ベル、シャドウ、アイシヤも、カービィと同じ方向を向いた。

四人の目の前にいたのは……台座に縛られた、マリオの姿だった。

「マリオおじちゃん!」

マリオが縛られた台座の下から、次々と灰色のマリオが落ちていく。

「! これは……ボデイ!」

「しつかりして、マリオおじちゃん!」

これが、捕らえたスピリッツを操るために入れる、ボデイのようだ。

カービィはマリオに声をかけるが、マリオは微動だにしない。

「マリオおじちゃん!」

カービィが慌ててマリオを縛っている台座に触れると、

突然、鎖が砕け散り、台座からマリオが落ちてくる。

「よかった、無事だったんだね! さ、僕と……」

「近付くな!」

カービィがマリオに抱きつこうとした瞬間、シャドウがカービィに叫ぶ。

「シヤ、シヤド兄?」

「……」

慌ててカービィがマリオから離れると、マリオの目がゆっくりと開いた。

その目は、血のように赤く染まっていた。

「マリ、おじ、ちゃん……?」

カービイが呆然としてみると、マリオがカービイに襲い掛かった。

「うわああああ!」

カービイは何とか攻撃をかわすが、

いきなりマリオが襲い掛かって来た事にカービイは動揺を隠せなかった。

「どうしたの、マリおじちゃん! 僕だよ、カービイだよ!」

「……」

カービイがマリオに呼びかけるが、彼は反応せずに攻撃を続ける。

ベルは冷静に、カービイにこう言った。

「……カービイ、よく見なさいよ。マリオの目」

「あ、真っ赤になってる!」

「そうよ。今、マリオは、ボディを生み出す道具としてキーラに操られてるのよ」

「そっか……」

ベルが、マリオがキーラに操られている事をカービイに説明すると、

彼はすぐに表情を笑顔に変える。

そして、カービイはマリオにこう叫んだ。

「じゃあ、僕が戦って助けてあげる! 大丈夫! 今も昔も『殴って』助けるんだから!」

「え、殴って、って……」

「要は戦わなきゃいけないってわけ」

満面の笑みを浮かべてそう言ったカービイと、若干引いた様子のアイシャ。

つまり、マリオを倒さなければ彼は正気に戻らない、という事なのだ。

「ま、とりあえず、マリオに勝たなきゃね!」

「あまり、乗り気ではないがな」

ベルは大鎌、シャドウは拳銃を構えて、マリオと戦う態勢を取った。
「じゃあ、いっくよー!」

「目を覚ましてくださいね、マリオさん」
カービィとアイシヤも、二人に続いて戦闘態勢を取った。

5　　く　　マリオを救え!

キーラに操られたマリオとの戦いが始まった。

「叩き切る!」

「……」

ベルは前方を鎌で叩き切ってマリオを攻撃する。

マリオは鎌を受け止めて、キックで反撃する。

「ひゃあ!　何すんのよ」

「マリオさん、どうしましたの!?　しつかりなさいませ!」

アイシャがマリオに皿を投げるが、マリオはそれを緊急回避し、

アイシャの背後に回り込んで投げ飛ばした。

「きゃあ!」

勢いよく投げられたアイシャは転倒してしまう。

手加減も何もない、本気の威力であり、アイシャの事など全く見えていなかった。

「操られてるから何も手加減してないみたいね」

「マリおじちゃん、正気に戻って!」

「倒してでもお前を連れ戻す!」

カービィは勢いよくマリオを蹴って吹っ飛ばした。

シャドウは吹っ飛んだマリオに向かってホーミングアタックを繰り出す。

「……」

マリオはアイシャを思いつきりファイア掌底で攻撃し、アイシャを吹っ飛ばす。

アイシャは転倒し、動けなくなった。

「マリオさん……わたし達の声、聞こえないのですか?」

「キーラあいつが操ってるんだもの、あんたの声が聞こえるわけないでしょ?」

「だから今、こうして戦っているのよ」

「それもそうでしたわね……」

「アップリーパー!　ハーベスター!　カタストロフィ!　メテオブ

レイカー！」

ベルは祈りを込めた鎌を振り上げてマリオを空中に浮かせ、飛び上がって鎌を連続で回して攻撃した。

コンボのフィニッシュで鎌を下に振り、マリオを地面に叩きつけた。

「そこだ！」

シャドウは身動きが取れないマリオに狙いを定め、銃を撃ってダメージを与える。

「……」

「くっ！」

マリオは隙を突かれたため、反撃でシャドウにファイアボールを放った。

ファイアボールはシャドウの目の前で爆発し、彼を吹き飛ばすが、すぐにワープで復帰する。

「マリおじちゃん、待ってて！ バーニング！」

「……」

カービイの炎を纏った体当たりを緊急回避でかわすマリオ。

「おっと！」

しかし、かわした先にはベルが待ち構えていて、彼女の鎌がマリオを一閃した。

だがマリオも意地を見せてベルを勢いよく投げ飛ばした。

「ひく。あなた本気なのね」

「だがこの攻撃は避けられまい。カオススパア！」

シャドウは混沌の力を使ってたくさんの矢を放ち、マリオを串刺しにする。

その隙にカービイがマリオに突っ込んでパンチとキックの乱舞で攻撃する。

「お願いです！ 元に戻ってください、マリオさん！ キーラなんかに負けないでください！」

アイシャは、キーラに操られているマリオに必死で呼びかけた。

戦わなければならないとは分かっているにしても、心の中では戦いたくな

いという気持ちが強く、

呼びかけてマリオの心を取り戻そうとした。

だが、いくらアイシャが呼びかけても、マリオが戦いの手を止める気配はなく、

彼はアイシャにファイアボールを放った。

「マリオ、さん……」

「……」

アイシャは目にうつすら涙を浮かべる。

マリオはスマッシュブラザーズのリーダー格で、

どんな時でも仲間と戦い、困難を乗り越えてきた。

しかし、キーラに操られているとはいえ、仲間を攻撃しているという事実を、

アイシャは認めたくなかった。

戦って元に戻したい、でもできるなら戦わずに元に戻したい。

アイシャはその板挟みになっていた。

「……確かに、マリオは彼女が^{キーラ}支配しているわ。

でも、カービィは戦う前に言ってたわよね？ 『殴って』元に戻すって」

「殴って……？」

「そうよ。殴って元に戻せるのはカービィだけ。私達はそれに、参加しているに過ぎない」

「だから、お前が気に病む必要はないという事だ。カオススパーク！」

「デイバウアー！」

「えーいっ！」

シャドウは指を鳴らし、マリオを時空の歪みに飲み込んだ。

その後、ベルがマリオを鎌で斬りつけ、カービィがマリオをキックした。

「そうでしたのね。ありがとうございますわ、カービィさん、シャドウさん、ベルさん。

わたしだけが背負う必要はありませんのね。

では、わたしは皆さんをサポートいたします！ マリオさん、あな

たを必ず取り戻しますわ！」

アイシャは、三人のおかげで肩の荷が下りた。

そして彼女は、傷ついたカービィ達を葉や紅茶で回復しつつ、皆を応援して士気を高めた。

「……」

マリオはファイア掌底をカービィにぶちかます。

しかし、カービィは余裕で攻撃をかわし、ホバリングしてストーンでマリオを攻撃する。

そして、元に戻すためにカービィはハンマーを構え、力を溜める。

「元に戻って！ 鬼殺し……火炎ハンマー……」

カービィの、炎を纏ったハンマーが、マリオの腹部にクリーンヒットした。

そして、マリオは吹き飛ばされ、しばらくの間地面を滑っていたが、1分後に動きが止まった。

「マリオおじちゃん、マリオおじちゃん！」

カービィは、倒れているマリオを必死で揺すった。

「僕の声が聞こえるか？」

「しっかりとしないよ、マリオ」

「起きてください、マリオさん……」

シャドウ、ベル、アイシャも、倒れたマリオに声をかけていく。

「……………」

しばらくすると意識を取り戻したのか、マリオはゆっくりと起き上がった。

彼の眼は、いつも通り、青色だった。

「マリオおじちゃん！ 元に戻ったんだね！ やっぱり殴ってよかった~~~~！」

正気に戻ったマリオに飛びかかるカービィ。

何気に、言った言葉が酷かったのだが。

「本当によかったわね、元に戻って。やっぱり、カービィの言った事は正しかったわ」

カービーが殴ったおかげで、マリオを正気に戻す事に成功した。仲間を取り戻したベルは、ニツコリと笑う。

しばらくして、シャドウはマリオに話しかける。

「ああ、それと……どうしてお前は、いきなり僕に襲い掛かったんだ」「シャドウさん、病み上がりですからそうするのはよくないですわ」「アイシャがシャドウの行動を注意するが、マリオは「いいんだ」と首を横に振る。

そして、マリオは四人に事情を話した。

「あの光がぶつかって、俺は死にそうになった。

争いの世界なのに死ぬっておかしいよな。でも、確かにそんな感覚だった。

気が付くと、俺は真つ白い光の中にいた。光の中には誰もいなかった。

俺以外には誰もいないはずだった。でも、光の中で、女の声が聞こえてきた。

『我が名は光の化身キーラ。我が軍に入れ』と。俺は必死で抵抗したが、何もできなくて……」

「大体、事情は分かったわ」

マリオから事情を聞いたベルは、頷いた後、鎌を持ち上げる。

「要は、あんたを含めたファイターは、みんなキーラに捕まって利用されたんでしょ?」

「多分な」

「私と一緒に、みんなを助けましょう! 操られたのがあんたには屈辱でしょ?」

「……そうだな。俺を利用したキーラが許せないぜ……!」

マリオはぎゅっと握り拳を作る。

自分を光に閉じ込め、ボディを作る母体として利用したキーラを許さない、

という気持ちだが、マリオの中に生まれたのだ。

「スマブラメンバーが一人、わたし達の下に戻りましたね。

この調子で、皆さんをキーラさんの手から解放しましょう!」

「「おーーーーっ!!」」

「……」

こうして、カービィ、シャドウ、ベル、アイシャの四人は、
ミスタービデオゲーム、マリオを解放する事に成功した。

まだキーラに捕まっている人達が多いが、一人解放できただけでも、
よしとしよう。

6 〽 囚われし三人の戦士

カービー達はキーラに操られたマリオを助ける事に成功した。

「よし、これでまずはスマブラメンバーを一人助けたわね」

スマブラメンバーのリーダー的存在であるマリオを助けたため、四人の士気は上がった。

まずは、彼がいなければ、スマブラは始まらないと言えるからだ。

「マリオさん、あの、わたし、あなたを元気にするためにマカロンを作ってきましたわ」

「お、美味そうだな」

アイシャは、マリオにマカロンを渡した。

初めて見るお菓子の興味を持ったマリオは、マカロンを口に入れた。

すると、マリオが微妙な表情になった。

「ぐ……なんだ、この、味は……」

「あ、あの、嫌いでしたか？」

「なんとというか……なんとも言えない味だ」

「え？」

どうやら、アイシャが作ったマカロンは、マリオには不評だったようだ。

改めてアイシャがマカロンを食べてみると、アイシャもなんとも言えない表情になった。

「お前、ちゃんと味見はしたか？」

「しましたけど……何故かこういう味になっちゃうんです。申し訳ありません」

アイシャは、微妙なお菓子を作った事を謝った。

彼女が作る紅茶は美味しいのだが、お菓子を作ると微妙な味になってしまうのだ。

この癖はアイシャも理解しているが、それでも直そうに直せなかった。

「まあ、そんな事は構わないわ。次の仲間を助けに行きましょう」

「そうだな」

気を取り直して、五人は次の仲間を助けるために目的地を目指して進んだ。

「それで、次の仲間はどこに捕まっているんだ？」

「うーん……ちよつと待って」

ベルは額に人差し指と中指を当てて、仲間の「魂」を感知した。

カービィはそれをわくわくしながら見守っていた。

シャドウは訝しい表情になるが、アイシャは大丈夫だという様子で見守った。

「……いたわ」

しばらくすると、ベルは三択地点の方をじっと見つめた。

「どうやら、そこに仲間の魂がいるようだ。」

「光に縛られし三つの魂が、そこにある」

「それって、どういう事？」

「キーラに捕まった奴が三人いるという意味よ。」

「……早く、彼女の支配を解きましよう」

「うん！」

ファイター達はキーラに捕まり、母体を生み出す道具となっている。

このままでは、ファイター達の命が危ない。

ベルは、真剣な表情で鎌を握り締めた。

カービィ、シャドウ、アイシャ、マリオも、彼女に続いて仲間を助ける体勢を取った。

「ああ、もう、邪魔だよ邪魔！」

「キーラめ……僕の邪魔をするつもりか！」

「こんな弱い奴までもスピリッツにして操るなんて、どうかしてるぜ」

「この世界の安定のためにも、助けなくちゃね」

「マスターハンド様、待っててくださいね。わたしが必ず助けますから」

五人は、襲ってくる野良スピリッツを撃破しつつ、

三人が捕まっている三択地点に行こうとした。

しかしそこに、五本の足が生えた、土偶のような生物(?)が立っていた。

キーラに操られたスピリッツだと見抜いたベルは、そのスピリッツを解析した。

「これはハイラル世界にいるガーディアンよ。ガノンを倒すつもりが逆に利用されるなんてね。」

「いい？ みんな、解放するわよ！」

「うん！」

ベルの号令で、五人はガーディアンのスピリッツを解放する戦闘体勢に入った。

「……」

「スライサー！」

「ミドルキック！」

シャドウがカオススピアを溜めている間に、ベルとマリオがガーディアンを攻撃していく。

二人が足止めしている間に、カオススピアは溜め終わったようで、シャドウは混沌の矢を連続で放った。

「ぐああー！」

ガーディアンはマリオに狙いを定めて単眼からレーザーを放って攻撃する。

威力はかなり高く、マリオは吹っ飛ばされる。

「あーん、当たらないよー！」

「当たらないから、こうするまでよ！ ダークマジック！」

ベルはガーディアンがいる場所に魔法陣を設置し、闇の棘でガーディアンの動きを止めようとした。

ガーディアンは魔法陣をかわそうとするが、

カービィの援護があつてギリギリで踏み、ガーディアンの動きが止まった。

「そらよ！ ファイア掌底！」

「メイドビンタ！」

マリオとアイシャはその隙に掌底とビンタでガーディアンに連続

でダメージを与える。

シャドウは後方から拳銃を連射してガーディアンを削った。

「おのれ……！」

「きやああっ！」

ガーディアンはレーザーでシャドウとアイシャに反撃し、大ダメージを与えた。

「うっ、なんて威力ですの。とりあえず、回復いたしますわ」

アイシャは紅茶を周囲に振り撒き、マリオ、シャドウ、自分の蓄積ダメージを回復する。

「ありがとよ」

「回復量は落ちますけどね」

この争いの世界では、回復系の特技は回復量が少なくなる。

それは、そのままの回復力だと戦いが長引くためだからだ。

そんな事を両手袋は許さないと、このような理《ことわり》にしたのだろう。

「それでも助かったぜ。ファイア掌底！」

マリオは炎を纏った掌底をガーディアンにぶちかます。

ガーディアンはレーザーをアイシャに放ったが、

マリオが前に立ち、スーパーマントで跳ね返し、大ダメージを与えた。

「これでとどめよ！ デイバウアー!!」

そして、ベルが大鎌を一閃すると、ガーディアンスピリッツは解放され、

スピリッツボールの中に入った。

「はあ、一時はどうなる事かと思ったよ。でも、ベルベルがいれば安心だね！」

「どんなもんだい！」

そして、ガーディアンを倒した五人は、仲間が捕まっている三択地点に辿り着いた。

そこにいたのは、台座に縛られたマルス、シーク、そしてりょうの姿だった。

「マルっち！ シー君！」

「りょうさんも……犠牲になっておりますのね」

「まだ死んでないぞ」

痛々しい姿に、カービィとアイシャが悲しみ、シャドウが突っ込みを入れる。

「皆！ 元に戻れ！」

マリオがマルス、シーク、りょうが捕まっている台座に触れると、鎖が碎け散って三人がゆっくりと降りる。

三人の目は、以前に操られたマリオのように、真っ赤に染まっていた。

「待ってて……君達は必ず、僕が助けるから！」

「利用されるのは屈辱だと知ったからな」

「さくて、バツサリいくか！ なんてね」

カービィ、シャドウ、ベルと彼らの仲間は三人を助けるべく、戦闘態勢を取った。

「カオスマジック！」

シャドウは指を鳴らしてりょうを混沌の渦に巻き込んでダメージを与える。

「カタストロファイ！」

「……」

「速っ!？」

「僕ほどではないがな」

ベルの鎌攻撃をかわすシーク。

だが、そこにマリオがいたのには気付かず、マリオはファイア掌底でシークを攻撃した。

「……」

「うわあー！」

マルスはファルシオンでカービィに斬りかかる。

その刀身は、キーラの呪縛の影響で神々しくも禍々しく染まっていた。

「……」

「ぐあああああー！」

シークは回し蹴りと飛び蹴りを連続で放つ双蛇でマリオに大ダメージを与えた。

以前のマリオ同様、全く手加減をしていなかった。

「ナイトメア！」

ベルはシークに大鎌を投げつけ、戻った勢いでりようも斬りつける。

「元に戻れ！ ファイアボール！」

そして、マリオのファイアボールがりように命中すると、りようは倒れた。

「よし、まずは一人だ！」

「……」

「おっと！」

りようが倒されたため、マルスは敵討ちのように斬りかかるが、マリオは攻撃をかわす。

「いくぞー！ そこだ！」

シャドウは拳銃と体術で舞うようにシークを攻撃する。

シークは仕込針をカービィに投げつけるが、カービィは全て吸い込んで飲み込み、

ニンジャをコピーした。

「いづなおとしー！」

カービィはマルスに突っ込んでいき、彼を掴むと高く飛び上がって地面に叩きつける。

シークはアイシャに仕込針を投げるが、

アイシャは皿やコップをでたらめに投げて攻撃を全て打ち消した。

「怖いですが……でも、負けませんわー！」

「ああ……これで終わりだ。スピッキック！」

シャドウは回し蹴りを繰り返してシークを撃破すると、

続けてマルスにスピンドッシュで体当たりした。

「いあいぬぎー！」

カービィはダッシュしながら素早く駆け抜けて刀でマルスを斬り

つける。

マルスはファルシオンを振りかざして反撃し、カービイは刀でそれを受け止め、

鏝迫り合いになる。

「はあああああああ！」

「……」

互いに武器で押し合うニンジャカービイとマルス。

一方は普通の武器、もう一方は伝説の武器。

だが、気迫はどちらも負けていなかった。

「マルっち！ キーラなんかにも負けちゃダメだ！ もちろん、僕だつて負けない！」

だから……元……戻れええええええええええ!!」

「……!!」

最後に勝利したのは、カービイの方だった。

カービイはマルスのファルシオンを弾くと、そのままマルスに突っ込んでいき、

彼を刀で突き刺すのであった。

7　　おてんば娘は憎めない

「う……………」

「……………」

「……………」

カービィ達に敗れたマルス、シーク、りょうは、しばらくの間気絶していた。

キーラに操られ、全力を出していたので、身体にかかった負担が大きかったのだろう。

「起きてよ、マルっち、シー君、りょう君」

カービィは、倒れているマルス、シーク、りょうをつんつんとついていた。

それでも、三人は起きる事はなかった。

「…………自然に起きるのを待つしかないようね」

「ああ……………」

数分後、マルス、シーク、りょうは、ゆっくりと起き上がった。

「…………あれ？　ここは一体どこなんだい？」

「う〜ん……………」

「頭がくらくら〜」

「あ、やっと起きたんだね。おはよー！」

カービィは三人に駆け寄り、彼らの顔を覗き込む。

三人はまだ意識が朦朧としており、カービィの顔がはつきり見えていなかった。

「あれ、おは、よ……………ここ、は？」

「みんなしつかりしてよく。ここは三択地点だよ」

「さん……………たく……………？　う……………」

「みんな、これを飲んでください」

三人は再び意識を手放そうとするが、アイシヤが三人に紅茶を飲ませ、

しばらくすると意識を完全に取り戻した。

「あ、カービィ？」

「よかった。マルっち、シー君、りよう君が元に戻って！」

マルス、シーク、りようが正気に戻った事で喜び、飛びつくカービィ。

「カ、カービィ……」

「あつははは……君って本当に仲間思いだね」

「……」

「よかったね」

いきなり飛びついてきたのだが、りようは、満更でもない様子だ。

シークはそれをクールに受け流し、マルスは微笑みながら二人を見守った。

「それでみんなも、マリオと同じように捕まってたの？」

「マリオと同じ？ あ、思い出したよ。ビームが当たった時、僕は光の中に閉じ込められて……」

マルスは、囚われる前の事情をベル達に話した。

やはり、マリオと同じく、三人はあのビームが当たってキーラに捕まり、

彼女に操られてしまったようだ。

「仲間が一気に三人も増えたし、少し休んだら、魂を解放しに行きましよう」

「うん」

八人になったスマブラメンバーは、キーラに囚われたスピリッツを解放するため、

東に向かって走っていった。

途中でキーラに操られた野良スピリッツを倒しつつ進んでいくと、茶髪の少女が、40体の小型ロボットを従えるようにして立っていた。

「ベル、スピリッツだ」

「いつもの解析タイム、いっきまーす」

ベルがスピリッツを解析すると、彼女の頭の中にそのスピリッツの情報が入った。

「彼女の名前はトロン・ボーン。」

この世界とは異なる世界……ええと、ロックマン世界のスピリッツみたい。

空賊ボーン一家の長女で、この小型ロボット『コブン』とか、そこにある戦車『グスタフ』とかを作った天才メカニックよ」

「また異世界のスピリッツですのね」

このスピリッツ、トロン・ボーンは、ロックマン世界のうちの1つから来たスピリッツらしい。

ティファに続き、また異世界からのスピリッツが来たと、アイシャは少しだけ喜んだ。

「あ、トロンさまー、そこにいるひとが、なにかはこをもってますよー」
「え？ あ、ホントだわ！ その箱、もしかしてお宝が入ってるの？」

コブンの言葉で何かに気付いたトロンは、ベルが持っている箱を指差してそう言った。

ベルはもちろん、首を横に振った。

「この箱は、あんた達が探してる宝箱なんかじゃないわよ」

「なーんだ。でもね、このトロン様はそれだけじゃあ諦めないわよ。

私が勝ったらそれ、いただくからね！ さあいくわよ、あんた達！」

「はーい!!」

トロンはグスタフに乗って戦闘を開始した。

コブンも、トロンに合わせて戦闘態勢を取った。

「うーん、やっぱり戦うしかないんだね」

「手加減はしない、いくぞ」

「んじや、スピリッツボールを取られないためにもさくつといきますか！」

「……なんか、こういう人、苦手ですわ……」

「あまり傷つけたくはないけど、キーラに操られている以上、無理みただいね」

「とりあえず、やろうかな」

カービィ、シャドウ、ベル、アイシャ、マルス、りょうは、

トロン・ボーン&コブンとの戦闘に入った。

「はああっ！」

「うわぁー」

シャドウはコブンに高速で体当たりを繰り返す。

「えいっ！」

「そんな攻撃、当たらないわよー！」

トロンはカービイのハンマー攻撃をグスタフを上手く操ってかわした。

「えいー！」

りょうはパチンコでよく狙ってコブンを攻撃した。

「まとめていくよ、せいっ！」

「まとまっちゃダメ！ バラバラに避けるのよ！」

「はーいー！」

マルスはファルシオンを振り、まとめてコブンにダメージを与えようとする。

しかし、コブンはトロンの指示で分散し、

結果的にマルスはバラバラに攻撃したためコブン側に大した被害にはならなかった。

「今度はこつちからいくわよー！」

「きやあぁー！」

トロンはグスタフに乗って体当たりし、ベルを掴んで投げ飛ばす。

「このおっ！」

「離れてー！」

ベルはコブンに大きく鎌を振り回すが、トロンの的確な指示でコブンには当たらなかった。

しかし、コブンの次の攻撃を、ベルは鎌で防いだ。

「えいー！ えいー！ えいー！」

「うわっ！」

アイシヤはトロンの皿を投げまくり、トロンのダメージを与える。ダメージは微々たるものだったが、

たくさんの皿が飛んできたため精神的なダメージは与えられたようだ。

「そこだー！」

「「うわー」」

シャドウは目にも留まらぬスピードでコブンに銃を撃った。

コブンは避けられずにダメージを食らい続ける。

「何やってんのよ、あんた達！ ちゃんと前見て戦いなさい！」

「「はーい、トロンさまー」」

トロンはコブンを叱咤激励し、士気を高める。

先程まで苦しんでいたのとは一変、すぐにコブン達は笑顔になった。

「トロちゃん、そのロボット、食べられるの？」

「何よ、トロちゃんって。私はトロン・ボーン。」

これは私が作った40人のコブン。コブンは食事はするけど食べられないわよ」

カービィに「トロちゃん」と呼ばれたトロンがジト目になる。

「とつ、とにかく！ この勝負、私が貰うからね！ あんた達、負けるんじゃないわよ！」

「「はーいー」」

コブンはトロンのためにシャドウに突っ込んだ。

シャドウはそれをワープしてかわし、至近距離から銃を撃って攻撃した。

「うわあー、トロンさまー」

「いたいですー」

「何やってんのよ！ しゃきつとしなさい！」

コブンがダメージを食らうたびに、トロンが叱咤激励して士気を高める。

だが、コブンの体力は確実に減ってきていた。

「これでおーわり！ デイバウアー！」

「「うわー!!」」

そして、ベルが大鎌をコブンに振り下ろすと、コブン達は戦闘不能になった。

「も、もうしわけありません、トロンさま……」

「もう！ 私がやるわ！」

コブンが撤退したため、今度は代わりにトロンがグスタフを駆る。トロンはベルをグスタフで掴み、思いつきり投げ飛ばす。

ベルは転倒から復帰した後、鎌を振りかざしてトロンとグスタフを斬りつける。

(憎めない悪役って、どこにでもいるのかしらね)

「そーれっ!」

ベルはそう思いながら、鎌で連続斬りを放つ。

りようはトロンに突っ込んだ後、オノを振るって攻撃した。

威力の高い連続攻撃を食らったため、トロンの体力とグスタフの耐久力が僅かになった。

「これで終わりだよ! スマッシュキック!!」

「きゃあああああ!!」

そして、カービイのスマッシュキックが炸裂し、グスタフが壊れ、トロンも戦闘不能になった。

「お、覚えてなさ……」

「逃がさないわよ」

トロンとコブンが撤退しようとした時、ベルはスピリッツボールを1人と40人に向けた。

すると、1人と40人のスピリッツが、スピリッツボールの中に吸い込まれた。

「これにて解放完了っつと」

「箱に閉じ込めたのに解放なんて皮肉ですわ」

アイシヤがベルに突っ込みを入れた後、

ベルはスピリッツボールの中にあるトロンのスピリッツを見つめる。

『うう。このトロン様をこんな狭いところに閉じ込めるなんて』

「ごめんなさいね、キーラに利用されるかもしれないからこの中に入ってる」

トロンはスピリッツボールの中にいるのが気に食わないようだ。

『でもトロンさま、ここですぎのさくせんをかんがえるのもいいんじゃないですか?』

「ここにはじやまするひとはいないですし」

『言われてみれば、それもそうね。よし、じゃあ作戦タイム……の前に、昼食タイムよ。』

今日の昼食はオムライスよ！』

『『わーい！』』

「みんな、楽しそうね」

その様子を、ベルは微笑ましく見守っていたとか。

8 　　レース場には戦士がいっぱい

トロン・ボーンのスピリッツを解放した一行は、

次のスピリッツを探して、レース場に向かおうとしていた。

「なんでレース場なの？」

「死神の勘が騒いでいるのよ。キーラに捕まったファイターの魂がいるって」

ベルによれば、レース場にはファイターが捕まっているらしい。

一人でも多くのファイターを助けるのが当分の目的であるため、

マリオ達は迷わず彼女についていった。

「慎重に行かなければな」

レース場に行くための場所は、岩がたくさんあり、道を外すと落ちそうだった。

シャドウの言う通り、一行は足を踏み外さないように、慎重に歩いていった。

「待っててね、僕達が助けるから」

「まったく、何故僕がお前達と共に行動しなきゃいけないんだ」

「お前だけじゃこの危機は乗り越えられないぞ」

「やめてよ、二人とも〜！」

シャドウは単独行動をしたくて愚痴を吐くが、マリオはそれを注意する。

チームワークに不安が残るこのパーティーを、カービイは何とかまとめたいと思っていた。

こうして岩の足場を降りてレース場に入ろうとすると、

ブキを持った蛸が擬人化したような女性のスピリッツがいた。

「あ、これはタコゾネスね。マールと同じ世界にいる『オクタリアン』という種族の突撃兵よ」

「タコゾネスって強いなの？」

「そこそこね。四体いるけど私達はたくさんいるし、ほぼ互角になるんじゃない？」

相手は遠距離攻撃をしてくるわ、こっちも遠距離攻撃が得意なシャ

ドウを入れましょ」

「ああ」

シヤドウは、拳銃を取り出してそれをタコゾネスに向ける。銃撃戦なら負けない、といった表情をしていた。

「残りの五人はカービィ、私、アイシャ、マリオ、シークでいこうかしら」

「賛成、僕は飛び道具を持っていないからね」

「僕のパチンコも威力は期待できないし」

マルスとりようが下がった後、カービィ達はタコゾネスに戦いを挑んだ。

「はい、終わり」

タコゾネスとの戦いに勝利し、ベルは彼女のスピリッツをスピリッツボールの中に収納した。

こうして、八人はレース場に入る事ができた。

東に進んでいくと、黒髪を二つに結った、目つきが悪い女性のスピリッツがいた。

「ああ？　なんだオマエらは」

「この人はハン・ジユリ。リュウと同じ世界にいるテコンドー使いの女性よ」

「オマエら、存在自体がうぜえんだよ。失せろ」

どうやら、このハン・ジユリという女性は、

トロン・ボーン同様に異世界のスピリッツのようだ。

ベルがスピリッツの簡単な説明をした後、

ジユリはその容姿に違和ない強烈な言葉をベル達に言った。

アイシャは震えて縮こまり、ベルの後ろに隠れた。

「怖いですわ。わたし、戦いたくありません」

「ああ、そのツラ、いいねえ。もつとあたしに見せてくれよ」

このジユリという女性は、アイシャにとっては天敵だった。

彼女を守るため、ベルは大鎌を持って前に立つ。

「……あんまり、怖がらせちゃよくないわよ？　アイシャ、下がってて。」

あんたの相手は、私だからね」

「はい！」

「オマエの全てを、食ってやるよ！」

ベルは、大鎌を構えてジュリに戦いを挑んだ。

ジュリも、構えを取って彼女と勝負をした。

「私は死神だもの、あんたに負けるわけないでしょ」

結果は、ベルの勝利で終わった。

ベルは、ジュリのスピリッツをスピリッツボールの中にしまった。

(レース場に捕まつてるファイターといえば、うくん……)

マリオは、レース場でキーラに捕らえられたファイターが誰なのかを予想していた。

レーサーのファイターといえば「彼」しかいないのだが、

それ以外のファイターもいそうだと考えていた。

マリオが考え事をしている最中に、一行は乗り物がある場所に辿り着いた。

「これは……ワイルドグース？」

「ワイルドグース？」

「F—Z E R Oマシンよ。これを運転できるスピリッツは、うーん……この場にはいないわね」

ワイルドグースを運転できればサーキットを進めそうだが、

今はそれが可能なスピリッツはいない。

一行は仕方なく、レース場を後にして、

ワイルドグースを運転できるスピリッツがいる場所に向かった。

「確か、こつちだったはずよ」

ベルの案内でカービィ達が北に行くと、双子のドガースのスピリッツがいた。

「これはドガースの進化形、マタドガスね。又ドガスであって、マ『ダ』ドガスじゃないわよ」

「うん」

「後、浮遊しているから地上攻撃は効かないわよ」

マタドガスは、どくタイプだが特性は「ふゆう」なので、地上の攻

撃は効かない。

特性を無視する特性がなければ、弱点はエスパークタイプのみなのだ。

「……ボデイがあいつなのが、気に食わないけど」

そう言つて、ベルは大鎌を構え、マタドガスのスピリッツに戦いを挑んだ。

「マタドガスのスピリッツ、解放！」

「お〜！」

ベルはマタドガスのスピリッツをスピリッツボールの中に入れる。

カービィは、ぱちぱちと拍手する。

「私は死神だし、ね？」

で、多分、この先にワイルドグースを運転できるスピリッツがあると思うわ。行きましょ」

「ああ」

八人が先に進もうとした瞬間、遠くにある何かが光り、地響きが起こった。

「きゃ！ なんですよ!! あわわわわ……」

アイシヤが驚き、慌てふためくと、

横にある橋の中央に巨大な結界が現れ、道を塞いでしまった。

「あらまあ、結界が出ちゃったわね」

ベルが橋に近付いてその結界に触れると、バチッ！ という音と共にベルが手を離した。

「つつ〜」

「大丈夫、ベルベル!？」

「平気よ、これくらい。まったく、キーラってば、油断も隙もないんだから」

キーラから妨害を受け、腹を立てるベル。

「ベルベル、どうして鎌を使わなかったの?」

「あー！」

カービィの疑問で気が付いたベルは、鎌を取り出して結界に振るつた。

しかし、鎌は結界に弾かれ、傷一つつける事ができなかった。

「駄目みたいね……」

「とりあえず、ワイルドグースを運転できるスピリッツを探すために北に行くぞ」

「ええ」

鎌で結界を壊せないと分かったベルは、その橋を後にして北に向かうのであった。

「いたわ！ ワイルドグースを運転できそうなスピリッツが！」

「待って、ベル！」

ベルがスピリッツを解放するために大鎌を構えようとすると、りょうが何かを発見して彼女を止める。

「え？ 何なのよ」

「誰かが……捕まっている！」

「え……あ、ホントだわ！」

台座には、はどうポケモン・ルカリオが光の鎖で縛られていた。その下からは、次々とルカリオのボディが生成されている。

つまり、ルカリオを解放できれば、今後、彼のボディが使われる事はなく、

また戦力も増えて一石二鳥なのだ。

「そこか」

シャドウが台座に触れると、鎖が砕け散り、そこからルカリオが下りてきた。

同時に、マリオ、カービィ、シーク、マルス、りょう、シャドウ、ベル、

アイシャは不意打ちを受けないように戦闘態勢を取った。

「……マイル」

ルカリオの周囲には、異星人のスピリッツ、埴輪のスピリッツ、司祭のスピリッツが浮いていた。

彼らもまた、キーラに操られた被害者なのだろう。

「……いくぞ」

「うん」

「ええ」

シヤドウ、ベル、マルスがそれぞれ武器を構え、戦闘態勢を取る。

一触即発の状態で、皆、緊張していた――

――ぐきゆるるる……

「あ、僕、お腹空いたからパス……」

その緊張を、一人の腹の虫がほぐした。

9 く どうポケモン・ルカリオ

キーラに操られたルカリオと、スピリッツとの戦いが始まった。
「わっ！」

ハニワくんがマルスに体当たりしてきた。

マルスはシールドで攻撃を防ぐ。

「……」

ルカリオは無言でシークに蹴りかかってくるが、シークは上手く攻撃をかわす。

「そおーれー！」

ベルは鎌を振り、衝撃波を飛ばしてルカリオを攻撃する。

マリオはハニワくんを掴んで投げ飛ばし、その隙にベルがハニワくんのスピリッツを捕まえた。

「捕まえたー！」

「よしー！」

「そこだ」

シャドウは狙いを定め、ルカリオに銃を撃つ。

しかし、ルカリオはシャドウの攻撃を紙一重でかわした。

「何、僕の攻撃が外れた？」

「やめてくれ……マルス様を攻撃したくない……」

マリクのスピリッツがマルスを攻撃しようとする。

だが、マリクの意志が強かったのか、マルスに攻撃が届く事はなかった。

「マリク、君は必ず僕達が助けるよ。だから、もう少しだけ待っててね」

「ありがとうございます、マルス様」

マリクはあくまで操られているだけだ。

マルスは、なるべく彼を傷つけないように解放しようとして行動した。

「ルカリオさん、目を覚ましてくださいませー！」

「グ……！」

アイシャはルカリオをビンタして彼を正気に戻そうとする。

大した効果はなかったが、一瞬だけルカリオは動揺した。

「効いてますわ。どんどん攻めましょう」

「うん。それ！」

マルスはピコを真つ直ぐファルシオンで突く。

「はっけい」

「きゃあ！」

ルカリオは両手に波導を纏い、両手を突き出してベルを打ち据える。

「あなたの魂は、私が解放するわ！」

ベルは渾身の力を込めて鎌を振り下ろし、ピコのスピリッツにダメージを与えた。

「おりゃー！」

「はっ！」

「う……」

マリオのファイアボールと、アイシャのフェイントをかわすマリク。

キーラの力なのか、司祭でありながら身体能力も高くなっていた。

「マルス様……うわああああ！」

「……マリク……」

マリクはキーラの呪縛に抗っているようだが、それでも彼の意志よりキーラの呪縛の方が強く、

意識はあるが身体が勝手に動くような感覚だった。

マルスはファルシオンを握る手を強め、

ベルも早く彼を苦しみから解き放ちたいという表情になった。

「悪いのは全部キーラだ、こいつらに罪はねえ！」

「うん、分かったよ！みんな、助けてあげるからね！」

罪を憎んで人を憎まず、マリオとカービィは気合を入れ直すのだった。

「はあっ！」

ピコの攻撃を受けた後、反撃するシャドウ。

ルカリオはマリオの投げを緊急回避でかわし、シークに素早く近づ

いて掌底を繰り出す。

「うああ！」

「やめろ！」

マルスはシークを攻撃したルカリオを斬りつける。

「お願いです！」

「目を覚ましてくれ」

シークは音を立てずにマリクに近付き、手刀で彼を攻撃する。

アイシヤもシークに続いてマリクをビンタした。

「ダウンリーパー！」

「ぐああああああ！」

そして、ベルが勢いよく鎌を振り下ろすと、ルカリオは断末魔と共にダウンした。

「やった！ ルカリオを倒したわ！」

ルカリオの解放に成功し、残っているのはマリクとピコのスピリッツだけとなった。

彼らはベルを狙って攻撃を仕掛ける。

しかし、ベルは上手く攻撃をかわし、マリクとピコを同時に鎌で斬りつけた。

「私は、伊達に死神をやってないわよ！ あんたの魂、必ず解放するんだから！」

「せええいやああああああ!!」

「ぐわああああ！」

「エリス様……どうかぐ無事で……」

そして、ベルが渾身の力を込めて大鎌を振り下ろすと、マリクとピコのスピリッツは真つ二つになった。

「ベル、捕獲しろ！」

「オーケー！」

シャドウの合図でベルがスピリッツボールを開けると、

二人のスピリッツはその中に吸い込まれていった。

六人は、操られたルカリオとスピリッツとの戦いに勝利したのだ。

「ルカリオか……無事だったか？」

「……私は一体何をしていたのだ……」

ダウンから復帰したルカリオが、シャドウに声をかけられてゆつくりと起きる。

やはり、彼もキーラに操られていた時の記憶はなかったようだ。

「おい、大丈夫か、ルカリオ」

「目が覚めた〜ルカルカ？」

スマブラ四天王の二人、マリオとカービィがルカリオに近寄る。

ルカリオは「ああ」と言っただけの後、お互いに知っている話を話し合った。

「ふむ、なるほど。そなた達は散った者達を探しているのか」

「俺達以外、みんな身体を失っているしな……」

身体を失ったスピリッツは、ボディがなければ触れる事すらできない。

また、このまま放っておくと完全に消えてしまう。

なので、なるべく早く、スピリッツを解放し、保護しておきたいとベルは考えた。

「でも、ルカリオは波導を感じ取れるよね？」

ルカリオは波導を感じ、敵や味方の区別をする事ができる。

具体的には、青い波導が味方、赤い波導が敵といった具合だ。

魂を持つ者の波導も感じ取れるのか、りようはルカリオにそう問う。

「可能だが……精度は弱まっているぞ」

「それでもいいよ。仲間を探せるなら」

「……分かった」

ルカリオは目を閉じて集中し、仲間の波導を感じ取ろうとしていた。

しばらくすると、ルカリオの目が青く光った。

「見つかったの？」

「レース場に紫の波導が見える」

「紫？」

赤と青が混ざった色、紫。

それが何を意味するかは、りようはまだ分からなかった。

「でも、レース場はワイルドグースを運転できるスピリッツが必要だよ?。」

「あ、それならもういるわ。出てきなさい!。」

そう言つて、ベルはピコのスピリッツを呼んだ。

『なんだ? オレに何か用か?』

「レース場に行つて、ワイルドグースを運転してほしいわ。」

ルカリオが仲間を見つけたらしいから

『お安い御用だぜ!』

「ね?。」

ピコのスピリッツを解放したおかげで、レース場で行ける範囲が広がったようだ。

「それじゃあ、レース場に戻るわよ!。」

「ああ」

そうして、ベル一行は囚われの仲間を助けるため、レース場に再び行くのであった。

しかし、上空では、光の化身がほくそ笑んでいた。

「6体のファイターを解放したか……。ふ、早いな。だが、我も手は打つてあるぞ」

キーラは、どこかに炎の弾を撃ち込むのであった。

10　再びレース場に

ピコのスピリッツを解放した一行は、再びレース場に戻った。

「確か、ピコはワイルドグースを運転できるな。」

「この先にいるファイターのところに連れて行ってくれないか？」

『ああ、それならお安い御用だぜ。とっととワイルドグースに乗りな』

一行はピコのスピリッツの力を使い、ワイルドグースに乗った。

「えつと、確か……」

「波導がこちら側に見えるぞ」

『おし、分かったぜ』

ピコはワイルドグースを運転しながら、捕まっている仲間がいる場所にマリオ達を案内する。

途中、ニコ・ファイアのスピリッツに遭遇し、

一度ワイルドグースを降りた後にベルが一人で挑んで解放した。

「いちいちワイルドグースから降りてからスピリッツを解放するのは面倒だわ。」

シャドウ、あなたは外に出て、スピリッツをその銃で解放して」

「ほう？　僕が伊達に運転も銃撃もしてないからそう言ったのだな？」

「ええ、あなたの究極の力、見せてもらおうわよ！」

激しく動くF—ZEROマシンに乗りながらの銃撃は非常に当てにくく、素人ではまず不可能だ。

だがシャドウは両方の経験があるため、ベルは彼にスピリッツ解放を頼んだのだ。

「ねえ、シャドウ兄、大丈夫なの？」

「F—ZEROは速いから酔っちゃうよ」

「お前達は僕の後ろにいるだけでいい」

シャドウはカービィとりょうの心配をもつものともしない正確さで拳銃を撃ち、

スピリッツを次々と解放していく。

ワイルドグースはスピードはあまり出ないが頑丈で、激しい敵の攻

撃にも耐える事ができる。

といつても、「F—ZEROマシンにしては」なので、最高速度は400kmを超える。

マルス達は乗り物酔いしないように気を保っていた。

ここまで一行が解放したスピリットは、バイクのマツハラライダー、同じくバイクのモトクロツサー、F—ZEROレーサーのマイティーガゼルとジャック・レビン、

果ては偵察機のジャイロウイングなど、レース場に相応しいものばかりだった。

「フォックさんの乗り物もスピリッツになるなんて、すごい」

「まさに何でもありな世界だな……」

「そうですね……」

カービー、マリオ、アイシャは、生物ではないスピリッツもいる事に驚いていた。

この争いの世界は、彼らの言う通り、「ナンデモアリ」な世界なのだ。「波導が……近い！」

しばらく運転していると、ルカリオが波導を感じ取って目が光る。

つまり、もうすぐファイターがいる場所に辿り着くのだ。

「ルカ兄！ いるの!?!」

「ああ……もう少しで辿り着く……!」

「一気に行きますわよ!」

『ああ!』

ピコがワイルドグースを全力で運転すると、やがてファイターがいる場所に着いた。

「キャプテン・ファルコン……!」

台座に縛られていたのは、F—ZEROLEーサーにしてバウンティハンターの、

キャプテン・ファルコンだった。

「今、出してあげるからね!」

そう言つてカービーが台座に触れてファルコンを縛る鎖を砕く。

ファルコンは、ゆっくりと台座から降りた。

カービイはこれまでの経験もあつてか、すぐに彼に近付かずに身構える。

「そうですね、カービイさん。油断大敵です」

「うん」

「キーラサマノタメニ……オマエタチヲ……ケス」

「来るよ！」

キャプテン・ファルコンとの戦いが始まった。

「えいつ！」

カービイはキックを繰り出してファルコンにギリギリで当てる。

次にベルはファルコンに鎌を振るが、ファルコンは素早く身をかわした。

「なっ!?!」

ファルコンはルカリオの掌底を受け止めた後、シャドウに裏拳をかまそうとする。

「……見切った！」

しかし、ギリギリのところまでシャドウは見切り、ファルコンの攻撃を回避した。

「ファルコン、目を覚ませ！」

「……」

マリオはファルコンに呼びかけるが、ファルコンは反応せずマリオに攻撃する。

「キーラに操られている奴はいくら呼びかけても無駄だ」

「それは分かっているけど……でも、ファルコンを傷つけないよ……」

「君は本当に優しいんだな。だけど、優しいと甘いは違うものだ。」

ファルコンをキーラの呪縛から解放するために、僕達は戦っているんだ」

「シーくん、ありがとう」

カービイの迷いを察したのか、シークはカービイに声をかけ、すぐに彼を立ち直らせた。

「待つてろよ、ファルコン。お前は必ず俺が助けるからな！」

そう言つて、マリオはファルコンを投げ飛ばした。

ベルは、ファルコンが飛んでいった場所に行き、大鎌を振つて斬りつけた。

「ボーンラツシユー！」

ルカリオは骨を棒のように巧みに扱つてファルコンを打ち据える。

ファルコンはシールドでそれを防御したため、大したダメージにはならなかった。

「うおりゃあー！」

「えーい！」

マリオはボディブロー、カービィはバーニングでファルコンにダメージを与える。

ファルコンはカービィにキックで反撃するが、カービィはそれを上手くかわした。

「ふ、やるじゃないの」

「……？」

ベルがファルコンを挑発するように笑みを浮かべている。

ファルコンが少しだけ戸惑っていると、彼の背後にシャドウがワープして現れた。

「はあああつー！」

「グアアアアアアア！」

シャドウが作った無数のカオススピアがファルコンの背を貫き、大ダメージを与えた。

「背後ががら空きだったぞ」

「ナニ……！」

シャドウに背後を取られ、驚愕するファルコン。

一時的に混乱した彼に、ルカリオ、ベル、マリオは一気に攻撃を仕掛けた。

「キーラなんかには負けるんじゃないやねえ！」

「今、私達が解き放つてやる」

「あんたのボディを、これ以上スピリッツが使うのは嫌なのよ！」

「グ、グオ、オオ……！」

何度も攻撃を食らい、ファルコンの動きが次第に鈍くなる。

それを見たカービィは、炎を纏ったハンマーを構えてファルコンに突っ込んでいった。

「今だー！ 鬼殺し……火炎ハンマアアアアア!!」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして、カービィの鬼殺し火炎ハンマーがファルコンにクリーンヒットすると、

彼は大きく吹っ飛ばされ、気絶した。

「……う。俺は、何をしていたんだ……」

正気に戻ったファルコンはゆっくりと起き上がる。

激しい戦いではあったが、ファルコンはタフなのですぐに体力が全回復した。

「大丈夫か、ファルコン」

「あ、ああ、ちよつと痛いけど平気だぜ」

「ああ〜よかったファルコンが無事で!」

マリオとカービィがすぐにファルコンに駆け寄る。

ファルコンは最古参のメンバーなので、彼らとの付き合いがとても長いのだ。

「あのキーラって奴、俺だけでなくお前らも操ったんだってよ」

「ああ……でも、カービィやシャドウ、ベルのおかげで助かったんだぜ」

「賑やかになりましたわね」

「この調子でみんなを助けて、もつと賑やかにしようね!」

最初はカービィ、シャドウ、ベルだけだったパーティーも、

次々に仲間が増え、今や10人になっている。

だが、捕まっているファイターは、まだまだ多い。

しかも、彼女の力によつて、スピリッツを操るための母体が生み出されている……。

このまま、キーラに好き勝手させるわけにはいかないのだ。

「で、もちろん、他のみんなも助けるよな?」

「当然だ! 俺を操ったキーラを許さないし、今も母体を利用されて

る奴だっている！

だから、俺もお前達と一緒に行く！」

「心強いですわ、ファルコンさん」

ファルコンの頼もしさに、アイシャは少しだけ惹かれていた。

「じゃあ、そろそろレース場を出て、次のスピリッツを探しましょう。

ピコ、お願いね」

『よし、しっかり掴まってな』

こうして、一行はレース場に捕まった全ての仲間を救出する事に成功した。

11 ヽ ヨツシーを救え!

こうして、キャプテン・ファルコンを救出した一行は、溪流で休憩をしていた。

「そういえば、ベルはなんでそんなに大きな鎌を持つてるんだ?」

ファルコンは、ベルの持つている大鎌を指差す。

ベルは「当然よ」といった顔でファルコンにこう言った。

「だって、私は死神だもん」

「し、死神!? まさか、ジャック・レビ……」

「いや、死神だけど相手の命を奪ったりはしないわ。

現世と常世の秩序を守るために死神はいるのよ」

「どういう事だ……?」

この世界で死んだものは一度、冥界に送られる。

これは、この争いの世界でも例外ではない。

死者の魂は天国に行つて生まれ変わるまで待つか、

地獄に墮ちるまで冥界から出る事は通常ない。

しかし、何かの拍子で魂が現世に漏れてしまう事があり、

それでは世界の秩序が崩れてしまうため、ベルのような死神がいる

というわけだ。

「死神の役目は魂をあるべき場所に送る事。わたしたち

スピリッツ達もいずれ、あるべき場所に帰るけど、今はキーラが邪

魔してるから無理ね」

ベルはやや暗い表情で、天を仰いでいた。

もし、ここで魂を解放すれば、キーラの力によりまた魂が支配され

てしまうため、

スピリッツボールに入れざるを得なかった。

「……ま、とりあえず、私達はスピリッツを解放しに行きましょう」

「……そうだな」

一行はレース場を後にして、次の目的地を探していった。

「……ここだな」

一行が着いた場所は、溪流だった。

のどかで自然豊かで、一見、平和な場所に見えるのだが、

ここもキーラの影響でスピリッツ化した者がたくさん散らばっていた。

「うわあ、ここにもスピリッツがいっぱいあるわね。」

とりあえず、みんなバラバラになって、スピリッツを解放してきてちょうだい」

「え、ベルベルがいないけど大丈夫なの？」

「大丈夫よ、スピリッツを解放したら勝手に私のスピリッツボールに入るから」

「それじゃあ安心だね！　ベルベル、行ってらっしゃい！」

ベルの言葉に安心したカービィは、彼女に手を振ってからその場を後にした。

マリオ、マルス、シーク、りょう、ルカリオ、ファルコン、アイシヤも解散して、

スピリッツの解放に向かった。

「さて、私は仲間を探そうかしらね。マルス、シーク、シャドウ、一緒に行くわよ」

「うん」

「もちろんだ」

「……僕一人で十分だが……」

ベルも、捕まったファイターを助けるために、マルス、シーク、シャドウと共に皆と違う場所に向かっていった。

マルスとシークは快く了承したが、シャドウは不満そうな表情をしていた。

「えーい！」

「そーれ！」

カービィとりょうは、かつぺいとダルニアのスピリッツを解放した。

ちなみにダルニアは防御力と移動速度が上がる爆走流の道場を経営している、

所謂「マスタースピリット」なのでスピリッツボールには入らな

かった。

「キョーダイよ、オレを助けてくれたお礼に爆走流を教えてやるゴロ！」

「ううん、いいよ」

「僕も遠慮するよ」

ダルニアは二人にお礼として爆走流を教えてやろうとした。

カービィとりようは首を横に振ったが、ダルニアは気にせず豪快に笑った。

「まあ、オレの力が欲しかったらいつでもこの道場に来るゴロ」

「ありがとね、ダル兄ちゃん！」

「おおく！ 兄ちゃんって言われるのはちよつと照れるゴロ」

「えい！」

「はどうだん！」

「ファイアボール！」

「ファルコンパンチ！」

マリオ、アイシャ、ルカリオ、ファルコンはキュピットのスピリッツを解放し、

分厚い雲が晴れる。

四人はこの先の橋を渡ろうとしたが、アイシャが「待ってください」と言つて立ち止まる。

「ん、どうした、アイシャ」

「向こうに誰かが捕まっておりますわ。しかも、周囲にはスピリッツがいます……」

「本当だ！ ちよつと見てこい、ルカリオ」

「うむ……」

ルカリオは精神を集中し、捕まっているファイターの特徴を感じ取る。

「……緑色の身体、恐竜のような容姿……」

「知ってるぜ、ヨッシーだ！」

ルカリオからファイターの特徴を聞いたマリオは、それがヨッシーである事にすぐ気づいた。

「む、そうだったのか」

「俺の相棒がこんな目に遭ってるなんて……当然、助けるぜ！」

そう言つて、マリオはヨッシーがいるところに飛び出していった。

ファルコン、ルカリオ、アイシャも、彼にハラハラしながら後をついていった。

「……」

ヨッシーの周囲には、エリーヌ、キテルグマ、カツサーのスピリッツも浮いていた。

彼の目は赤く、虚ろで何も映っていなかった。

そう、今日の前にいるマリオの姿すらも。

「ヨッシーさん……どうしてこんな事に……」

「周囲の魂もキーラに操られているようだな」

ルカリオはなおも精神を集中している。

しかし、ヨッシーが戦闘態勢を取った瞬間、精神集中を解いて構えを取った。

「ゼンブ、ゼンブ、タベマスヨ〜！」

「待ってるよヨッシー、今、俺達が助けるぜ！」

「最古参のメンバーとして、負けないぞ！」

「……参る」

マリオ、ファルコン、ルカリオ、アイシャと、

ヨッシー、キテルグマ、エリーヌ、カツサーの戦いが始まった。

「いくカサーー！」

「おっと！」

カツサーはピーチのボディを操ってマリオに自身を振り回すが、彼には当たらなかった。

エリーヌの体当たりもマリオは回避する。

「オイシクタバマスヨ」

ヨッシーはルカリオに舌を伸ばして口の中に入れた後、何度か嘔んで吐き出す。

「うろう」

「サア、ツギハダレカラタバマシヨウカ」

「そらよ！」

ファルコンは大きく腕を振り下ろし、カツサーに拳を当てて吹っ飛ばした。

「はあっ！」

「ここまでおいで、ですわ」

「? ? ?」

ルカリオは波導を纏った拳をヨツシーに振り下ろしてダメージを与える。

アイシヤは怯んだヨツシーに不規則な動きで近付き、ヨツシーを混乱させた。

「きやあー！」

キテルグマはアイシヤに殴りかかってくるも、アイシヤはその攻撃をかわした。

「あれに当たると、吹き飛びそうですわ」

「だったら、まずはこいつから解放するぜ！」

マリオはハンマーを取り出してキテルグマに振り下ろした。

攻撃はギリギリで命中し、大ダメージを与える。

ファルコン、ルカリオ、アイシヤは相手の動きを観察しながら

どんな手を取ればいいのか考えていた。

「キテル、グマー！」

「うおっ！」

キテルグマが振り下ろす拳を回避し、裏拳を当てていくファルコン。

「ヨツシー、俺が見えるか!？」

マリオはカツサーの攻撃をギリギリでかわした後、ヨツシーにミドルキックを放った。

「オヤ〜? アナタハタベラレマスカ〜?」

「やめろ！」

ヨツシーは渾身の力を込めてマリオに頭突きしようとする。

マリオはそれをかわし、反撃でファイアボールを放った。

「グマー！」

「きゃあー！」

キテルグマはアイシャを殴り、吹っ飛ばす。

その威力にアイシャは重傷を負ってしまった。

「痛いですわ……」

「だが怪我をしなかった分、前の異変よりはマシだ」

「前の異変……？？」

「話は後だ、戦闘に専念しろ！」

「あ、はい！」

ルカリオに言われたアイシャは、

敵の攻撃に気を付けながらカツサーやエリーヌを包丁や皿で攻撃した。

「ファルコンキック！」

ファルコンは高く飛び上がってヨツシーをキックで攻撃する。

彼が着地した場所にエリーヌはいたが、その攻撃はファルコンには当たらなかった。

「？ ？ ？」

「それ！」

混乱するヨツシーをアイシャはビンタで攻撃した。

ルカリオとアイシャはエリーヌに攻撃を仕掛けるもエリーヌはひよいひよいと身をかわした。

「速いですわね」

「いや、彼女自身の素早さはそんなに速くない。虫と同じで、反応が早いだけだ。」

「先の先を読んで攻撃するんだ」

ファルコンのアドバイスを聞いたアイシャは頷き、

エリーヌが来そうなところに包丁を振り下ろした。

「要するに回避されなきゃいいんだろ？　アイスボール！」

マリオは氷を纏った球を飛ばし、エリーヌを氷漬けにして動けなくする。

「はっけい！」

その隙にルカリオはエリーヌを掌底で打ち据える。

エリーヌは意外にも体力が低く、一撃で倒れた。

「あと少しだ、ファルコンナックル！」

ファルコンはヨツシーの懐へ潜り込み、アッパーを放った。

ヨツシーは反撃で卵を投げるが、ファルコンには当たらなかった。

「ファイア掌底！」

マリオは炎を纏った掌底でキテルグマを倒す。

「とどめだ！ はどうだん!!」

「ウアアアアアアア!!」

そして、ルカリオが波導弾を放つと、ヨツシーは勢いよく吹っ飛ばされた。

この戦闘は、マリオ達の勝利で幕を閉じた。

「ううう、私はどうしてこんなにボロボロなんでしょう」

ヨツシーは、ようやく正気に戻った。

彼は何度も攻撃を受けていたらしく、身体がボロボロになっていた。

「今、わたしが回復します」

アイシャは即席で手料理を作ってヨツシーに振る舞った。

「わあ〜！ 美味しそうです。いただきます」

「あ、ヨツシー！ それは……」

ヨツシーは舌を伸ばし、アイシャが作った手料理を食べた。

ファルコンは止めようとしたが、時既に遅かった。

「もぐ、もぐ、もぐ……。ん〜♪」

ヨツシーは、アイシャの手料理を食べて笑顔になった。

「ヨ、ヨツシー……平気なのか？」

「甘さと酸っぱさと苦みが混ざり合った、とっても絶妙な味です〜♪」

「あ、よかった！

わたし、料理はあまり得意じゃないんですが、喜んでくれてありがとう〜♪」

ヨツシーが手料理を食べてくれた事にほっとするアイシャ。

(……ヨツシーは辛い味が苦手なだけで、それ以外には特に好き嫌いなだけだな)

マリオは、アイシヤの微妙な味の手料理をヨツシーが食べた理由を知っていた。

ヨツシーは、唐辛子などの辛いものや、

青いウフフちょうななどの不味いもの以外は基本的に何でも食べるのだ。

「それじゃあ、俺達はシャドウ、ベル、マルス、シークがやってくるまで待とう」

「シャドウさんとベルさんって誰ですか〜？」

「俺達の仲間だよ。キーラに捕まった俺を助けたのもカービィと一緒に行動してるこの二人さ。」

……シャドウは仲間って言われるのを嫌がると思うけどな」

その頃、ベル一行は……。

「くしゅん！」

「あ、どうしたの、シャドウ？ あんたがくしやみするなんて、珍しいわね」

「いや、誰かが僕の事を言っているかもしれないからだ」
シャドウが、くしやみをしていた。

12 一意専心の槍歩兵

シャドウ、ベル、マルス、シークは、一行と別れた後、ヨッシーアイランドのエリアでスピリッツを解放しに回っていた。カブを売っている猪の老婆カブリバや、マクラノ王国の王子ユメツプなど、

いかにも戦闘に向かない者までスピリッツになっていた。

「なんで、こんなままでスピリッツになってるのよ」

「りようやソレイユ、リユンヌがファイターになっている時点でそのツツコミは無駄だと思うよ」

奇妙なスピリッツばかりではあ、と溜息をつくベル。

対照的に、マルスはもう慣れているといった表情をしていた。

「この辺に捕まった仲間はあるのか？」

「いると思うわよ。私は勘を信じるわー！」

「勘って……；」

ベルの言葉に、シャドウ、マルス、シークは一抹の不安を覚えた。

「……あ、いたわー！」

3分後、ベルは台座に縛られているファイターを見つけた。

それは、青いバンダナを巻き、片手に赤い房がついた槍を持ったワドルデイだった。

「誰だ、こいつは」

「見た事がないね……」

「ワドルデイ？ でも、ちよつと違うわね」

「新参者か？ だが……」

どうやら、この場にいた四人は、このワドルデイの事を知らないようだ。

とはいえ、放っておくわけにはいかないので、とりあえずシークは後ろに下がり、

仕込針を台座目掛けて投げると、鎖は砕け散りワドルデイは解放された。

「……ケ、ス……」

ワドルデイの目は赤く染まり、槍も禍々しい光に覆われていた。さらに、彼の近くにいたあみぐるみヨツシーのスピリッツが、ワドルデイに付き従うように動いた。

「ケスウウウウウウウ!!」

ワドルデイは槍を持ってシャドウ達に襲い掛かってきた。

シャドウは攻撃をかわした後、戦闘態勢を取る。

「来るぞ、油断するな!」

「ええ!」

「それ!」

マルスはワドルデイにファルシオンを振って切り裂く。

「やあ!」

ベルはあみぐるみヨツシーに大きく鎌を振り下ろすが、

あみぐるみヨツシーは彼女の攻撃を見切る。

「……っ! シャドウ!」

「カオススパア!」

ベルがシャドウにアイコンタクトをすると、シャドウはワドルデイに混沌の矢を放った。

ワドルデイはパラソルを開いて防御しようとしたが、

パラソルを開く直前で混沌の矢はワドルデイに刺さる。

「イタイ! ナニヲスル!」

ワドルデイは槍を振り回してベルを攻撃しようとするが、

でたらめに振り回したため当たらなかった。

「あんたの事を知りたいから、まずは正気に戻りなさい」

「仕込針」

ベルとシークは、ワドルデイを正気に戻すため、鎌と針でワドルデイを攻撃した。

「フォロワースロー!」

「マーベラスコンビネーション!」

ベルはワドルデイを掴んで後ろに投げ、

マルスが怯んだワドルデイをファルシオンで連続斬りする。

「……」

「ウワー！」

シャドウは無言で威嚇射撃を行い、ワドルデイを怯ませる。

その甲斐があつてワドルデイはあたふたし、合わせてあみぐるみヨツシーも慌てる。

「ドラゴンキラー！」

「ダウンリーパー！」

そして、マルスとベルの武器が、あみぐるみヨツシーとワドルデイを真っ二つにした。

あみぐるみヨツシーのスピリッツは、ベルがスピリッツボールの中に入れた。

「ばたんきゅ〜……」

「なんかそれ、どっかで聞いた事あるわね」

ワドルデイは、どこかで聞いた事があるような台詞を言いながら倒れた。

「おい、そこのお前」

シャドウが無造作に倒れたワドルデイに話す。

「ちよつとシャドウ、それは失礼だと思ふよ」

「そうか？」

シャドウは純粋なため、マルスが注意した事を気に留めていない。するとシャドウの声に気づいたワドルデイが起き上がった。

「あ、あれ？ ここは一体……。大王様……。？」

「だ、大王様？」

「うん、ボクに名前をくれた恩人なんだ」

「デデデが……。？」

どうやらこのワドルデイは、デデデによって名前を与えられたらしい。

四人が首を傾げると、ワドルデイは笑顔で四人に自己紹介した。

「あ、自己紹介自己紹介。ボクの名前はランス。

かつてリップルスターで起きた異変を解決したワドルデイの……。？」

「子孫!？」

「従兄弟のお姉さんの友達の甥っ子なんだ」

「なんだ」

青いバンダナを巻いたワドルディ——ランスと、リップルスター異変を解決したワドルディとの繋がりは全くなかったため、がっかりするベル。

「それで、キミ達の名前はなに？」

「……シャドウ・ザ・ヘッジホッグ」

「ベル・クリーブよ」

「僕はマルスだ、よろしくね」

「シークだ」

「よろしく〜！」

シャドウ、ベル、マルス、シークは改めて、ランスに自己紹介をした。

ランスは笑顔で、四人の手に一人ずつタッチした。

「それで、キミ達はなんでここに居るの？ まあ、そういうボクも、人の事は言えないけど」

「実はね、かくかくしかじかで」

ベルは、これまでの事情をランスに話した。

「ふーん、みんながキーラに捕まっちゃったから助けに行ってるんだね？」

「ええ、そうよ」

「うわあ、みんな強そうだねえ。ねえシャドウ、それ、何？」

ランスがシャドウの持っている拳銃を差す。

「銃だ？」

「銃？ って？」

「お前が持つ必要はないものだ」

「そうなんだ。でもボクにはこの槍と傘があるから、大丈夫だよ」

ランスはシャドウの銃を欲しがらず、自分の槍と傘を使って戦う事にした。

あまり高望みはしない、謙虚な性格が見て取れる。

「だからボクも、一緒に連れてって！」

ランスがびよんぴよんと飛び跳ねる。

これは、四人の仲間になりたいというサインだ。
マルスは微笑みながら彼の仲間入りを承諾する。

「もちろん、いいよ」

「仲間は一人でも多い方がいいからね」

「ふっ、ベルの言う通りだ」

「僕の足手まといになるなよ」

「むく！ ボクだってやる時はやるんだから！」

こうして、シャドウ一行に新しい仲間が加わった。

青いバンドナを巻いたワドルデイ、ランスという一意専心の槍歩兵が。

13 お医者さんを探して

ランスを仲間に加えたシャドウ一行は、残りのスピリッツを解放しに行こうとしていた。

「あ、シャド兄！」

「お待たせしました〜」

そこに、カービィ、りょう、マリオ、ルカリオ、アイシヤ、フアルコン、

ヨッシーがシャドウ達と合流する。

「あら、そこにいるのはヨッシーね」

「マリオさん達が助けに来てくれました〜」

ヨッシーはキーラに操られたが、マリオ達に助けられた事をシャドウ達に報告した。

「大事な俺の相棒だから頑張って助けたんだぜ」

「マリオさ〜くん、相棒だなんて照れますよ〜」

「……乗り捨てたりしないわよね？」

「今は、な」

昔、マリオはヨッシー族を乗り捨てた事があるらしい。

現在はそんな事はなくなっているが、念のためにベルはマリオにそう言った。

「まあ、これにて仲間は増えた事だし、スピリッツを解放しましょう」

「うん！ 頑張るよ！」

ランスはぶんぶんと槍を振るって気合を溜める。

もちろん、槍は仲間達に当たらないように、だが。

「やる気満々だね〜、ランス」

「そうだよ！ ボクは大王様のためならどこへでも行くから！」

「僕も、食べ物のためならどこへでも行くよ！」

同じミルキーロードの出身者だけあって、カービィとランスは意気投合したようだ。

その様子を見たアイシヤは、ニッコリと微笑んだ。

「二人とも、動機が単純だなあ。だがそれがいい」

「そうだな。子供らしくていいぜ」

一行はヨツシーアイランドで、キーラにスピリッツ化された者達を次々に解放していった。

キャプテン★レインボーに変身するニツクや、剣法を指南する剣士・鷹丸、

ニンテンの仲間のアナ、リンクが夢の島で出会ったマリリン、スターウルフのパンサーなど……。

「綺麗なスピリッツがいっぱいいますわね」

「うん！ 可愛かったよー！」

カービィとアイシャがスピリッツに見惚れていると、

ベルがあるスピリッツを見つけて立ち止まる。

「あれ？ どうしたの、ベルベル？」

「ちよつとこれ、見て」

「……」

ベルが見つけたスピリッツは、緑の全身タイツに身を包んだ、不細工な顔立ちの男だった。

「……これは？」

「チンクル。出身世界はハイラル。自分を妖精だと思い込んでいる男。35歳独身」

ベルが何とも言えない顔でスピリッツを説明する。

「……醜悪だな」

「不細工だ」

「何これ」

シャドウ、シーク、ランスは、全員同じ意見を言った。

あまり意見が合わない三人だが、この時だけは意見が合っていた。

「……ま、とりあえず、こいつも解放しなくちゃね」

ベルは大鎌を構え、チンクルに戦闘態勢を取った。

カービィ、シャドウ、シーク、ランスも、彼女に続いて構えた。

「あ、私も入れてくださーい！」

ヨツシーも遅れて、彼らと同じように構えた。

「あっけなかったわね」

チンクルとの戦いは、あっさりと終わった。

妖精だと思いついでいるただの独身男に、本物の死神が負けるわけがなかった。

「さて、こういうのも一応スピリッツになるから、入れておくわ」
ベルはチンクルのスピリッツをスピリッツボールの中に入れる。

その後、スイッチを感知してシャドウの caos コントロールでそれがある場所に

連れて行ってもらい、スイッチを押して青いバリアを消した。

「これでとりあえず、スピリッツはみんな助けたかな？」

カービィが辺りをきよろきよろと見渡す。

散らばっているスピリッツはほとんどなく、

ヨツシーアイランドのエリアはもう終わりかと思われていた。

「待て！」

その時、ルカリオがヨツシーアイランドにある波導を察知したよう
で通知する。

「ルカルカ、どうしたの？」

「波導を……感じる……！」

「え、誰の波導!？」

「こつちだ、ついてこい！」

そう言つて、ルカリオは波導を察知した場所に皆を案内していつた。

カービィ、シャドウ、ベル、アイシャ、マリオ、ヨツシー、ファル

コン、マルス、シーク、

りようは急いで彼についていった。

「ま、待って〜！」

ランスも、遅れながらみんなについていった。

「フッフッフ……」

ルカリオが波導を察知した場所には、マリオの従兄弟・ドクターがいた。

ドクターは含み笑いをしながら、倒れたプリムの身体をメスで解剖している。

彼の瞳は、真つ赤に染まっていて、正気なようには見えなかった。「まだこつちには気付いていないようだが……」

突撃するか、おびき寄せるか、忍び寄るか……。

見つからないようにドクターにダメージを与え、有利な状況にする必要があるようだ。

「よし、僕が忍び寄ろう」

「頼むぞ」

シークはこっそりとドクターに忍び寄り、懐から仕込針を取り出した。

「ギャツ!」

「……完璧だな」

ドクターは背後にシークがいる事に気づかないまま、仕込針の攻撃を受けた。

「よし、一気に行くぞ!」

「うん!」

マリオ、カービィ、シーク、シャドウ、ベル、ランスは、

その隙にドクターに突っ込んでいった。

「ウ、ウグググ……!」

怯んだドクターは何もできずに六人の攻撃を一方的に受ける。

今、ドクターとの戦いが、始まった。

「やあーっ!」

ベルはドクターに大鎌を振るが、ドクターはシールドで防御する。

ドクターはカービィのフェイントをかわした後、シークを蹴って攻撃した。

「うわあ!」

「目え覚ませ、ドクター!」

「ボクの目を見てよ!」

マリオの拳とランスの槍がドクターに当たるが、致命傷にはならなかった。

「そこだっ!」

シャドウはドクターの腕に狙いを定め、拳銃でそこを撃った。

ドクターは腕を押さえて一瞬だけ動きを止め、その隙にマリオがファイアボールでドクターを攻撃した。

「大事な従兄弟だからな……俺が助けてやるよ」

「グググ……カイボウシテヤル……」

「ドクター……駄目だよー!」

カービイがドクターを止めにかかるが、

ドクターは歩みを止めずマリオに突っ込んで心臓マッサージをしようとした。

しかし、その心臓マッサージをマリオはジャストシールドで完全に防いだ。

「セツカクナオソウトオモツタノニ……」

「治すのはお前の方だ」

シャドウはそう言って、ドクターに拳銃を撃つ。

ランスも槍を振り回しドクターを攻撃した。

「ボクは助けられたんだ。だから、ボクも助ける!」

「タスケルカ……タスケラレルナラコイ!」

「今、助けるよ! バーニング!」

「ウアー……ツ!!」

カービイは全身に炎を纏い、ドクターに体当たりした。

先程の一斉攻撃が効いたのか、ドクターはその一撃で倒された。

「あ、もう終わっちゃったの?」

「ドクターはあまり戦闘は得意じゃないからね」

「わたしが治してあげますわ」

アイシャは倒れたドクターに傷を癒す術を使い、ドクターを意識不明から回復した。

「うーん……あれ? ここはどこだろう……」

「おはよう、ドクター」

マリオの声と共に起き上がるドクター。

ドクターはキーラから解放されており、目は元の色に戻っていた。

「あ、ドクター! 元に戻ったんだね! よかった」

「わ、カービイ君、何するんだよ」

カービイは正気に戻ったドクターに抱き着く。

「だつてえく、ドクターはアイシヤちゃん以来のヒーラーだもん！」

「そ、そうかい……」

「それにマリおじちゃんの家族だもんね！」

「はは……僕の従兄弟のマリオ君とルイージ君の事かい？」

ルイージ君は、まだいないようだけど」

「実は……」

マリオは、ドクターにこれまでの事情を話した。

「なるほどね。キーラという奴が僕達をこんな目に遭わせたのか」

「当分はキーラに捕まった人達を助けに行く事にしたんだ」

今の彼らの目的は、キーラに奪われた者の奪還だ。

ファイターだけでなく、肉体を失った住民、スピリッツも助けなければならぬ。

それらを聞いたドクターは、凜々しい表情で頷く。

「じゃあ、僕も一緒に行くよ。」

戦うのは苦手だけど、だからといって逃げるわけにはいかないしね。

それに、怪我したら僕が治してあげるからさ」

ドクターは争いを好まない性格だが、いざという時の行動力はかなりのものだ。

普段はあまり見せない従兄弟の表情を見たマリオも、同じ表情で頷き返した。

そして、マリオとドクターは互いの手を取った。

「一緒に行こう、マリオ君！」

「ああ……ドクター！」

14 く フオックス発見!

ドクターを仲間に加えた一行は、ヨッシーアイランドを後にし、次の目的地を探していった。

「それにしても、この世界は大変な目に遭ってるんだねえ」

「最初は戦える奴が僕以外にいなかったしな」

「それを言うならカービィとベルもでしょ」

最初にキーラの襲撃で生き残ったのは、ワープスターで避難したカービィ、

カオスコントロールで避難したシャドウ、魂を守る術で避難したベルのみ。

そこから三人は、スピリッツ化した者達を救いながら、

キーラの呪縛からファイターを解放している。

「でも、こうして俺達は助けられてるんだ。いいだろ? ドクター」

「ファルコン君、それでもこっち側が少数陣営だという事に変わりないよ」

とはいえ、相変わらずキーラ軍の方が多い事は、ドクターもちやんと把握していた。

「まあ、確かに人数は少ないな」

「でも、僕達は強いよ。数なんかよりも、えーと」

「質だ」

「そうそう、質、質!」

要するに、有象無象が束になってかかっても、能力が高ければ軽くあしらえる、という意味だ。

「数よりも能力で勝負だ! 待ってるよ、キーラ!」

「ああ! 俺達が必要、全てを奪還するぜ!」

「おーーーーーっ!!」

スマブラ四天王のマリオとカービィは立ち上がり、キーラが浮かぶ天に向かってそう言った。

二人の勇気に満ち溢れた声質と表情に、一部を除いた全員が勇気づけられた。

しばらくすると、キーラが嘲笑するかのように空が震えた。

「キーラ……完全に俺達を馬鹿にしているようだな。」

だが、必ずお前を痛い目に遭わせてやるからな」

ファルコンは握り拳を作り、キーラにそう宣戦布告するのであった。

「次はこっちだ」

シャドウを先頭にして、一行は西に向かって歩いていった。

「おいシャドウ、どうしてそっちに行くんだ？」

「ベルがヨツシーアイルランドで青いスイッチを押ししたからな。」

他にもスイッチがあるだろうと予測したからだ」

「へ〜……」

「あ、スイッチ見つけたわよ！」

ベルが指差した先にあつたのは、赤いスイッチだった。

しかし、赤いスイッチがある場所に行こうとすると、

ブロンドのポニーテールと白いドレスが特徴の女性と、

赤い衣を纏い、大きな槍を携えた男が道を塞いでいた。

それぞれ、パルテナとガノンドロフのボディを元になっているが、姿

は異なっていた。

「ハーデイン……本当は……私は……」

「ニーナ、何故そんな事を言う……！ お前は、我が妻なのだぞ……

！」

悲しげな表情をする女性、ニーナと、衝撃を受けている男、ハーデイン。

ン。

ハーデインはニーナを妻と呼んでいて、カービイはハテナマークを

浮かべる。

「え、なんで？」

「ニーナ様はグルニアの黒騎士団の団長、カミュ將軍が好きだったんだ。

だけど、暗黒戦争が終わった後、ニーナ様は祖国復興のためにハー

デインと政略結婚した」

二人のやり取りに疑問を抱くカービイに、マルスは簡潔に理由を説

明した。

「……こういうやり取りも生まれるから、戦争というのは悲しいね。だから、僕が助ける」

マルスはファルシオンを抜き放ち、二人のスピリッツを解放する体勢に入った。

暗黒戦争で自身にファイアーエムブレムを託した王女は、恋慕する騎士がいながら終戦後にオレルアン王弟と結婚し、今度はその魂をキーラに利用された。

だから、マルスは二重の呪縛に苦しむニーナを解き放ちたいのだ。

「よし！ そんなに言うなら、僕もマルスと一緒に戦おう！」

「頑張ろうぜ、相棒！」

「はい、マリオさくん！」

「馬鹿め！」

「きやー！」

ハーデインは槍でアイシャを攻撃する。

アイシャはハーデインの一瞬の隙を見計らい、ハーデインの攻撃を回避した。

「おらー！」

「それ！」

マリオはハンマーを振り、りょうは傘でニーナを攻撃する。

「殴るのは苦手ですけど……」

アイシャはニーナにビンタして怯ませる。

マルスはニーナを斬りたくないため、ハーデインをファルシオンで斬る。

「そくれ！」

「はっけい！」

「効かぬ！」

ヨッシーとルカリオの攻撃を、ハーデインは槍で受け流す。

そしてハーデインはマリオに槍を突き刺そうとするが、

マリオは緊急回避して彼の背後に回り込みファイアボールで攻撃する。

「ドラゴンキラー!」

「ぐうううううっ!」

ハーデインはマルスのファルシオンの一撃を受け、横に大きく吹っ飛ばされる。

「そっくれっ!」

その後、ヨツシーがニーナに頭突きをし、ニーナも吹っ飛ばされて戦闘不能になった。

「カミュ……ごめんなさい、私は……」

「大丈夫よ、すぐに会わせてあげるから。しばらく大人しくしててね」
ベルはスピリッツボールを開け、ニーナのスピリッツを中に入れた。

「今度はお姫様のスピリッツか。」

……そういえば、ピーチやゼルダやデージーは、どこに行ったんだ?
「あ、そういえば」

ファルコンの一言で、マリオは気付く。

ピーチ、ゼルダ、デージーは、他にも姫はいるが、争いの世界の代表的な姫だ。

またデージーは、最近スマブラ屋敷に入って来たサラサランドの姫でもある。

「ちよつと、調べてみるわ」

ベルは鎌を地面に刺し、精神を集中して光の世界を探知した。

「溶岩城にピーチが見つかったわ」

「え、ホント!?!」

「でも、ゼルダやデージーの魂は分からない……」。

もしかしたら、別の世界にいるかもしれないわ」

ベルの探知により、ピーチが溶岩城にいる事が判明した。

しかし、ここから溶岩城に行くには遠すぎるため、カービィがシャドウにある提案をした。

「シャド兄、テレポートで溶岩城に行けないの?」

「正確にはカオスコントロールだが……もちろん行ける。だが、まだ

行く必要はない」

「どうして？」

「……今はこいつと戦って、赤いスイッチを押すのが先だからな」
「あ」

赤いスイッチの前に立っていたのは、スターフォックスのリーダー、フォックスだった。

彼もまた、台座に束縛されており、カービイが触れる事で台座から解放された。

フォックスの両目は、赤く輝いていた。

「キーラサマノジャマヲスルモノハ……オレガ、シマツスル……」

フォックスは赤いスイッチを守っている。

「どうやら、キーラに操られていても、一人称までは変わらないようだ。」

シャドウとランスはそれぞれ武器を構える。

「よし！ 頑張るぞー！」

「邪魔をするというのなら、覚悟するんだな」

「待っててね、フォックくん。僕が必ず助けるから！」

「目の前にいる患者を助けられなくて、何が医者だ」

「死神ベル・クリーブ、ただいま参上！ ってね」

カービイに続いて、マリオ、ドクター、ベルも戦闘態勢を取った。

今、フォックスとの戦いが、始まった。

「それっ！」

ベルはフォックスに大鎌を投げつける。

フォックスはリフレクターを使い、飛んできた大鎌を跳ね返す。

すかさずフォックスはブラスターをドクターに連射するが、

ドクターはシールドを張って攻撃を防ぐ。

「君の病名は……『ゾンビ病』だね」

「ゾンビ病？」

「病気を生み出してる人の下僕になる病気だよ。元の意識はなく、主の忠実な従者になるのさ。」

「これは症状が軽いから強いショックで治るけどね」

「グアッ！」

そう言つて、ドクターはカプセルをフォックスに投げつけて怯ませる。

「そらよー！」

マリオは、ドクターに続いてフォックスをファイアボールで攻撃する。

シャドウはホーミングアタックを繰り出した後、一度距離を取って拳銃で頭部を狙って撃つ。

「よく平気でそこを狙えるね、シャド兄」

「頭ならば、すぐに倒れるからだ」

「ウググ……」

フォックスは頭を押さえて動けなくなる。

「よし、今だ！」

カービィとランスはフォックスに突っ込み、パンチと槍で連続攻撃した。

「フォックスイリユージュオン！」

「うわああ！」

「うわあ！」

怒ったフォックスは、目にも留まらぬスピードでカービィとランスを切り裂く。

「キーラサマニタテツクナド、ゴンゴドウダン！ イマココデ、ケシサツテクレル！」

「ボク達はそのキーラという人からキミを助けるために戦っているんだ！」

「ダメレダメレダメレ！ キーラサマコソシコウ！ キーラサマコソ

スベテ！

スベテヲヒカリニツツンデクレル!!」

「うわーっ！」

フォックスはランスを腕で振り払う。

ランスは体力が減ってきて、疲労も溜まっているが、気合で何とか立ち上がった。

「ドウシタ……コノテイドカ？」

「フォックス、キミのキーラへの忠誠心は確かに凄いよ。でも、それは間違ってる」

「ナニ？」

「大王様はボクに名前をつけてくれた。それは、ボクを信頼しているからだ。」

今もボクは、名前をつけた大王様のために頑張ってる。

忠誠というのは、お互いを信じてこそ生まれるんだ。キミは、キーラに利用されてるんだ!!」

「ダメレエエツ!!」

「黙らないよー。だって、これがボクにとっての主従関係だもん！」

ランスは槍を構え直し、フォックスに突っ込んでいった。

フォックスは両手で槍を押さえ、ランスを再び投げ飛ばす。

衝撃でランスの槍が飛んでいったが、ランスは諦めずに立ち上がり、

もう一つの武器である傘を取り出す。

「槍がなくてもこれがある！ ボクは絶対に諦めない！ カイシヨウナシになるものか!!」

そう言つて、ランスは傘をドリルのようにフォックスに突き立てた。

「はああああっ！」

「ウオオオオツ！」

フォックスとランスがぶつかり合う。

ランスの傘がフォックスの身体に当たったと思えば、

フォックスの尾がランスに当たったりと目まぐるしい光景になっていた。

「す、凄いですわね、ランスさん……」

「誰かのために一生懸命になると、こうなるんだな……」

アイシャとシークは、その光景を固唾を呑んで見守っていた。

そして数分後、ランスとフォックスの一騎打ちに決着がついた。

ランスの傘がフォックスを貫き、フォックスはその場に倒れた。

「勝ち、ました……よ、大王、様……」

ランスも、ダメージがかなり蓄積していたため、フォックスに遅れて倒れた。

「お疲れ様、ランス君」

「ひい〜！ しみる〜！」

戦いを終えたランスは、ドクターに怪我を治してもらった。

ドクターは塗り薬をランスに塗っていく。

薬が傷に当たってしみたらしく、ランスは痛がっていた。

「悪いけど、治療は手を抜かないよ。患者が死んだら元も子もないからね」

「うう〜……」

ランスがドクターの治療を受けている間に、フォックスが起き上がった。

「ん……あれ、俺は何をしていたんだ……」

「フォックス君！ お帰り！」

「うわっ！」

カービイの明るい声にフォックスは驚いてよろめく。

いきなり殴られた上に、大きな声で呼ばれたからだ。

フォックスはよろめいた拍子に、後ろにあつた赤いスイッチを押してしまった。

すると、道を塞いでいた岩が砕け散り、赤いバリアも消えた。

「……あ、すまん」

「いいのよ、バリアが消えたみたいだし。」

フォックス、少し休んだら、何が起こったか詳しく聞かせてもらおうわよ」

「ああ、分かった」

数分後、フォックスはベル達に事情を話した。

内容の大半は他のファイターを助けた時のものと同じだったが、フォックスはあるものを見ていたらしく、それを皆に話した。

「俺が意識を失う前に最後に見たのは、マスターハンドだった。」

そいつは何か、慌てているみたいだった」

「慌てている？」

「ああ……確か、どこに飛んでいったかな……。うーん……。宇宙だったかな？」

とにかく、そいつは何か知ってるっぽいし、宇宙に行けたら話を聞きたいんだが……

アーウィンを出そうにも何故か出せないし……」

フォックスはまたもアーウィンを出せなくなったようだ。

じゃあ後回しだね、とりようが言う。

「それじゃ、次はどこに行く？」

「……南西にある街で2つの波導を感じる。そこに行くぞ」

ルカリオは、街で波導を感じたらしい。

恐らくは、ファイターの波導だろう。

一行は全員、迷わずルカリオに賛成し、街に行くための準備をした。

「準備はできたか？」

「うん！」

「では、街に行くぞ！」

「あ、待ってくれ。ランス君の治療が今終わったところだ」

「置いてかないで〜！」

15 街の中で

ルカリオが感じ取った2つの波導を見つげるため、一行は街に行くための道を進んでいった。

その道中で、一行はスレチガ諸島に住むコペラを解放し、山を抜けるとそこは目的地である街だった。

北側に噴水があり、塔が立っている中央広場や、道場らしき建物、住宅街などがある。

街だけあり、スピリッツはたくさん各地に存在している。

「スピリッツをたくさん感じるわ。街は広いから、ペアで行動して、はぐれないようにね。」

スピリッツを解放したら、広場に行くのよ」

「ああ」

一行はペアを組んで解散し、それぞれスピリッツの解放に行った。

ヨツシーとりようは、美容師のプードル、カットリーヌと戦っていた。

「ボディはしずえさんですね〜」

「犬だからね。えい！」

りようはボウリングの玉をカットリーヌに落とすが、カットリーヌはシールドで攻撃を防ぐ。

ヨツシーは舌を伸ばしてカットリーヌを口に入れた後、彼女を卵に変える。

その隙に、りようは木を育てて斧を振り、木を切つてそれをカットリーヌに落とす、

彼女を吹っ飛ばして戦闘を終えた。

カットリーヌのスピリッツは、ベルのところに飛んでいった。

「あれ？ もう決着がつかしましたね〜」

「元々戦闘向きじゃないからね、カットリーヌはそんなに強くないよ」

「それじゃあ、私達は広場に行きますね〜」

ファルコンとベルは、格闘家のダンと戦っていた。

「やあーっ！」

ベルはダンの背後に回り込み、大鎌で斬りつける。

「いくぞ、ファルコンキック！」

「断空脚！」

ファルコンはダンに飛び蹴りを放つも、ダンは華麗な動きでかわし、

飛び跳ねながら蹴って反撃する。

ダンは距離を取って挑発し、

ファルコンは隙を突きダんに膝を当てようとするがギリギリで当たらなかった。

「挑発ばかりする割に、そこそこ強いよね」

「これがサイキョー流だからな！」

「だが、勝つのは俺達だ！ ラウンドキック！」

ファルコンは回し蹴りでダンを攻撃する。

ダンが怯んだ後、ファルコンはダンを掴み、後ろに回して後ろ蹴りをする。

そして、振り向いた後、とどめのファルコンパンチでダンを吹っ飛ばした。

「捕まえた！」

「な、何をする！」

「じたばたしないでね、あんたはこの中に入ってもらわうわ」

ベルはダンのスピリッツをぎゅうぎゅうとスピリッツボールの中にしまった。

「よし、後はみんなのところに戻るだけだな」

「そうね」

地下に行くための階段には、あひるポケモンのコダックがいた。

フォックスとドクターは、道を通るためにコダックと戦う。

「とりやあつ！」

フォックスは力を溜めて蹴りを放ち攻撃する。

コダックは水を放って反撃するが、

所詮は未進化ポケモンなのでフォックスとドクターの相手にはならなかった。

ドクターが心臓マツサージでコダツクを倒すと、コダツクのスピリッツはベルのいるところに飛んでいった。フォックスとドクターは、ぽかーんとしながらその光景を見ていた。

「おや、あつさり終わったねえ」

「うーん、呆気なかったな。まあ、いつか。とりあえず、みんなのところに帰ろう」

シークとアイシャは、モニターと戦っていた。

「はっ！」

「ワタクシ、目が回りマス。どこに攻撃を当てればいいのかデシヨウ……ウワ！」

「それ！」

シークはフェイントをかけモニターを混乱させる。

混乱したモニターは何をすればいいか分からず、

アイシャはその隙にモニターに皿を投げつける。

「双鱼！」

「ア~~~~レ~~~~」

シークがモニタータを二回蹴ると、モニターはすぐに意識不明になった。

「……ワタクシ、これでも女子デスよ。暴力、反対、デス……」

「わたしやピーチ姫、ゼルダ姫、サムスさんのような女性が戦っている時点で、

その言葉は無意味だと思いますけど……」

アイシャは倒れたモニターに苦笑しながらそう言った。

勘違いされがちだが、モニターは一応女性である。

シークが複雑な表情で頷いた後、モニターのスピリッツはベルがいるところに飛んでいった。

「……どうしました、シークさん？ 戻りますよ？」

「ああ、そうだったな」

マルスとランスは、ハル・エメリツヒと戦っていた。

「君の世界のアニメ、また見たいなあ」

「でも、再放送したとしてもボクは出てないよ」

ハル・エメリツヒは、日本のアニメが好きなため「オタク・コンベンション」、

略して「オタクコン」という通称がある。

またランスの世界のアニメ、つまりアニメ版星のカービイは、

この小説同様に多くのパロディや社会風刺がある。

理由は、原作での「子供でも大人でも楽しめる」コンセプトを再現しているからだ。

さて、少し脱線してしまっただが、戦闘に戻そう。

「スラッシュュー！」

「ワドスピーアー！」

マルスとランスはオタクコンの攻撃をかわし、剣と槍でハルにダメージを与えた。

続けて二人は追撃しようとするが、ハルはそれを見切り回避する。

「マーベラスコンベンションー！」

しかし、マルスはすぐさまハルを連続で斬りつけ、意識不明にして解放した。

「……ありがとう。ようやく、自由になれたよ」

「どういたしまして」

マルスがハルにお礼を言った後、ハルのスピリッツはスピリッツボールに飛んでいった。

ルカリオとシャドウは、ジェフと戦っていた。

ジェフの近代兵器の弾幕を掻い潜る中、ルカリオはシャドウから強い波導を感じた。

それは、この戦いを楽しんでいるような波導だった。

「シャドウ……先程から感じるお前の波導は一体……」

「それがどうした？ 解放しないのか？」

「……すまん、忘れてくれ」

「……」

ジェフのペンシルロケットをシャドウはギリギリでかわし、

ホーミングアタックを繰り返した後、スピッキクで追撃する。

ルカリオはジェフをりゆうのはどうで攻撃するが、ジェフはデیفエンスシャワーを使って防ぐ。

「じゃあ、いくよ」

「くっ！」

ジェフはエアガンを構えてルカリオに撃つ。

彼の攻撃はギリギリで命中し、ルカリオの体力を減らす。

「銃は僕も持っているぞ」

「わっ！」

シャドウはそう言って、拳銃でジェフを撃った。

単純な技だが、銃弾はジェフの頭部目掛けて正確に飛んでいき、大ダメージを与えた。

「うわっ！ 何するんだい！」

「そこが、お前の弱点だからだ」

「……じゃあ、ね」

「いくぞ」

ジェフとシャドウは同時に銃を撃つ。

銃弾は二人の頬を掠めたが、致命傷にはならなかった。

ルカリオは二人の攻撃が終わった後、はっけいを繰り出してジェフを吹っ飛ばす。

「いくよー！」

「はっ！」

「ふっ！」

ジェフはスーパーバズーカを取り出して発射する。

シャドウとルカリオはジャンプしてスーパーバズーカを回避した。

「うーん、ちよつと隙が大きかったかな？ それじゃ、ペンシルロケット20！」

ジェフはペンシルロケットを20本設置してルカリオに連続で発射する。

ルカリオはシールドで防ごうとするが、10発食らったところでシールドブレイクが発生し、

残りの10発を諸に受けてしまい意識不明になる。

「倒れたか。だが、お前ももうもたないだろう。これでとどめだ！カオススパア！」

シャドウは混沌の力を矢にしてジェフに投射する。

ジェフの腹部にそれが刺さると、「うっ」という声と共にジェフが倒れ、

スピリッツがベルのところに飛んでいった。

「まったく、お前が意識を失うとはどういう事だ？ ……仕方ない、運んでいこう」

シャドウはそう言って、倒れたルカリオを担ぎ、広場に戻っていった。

マリオとカービィは、ウイーボと戦っていた。

「おりやあー！」

「それー！」

「動きが遅すぎマス」

マリオとカービィの攻撃を見切り、力を溜めるウイーボ。

「させるかよー！」

「うわーっ！」

マリオはウイーボのスマッシュ攻撃を阻止しようとするが、手が滑って攻撃が当たらない。

カービィの攻撃も後一步のところでは届かず、

ウイーボはカービィに最大まで溜めたスマッシュ攻撃を放った。

「う……っ！」

「ワタクシの攻撃が、弾かれマシタ!？」

なんと、カービィがジャストシールドでウイーボのスマッシュ攻撃を防いだのだ。

「大丈夫……僕は負けないから！ ウイーボ、ちよつと待ってて！」

「おう！ アイスボール！」

「いっくよー！」

カービィはマリオが出したアイスボールを吸い込み、アイスをごピーした。

「こちこちといきー！」

「ウワー！」

アイスカービィは口から冷気を吐いてウイーボを凍らせる。

その隙にマリオは凍ったウイーボを掴み、ジャイアントスイングで投げ飛ばす。

氷は解けたが、すぐにアイスカービィはウイーボをこちこちといきで凍らせる。

そしてマリオがファイア掌底を放ち、ウイーボを氷ごと吹っ飛ばして戦闘不能にした。

「バタンキュー……」

「……」

ウイーボはしばらくの間、意識を失ったが、すぐに意識を取り戻して起き上がる。

「お、起きたな」

「アレ……ワタクシは何をしていたのでショウ……」

「ちよつと休んでから話そうね」

数分後、マリオはウイーボにルカリオが見つけた波導についての情報を聞いた。

「ウイーボ、この街でルカリオが2つの波導を見つけたらしいが、それ、知ってるか？」

「2つの波導、デスか？ それは、リユンヌサンとソレイユサンだと思います。」

確か、ここから西にいまシタ」

リユンヌ・ラサンテとソレイユ・ラサンテとは、体操を教えている夫妻の事だ。

あの時、二人は立ち木のポーズでキーラの光線を回避したはずだったが……。

「やっぱ、命中したのかよ……」

「でも大丈夫だよ、ソレ姉とリユン兄は僕達が助けるから。ウイボ君、待っててね」

「分かりませシタ。ワタクシは道場で待っております」

「待ってるよ、ウイーボ！」

こうして、街で見つかったスピリッツを粗方解放した一行は、広場に集合した。

「あら、ルカリオさんが意識不明になっているみたいですね。わたしが治してあげますわ」

アイシヤは、ジェフとの戦いで意識不明になったルカリオを癒しの力で回復する。

「あの波導はソレイユとリユンヌだって」

「うへえ、やっぱりこうなったのね。で、どこにいるのかしら？」

「ウィーボの道場から西……つまり、ここから北西にいるんだ。」

あいつらも身体を利用してると知ったらショックだろうな」

念のため注釈するが、マリオのこの言葉にはやましい意味は微塵もない。

スピリッツを入れるコピーボデーをキーラが利用するという意味である。

「ソレイユとリユンヌには誰が挑むの？」

「僕だ」

「僕が行くよ」

「私が参ろう」

「ボクもやるよ〜！」

「僕だよ」

「俺だ」

「よし、決まりね」

ソレイユとリユンヌには、シャドウ、マルス、ルカリオ、ランス、ドクター、

フォックスが挑む事にした。

「ここにいるようだな」

六人は、ソレイユとリユンヌがいる北西に向かっていった。

台座には、シャドウの言う通り、ソレイユとリユンヌが縛られていた。

「今、助けるからね！ それ！」

「ワーオ！ キョウモイツシヨニダイエツト！」

「ワーオ！ キョウモゲンキニキンニクビ！」

ソレイユとリユンヌは台座から解放されると、シャドウ、マルス、ルカリオ、ランス、

ドクター、フォックスに襲いかかってきた。

シャドウ、マルス、ランス、フォックスは武器を構え、ソレイユとリユンヌを迎え撃った。

「いくぞー！」

「頑張るぞー！」

16 ソレイユとリユンヌ

「とりやあつー！」

フオックスはソレイユを蹴り飛ばし、吹っ飛ばす。

「それ！」

ドクターはリユンヌにカプセルを投げるが、

リユンヌは緊急回避でドクターの背後に回り込み、投げ飛ばす。

「いたた、僕は身体があまり強くないんだ」

「ケンコウダイイチナノニ、ドウシテソクナコトライウンデスカ？」

イシャノフヨウジョウ、コマリマスネ」

キーラの呪縛の影響で、ソレイユとリユンヌは過剰に健康にこだわるとなっていた。

「過ぎたるは及ばざるがごとし。あまりこだわらない方がいいよ」

ドクターはソレイユが飛ばしたボールをスーパーシートで跳ね返す。

「はっ！」

「キヤー！」

「そこだ！」

「ウワー！」

ルカリオは足に波導を纏い、ソレイユを蹴る。

シャドウはリユンヌの攻撃を紙一重でかわし、スピッキクと拳銃で反撃する。

さらにシャドウは指を鳴らして空間を歪ませ、ソレイユにダメージを与えた。

「マーベラスコンビネーション！」

マルスは流れるような剣撃でリユンヌの防御を抜くように攻撃する。

そこにランスが槍を回して突く技、ぐるぐるスピアで追撃し、リユンヌを吹っ飛ばした。

ちなみにぐるぐるスピアは、スマブラ屋敷でデデデから教わった技である。

「イイウインドウデスネ」

「デモ、キーラサマノカゴヲエタワタシタチハムテキデス」

ソレイユとリユンヌは、傷つきながらも余裕で立っていた。

キーラの加護とリユンヌが言っているが、あれが二人を支えているものだろうか。

「キーラが力を与えてるの？」

「それなら……ファイアー！」

フォックスは身体に炎を纏い、リユンヌに体当たりする。

リユンヌは緊急回避で攻撃をかわし、ダンスのポーズで反撃する。

「うおおー！」

「ソコデスネー！」

「させない！」

マルスはリユンヌの攻撃に合わせてファルシオンで反撃した。

続けて、シャドウは走っているリユンヌの足に拳銃を撃ち、彼の足を止める。

「よし、今だ！ ボーンラッ……!?!」

ルカリオは骨を作ってリユンヌを攻撃しようとしたが、

すぐ傍にバナナの皮があった事を知らず、滑って転倒してしまっ
た。

「……つつ」

「大丈夫、ルカリオ!？」

「ああ、平気だ……つと」

ルカリオはすぐに立ち上がって構え直す。

ソレイユとリユンヌは、そんな彼を見てくすくすと笑っていた。

「二人とも、何がおかしい」

「アナタガコロブナンテ」

「メズラシイデスカラ」

「記憶まで利用しているとはな……。だが、これで私に火がついた事を忘れるな。

いくぞ、しんそくー！」

ルカリオは目にも留まらぬスピードでソレイユに近付き、殴りつけ

る。

「つるぎのまいからのインファイト！」

「ウワアアアアアア！」

「キヤアアアアアア！」

さらに、ルカリオは自身の攻撃力を大きく上げる技を使い、

ソレイユとリユンヌに近付いて二人を巻き込むように捨て身の攻撃をする。

インファイトは桁外れの威力を誇り、

つるぎのまいも相まってソレイユとリユンヌに大ダメージを与えた。

これにより、二人は瀕死の重傷を負い、倒れた。

「やった!？」

「……………いや」

しかし、瀕死のソレイユとリユンヌはゆっくりと起き上がる。

ソレイユとリユンヌの目は、ギラギラと赤く光っていた。

「ま、まだ立てるの!？」

「キーラサマノタメニ……………ワタシたちハマケマセン」

「スベテハキーラサマノタメニ」

「……………」

不気味なまでのキーラへの忠誠心に、マルスとルカリオは震えていた。

「ルカリオ、まだいけるかい?」

「……………ぐっ!」

「ルカリオ!？」

「インファイトの反動が来たようだ……………」

そう、インファイトは相手に大ダメージを与える代わりに体力を大きく消費し、

防御が落ちてしまう技なのだ。

「アラ、ルカリオサンハケンコウジヤナイデスネ」

「違うよ! 大技の反動が来ただけ! ワドスピアスロー!」

ランスはソレイユに向けて槍を投げる。

ソレイユはかわそうとしたが、槍はソレイユが動いたところに命中した。

「ヨクモ……い… ダンスノポーズ！」

「うおっ！」

「それ！」

怒ったソレイユはダンスのポーズでフォックスを攻撃する。

フォックスはブラスターでソレイユに反撃し、ドクターはリユンヌにカプセルを投げる。

「ドラゴンキラー！」

「キヤアアアアアアアアア！」

マルスは気合をファルシオンに込め、ソレイユを斬りつけた。

この一撃は流石のソレイユも耐え切れず、戦闘不能になった。

「ソレイユ！」

妻が倒れた事で軽いショックを受けるリユンヌ。

リユンヌはすぐに立ち直り、腹式呼吸で自身の体力を回復する。

「それで全快したつもりか？」

「傷は癒えても痛みは治らない。この辺で降伏しろ」

「ダレガ……コウフクラ……い！」

フォックスはリユンヌに降伏を迫るが、リユンヌは首を横に振った。

やれやれ、とフォックスは力を溜める。

「少し、痛い目に遭いたいようだな。これで、どうだ！ レッグショット!!」

「ウワアアアアア！」

フォックスは大きく踏み込んで飛び蹴りを放ち、リユンヌを戦闘不能にした。

「しばらく大人しくしてもらおうぞ」

シャドウはソレイユとリユンヌを見張っていた。

二人が万が一暴れた時のために、一人で取り押さえるためだ。すると、ソレイユとリユンヌが起き上がった。

二人はキーラの呪縛が解けており、瞳の色は元に戻っていた。

「ここは一体……?」

「私、どうしてここにいるんでしょうか」

「お前達は悪い夢を見ていたんだ」

フォックスはソレイユとリユンヌに柔らかい口調でそう言った。

「……悪い、夢、ですか?」

「ああ……話は、広場に戻ってからしよう」

こうして、シャドウ、ルカリオ、ランス、ドクター、フォックス、マルスは、

ソレイユとリユンヌの救出に成功し、広場に戻った。

カービィとベルは心配そうな表情をしていたが、無事な全員を見て表情が綻んだ。

「ソレイユとリユンヌは助かったのね」

「うん! ばっちり元に戻ったよ!」

「とても痛かったですが、みんなのおかげで助かりました」

「ありがとうございます」

ソレイユとリユンヌは、自由にしてくれたファイター達にお礼を言った。

「あの……もしよろしければ、私も一緒に同行させていただきませんが、よろしいですか?」

「もちろん、夫の私もご一緒させてもらいます」

「ねえ、ところでキミ達は誰?」

ランスはソレイユとリユンヌの顔を知らなかった。

ソレイユは申し訳なさそうに頭を下げた後、一呼吸置いて自己紹介に入った。

「申し遅れました。私はソレイユ・ラサンテと申します」

「私はリユンヌ・ラサンテと申します。妻と共にエクササイズを教えてくださいます」

「へー、ソレイユとリユンヌって夫婦だったんだ。ボクはランス、よろしくね」

「よろしくお願ひします」

ランスもラサンテ夫妻に自己紹介をし、お互いに仲間である事を認

識した。

カービー達がしばらく談笑した後、マリオは何かを思い出したようにこう言った。

「そういえば、次の目的地はどこなんだ？」

「次の目的地……か。むうん！」

ルカリオは波導を感じ取る姿勢を取り、精神を集中した。

「……溪流に私と同じ波導を感じる」

「私と同じ？ という事は、ポケモンか？」

ルカリオによれば、溪流からポケモンの波導を感じたらしい。

しかし、街から溪流は遠いため、どうすれば手っ取り早く行けるか考えていたところ、

シャドウがカオスエメラルドを取り出した。

「そっか！ シャド兄のカオスコントロールで！」

「ああ……。皆、僕の近くに來い」

「うん！」

自分以外の全員が傍に寄った事を確認したシャドウは、カオスエメラルドの力を解放した。

「カオス・コントロール！」

カオスエメラルドの力を使い、時空を操る力、カオスコントロール。それにより、全員の姿は一瞬にして街から消えた。

17 〽 溪流を渡る

一行はシャドウのカオスコントロールで街を後にし、ルカリオが波導を感じた溪流に着いた。

この溪流にも、キーラによってスピリッツ化した者達がたくさんいた。

ここに、ポケモンのファイターが捕まっているらしいが……。

「ポケモンって、これ？」

溪流の入り口では、大きな身体のポケモンが眠っていた。

大きな、とはいっても、身長はミュウツーより少し大きい程度なのだが、

体重が460kgもある重量級だ。

「いや、私が見つけたのはこれではない」

「一応、調べておくれ」

ベルが目の前にいるポケモンを能力で調べる。

「ゴンベが進化した、いねむりポケモンのカビゴンよ。確か、音楽で起こすんだっけ」

「音楽？　じゃあ僕が歌うねー！」

カービイが歌おうとすると、急いでランスが彼の口を塞いだ。

「むぐむぐ〜！」

「カービイには絶対に歌わせないで。間違いなく大惨事が起こるよ」

ランスが小声で皆に話す。

実は、カービイはとんでもなく音痴で、その破壊力はぺんぺん草すら生えず、

異なる世界の某ガキ大将や某桃髪の鳥人に匹敵する。

その危険性を知っているランスは、カービイに歌わせないようにしたのだ。

「むぐむぐむぐ〜！」

「……ランスが押さえている間に、少し乱暴だが、私が戦おう」

カビゴンはノーマルタイプなので、かくとうタイプの技が使えるルカリオがカビゴンと戦った。

「よし、終わったぞ」

ルカリオは無事にカビゴンを倒した。

カビゴンは相変わらず、ぐうぐう眠っていた。

「ごめんね、カビゴン。ちよつと寝てて……いや、こんな時にも寝てるのね」

ベルはぐうぐう眠っているカビゴンのスピリッツをスピリッツボールの中に入れた。

ランスは戦闘終了を確認した後、手を放し、カービイはようやく、ランスから解放される。

「な、何したんだよランス」

「だって、カービイが歌ったら大変な事になるから……」

「うくん、僕の歌ってそんなに危ないの？ マイク使ったらすつきりするのに」

((全然気付いてない……))

カービイは、自分が音痴である事を自覚していないのだった。

一行が再び歩いていくと、白銀の色合いのハリネズミがいた。

そのスピリッツは、シャドウには見覚えがあった。

「こいつは、シルバー・ザ・ヘッジホッグだ」

「知っているのか、シャドウ？」

「ああ、荒廃した未来からやって来たが、イブリース異変を解決した……というより、

無かった事になったからこいつの未来は荒廃していないだろう」

シャドウがイブリース異変について説明した。

メタ発言になるが、ここでは、無かった事になったイブリース異変はソニック、シャドウ、

シルバーのみ覚えているという設定である。

「よく知ってるな、俺も記憶にだけだがあるぜ。」

でも、今はそんな事はどうでもいい。身体が勝手に動くんだ。何とかしてくれ」

「僕が相手になろう」

「うお、危ねっ！」

そう言つて、シャドウは銃を抜いてシルバーに突き付けた。

凶器を見たシルバーは驚いて飛び退くが、すぐにシャドウのところに戻った。

「……いいな」

「わ、分かったよ」

「これにて一件落着ね」

『ありがとう』

ベルは、キーラの呪縛から解放したシルバーのスピリッツをスピリッツボールの中に入れた。

『で、シャドウと俺はここにいるけど、ソニックはどこにいるんだ？』
「魂を感知しているけど……それらしい魂は見つからないわ。」

もしかしたら、この世界にはいないのかも……」

『ちえ、せつかく三人集まると思つたのに。じゃ、俺は大人しくしてるぜ』

シルバーは残念がりながら、スピリッツボールの奥深くに入った。
果たして、ソニックはどこにいるのだろうか。

一行がそんな話をしながら橋を渡ると、赤いスカーフをつけた橙色の恐竜のスピリッツがいた。

「あ、私にそっくりですね。ボデイも私ですね」

「これはプレッシー、背中に乗って川を下る恐竜よ。」

あんとどういふ関係があるのかは、まだ分かっていないわ
ベルが恐竜のスピリッツについて説明する。

プレッシーは身体が大きいため、背中に乗る事ができる。

しかし、スピリッツ化しているため、今はプレッシーには乗れない。
「それでは、プレッシーさんの相手は」

「私達がしますね」

プレッシーには、ソレイユとリユンヌが挑む事にした。

「どうでしたか？」

「健康になりましたか？」

ソレイユとリユンヌの活躍により、プレッシーはスピリッツボールの中に入った。

「ところでベル君、そんなにスピリッツを入れて大丈夫なのかい？」
「大丈夫よ、いくらでもスピリッツは入るから」

ベルは、スピリッツボールは某猫型ロボットの某ポケットのよう
に、

異次元空間になっっているので問題はないとドクターに説明した。

こうして橋を渡り切って奥に進むと、行き止まりになった。

川は水が激しく流れていて、このまま進むと流されそうだ。

しかし、溪流の下にある小島には、台座に縛られたポケモンと、宙
に浮くスピリッツがいる。

ここに行くためには泳いでいかないといけないが、川の流れが激し
いためにそれができない。

どうするべきかとベルが考えていると、彼女の前にシャドウが立つ
た。

「飛び込むぞ」

「え、シャドウ、大丈夫なの？ あんた、水とか平気？」

「……僕をあいつと一緒にするな」

シャドウがベルを鋭い目で睨みつける。

彼は泳げないソニックと同一視されるのを嫌っているようだ。

「分かったわよ。じゃあシャドウ、あんたが最初に飛び込みなさい」
「ああ」

シャドウは迷わず、激しい流れの川に飛び込んだ。

そして、高い身体能力を生かし、すいすい川を泳いでいく。

その速度は、走っている時のソニックと何ら変わりがなかった。

「着いたぞ」

こうして、シャドウは無事に溪流の孤島に着いた。

「大丈夫かな？」

「じゃ、じゃあ、次はボクが行くよー」

そう言ってランスは槍を構え、ヘリコプターのように回転させた。
しばらく空を移動できる技、ワドコプターだ。

「これなら川に落ちないでいけるよ」

ランスはワドコプターで孤島を目指していく。

ふらつきながらも、ランスは空を飛び続けていた。

やがて、体力限界ギリギリのところ、ランスは孤島に着陸した。

「着いたあ」

「ランスの次は、僕だ！　ってうわあ！」

カービィもランスに続こうとしたが、足が滑って川に落ちてしま
う。

「おろぼろれるー！」

激しい流れに逆らえず、溺れて流されていくカービィ。

「はあ、はあ、疲れた〜」

カービィは何とか孤島に辿り着いたが、体力をかなり消費して
いた。

子供には、かなりの疲労だったようだ。

「……よし、次は俺だ」

マリオはそう言って、川に飛び込んだ。

自分の体力は良くも悪くも普通なので、疲れないように身体を動か
した。

結果、あまり体力を消耗しないで孤島に辿り着いた。

「では、次は私達ですわね！」

「そうですね、ソレイユ！」

続いて、ソレイユとリユンヌが川に飛び込む。

二人は伊達にエクササイズをしていないため、スムーズに泳ぐ事に
成功した。

ちなみに、その他メンバーの結果は、こうなった。

流された：ドクター、ベル、ヨツシー、アイシヤ、ルカリオ、りよ
う

泳いだ：ファルコン、フォックス、マルス、シーク

「ふう……着いたぜ」

最後にファルコンが孤島に着き、一行は全員、目的地に辿り着いた。

「ルカ兄、ここにポケモンがいるの？」

カービィの質問に頷き肯定するルカリオ。

その孤島に捕らえられていたのは、水の精霊イスナのスピリッツと

……。

「ピカチュウ！」

ねずみポケモン、ピカチュウだった。

スマブラ四天王の一角であり、第一期からいる最古参のメンバーだ。

ピカチュウをよく知っているマリオやカービィは、彼の姿を見て目を見開く。

「おい、大丈夫か！」

「ピカピカ！ 目を開けて！」

マリオとカービィは、ピカチュウに声を掛けるも、

ピカチュウは目を閉じたまま何も反応しない。

イスナのスピリッツも、うずくまっていた。

「……ちよつと離れて」

そう言っつて、りょうは皆を下がらせ、パチンコを取り出して構え、ピカチュウの台座に弾を放った。

すると、ピカチュウを拘束していた光の鎖が砕け、解放された。

同時に、キーラに操られたイスナとピカチュウが襲いかかってくる。

「待ってるよ、ピカチュウ」

「必ず、僕達が助けるよ！」

マリオ、カービィ、ファルコン、ヨッシー、フォックス、そしてりょうは、

ピカチュウとイスナを迎え撃つ体勢に入った。

188 ねずみポケモン・ピカチュウ

スマブラ四天王の一角、ピカチュウとの戦いが、始まった。

「10マンボルト……」

「うわあっ！」

ピカチュウは電撃をマリオに放った。

聖なる光を纏った電撃が命中すると、マリオの身体を包んで痺れさせる。

キーラの力により、強化されたのだろう。

「えいー！」

カービィはイスナにパンチするが、イスナは空を飛んで攻撃をかわす。

イスナはフォックスとファルコンの攻撃もかわした後、りょうの足を狙って攻撃する。

「わっと！」

その攻撃が命中したりようは転んでしまい、ピカチュウの攻撃を許してしまう。

「いたた！」

「危ないですよ」

「やめろ、ピカチュウ」

「グッ！」

ヨッシーとフォックスはピカチュウを蹴って吹っ飛ばす。

「今だ！ ファイア掌底!!」

マリオはピカチュウに近付き、炎を纏った掌底をピカチュウに当てようとした。

しかしピカチュウはマリオの攻撃をジャストシールドで完全に防御した。

「オマエタチヲクロス……」

キーラに操られたピカチュウは、マリオ達に殺意を向けていた。

これは、本来のピカチュウなら絶対にしない事だ。

「ピカチュウ……待ってるよ、絶対に助けてやるぜ」

マリオは、ぎゅつと握り拳を作った。

カービィ、フォックス、ファルコン、りょうも、

ピカチュウをキーラの呪縛から救いたいという意志を持っていた。

特に、同じスマブラ四天王のマリオとカービィは、その思いをより強めていた。

「目を覚ませ！ ピカチュウ！」

「ファルコンキック！」

マリオとファルコンはピカチュウを蹴ろうとするが、

イスナが二人の行く手を阻みピカチュウにダメージを与えられなかった。

「アイアンテール」

ピカチュウは鋼のように硬くした尾をファルコンに振るい、大きく吹っ飛ばす。

続けてカービィに電気を飛ばしたが、その電気はカービィが吸い込み、スパークをコピーした。

「スパークアロー！」

スパークカービィは電撃の矢をピカチュウに向けて飛ばす。

でんきタイプのピカチュウには効果は今一つで、麻痺もしなかったが、

一瞬だけ怯ませる事ができた。

おかげで隙ができたため、フォックスとファルコンは一気にピカチュウに突っ込んでいき、

キックでピカチュウにダメージを与えた。

「グオオオオ！」

「待ってるよ、悪い夢から覚ましてやるからな」

ピカチュウは他の操られたファイター同様、キーラの悪い夢を見ている。

しかも、ピカチュウはスマブラ四天王の一角。

彼を助け出せば、キーラ軍に大打撃を与える事ができるのだ。

「えい！」

「エレキボール」

「うわああー！」

りょうはパチンコでピカチュウを狙い撃ちする。

攻撃はギリギリで命中し、ピカチュウにダメージを与えたが、彼がエレキボールで反撃し、

りょうのパチンコより大きいダメージを与えた。

「スベテハキーラサマノタメニ。アラタナルソウセイノタメニ」

「そんなの、ピカピカが言う事じゃないよ！ 思い出して、ピカピカ！」

「そうだ！ お前は、世界を滅ぼそうとする奴らの味方はしないだろ！？」

「ウ……グ……グググ……」

マリオとカービィは、ピカチュウに呼びかける。

同じスマブラ四天王の二人ならば、効果があると思っただからだ。

ピカチュウは頭を押さえて蹲り、戦意を喪失した。

「よし、隙あり！ アイスボール！」

マリオはその隙にピカチュウにアイスボールを投げて凍らせる。

そして流れるようにイスナを投げ、アイスボールで凍らせてとどめを刺した。

「ウオオオオオオオオオ！」

「やっぱり駄目か……！」

「うわあああああ！」

しかし、ピカチュウはすぐに戦意を取り戻し、ヨッシーに突っ込んで投げ飛ばす。

キーラの力により筋力も強化されたのか、ヨッシーは地面に思い切り叩きつけられた。

「ピカチュウさくん、もうそれくらいにしてくださいよ。ほらほら、平和に平和に〜」

「オレヲバカニシテイルノカ……？」

ヨッシーの言葉が気に障ったらしく、ピカチュウは彼の首を掴んで持ち上げ、

彼に10万ボルトを放った。

「うわああああああああ!!」

ピカチュウはヨツシーに電撃を浴びせた後、アイアンテールで吹っ飛ばした。

吹っ飛ばすヨツシーの身体をマリオは両手で受け止める。

「……お疲れさん。後は、俺達がやるぜ」

「ありがとうございます……マリオさん」

マリオは、傷ついたヨツシーをゆっくりと地面に横たわらせた。

そして、ピカチュウの方に振り向いてこう言った。

「お前は、操り人形なんかじゃない。立派なスマッシュブラザーだ」

「二……ン……ギョ……ウ……」

「分かっているでしょ？ 君が、キーラの味方になんかなりたくないって」

「ソ……ンナ、ワケ……ナ、イ……」

マリオとカービィの説得に、ピカチュウは首を横に振る。

それでも、二人は諦めずに説得する。

「分かってくれよ、ピカチュウ。俺達はスマブラ四天王なんだ。」

一緒に乱闘して、一緒に生活して、一緒に競い合った仲間じゃないか」

「ピカピカ……こんなのって、ないよ……。お願い、ピカピカ、元に戻って……!」

カービィの目から、一筋の涙がこぼれ落ちる。

それが地面に雫となって落ちた途端、ピカチュウの中で何かが弾けた。

「ウ……グ……グアアアアアアアアアア!!」

「! 眩しいっ!!」

「この光は……!!」

突然、ピカチュウの身体が眩く光り出し、その場にいた全員が目を覆った。

ヘルメットを被っているファルコンも、その光に耐えられずに両手で顔を隠した。

その光は、キーラのものとは異なる、優しく温かい光だった。

そして、その光が消えると、ピカチュウの殺気が消滅した。

今ここに、ピカチュウとの戦いが終わった。

19 森の中で

「……う……」

しばらく気絶していたピカチュウだったが、数分後に意識を取り戻して起き上がる。

「……大丈夫か？」

「……ピカピカ？」

マリオとカービイが、倒れているピカチュウの顔を見下ろす。

ピカチュウの目には霞がかかっている、二人の姿は、はつきりと見えていない。

「……」

ピカチュウは瞬きし、視界をはつきりさせる。

「その、声は……マリオに、カービイ、か？」

「！ ピカチュウ……目が覚めたんだな？」

「よかった……元に戻ったんだね、ピカピカ」

「ん、ん……そう、だな」

ピカチュウはよっこいせ、と立ち上がる。

すると、ピカチュウの身体がぐらりとよろめいた。

「うわつとと」

「危ねっ！」

倒れそうになるピカチュウを、マリオが慌てて支える。

「……あれ。ここは……森……なのか？」

「気付いたのか？ ピカチュウ」

「あ、ああ……」

ピカチュウは頭をぶんぶん振って落ち着きを取り戻した後、マリオ達に事情を話そうとした。

「ちよつと待ってくれ、みんなを呼んでくる」

「分かった」

マリオは、他のスマブラメンバーをピカチュウがいるところを集めた。

それを確認したピカチュウは、改めて、全員に事情を話した。

「俺はあの時、強い光の中に閉じ込められていた。思い通りに身体が動かせず、もどかしかった。だが、カービーが流してくれた涙が、その光に穴を開けてくれた。」

そこから、俺は脱出して、お前達の顔を見た」

ピカチュウは、他の助かったファイターよりも詳しく内容を覚えていた。

キーラの光は、ピカチュウにとって眩しかったようだ。

今回はピカチュウを助けた闇に感謝すべきだろう。

「あんな眩しい光にやられたら目が見えなくなるぜ」

「確かに……」

「……」

ピカチュウは、やれやれとした様子のシャドウをじつと見ていた。

「僕の顔に何かついてるのか？」

「俺を助けようとしたソニックを思い出しちゃって……」

キーラ軍が襲撃したあの日、ソニックは、

自分より遅いピカチュウを助けるためにスピードを落とし、彼に手を伸ばした。

しかし、それよりも早く光線はソニックとピカチュウに命中し、

二匹は光の呪縛を受けてしまった。

その事が今もピカチュウの中に残っており、

似た容姿のシャドウに複雑な感情を抱いてしまうのだ。

「……なるほど。だが、僕はあいつではない。思い出す暇があるなら、前を向いていけ。」

それが、僕がお前に言える言葉だ」

「ありがとう……シャドウ……」

「別に、礼を言ったつもりはない」

一行は森を出る途中で、スパイキーを解放した。

また、その道中で、コーラスメン、ピストン・ホンダー、タツプマンも解放していく。

スピリッツを解放していく途中で、霧が晴れ、緑のスイッチが見えた。

「これは、最後のスイッチかしら？」

「そうっばいですわね……赤、青と押しましたから、次は緑と相場が決まっておりますわ」

しかし、緑のスイッチは遠くにあり、ここからは遠くて先に進めない。

一行はそのスイッチを押すべく、西の方に向かって歩いていった。

「もしかして、ここにスイッチがあるの？」

「ああ、僕の勘によればな」

「……シャドウ、お前ベルの影響を受けてないか？」

マリオがシャドウを心配しつつ、スイッチがある森の中に入ろうとした。

しかし、森の入り口には、サングラスをかけ、スカーフを首に巻いたモグラがいた。

「これはモグラ〜ニヤ！ オリマーやケンと同じく、妻子持ちよ。子供は七匹いるんだって！」

ベルが目の前スピリッツ、モグラ〜ニヤについて説明する。

彼は、ドンキーコングのボディに宿っていた。

「ネクタイがスカーフの代わりなのか？」

「……そうみたいね。こいつは特筆すべき力はない。真っ向勝負だから、私が挑むわ！」

そう言って、ベルはモグラ〜ニヤに戦いを挑んだ。

「よし、モグラ〜ニヤのスピリッツを解放したわ」

モグラ〜ニヤに勝利したベルは、彼のスピリッツをスピリッツボールの中に入れた。

「箱に入れている時点で、解放とは……」

「キーラに捕まらないように一時的に入れてるのよ。戦いが終わったら、ちゃんと解放するから」

ベルはピカチュウの指摘を説明で返した。

すると、ピカチュウが緑のスイッチを発見する。

「おい、見ろ！ あれがスイッチだ！」

「ホントだ！ でも、スピリッツが邪魔をしてるよ」

緑のスイッチの前に立ち塞がっていたのは、
進化前のフシギソウのボディに宿っているフシギバナのスピリツ
ツだった。

「地面を揺らすわけ……あるよな」

「今は、ね」

フシギバナは赤い瞳を一行に向ける。

シャドウは、フシギバナと同じ赤い瞳でフシギバナを睨み返した。

「僕が、こいつの相手をしてもいいか？」

「ええ、頼むわよ！」

「いいだろう。究極の力、見せてやろう！」

シャドウとフシギバナの戦いが始まった。

「バナバーナー！」

フシギバナはシャドウをつるのムチで縛り、タネマシンガンで攻撃
する。

シャドウはダメージを受けながらも、拳銃を撃ってフシギバナに穴
を開ける。

いずれもギリギリの攻防で、当たるか当たらないか、周りはハラハ
ラしていた。

（大丈夫ですわ、わたしは信じています）

アイシヤは、シャドウが戦う姿をじつと見ていた。

それは、彼に恋慕しているような眼で。

もちろん、シャドウは全く気にせず、フシギバナと戦っている。

「バナー！」

フシギバナはねむりごなをシャドウに降らせて眠らせようとする
が、

シャドウはすぐに振り払いフシギバナを蹴り飛ばし距離を取る。

「僕にそんな小細工は通用しない。とどめを刺す！ カオスマジック
！」

シャドウは指を鳴らし、フシギバナを混沌の渦に巻き込んで大ダ
メージを与えた。

その結果、フシギバナは戦闘不能になり、フシギソウのボディも消

失した。

「解放完了!」

「これでいいのだ」

フシギバナを解放した事で、緑のスイッチに行くための道が開けた。

マリオが緑のスイッチを押すと、最後のバリアが消える音がした。

「よし、これであそこに行けるね!」

「待ちなさい、まだ森のスピリッツは解放されていませんわ」

目的を果たして森を出ようとすると、アイシヤが一行を引き留める。

ベルが辺りをきよろきよろと見渡していると、確かにあちこちにスピリッツが浮いている。

「これを解放するのか?」

「ええ、そうですね。ベルさんは、キーラに囚われた魂を解放したいのでしょう?」

「そ、そうだけど……」

「お願いしますわね♪」

アイシヤがベルに満面の笑みを浮かべている。

だが、その目には、ある強い気持ちが宿っていた。

「……あんたがそう言うなら」

「それに、他のファイターも捕まっている可能性もありますしね」

アイシヤの一言で、一行は森の中に入った。

まず、一行はルキナのボディに宿る、軍帽を被り黒い軍服を着た人物のスピリッツに遭遇する。

「おや、私の道を阻むのかい?」

その人物の傍には、パルテナのボディに宿る、

紫の服を着た青紫のグラデーションがかかった長髪の女性が立っている。

彼女の目は閉じていて、服装には青い炎を思わせる装飾がある。

ベルは、そのスピリッツの詳細を能力で説明した。

「この人はスペルビア帝国の特別執権官、メレフ・ラハット。」

彼女が契約しているブレイドは、帝国最強のカグツチよ」

「……彼女？」

「あら、メレフはれっきとした女性よ？」

マリオは、メレフの全身を見ていた。

確かに、メレフの声は男性的だが、体つきはやはり、女性らしかった。

女性のルキナのボディに宿っているのも頷ける。

「メレフ様、敵は私が排除いたします」

「少し違うね。正確に言うと『私達』さ」

「メレフ、僕達は君とカグツチを助けたいんだ。だから、ここを通してくれないか」

マルスはメレフを説得し、戦わずにスピリッツボールに入れさせようとした。

しかしメレフとカグツチは首を横に振った。

「その質問の答えは、NOだ。何故なら、あの女にここを通すなど言われているからね」

メレフが言う「あの女」とは、自身の肉体を奪ったキーラの事だろう。

「……キーラに操られているんじゃない、説得は通じなさそうだな」

「やはり、戦うしかないのか？」

「戦うというのであれば、手加減はしないよ。私とカグツチの連携、君達に破れるかな!？」

そう言つて、メレフは二振りの蛇腹剣を取った。

アイシャ、カービー、フォックス、マルス、ソレイユ、リユンヌは、

メレフをキーラから解放するべく、彼女と戦った。

「参ります」

「ずおおお！」

カービーはカグツチが飛ばした炎を吸い込み、ファイアをコピーする。

「火ふきこうげきー！」

ファイアカービーは口から火を吹いてメレフを攻撃する。

「君の炎は熱いね。でも、私のカグツチの炎はもつと熱いよ」

メレフはカグツチの力を借りて双剣を振り、周囲を焼き尽くす。

「うわああああ!」

「熱いですね」

「わたしが何とかしますわ、ティータイム!」

アイシヤは即席で紅茶を振る舞い、ダメージを受けた全員の体力を回復する。

「君は実に献身的だね」

「あ、ありがとうございますわ……」

メレフに褒められて、アイシヤは照れる。

繰り返すが、メレフはれっきとした女性である。

「シールドブレイカー!」

「それっ!」

「ダンスのポーズ!」

マルスはファルシオンに力を込めてメレフを突く。

彼女がマルスの一撃を受けて怯んだ後、ソレイユがバレーボールをメレフにぶつけ、

リユンヌが英雄のポーズでメレフを吹っ飛ばす。

メレフはすぐに体勢を整えて双剣を構え直し、奥義の構えを取った。

「参の型でいくぞ、カグツチ! ハアッ! シラヌイ!!!」

すると、無数の青い焰が現れ、弾幕のように六人を追い詰めていく。

「かわすぞ!」

「うん!」

六人は何とか、カグツチが放った青い焰を全てかわした。

青い焰が地面に当たると、そこが焼き尽くされた。

「うわっ……」

「当たったら丸焼きになるところだったな」

「狐の丸焼き……」

カービィはフォックスを変な目で見ると

「何がおかしい」

「……何でもないよ」

「おっと、油断大敵だよ。焔火！」

メレフはカービィとフォックスが話している隙に青い焔を放った。
「うわあー！」

「油断大敵だとあいつが言っただろう」

「ごめんごめん……でも、これで目が覚めたよ。ありがとう、フォックス君！
かいてん火ふき！」

カービィは回転しながらメレフに火を吹く。

「さらにいくぞ、ファイヤー！」

フォックスは全身に炎を纏い、メレフに体当たりを繰り返す。

「これが俺達の炎だ！メレフ、参ったか！」

フォックスが自信たっぷりと言う。

カグツチは目を閉じたままだったが、メレフは、ふふつと微笑んで口を開いた。

「……よくやったね。私達の負けだ」

「メレフ様……」

「心配するな、少し休むだけだ。さあ、私とカグツチの魂を解放してくれないか」

「魂の解放なら、私にお任せ！」

ベルはスピリッツボールを開け、メレフとカグツチにそれを見せると、

二人のスピリッツはボデイから抜け、スピリッツボールの中に入った。

同時に、ルキナとパルテナのボデイが崩壊する。

「……」

崩壊していくルキナのボデイを見て、マルスが憂いの表情を浮かべる。

「……今頃、ルキナはどうしているのかな」

自分の子孫は今、どうなっているのだろうか。

キーラの襲撃で戦えるファイターがほぼ全滅し、

しかも今まで戦ってきたファイターが全員操られている以上、無事

ではない事は確かだが、

彼女がどこにいるのかをマルスは知りたがっていた。

「よし、じゃあ私が探してあげるわ!」

「ありがとう、ベル」

ベルはそんな彼の期待に応えるべく、魂を感知する術でルキナを探そうとした。

しかし、笑顔はすぐに苦い表情に変わる。

「……駄目。ルキナの反応がないわ」

「そうか……仕方ないね」

落胆するマルスの肩に手を置くベル。

「ベル、どうしたんだい?」

「あなたは本当に優しいのね。こんな時でも他人を心配するなんて」

「……彼女が母体を使われて苦しんでいるとなると、つい、同じ気持ちになってしまつて……」

「ふふ、あなたは本当にいい人だわ。」

マルス、あなたは腹黒くないし、ナルシストでもないし、脳筋でもないわよね?」

「当たり前さ。僕をそういう風に捉えている人は、本人の前で言うのは悪いけど、

頭がおかしい人、だと思ふな」

ベルの言葉にマルスはそう返した。

彼の表情に嘘偽りはなく、ベルは一安心した。

「じゃ、残りのスピリッツを助けよう!」

「ええ!」

一行は、敵に見つからないように、茂みの中に身を隠しながら森を歩いていく。

その道中で蜘蛛のスクイッターと森林伐採ロボットのスラツシユマンを解放し、

森の奥まで進むと、赤いネクタイを付けたゴリラが、台座に縛られていた。

「ドンキー……」

それは、ジャングルの王者ドンキーコングだった。

マリオは彼を解放するべく、彼が縛られている台座に触れると、自由になったドンキーがマリオ達に襲い掛かって来た。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

ドンキーの両目は真つ赤に染まっていて、見境なく目の前の敵を襲う狂戦士と化していた。

今のドンキーは、操られて本能のままに動いているのだ。

「よし、ちよつと痛いのが、覚悟してもらおうぞ!」

「私達があなたを助けますよ!」

「私もソレイユの夫として戦います」

「今、助けてあげるね!」

「究極生命体たるこの僕が相手になってやろう」

「さあ、行くわよ!」

マリオ、カービィ、シャドウ、ベル、ソレイユ、リユンヌは、

暴れるドンキーを止めるべく彼との戦いに挑んだ。

20 〽 ジャングルの王者

ジャングルの王者、ドンキーコングとの戦いが始まった。

「えい！」

「ふっ！」

カービィとシャドウが前に出てドンキーを蹴る。

ドンキーは二人の攻撃をシールドで防ぎ、ダメージには至らなかった。

「せえい！」

ベルは思いつきり大鎌をドンキーに振り下ろす。

だが、攻撃は大振りだったため、ドンキーは転がって攻撃を回避した。

「ウオオ！」

「おっと」

リユンヌはドンキーにフェイントをかけ隙を作る。

マリオはその隙にファイアボールでドンキーの皮膚に火傷を負わせた。

「アヂ、アヂ、アチチチチー！」

ドンキーは熱さに悶えてやたらめつたらと腕を振り回す。

この攻撃を食らえば、彼のさらに強化されたパワーのためにひとたまりもないだろう。

「はっ！」

六人はすぐに飛び上がってドンキーの攻撃をかわす。

ドンキーは腕を振り回したせいでバランスを崩し、前のめりに倒れた。

「ウ……イテエ……」

「カオススピア！」

シャドウは倒れたドンキーにたくさん光の矢を放った。

矢はドンキーの身体に全て命中し、彼の体力を大きく減らした。

「それ、やつ、健康にいいですよ！」

「ヨガができるからといって、腕は伸びませんし、火も吹きませんよ」

ソレイユは連続してヨガのポーズを繰り返して、ドンキーの攻撃をか
わしながら彼を攻撃する。

ベルは魔法陣を設置してドンキーを足止めし、
その隙にマリオはドンキーをファイア掌底で吹っ飛ばした。

吹っ飛んだ先にはカービイがいて、カービイはドンキーを吸い込
んでコピーした。

「いっくぞー！ ジャイアントパンチ！」

「ウオオオツ」

「うわあつ！」

ドンキーをコピーしたカービイは、腕を振り回してドンキーにパン
チしようとしたが、

ドンキーはカービイに軽く触れて吹っ飛ばす。

カービイは地面に顔を大きく叩きつけられ、大きなダメージを受け
てしまった。

彼の体重が軽いのもそうだったが、

それ以上にドンキーの腕力がキラーによって強化されているのが
その理由だ。

「ドン……キー……」

カービイは、ボロボロになりながらも、ゆっくりと立ち上がった。

彼の眼は、キツとドンキーを睨みつけている。

「……僕は、君に戻ってきてほしいんだ」

「グルルル……」

「……君が食べたいものは何？」

カービイはドンキーに好物を聞いたです。

もし「バナナ」と答えれば、ドンキーの心が残っているという証で
あるが……。

「アアアアアア……。オマエノ、ニク……」

「……駄目だ！」

それを知ったカービイの表情が凍り付き、仕方なくドンキーを気絶
させようとした。

しかし、ドンキーの口から洩れた言葉は、その場にあいた全員の表

情を変えた。

「……タベタク、ナイ……」

「ドンキー！」

そう、ドンキーはキーラに操られながら、ギリギリで心を保っているのだ。

とはいえ、本能のまま、こちら側に敵対している事は変わらないため、

その心を引き出せるかが勝負となる。

「大丈夫だよ、ドンキー。僕達が助けてあげるから。さあ、いくよ、マリおじちゃん！」

シャド兄！ ベルベル！ ソレ姉！ リュン兄！

「ああ！」

「「ええ！」」

カービイの号令で、マリオ、シャドウ、ベル、ソレイユ、リュンヌの士気が一気に上がった。

「お願いね！」

「ああ。カオスマジック」

シャドウはまず、暴れるドンキーの周囲に混沌の力を張り巡らせる。

「動くなよ。動いたら、こいつがお前を食らう」

「ウググググ……ウオオオオオオ！」

ドンキーは本能のままにシャドウに襲い掛かった。

すると、混沌の力がシャドウを守るようにドンキーを包み込み、彼の身体を蝕んでいく。

「動くなと言ったはずだぞ？」

「ウウウウウ……」

「「アーム&レッグレイズ！」」

ソレイユとリュンヌがダメージを受け続けるドンキーに右手と左足を勢いよく突き出して攻撃する。

ドンキーは暴れてソレイユとリュンヌをパンチで吹っ飛ばした。

「うわあああああ！」

「きやあああああー！」

「よし、行くぞ！　どりやあああああー！」

マリオはドンキーの足を掴み、思いつきりベルに投げ飛ばした。

「いくわよ、アツプリーパー！」

ベルは鎌を強く振り上げ、ドンキーを上に乗せ飛ばす。

彼が地面に叩きつけられた時、カービィは既に力を最大まで溜めていた。

「お願い……ドンキー、元に戻って！　ジャイアント……パンチ!!」

「グオオオオオオオオオオオオ！」

そして、カービィが渾身の力を込めたジャイアントパンチを繰り出すと、

ドンキーは叫び声を上げて倒れ、彼を包んでいた光が消え去った。

今ここに、操られたドンキーとの戦いが終わった。

「……う……」

「ドンキー……起きた？」

「……うお……お……」

ドンキーは瞬きしながら、ゆっくりと起き上がり、マリオ達の顔を見上げる。

キーラから解放されたドンキーは、まだ虚ろな表情をしていた。

もちろん、マリオと戦っていた時の事は、全く覚えていないだろう。

「……お？　オレは、何をしていたんだ……？」

「安心しなさい、悪い夢を見ていただけだよ。あんたは、何も悪くないわ。」

私達が夢から覚ましてあげたのよ」

「悪い……夢……？　う、うおおおおおお!!」

ドンキーはぼんやりとしていたが、しばらくして、大声を上げる。

「きやー！　な、何よ、ドンキーー！」

「バナナ！　バナナはどこだあ！　バナナバナナ！」

「……撃たれたくなければ大人しくしろ」

「ウホー！」

周囲にバナナがない事を知り、暴れ回ろうとしたドンキーをシャド

ウが銃を向けて止める。

それを見たマリオとカービィは、やっぱりいつものドンキーだな、
と思っただとか。

「ドンキー、戻ってきてくれてよかったな」

「やったね！ 凄いね」

「ウホ！」

マリオとカービィが喜んでいる中で、ドンキーは頭をぼりぼりと掻く。

「んで、オレはどうすればいいんだ？」

「とりあえず、俺達と一緒にいこうぜ。キララって奴を、ぶっ潰すため
にな」

(何気にあなた、物騒な事を言いますね……)

ソレイユは、ドンキーに手を差し伸べるマリオに苦笑していた。

それでも、ドンキーはマリオの手をぎゅっと握り締め、満面の笑みを
浮かべてこう言った。

「……分かったぜ！」

こうして、希望の星に、ドンキーコングという新たな仲間が参戦し
たのだった。

21 森のバナナにご用心

ジャングルの王者、ドンキーコングをキーラから解放した一行。だが、ドンキーは不機嫌そうな表情をしていた。

「腹、減った……」

ドンキーは空腹で腹を押さえていた。

腹の虫も、彼の中でぐきゅるると鳴っていた。

「バナナ、食べせろ……。バナナ、バナナ……」

「……バナナ、ねえ……。森の中になら、あるんじゃないかしら？」

「おお！ じゃあ、行かせてくれ！」

「いいわよ。シャドウ、お願いね」

「……そんな目的で、この力を使うのか？」

シャドウは、バナナを食べたいというだけでカオスコントロールを使うのか、

と訝しい表情になる。

「だってオレ、腹減ったんだもん！ バナナを食いたいんだよお！」

「ドンキーコング……お前の気持ちは分かる。

だが、お前に説明をしていなかったが、

カオスコントロールは流石の僕でもそう易々と使える力ではない。

空間を転移するのはかなりのエネルギーを使うから、

一度使った場合、エネルギーの補給が必要になるぞ」

「……そっか。我儘言っつてごめんよ。オレ、自分で森に行つてバナナを食つてくる」

(よかった)

シャドウに説得されたドンキーは、自分の足で森に行くこと決めた。

流石のドンキーも、物分かりが良かったようでマリオは安心した。

「んじや、森までの道、案内してくれよ」

「はい」

一行はベルを先頭に、森へ行くための道を歩いていった。

途中で何度か道に迷ったものの、無事に一行は再び森に辿り着く事ができた。

「わ、このちっちゃい生き物は何？」

森の入り口に入ると、頭に葉っぱが生えた赤い身体の生き物がいた。

ランスはそれを、じっと見つめている。

「これは、赤ピクミンね。オリマーやアルフが使うピクミンの一匹で、火に強いわ」

「じゃあ、この子達の相手はボクがするね！」

「私もよ！」

赤ピクミンには、ベル、シーク、りょう、ドクター、ランス、リユンヌが挑んだ。

「すばしっこいですね、この赤ピクミン」

「いや、小さいだけなのよね、こいつ」

赤ピクミンは身体の小ささから、リユンヌとベルの攻撃が当たらない。

りょうもスコップで攻撃するが、赤ピクミンには当たらない。

「……そこだね！」

ドクターはカプセルを赤ピクミン目掛けて投げる。

それが上手く命中すると、赤ピクミンは一撃で倒れた。

「か弱いわね」

「うん、弱かったね……」

必殺技一発で倒れた赤ピクミンを見て、ドクターとベルは少しだが哀れんだ。

「わわっ！ 近付くなあ！」

ランスが自分に張り付いた赤ピクミンを振り払うと、その赤ピクミンも地面に落ちて倒れた。

「……あれ、また死んじゃったみたい」

「本当にピクミンってか弱い生き物なのね」

「それを上手く使いこなせるオリマーって、ホントに凄いよね。早く探さなきゃ」

そのオリマーと出会うのはもう少し先の話である。

その間に、ベルは三匹目の赤ピクミンを鎌で斬りつけ、

ランスが槍で周囲を薙ぎ払って残った赤ピクミンを倒した。

「赤ピクミンは楽に倒せたようだな」

「腹が減って力が出ない……」

「我慢しろ、今バナナを探してる最中だから」

お腹を押さえているドンキーをマリオは宥める。

この様子だと、ドンキーがバナナを見たら暴走するだろうな……とマリオは察した。

「……」

「どうした、ベル」

ベルは額に指を当てて、精神を集中していた。

この森の中にいるスピリッツを探すためだ。

「こつちに、スピリッツを見つけた！

フォックス、ヨッシー、ソレイユ、リユンヌ、ファルコン、一緒に来てー！」

「な、なんですか〜？」

「あんた達はしばらくそこで待ってて、今、スピリッツを解放してくれるから」

「いつてらっしゃ〜い」

カービイに見送られ、ベル達はスピリッツがある場所に飛んでいった。

「あらよつと！ ほいつと！」

ベルが見つけたスピリッツは、黄色い帽子と服を着用した人型の生き物だった。

生き物は林檎を玉乗りの玉代わりに乗っており、爆弾を片手に持っている。

「こいつはポピーブラザーズJr. ね。爆弾を投げて攻撃してくるわ」

「爆弾は意外に攻撃範囲が広いからな、気を付けて避けなければならん」

「とりあえず解放しますか！」

そう言っつてベルは、大鎌を構えてポピーブラザーズJr. の解放に

臨んだ。

ヨッシー、フォックス、ファルコン、ソレイユ、リユンヌも、彼女に続いて戦闘態勢を取った。

「ばたんきゅ〜」

「よし、捕獲完了!」

数分後、無事にポピーブラザーズJr.のスピリッツはスピリッツボールの中に入った。

「それにしてもベル、どうして急にスピリッツを解放したがつたんだ?」

「んー、だって私、死神だし。キーラをぎゃふんと言わせたいもの」
「……」

ベルはそう言つて、ぺろつと舌を出した。

軽い口調で、しかも笑顔のベルだったが、ファルコンには分かっていた。

彼女の目が全く笑っていないなかつた事を……。

「……よし、とりあえずスピリッツを解放しようぜ」

「……ああ」

ベル一行は、チュチュ、カリプソ、テリー、デクリンク、エリーのスピリッツを解放し、

森に戻ってきた。

しかし、彼女達が戻ってきた時、ドンキーの顔は青ざめていた。

「ちよ、どうしたんだドンキー!」

「ハ……ラ、ヘッ……タ……バ、ナナ、クワ、セ、ロ……」

最早、ドンキーの空腹は限界に達していた。

マリオは、流石にこれには危機感を感じ、急いで彼をバナナがある場所に連れていこうとした。

「おい、バナナがある場所はどこなんだ。このままじゃ、ドンキーが大変な事になっちゃう」

「バナナ……バナナ……あ!」

フォックスは、バナナの匂いを嗅いで、バナナがある方を向いた。

「ドンキー! バナナは俺が向いた方にあ……」

フオックスがドンキーに報告をした瞬間、ドンキーはその方向に一目散に向かっていた。

「ドンキーって、本当にバナナに目がないのね」

「……ああ。追いかけるぞ」

マリオ達は、ドンキーを追いかけていった。

「うおおおおお！ バナナだああああああ!!」

ドンキーの目の前には、バナナが広がっていた。

見渡す限り、全てがバナナ、バナナ、バナナ。

それは、空腹のドンキーにとっては、まさに天国であった。

「ガツガツ！ むしゃむしゃ！ ガツガツ！ ガツガツ！ むしゃむしゃ！ ガツガツ！」

ドンキーは夢中で、空腹の分だけ望むままにバナナを食べ続けていた。

彼の頭上に、畏が迫っているとも知らずに。

「つたく、ドンキーの奴、どこに行っちゃった？」

「俺が匂いを辿ってるから、その通りについていけ」

ピカチュウは苛々しながらドンキーを探していた。

フオックスの嗅覚を頼りに、ドンキーが飛んでいった場所に進んでいく。

「気をつけろ 甘いバナナと 暗い敵」

シャドウは、敵に遭遇してもいつでも攻撃できるように、拳銃を抜いていた。

「うわ、シャド兄、こっわい」

「僕からは離れるなよ。特に、子供はな」

「う、うん」

子供とは、カービィ、りょう、ランスの事を指すだろう。

三人はシャドウに言われた通り、彼の後ろにぴったりついていった。

「いたわー！」

そして数分後、一行はついにドンキーを発見する。

しかし、彼は光の鎖で縛られていて、それを黄色い球体が爛々と光

る赤い瞳で見ている。

彼の傍には、小人、少女、ゴリラのスピリッツが浮遊している。

「助けてくれー!」

「シャベルンジャナイヨ……キミハコレカラ、ボクニタベラレルンダカラネ。」

コンナミエミエノワナニヒツカカルナンテ、キミハジツニバカダネエ」

「うう……せつかくバナナを食べたのに、こんなものつてないぜ……」

「……シャドウ、気付かれないように撃つて」

「ああ……。そこだ!」

シャドウは拳銃を構え、ドンキーを縛っている鎖目掛けて撃った。銃弾が光の鎖に命中すると、光の鎖は碎け散り、ドンキーは自由になった。

同時に、マリオ、カービィ、ピカチュウ、シャドウ、

アイシャを先頭に一行が黄色い球体の前に飛び出す。

「パックマン……お前もキーラに操られてるのか」

「へエ、ソレガドウシタノ? キーラサマハボクノゴシユジンサマダヨ?」

黄色い球体——パックマンはケタケタ笑っている。

スピリッツはどんよりとした暗い目をマリオ達に向けている。

彼らもまた、キーラに操られた被害者なのだろう。

「人を罠で誘うなんて……許せませんわ!」

アイシャは操られたパックマンに対し怒りを露わにしている。

彼女は懐から包丁を取り出し、彼に向けていた。

「罪を憎んで人を憎まず。お前を縛る鎖は、僕が解き放つてやる」

「あれは罠だったのか! 許さねー!」

「待ってて、パクパク! 僕が助けてあげるから!」

「……ふ、『黄色い伝説』はどんな強さなのか?」

「パックマン、お前をキーラから解放してやる!」

マリオ、ドンキー、カービィ、ピカチュウ、シャドウ、アイシャは、操られたパックマンとスピリッツに戦いを挑んだ。

22 黄色い伝説・パックマン

操られたパックマンとスピリッツとの戦いが始まった。

「……」

パックマンは身を守り、相手の出方を伺っている。

マリオは白いゴリラのラビッツコングに近付いて拳を振り下ろしたが、

ラビッツコングはマリオの攻撃をかわす。

カービィは少女が飛ばした光を吸い込み、星形弾にして少女に吐き出した。

「私、今、身体が勝手に動いているんです。本当は戦いたくないのに、どうして……」

「僕は、マルス。君の名前は？」

「サクラです」

少女は、戦闘に参加していないマルスに自身の名を名乗った。

「じゃあ、サクラ……僕は戦わないけど、君が解放されるのを信じるよ」

「ありがとうございます」

マルスはマリオ、ドンキー、カービィ、ピカチュウ、シャドウ、

アイシヤが皆を助けると信じ、六人を見守った。

「早足ティーですわ」

アイシヤは即席で紅茶を作り、味方全員の素早さを高め攻撃をかわしやすくした。

「うおりゃあー!」

「きやああー!」

「……!」

ドンキーは敵の群れに突っ込んで両腕を振り回し、薙ぎ払った。

ラビッツコングは紙一重でドンキーの攻撃をかわしたがそれ以外に命中し、

マイト軍団は全滅した。

その後、すぐにラビッツコングはドンキーにパンチで反撃する。

「いでえー！」

「ドンキーに何しやがるー！」

「そこだ」

「きやあー！」

ピカチュウはラビッツコングを10万ボルトで痺れさせ、シャドウはサクラを拳銃で三回撃った。

サクラはすぐに傷薬を飲み、自身の体力をある程度回復した。

「パックマン、苦しいだろ……今、助けてやる」

「グググ……」

「ファイアボール！」

マリオはパックマンに火炎弾を投げてダメージと共に火傷を負わせる。

「キーラなんかには負けないで、パクパク！」

カービィはパックマンの戦意を下げるために、パックマンの心に呼びかける。

すると、パックマンの動きが一瞬だが鈍った。

「おりやあああ！」

その隙にピカチュウはパックマンに突っ込んでアイアンテールで攻撃した。

「ケシテヤル！」

「おっと！ お、軽い軽い」

マリオはパックマンの至近距離からのパンチを早足ティーのおかげで余裕で回避した。

「ありがとよ、アイシャ」

「どういたしまして！ サクラさん、ごめんなさい！」

アイシャはサクラを包丁で斬りつける。

シャドウはパックマンに狙いを定め、丸まって体当たりした後、回し蹴りで吹っ飛ばす。

「オレが元祖で本物だ！」

「食らえー！」

「10まんボルト！」

ドンキーは自身と似た姿のラビッツコングを見て少し不快になり、思い切り彼を殴った。

パックマンはフルーツターゲットをシャドウに投げるが、シャドウは素早いスピードで回避してホーミングアタックで反撃する。

ピカチュウはサクラの背後から電撃を浴びせてダメージを与えた。

「ク……アキラメナイノカ……?」

「当たり前だろ！ オレを罠に嵌めた責任は取ってもらうからな！」

ドンキーは、パックマンがバナナを罠に使った事に憤慨していた。パックマン自身の意思ではないとはいえ、好物を卑劣な行動に使われた事を許せないのだ。

「食らいやがれ！ ジャイアントパンチ！」

ドンキーは怒りと渾身の力を込めたパンチをパックマンに繰り出した。

「*オオット*」

しかし、攻撃がパックマンに届く事はなかった。

攻撃を外したドンキーは、前のめりに倒れる。

「いってえ……」

「アア、キミハホントウニバカダネ。ヒトクチデパクツトイキタイヨ」

「やめろ！」

「ウオオオオオ！」

マリオがパックマンを止めようとする、ラビッツコングが割って入り彼を庇う。

さらに、カービィのキックもパックマンが光線で止め、逆にカービィを掴んで投げ飛ばす。

「ゴガアア！」

「うあああああ！」

ラビッツコングはピカチュウに突っ込んでパンチを繰り返し、ピカチュウを吹っ飛ばした。

「パクパク……お願い、元に戻ってよ」

「モトニモドル？ ボクハミモココロモキーラサマニササゲタンダヨ」

？」

「違う！ パクパクはそんな事絶対に言わない！ ね、僕の手を握つて、帰ろう？」

そう言つて、カービィはパックマンに手を出した。

すると、パックマンは大きく口を開けて、カービィの手に噛みついた。

「うわああああああああ!! やっぱり……倒さないとダメなの……？」

説得はやはり通じなかつたようだ。

パックマンを倒さなければ、キーラの呪縛から解き放つ事はできない……。

カービィは覚悟を決めて、パックマンに近付いて足と左腕で組み付いた。

その後、カービィは右腕に力を溜めていく。

「グウウウツッ！」

「お願い、みんな！ 僕がパクパクを元に戻すから、君達はスピリッツを解放して！」

「はい、かしこまりましたわ！」

アイシヤは標的をラビッツコングに変更し、包丁を持ってラビッツコングに突っ込んだ。

ラビッツコングはアイシヤの攻撃をかわすが、彼女は包丁を上に乗って切つた後、

ラビッツコングの隙を突いて突き刺し、彼のスピリッツを解放した。

「痛いけど、我慢しな！ ジャイアントパンチ!!」

「きやああああ!!」

ドンキーは腕を振り回し、サクラに向かって突き出し、彼女をボディ諸共吹っ飛ばした。

その隙に、ベルがサクラに大鎌を振り下ろし、彼女のスピリッツを解放した。

「カービィさん、終わりましたわ！ 準備はできてますの!？」

「OK！ パクパク、僕の渾身のパンチ、受けろおおおおお!!」
「ウアアアアアアアアア!!」

カービィが力を最大まで溜めた右腕を振り下ろす。
彼の希望の光が、パックマンを操っている邪悪な光を打ち砕き、
彼の中からそれが抜け出していく。

そして、邪悪な光がパックマンから完全に抜けると、パックマンは
ばたりと倒れた。

「……終わった、な」

「そうみたいね……」

シャドウは、倒れているパックマンを安全な場所に寝かせる。
ベルは、パックマンが起きるのを見守った。

「……大丈夫、よね」

「問題ない。あいつならすぐに起きるだろ」

ピカチュウがそう言うと、パックマンが瞬きし、身体を起こしてマ
リオ達の方を見た。

彼の眼は、いつも通りの黒に戻っていた。

「……あ、あれ、ここはどこ……?」

「お、起きたか。おはよう、パックマン『先輩』」

「せ、先輩……?」

マリオに先輩と言われたパックマンは瞬きした。
それに対し、ベルはパックマンに説明する。

「彼の方がデビューが早いからね。あえて、先輩って言ったんじゃない
い?」

「ふーん、そうだったノ。あ、お礼を言い忘れるところだったネ。

みんな、ボクを助けてくれてありがとう」

「はは、それほどでもないよ」

(君、この戦闘に参加しなかっただろ)

少しだけ照れているマルスに、シークはツツコミを入れた。

「ほう、こいつが黄色い伝説・パックマンか。確か、地球を侵略した事
があるらしいな」

「そんなの記憶にないヨー!」

シャドウは相変わらずの無遠慮な発言でパックマンを怒らせた。

「どうやら、パックマンが地球を侵略した事は、彼は全く覚えていないらしい……。」

「ま、まあ、それはいいとして、ボクもキミ達についていっていい？」
「構わん。だが、お前は強いのか？ 聊か不安だが」

「伊達に『黄色い伝説』って呼ばれてないからネ！ 頼れる奴になれるよう、頑張るヨ！」

パックマンはどんと腕で身体を叩いた。

その生き生きとした表情を見たカービィは、うん、と安心したように頷く。

「じゃあ、パクパク！ 僕達と一緒にいこう！」

「もちろんだヨ！」

こうして、希望の星を担うパーティに、

年代上では最古参となるファイター、パックマンが加わった。

23 青きメタルヒーロー

パックマンを仲間にした一行は、談笑しながら南西に向かっていった。

「まん丸で何でもパクつと食べるなんて、僕とおんなじだね！」

「そうだねー！」

カービィとパックマンは、似た者同士という事ですぐに仲が良くなっていた。

実際に、カービィがパックマンをコピーした時、大して容姿が変わらないのがその証だ。

「……屋敷の食費は、こいつら大食いカルテットのメンバーが大半を占めてるけどな」

大食いカルテットとは、ヨッシー、カービィ、パックマン、そして瑠璃の事である。

彼らはスマブラメンバーの中でも、特にたくさん食べるため、スマブラ屋敷の食費は大食いカルテットの割合が高いのだ。

「ん？ どーしたノ、ファルコン？ 何かぶつぶつ言ってるヨ？」
「あ、いいや、なんでもないぞ」

こうして南西に行くと、自然豊かな場所とは正反対の、基地らしき場所の入り口に着いた。

入り口の赤い光が、強力なスピリッツが眠る事を象徴している。しかし、そこに行くための道には、三人のスピリッツが立ち塞がっていた。

内訳は女性二人、男性一人だ。

「これは……告白する価値がありそうね」

「告白？」

「そうよ。Dr. ストレンジラブ！ 私は、あんたが好きよ！ だからここを通して！」

ベルは目の前にいる女性のスピリッツ、Dr. ストレンジラブに告白をした。

「却下」

しかし、告白に失敗し、ベルはビンタ攻撃を受けてしまう。

「つつー……せつかく告白しようとしたのに」

「戦わなければ通さない」

「やるしかないみたいだね。いくヨ、カービー！」

「うん！」

バックマンとカービーは、Dr. ストレンジラブに戦いを挑んだ。

「……この人、女の人が好きなんだネ」

「ストレンジラブ、だからね」

Dr. ストレンジラブは、男性より女性の方が好きらしい。

なので、奇妙な愛と呼ばれているのだ。

「次は……ロールちゃんね」

「うう、身体が勝手に動くわ」

次に遭遇したのは、デイグアウターの少女、ロール・キャスケットだった。

『ロール！ あんた、何やってるのよ！』

すると、スピリッツボールの中からロールと同じ世界のスピリッツ、トロンが飛び出してきた。

「身体が勝手に動いて困ってるの。お願い、助けて」

『仕方ないわね。私が助けてあげるわ』

「と言っても、君は動けないから、僕達が助けるよ」

「トロン、力を貸してくれ」

「いっくよー！」

ロール・キャスケットの解放に当たるのは、トロンの力を借りたシークと、

彼(?)と共に助けられたマルスとりようだった。

「ありがとう、みんな……」

「どういたしまして」

ロールのスピリッツを解放し、マルスとロールはお互いにお礼を言った。

一行が最後に解放しようとするスピリッツは、スパナを持った少年、リヨウだった。

彼は戦車や歩兵を並べて、一行の前に立ち塞がっていて、聞く耳は持たなそうだ。

「……やる気みたいね。誰が挑む？」

「僕がやる」

マルスは、リヨウの前に立って、ファルシオンを抜刀する構えを取る。

「ごめんね……でも、戦わないと先には進めない事は分かっている。

リヨウ……どちらの戦略が優れているか、勝負だよ！」

マルスは、普段は温和で謙虚な性格である。

だが、リヨウが操られている以上、戦わなければ先に進めないと感じたマルスは、

自分からリヨウに戦いを挑んだ。

「よく頑張ったね、リヨウ。でも、この勝負、僕の勝ちだ！」

最後にマルスがリーダーのリヨウを倒した事により、戦闘はマルスの勝利で終わった。

「凄いですわ、マルスさん！」

「慣れているからね。……つつ」

「だ、大丈夫かい？ 僕が治してあげるよ」

「た、助かるよ」

マルスは何度も戦闘しているため、体力は次第に削られていった。ドクターは彼に対し、有り合わせの材料から薬を調合してそれをマルスに与えた。

「……ふう、ありがとう、ドクター。さて、もうすぐ基地に着くよ」

マルスを先頭にして歩くと、ついに基地の入り口に着いた。

「よし、開けるぞ」

そう言ってマリオが扉を開けようとしたが、扉は固く閉ざされていた。

従兄弟のドクターが、扉をじっくり調べてみる。

「んっ、開かない」

「鍵穴もないみたいだね。隣には、何かを動かす機械があるみたいだけど」

「どうすれば開くんだ。うーん……誰かに情報を聞くしかないか……ん？」

ふと、マリオの視界に二体のロボットが入った。

彼らにヒントを聞けば、扉を開ける方法が分かるかもしれないと思っただけは、

ロボットがいる方に行った。

ドクター、カービー、シャドウ、ベルら仲間達も、彼の後を追っていった。

「……レプリロイド……レプリロイド……」

宙に浮いた男が、青い身体と赤い瞳のロボットを守るようにして立っている。

その男は、悪しき心を持ちながら英霊となった魔術師の風格を漂わせている。

莫大な黄金を所持する大貴族の当主に見えるかもしれない。

戦いとなれば、細身の剣と魔法を華麗に操る老執事の如く動くだろう。

「ロックマンに、あれは……」

「イレギュラーと化したレプリロイド、シグマみたいね」

そう言っただけ、ベルはスピリッツの詳細を一行に説明した。

「堕ちたロボット、というわけか」

「そうね」

「ロックマン君！ 僕の声が聞こえるかい？」

「基地に行くための扉が開かないんだ。扉を開ける方法を教えてください」

マリオとドクターは、ロックマンに扉を開けるための方法を教えようとした。

しかし、ロックマンは聞く耳を持たなかった。

「駄目だね……直接聞くしかないか」

「待てー！」

そう言っただけ、ドクターがロックマンの前に行こうとすると、シャドウがドクターを止めた。

「シャドウ君？」

「こいつはキーラに操られている、近づくな」

「え？ どうし……うわっ！」

突然、ロックマンがドクターに向けてシャドーブレードを投げた。

ドクターはギリギリでかわすが、ロックマンは殺意を込めた真つ赤な瞳を彼に向けている。

シグマも、一行に殺意を向けていた。

「……」

「……どうやら、戦わなければならないみたいだな。覚悟を決めて、ロックマンに挑むぞ」

「……うん」

「ボク達が何とかするから、待つてね！」

「負けないからネ！」

「ロツ君、今、僕達が助けるよ！」

「やれやれ……戦うのは苦手なだけだな。

でも、シグマ君もロックマン君も、自分の意志じゃないんだよね？

だから、僕が助けるよ」

カービィ、シャドウ、りょう、ランス、ドクター、パックマンは、

ロックマンとシグマをキーラから解放するため、戦いを挑んだ。

「いくよ、ドクタートルネード！」

ドクターは回転しながらロックマンを攻撃する。

「ウウウウウ……」

「うわあああ！」

シグマは弾丸をりょうに向けて大量に放った。

それはりょうを容赦なく打ち据え、耐えられなくなったりりょうは倒れた。

「りょう君！」

「仇を取るヨ！ えーい！ うわっ！」

パックマンはシグマを殴ろうとしたが、シグマは宙に浮いて攻撃をかわす。

カービィはシグマが飛ばした弾丸を吸い込み、星型弾にしてロツク

マンに吐き出す。

「コロス……」

「わっと！」

ランスはロックマンのロックバスターをかわし、槍でロックマンを突いて攻撃する。

「カオススパア！」

「グアアアア！」

シャドウは混沌の矢を作り出してシグマに放つ。

その威力は高く、一発でシグマに致命傷を与えるほどだった。

「よし、やったねシャドウ君！」

「……」

「気を抜いちやダメって事か」

ドクターはシャドウの様子を見た後、シグマを心臓マッサージで攻撃する。

すると、シグマは標的をカービィにして五つの電撃弾を作り出した。

「ウケテミヨ」

「まずい！」

「うわあああ！」

シャドウはそれを阻止するべく拳銃を撃つが、

弾丸が当たる前にシグマの身体から電撃弾が飛び、

それがカービィに全て命中するとカービィは麻痺して動けなくなった。

その後にシャドウが放った弾丸がシグマに命中し、シグマは戦闘不能になったが……。

「う、動けない……！」

「間に合わなかったか……」

「でもめげないデ！ ほら、りょうを治すヨ！」

そう言ってパックマンはフルーツターゲットをりょうに使い、彼の体力を回復させる。

「ありがとう、パックマン」

「それほどでもないヨ、それより今は目の前に敵に集中だヨ」

「うん。いづくよー!」

「それっ!」

りようはパチンコでロックマンを狙い撃ちし、ドクターは続けてカプセルを投げる。

シャドウはロックマンをカオスマジックで束縛した後に近付いて回し蹴りで攻撃する。

ロックマンはシャドーブレードを投げてランスの身体を切り裂く。

「ワドスピアスロー!」

ランスは一度距離を取った後、槍を投げてロックマンを攻撃した。

「こんな痺れに、負けてたまるか!」

カービィは気合で何とか麻痺を解除し、ロックマンに突っ込んで彼を吸い込み、コピーする。

「シャドーブレード!」

カービィは手から歯車型の刃を出し、ロックマンに向けて投げる。

刃がロックマンに刺さった後、ランスがロックマンに近づいて刃を抜く。

「イッタア!」

「血は出なかったが痛みは感じるようだな」

「このゲーム、全年齢対象なんですケド」

「ヨクモヤツタナ、カナラズコロシテヤル!」

「やれるものならやってみる! みんな、僕がこいつの囷になるよ。君達がロツ君を止めて!」

「ああ」

「分かったよ」

カービィはロックマンを挑発して彼を引きつけ、残った五人がロックマンを倒す作戦に出た。

まず、ドクターとパックマンはカプセルとフルーツターゲットで牽制し、

次にランスは高く飛び上がったって槍を地面に突き刺した。

ロックマンが地面に埋まった時、既にりようは斧を構えていて、

りようは勢いよく斧を振り下ろした。

「グアアア！ ウ…………グ…………」

既にロックマンの体力は残り僅かで、彼もふらふら状態になっている。

とどめを刺すなら、今がチャンスだ。

「離れろ」

「うん！」

シャドウは他の五人を下がらせた後、超スピードでロックマンに接近し、

カオスエメラルドの力を使ってロックマンを拘束し彼にとどめを刺す準備に入る。

「ハナセー！」

「放すものか。お前を光の呪縛から放すためだ。動くなよ…………カオスブラスト!!」

そして、シャドウが技の名前を叫ぶと、真紅の衝撃波がロックマンを包み込んだ。

その威力は瀕死のロックマンの意識を奪うのに十分なものであった。

衝撃波が治まると、ロックマンの身体は光になって弾け飛んだ。

「僕の…………勝ちだ！」

そう…………この瞬間、キーラに操られたロックマンとシグマとの戦いに、勝利したのだ。

24 基地への潜入

「……………う……………う……………」

ロックマンは、カービー達の活躍により正気に戻った。今、こうして安全な場所で体力が戻るまでゆっくり休んでいるところだ。

「ロックマン君が元気になったら、基地に行くためにはどうすればいいか教えてもらおうか」

「そうだな」

「それに、あの基地の中からスピリッツの気配を感じるしね……………」

ベルは、扉で入り口を塞がれている工場を見てそう言った。

扉を開けるための方法が分かればいいのに、とりようが眩くと、全快したロックマンが起き上がった。

「あ、起きたんだな、ロックマン」

「あれ……………ここはどこ……………？ ボクは一体……………？」

「大丈夫？ 痛くなかった？」

正気に戻ったロックマンに、ランスが優しく声をかける。

「うーん、言われてみれば、ちよつと身体のあちこちが痛いような。

……………それで、ボクに何か用？」

「基地を塞いでいる扉を開けるための方法が分からないんだ。ロックマン君、分かるかい？」

「あ、じゃあ、ちよつと案内して」

「うん」

そう言つて、ドクターはロックマンを扉と装置がある場所に案内した。

「この扉を開けてほしいんだね」

「うん。マリオ君と僕が試したけど、うんともすんとも言わないんだ。

この装置が怪しいんだけど……………」

「……………」

ロックマンは顎に指を置いて、頭を捻った。

この装置と扉の繋がりはあるのだろうか……………そう考えていると、

スピリッツボールの中からハル・エメリツヒと
Dr. ストレンジラブのスピリッツが飛び出してきた。

『ハル……この装置、動かせるのでは？』

「あ、オコタンだ！」

『オ・タ・コ・ン。間違えないでくれるかな。……とにかく、やってみるよ。』

誰か、手を貸してくれ』

「私がやりましょうか」

リコンヌが拳手すると、オタコンは一時的に彼の身体に宿り、器用に機械を操作した。

すると、扉は音と共にロックが解除され、一行は基地に行けるようになった。

「やりましたね！ 扉が開きました！」

「いや、それほどでもありませんよ、ソレイユ」

「……一体、基地にはどんなスピリッツがいるのだろうか。気を引き締めなければ」

シークは真っ直ぐに基地の入り口を見つめている。

彼(?)は、始まる前から本番といった様子だ。

「うむ、油断大敵だな。では、基地に入るぞ」

「うん！」

一行はルカリオを先頭に、スピリッツが囚われている基地の中に入った。

「……無機質だな」

「ちよつと怖いよ……」

基地の中は、冷え切った床や壁が広がっていて、生活感のない無機質な雰囲気だった。

あまりこういうものとの接触がなかったカービィとりようは震え、ドンキーは訳が分からず頭にハテナマークを浮かべている。

一方で、機械に慣れているシャドウとロックマンは平然とした顔で歩いていた。

シークとルカリオは音を立てないように忍び足で歩いている。

「シャ、シャドウ……平気なのか？（こ）……」

「僕自身が人工だからな、気にはならない」

「すげえ……」

ドンキーが感心していると、目の前に文字が書かれているプレートがあつた。

しかし、プレートの前には、亜空軍の一般兵、プリムのスピリッツが立ち塞がっている。

「これは……亜空軍のプリムか」

「第一次亜空軍異変でも第二次亜空軍異変でもたくさんいたわね」

「だが、相手に不足はない。来い！」

ルカリオは構えを取り、プリムと戦った。

「所詮は一般兵だったようだな」

プリムの数は多かつたが、所詮一般兵であるプリムはあっさりと負けて

スピリッツボールの中に入った。

そして、ベルはプレートの文字を確認する。

この基地には 五つの鍵があり

扉に入れるは 女王が治めし島国の言葉なり

五つの鍵を手任せよ さすれば道は開く

「女王が治めし島国の言葉……つまり、英語でパスワードを入れればいいのね」

プレートの左右の道には、「2」と書かれたバリアが張られてある。

試しにドンキーが触ると、彼の手に衝撃が走った。

「いつてえー！」

「ロックを解除しないとバリアは消えないわよ。まずは、そこから始めましょう」

「ああ……いててて」

一行はプレートがある場所から真つ直ぐ北に進み、横に広がっている部屋に着く。

部屋の右側の機械には「1」と書かれてあつた。

「このスイッチを押せばいいのですね」

ソレイユが赤く光ったキーボードを押すと、赤いモニターにこの文章が浮かんだ。

それは二組の音と一つの音でできている

それは多くの服を着る

それは切れば涙が出る

「あら？ これはなんででしょうか」

「この問題に答えないとバリアは解除されないみたいよ。じっくり解きなさい」

「え、ええと……」

ソレイユはモニターに映った文字を読んでいた。

二組の音と一つの音というのは分からなかったが、

「多くの服」と「涙が出る」という文章でソレイユは閃いた。

「あ、分かりました！ 答えは玉葱ですね！」

「それを英語にすると？」

「玉葱は英語で……ONIONです！」

ソレイユがキーボードでそう入力すると、ブン、という音と共にモニターが青く光り、

さらにファンファアールが鳴って映った文字が大きな○に変わった。

すると、左側の「1」と書かれたバリアと、

北にある左右に分かれた道の「1」と書かれたバリアが消えた。

「あ、正解みたいですね！」

「二組の音はOとN、一つの音はIを指すんだネ。

ま、これは二番目と三番目のヒントがあったから簡単だったネ」

「そーなのかー」

あまり頭が良くないドンキーコングは、とりあえず納得するのだった。

「じゃ、次はこつちを通りましょう」

一行は、次のスイッチを押すため、「1」のバリアが消えた西の道を通っていった。

すると、上に「2」と書かれた装置と、2つの大型の機械と2つの小型の機械があった。

「ねえ、どれを調べればいいの?」

「えつと……これですわ」

アイシヤは、一番右にある大型の機械を調べた。

すると、赤いモニターに白字でこの文章が現れた。

それは母なる音がない

それは崩す事ができる

それは乗る事ができる

「母なる音がない……つまり、その英語には母音が存在しないわ」

「崩したり乗ったりできるものといえばリズムだな」

「へー、ドンキー知ってるんだ!」

「コンガをやってたからな、それくらい知ってるさ」

「それ『だけ』の間違いでしょ」

「うぐつ」

ベルに茶化されたドンキーは胸を抑えた後、がっくりと項垂れる。

アイシヤはやれやれと言いながら、キーボードで「RHYTHM」と入力し、

2のバリアを解除した。

「1、2と来たら、次は3だね。3はこっちだよ!」

一行はロックマンの導きで南東に歩き、「1」のバリアがあつた道のうち、左側の道を進んだ。

だが、機械へ行くための道を、キーラに操られたスピリッツが塞いでいた。

全員、瞳は赤く染まっついていて、説得には応じなさそうだ。

「こりや、戦うしかなさそうね。ポリゴンには誰が挑む?」

「ボクがやるよ!」

ランスは槍を構え、マツクのボディに宿つたポリゴンのスピリッツと戦った。

ポリゴンとマツクではあまりにも体格が違うため、マツクはデフォルメされていた。

「な、なんかポリゴンがきつそうだね……。でも大丈夫、助けてあげるね!」

「よし、勝ったよー！」

ポリゴンのスピリッツは無事に解放された。

リトルマツクのボディは元に戻った後、無理が祟ってバラバラになってしまった。

「ポリゴンはポリゴンでも、こんなポリゴンにしくてもよかったぞ」

マリオはポリゴンのスピリッツにそう突っ込んだ。

妥当なボディが無かったとはいえ、「ポリゴン」に入るとは……と苦笑した。

「次は……きや、爆弾を持ったロボット!? こんなのと戦うなんて……」

「邪魔だ」

アイシャはボンバーマンのスピリッツを見て驚く。

しかし、シャドウはアイシャを払いのけ、彼と戦うために戦闘態勢を取った。

「僕がこいつと戦う」

「ちよ、なんでいきなり前に出るんですの!?!」

「今はこいつでその爆弾を撃ちたくてな……!」

シャドウはアイシャの突っ込みを流し、

こどもリンクのボディに宿ったボンバーマンに拳銃を向けた。

ちなみに言い忘れたが、ボンバーマンはロックマンの世界のスピリッツである。

「はあ……機械がたくさんあるからといって、気分が高揚しなくてもよろしいのでは?」

「うむ……確かにシャドウの波導は高ぶっているな」

アイシャが呆れながらルカリオに愚痴を吐く。

ルカリオは、シャドウから感じる波導が、ジェフと戦った時のそれと似ていると感じた。

つまり今、シャドウは「はしやいでいる」状態になっているのだ。

「50年前に生まれたのに子供っぽいのね」

「シャド兄って、僕より年上なの?」

「シーツ、本人には内緒よ」

カービィとベルは、今のシャドウを生暖かい目で見守っていた。「これで終わりだ！」

シャドウの拳銃が火を吹くと、ボンバーマンは光の球となって敗れ、

彼のスピリッツはスピリッツボールの中に入った。

「……シャドウさん、満足しましたっ？」

「ああ」

「あまりはしゃぐのは良くありませんわ。普段はこんな態度ではありませんわよっ。」

アイシャは今のシャドウにはあ、と溜息をついた。

普段は落ち着いているシャドウがこんなに気分が高ぶるなんて、と呆れている。

彼女の態度を見たシャドウは、流石にバツが悪いと感じたのか、銃をしまう。

「……こんな姿を見せてしまつてすまん。少し自重するべきだったな」

「分かればよろしいですわ」

ようやくシャドウを落ち着かせたアイシャは、機械を目指し前に進んでいった。

一行も彼女についていき、しばらくすると、

アイスクライマーのボディに宿ったデュオンのスピリッツに遭遇した。

第一次亜空軍異変で遭遇した強敵だが、

ボディがアイスクライマーなので大幅に弱体化していた。

「デュオン……かなり強かったね」

「だが、こつちも落ちぶれてしまふとはな……」

第一次亜空軍異変に関わっていたルカリオとマルスは、落ちぶれたデュオンを見て呆れていた。

ピカチュウも、デュオンを冷たい目で見ている。

デュオンは「そんな目で哀れむな」とアイスクライマーのボディで言っているように見えた。

「だが、手加減はしない。行くぞっ！」

「キーラに操られているからね」

マルスはファルシオンを抜き、ルカリオは構えを取り、デュオンに戦いを挑んだ。

「……終わったみたいだね」

「ああ……」

デュオンのスピリッツを解放したルカリオとマルスだったが、彼らの表情は空しかった。

強敵が弱体化しているため、戦った実感が湧かなかったからだ。

何はともあれ、これで機械に繋がる道を塞ぐスピリッツを全て解放し、

ようやくバリアを解除できる機械を操作できる。

ファルコンがキーボードに触れると、モニターにこんな文章が浮かんだ。

それは短くも長くもなる

それはあなたから離れない

それは闇の中で消える

「ええつと……短くも長くもなるし、離れなくて闇の中で消えるのって……分からないな」

ファルコンは答えが分からず、頭を捻っている。

そこで、仲間にヒントを聞こうとした。

「おい、シャドウ、答え分か……シャドウ？ ……そうか！ 答えは

『影』だ！」

ファルコンがキーボードで「SHADOW」と入力すると、

モニターが青くなって「○」の文字が現れ、3のバリアが消える音がした。

「まさかお前の名前が正解だったとはな。助かったぜ、シャドウ」

「……別に、礼を言われるような事はしていない」

ファルコンはシャドウにお礼を言うが、シャドウは素っ気なく返事した。

アイシヤに忠告されたのか、彼はいつものように冷静だった。

一行は3のバリアを解除した後、引き返して今度は右の道へ進む。すると、「4」と書かれた機械を塞ぐようにリボルバー・オセロットのスピリッツがいた。

マリオが彼のスピリッツを解放した後、機械のキーボードを触り、モニターに文字を出す。

それは緑のものは未熟である

それは決して返せない

それは一年に一つのみ

「一年に一つで決して返せないもの……年齢だな。

もつとも、この世界ではそんなの気にしなくていいのだが……。

でも、年齢って英語でなんて言うんだ？」

「……おい、お前、英語も分からないのか？」

「すまんすまん、ちよつとボケただけだ。年齢は英語でこう言うんだろ？」

そう言つて、マリオはキーボードで「AGE」と入力し、4のバリアを解除した。

「なんか、頭が痛くなつて来たわ……」

ベルは頭を押さえながらそう言つた。

彼女はこんな調子で大丈夫なのか、という気持ちでいっぱいであつた。

4のバリアを解除した後、一行は南に行つて、

最後のバリア——5のバリアを解除できる機械がある場所に行つた。

この機械の前にはスピリッツがなかったが……。

それは右が増えると銃になる

それは全ての動物が持つ

それは落ちれば二度と拾えない

「右が増えると銃、か。右は確か、英語でRIGHTだったな。

つまり、Rがつくと銃になるのか。

それを踏まえて、落ちれば二度と拾えない、全ての動物が持つものは……」

この問題は、シャドウが解く事にした。

シャドウが考えに考え抜いた末、キーボードで「L I F E」と入力すると、

モニターが青く光って画面に「○」と出た。

「なんでL I F Eなの？」

「L I F EにRを入れて並べ替えると、R I F L Eとなるわけだ。

命が落ちれば、二度と拾う事はできない……」

「へ、勉強になるね」

「これで全てのバリアは解除された。5のバリアがあつた場所に行くか」

「ええ」

こうして、1〜5までの全てのバリアを解除し、一行は基地の奥まで進んでいった。

奥の部屋は非常に広く、床に落ちたサブマシンガンと、台座に縛られている男を除いて何もなかった。

シャドウはそのサブマシンガンを拾い、手に持つ。

「ああ、この銃は手に馴染むな」

「シャドウ、また興奮してるの？」

「さあな。……それよりあいつを解放しないのか？」

「あいつ？ ああ、この人の事だね！ えいっ！」

そう言つて、ランスは男を縛っている光の鎖を槍で貫き、打ち砕いた。

すると、鎖から解放された男が、赤い瞳を光らせて襲い掛かった。

その男は、伝説の傭兵で潜入のスペシャリスト、ソリッド・スネークだった。

さらに、彼と同じように操られたロボット、メタルギアR E Xが襲い掛かる。

「来たな、スネーク！ 俺達が相手をしてやるぜ！」

「待つてくださいいねえ。私達が助けますから」

「言つておくれ、バウンティハンターの身体能力を舐めるんじゃないぞ」

「大丈夫、ボクは負けないよ！」

「覚悟はよろしいのですの!?!」

「スネくん、キーラに負けないで！」

ヨッシー、カービィ、ピカチュウ、ファルコン、ランス、アイシヤ
は、

操られたスネークとメタルギアREXを救うため、戦いを挑んだ。

25 伝説の傭兵

伝説の傭兵、スネークとの戦いが始まった。

「……」

スネークは六人の死角となる部分に素早く移動し、身を隠す。

「つくそ、どこに行きやがった？」

「えいつー！」

ランスはメタルギアREXを槍で突くが、メタルギアREXにはギリギリで当たらなかった。

「スネークは……ですか？」

アイシヤはスネーク目掛けて食器を投げつける。

すると、カコーン、という音と共に、スネークがその姿を現した。

「！」

「見つけましたわ！ こちらです！」

「ホント!? じゃあ、行こう！」

アイシヤはスネークの居場所を皆に知らせた。

ランスは槍をスネークに投げようとするが、

その前にメタルギアREXがランスに狙いを定め、レールガンを放った。

「うわあああああああ！」

レールガンが直撃したランスは吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられて意識を失った。

「ばたんきゅー……」

「何をするんですかー！」

ヨッシーは先程ランスを倒したメタルギアREXの攻撃が届かない

ギリギリの距離に近付き、蹴り飛ばす。

ファルコンはスネークを素早く掴んで投げる。

「ランスさん、これをー！」

アイシヤはメタルギアREXの射撃を回避し、ランスの口に特徴的な味の桜餅を入れる。

意識を取り戻したランスは謎の味に驚いて飛び上がる。

「ひ！ な、何この味……」

「話は後ですわ、一人と一台を解放しますわよ！」

「う、うん！」

「こいつを受け取れ、カービィ！」

ピカチュウはカービィにコピーを与えるため電撃を放つ。

カービィはそれを吸い込んで、スパークをコピーした。

「クッ！」

「お前は操られているんだ、目を覚ませ！」

「そうだ……だから今、解放してやる！ ロケット……ずつきー！」

ピカチュウは後ろに下がった後、力を溜めてスネークに突進する。

ファルコンはロケットずつきがスネークに命中する前に素早く飛び退く。

「グアアアアアア！」

「よーし、今だ！ イナズマおとし!!」

「ウアアアアアアアア！」

スパークカービィはスネークとメタルギアREXに雷を落とした。

メタルギアREXの内部は雷でショートし、スネークも感電により意識を手放した。

「……あれ？ もう終わっちゃった？」

「そうみたいだね」

スネークとの勝負にあっさりと決着がついてしまったため、カービィはきよとんとしていた。

ドクターは気絶しているスネークを治している。

シャドウは顎に手を当てて、考え事をしていた。

（ここにいたのは、本当にキーラに操られたスネークとスピリッツだけなのか？）

スネークがいる部屋に行くためにバリアを解除していったが、通らなかつた道があつたな……）

「あの、どうしましたか、シャドウさん？」

「どうも引つかかるものがあつてな。1・2・3・4・5とバリアを解

除していったらどう？」

「そうですね」

「その中に、通らなかつた道はあつたか？」

シャドウがソレイユに問いかけると、ソレイユは「あ！」と思ひ出す。

「確か、それは4のバリアがあつた場所ですよ？ 通らなかつた気がします」

では、4のバリアを解除するのは無駄だったのか、とシークは考えた。

その時、スネークの治療を終えたドクターが手を挙げる。

「治療、終わったよ」

「スネーク、大丈夫だった？」

「ああ、特に後遺症は無かつたぞ。この医者は腕がいいんだな」

「どういたしまして」

スネークは自身を治療したドクターの腕を褒め、ドクターは素直に頷いた。

「あの、あなたは……？」

「お前達はまだ俺の事を知らなかつたようだな。俺はソリッド・スネーク、傭兵だ」

「僕はりょう」

「ボクはバンダナワドルデイのランスだよ」

「私はソレイユ・ラサンテです」

「私はリユンヌ・ラサンテです」

「ボク、パツクマンだよ！」

「僕はドクター、と名乗らせてもらうよ」

「わたしはアイシャ・クルースニクですわ」

「……僕は、シャドウ・ザ・ヘッジホッグだ」

スネークは顔を合わせた事がなかつたアイシャ、シャドウ、ソレイユ、リユンヌ、

ドクター、パツクマン、ランス、りょうに自己紹介をする。

八人も、改めてスネークに名前を名乗った。

「ラサンテ……という事は、ソレイユとリユンヌはきょうだいかな？」
「いえ、夫婦です」

「それは初耳だったな。では、改めてよろしく」
「二よろしくお願いします」

スネークは一人一人、挨拶と同時に握手をした。

「では、そろそろ戻るぞ。ついてこい」

「かしこまりました」

一行はスネークを先頭にして、基地を後にした。

流石は潜入のスペシャリストだけあって、スネークは慎重かつ大胆に進んでいる。

シークとルカリオも、音を立てずに歩いていった。

「みんな、静かにするんだ。残党が眠っているかもしれないからな」
「うん」

一行はスネークに言われた通り、自分達以外に聞こえないような声で話す事にした。

残党の気配は感じなかったが、決して油断してはいけないのだ。

「……？」

ふと、スネークは自分達以外の足音を感じ取り、すぐにダンボールに潜って身を隠す。

「ス、スネーク……？」

マリオが訳が分からず困惑していると、足音は徐々に近づいてくる。

何かが近づく恐怖に、マリオは脂汗を掻いた。

そして、マリオは思わず目を閉じてしまった。

「……!!」

しばらくしてマリオが目を開けると、彼と0.1mの距離で、「それ」は立っていた。

鋼鉄の二本足に、中世ヨーロッパの騎士の兜のような顔。

足と同じように鋼鉄でできた両腕は太く、背中には二門のミサイル砲がついていた。

マリオやカービーなどには、「それ」は分かった。

第一次・第二次亜空軍異変で死闘を繰り広げた、亜空軍の主戦力口ボット――

「ガレオム……!!」

――ガレオムだった。

ダンボールの中にいたスネークは危険を察知し、すぐにダンボールを捨てて構えを取った。

「まさか、こいつもいたとはね。……やっぱり、キーラに操られてるの？」

「分かん……だが、この狭い場所で戦うのは危険だ……!」

一行がガレオムと遭遇した場所は、狭い通路の中だった。

もしもここでガレオムと戦ったら、勝負にもならなくなる。

「こいつを広い場所に誘い込むぞー!」

スネークは閃光弾を取り出すと、ガレオムに向けて投げつけた。

閃光弾は破裂し、ガレオムの目を晦ませる。

一行はその隙に、プレートがあった場所から北に走っていく。

ガレオムが光を振り払うまでに全員間に合え、と一行はただただ願った。

全員が北の広い部屋に入ろうとしたその時、りょうとアイシャが転倒してしまった。

「りょう! アイシャ!」

ベルはりょうとアイシャに手を伸ばし、二人を北の部屋に引っ張ろうとしたが、

目晦ましを解除したガレオムがその太い腕で華奢なりょうとアイシャの身体を掴む。

「く……」

「苦しいですわ……!」

二人の身体はぐん、と宙に浮かんだ。

りょうとアイシャは必死で抵抗するが、ガレオムの力はどんどん強くなっていく。

このままでは、二人は握り潰されるか、地面に叩きつけられてしまう。

「……仕方、あるまい」

シャドウは、スネークがいる場所で拾ったサブマシンガンを構えた。

スネークは慌ててシャドウの腕を掴む。

「シャドウ！ 二人を巻き込むな！」

「そんな事はどうでもいい、二人を解放するためなら僕は手段を問わない！」

シャドウはスネークの腕を振り払った後、

サブマシンガンの引き金を引き、ガレオムに乱射した。

攻撃を受けたガレオムは暴れ出し、

りょうとアイシャを掴んでいた手を放し、二人は落下してしまった。

だが、地面に激突する直前でパックマンはりょうとアイシャにビームを放って激突を防いだ。

「危なかったネ、あと少しでキミ達は地面にドカーンだったヨ」

「う……」

「あ……」

りょうとアイシャは、ガレオムに握られたシヨックで放心していた。

パックマンはりょうとアイシャを降ろした後、普段と違う凛々しい表情でガレオムの顔を見る。

「ガレオム、よくもボク達の仲間をこんな目に遭わせたな！ 許さないゾー！」

「手加減はしないぞ」

「こういうロボットとは何度も戦ったからね。ボクは絶対にこいつに勝つよ」

「ここで逃げれば最大の恥になる」

「ちよつと怖いが……負けないぜ！」

「こんな絶望、私が叩き切ってあげるわ！」

マリオ、パックマン、ロックマン、スネーク、シャドウ、そしてベルは、

戦闘態勢を取り、ガレオムと対峙した。

今ここに、大ボスとの戦いが幕を開けるのだった。

「カオススピア!」

シャドウは手から矢を放ち、ガレオムを射抜く。

ガレオムは防御の体勢を取り、シャドウの攻撃を防いだ。

「ファイアボール!」

マリオはガレオムに炎の玉を放つが、ガレオムはギリギリで彼の攻撃をかわす。

ロックマンはガレオムが回避した方にシャドーブレードを投げてダメージを与えた。

ガレオムは残るベルとパックマンの攻撃をかわし、背中のミサイルで反撃した。

ベルとパックマンはシールドでミサイルを防いだ。

「なんてパワーなの、こいつは」

ガレオムのパワーは強烈で、二人のシールドを大きく削っている。ベルは脂汗を掻きながらも鎌を握る手を強める。

「くうっ!」

ガレオムはシャドウを鋼鉄の足で踏み潰す。

シャドウは地面に埋まり、さらにミサイルの追撃を許してしまう。

「こんなロボットなど、粉々にしてやる」

埋まった状態から解放されたシャドウはサブマシンガンを乱射し、ガレオムの装甲に穴を開けた。

ロックマンは穴が開いたところにロックバスターを連射してダメージを与えた。

パックマンは遠くからガレオムにフルーツターゲットを投げて完全に攻撃した。

「もう一発、ファイアボール!」

「スライス!」

「ファイアスライス!!」

マリオのファイアボールがベルの大鎌に命中すると大鎌は炎を纏い、そのままベルは一閃する。

ガレオムは熱により大ダメージを受けた。

「やるな、ベル」

「ええ、私は死神なんだから!」

マリオとベルがお互いを称え合うと、それがガレオムの怒りを買ったのか、

ガレオムは二人に両腕を振り下ろした。

「危ない!」

両腕が当たる直前でスネークは二人を庇い、代わりに大ダメージを受ける。

「ぐっ……!」

「大丈夫、スネーク!」

「ああ……だが、肩が……うぐっ!」

スネークは攻撃を受けた左肩を押さえる。

幸い、出血はしていなかったが、痛みのせいでスネークに力が入らなくなった。

「無理しないで、スネーク! ほら、回復してあげるヨ!」

パックマンはフルツターゲットを使ってスネークの痛みを和らげる。

「助かるぞ……はあっ!」

スネークは距離を取り、迫撃砲を取り出してガレオムに放った。

弾はガレオムに命中すると大爆発を起こし、その場を煙が包む。

スネークは煙に紛れてガレオムの背後に回り込み、C4爆弾を取り付けた。

「何をしたの?」

「それは後のお楽しみだ」

ガレオムは両足に力を入れた後、四回連続でジャンプした。

六人は上手く攻撃をかわし、

スネークはガレオムの動きが一瞬止まったのを見計らいC4爆弾を爆破させた。

「よし! これは結構いったよね?」

ロックマンが喜ぶと、ガレオムは両腕と両足を畳んで戦車形態に変

化した。

「ひえっ!? うわあああああ!」

そのままガレオムはパックマンに突進し、ロックマンを吹っ飛ばした。

また、ガレオムの軌道上にいたマリオ、パックマン、スネーク、シャドウ、ベルも、

かわせず吹っ飛ばされた。

「くそ……」

ガレオムは再び地面に降りた後、元の形態に戻る。

皆、戦車形態のダメージが効いたのか、立つ事はできなかった。

「……俺は、死ぬのか……?」

マリオも立ち上がろうとするが立ち上がれない。

ガレオムはマリオにゆっくりと近付き、彼にとどめを刺すべく、腕を振り下ろした——その時だった。

「……諦めるな!」

スネークが、腹這いの状態から狙撃銃でガレオムを撃ち、一瞬だけだが怯ませる。

「そうか……諦めたらそこで試合終了だからな。スネーク……俺は諦めないぜ!」

マリオは気合で立ち上がり、激しいガレオムの攻撃を紙一重でかわし、

ファイアボールや体術で着実にダメージを与える。

ミサイルはガレオムの懐に潜り込んでかわし、腕を振り下ろす攻撃も緊急回避でかわした。

ガレオムの攻撃が激しいという事は、残り体力が少なくなっている証だ。

そのため、勝利の時は確実に近づいている。

マリオは自分を、そして仲間を信じて、体術やハンマーで攻撃し続けた。

「とどめだ! ファイア掌底!!」

そして、マリオが炎を纏った掌底をガレオムにぶちかますと、ガレ

オムはよろめき、

何度も爆発した後には木っ端微塵になり、その機能を完全に停止した。

そう……ガレオムとの戦いに、勝利したのだ。

「うう、ひやひやしましたわ……」

「そうだな、俺もかなり疲れちゃったし、な」

「……こんなに動いたのは久しぶりだろう」

ガレオムとの戦いで、マリオ達はどつと疲れが出たようだ。

特に、シャドウは基地でかなり「はしゃいで」いたため、それが顕著であった。

「『いつものシャドウじゃない』って言いたい気分になるわ」

「何か言ったか？ ベル」

「いいえ、何も？ さ、私達の基地での役目はこれでおしまい、さつさと出るわよ」

一行は、疲れた身体を休めるべく、基地を後にするのであった。

その一方、外では――

「く……う……うああああああつ！」

ガレオムを倒した事で、キーラを守るバリアが弱まった。

彼女は不愉快な様子で身体を震わせている。

「おのれ……我が結界を破るとは……！ 許せぬ、スマツシユブラザース……！」

新たなる創世の邪魔は、決してさせぬ……！」

26 く ほんの少しの休息

基地でスネークを救出し、さらにキーラ軍のボスの一角、ガレオムを撃破した一行は、

昼食を買うため、街を目指して歩いた。

疲労はアイシャが取ったが、空腹までは治まらなかったのだ。

街へ行くための山道で、一行は身体の色と同じ高貴そうな服を着た紫色の猫の少女に遭遇する。

「お前は……誰だ？」

猫の少女とシャドウは同時にそう言った。

どうやら同じ世界(猫の少女はその世界の異世界)の住民らしいが、二人の面識はあまりないようだ。

「……名を名乗るのなら、まずはお前から名乗れ」

「そうだったな。僕はシャドウ・ザ・ヘッジホッグ」

「ブレイズ・ザ・キャットだ」

シャドウとその猫、ブレイズはお互いに名を名乗った後、

しばらくして気まずそうに顔を背ける。

「あまり、面識はないからね……」

「……そうか、シャドウというのか。頼みがある」

「何だ？」

「私の身体が思うように動かない。解放してくれ」

ブレイズもキーラに操られているようで、思い通りに身体が動かないようだ。

すると、スピリッツボールの中からシルバーのスピリッツが出てきた。

『そ、そこにいるのはブレイズじゃないか！』

「シルバー……？」

『待ってくれ、俺が助けてやる！なあシャドウ、ちよっと身体を貸してくれないか』

「……分かった」

シャドウはシルバーのスピリッツをその身に宿し、

身体の色とリミッター以外はシルバーのそれに变化した。

『待ってるよ、ブレイズ。俺が助けてやる。ブレイズ、本当の自分を取り戻せっ!』

「……不本意だが、いくぞっ」

シルバーはシャドウの身体を使い、ブレイズを解放するべく彼女と戦った。

「助かったぞ、シルバー」

『ああ、ありがとよ、ブレイズ』

ブレイズを解放したシルバーは、役目を終えてシャドウの身体から抜け、

スピリッツボールの中に戻る。

そして、ブレイズのスピリッツもスピリッツボールの中に入った。

「シルバーとブレイズって、仲が良いんだね」

『ま、まあな』

『……』

りょうがスピリッツボールの中にいるシルバーとブレイズに楽しそうにそう言う。

二人はしばらく顔を合わせた後、赤面して互いに視線を逸らした。

「本当に仲が良いのかしらね」

ベルがスピリッツボールの中を覗いている時、後ろにいたヨツシーの腹の虫が鳴った。

「あの〜、お腹空いちやいました〜。そろそろ食べ物欲しいです〜」

「はいはい、食べ物ね。分かったわ、街はこっちの方にあるからついてきて」

「分かりました〜」

一行は街へと至る道をどんどん進んでいく。

カービィやランスなどの子供達は、

興味のあるものはないかときよろきよろと当たりを見渡していた。

彼らの様子を見たマリオは苦笑し、シャドウはやれやれと呆れていた。

「着いた! って、なんでこいつが邪魔してるんだ」

「街が汚れている……一体誰の仕業だ？」

無事に街に到着したはいいものの、街の中はインクで塗りたくられていた。

また、入り口には白いヘルメットを被り、青いスーツを着て、片手に爆弾を持った少年が立ち塞がっていた。

そのスピリッツはトゥーンリンクのボディに宿っており、帽子とタイツの色が白くなっている。

「……ま、まあ、それはいいとして、このスピリッツの説明をするわ。これはボンバーマン、かつてはある小世界にいたボンバー星の正義の戦士よ」

「ある小世界？」

「マリオ、知ってるでしょ？ パーティの……」

「ああ〜〜」

ベルによれば、その小世界は既に滅亡してしまっただらしく、ボンバーマンは辛うじて生き延びたとか。

「……大人の都合で元いた世界が滅んだ、とても哀れなスピリッツね。でも、大丈夫！ 私が解放してあげるわ！」

もう、その世界に戻る事はできない。

だから、せめてこの世界で、新しい生活を送ってほしい。

ベルは大鎌を構えて、ボンバーマンのスピリッツを解放する体勢を取った。

「大丈夫よ、ボンバーマン。私が守ってあげるわ」

ボンバーマンのスピリッツを解放し、街に入ったベル達は、

まず、昼食を買うためにコンビニに入った。

コンビニの中では弁当や冷凍食品が売っており、黒魔道士のクロマや忍者のニンジャ、

魔物であるサボテンダーやスライムなど、異世界の住民が客として入っていた。

このコンビニの中は無事なようで、食べ物や飲み物などにはインクがついていない。

「いらっしやいませ、コンビニエンスストア『ニーエックス』です」

そのコンビニの店員は、白魔道士のシロマだった。

彼女の傍には、万引きを防ぐためにモーグリが宙に浮いている。

「この人達も、キララに操られているのかい？」

マルスの質問に対し、ベルは首を横に振った。

「いいえ、大丈夫よ。このコンビニは侵略者の影響を受けないわ。

だから、安心して昼食を買いなさい」

「うん」

各々がコンビニで購入したメニューはこうなった。

アイシャ：とんかつ弁当、バームクーヘン

カービィ：おにぎり20個

シーク：海苔弁当

シャドウ：ペロリーメイト1個

スネーク：鮭おにぎり1個、栄養剤マスカット味

ソレイユ&リユヌ：ササミカツ弁当

ドクター：BLTサンド

ドンキーコング：バナナパン5個

パックマン：ビスマルク風エッグサンド10個

ピカチュウ：ポケモン用の弁当

ファルコン：唐揚げ弁当

フォックス：チーズハンバーグ弁当

ベル：ハンバーグ弁当

マリオ：キノコパスタ弁当

マルス：野菜炒め弁当

ヨッシー：ホットドッグずし20個

ランス：おくるみパン

りょう：カレーパン1個、メロンパン1個

ルカリオ：ポケモン用の弁当

ロックマン：栄養剤マスカット味1つ

全員、購入した食べ物を受け取り、代金となるスピリッツポイントを支払った。

「ありがとうございました。またのご来店をお待ちしております」

一行は近くのテーブルがある場所に着き、買ったものを早速食べる事にした。

「いただきますー！」

フランスが買ったおくるみパンは、外はかりかり、中はふんわりのフランスパンとハーブバター、季節の果物を布でくるんだ弁当だ。カービー、ヨツシー、パツクマンは自分で買った昼食をたくさん食べている。

「美味しいー！ おくるみパンは絶品だね！」

「素朴な味だからね。この野菜弁当も、僕の口に合うよ」

「……うむ、なかなかの味だ」

まじめな性格のルカリオは、好き嫌いなく弁当を食べている。

フォックスとドクターも、黙々と弁当を食べ続けていた。

「村長さんの仕事って大変なの？」

「まあね、でもしずえは泣き言一つ言わずに僕を手伝ってくれるよ。

僕より年上なのに、偉いなあ」

ちなみに、りようは12歳、しずえは23歳である。

そういえば、彼女はどこにいるのだろうか、とベルはこの時思っていた。

ヨツシーは、ペロリーメイトを食べているシャドウが気になって声をかける。

「あれ、シャドウさくん？」

「僕に何の用だ」

「それだけで十分ですか？ もっと食べたくなかったですか？」

「お前が食べ過ぎていただけだ。そもそも僕は食はずとも飲まずとも死にはせん」

シャドウは自分が不老不死である事をヨツシーに伝えた後、静かにペロリーメイトを食べた。

こうして、一行は談笑しながら弁当を食べた。

弁当を食べている時は、ほっとできる時間だ。

戦ってばかりで疲れている一行を癒せるだろう。

「ぐちそうさまー！」

こうして、弁当を食べ終わった後、一行は再び、スピリッツの解放に向かうのだった。

その頃、某所では、緑の髪のメイドが暴れ回る左手袋を止めようと説得していた。

「——様、どうか私の声をお聞きください」

「グヌヌヌ……ドリイ、キサマハ——サマニタテツクノカ……?」

「違います、貴方に戻ってきてほしいのです。こんな事は、もうやめてください……」

「シネエー！」

左手袋は、ドリイと呼ばれたメイドにいきなり襲い掛かってきた。

ドリイは杖で攻撃を防いだ後、魔法の矢を左手袋に放つ。

「こんな貴方はもう貴方ではありません」

「ワタシヲ……ウラギルノカ？ ドリイ……」

「いいえ、わたくし私は……」

「モウヨイ、キサマニハシツボウシタ。カエルゾ」

「ひ……きやあああああああ！」

そのまま、左手袋とドリイは、姿を消すのだった。

27 シヤドウ大活躍？

昼食を食べ終わった一行は、スピリッツの解放を再開した。

街の中には、キーラに操られたスピリッツがうろろうろしていた。

「冗談は、その胸だけにしなさい！」

シーダのミラージュマスター、織部つばさや……。

「おし、これからどんどん特訓しようぜ！」

マックをボクサーとして鍛え上げたトレーナー、ドック・ルイス……。

「仕留めるぞ」

「きやああああああつー！」

マリオの元恋人で現友人、レディ・ポリーン……。

「10まんボルト！」

「サンダーボルト！」

魔法使いの少女、シャールロット・オーリン……。

「フオロースロー！」

「いただきますよ〜！」

「ふっ！」

「はっ」

「それ！」

「フアルコン……パンチ！」

さらには、オイルパニック、TRAILER、うんてんしゅ、腹式呼吸、カイル・ハイド、

名探偵ピカチュウなどもいた。

「次はここね」

「ああ」

次に一行が向かったビルが建っている場所には、仮面をつけた獣人がいた。

その獣人は、学園生徒会副会長のようにな整った容姿をしていた。

一方で、自由気ままな黒猫の掃除屋のような雰囲気醸し出している。

また、その目はトンファーを操る風紀委員長のように鋭かった。

「き、貴様は、シャドウ……!」

「久しぶりだな」

シャドウは冷笑を浮かべながらその獣人を見る。

マリオは、視線を動かしながら二人を見ていた。

「誰だ、こいつは?」

「こいつはエッグマンの世界征服に手を貸した獣人、

チームジャツカルのリーダー、インフィニットよ」

ベルは、獣人のスピリッツについて皆に簡潔に説明した。

「インフィニットとシャドウに因縁があるのか?」

「……インフィニットになる前の忌々しい記憶だが、

この黒いハリネズミが俺の心に大きな傷を与えた。

二度とあいつとは戦いたくなかった。二度とあいつの顔を見たく
なかった。

あれからしばらくして、俺はこの世界にスピリッツとして現れた。

そう、新たに手に入れたこの光の力を使って、貴様に復讐をするた
めに!」

インフィニットはシャドウを指差してそう言った。

どうやら、彼はシャドウのせいで癒しがたい大ダメージを植え付け
られてしまったようだ。

しかし、ベルはそんな事などどうでもいいというように首を横に振
る。

「そんな茶番、どうでもいいわ。私、スピリッツを解放するために戦っ
てるんだもの」

「どうでもいい……だど?」

目的達成を主とするベルは、

シャドウとインフィニットの因縁は自分にとって関係ないと言
切った。

彼女の言葉が少し癢に障ったのか、インフィニットの眉毛がピクリ
と動く。

「それよりあんた、キーラに操られてるんでしょ?」

「操られてなどいない！」

「……ふん、虚勢を張っちゃって。でも、大きな口を叩けるのも今のうちよ。」

「……頼むわよ、マリオ」

「え、なんで俺に振るんだ」

「このスピリッツを身体に降ろして」

「は？　なんでだ？」

ベルは、スピリッツボールの中からブレイズのスピリッツを出した。

炎使いであるとはいえ、自分と違う世界、

しかも女性のスピリッツである事にマリオは疑問を抱いていた。

「分かってないのね、あんた。ブレイズとインファイニットは初対面なのよ。」

せつかく混ざり合ってる世界なのに、会わせないわけないでしょ？」

「た、確かにそりやそうだけどよ……男に女の魂を降ろすなんて……」

「つべこべ言わずに降ろしなさい！」

「……はいはい」

マリオは、渋々ながらもブレイズのスピリッツをその身に憑依させた。

ブレイズのスピリッツを宿したマリオの身長が大きく縮み、シャドウより僅かに低くなった。

『この身体は、だぶだぶの服を着るような感覚だな……』

「ん？　貴様、見慣れない猫だな」

『ブレイズ・ザ・キャットだ。そういうお前は何という』

「……インファイニットだ」

ブレイズとインファイニットは、初対面だったようでもまずは互いに名を名乗る。

だが、全員ギスギスした雰囲気であった。

「言っておくが、今の俺に勝つ事はできない。」

「ゴミが一つ増えたところで、無敵の俺に勝てるはずがない！」

「それはおかしいわね。」

私が調べたところ、あんたのランクはホープ……つまり、レジエンドのポリーンよりも格下よ」

『だが、格下でも強力な技を使う事はある。舐めてかかると痛い目を見るぞ』

「その猫の言う通りだ、死神。俺こそが、最強なのだからな！」

「貴様が最強を名乗るのならば、僕は究極を名乗ろう！ 来るがいい！」

猫の皇女、無限の力を持つ獣人、黒き究極生命体、そして死神のバトルロイヤルが始まった。

「クソオオオオオ……。またしても敗れるとは……」

『己の力を過信し、他人を下に見た事。それこそが、お前の敗因だ』

ブレイズとインフィニットは最後まで互いの名を言わないまま、戦闘を終えた。

「ふう……終わった、な」

ブレイズのスピリッツが抜けたマリオが一息つく。

ベルはきよきよと辺りを見渡した後、頷いてマリオの方を向き、こう言った。

「そうね、今日はここまでにしましょう」

「ん、連戦が続いたしな。いいぜ」

「じゃ、みんなに連絡をしてくるわ」

ベル達が皆に連絡をしようとする、後ろから叫び声が聞こえた。

「だ、誰!？」

「ウアアアアアアアアアアア!!」

ベルが叫び声のした方を向くと、触手が生えた橙色の髪をした少女が、

叫び声を上げながらブキで街を塗っていた。

彼女の眼は真っ赤に血走っており、見るもの全てを汚いインク色に染め上げようとしていた。

「……マール！」

その少女は、以前にシャドウが出会った事があったインクリングこ

とマールだった。

シャドウは拳銃を取り出し、マールに向けて発砲する。

「ウアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ちっー!」

しかし、マールはシャドウの発砲をかわし、壁をスプラシューターで塗りたくる。

「街中でナワバリバトルってところかしら」

「普段からは想像ができないほど、過激になっているな」

「みんな! マールとナワバリバトルをして勝ちましょう! 挑むのは?」

「もちろん、僕だ」

シャドウがナワバリバトルに参加しようとする、彼の目の前にリッター4Kが落ちてきた。

「これは……? そうか、これがナワバリバトルで使う『ブキ』というわけか」

シャドウはそれがナワバリバトルで使用するものだとすぐに理解し、

リッター4Kを装備して暴走するマールと向かい合う。

「さあ、来るがいい! マール!!」

「ウアアアアアアアアアアアア!!」

今ここに、一対一の、変則的なナワバリバトルが始まった。

「いくぞ……はっー!」

シャドウはリッター4Kを溜めて、床を直線状に塗り潰した。

彼のインクは、イメージカラー通りの黒である。

まだマールは来ていないため、シャドウは塗る事に集中している。

ちなみにシャドウはインクリングではないが、

このナワバリバトル中は特別にインクの中に入る能力を持っている。

これにより、インクを回復しながらシャドウは床や壁を塗っていた。

「この辺は粗方塗り終わったな」

周辺の塗り終わりを確認したシャドウは、

インクの中に潜ってまだ塗っていない場所をリッター4Kで塗る。すると、マールがスプラシューターを連射しながらシャドウに突っ込んでいった。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「くっ！」

シャドウの目の前に、マールの姿が現れる。

身体にマールが放ったインクが命中したが、キルになるほど体力は減らなかつた。

「確か、サブウェポンはこれだったな」

シャドウはサブウェポン・トラップでマールを足止めした後、インクに潜って距離を取った。

マールの姿は、もうシャドウの視界からは消えた。

「このブキは射程が長い、できるだけ距離を置いて使おう」

シャドウは自分のブキ、リッター4Kの性質を理解して戦う事を心がけた。

ナワバリデュエルが始まって一分が経過した。

シャドウとマールが塗ったエリアの広さは、ほぼ同じだ。

若干マールの方が広いが、十分逆転は可能だ。

「ウアアアアアアアアアアアア！」

マールがスプラシューターを乱射しながらシャドウに突っ込んできた。

「ぐっ、うっ、うっ！」

見境ない乱射により放たれたインクの弾幕がシャドウを襲う。

シャドウは何発も攻撃を食らってしまうが、

ギリギリで耐えてからトラップを設置し、すぐに距離を置いた。

「この距離なら……届くか？」

シャドウがキルを狙い、リッター4Kを発射しようとした時、彼の背後にインクが命中した。

「ぐ……い……この僕が背後を取られるとはな……油断したか……」

その一撃が決め手となり、シャドウは倒れた。

マールは赤い瞳を爛々と光らせて、スプラシューターを構え直した。

「……もう、こんなに塗っているとはー!」

シャドウはリスポーン地点から街を眺めていた。

気がつくとも、既にエリアの半分以上をマールのインクが塗り潰していた。

残り時間は1分30秒、シャドウは反撃するべくリッター4Kを構え直した。

「ウアアアアアアアアアア!!」

マールはスペシャルウェポン「スーパーチャクチ」を使い、シャドウ目掛けて突っ込んできた。

「ぐうっ!」

シャドウは直撃せずに済んだが、衝撃波でダメージを食らった。

それでも体勢を整えたシャドウは、トラップを設置してマールを足止めし、

彼女の背後に回り最大まで溜めたリッター4Kを撃つ。

「アアアアアアアアアア!!」

マールは致命傷を負い、リスポーン地点に飛んでいった。

シャドウは今はチャンスと街を塗り返す。

リッター4Kは一撃の威力が大きく、一発放つだけでどンドン塗り返していく。

さらにスペシャルウェポン「アメフラシ」の効果もあって、

マールの行動を制限してさらにエリアも広がった。

そして、残り時間は5秒となり、シャドウは最後のチャージを放つ体勢に入る。

「これで……最後だ!!」

そして、シャドウのリッター4Kが炸裂した瞬間、タイムアップを迎え、試合は終了した。

結果は、もちろん――

「僕の勝ちだ!」

シャドウの勝利で終わった。

「……………う……………ここは……………?」

シャドウがナワバリデュエルに勝利した事で、キーラに操られたマールは正気に戻った。

マールは何が起こったのか覚えていない様子でぱちぱちと瞬きした。

街のインクは、すっかり消えて元に戻っている。

「僕がナワバリバトルに勝ったところだ」

「あの、なんで私がここにいますか?」

「キーラって奴に操られていたのよ。シャドウが元に戻したから大丈夫」

「え……………あや……………つ……………られ……………きやあああああああ!」

自分が操られていた事を知ったマールはショックを受けてシャドウに駆け寄る。

しかし、マールの方が体格は大きかったため逆にシャドウを潰しかけた。

「……………や、やめろ……………」

「あ、ごめんなさい」

マールは慌ててシャドウから離れ、謝る。

「えつと……………シャドウ」

「ああ、僕だ。シャドウ・ザ・ヘッジホッグだ」

「また会ったね、シャドウ! マールだよ!

……………あれ? あなた、どうしてファイターになってるの?」

マールは、シャドウがこの大乱闘に参戦している事に疑問を抱く。すると、シャドウはそれに答えるように黒いファイターパスをマールに見せた。

「これがあるからだ」

「これは?」

「テンポラリーファイターパスというものだ。まあ、所謂……………非公認ファイターの証だな」

このテンポラリーファイターパスは、

ファイターでない者もそれと同じ力と権利を得る事ができるもの

であり、

最初、マスターハンドは出し渋っていたが、従者の思いに折れてついに取り出したのだ。

「やったあ！ 正式じゃないとはいえ、シャドウと一緒に戦えるなんて嬉しいよ！」

マールは満面の笑みを浮かべて万歳をした。

以前に二人きりで話した事があり、その時は緊張しまくっていたが、

現在はこのように打ち解けているのだ。

「これにて一件落着、だな」

「そうね。じゃ、マール、あんたはこれから私達の仲間になって、この世界を救うのよ」

「世界を救うのか……。ちよつと怖いけど、やってみるよ！ みんな、よろしくね！」

「ああ、よろしく！」

こうして、新たな仲間、インクリングのマールを加えた一行は、キーラから解放した街を後にするのだった。

288 魅惑のふうせんポケモン

マールを仲間にした一行は、スピリッツを全て解放した街を後にして、

新しい場所に向かっていった。

スピリッツを感じ取る事ができるベルを先頭にし、

スネークの助言で敵に見つからないように歩いていく。

「……ベル、スピリッツはどこにあるんだ？」

「うくん、今探索中よ。ちよつと待って」

ベルは死神の能力を使って、スピリッツがたくさんいる場所を探した。

「この魂を感知する能力、鈍らないように使っておかなきゃ」

「魂を感知できねえ死神はただの死神だ。そうだろ？ ベル・クリーブ」

「ええ……そうよ」

マリオはスピリッツ解放に専念しているベルを、少しだけ気障な言葉で応援した。

「ありがとう、マリオ。あんたはやっぱり、ミスタービデオゲームよ」

ベルは明るい笑顔でマリオの応援に返した。

ミスタービデオゲームの言葉は、苛烈なる死神に勇気を与えた。

「わあ〜！」

「かっこいい〜！」

カービイら子供組は、ベルを憧れの目で見ていた。

「よし、ガンガンいくわよー！」

「ああー！」

マリオに勇気づけられたベルは、腕を振って一行をスピリッツがいる場所へと導いていく。

力の弱い者達は、ベルの姿を見て平伏している。

「これぞ『黒鬼も伏せて通る』、略して『黒伏せベル』よー！」

「あ、あはははは………」

そう自慢するベルを見たマールは、苦笑いした。

そして一行が着いた場所は、河川だった。

「うわあ……」

「綺麗だね……」

キーラ軍が襲撃したとは思えないほど、綺麗な川が流れていた。

この世界を侵略したキーラも、自然には手を付けなかった事を実感する。

水が苦手なマールは、自分より体格が小さいシャドウにしがみついていた。

「わ、私、水が苦手なんだ。だから、ここで待ってるね」

「構わん」

インクリングのマールは、水に落ちると身体が溶けてしまう。

そのため、この河川エリアでは本来の力を発揮できないと思ったのか、

シャドウはマールの留守番を許可した。

「いいの？　ありがとう、シャドウ。じゃあ、スピリッツの解放お願いね」

「ああ」

一行はマールを安全な場所に留守番させ、河川のスピリッツを解放しに向かった。

「ラビッツめー！」

「大砲よりもこっちの方が妖怪を倒せるんじゃないかい？　シノブ君」

ドンキーコングはラビッツマリオ、ドクターはシノブのスピリッツを解放した。

「えいー」

ロックマンはロックバスターを連射し、バルーンファイトの主人公を河川に落とすとした。

このエリアに魚はいないので、食われる事なくその魂はベルに回収された。

「こいつら、斧で戦うんだったな」

シークはサジ&マジ&バーツの斧攻撃を華麗にかわし、体術と暗器

で彼らを撃破した。

「く……強い！ でも、これで終わりだよ！」

「うあああああああああ！」

マルスは苦戦はしたものの、エース級のスピリッツ、ファイの撃破に成功した。

その後はヨッシーがヘラクロス、ベルがメタルソニックを解放し、キーラに操られたスピリッツの残りは少なくなった。

「後は……んーと、こいつだけか？」

「プリン……だな」

残っているのは、天才ゴルフ少年・キッドと、ふうせんポケモン・プリンだった。

シークは正直、何故彼女が第一期の最古参メンバーにいるのかを疑問に思っていたが、

マスコットの存在と自分で結論付けた。

「まあ、キッドはノービス級のスピリッツだし、気軽に戦おうぜ、気軽に」

「あ、ああ……」

なんだか良く分からないながらも、マリオ、ヨッシー、ピカチュウ、ロックマン、りょう、

シークはプリンとキッドを解放するために戦いを挑んだ。

「ロックバスター！」

ロックマンはキッドを狙ってロックバスターを放ち攻撃する。

彼の攻撃が命中した後、ピカチュウはキッドにロケットずつきで体当たりをする。

「えいー！」

「あたらないでしゅ」

りょうのパンチをプリンは転がって華麗にかわす。

「当たりますよ！」

「ウッ！」

だが、プリンが転がった場所にはヨッシーがいて、ヨッシーはプリンに卵を投げてダメージを与えた。

「ガツーンナグーリ！」

マリオはキツドの攻撃をかわした後、ハンマーを取り出して攻撃する。

本職は配管工なのでハンマーは器用に使えるのだ。

「サンダーキック！」

「キャアアアア！」

ピカチュウの10まんボルトを纏ったヨツシのキックがプリン
の体力を削り、

電撃の追加効果で痺れさせる。

マリオはキツドを掴んで投げ飛ばして倒し、ベルがキツドのスピ
リッツを捕まえた。

「自分の身体を投げるなんて複雑だな……でも残るはプリン、お前だ
けだぜ」

「ムムム……」

劣勢になったプリンは、少し脂汗を掻いていた。

マリオ達は油断せず、プリンに攻撃を仕掛ける。

「仕込針！」

シークは両手に仕込んだ鉄製の針をプリンに目掛けて投げつける。
ナイフに比べて威力で勝るが命中率で劣る。

「ウウ……コレナラバ」

プリンは反撃でシークをはたこうとするが、

シークは攻撃をかわし飛び上がった百舌改でプリンを上空から攻
撃する。

「これでおしまい！ ロックバスター!!」

そして、チャージしたロックバスターがプリンに命中すると、
彼女の身体は吹き飛び、川の中に飛び込んだ。

「あ、お帰り！」

「ただいまー」

プリンを解放した一行は、マールがいるところに戻ってきた。
彼女の傍の川には、プリンが浮かんでいた。

「……………どう？」

カービィ、シャドウ、ベルは、川に浮かんでいるプリン表情を見る。

プリンの目は元通り青色で、一行への殺意も見受けられない。キララの光の呪縛は衝撃により解けたようで、

それほど深くない川だったためプリンは生きていた。

「大丈夫みたいね。とりあえず起こさなきゃ。よいしょ、つと……それ！」

ベルはプリンを引き上げ、タオルを取り出して彼女の身体を拭く。口の中に入っていた水も、ピカチュウが全部吐き出して呼吸を整えた。

しばらくすると、プリンはぱちくりと瞬きして、やってきた一行を見つめた。

「ここ、どこでしゅか？　ぷりん、どうしてこんなところにいるんでしゅか？」

見知らぬ場所に飛ばされたため、プリンはかなり困惑していた。

「お前は悪い夢を見ていたんだ、でも大丈夫だ」

ピカチュウがプリンに優しい声でそう言うと、プリンはゆつくりと立ち上がる。

だが、プリンは笑顔ではなく、むしろがっかりした表情だった。

「助かったのに嬉しくないのか？」

「せっかくぷりんがみんなのためにけーきをつくってきたのに、びしょびしょになっちゃったでしゅ……」

そう言って、プリンはずぶ濡れになった自作料理をマリオ達に見せた。

彼女が作ってきたのはケーキのようだが、黒焦げで僅かに異臭が漂っていた。

「あー、それはラ……いや、ドンマイだな」

「……何、これ」

「プリンの料理は死ぬほど不味いんだ。

あのクツパやガノンドロフですら、一口食べて気絶するほどだぞ」
マールがプリンの作った料理を見てドン引きする。

ピカチュウは苦い顔かつ小声でマールに説明した。

つまり、プリンの料理は最終兵器と言えるほど、とてつもなく不味いのである……。

「……食べちゃダメ、だよな」

「あ、ああ……」

マールはごくりと唾を飲み込んだ。

食べれば命に係わるプリンの料理、一体どんな味なんだろうとマールは興味を抱いた。

「じゃ、ぷりんもいっしょにいくでしゅ！」

「おう、キーラからこの世界を救おうぜ！」

こうしてキーラの呪縛からまた一人、スマブラファイターが解放された。

その名は、魅惑のふうせんポケモン、プリン――

29 二振りの剣

河川に捕まっていたプリンを仲間にした一行は、次の仲間を探すため、河川を後にした。

「プリン……頼むから料理は俺達に振る舞うなよ」

「どうしてでしゅか？」

「俺達を殺すなど言うのと同じだ」

ピカチュウはプリンに、殺人料理を作らないように注意した。

しかし、プリンはまだ子供なので「わからないでしゅ」と言った。

「つまり、だ。お前の料理は誰も食いたくねえって事なんだよ」

「うん、わかったでしゅ！」

(やれやれ……)

プリンはやっと、ピカチュウの言った事を理解してくれたようだ。

「それで、次はどこに行くんだ？ まだスピリッツはあちこちにいるだろ」

ファルコンは次の目的地をルカリオに聞いた。

ルカリオは頷くと、目を閉じて精神を集中する。

ファルコンが固唾を呑んで見守っていると、ルカリオがいきなり目を見開いた。

「どうぶつの森に……魔剣の波導を感じる」

「うくん、似合わないね」

「うんうん」

ほのぼのとしたどうぶつの森に、魔剣の波導。

確かに似合わないな、とりようは首を傾げ、カービィはうんうんと頷く。

「だが、行ってみるほかはない。行くぞ」

「うん」

一行は緊張しながら、どうぶつの森に行った。

どうぶつの森の入り口に着いた時、りようは懐かしそうな表情ではしやいでいた。

それもそのはず、りようはどうぶつの森の現村長なのだから。

「わーい！ どうぶつの森だー！」

「……なんだかんだ言ってるあんたもまだ子供なのね」

ベルは無邪気なりょうの姿を見て苦笑いした。

だが、ルカリオの言った通り、この周辺にはスピリッツがうようよしていた。

解放するには、戦って勝たなければならない。

「……でも、りょう、はしゃぐのは後にしなさい。

私達はスピリッツを解放するためにここに来たんだから」

「う、うん」

「さあ、みんな！ スピリッツを解放するわよ！」

「おー！おー！っ!!」

ベルの号令で、一行は一旦解散して、スピリッツの解放をしに行った。

「KATANAアタック！」

「当たらん」

スネークはテデイの刀攻撃をかわし麻醉銃を撃ち、テデイのスピリッツを解放した。

「うおりゃあー！」

「あ~~~~れ~~~~」

ファルコンパンチがDr. クライゴアに命中し、彼のスピリッツは解放された。

「わたしのお菓子、召し上がれ！」

「君の病を治してあげるよ、カプセル！」

「いくぜ！ ファイアボール！」

「ブラスターは撃つ前に光線が飛ぶ！」

「そもそも、これはバドミントンだが」

「すまないな……だが、これも仕事だからな」

アイシヤはずえの双子の弟・ケントを、マリオとドクターはアネモとメットールを、

フォックスとルカリオはクイック&スローを、

シャドウは霊や思い出が見える少女・不^{こず}来^{かた}方^た夕^{ゆう}莉^りを解放した。

「後は、彼らだけだね」

残ったスピリッツは、まめつぶ商店を営む双子の兄弟狸、まめきちとつぶきちだった。

ほとんど見分けがつかないので、一卵性だろう。

「身体が勝手に動いちゃうんだ!」

「だから、ボク達を助けてください! だなも!」

「うん、分かったよ!」

彼らもまた、キーラに操られており、表情はどこか苦しそうだった。もちろん、助けないわけにはいかない。

まめきちとつぶきちの解放に当たるのは、どうぶつの森の村長りょうと……。

「一緒に頑張ろうね、シャドウ!」

「……その言い方は気に入らん」

銃器を持つシャドウと、ブキを持つマールと……。

「俺達がお前らを助けてやる!」

「だから、待っててね! まめつぶ君!」

「安心しろ、じっとしてな」

第一期からの古参メンバー、マリオ、カービィ、ファルコンだった。

「えいっ!」

マールはスプラシューターを撃って攻撃した。

「うくん、どっちがどっちだか分からないよ……」

「あっちがまめきちで、こっちがつぶきちだよ」

「だから分からないってば」

「おりゃ!」

マリオはファイアボールを放ち、マールが攻撃した狸の方に火傷を負わせた。

「あつっ—いい!」

「あー、まめきち!」

今の言葉によって、マリオとマールが攻撃したのはまめきちの方だという事が分かった。

それが分かったマールは、サブウェポンのポイントセンサーを投

げ、

まめきちにマーキングする。

「あなたがつぶきちなら……シヤドウ、攻撃だよ！」

「ああ……カオススパア！」

シヤドウは手からエネルギー弾をつぶきち目掛けて放った。

攻撃はつぶきちに正確に命中し、彼を吹っ飛ばす。

「ファルコン、パ……」

「させません！」

「だなもー！」

「いてて！ かなり食らっちゃった」

ファルコンがファルコンパンチを出そうとした時、

まめきちとつぶきちが彼に体当たりして転倒させた。

ファルコンパンチの隙は大きかったようで、ファルコンは大きなダメージを受けてしまった。

「いっくよー、ハンマー！」

「痛い！ だなも」

カービイはつぶきち目掛けてハンマーを振り下ろして押し潰す。

「ブレーンバスター！」

「おととと！」

「ファルコンダイブ！」

さらに、つぶきちを掴んで投げ飛ばし、りょうがつぶきちに斧を振り下ろす。

シヤドウも銃を連射してまめきちの身体に穴を開けた。

「後はみんな一緒に……鬼殺し火炎ハンマー!!」

そして、カービイが炎を纏ったハンマーを振り下ろし、まめきちとつぶきちを同時に解放した。

「ふう〜、助かりました〜」

「助かりました〜、だなも」

正気に戻ったまめきちとつぶきちは、マリオ達にお礼を言ってお辞儀する。

「ああ、どういたしまして」

「ところでまめきち、つぶきち、しずえはどこにいるんだい？」
りょうは、自分の秘書がどこにいるかをまめきちとつぶきちに聞いた。

すると、二匹は何か知っていて、首を縦に振る。

「彼女ならあつちにいますー！」

「ついてきてくださいー！」

りょうは、まめきちとつぶきちの後を追って走っていった。

すると、向こう側に、光の鎖で縛られたシーズーの女性が台座に置かれていた。

「しずえー！」

それは、りょうの秘書のしずえだった。

しかし、この場所からでは彼女には届かなかった。

「そっか……彼女はそこにいたんだね」

「どうでしたか？」

「役に立ちましたか？」

「ありがとう、まめきち、つぶきち。助かったよ」

「どういたしまして！（だなもー）」

りょう、まめきち、つぶきちは互いにお礼を言うそれぞれの場所に戻っていった。

「よし、これでどうぶつの森のスピリッツはみんな解放したね。そろそろ帰ろっか」

「待て」

どうぶつの森にいたスピリッツを解放し、そこを後にしようとする
と、ルカリオが止めに入る。

「待て、って……何かいるの？ ルカ兄」

「北側に二つの剣の波導を感じる」

「あ、もしかして……仲間かな？ ちょっと行ってくるね。マリおじ
ちやくん、ピカピカく、

アイシヤく、シャド兄く、ベルベルく、ちよつとついてきてー！」
「はい」

カービィはマリオ、ピカチュウ、アイシヤ、シャドウ、ベルを呼ん

で、

彼らと共に北側に向かつていった。

すると、結った金髪の女剣士と、茶髪の魔剣使いが、光の鎖に縛られ台座に置かれていた。

女剣士はセイバー（真名：アルトリア）、魔剣使いは「下がる男」ひいらぎれんじ 柊蓮司つばきれんじだった。

「そんな……アル姉……蓮兄……！」

カービイは、強い心を持つ二人でもキーラの呪縛に勝てなかった事に愕然とした。

「恐らく、キーラから攻撃を受けた事で心身共に弱まったところに暗示をかけて操ったのだろう」

シャドウは、セイバーと柊がキーラに操られた理由を推理した。

しかし、理由がどうであれ、二人を助けなければ状況は劣勢のままになる。

カービイはセイバーと柊の身体に触れ、二人を縛っている鎖を砕いた。

セイバーと柊は赤い瞳で六人を睨みつけている。

「……キラサマノタメニ」

「……コロス」

セイバーは風を纏った不可視の剣、柊は魔剣の切っ先をマリオ達に向け、虚ろな声で呟いた。

六人は唾を飲み込んだ後、同じく戦闘態勢を取る。

「待っててね、セイ姉、蓮兄。今、僕達が助けるよ！」

「こんな頼れる奴を捕まえないなんて、死神としてどうかしているわ」

「……邪魔はさせないぞ」

「セイバー、柊、光の呪縛に負けるな」

「悪しき光は必ず打ち破る！」

マリオ、カービイ、ピカチュウ、ルカリオ、シャドウ、ベルは、操られたセイバーと柊を正気に戻すため、彼らに戦いを挑んだ。

30 異世界の剣士達

アルトリアと柊蓮司との戦いが始まった。
「はっ！」

ルカリオはアルトリアをはっけいで攻撃するが、アルトリアは彼の攻撃を見切ってかわす。

「うおりゃー！」

ピカチュウは柊蓮司に電撃を落として痺れたところに突っ込んで吹っ飛ばす。

そこにベルが大鎌で斬りかかった後、シャドウが拳銃でアルトリアの腹部を撃つ。

「ウグッ……」

「アルトリア、正気に戻れ！　アイスボール！」

マリオはアルトリアにアイスボールを放ち、凍らせる。

アルトリアは氷を振り払ってマリオを剣で斬りつけた。

「渾身撃！」

「おっと！」

柊蓮司は魔剣に力を溜め、振り下ろしてベルを切り裂こうとしたが、

ベルはギリギリのところまで彼の攻撃をかわして大鎌で反撃する。

「危ないじゃないの、どうしてくれるのよ」

「……コロス」

「きゃあー！」

柊蓮司は感情のない声で、もう一度ベルに斬りかかった。

まともに食らったベルは腕を押さえて苦しむ。

「つつ、なんとという力なの。か弱い私になんて事をするの？」

「カヨワイ……？」

「いや、お前は違うdぐぼはあああああ!!」

ピカチュウが突っ込みを入れようとすると、ベルが大鎌の柄でピカチュウを殴った。

「あら、ごめんなさい。手が滑っちゃったわ」

(わざとだろ……)

ピカチュウは言うともたべルに殴られるため、口には一切出さなかった。

「チャバンハドウドモイイ。キル」

べルとピカチュウのやり取りに苛々したアルトリアは、聖剣でシャドウに斬りかかる。

シャドウは飛び上がって攻撃をかわし、サブマシンガンを撃って反撃する。

弾丸はアルトリアだけでなく柊蓮司にも命中し、彼に浅くはない傷を負わせた。

「ライトニング・ハンマー！」

カービィはハンマーを取り出し、ピカチュウは彼のハンマーに電撃を落とし、

そのまま雷を纏ったハンマーをアルトリアに振り下ろす。

攻撃がアルトリアに命中し、大ダメージを与えるとハンマーから電撃が飛び散り、

アルトリアと柊蓮司の身体を痺れさせる。

「ウググ……ナマイキナ……」

「果たしてそれはどっちかな？」

シャドウは指を鳴らし、時空の歪みを発生させて柊蓮司を巻き込む。

その隙にルカリオは柊蓮司に突っ込んで波導を纏った蹴りを浴びせた。

「アル姉！ 蓮兄！ 僕の日、見える？ 僕の声、聞こえる？」

カービィはアルトリアと柊蓮司の戦意を削ぐため、二人に大きな声で呼びかけた。

しかし、二人は反応するどころか、武器を強く握ってカービィに斬りかかってきた。

「うわあああー！」

カービィは斬られるのを覚悟し、両手を構えて防御し目を閉じた。だが、いくら待っても、カービィは傷を負わなかった。

一体どうなったんだろうとカービィが前を見ると、ベルがカービィを庇ってアルトリアと柊蓮司に斬られていた。

「ベルベル……!」

「大丈夫よ、私が守ったから……」

ベルは苦悶の表情を上げながら項垂れていた。

カービィは自身を庇ったベルを見て放心している。

そして、ベルは「ぐふっ」と言った後、ばたりと倒れ、戦闘不能になった。

「ヒトリ、タオレタカ」

「キーラサマニササゲルイノチ、イタダク」

「させないぜ! アイアンテール!」

柊蓮司がベルの胸を魔剣で刺そうとすると、

ピカチュウが鋼のように固くした尻尾で柊蓮司を打ち据える。

「おりやつ!」

「えーい!」

マリオのファイア掌底とカービィのキックがアルトリアを打ち据える。

アルトリアはシャドウに斬りかかるが、シャドウはかわした後、容赦ない一撃を叩き込んだ。

「僕の邪魔をする気か? 容赦はしない」

「ナマイキナ……」

「それは、どっちの事だ?」

シャドウは丸くなって目に見えないスピードで柊蓮司に体当たりした。

柊蓮司は反応できず、吹っ飛ばされる。

「はどうだん」

ルカリオは吹っ飛んだ柊蓮司に対し、はどうだんで追撃をする。アルトリアは距離を取り、ベリサルダに力を溜める。

「まずい、止めるぞ!」

「ジャマハサセナイ。ショットプット!」

「ぐあ!」

ストライク・エア
「風王鉄槌」

「うああああー！」

マリオがアルトリアの攻撃を止めようとするが、
終蓮司はマリオに大地の力を秘めた弾丸を放ちを怯ませる。

アルトリアは風の鞘から剣を抜き、マリオを吹っ飛ばす。

彼女が持つ剣は、キーラの如く禍々しく光り輝いていた。

そして、アルトリアが大きく剣を振り下ろした瞬間。

「マリオはやらせんー！」

「……!?」

ルカリオがアルトリア、終蓮司、マリオの間に割って入り、アルトリアの攻撃をもろに受ける。

アルトリアは、この予想外の事態に目を見開いていた。

「ル、ルカリオ!?!」

「心配するな……私は死なない……」

そなた達ならば……異世界の魔剣士を解放できると信じている……」

そして、そのままルカリオは倒れ、ベルと同じように動かなくなつた。

「チツ……ナラバ、コンドハコイツダ」

アルトリアは倒すべき対象を倒せず、舌打ちしてシャドウに斬りかかるも当たらなかった。

ピカチュウは遠くからアルトリアにエレキボールを放って攻撃する。

「ハアアッ！」

終蓮司は魔剣でマリオ達をまとめて薙ぎ払う。

マリオ達はシールドを張って攻撃を防ぐが、体力は徐々に削られていく。

こちら側の戦力も、二人減っている。

このまま不利な状況が続けば、全員アルトリアと終蓮司に倒されてしまい、

希望の光が完全に失われる。

どうにかならないかとカービイがあたふたしていると、彼の身体が淡く光り輝く。

何かとカービイが振り向くと、そこではアイシヤが祈りを捧げていた。

「マスターハンド様……聞こえますか？ わたしですわ……アイシヤです」

「グウ……」

アルトリアと柊蓮司は、不愉快そうに顔をしかめた。

その光は、二人が纏う禍々しい光とは違った、温かく優しいものだった。

「アイシヤー！」

「お願いです……どうか、あの二人をキーラの呪縛から解放してください……！」

アイシヤが強くと祈ると、カービイを取り囲んでいた光が強くと輝いた。

彼女の祈りがマスターハンドに届き、カービイに力を与えたのだ。

「ググググウウウ……！」

その眩い光に不快感を感じたアルトリアと柊蓮司は目を塞ぐ。

今がチャンスと、マリオはカービイに叫ぶ。

「やれっ、カービイー！」

「うん……！」

カービイは頷くと地面を蹴り、空を飛んでアルトリアと柊蓮司の懐に飛び込む。

そして、アルトリアと柊蓮司の腹に拳が届くと、手から光が迸り、二人に光が流れ込む。

「グアアアアアアアアアアアアア！」

「アアアアアアアアアアアアア！」

アルトリアと柊蓮司の絶叫が響き渡る。

マリオ、カービイ、ピカチュウ、シャドウは必死で目を閉じて耐えた。

声は小さくなり、やがて尾を引いて消えた。

「……やった……！」

「……勝った……！」

そう……操られた異世界の魔剣士に、マリオ達は勝利したのだ。

31 最後のスマブラ四天王

「……もう大丈夫だよ、みんな」

戦いで重傷を負ったマリオ達は、ドクターにより無事、完治した。一度にたくさんの人を治したドクターは、ふう、とタオルで汗を拭く。

「みんな、よく頑張ったね。異世界の魔剣士をキーラから救うなんて凄いよ」

「ああ……強かった、な」

マリオは戦闘能力も精神力も高いアルトリアと柊蓮司がずっと敵に回っていなくてよかった、と安心した。

しばらくすると、ドクターが最初に治療したアルトリアと柊蓮司が起き上がる。

「……おや？　ここは、どこですか？」

「俺達、一体、何をしていたんだ」

「あ、気が付いたんだね」

カービィはアルトリアと柊蓮司の顔を見上げる。

彼らの瞳も、今までに助けた仲間と同様に正気に戻っていた。

何が起こったのか分からない様子の二人に対し、シャドウは今までこの事情を話した。

「そういう事だったのか……。不覚です……」

「だがそれ以上に、俺達を操ったあのキーラって野郎を許せねえ。」

絶対に、俺自身の手で倒してやる」

アルトリアは少し項垂れるが、

柊蓮司は自身を洗脳したキーラへの怒りを抑えられず拳を握り締めている。

「……柊蓮司、キーラは一応女性だからね」

「そんなの関係ねえ！　そんなの関係ねえ！　そんなの関係ねえ！　はい、許さん！」

「……まあ、侵略者だからね」

柊蓮司とランスのやり取りを見たりようは「やれやれ」といった目

をしていた。

ベルは、無言で精神を集中していた。

「それじゃあ、次はどこに行く?」

ランスが次の行き先を一行に提案すると、

さつきまで精神を集中していたベルが彼に立候補する。

「ここから南に、マリオ、カービィ、ピカチュウが探してるファイターがいるわ。」

そこに行ってみましょう」

「僕達が探してるファイター?」

ベルによれば、南にはマリオ、カービィ、ピカチュウと関係があるファイターがいるらしい。

マリオはそれが誰なのか大体予測はついていた。

「ああ、あいつの事だろう。もちろん、俺は行くぜ」

「僕も!」

「俺もだ」

当然、マリオ、カービィ、ピカチュウはベルの提案に賛成する。

彼女は他のメンバーにも一人ずつ声をかけ、

反対するメンバーが一人もない事を確認すると先頭に立って山に行こうとした。

「それじゃ、行くわよ!」

……と言いたいところだけど、あんな遠い場所にどうやって行くのかしら?」

「あんな遠い場所……? 僕のを忘れたのか?」

「あっ」

そういえば、シャドウのカオスコントロールがあるんだったとベルは思い出すのだった。

「……よし、着いたわ!」

シャドウのカオスコントロールにより、一行は目的地の山に辿り着いた。

山の中には、キーラによってスピリッツ化した住民達がたくさんいた。

まず、一行が出会ったのは、ロックマンと同じ世界にいるスピリッツ、スネークマンだった。

「どこへ逃げててもムダなのだよー！」

「だったら、倒すまでだー！」

このスネークマンのスピリッツには当然、ロックマンが挑み、勝利した。

「うおー、負けてしまった……」

「やったね！」

「今までの自分を『どこへ逃げてても無駄』と言うのは、皮肉でしたね」
アルトリアは、先ほどまでキーラに操られていたスネークマンの言葉を皮肉と捉えた。

キーラの光がどこへ逃げてても当たってしまうという意味に相当するらしい。

「ほへー、アルトリアって頭がいいんだなあ」

ドンキーコングがアルトリアに感心していると、アルトリアは「私の推測ですが」と言った。

「さて、次のスピリッツは……」

アルトリアがスピリッツを解放するために前に出ると、

そこにはセミロングの金髪にそれなりに露出が高い服を着ている少女のスピリッツがいた。

彼女はシュルクの幼馴染、フィオルンである。

「シュルクがいないのが残念だったなー。血眼になって心配したというのに」

柊蓮司はシュルクがまだ仲間になっていない事に残念がつて愚痴を吐いた。

フィオルンも困った顔で「そうだね」と言うが、

それとは裏腹にナイフがアルトリアと柊蓮司の方を向いていた。
「どうやら、二人を倒そうとしているようだ。」

「シュルク、私はあなたが帰ってくる事をずっと信じているわ。だから、みんな、私を助けて！」

「ああ、こんな奴の頼みなんて断るわけにはいかない。いくぜ、アルト

リア！」

「参りますー！」

アルトリアと終蓮司は、キーラに操られたフィオルンに戦いを挑んだ。

「これで終わりです！ 約束された勝利の剣!!」

アルトリアの光の剣がフィオルンを包み、彼女をキーラの呪縛から解放した。

「ありがとう……これで、シユルクに会えるわ」

フィオルンのスピリッツはスピリッツボールの中に吸い込まれていった。

それを見たベルはニツコリと微笑む。

「よかったわね、フィオルン。早く幼馴染に会えるといいわね」

「はい！」

スピリッツボールの中にいるフィオルンは、ベルに笑顔でそう返した。

その後、一行は赤毛の商人アンナ、おたすけピッグ（正式名称はチョップス先生）、

ビッグキユーちゃんのスピリッツを解放。

アンナは必要な物資を一行に届けてくれるお助け役としてサポートする事にした。

「しっかり働いて、あなた達をサポートするわ。あ、もちろんお代はいただくわよ」

「頼りにしているよ、アンナ」

「ありがとね！」

次に一行が遭遇したスピリッツは、桃色の身体に4つの乳房がついた雌牛のポケモン、

ちちうしポケモンのミルタンクだった。

「別名みんなのトラウマ」

「なんで？」

「誰かさんの使うミルタンクが凄く強いからよ」

ベルが与太話をした後で、プリンに憑依したミルタンクが転がって

襲い掛かった。

ベルは大鎌で攻撃を受け止めた後、真剣な表情で戦闘態勢を取る。

「魅了されなくなかったら、私を盾にしなさい！」

「うむ、私も戦おう」

ミルタンクはノーマルタイプなので、かくとうタイプのルカリオも彼女を迎え撃った。

アルトリアとランスも、武器を取ってミルタンクに戦いを挑む。

ロイがこの二人の名前を見たら、共に戦った赤緑騎士を思い出すだろう。

「みんなのトラウマ……どれくらい強いんだろうね」

「ふう、ノービス級にしては疲れちゃったわ」

ベル達は何とかミルタンクを撃破し、彼女のスピリッツをスピリッツボールの中に入れる。

ミルタンクはベルの言う通り、ノービス級にしてはかなり強かったようで、

戦った四人は汗を掻いていた。

「まったく……女は怖いねえ」

「ドクターさん、何か言いましたか？」

「あ、いや、何でもないよ」

こうして、山にいるほぼ全てのスピリッツを解放し終えた後、

一行はベルが探しているファイターを探していった。

「確か、こっちじゃねえか？」

勘が鋭い柊蓮司は、先程までミルタンクがいた場所の近くに向かって走る。

マリオ達も彼の後を追って走っていくと、そこにはファイターが捕まっている台座があった。

彼の隣には、リセットさんの兄、ラケットさんのスピリッツもいた。

「よし、ビンゴ！ あんたが探していたファイターって、こいつか？」

「そうよ」

台座に縛られていたのは、スマブラ四天王の最後の一人、リンクだった。

このリンクは今までと違い、右手に剣を持ち、水色の服を着て、帽子は被っていないかった。

しかし、マリオ、カービィ、ピカチュウは彼の事をよく分かっているようで、

強い気持ち湧き出していた。

「リンク！」

「リンク兄！ 今、助けるよ！」

カービィは急いで、リンクを拘束していた光の鎖を砕く。

すると、光の鎖から解放されたリンクがマリオ達に剣を向けて襲ってきた。

「クロス……クロスクロススッ！」

「……つくそ！ セつかく一緒に乱闘できると思ったのに、こうなるのかよ！」

「……仲間を意のままに操るとは、許しませんね」

「俺もだ！ 卑怯で卑劣な最低野郎なんて、絶対にやっつけてやる！」

マリオは悪態をつき、アルトリアと柊蓮司は武器を構えて操られたリンクを迎え撃つ。

「だから、キーラは女だってベルが言ってたよ」

「そんなの関係ねえっての！」

ランスも柊蓮司に突っ込みを入れつつ槍を構えて彼らと一緒に戦う。

カービィとピカチュウも構えを取り、最後のスマブラ四天王リンクの解放に挑んだ。

「……」

リンクはブーメランを六人に向けて投げ飛ばす。

六人はシールドを張り、リンクのブーメラン攻撃を防ぐ。

「せいやー！」

「急所突きー！」

柊蓮司は魔剣を操ってでリンクに斬りかかり、ダメージと共に痺れさせる。

ランスは柊蓮司に続いて槍でリンクを貫いた。

「リン兄、元に戻って！ ストーン！」

カービィは石に変身してリンクを押し潰し、元に戻った後、ピカチュウはフェイントをかけて10まんボルトを放った。

「まさか、こいつが弟の身体を使うとは……でも、こいつも解放しないとな！」

マリオはルイーダのボディに宿っているラケットさんを殴り、ダメージを与え怯ませる。

アルトリアと柊蓮司は怯んだラケットさんを剣で切り裂いて追撃した。

「ググ……ナマイキナ……」

「おっと！」

リンクは不愉快な表情で立ち上がり、弓を構えて柊蓮司に光属性の矢を放つ。

光属性が弱点の柊蓮司は飛び上がって攻撃をかわすが、壁に跳ね返った矢は正確に柊蓮司に当たり、彼の背中を貫いて一撃で戦闘不能にした。

「くそっ、柊蓮司がやられた！」

柊蓮司が倒された光景を見たピカチュウは舌打ちして

リンクにでんこうせっかで体当たりするが、リンクは盾でピカチュウの攻撃を防ぐ。

アルトリアはどうすれば優勢になれるかをじっくり観察していた。マリオはリンクの隙を見てファイアボールを連発する。

そして、ランスの槍がラケットさんの急所を突いて彼のスピリッツを解放した。

「よし、ベル！ ラケットさんを助けたよ！」

「やっ！」

「……」

ベルが喜んでいると、リンクがマリオとカービィをブーメランで攻撃する。

二人が怯んだ隙に、リンクは同時に斬りかかる。

「いたっ！」

「うわあ！ 何するのリン君！」

カービィはリンクに大声を浴びせるが、リンクは怯まずにもう一度カービィを斬りつける。

マリオはリンクの攻撃を庇った後、ファイア掌底でリンクを吹っ飛ばす。

「ポンプ！」

「からの、10まんボルト！」

「グアアアアアアアアアアアアアア！」

吹っ飛んだリンクの傍で待機していたマリオがポンプでリンクの身体を濡らし、

ピカチュウが濡れたリンクに10まんボルトを放って大ダメージを与えた。

水に濡れた身体は電気に非常に弱くなったのだ。

「……柊蓮司、死んじゃダメよ」

ベルが天に祈りを捧げると、意識を失った彼に光の羽が降り注ぐ。すると、柊蓮司の閉じていた目が再び開いた。

「ふっかーっ！」

「私が蘇生魔法を使ったわ。もう大丈夫よ、柊」

「ありがとう！ よおーし！」

ベルの魔法で意識を取り戻した柊蓮司は、魔剣を構え直す。

リンクは舌打ちしながら、同じようにマスターソードを構え直す。

カービィは柊蓮司と一緒に戦おうとするが、柊蓮司は「これは一騎打ちだ」と彼を止めた。

「おい、リンク……お前はそんな奴じゃないだろ？」

俺達に剣を向けるような奴じゃないだろ？」

「……」

柊蓮司はいつもと違う真剣な表情で操られたリンクと向かい合う。彼の鋭い一言にも、リンクは反応しなかった。

「お前……いつから分からず屋になったんだ？ 敵と味方の区別も分からなくなったのか？」

「……」

「黙ってる、という事は、YESという事だな」

「……」

「じゃ、遠慮なくいかせてもらおうぜ！」

柊蓮司は魔剣を振り抜いてリンクに風の刃を叩きつける。

その直後、リンクはマスターソードで斬りかかるが、

柊蓮司は攻撃をかわして腹部にパンチを叩き込む。

「グハァー！」

柊蓮司は高くジャンプし、魔剣に風を纏わせそれをリンクの胸に向ける。

「これで、とどめだあああああ！」

そして、柊蓮司は落下しながらカラドボルグをリンクに突き刺す。

その直後、大爆発が起こって、リンクにとどめを刺したのだった。

「はあ、はあ、はあ……」

リンクを倒した柊蓮司が息を切らす。

マリオ、カービィ、ピカチュウ、アルトリア、ランスが見つめてみると、

正気に戻ったリンクの姿が見えた。

ボロボロになりながらも息があり、生きている事が証明された。

「……リンク……戻ってきてくれたんだな」

「心配したんだよ、リンク」

「自由になれて、よかったな」

「ああ……みんな、ありがとう……」

リンクはゆつくりと、マリオ、カービィ、ピカチュウにそう言った。「自分の身体なのに、誰かに勝手に動かされているっていうのは、そういう感覚だったんだな……」

リンクは、以前の事件でゼルダが操られていた事を思い出す。

その時、ゼルダは辛い思いをしていたようで、まさか自分も味わうとはと苦い顔をした。

「……でも、これでスマブラ四天王は全員揃ったんだな？」

「そうだぜ。よかったじゃないか、みんな」

スマブラメンバーの象徴的存在、スマブラ四天王。

キーラの襲撃でバラバラになっていたが、今、ここに全員集結したのだ。

四人の強い絆に、ベルとアイシャは感心し、シャドウも僅かだが羨望の目を向けていた。

「俺達は、ずっと一緒だ」

「どんな困難があっても、それを乗り越えてやる」

「一人じゃ難しくても、みんながいれば勝てるよ」

「この絆は、永遠だ」

もう、二度と離れたくない。

マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウの四人はそんな思いを込めて、

互いの手を握るのであった。

「……………は……………」

所変わって、光の中。

そこには、青いハリネズミが閉じ込められていた。

彼の名はソニック・ザ・ヘッジホッグ。

ピカチュウを守るために彼の手を伸ばしたが、

間に合わずにキーラの光線を受けてしまい、今はこの世界に縛られている。

「そっか……………俺、ピカチュウを助けるために手を伸ばして……………光を浴びちまって……………」

身体が思うように動かない……………。自由になりたいのにどうしようもならない……………」

右も左も上も下もない世界で、ソニックはなすすべなく光に蹂躪されていた。

自分はこのまま、キーラの傀儡として身も心も利用されてしまうのだろうか。

ソニックは目を閉じて、覚悟を決めようとした。

すると、ソニックの身体に、不気味な無数の触手が巻きついた。

「Noー」

突然、自分以外のものが出てきた事により、ソニックは珍しく慌て

るが、

身体はまともに動かせず、何もできないまま触手はソニックの四肢に絡みつく。

「気持ち……悪い……！」

触手がソニックを束縛すると、ソニックは体内に黒い力が入り込んでくるような、

不快な気分になった。

キーラの光とはまた違う不気味で気持ち悪い感覚にソニックは脂汗を掻く。

しかし、しばらくするとその感覚は徐々に消え、

代わりに自分の身体が無くなるような感覚に襲われた。

まるで、自分がそこにいるのにそこにいないかのようで、

ソニックはだんだん意識を失っていく。

「……シャドウ……」

ソニックは薄れていく意識の中で、自身とよく似た黒いハリネズミの名を呟いた。

32 霧の森

こうして、スマブラ四天王は全員戻ってきた。

マリオ達は改めて、仲間の大切さを理解した。

「みんなが戻ってきて、本当に良かった。」

マリおじちゃん、リン兄、ピカピカ、ずっと一緒にいようね」

「だが……こんな楽しい光景を、キーラはちゃんと見ているのか？」

「あいつは歯牙にも掛けていないだろうな。自分の都合しか考えない奴はいつもこうなる」

カービィは素直に喜んでいるが、マリオとピカチュウは神妙な面持ちでそう言った。

そう、こうしている間にも、キーラに利用されている者はこの世界にたくさんいる。

仲間が揃ったからといって、のんびりまったりしてはられないのだ。

「……」

ルカリオは精神を集中し、捕まったファイターの波導を探知していた。

「……ルカ兄？」

「話しかけるな」

カービィとシャドウが小声で会話していると、

精神集中が終わったのか、ルカリオは目を光らせた。

「ここから北西にある霧の森に、複数の波導を探知した」

「霧の森？」

「その名の通り、霧で辺りが見えにくい森ですわ。視界が悪いので、慎重に進む必要があります」

アイシヤは霧の森について簡潔に説明した。

マスターハンドに仕えている関係で、彼女は色々なところを探索しているのだ。

「へへ、よく知ってるんだねアイシヤちゃん」

「この世界の事を色々覚えておきたいですからね」

「それで、ここから霧の森には何分かかるんだ？」

ファルコンがアイシャに距離を問うと、アイシャは苦い顔でこう答えた。

「ここからだど、歩いて大体15分くらいですわ」

「15分!? ちょっと遠いな」

「だ、大丈夫ですわ。キーラさんの呪縛からすぐに解放すればいいですし」

「……不安だ……」

アイシャの慌てている態度に、ファルコンは不安になった。

しかし、霧の森に行かなければ話は進まない。

一行は北西にある霧の森を目指し、自らの足で歩みを進めていった。

もちろん、敵に見つからないように。

「隠密の基本、音は立てるな。そして、視界に入らないように進め」

「ああ……やっぱりスネークがいて助かるぜ」

そして、スネークのおかげで、この15分の間、一度も敵に見つからずに霧の森に到着した。

「ここが霧の森か……」

「ちゃんと右見て左も見なきや、迷っちゃうからね」

霧の森はアイシャの言う通り、薄暗く、霧が立ち込めていた。

魔力も乱れており、ここではコンパスもあまり役に立たなさそうだ。

ここに入ったら、迷わないようにしっかりと辺りを見渡す必要がありそうだ。

その霧の森の入口には、頭に白い花がついた黄色い芋虫、ハナチャンのスピリッツがいた。

「花を踏んだら怒るからな、気を付けろよ」

「分かったわ! さあ、かかってくるさい!」

そう言って、ベルは大鎌を振るってハナチャンのスピリッツと一騎打ちした。

「ぎつとこんなもんよ」

ベルはノービス級スピリッツ、ハナチャンの解放に成功した。
カービィは波導についてルカリオに聞く。

「ねえルカ兄、波導ってどこにあるの？」

「ここから西にある」

「西か、分かったよ！」

「待て、霧には気を付けろ」

カービィはルカリオの案内で、霧に気を付けながら西に向かって歩いていく。

すると、鎖に縛られた茶色い犬と茶色い鴨がいた。

「ダックハント！」

犬のハントと鴨のダックだ。

台座の下からはダックハントの母体が次々と生まれており、それがスピリッツに利用されていると理解するとカービィは少し震える。

しかも、ダックハントがいる西は、リサイクルショップ「R・パークーズ」の店長、

アルパカ夫妻のカイゾーとリサが道を塞いでいた。

「……しかも、よりによってこの二頭はエース級。あんた達、勝てるのかしら？」

「勝てるよ！ 絶対に勝てる！ だから、僕を信じて！ ベルベル！」
自信なきげに言うベルに、カービィは勇気を出してそう言った。

ベルは「なら、いいわ」と、カービィにカイゾーとリサの解放を任せた。

「やったあ！ 勝ったあ！」

カービィは少しボロボロになりながらも、カイゾーとリサのスピリッツを解放した。

これで、ダックハントがいる場所に辿り着く事ができるようになった。

一行は西に向かって歩いていき、

マリオはダックハントを縛っている光の鎖に触れてそれを打ち砕く。

「バァーウーウー！」

すると、ダックハントは大方の予想通り、赤い瞳を光らせてマリオ達に襲い掛かってきた。

「待っているよ、ダック、ハント！ 今、俺達がお前らを助ける！」

「僕は、キーラの卑劣な罠には負けない」

「貴方達は縛られる必要なんてありませんよ！」

ダックハントの母体をキーラの支配から救い出すため、マリオ、リンク、ヨッシー、シーク、

アルトリア、ベルはダックハントと戦った。

「はっ！」

シークは仕込針を投げつけて牽制し、ダックハントの様子を伺う。

「バウ！」

「うわあ〜！」

ダックがヨッシーにフェイントをかけてヨッシーが転んだ隙にハントが噛みついて攻撃する。

「大丈夫か、ヨッシー！」

「はい、私は大丈夫です〜」

「アイスボール！」

「そらっ！」

マリオがアイスボールでダックハントを凍らせ、リンクはマスターソードでハントに斬りかかる。

ヨッシーはダックハントに近付いてキックし、ダックハントを吹っ飛ばした。

「ダークマジック！」

「はあっ！」

ベルはダックハントが通る道に魔法陣を設置し、魔法陣を踏んだダックハントの動きを止める。

その隙にアルトリアは風を纏った剣でダックハントを斬りつけ、シークが上空から百舌改で追撃する。

「よし、いけた」

「バウバウバウバウバウ！」

「うわああああああ！」

「きやああああああ！」

ハントは暴れ回って六人に一齐に射撃を行った。

リンクは盾を上手く使って攻撃を防いだが、

それが仇となり他の五人に流れ弾が飛んで大ダメージを受けてしまった。

「ああっ、すまない！」

「その分をカバーすればいいだけよ！ ド・オヴァ・ラ・ホル・ド・テネブ！」

ベルは全員を回復する魔法を使い、傷ついた味方全員の体力を回復する。

シークはダックハントの背後に素早く回り込み、手刀で急所を突いて大ダメージを与える。

「バアウウウウウ！」

「……ふっ」

「これでとどめよ！ アップリパー！！」

「ウォー……ウォー……！！」

そして、ベルが大鎌を一閃すると、ダックハントは場外に吹っ飛ばされた。

「ウォーン……」

ダックハントはしばらくの間気を失っていたが、数分後に意識を取り戻した。

すると、何故かダックハントはルカリオに懐いた。

「ワン！ ワンワンワン！」

「な、何故私に懐いているのだ」

ルカリオは理由が分からず、困惑している。

しかも、誰もハントの言葉が分からないため、ルカリオ含め一行はますます困惑した。

終蓮司は頭を掻きながら苦笑してこう言った。

「……まあ、仲間が新しく増えたんだし、言葉が通じなくてもいいんじゃないの？」

「それもそうだな。意外にこいつら、息ぴったりだしな」

「ばうばうばーうー！」

意外には余計だろ、という風に鳴くハント。

言葉は通じなかったが、一行にはそれだけで今のハントの機嫌が分かった。

「それじゃあ、ダックハントも仲間にしたし、もう一つの波導がある場所に行こう！」

「うむー！」

異色の共演、ダックハント。

犬と鴨のタッグという意外な参戦であったが、その実力は意外にも高いのだ。

33 自然王ナチユレ

ダックハントを救出した一行は、霧の森にあるもう一つの波導の在処を探した。

「ぼうぼう?」

「波導はまだ遠い。じっくりと進むぞ」

「わおん!」

一行は辺りを見渡し、霧に気を付けながら霧の森の中を進んでいく。

視界が悪くなっているので、音を頼りにしながら転ばないようにした。

しばらく歩くと、南東から音楽が聞こえてきて、ドンキーコングはすぐに身構える。

一行が音楽が聞こえた場所に行くと、楽器に目がついたような外見のスピリッツがいた。

「ドンキー、どうしたの?」

「こいつはティキ族といって、音楽で動物を催眠状態にして操る奴だ」
「なるほど……要するにキーラみたいな奴なのね」

操る者を操るなんてなんて皮肉なの、と呟くベル。

「こいつはオレがやつつける、だから下がってろ」

「あいよ!」

ドンキーはぐるぐると腕を振り、ティキ族のスピリッツと戦った。

「よーし、勝ったぜ!」

「大人しくしなさいね」

ベルがティキ族のスピリッツをスピリッツボールの中に入れる。

ちなみにベルは、ティキ族をいずれバンドのメンバーにするつもりらしい。

もちろん、奏でる音楽は無害なものである。

「じゃ、次はどこかしら?」

「わんわん、ぼうぼう!」

先に行こうとすると、ダックハントが嗅覚で何かを感知したのか、

西の方を向いていた。

霧が立ち込めていても、犬の嗅覚までは誤魔化せないようだ。

「犬の嗅覚は人間より遙かに上なのよ。流石、やるわね、ハント」

「あおーん！」

ハントはベルに撫でられて座り、尻尾を振った。

（こんな生意気な動物に懐かれるとはな）

（ちよつと不思議だよね）

「わんわん！ わんわん！ わんわん！」

一行がハントの後を追って北に走ると、ハントは遺跡の目の前で吠えていた。

「こんなところに遺跡があるなんてな」

「入ってみたいですね」

「オット、ファイターハオコトワリデスヨ」

ファルコンとヨツシーが遺跡を見ていると、遺跡の中から誰かが出てきた。

それは、目が赤く染まっているピンク色のキノコ族の女の子だった。

「ココハスピリッツセンヨウノイセキデス。ナカニハワナヤオタカラガタクサン！」

イマナラキーラサマノオカゲデ、ハジメテナノニナツカシイ、ソナワナニデアエマス」

キノピコが遺跡について話すと、アイシヤの眉がピクリと動いた。彼女の「キーラサマ」という発言に引っかけたようだ。

「あの、キーラ様というのは……」

「キーラサマデスカ？ アタラシイセカイヲツクツテクダサリマス」
「……」

アイシヤはこつそりと包丁を抜き、操られたキノピコに向かってこう言った。

「……ちよつと、大人しくしてくれませんか？」

「あ、あれ？ ここは一体どこでしょうか？」

アイシヤに敗れたキノピコは、キーラの支配から解放されて目が元

に戻る。

「ここは霧の森だよ。君は遺跡にずっといたんじゃないの？」

「そ、そうでしたか！　ありがとうございます！　申し遅れました、わたしはキノピコです。」

「この遺跡には色んなお宝があります！」

スピリッツ達の調子次第でどんなお宝が来るのかはお楽しみ！

「どうですか？」

「あ、ごめんネ。今は遺跡探索はしないヨ。キーラが悪さをしてるからネ」

「そうですか、残念です……。でも、わたしはいつでも待ってます」

キノピコを救出した事で、スピリッツ達は遺跡探索ができるようになった。

が、今はそれを利用しての余裕はない。

「それでは皆さん、頑張ってくださいね！」

「さようなら〜！」

一行はキノピコがいる遺跡を後にし、霧の森のスピリッツ解放を再開した。

まず、西に行つてサライムシを解放し、

次に南に行つて出会つたのはレジエンド級スピリッツ、自然王ナチュレだった。

彼女はアイシヤのボディに宿っているが、体格は子供くらいまでに縮んでいた。

「あら、あんたはナチュレ？」

「む？　其方は死神じゃな！　ハデスの手先め、覚悟せい！」

ベルがナチュレに明るく話しかけると、ナチュレはベルにいきなり光を放った。

「きやああ！　な、何するのよー！」

「言われなくとも妾には御見通しじゃ。其方は冥府軍の一員である死神であろう？」

「違うわよ！　私は冥府軍には入ってないわ！」

ベルは今のナチュレの様子を見て、

彼女はキーラには完全に支配されていないが理性が奪われていると察した。

気になったリンクはベルに声をかける。

「おいおい、何がどうなっているんだ？」

「リンク、あのね、ナチュレは今の私を敵だと思っているみたい。

とりあえず大人しくさせないといけないわ」

「よし、そういう事なら、俺も手伝うぜ！」

リンクは右手に剣、左手に盾を構え、ベルと共にナチュレを大人しくさせるために戦った。

（あれ？ リンクって右利きだったかしら？ まあ、いいわ。一緒に戦いましょう）」

「どうした？ 其方の攻撃は妾には届かんぞ？」

流星はレジエンド級スピリッツだけあり、

ナチュレはリンクとベルの攻撃をひよいひよいとかわしていた。

リンクは歯を食いしばり、何とかナチュレの隙を伺おうとする。

「やつー！」

「ほいっと……？？」

「ぞらー！」

ベルがフェイントをかけ、その隙にリンクがマスターソードでナチュレを斬りつける。

聖なる光が邪悪なる光を打ち砕き、ナチュレに大きなダメージを与えた。

かなりのダメージを食らったナチュレは怒りに震えて杖を構えこう叫んだ。

「絶対に許さんぞ虫ケラども！ じわじわと鬩り殺しにしてくれる！！」

「うわ……何だ、あの迫力」

「伊達に自然王を名乗っていないわね」

「いつまでも進歩の無いサルどもめ！ 滅するがいいわ！！」

そう言っつてナチュレは天から樹がついた巨大な爆弾を召喚する。

見た事のない爆弾にリンクは目を開く。

「な、なんだこれは？」

「これは初期化爆弾という環境に優しい爆弾じゃ。其方達は決してこの爆弾からは逃れられぬ！」

「全てよ、自然に還るがいい!!」

「そうはいかないわ！ 早く止めるわよ！」

「おう！」

リンクとベルは、初期化爆弾が投下される前にナチュレを倒そうと斬りかかる。

彼女は時間稼ぎのため、自然の力を使い二人の攻撃を防御した。

「自然を汚すものには容赦はせぬ！ この大地諸共、自然に還れ!!」

「やなこった！」

「大人しくしなさい！」

ベルの大鎌がナチュレを一閃し、続けてリンクのマスターソードが一閃する。

「ぬうう……死神と人間如きが、生意気な！」

「それは俺達も同じだ。」

キーラのせいで頭がおかしくなってるお前を、少し大人しくさせるために勝つぜ。

それに俺は、人間じゃなくてハイリア人だから」

ナチュレは初期化爆弾の落下速度を速め、無理矢理浄化しようとした。

しかし、ベルはこれこそがチャンスと睨む。

「ナチュレは焦っているわ、一気に攻めるわよ」

「ああ」

リンクはブーメランを投げてナチュレを怯ませる。

ナチュレは焦っていたため、避けられずにダメージを受けてしまう。

ベルはその間にスマッシュ攻撃を溜め、ナチュレにとどめを刺す準備に入った。

「!？」

「とどめよ！ ダウンリーパー！」

「ああああああああああああ!!」

そして、ベルの大鎌がアイシャのボディごとナチュレを真つ二つにし、

彼女のスピリッツを解放するのだった。

『……すまなかつたな。妾がもう少し落ち着いていれば……』

「いいのよ、もう過ぎた事だし」

ナチュレは、スピリッツボールの中で先程の出来事をベルに謝っていた。

彼女はキーラに理性を奪われていた時の事をはっきり覚えている数少ない人物なのだ。

『それにしても、あのキーラという奴、妾を利用するとは愚かしい』

「あんた以外にも利用されているわよ。それにしても、役に立つスピリットっているのかしらね？」

『妾はこの冒険で役に立つと自負しておるぞ。何しろ、妾は自然王じゃからな。』

自然に関する障害があれば妾に任せるがよい』

「うふふ、楽しみにしてるわよ!」

「ただいまー」

「お帰り。波導の場所が分かったぞ」

帰ってきたベルとリンクを待っていたのは、二つ目の波導の在処を見つけたルカリオだった。

「ルカリオ、二つ目の波導が見つかったの?」

「ああ。私についてこい」

一行はルカリオの案内で北西に行つてゼルネアス、一旦東に戻つてヌケニン解放する。

ヌケニンは弱点以外の攻撃が通用しないので、マリオがファイアボールで焼き払った。

行ったり来たりしているので、パックマンはルカリオに疑問の感情を抱く。

「ポケモンのスピリッツを解放してるケド、本当にこの辺に波導は近いノ?」

「ああ……間違いない」

タルミナのケポラ・ゲボラとアースボーンズのダスターの解放をしながら、

一行はルカリオが歩いた道を通っていく。

また、ハントも嗅覚を頼りにルカリオのサポートをしていった。

そして、一行がしばらく歩いていくと、紫の服を着た少女、力士のような姿の生物、

そして緑の爬虫類のような姿をしたポケモンの瞳が赤く光っていた。

「ルカリオさん、ビンゴです！ 彼はジユカインさんですよ！」

「……やはりそうだったな」

アイシヤはジユカインの事を知っているのか、喜びの声を上げている。

「知ってるノ？」

「は、はい……わたしが最後にテンポラリーファイターパスをあげた人、

じゃなくてポケモンなんです」

「俺と同じだな」

「私も彼女から貰いましたね」

アルトリアと柊蓮司がそう呟く。

このジユカインというポケモンは、非公認だが一応ファイターだ。メタ的な事を言うと、某呟きSNSのアンケート結果を採用したものだ。

「ウウウウ……コロシテヤル、コロシテヤル……」

キーラに操られたジユカインは、うわごとのように殺意を吐いている。

このまま放置すれば、生き物が全滅してしまうだろう。

ジユカインを止めるため、マルスは剣を、フォックスはブラスターを、

ランスは槍を、ロックマンはロックバスターを構えた。

アルトリアも、戦闘態勢に入っている。

すると、プリンがとことごと歩いてフォックス達の前に出た。

「プ、プリンもやるでしゅ！」

「大丈夫なのか？ プリン」

「だいじょうぶでしゅ！ ジュカインしやんはかならずプリンがたすけるでしゅ！」

プリンは自信満々にそう言った。

フォックスは頷いて、プリンを戦闘に参加させた。

「コロシテヤル……コロシテヤル！」

「君達は、僕が助けてあげるよ！」

「これが……ジュカインというポケモンですか」

「非公認とか公認とか言ってる場合じゃない。お前は必ず、俺達が解放する！」

「こわいけど……がんばるでしゅ！」

「ボクは大王様のためにも、絶対に勝つ！」

「……まずは、相手の出方を伺わなくちやね」

マルス、フォックス、ランス、ロックマン、プリン、アルトリアと、操られたジュカインとスピリッツとの戦いが今、始まろうとしていた。

ランスは突きをマロに連続して決め、マロのスピリッツをプリン
のボディから解放した。

「ソノテイドカ？」

「くそつ、攻撃が当たらん！」

「僕もだよ」

ジユカインはマルスとフォックスの攻撃をかわし、タネマシンガン
を二人に連射する。

フォックスはブラスターでジユカインのタネマシンガンを全て撃
ち落とすが、

隙を突かれリーフブレードを食らってしまう。

「くつ、なんて威力だ。これもキーラの力なのか？」

「キーラサマニサカラウモノハ、ミナゴロシダ」

ジユカインは真つ赤な瞳を六人に向けている。

殺意を露わにした彼を止めるには、彼を倒すしか方法はない。

フォックス、マルス、ランス、アルトリアはぎゅつと武器を握り締
めた。

「キーラの鎖は、ボクが砕く」

「悪夢は必ず覚ましてあげるよ」

「ファーストエア、セカンドエア、サードエア！」

アルトリアは風を纏い、ジユカインに突っ込んでいく。

彼女が得意とする魔力放出による強力な突進攻撃だ。

「それーっ！」

ランスは槍を十字に振ってジユカインを切り裂こうとするが、
ギリギリでかわされて反撃を受ける。

「マジカルシャイン！」

「ファイアー！」

「グアアア」

プリンは弾ける光を放ち、ジユカインの目を眩ませた後におうふく
ビンタで連続攻撃を行う。

フォックスはジユカインに向かってファイアフオックスを繰り返
し、

炎に弱いジユカインに大ダメージを与えた。

「ルナスラツシユ！」

「ワドスピアスロー！」

アルトリアとランスは遠くから衝撃波と槍を飛ばし、ジユカインの身体を切り裂く。

「ジユカインじゃん、もともにもどるでしゅー！」

プリンはジユカインをはたいて攻撃するも、

ジユカインはそのままアルトリアに突っ込んでリーフブレードで斬りつける。

「ぐあああつー！」

アルトリアが負傷した部位から血が流れる。

幸い、利き腕ではなかったので戦闘への支障は少なく、

また、アルトリアの聖剣の鞘には治癒能力があるためすぐに回復した。

だが、痛みまでは治まらない。

「待ってて、今治すから」

ランスは大急ぎでアルトリアに駆け寄り、手当の準備に入る。

ジユカインは容赦なく二人にタネマシンガンを撃つが、

ロックマンがリーフシールドを張ってジユカインに突っ込みタネマシンガンを払う。

フォックスはジユカインを投げて浮かせた後、飛び上がって蹴りを連続で繰り出す。

「これで大丈夫だよ」

「ありがとうございます」

ランスはアルトリアの手当を終えた後、槍でジユカインの脇腹を突く。

「マーベラスコンビネーション！」

マルスは連続でジユカインをファルシオンで斬りつける。

ジユカインは攻撃をかわし続けたが、最後の一発がギリギリで命中しジユカインは吹っ飛んだ。

「ウウウ……オノレ、キーラサマニシタガワナイノカ？」

「キーラは侵略者だ、手を貸すわけがない」

「ボクは仲間を一人でも多く助けて、カービィやシャドウ、ベルのために報いたいんだ。」

もちろん、ボクのご主人様は大王様だけど、仲間として報いるんだよ」

「ナカマ、ダト？」

「そう。スマツシユブラザーズは、ボクを含めてみんな大切な仲間なんだ。」

例えば誰かに奪われたとしても、必ず取り戻せる……ボクはそう信じている。

だから、それを証明するために、今、ボクはキミを取り戻す！」

「ああ……いくぞ！ フレイムソード!!」

ロックマンはソードマンの特殊武装をランスの槍に使い、

ランスの槍の穂先に炎を纏わせ、炎の力を持つメラーガスピアが完成した。

「今だ、ランス！」

「はあああああつ！ メラーガスピア!!」

「グ……オオオオオオオオオオオオオオ!!」

ランスはそう言つて槍を両手で構え、ジュカインを狙い十字架を描くように二度薙ぎ払つた。

ジュカインは慌てて両手の刃で防御するが、

槍の穂先は希望の炎を帯び、ジュカインに痛手を負わせる。

そして、炎の槍がジュカインの身体を貫通すると、全員が目を覆うほどの大爆発が起こつた。

「はあ、はあ、はあつ……!!」

爆発が治まると、ジュカインは瀕死になっていた。

ランスも息を切らして、思わず槍を落としそうになるが、気を振り絞つて何とか立ち上がる。

「これでジュカインは助k……!?!」

ランスがジュカインを助けようとする、彼の目の前に衝撃的な光景が広がつた。

メラーガスピアの炎が森に広がり、次々と木や草原が燃えていく。「しまった！ ボクのせいで……うぐつ！」

ランスが消火するために動こうとすると、急に彼の身体が動かなくなつた。

ジュカインを撃破した反動で、ランスに疲労が溜まりすぎたのだ。「無理しないで！ 風よ……」

ベルは風の魂に語り掛け、その場にいる全員に自身の声を送った。

—みんな、水を使って霧の森を消火して！

「その声は、ベル!?!」

真つ先に声を上げたのは、ポンプが使えるマリオだった。

今、霧の森が大変な事になっている……それを知ったマリオは顔面

蒼白となり、

ポンプを取り出して消火活動に入る。

「急いで消火しなきゃ！」

「森がなくなっちゃう！」

パックマンは消火器、りょうは如雨露を使う。

しかし、森を覆う火の勢いは止まらず、

スマブラメンバーの消火活動は文字通り焼け石の水だった。

そもそも、水を扱えるスマブラメンバーは、現在はこの中には少なかったのが原因だが……。

「あ……森が……！」

そして、霧の森は炎の中に完全に消えてしまった。

「そんな……せつかくジュカ兄を助けたのに……」

仲間を助ける事に成功したが、その代償に霧の森を失ってしまった。

カービィはその事実に着胆している。

「……カービィ……」

「自分のせいじゃないとはいえ、こんな結果になるなんて、カービィも辛かっただろうに」

最初の三人、シャドウとベルがカービィの目を見ている。

彼の目は悲しげで、今にも涙が出そうだった。

他のスマブラメンバーも霧の森を失った事に落胆するが、その時、ベルのスピリッツボールから何かが飛び出してきた。

『森を取り戻したいのか?』

「その声は……ナチュちゃん!」

『妾は自然王ナチュレじゃ!』

それは、霧の森で解放した自然の女神、ナチュレのスピリッツだった。

「ねえナチュちゃん、この森を元に戻して。ナチュちゃんならできるでしょ?」

カービイはナチュレに必死で森を元に戻すように懇願する。

ナチュレは「うむ」と頷くと、杖を掲げて呪文を唱えた。

「自然王ナチュレが命ずる! 霧の森よ、今ここに蘇れ!!」

すると、ナチュレの杖が光り出し、光が失われた霧の森全域を覆った。

その光は穏やかなものであり、不安定になっていたスマブラメンバーの心を落ち着かせた。

光の中で、霧の森は時間を巻き戻すかのように元に戻っていき、

やがて霧の森は完全に元通りになった。

「やったあ! 森が元に戻った!」

「よかったですね!」

「霧もすっかり残っている……流石は自然王だな」

カービイ達が喜んでいると、彼らの声を聴いたジユカインがむくりと起き上がる。

「……ん? 何が起こったんだ……?」

「あ、ジユカインしゃん、おきたでしゅね。」

あのね、あのね、ジユカインしゃんをみんなでたすけたんでしゅ」
「…………?」

「ああ、実はかくかくしかじかでな……」

プリンは説明が下手なので、代わりにリンクが今までの事情を説明した。

「なるほどな。つまり、キーラって奴がオレを操ってこんな目に遭わ

せやがったのか」

「ん、まあそういう事になるな」

「ったく、キーラの奴、一体どこに隠れてるんだ？ 見つけ出して倒したいってのに」

ジュカインはキーラの居場所が分からず、不快になって舌打ちする。

ヨツシーはそんなジュカインの気持ちを感じ取って彼に優しく話す。

「あのおく、ジュカインさくん」

「なんだ」

「戦ってばかりだといずれ疲れちゃいますよ。一旦戻って休みましょうよ」

「なんだと!?! オレは今すぐにキーラを……」

「ヨツシーの言う通りだ、お前はさっきまでキーラに操られて戦ったんだろ?」

「……あ、そうだった」

マリオの一言でジュカインは自身がキーラに操られた事と、身体を休めるのも大事だという事を思い出す。

「とりあえず、どこで休む?」

「それならば僕が連れて行ってやろう」

シャドウは懐からカオスエメラルドを取り出す。

ふと、ジュカインはカオスエメラルドが気になってシャドウに話しかけた。

「なあ、シャドウ、そのジュエルはなんだ?」

「これはジュエルではなく、

カオスエメラルドという七つ集めると奇跡を起こすと言われる宝石だ。

僕はこの力を借りて時空操作やエネルギー生成ができる」

ジュカインは彼の説明を聞いて「ほへー」と言葉を漏らす。

「要するに、すげー力を持ったアイテムなんだな」

「そういう事だな。……さて、お喋りはここまでだ。そろそろ、全員を

呼んでくる時間だ」

「お、おーし、今呼んでくるぜ」

ジユカインは急いでスマブラメンバー全員に呼びかけ、彼らをシャドウの前に集合させた。

皆がいるのを確認したシャドウは、カオスエメラルドを天に掲げる。

「では、行くぞ。カオス……コントロール!!」

そして、シャドウが叫ぶとカオスエメラルドは光り輝き、全員のは霧の森から消えた。

35 電力プラントの攻略

キーラに操られたジユカインは、シャドウ達の活躍により正気に戻った。

一度は炎の中に消えた霧の森も、自然王ナチュレの力により元通りになった。

「みんな、助けてくれてありがとうよ」

「いいんだ。誰かを助けるのに理由なんていらなからな」

ジユカインは仲間の一人、マリオに感謝した。

マリオも笑みを浮かべて返すも、すぐに笑みを消してこう言った。

「で、失礼な事を言うが、お前は本当にファイターなのか？」

「それを言うなら僕やランスも同じだが」

マリオは本来は参戦していないはずのジユカイン、シャドウ、ランス、アルトリア、

終蓮司がファイターになっている事に疑問を抱く。

それは、マールを仲間にした時と同じ光景だった。

「おいおい、オレを疑う気か？」

「ジユカインさんは、非公認ですがファイターですわ」

「そうか、じゃあ、お前はファイターなんだな」

アイシャの説明を聞いたマリオは素直に納得した。

念のため、マリオは既に参戦している者を邪魔者扱いしないかジユカインに聞いたが、

ジユカインは首を横に振ったため安心した。

「願いが叶わなかったからといって、叶った奴を妬むのは頭のおかしい奴さ。」

それにあいつらは『参戦した』んだけど、オレらは『参戦させてもらった』んだ、

もう少し謙虚にならなきゃな」

「なーに、それ？」

「純粹なお前は覚える必要はないものだぜ」

「うん、分かったよ」

カービイは裏を感じ取ったのか、深く追求する事をやめた。

霧の森を出た一行は、しばらく休憩した後、次の目的地を探す事にした。

「それで、次はどこに行けばいいの？」

「あ、それなら電力プラントはどうですか？」

「電力プラント？」

「この世界の各地に電気を送っている場所だ。だが、今は電気が止まっているようだ」

一行の次の目的地は、電力プラントとなった。

電力プラントの電気が止まっているのは、一体どうしてだろうか。

カービイが理由を聞くと、ルカリオは顎に手を乗せてこう言った。

「キーラは電気を操る者を掌握している故、事実上電気も操る事ができる。」

また、未確認ではあるが、ファイターもいるという

(電気……ファイター……ん?)

ルカリオによれば、電力プラントの中には

スピリッツ同様にキーラに操られたファイターがいるようだ。

恐らく電気を操る者だろうと考えたピカチュウは、そのファイターを推測していた。

「電力プラントは私が案内する。ついてこい」

「ああ」

一行はルカリオの案内で、ファイターがいるという電力プラントの中に入った。

「うわあ、広いねえ」

カービイは電力プラントの周りを見渡していた。

床には緑のプレートがあり、あちこちに装置と黄色い生き物、そしてスピリッツがいた。

中は機械的だったが、以前に探索した基地よりも温かさに溢れていたため

りようやカービイなどの子供達は怖がらなかった。

「電気は今や大事なもの。それを勝手に使うとは、いい度胸だな」

でんきタイプのピカチュウは、電気を自分の思い通りに使おうとするキーラを許せなかった。

「この装置は一体何だろう」

ある程度歩くと、ピカチュウは円形の装置を見つけた。

その先には道があるが、穴が開いていて通れない。

パルクマンが調べてみると、それは電気を送るための装置だった。

「ここから電気を送れそうだね」

「じゃあピカピカ、電気を使って！」

「ああ。10まんボルト！」

ピカチュウが装置に向かって電撃を放つと、装置に電気が通って赤い床が現れた。

しかし、電気はすぐになくなり、同時に赤い床も消えてしまった。

「ん、電気が切れたぞ」

「ずっと電気を通し続けなければならないようだな。でも、それだとちよつと効率が悪いよな」

「あおん……」

どうすればいいんだろう、と嘆くダックハント。

すると、マールは遠くに何かを発見したようで、それがある場所に走っていく。

「これを使えばいいんじゃない？」

マールは、両手に何かを持って走ってきた。

それは、黄色い身体をしたナマズだった。

「これ、なんだ？」

「私の世界にある『デンチナマズ』って生き物だよ。町の色んなところに電気を送ってるんだ。

……しよつちゆう、攫われてるけどね」

「なんか、ピーチ姫みたいだな」

マリオはデンチナマズの攫われやすさに苦笑した。

もつとも、攫われた回数はピーチ姫の方が遥かに上なのだが……。

「じゃ、置くよ！」

マールがデンチナマズを装置の上に置くと、デンチナマズは光って

装置に電気を送った。

すると、先ほどピカチュウが電撃を放ったように装置が作動し、赤い床が現れた。

「今度は大丈夫みたいだね」

「この調子で、どんどん先に進もう！」

「おう！」

一行は赤い床を渡り、西にあったデンチナマズを取って近くの装置に置き、

現れた赤い床を渡ると、スピリッツに遭遇した。

そのスピリッツを見たロックマンは叫び出す。

「ライト博士！」

『おお、ロックではないか。いやはや情けない、こんな身体の中に入れてしまうとはな』

彼はロックやロールなどの生みの親、トーマス・ライトという科学者だった。

ドクターマリオのボディに宿ったライト博士はぼりぼりと頭を掻く。

「ううん、悪いのは博士じゃありません。」

ボク、何度も博士に助けられていますから、今度はボクが助けあげる番です」

『ありがとう、ロック……』

「大丈夫ですよ、博士。今は少し眠っててください」

ロックマンは無事にライト博士のスピリッツを解放した。

「流石は電力プラント、しよっぱなから科学者のスピリッツと遭遇するとはね」

「そうだね。あ、マル姉、デンチナマズがあるよ！」

「マ、マル姉?」

マールが装置を確認してみると、そこには確かにデンチナマズがあった。

しかし、その近くには赤い床があり、さらによく見ると一匹のポケモンが台座に縛られていた。

「外しちゃっていいのかなあ……?」

「マールは後ろをちらつと見て少し不安になる。」

「でも、あそこのポケモンを助けるためなら、後ろに戻らなくてもいい！ 外して！」

「わ、分かったよ」

カービィに言われてマールはデンチナマズを外すと後ろにあった赤い床が引っ込んだ。

「あーあ、見てよカービィ。床が消えちゃったよ」

「ご、ごめん。調べたらすぐに戻すから」

カービィは先程外したデンチナマズを上装置に置いた。

すると、左側の赤い床が作動し、左側に行けるようになった。

一行がそちらに行くと、ピチューのボディに宿っているアンテナポケモン、

デデンネのスピリッツと遭遇した。

しかしノービス級だったので、でんきタイプ技が効果が今一つのピカチュウとジユカインが軽くあしらった。

「デンチナマズの数足りないね。つまり、有効に使った方がいいみたいだよ」

電力プラントのデンチナマズ数は限られている。

頭を使い、上手く進めば、電力プラントは楽に攻略できるのだ。

「ファイア掌底！」

道中でピカチュウのボディに宿ったエレキマンのスピリッツを解放し、

デンチナマズを手に入れる。

その後にスージのスピリッツを解放して元来た道に戻り、

シャドウの助言で左側の赤い床を作動させていたデンチナマズを取り外す。

「これでデンチナマズは2匹になった。後はファイターがいる道に行くだけだな」

「うんっ。シャドウ兄、誰が待ってるのかな」

「恐らくは電気に関係のあるポケモンだろうな」

一行はデンチナマズを置いてもう一度赤い床を作動させた後、近くのデンチナマズを外して再び数を2匹に戻す。

「後は、ここにデンチナマズを置いて」

「ここにデンチナマズを置けば、ファイターへの道が開ける」

カービィとシャドウがそれぞれ1匹ずつデンチナマズを置くと、ファイターがいる道が開いた。

一体誰が捕まっているんだろうと一行が歩くと、囚われのファイターの正体が判明した。

「ピ……ピチュ……」

「お前は……ピチュウー！」

それは、ピカチュウの幼き弟、ピチュウだった。

ピカチュウは先程戦ったデデンネのボディが彼である事を思い出し、衝撃と共に怒りが湧く。

「オマエ……ダレデチュカ……?」

「俺だよ、俺！ お前の兄のピカチュウだ！」

「アニ……? ピチュウハシラナイデチュ……」

ソレヨリ、オマエラハキーラサマノジヤマヲスルキデチュカ……?」

「……ピチュウ……」

ピチュウはキーラの力に完全に支配されており、ピカチュウが兄である事は記憶にない。

今まで通りにピチュウを倒さなければ、ピチュウは正気に戻らない。

一瞬躊躇ったピカチュウだったが、ピカチュウは覚悟を決めてピチュウに戦いを挑む。

「……分かったぜ、ピチュウ。兄として、お前を元に戻してやる。みんな、覚悟はいいか?」

「ああ、分かっているぜ」

「ピチュピチュは、みんなやれば助かるよ」

「私も、ちよつと怖いけど頑張る」

「君を操る病気は、僕が治してあげるよ」

「かかってきな、ピチューー！ オレが相手になってやるぜ！」
マリオ、カービー、マール、ドクター、ジユカインも、
ピカチュウと共に操られたピチューーに戦いを挑むのだった。

36 小さな体に大きなパワー

電力プラントにいたこねずみポケモン、ピチュー。

彼の母体をキーラから解放するため、ピカチュウ、マリオ、カービィ、マール、ドクター、

ジユカインはピチューと戦った。

「えいー！」

カービィはピチューにハンマーを振り下ろす。

ピチューは攻撃をかわし、マールにでんじはを放ち麻痺させた。

「……ケステチユ……」

「わあっ！」

ピチューはでんきショックをカービィに放つ。

カービィは攻撃をかわすが、電気は壁に当たってカービィに命中した。

「何しやがるんだピチューー！」

ピカチュウは無駄だと思いつつもピチューに呼びかけ、彼を止めようとする。

しかしピチューは何も言わずにピカチュウに突っ込んでいった。

「くそっ！」

ピカチュウは尻尾を鋼のように硬くして向かってきたピチューに打ち据える。

はがねタイプの技は効果が今一つなので大したダメージにはならなかったが、

ピチューを吹っ飛ばす事に成功する。

しかしピチューはすぐに体勢を整え直し、

マールの射撃攻撃と突っ込んできたマリオの攻撃をかわす。

「速いっ！ 速いよー！」

「ああ、相当なスピードだな。エナジーボール！」

「ビデユウー！」

ジユカインは自然から集めた命の力をピチューに向けて放つ。

実はジユカインは能力的には特攻の方が高いため、目立たないが特

殊攻撃が強いのだ。

「ちよつと君の様子を見たいな」

「ピチューピチュー！」

ドクターはじっくりピチューの様子を確認するが、ピチューはちよこまかと動き回り、

なかなか動きを捕捉できない。

カービイの攻撃もピチューは見切っており、10まんボルトでジユカインとマールを攻撃する。

「うおっ！」

「きやあああああ！」

ジユカインには効果が今一つだったが、マールは大きく吹っ飛ばされる。

「くっそおー！」

ピカチュウはロケットずつきをピチューに放ち、ピチューは大きく吹っ飛ばされる。

その際にマリオとカービイがハンマーを構えてピチューに飛びかかり殴りつけた。

「エナジーボール！」

ジユカインはエネルギー弾を周囲に設置してピチューの動きを制限する。

ピチューはそれをかみなりで全て打ち消し、ピカチュウに突っ込んでいった。

そして、ピカチュウにしがみついて10まんボルトを放った。

「ぐああああああ!!」

ピカチュウにでんきタイプの技は効果が今一つだったが、

弟が兄を攻撃するという精神的なダメージの方が大きかった。

「ピチュー……なんで……俺を……」

「キーラサマガイインデチュ」

「何言ってるんだよ！ お前が住んでる世界を壊しているのか!」

「キーラサマガキメタコトデチュ。オマエハウルサイデチュ！」

ピチューは至近距離からピカチュウにてんしのキッスをする。

混乱したピカチュウは自分を攻撃したり無防備になったりと思うような行動を取れなくなった。

「うっ、うあつ、うわああああつ！」

「ピカチュウ君、落ち着くんだ。深呼吸、深呼吸」

「うあ……そ、うだ、つた……。ふう……」

ピカチュウはドクターの助言で深呼吸をして混乱を解いた。

「……気を取り直して、いぐぜ、アイアンテール！」

ピカチュウは尻尾を硬化させ、ピチューにぶつけて吹っ飛ばす。

「おっと！」

マリオはピチューの10まんボルトをスーパーマントで跳ね返し、ファイアボールで追撃する。

「えーい！」

「じつとしてもらうよ」

カービィはストーンに変身して上空からピチューを押し潰す。

ドクターはピチューに駆け寄って睡眠薬を飲ませ、ピチューを眠らせて無防備にする。

「今だよ、マリオ君、ピカチュウ君！」

「ああー！ スマブラ四天王の力、見せてやるぜ！」

「いぐぞ、マリオー！」

スマブラ四天王のマリオとピカチュウが力を溜め、ピチューにとどめを刺す準備に入る。

一人に炎の力、一匹に電気力が周囲に満ちる。

「とどめだ！ 1000まんフレア!!」

ピカチュウの強烈な電撃とマリオの高熱の炎が混ざり合い、光線と なってピチューに直撃する。

そして、大爆発が起こり、全員が目を覆った。

こうしてピチューとの戦いは、終わった。

「うう……あたまがくらくらするでちゅ……」

「大丈夫か、ピチュー？」

キーラに操られた反動で、ピチューの頭は混乱していた。

ピカチュウはピチューを負ぶさろうとするが、高さがほとんど変わ

らないため途中で落としてしまう。

「しようがねえな、俺達が運んでやるよ。手伝ってくれ、ドクター」

「分かったよ」

「助かる」

マリオとドクターがピチューを一緒に担ぐ。

二人は赤い床を歩いて、長い廊下にピチューをそっと置いた。

そして、ドクターは傷ついたピチューを治療した。

「……もう大丈夫だよ、ピチュー」

「ふえ……？　ぴちゅはなにをしていたんでちゅか……？」

「ピチュー君、もう助かったんだから気にする必要はないよ」

ドクターはピチューを傷つけないように助かったという結果だけを話した。

そして、弟と再会したピカチュウが彼を抱く。

「ぴかにいちゃん……こわかったでちゅ……」

ピチューが震えながらピカチュウに抱き着く。

ピカチュウは優しくピチューの頭を撫でた。

「怖かっただろう、ピチュー。でも、これからはずっと一緒だ。決して離れるんじゃないぞ……」

「うん……ぴかにいちゃん……」

「なんとも微笑ましい光景だな」

「そうだな」

ピカチュウとピチューの兄弟愛を、マリオとスネークは温かい目で見守っていた。

「ピチューを助けた以上、もうここには用はないな」

シャドウはピチューがいた場所の道に行けるデンチナマズを外した。

続いて、廊下を通った先にある赤い床を作動させていたデンチナマズを外した。

「後は必要なところにこのデンチナマズを置くだけだな」

シャドウは北西側の装置にデンチナマズを置いて装置を作動させ、行った先のデンチナマズを外す。

続いて、横に長い青い床の右側に装置を置くと、スピリッツに繋がる道が開いた。

「ティニ、ティニー！」

「あ、ビクティニだ！」

そのスピリッツは、イツシュ地方の幻のポケモン、しろうりポケモン・ビクティニだった。

ガオガエンのボディに宿っているが、体格に合わせて大幅に縮んでいる。

しかし、ルカリオとジユカインはビクティニを見て少し固まった。

「オレの苦手なタイプなんだよなあ……」

「私もほのおタイプは苦手だ」

「……」

スネークはビクティニの背後に回り込み、

麻醉銃でガオガエンのボディごとビクティニを眠らせた。

その隙にベルが大鎌を振りかざしてビクティニのスピリッツを解放した。

「こことここにデンチナマズを置けば……」

ベルはデンチナマズを桃色の床の装置に置いて、赤い床を出し、奥まで進んでいく。

すると、電力供給システムに巨大なデンチナマズのスピリッツが縛り付けられていた。

「あつ、オオデンチナマズだよ！」

「オオデンチナマズ？」

「私が住んでる町に電気を送ってるんだ。よく攫われるんだけどね」

「ピーチ姫には及ばないがな、ははは」

マールの説明にマリオが苦笑していると、オオデンチナマズが襲い掛かってきた。

「きゃっ！ もう、やめてよ！」

マールは寸でのところで攻撃をかわし、わかばシューターを撃って攻撃する。

オオデンチナマズの動きは鈍かったので、

マールは全ての攻撃をかわしてブキで相手を塗った後、パブロを振ってとどめを刺した。

「……これで、大丈夫だよね？」

「あつ、電力供給システムが……！」
オオデンチナマズのスピリッツを解放すると、電力供給システムから電気が送られる。

それは、電力プラントがキーラの魔の手から解放された証であった。

「今すぐに外に出よう！」

「ああー！」

一行は、もう用がなくなつた電力プラントを後にするのであった。

「わあ……！」

電力プラントを解放したおかげで、各地にあるゲートの赤いランプが点灯し、

閉じていたゲートが次々と開いていった。

「これでこの世界にまた活気が戻つたな」

「電気がなければガスも水も出ない、イイ時代になったものだけ」

「いや、火は火打ち石を使えば出るんだが」

「世界が違えば差も出るのですね」

アルトリアはピカチュウとリンクのやり取りを聞いてそう呟いた。

とにかく、閉じたゲートが全て開いたため、

まだ行っていないところがあるかをアルトリアはシャドウに聞いた。

「確かソレイユとリユンを解放した街に、まだファイターが残っているそうだ。」

そこはあのゲートで塞がれていたが、今なら救出できるはずだ」

「君の口からそんな言葉が出るなんて珍しい」

「僕も成長するんだぞ……」

はあ、と溜息をつくシャドウ。

何はともあれ、これで街に残っていたファイターを救出できる。

一行はシャドウのカオスコントロールで街に戻り、

先程まで通れなかったゲートを通り抜けていった。
すると、台座に若いボクサーが縛られ、その隣には褐色の肌のボクサーがいた。

17歳の少年ボクサーリトル・マックと、眠りの妖精の名を冠するボクサー、Mr. サンドマンだ。

「マック！」

「電力プラントにいたピチューに続いて、小さな体に大きなパワー、つてところだな」

スネークは拳銃を構えてマックを縛っている鎖を撃つ。

すると、マックとMr. サンドマンは赤い瞳をぎらつかせていきなり襲い掛かってきた。

「ウオオオオオオオオオオオ！」

「来るぞ！」

「ばうばう！」

「お前もやるのか。……行くぞ！」

スネークとダックハントは、操られたマックとMr. サンドマンと戦った。

「はっ！」

スネークはMr. サンドマンに手刀を放ち怯ませる。

ダックはリトルマックにフェイントをかけ、ハントがリトルマックに体当たりする。

「グレネード装填、発射！」

スネークは周りに被害が及ばないようにグレネードランチャーを放つ。

爆発の衝撃でマックとMr. サンドマンは吹っ飛んでいった。

「ばう！」

「ウオオッ！」

「あおーん！」

ハントはマックに近付いて彼の右腕を狙うが、

マックはハントの攻撃をかわしてジャブを放ちダメージを与える。

Mr. サンドマンはスネークにストレートを放つが、

スネークはかわして背後に回り込み麻醉銃を連射して倒した。

その後、ダックハントがガンマンを召喚し、マックを一齐に射撃して戦闘は終わった。

「呆気ない最期だったな」

「わん、わんわんわん……」

「いや、まだ死んでないし」とハントが鳴くと、マックがゆつくりと起き上がった。

キーラの呪縛から解放されたため、彼の眼は元の黒に戻っていた。

「ん……オレは一体……」

「正気に戻ったか、マック。お前は悪い夢を見ていたんだ」

「……悪い夢……。そうか、あれは夢だったんだな」

マックは年相応の少年らしく、素直に納得した。

「ありがとう、みんな」

「あれ……おにいちゃん、だれでちゆか？」

「そうか、『おにいちゃん』か。オレはボクサーのリトル・マックだ」

ピチューはマックの事を知らないので、マックは彼らに自己紹介をした。

「ぴちゅはぴちゅでちゆー！」

「ボクはランスだよ！」

「オレはジユカインだ」

ピチュー、ランス、ジユカインなど、彼を見た事がない人物は自身の名前を名乗る。

一応、スネークとシャドウはアシストフィギュア時代から

マックを知っていたので、ここでは名前を名乗らなかつた。

「……ありがとう、みんな。ところで、話は変わるが、一体何が起きているんだ？」

世界が荒れ放題になっているが……」

「ああ、実はな……」

スネークはマックにこれまでの事情を話した。

「……というわけだ」

「つまり、この世界が荒れたのはキーラのせいというわけか。」

くそつ、正々堂々と勝負したかったのに……！」

マックは歯ぎしりを立てて右手を握りしめる。

「失うものがないものは、倫理観もない。それが現実だ」

「シヤドウ……」

「だから、僕はそんな奴にこう言おう。自らが犯した罪に一生苦しみ続けるがいい、と」

シヤドウは厳しい事を言うが、これが現実である事はマックにも伝わった。

マックは頷き、立ち上がって凜々しい表情で一行にこう言った。

「これ以上、あいつが勝負を邪魔しないように、オレも一緒に連れて行ってくれ。」

……絶対にあいつは許さないが、怒りをぶつけるのはあいつと戦う時だけでいい。

だから、オレもお前らと一緒に、あいつから全てを取り戻す！」

「分かったぜ、マック。……一緒に、行こう」

「ああ！」

マックとマリオは共に拳をぶつけ合った。

こうしてピチューに続きまた一人、キーラの呪縛からファイターを解放した。

キーラはその様子を空から見上げていて、悔しそうに震えていた。

37 　　キノコの谷

電力プラントでピチュー、街でマックを解放した一行は、安全な場所ので休憩を取っていた。

リンクは周りにいた魔物を使って料理を作り、それを一行に振る舞っていた。

「美味しいな、この料理」

「リンクから継いだからな」

今のリンクは利き手や性格こそ異なるものの、記憶や能力は受け継がれている。

スマブラメンバーはそれを承知した上で、リンクと付き合っているのだ。

「もう少しまともな料理が欲しかったんだが」

「すまないな、魔物を食材に使ってしまった」

「でもこれ、とっても美味しいよ！」

「何杯でも食べられますよ」

「もつと食べたいヨ！」

カービー、ヨッシー、パックマンの大食い組には魔物料理は好評だったようだ。

リンクは「ははは」と苦笑いしながら、残っている材料を料理に使うのだった。

「ごちそうさま」

リンクの魔物料理を食べ終わった後、食器を洗って片付ける。

その後、ベルは立ち上がってスピリッツを感知する体勢に入る。

「次も目的地……あっちね」

ベルは、キノコがたくさん茂っている場所を赤い瞳でじつと見つめていた。

「お、キノコがたくさんあるじゃないか」

「そこに、三体のファイターを確認したわ。動物と宇宙人みたいだけど……行ってみる？」

「当然だ！ そいつもキーラに操られてるなら、とつとと助けないと

な！」

マリオは迷わず、ベルの意見に賛成する。

他のファイター達も頷き、一行の次の目的地はキノコの谷に決まるのだった。

「うおお〜！ キノコがいっぱいある〜！ これ、全部食えるのか？」

「毒キノコもあるよ？」

ハリマロン、ライン、ブル、ブリトニーを解放しながら、一行はキノコの谷を探索する。

マリオは、キノコの谷に生えているたくさんキノコを見て騒いでいた。

「でも、毒キノコで料理は作りたくないな。仮に毒があってもカービイなら平気だろう」

「やだよ、毒キノコ食べたくない！」

カービイはマリエルという不味い敵を思い出し、毒キノコを食べるのを拒否した。

「いや、冗談だ」

「今のリン兄が言うとは冗談に聞こえないよ……」

道中でキーラの呪縛を受けた野良スピリッツが一行に襲いかかるが、

スマブラ四天王の活躍により皆、退ける事ができた。

「流石はスマブラ四天王、動きに無駄がないな」

「へへっ、ありがとよ！」

「わーい！」

「ふっ」

不敵に笑うリンクとピカチュウ、素直に喜ぶマリオとカービイ。

性格も多種多様だがその力と絆はとても強いのだ。

「見つけたわ！」

そして、ベルがキノコの上を歩いて行くと、オリマーと熊と鳥が縛られている台座を発見した。

しかし、台座に行くためのキノコは小さく、とても全員が乗れるものではない。

どうすればいいかとベルが考えていると、

スピリッツボールからナチュレのスピリッツが出てきた。

「あ、ナチュちゃん！」

「じゃから妾はナチュレじゃ！」

……コホン。キノコを成長させる事など、自然王である妾には造作など無い。ゆけい！」

ナチュレが杖を振ると、小さかったキノコがみるみるうちに大きくなり、

皆が通れる大きさになった。

彼女は役目を果たすとすぐにスピリッツボールの中に戻っていった。

「ありがとね、ナチュちゃん！」

カービイはスピリッツボールのナチュレに笑顔でお礼を言った。

「さて、ファイターは誰がいるのかしら？」

「行こう、行こう！」

一行が大きくなったキノコを渡ると、ファイターが捕まった台座の前に辿り着いた。

ベルは歯をくいしばった後、光の鎖目掛けて大鎌を振りかざし、光の鎖を切り裂いた。

鎖から解放されたファイターが赤い瞳をぎらつかせて襲いかかってくる。

一人はホコタテ星人のオリマー、

一頭と一羽はかつてドンキー達の世界にいたバンジョーとカズーイだった。

敵に回ってしまったかつての友を見て、ドンキーは歯を食いしばり握り拳を作る。

「バンジョー、カズーイ……操られていて苦しいだろう。今、オレが助けてやるからな」

「来るわよー！」

「うん！」

「かかってこい！」

カービィ、ベル、マック、フオックス、スネーク、ドンキーは、三人の操られたファイターに戦いを挑むのだった。

「おりゃあっ！」

ドンキーは腕をぶん回すが、オリマー、バンジヨー、カズーイは攻撃を楽々と回避する。

オリマーはピクミン達に指示を出し、六人の動きを制限する。

「きゃー！ 何するのよー！」

「キーラサマニサカラウモノハコロス……」

ベルはまとわりつくピクミンを払いのけ、オリマーを大鎌で切りつける。

バンジヨーはマックに殴りかかるが、マックは攻撃をかわし、ボデイブローを叩き込む。

スネークはオリマーに麻醉銃を撃つて眠らせ、無防備にする。

「バンジヨー、カズーイ！ オレが分からないのか!? 目を覚ませー！」

ドンキーはバンジヨーとカズーイに呼びかけながら連続で殴る。

だがバンジヨーとカズーイは怯まず、ドンキーに突っ込んでいき彼を吹っ飛ばした。

「マケタラキーラサマニケサレルカラ、ボクたちハゼツタイニマケナイ」

「馬鹿な事はやめるんだ！」

「アンタガバカナクセニ……」

カズーイはマックに爆弾を投げつけ、爆発の衝撃でマックは目が眩んだ。

「くそー！ 道具を使うのは卑怯だぞー！」

「やめたげてよおー！」

カービィはハンマーを振り回してバンジヨーとカズーイ、オリマーを薙ぎ倒す。

オリマーは立ち上がって紫ピクミンをカービィに投げる。

「あいたたた、いたたた！」

「……ケシサツテヤル」

「させん」

スネークはオリマーの背後に回り込んで彼を持ち上げ、地面に叩きつける。

そこにフォックスがブラスターを連射してオリマーの体力を削った後、

フォックスがとどめに回し蹴りを放ってオリマーを倒した。

「よし、やった！」

「後はバンジューとカズーイだけだな。待ってろよ、今光の中から出してやるからな」

バンジューとカズーイをよく知っているドンキーは一刻も早く彼らを助けたいと思い、

一頭と一羽に突っ込んでいった。

「援護するよ！ ファイナルカッター！」

「はあああつ！」

カービィはカッターを飛ばしてバンジューとカズーイを同時に切り裂く。

フォックスはリフレクターでカズーイの卵爆弾を防御しつつ、ブラスターで遠くから安全に攻撃する。

「ドンキー、俺達を信じろ。あの熊と鳥は必ずキーラから取り返せる」

「ああ、分かっているぜフォックス」

動物同士互いに応援し合うドンキーとフォックス。

バンジューとカズーイは赤い瞳でぎろりと一頭と一匹を睨みつけた。

「キサマラー！」

「イキテカエレルトオモワナイデネ！」

「ふっ！」

ベルは突っ込んできたバンジューとカズーイの前に魔法陣を設置する。

バンジューが魔法陣を踏むと、闇の棘がバンジューとカズーイを貫いた。

「ギャアアアアア！」

「どう？ 私の闇魔法は。光に墮ちているあんた達には痛いわよ？」

「キ……」

「キツサマアアアアアアア!!」

「よつと!」

ベルはバンジヨーとカズーイの攻撃をかわし、背後に回り込んで大鎌で切り裂く。

「そーれ!」

「ウ……」

「グ……」

カービイはストーンに変身してバンジヨーとカズーイを押し潰す。彼らの猛攻により、一頭と一羽の体力は残り僅かになっていた。

ドンキーはそれを見逃さず、ぐるぐると腕を回して力を溜める。

「バンジヨー……カズーイ……オレの目を……見ろおおおおお!!」

「ウワアアアアアアア!」

「キヤアアアアアアア!」

ドンキーの、渾身の力を込めたジャイアントパンチがバンジヨーに命中すると、

爽快な音と共にバンジヨーとカズーイは遠くに吹っ飛ばされるのだった。

「う、うくん……」

「ここは、どこ?」

「私は一体何をしていたのだ……」

戦闘が終わり、オリマー、バンジヨー、カズーイはキーラの呪縛から解放され、正気に戻った。

ドンキーはすぐにバンジヨーとカズーイに駆け寄り、彼らの顔にそつと腕を当てた。

「大丈夫だったか? バンジヨー、カズーイ」

「ボクは……ちよつと疲れちゃったかな」

「あたかも勝手に身体を動かされてくたくたになっちゃったわ」

「でも、お前達が無事でよかつたぜ。本当に……!」

離れ離れになった旧友との再会に、ドンキーは心から喜んだ。

そんなドンキー、バンジョー、カズーイの様子を見たオリマーがべルに声をかける。

「あの二頭と一羽は仲が良いのか？」

「ええ、かつては同じ世界にいたのよ。でも、ある事情で離ればなれになっちやって……。」

「だけど、今、ここで再会したのよ」

「互いに忘れていないほど、友情は厚いようだな」

「そうね……友情っていうのは、誰にも切り離せないものだわね……」
戦いを終えてしばらくした後、

オリマー、バンジョー、カズーイは改めて一行に自己紹介をした。

「私の名前はキャプテン・オリマー、ホコタテ運送で働いているホコタテ星人だ」

「ボクはバンジョー、こっちは相棒の」

「カズーイよ！ よろしくねっ♪」

「二よろしく（お願いします）」

こうして、宇宙を旅する一寸の男と、種族と性別の差を超えた二頭と一羽の友情を、

ファイター達は救ったのだった。

38 魔弾の射手・ストーム

オリマー、バンジヨー、カズーイを解放した一行は、キノコの谷でゆつくりと身体を休ませていた。

バンジヨーは、カズーイが採取した安全なキノコを食べていた。

「このキノコ、美味しいでしょ？」

「うん、美味しいね。でも、カズーイ、毒は無い？」

「ちゃんと安全なキノコを採ってきたわよ！」

あたいを疑ってる気？ と鳴くカズーイ。

「いや、念のため聞いたただだよ」

「おーい、みんな、俺がキノコを使って料理を作ってやるからちよつと待ってよー！」

リンクは既に調理道具を用意していた。

「どうやらキノコを使って料理を作るつもりらしい。」

「リンクさん、また料理を作るんですか？」

「ああ、お前達には特にたくさん作ってやるからな。腹が減ったら戦はできないからな」

「はーい！」

ヨツシー、カービー、パックマンの大食い組と、

りょう、ランス、ピチューの子供組が喜ぶ顔を見て、リンクも釣られて微笑むのだった。

「「ごちそうさま」」

リンクのキノコ料理を食べ終わり、食器を洗って片付けた後、一行はキノコの谷を後にした。

次に一行が行った場所は、山岳地帯だった。

ここにもキーラに操られたスピリッツがたくさんいて、一行の行く手を阻んでいた。

しかし、世界を救うためにも、歩みを止めない。

「ケケケケケ……」

「幽霊め、消え失せなさい！」

「ギャアー！」

ベルはゲンガーを大鎌で切り伏せてスピリッツを解放する。

「ファイアボール！」

「カオススパア！」

マリオとシャドウが飛び道具でみしらぬネコのスピリッツを解放する。

「ワドスパアスロー！」

「行けっ、赤ピクミン！」

ランスが槍、オリマーがピクミンを巧みに操りもんばんさんのスピリッツを解放する。

「ドラゴンキラー！」

「くく……良い……良いぞ、実に良い！ もっと……もっとだ……！」

この至上の時は、まだ……まだ……」

マルスのファルシオンがアシュナードを貫き、彼のスピリッツを解放する。

「こんなものかな」

マルスが辺りを見渡してみる。

山岳地帯に、キーラに操られたスピリッツはほとんどいなくなつた。

「ええ、粗方終わったわね……あら？」

「どーしたの、ベルベル？」

「ちよつとあれ、見て」

ベルは山岳地帯の西側を指差す。

カービーが彼女の指差した方を向くと、

そこには弓を持った緑のバタモンが光の鎖で縛られていた。

アリティア王子と共に戦った弓兵、フェレ公子の乳兄弟の弓兵、

家族を探している弓を使う村娘と似た色合いだが、纏う雰囲気は彼らより荘厳だった。

「誰だろう？ ねえ、聞こえる？」

カービーが緑のバタモンに声をかけるが、バタモンは全く反応しない。

それどころか、台座の下からバタモンの身体が次々と生成されてい

く。

「カービィ、このまま放っておいたらこのバタモンの身体でまたスピリッツが襲ってくるぜ?」

「あ、助けなきや! えいつ!」

カービィが緑のバタモンに触れると、光の鎖は碎け散り、束縛から解放される。

すると、バタモンは弓に矢を番え、いきなりカービィに向かって矢を放った。

「わっ! 何するんだよ!」

カービィが驚いてその矢を避けるが、矢は地面に刺さり、しばらくすると光となって消滅した。

「キーラサマニサカラウモノ……コロス……」

バタモンは弓を構え、今にも一行に射かけんとしていた。

「こいつもキーラに操られてるのか!」

「そうみたいだね」

マルスは冷静に相手の様子を見ながら、ファルシオンを抜刀する構えに入る。

「ぼ、僕だって……やるんだから!」

カービィはちよつと震えながらも、バタモンをキーラの呪縛から解放するべく、迎え撃つ。

「守るべきものを守るために、私も戦おう」

「健康第一、参ります!」

「ま、とりあえず、俺がやらねーとな」

「いつくよー、みんな!」

続いて、ソレイユとオリマーが彼らに続き戦闘態勢を取った。

柊蓮司も魔剣を抜き、りょうも彼に続いてバタモンと戦う準備をした。

そしてバタモンが赤い瞳を光らせて襲い掛かった。

「えいつ!」

カービィはバタモンを蹴ろうとするが、バタモンは攻撃をかわし、六本の矢を番えて天に向かって射る。

「な、何をしたの?」

「油断するな、攻撃はいつ来るか分からないぜ」

柊蓮司はバタモンの矢をかわしつつ、魔剣を振って斬りつける。

オリマーはピクミンをバタモンに投げつけてバタモンの動きを止めていく。

「シネ……」

「うわあああああ!」

「きやあああああ!」

柊蓮司、カービィ、りょう、マルス、ソレイユの身体に先程バタモンが放った矢が刺さる。

オリマーは紫ピクミンが守ってくれたためダメージはなかったが、代わりにピクミンが全員死んでしまった。

「まったく……三匹のピクミンを一度に倒すとは、どんな原生生物だ?」

いや、そもそも原生生物でもないか」

「オリマー、感心してる場合じゃないよ!」

「そうだな!」

オリマーは黄ピクミンを投げてバタモンを攻撃し、マルスがマーベラスコンビネーションで追撃する。

ソレイユは飛びかかったが、バタモンには当たらなかった。

「そら!」

柊蓮司は魔剣から剣圧を発して、バタモンを射程に捉える。

バタモンはシールドを張って魔法の矢を防いだ。

「元に戻ってよ!」

カービィはバタモンに突っ込んで彼を掴み、スープレックスで投げ飛ばす。

即座に柊蓮司が斬りかかるが、バタモンはぎたいで彼の攻撃を防ぐ。

「ねえってば! ねえ! 僕の声が聞こえる!?!」

「キーラサマノジヤマヲスルキカ」

「うわあ!!」

バタモンを正気に戻すべく、カービイはバタモンに呼びかけるが、バタモンは全く反応しない。

「それどころか、バタモンはやぎりのスラッシュでカービイに斬りかかってきた。」

柊蓮司は歯ぎしりを立て魔剣を構え直す。

「キーラに操られている以上、いくら呼びかけても無駄みたいだな。おらあ！」

柊蓮司は魔剣に大地の魔力を宿して、バタモンに至近距離から攻撃を仕掛ける。

それはバタモンに対して絶大な威力を發揮し、彼の体力を大幅に削る事に成功した。

「よっしゃー！」

「これでとどめだ、行けっ!!」

「グアアアアアアアアアアアアア!!」

そして、オリマーが紫ピクミンをぶつけると、バタモンは吹っ飛び、戦闘は終わった。

「これで大丈夫だよ」

ドクターが瀕死になっているバタモンの治療を終わらせると、彼はゆっくりと身体を起こした。

バタモンの瞳は緑色で、カービイ達と戦っていた時の殺意は見られない。

「ん……ここはどこだ？ 僕は何をしていたんだ？」

「実はかくかくしかじかで……」

バタモンはカービイ達と戦った記憶は無いようだ。

マルスは分かりやすいようにバタモンに説明する。

「なるほど……つまり、光の化身キーラとやらが僕をこんな目に遭わせたんだな」

バタモンは自分が利用されたと知り、不快な表情になる。

一行は彼の名前を知らなかったため、カービイはバタモンに名前を聞いてみた。

「ねえ、君は誰なの？」

「僕の名前はストーム。特A級のARTS使いだよ」

「と、特A級!!?」

特A級——それは、一般的に最強と言われているA級をさらに上回る、

世界最強のARTS使いの事だ。

なるための条件は非常に厳しく、このランクのARTS使いは、公式にはストームの他にマリオとメタナイトしかいないのだ。

「俺と同じランクのARTS使いがここにいるなんて、信じられないぜ」

「もし敵が来たら、この矢と竜巻で吹き飛ばしてやるさ」

「は、ははは」

「いい仲間が手に入ったわね」

不敵な笑みを浮かべるストームに、マリオは苦笑する。

ベルも、心強い仲間が増えた事を喜んだ。

「じゃあ、スト君……これから一緒に、キーラから全部取り返そう!」

「……僕にはストームという名前があるがね」

ストームはカービィに突っ込みを入れつつ、彼が差し出した手を握った。

こうして、魔弾の射手・ストームが、スマッシュブラザーズの新たな仲間に加わるのだった。

39 く タツマイリに住む少年

ストームを助けた一行は、キーラの目が届かない安全な場所でゆっくりと身体を休ませていた。

「なるほど……君が使うのはそういうタイプの武器なんだね」

「そういうタイプとは……銃を知らないのか？」

「ああ、僕の元いた世界には無かったよ」

「シャドウの銃は重たいけどとつてもかっこいいよ！ 私が初めて見た時はちよつと驚いたよ」

ストーム、シャドウ、マールは、射撃武器（マールは「ブキ」）を使う者同士、

という事である意味親近感を抱いた。

「矢にトルネイドの竜巻を纏わせ、矢の速度と威力を上げて……」

「この拳銃と機関銃は僕の手合ってな、戦いが終わるまでは手放せなくなつた」

「私が愛用するブキのわかばシューターは、サポートが得意で、誰もが持つてるんだよ」

武器（ブキ）関連で三人の話は一気に盛り上がる。

周りの姿や声がほとんど目に入らないほど、彼らは武器（ブキ）の話題で熱くなつていた。

「よし、試し撃ちするか」

「やるぞー！」

「いくよ」

そして、ストームが弓、シャドウが拳銃、マールがわかばシューターを構え、

試し撃ちをしようとしたその時――

「やめろー！ー！ー！ー！ー！ー！っ！！」

柀蓮司の叫び声が聞こえてきて、ストーム達は一斉に彼の方を向いた。

もちろん、それぞれの武器（ブキ）を構えながら。

「いや、その武器、しまつてくれ」

終蓮司がツツコミを入れると、三人はすぐに武器（ブキ）をしまうのだった。

「こんな笑えない時なのに、笑わせてくれてありがとうよ」

ははは、とドンキーコングが笑っている。

今はキーラのほとんどに戦力を奪われており、とても笑えるような状況ではない。

が、ストーム、シャドウ、マールのやり取りはドンキーに笑いを与えてくれたようだ。

「真面目にやったつもりだが」

「なんで笑ったのかな？」

ストーム、シャドウ、マールは呆れていた。

しかし、笑いによってスマツシユブラザーズの緊張は一気にほぐれた。

「ありがとよ。おかげで、リラックスできたぜ。さ、みんな仲間を探すぞ」

「……ああー」

一行は、山岳地帯にいる残ったファイターを解放しに向かった。

ストームの次に見つけたファイターは、タツマイリに住む金髪の少年、リュカ。

彼には、ドンキー、バンジヨー、カズーイ、シャドウ、アイシャで立ち向かった。

「リュカ、ボク達を信じてね」

「はっ！」

シャドウが拳銃から放った弾丸が、吸い込まれるようにリュカの腹部を撃ち抜く。

「おらあー」

「そおれー」

「……」

リュカはバンジヨーとカズーイの攻撃をかわし、ドンキーをPKフラッシュで惑わす。

「うおっ！ 眩しっ！」

「コレガキールサマノヒカリダ……マブシイダロウ……」

「ああ、眩しいぜ。だが、それがどうした？ オレのパワーは眩しさになんか負けないぜ！」

「おりやあああああああつ！」

ドンキーはジヤイアントパンチをリュカに食らわせる。

しかし、リュカは痛くも痒くもない表情をした。

「なっ!? オレのパンチが効かない!？」

「オマエノチカラハ……ボクニハキカナイ」

「ふぎけやがって……うぐっ!？」

ドンキーが再び殴ろうとすると、彼の身体から力が抜ける感覚がする。

「なんで、力が出ないんだ……!？」

「コノPKフラッシュユハ……アイテカラチカラヲウバウノサ」

「何、だと……!？」

ドンキーはふらつきながらもゆっくり起き上がる。

しかし、確実に立つ力は減ってきていた。

「ドンキーに何をするんだよ！」

バンジューはパンチで攻撃するが、リュカはシールドで攻撃を防ぎ、PKサンダーで反撃する。

その攻撃をアイシャが代わりに受け、彼女は皿を投げつけてリュカを攻撃した。

「あまり攻撃は得意ではありませんが、リュカさんを助けるためならこれくらい……」

シャドウは再び、拳銃でリュカを撃つ。

攻撃を食らったリュカは、PKサンダーでドンキー達を痺れさせた。

「ぐっ……!？」

「動けない……」

「コレデ……トドメダ。PKスター……」

リュカが強力なPSIを発動させようとした時、

唯一動けるカズーイがリュカの方に飛んでいき、嘴で彼を攻撃し

た。

頭をつつかれたリユカは集中力が途切れ、PSIを発動できずに終わる。

「うぐっ!？」

「バンジョーもドンキーも動けないけど、あたいまでは止められなかったみたいね！」

「カズーイ、よくやったー！」

相棒の活躍を褒めるバンジョーに、カズーイはへへへと照れる。

彼女はすぐに真剣な表情に戻り、再びリユカに突っ込んでいく。

リユカはPSIで反撃しようとするが、カズーイに頭をつつかれたため上手く発動できなかった。

「これで、とどめよー！」

そして、カズーイがリユカを掴むと、彼を地面に叩きつけ、戦闘不能にする。

こうして、リユカとの戦いは、終わるのだった。

「……ボクは一体、何をしてたの……?」

正氣に戻ったリユカは、他の助けたファイター同様、

キーラに操られていた記憶は無くなっていった。

しかし、傷はしっかり残っており、リユカが操られてドンキー達と戦ったという事実が残った。

「大丈夫でしたか、リユカさん? 今、わたしが治しますわ」

アイシャは治癒の力を使い、戦いで傷ついたリユカを治療する。

「……身体の痛みが消えてる……キミが治したの?」

「ええ。もう大丈夫ですわよ」

起き上がったリユカにニッコリと微笑むアイシャ。

「ところで、あなたはこうしてこちらにいらつしやいましたの?」

「あ、実はネス君と一緒に光から逃げたんだ。

でも、光だから凄く速くて……ネス君も、ボクも……」

リユカは落ち込みながらアイシャ達に事情を話す。

アイシャは「なるほど」と頷いた。

「それで、ネスさんは一体どこにいったんですの?」

「それは覚えてないから分からないよ。だけど」

「確実に無事ではなさそうですね」

ネスもキーラに操られた被害者だ。

今もなお、母体をキーラに利用されている……そう思ったりリュカは身体が震え出した。

「でも、大丈夫だよ。ボク達が必ず、みんなを助けてあげるから」

「くよくよしないで！ あんたの元気がなかったら、あたいらも元気がなくなるわよ！」

バンジョーとカズーイが落ち込むリュカを元気づける。

確かにこんな調子では、スマッシュブラザーズを助けるための気力が足りなくなる。

立ち止まってはられない、とリュカは立ち上がった。

「ありがとう、熊さん、鳥さん。キミ達のおかげでボク、元気になったよ」

「あ、名前を言い忘れちゃったね。ボクはバンジョーだよ」

「あたいはカズーイよ、よろしくね」

「よろしく願います、バンジョーさん、カズーイさん！」

そう言っつて、リュカはバンジョーの腕を右手で、カズーイの羽を左手で握った。

ちなみにバンジョーとカズーイは、後で「呼び捨てでいいんだけど」とリュカに言った。

こうして、スマッシュブラザーズは、光の鎖からリュカを解き放つのだった。

40 ほんわかアシスタント

「さて、残ったファイターは……」

ベルは、魂を感知する能力を使って捕まっているファイターを察知した。

彼女の頭の中に、ファイターの情報が入っていく。

「金髪……女……獣人……釣り竿……」

ベルはファイターの特徴をぶつぶつと呟く。

りようはそれを聞いて、何となくだが捕まっているファイターの正体を推測する。

「もしかして、そのファイターって……」

「……はっ！」

精神集中を終えたベルは意識を取り戻す。

「ベルベル！ ファイターが分かったの!？」

「ええ。釣り竿を持った、金髪の女の獣人がここから遠くに捕まっているわ。」

でも、ここからじゃ遠いし、何より山が邪魔しているし……」

このままでは、ファイターの下に辿り着く事ができない。

ベル達が困っていると、スピリッツボールの中から

うんてんしゆのスピリッツが飛び出してきた。

『おめえら、困ってらが?』

「か、じゃなくてうんてんしゆさん!」

『山が邪魔だら、オラのバスは是非乗ってくんろ。安心するだ、ゆったりのんびりだべ』

「ありがとう。でも、全員乗れるのかしら?」

「これで空間を広げればいい」

ベルの疑問に対しては、シャドウがカオスエメラルドを取り出す事で解決した。

『んだ、出発進行だ〜!』

「きゆうりの糠漬け〜!」

こうして、スマッシュブライザーはかっぺい、もというんてんしゆ

が運転するバスに乗り、

ファイターがいる場所に向かうのだった。

「ちよつとバスが揺れているね」

『だから、ゆつたりのんびりだべ。そこまで心配する必要はねえ。』

このバスには敵は来ねーがらな』

カービー、ランス、リユカなどの子供組は、ワイワイと楽しそうに窓を見ている。

うんでんしゆは話しかけられながらもしつかりと集中してバスを運転している。

「……」

「相変わらず無口だね、シャドウは」

マールは、何も喋らないシャドウをじつと見つめている。

一方、りようはファイターが誰なのかを想像していた。

(僕が知ってる女の獣人は、彼女しかいないな。)

いや、どうぶつって言った方がいいのかな……？ 十中八九彼女しかいないと思うけど……)

『ほい、着いたべよ』

「ありがとうございますー！」

こうして、うんでんしゆの力を借りて、

スマツシユブラザーズはファイターが捕まっている場所に辿り着いた。

「あつ、いたよ〜ベルベル！」

「一体、どんなファイターかしら……あつ！」

一行が奥に進むと、黄色い体色をしたシーズーの女性が光の鎖で束縛されていた。

ベルが感知した特徴と、全く同じだった。

その女性は、りように見覚えがある人物だった。

「しずえ……！」

そう、彼女はりようの秘書、しずえだったのだ。

彼女の穏やかな表情は成りを潜めており、一行を殺意がこもった赤い瞳で睨みつけていた。

「キーラサマニサカラウナラバ、アナタタチヲケシサリマス」

「……まずは鎖から解放するぞ」

そう言つて、リンクはしずえを拘束している光の鎖をマスターソードで切り裂く。

解放されたしずえは、釣り竿を構えて一行に襲い掛かつてきた。

「来るぞ！」

「ええ、行くわよ、みんな！」

「おうっ！」

「待つててね、しずえ……必ず、僕が助けるよ！」

ベル、りょう、リンク、ファルコン、ドクター、ロックマンは、操られたしずえを助けるため、彼女と戦つた。

「せいっ！」

リンクはマスターソードを抜き、しずえを斬りつける。

しずえはりょうにフェイントをかけ、惑わせる。

その間に、しずえを覆う光がドクターを打ち据えてダメージを与えた。

「あいたたた……やるじゃないか、しずえ君」

「フフフフ……」

しずえは傘をロックマンに向けて振り下ろす。

攻撃はロックマンにギリギリで当たり、ロックマンは軽く仰け反る。

「ファルコンキッカー！」

ファルコンは屈んでしずえを炎を纏つた蹴りをぶちかます。

ロックマンはファルコンに続いて溜めたロックバスターを放ち、追撃した。

「今のしずえ君の攻撃は見た目以上に強力みたいだ。みんな、気を引き締めていくよ」

「うん……」

りょうは気を引き締めて、キーラに操られたしずえに向き直つた。しずえは赤い瞳で、支援するはずのりょうを睨みつけていた。

「ファルコン……パンチ！」

「ブーメラーン！」

ファルコンの渾身の一撃を、しずえはシールドを張り攻撃をシールドブレイクギリギリで防ぐ。

リンクはしずえにブーメランを投げるが、彼女はシールドを解除し緊急回避でかわす。

「ぐあっ！」

さらに、彼女を包む光のオーラがリンクとファルコンに反撃した。

「随分強い光ね……でも、私の闇には敵わないわよ！」

「キャアアアア！」

ベルはしずえに近づき、大鎌で彼女を一閃した。

「凄いな、ベル」

「まだまだよ！」

続いてベルは大鎌から闇の双刃を放ち、しずえを包む光のオーラを切り裂いた。

「アア、アアアア」

「！ 元に戻るんだ！」

慌てふためくしずえに、りようは頭上からボウリングの球を落とし、

「いくわよ！」

ボウリングの球に潰されたしずえは、しばらく動けなくなった。

ベルは闇の双刃をしずえに向けて放ち、続いてファルコンがしずえを肘打ちで攻撃する。

りようはパチンコで光のオーラが薄い部分を狙って撃つ。

「はいよっ！」

「クッ！」

「そらっ！」

ベルの大鎌をしずえは上手くかわすが、かわした先にはリンクがいて、

マスターソードで斬りつけられる。

しずえは道路標識でリンクに反撃するも、リンクは盾で彼女の攻撃を防いだ。

「……」

「今だ、りよう！ 彼女を解放しろ！」

「おっけー！ しずえ、僕のところに戻ってこーい！！」

リンクの掛け声で、りようは斧を構えてしずえに突っ込んでいった。

そして、りようの斧がしずえの光のオーラに命中すると、

光のオーラは音を立てて砕け散り、しずえも場外に吹っ飛ばされた。

「しずえ……無事かなあ……」

キーラに操られた反動で、しずえはしばらくの間、気を失っていた。りようは倒れたしずえを心配の目で見ている。

そんな彼を見たリンクは優しくりようの肩に手を置いた。

「大丈夫だ。もう少ししたら目が覚める」

「そう、だよ。ありがとう、リンク」

数分後、正気に戻ったしずえが目を開けて起き上がった。

しずえは、きよろきよろと辺りを見渡す。

「あれ？ わ、わたしは一体、何をしてたんですか？ ……あ、りよう

さんー！」

「しずえー！」

秘書の犬と再会したりようが、喜びからお互いに抱きしめ合う。

「よかったあ。ずっと離れ離れだと思いましたが、また会えてとっても嬉しいです」

「それは僕も同じだよ。スマッシュブラザーズの絆は永遠だもんね」

「本当にありがとうございます！」

りようさん、皆さん、これからもずっと、わたしの傍から離れないでくださいね」

「約束は守るよ、しずえ。だから、泣かないでね」

涙目になるしずえの頭を、りようは村長として優しく撫でた。

人間と獣人、種族の差を超えた絆を、一行はしみじみと感じ取った。

こうして、スマッシュブラザーズは、光の呪縛からしずえを解放し、新たな仲間に加えるのだった。

41 氷山にて

山岳地帯でリュカ、街でしずえを救出し、スマツシユブラザーズの戦力は徐々に増えていった。

「皆様、ボク達を助けてくれて」

「本当にありがとうございますでした」

リュカとしずえはスマブラメンバーにお辞儀する。

その様子からどちらも穏やかな性格が見て取れる。

「いいんだよ、僕は平和なご飯とお昼寝の時間を取り戻したいだけだから」

カービイは相変わらず、マイペースな性格だ。

こんな危険な時でありながら、自分の事を第一に考えているのはある意味肝が据わっていると二人は感心する。

ふと、ヨツシーはしずえが戦えるかどうか気になって声をかけてみた。

「あのく、しずえさくん。失礼ですがく、あなたは本当に戦えますか？」

「大丈夫です！ 秘書として身を護る術は身に着けてますから！」

しずえは自信満々にそう答えた。

「……だ、そうだから平気だよ、ヨツシー」

「そうですね、それなら安心です。あ、それとく、次はどこに行きましようか？」

「そうだな……ここから西に行けば、雪山に行く事ができる。」

そこにはキーラに操られたファイターとスピリッツがいるらしいぞ」

シャドウは鋭い直感で、西に何かがあると察した。

しずえは頭に？マークを浮かべている。

「あの、それって本当なんですか？ 行ってみないと分からないと思います」

「大丈夫だよ！ シャド兄を信じて！」

「それに、ずっと立ち止まってるよりは歩いた方がいいだろ？」

「うん……」

でもまあ、あなたの言いたい事も分かりますし、りょうさんがそう言うなら行きましようか」

「よし、決定ね！ 西に行くわよ！」

「なあなあ、その赤帽子、聞いてくれないか？」

「赤帽子、って俺の事か？」

一行が山岳地帯から西に行くと、緑の鰐、紫のカメレオン、

ゴーグルをつけた蜂が困った顔でマリオに依頼する。

「どうしたんだ、鰐のおっさん」

「うん、俺様は『おっさん』じゃなくて、

ベクター・ザ・クロコダイルって名前なんだけどなあ、っていうか

おっさんって言うなよ」

「自分はエスピオ・ザ・カメレオンと申す」

「ぼく、チャーミー・ビーだよー！」

鰐、カメレオン、蜂はそれぞれ自分の名を名乗り、

カオティクス探偵事務所の一員である事を明かす。

ベクターはマリオに「おっさん」と呼ばれて少し傷ついたようだ(ベ

クターはまだ20歳)。

「ごめんよ。で、どうしたんだ？」

「見た事がない魔物が現れて、この辺に迷惑をかけているんだ」

「自分もその魔物を討伐したかったのだが、身体が勝手に動いてし

まってる……」

「だから、まものをやっつけてほしいんだ！」

ベクター、エスピオ、チャーミーは、自身が操られている事を一行

に話した。

ランスは頷くと、槍を取り出してカオティクスと魔物——ボコブリ

ンに槍を向ける。

「報酬は……そうだな、俺様達が仲間になるぜ」

「ついでにボコブリンのスピリッツも解放するぞ。さあ、行くぜ、ラン

ス！」

「うん！」

マリオとランスは、カオティクスとボコブリンに戦いを挑んだ。

「サンキュー」

「かたじけない」

「ありがとうー!」

無事にカオティクスとボコブリンを解放し、彼らのスピリッツはスピリッツボールの中に入る。

「これで大丈夫ね。さ、雪山に行くわよ」

「ああ」

一行が西に向かって歩いていくと、りょうが急に縮こまった。

しずえが「どうしましたか」と声をかけると、彼は震えながらしずえに話した。

「さ、寒い……動けない……」

よく見ると、りょうは顔面蒼白になっていた。

恐らく、寒さにやられてしまったのだろう。

「りょうさん! 今、毛布を出しますから!」

しずえは毛布を取り出し、りょうの身体にかける。

しばらくすると、りょうの顔色が良くなった。

「ふう……助かったよ。ありがとう、しずえ」

「いえいえ、これも秘書のお仕事ですから」

「寒いって事は、もうすぐ氷山に着くのね。でも、このままじゃみんな凍えちゃうわ。」

どうにかして、みんなを温める方法はないかしら?」

しずえの毛布は一人用で、全員を包むのは難しい。

何とか全員を寒さから守ってやる方法はないのか、と考えていると、

柊蓮司がスペルカードを取り出した。

「これは?」

「エンデュア・エレメンツという魔法が封じられたカードだぜ。」

これは異世界にある、暑さや寒さから身を守り快適に過ごす事ができる魔法だ」

ちなみにこの魔法は、異世界から持ち出したものらしい。

「この程度の寒さなら耐えられるだろう？　だが問題は、この魔法が全員に効くかどうかだ。」

「これ1枚だと、足りないな……」

「なら、僕が助けてやるよ。まずはそれを使いな」

柊蓮司はストームに言われるがまま、スクロールに書かれた呪文を唱える。

するとストームはすぐにARTS「トルネイド」を発動し、魔法の効果を大きく広げた。

「そっか、風を使つて魔法を全員にかけるのか。やるな、ストーム」
「魔法が使えるのが少ないしね」

柊蓮司はストームを褒めるが、ストームは素っ気ない態度を取つた。

何はともあれ、これで全員にエンデュア・エレメンツがかかり、氷山の寒さに耐えられるようになった。

「着いたー！」

一行は、柊蓮司の魔法に守られながら氷山に辿り着いたが、その表情に笑顔は無かった。

キーラ襲撃の影響で、各地の氷は溶けかけ、黒く染まった氷も見受けられる。

「氷山が汚いな……これがキーラのした事だろうか。いや、もうそれを考える必要はないな」

「そうね。まずは、こいつらを解放しましょう」

氷山には、キーラに操られ、ファイターのボディに入れられたたっくさんのスピリッツがいた。

スピリッツは一行を見ると、瞳を鋭く光らせて襲い掛かってくる。
「ファイアボール！」

マリオはゴロ岩マリオやフリーザーなど、キノコワールドのスピリッツを率先して解放する。

「はあっ！」

ルカリオは、かくとうタイプに弱いアブソルを手早く数々の格闘技で倒した。

「リーフブレード！」

「そおくれ！ いっきますよ〜！」

「ファルコン……パンチ！」

ジユカインとヨツシーは、協力してホワイトベアとコンドルのスピリッツを解放。

ファルコンも炎を纏ったパンチで、ゲツコウガのボディに宿ったメタルギアRAYを解放した。

「きやああああっ！」

「早く、お兄さんに会えるといいね」

マルスはファルシオンを振るい、ソレイユのボディに宿った速水^{はやみ}あかりを解放した。

「後は誰が残っているのかしら。えーつと……」

ベルは、氷山に残っているスピリッツを確認するために氷山を歩いた。

寒さがベルを襲うが、エンデュア・エレメンツの効果で

寒さは和らいでいるため楽に歩く事ができた。

しばらく歩くと、ベルは台座に縛られている青い防寒具を着た少年と

桃色の防寒具を着た少女を発見した。

「みんなー！ ファイターを見つけたわよー！」

「えっ、ホント!？」

ベルが大声でカービィに報告すると、カービィはすぐにベルがいるところに走っていった。

彼女が見つけたファイター、それはアイスクライマーのポポとナナだった。

「ポポ、ナナ、久しぶりだな。やっぱ氷山にいたか」

マリオは久しぶりに出会う登山家に挨拶する。

だが、アイスクライマーはそれで反応するはずもなく。

「えいっ！」

しずえが、アイスクライマーを縛っている光の鎖を傘で叩いて壊すと、

アイスクライマーは赤い瞳を光らせてしずえに襲い掛かってきた。
「ウアアアアアアーツ！」

「キーラサマノテキ、コロス！」

「きやあああつ！」

「危ないっ、しずえ！」

りようは素早くアイスクライマーの前に立ち、

傘を取り出してアイスクライマーのハンマーからしずえを守る。

「あ、ありがとうございます、りようさん……」

「話は後で！ 来るよ、準備はいい!?!」

「ああ！」

マリオ、カービィ、シャドウ、マルス、シーク、りようは、

キーラに操られたアイスクライマーを解放するべく、戦闘態勢を取った。

「えいっ！」

「ファイアボール！」

カービィはアイスクライマーをキックで攻撃し、シャドウはサブマシンガンを乱射する。

マリオは火の球を投げて牽制し、ルカリオはナナを投げ飛ばす。

「仕込針」

「マーベラス・コンビネーション！」

「グアアアアア！」

シークは手に仕込んだ針をポポに投げつけ、マルスは流れるような剣撃でポポを切り裂く。

「コオリツケ」

「ふっ」

ナナは氷の塊を呼び出し、ハンマーを振るってシャドウに放つが、シャドウはワープでかわす。

怒ったポポはシャドウに飛びかかるが、シャドウは空間を歪ませて攻撃を受け流す。

「そんな攻撃が、僕に効くとも思ったか？」

「オノレ……」

「時空の歪みを受けろ！ カオスマジック！」

シャドウは指を鳴らし、時空の歪みを発生させてポポとナナを同時に攻撃し、

「さらには身動きを取れなくする。

「ありがと、シャドウ兄！ そーれっ！」

カービィはその隙にハンマーを振るってアイスクライマーに大ダメージを与える。

ハンマーは隙が大きいのが、味方のサポートがあれば確実に命中するのだ。

「お前ら……とつとと元に戻りやがれええええ！ ガツーンナグーリ！！」

「グアアアアアアアアアアアアア！！」

そして、マリオはダツシユからハンマーを振り上げ、

一気にアイスクライマー目掛けて殴りつけた。

マリオの必殺の一撃が二人に炸裂すると、ダメージが蓄積した二人は場外に吹っ飛んだ。

こうして、アイスクライマーとの戦いは終わった。

42 光の神殿

「ばたんきゅ〜……」

「頭がくらくらするわ……」

キーラの呪縛から解放されたアイスクライマーは、しばらく目を回して動けなかった。

「大丈夫だった？」

「うん、覚えてないや」

やはり、アイスクライマーは戦っていた時の記憶が無いようだ。

覚えているのはマリオやカービィ、シャドウなど、アイスクライマーを助けた者だけだ。

「……だろうな。操られている間、その間の記憶は無くなる、という事か」

「あれ？ 君達は誰？ ロボットとか犬とか、ボクサー……それにトレーナーまで？」

アイスクライマーがりよう、ソレイユ、リユヌ、ダックハント、パックマン、

リトルマック、ロックマンを見て困惑する。

第四期から入ったりよう達は、アイスクライマーは見た事がないのだ。

「あ、名前を言い忘れちゃったね。僕はどうぶつの森の村長、りようだよ」

「エクササイズトレーナーの、ソレイユ・ラサンテです」

「夫のリユヌ・ラサンテです」

「ばうばう、ばうばうばう！」

「あ、この犬はハント、この鴨はダックだよ。ボクの名前はパックマンだよ」

「ボクはロックマンです、よろしくお願いします」

「オレはリトル・マックだ」

五人と一匹と一羽が第五期で初対面となるアイスクライマーに自己紹介する。

アイスクライマーはお辞儀した後、彼らに自分達の名前を名乗る。

「ボクはアイスクライマーのポポだよ」

「あたしはアイスクライマーのナナよ」

「よろしくお願いします」

アイスクライマーとりよう達が互いに自己紹介した後で、これからの目的を話す。

「さて、これからどうしようかしら」

「光の結界をどうにかしたいですわ」

キーラが張った光の結界のせいで、自由な行き来ができなくなっている。

この結界は、ファイターだけの力ではどうしようもならない。

「うーん、どこに行けば光の結界を解除できるんでしょうか」

「……あ、思い出したわ！ この氷山には確か、光の神殿があったわ。

そこに行けば、キーラが張った光の結界を解除できるんじゃないかしら」

光の神殿は、争いの世界にある美しい外観が特徴的な神殿だ。

ここで育った神官は、強い加護を得られるという。

「光……確かにキーラが狙いそうだな」

「早く行きましょう！ キーラ軍に大打撃を与えるんだから！」

一行は光の神殿を目指して氷山を歩いていく。

ほとんど辛そうな表情をしたが、アイスクライマーは余裕だった。

「あなた達は慣れてるんだね」

「氷山は僕達のホームだもん」

「余裕よ！」

ポポとナナは笑顔でハンマーを持ち上げる。

腕力といい、体力といい、子供ながら侮れないな……と思うマールだった。

しばらく歩くと、氷山にあまり似つかわしくない大きな神殿を見つけた。

三つの結界が消えたおかげで、道を通れるようになっていた。

「これが光の神殿？」

「スピリッツを探知してみるわ。……うん、ここで合ってる。

でも……不思議と気分が悪くならないわ」

「え？」

「終わりをもたらす死神は、光でも闇でも破滅をもたらすものには強い。

つまり、ここは破滅の光に満ち溢れているのよ」

「破滅の光だと？」

オルテはベルの説明を聞いて少し驚いた。

「そうね……キーラの力と言った方が分かりやすいかしら。光も闇もそれ自体はただの力よ」

光の神殿が、破滅の光に汚染されている。

その事実を聞いたアイシャが恐怖する。

「そんな……」

「でも、大丈夫よ。キーラを倒せば元に戻るから。怖がらないで、前を向きましょう」

「……そうですね！」

ベルに励まされたアイシャは、勇気を振り絞って光の神殿に入った。

「……光の神殿……」

光の神殿に入った一行は、絶句した。

神殿の中はボロボロになっていて、倒壊した柱や壁も見受けられない。

「まさか、神聖な神殿がこんな事になるなんて……」

「本当に許せないわね」

この神殿を崩壊させたのは、キーラだ。

一行は悲しみ、一部の人物は怒りに震えている。

「おや？ どうしたのですか？」

そんな一行を、ゼルダのボディに宿っている時の巫女、ネールが出迎えた。

「お前はネールじゃないか。あの女はもうお前を狙わないのか？」

「はい、というよりこの身体は私のものではありませんので」

「じゃあ、私が解放してあげるわね」

そう言つて、ベルはネールの魂に手を当て、ゼルダのボディから彼女を解放した。

「戦つて無駄に消耗するより、こうやって優しく解放した方がいいわ」
「そうだね、その調子で行こう」

一行は、崩壊した光の神殿を歩きながら、目的のファイターを探していった。

床は雲が浮かんでおり、ファイター達が乗つても不思議と崩れなかった。

「あつ、ファイターがいたわ!」

西に歩いていくと、光の鎖で縛られた男の姿があった。

ヴァンパイアハンターのシモン・ベルモンドだ。

しかし、クロムのボディに宿っている剣士のスピリッツ、ロンクーが立ち塞がっていた。

「女は嫌いだ」

「エレブの天馬騎士は『男の人は苦手なんです』って言うんだけどね」

「悪いけど、先に行かせてもらうよ」

マルスはファルシオンを構えて、ロンクーとの戦いに臨んだ。

「……なかなかの剣の腕だ」

ロンクーを倒したマルスは、ふう、と汗を拭う。

マルスは彼の戦い方を見て、赤い服を着た黒髪の剣士を思い出した。

とはいえ、これでシモンを助ける事ができる。

「はっ!」

アルトリアは聖剣を振り、シモンを縛っている光の鎖を切り裂いた。

光の鎖から解放されたシモンは台座から降り、
聖鞭ヴァンパイアキラーといくつかのサブウェポンを構える。

「キーラサマニサカラウモノ……コロス……」

「シモン・ベルモンド……吸血鬼を倒す者、その力を見せてもらおうか」

「行くわよ、みんな！」

「おうっ！」

「死力を尽くして来るがいい！」

フォックス、ピカチュウ、オリマー、ロックマン、アルトリア、ベルは一斉に戦闘態勢を取る。

今ここに、魔を祓う聖鞭持ちし戦士、シモン・ベルモンドとの戦いが始まった。

「はっ！」

「ド・ゲイト・デ・テラ・マ・ギ！」

「それ！」

「はあ！」

ピカチュウはシモンにロケットずつきをぶつけ、ベルは魔法の矢を放って追撃する。

アルトリアはシモンに飛びかかり、剣で斬りつける。

フォックスは後方からブラスターを撃ち牽制した。

「ピクミンよ、こっちだ」

オリマーはピクミンを上手く誘導し、シモンに的確に当てに行く。

「……」

「ぐああっ！」

シモンはヴァンパイアキラをピカチュウに向けて振るう。

渾身の一撃がピカチュウに命中し、大ダメージを受ける。

「ロックバスター！」

ロックマンはシモンに向けてロックバスターを放つも、

シモンはサブウェポンの斧で打ち消した。

「聖なる光と破滅の光は決して相いれない存在。だから、彼を意のままに操れたかもね」

「ベル……」

「さあ、気を引き締めていくわよ！」

「ああー！ でんこうせっか！」

ピカチュウはでんこうせっかでシモンを攻撃し、シモンは斧を投げてロックマンを切り裂く。

続いてフォックスが炎を纏った体当たりを繰り出すが、シモンはギリギリでフォックスの攻撃をかわす。

「くそっ！」

「あんたのカバーは私がやるわ！ 闇夜！」

「せいっ！」

アルトリアは不可視の剣でシモンを斬りつけ、怯んだ隙にベルが闇の力を放つ。

そのおかげで、ロックマンに攻撃しようとしたシモンに隙を作る事に成功、

フォックスとピカチュウは同時にシモンを蹴る。

「ありがとう、二人とも！ ロックバスター！」

「ウオオオオオッ」

「いけっ！」

ロックマンはロックバスターを連射し、オリマーは白ピクミンを投げて毒を浴びせた。

毒に侵されたシモンは蹲って苦しみ出す。

「グググ……ドクガマワル……。ウオオオオオッ！」

「きやあああっ！」

「うわあああっ！」

シモンは暴走して辺りに鞭を振るい続ける。

サブウェポンもたくさんばら撒いており、全員が避けられずにダメージを受ける。

「シモン……」

ロックマンは危険を顧みず、シモンに突っ込んでいった。

そして、彼をスーパーアームで拘束すると、ロックバスターを溜めた。

「今、ボクが助けるからな！ ロックバスター!!」

ロックマンの至近距離からのチャージしたロックバスターがシモンに命中すると、

大爆発が起こった。

衝撃波と砂煙が、光の神殿を覆い尽くす。

数分後、それらが治まり——残ったのは、気絶したシモンと、ボロボロになりながらも生き残っているフォックス達となった。

「はい、これで大丈夫だよ」

「お怪我はありませんでしたか？」

「……もう平気だ」

ドクターとアイシャは、戦いで傷ついたシモンを治療していた。

シモンの目は、元の澄んだ色に戻っていた。

「あ、起きたんですね。よかった、生きてて」

「ヴァンパイアハンターの生命力を舐めるな」

「ばんぱいあはんたー？」

聞いた事がない言葉に、カービイは首を傾げる。

シモンはこほん、と咳払いした後、自己紹介する。

「ヴァンパイアハンターというのは、吸血鬼を狩る者の事だ。

そして私の名はシモン・ベルモンド、代々ドラキュラと戦ってきた

ベルモンド一族の戦士だ」

「へえ、ベルモンド一族って凄いなあ！」

カービイはシモンを憧れの目で見ている。

シモンは「ある意味呪われているがな」と皮肉を込めて苦笑いしながら言った。

「あいつが来たら間違いない逃げそうね」

ははは、とベルが笑うと、眩い光が光の神殿を包み、中央の円盤が光った。

どうやら、シモンを助けたために、装置が作動したようだ。

「どうやら、次の場所に行けるようですね」

「それじゃあ、光の神殿に捕まっている、残りのファイターを助けましょう！」

「うん！」

一行が光に乗ると、別の場所に転移した。

43 く その目は何を見る

光の神殿にある円盤から、次のエリアへ転移した一行。

まず、一行を襲撃という形で迎えたのは、下級天使アフィニティの群れだった。

シモンとベルが協力して彼らを倒した後、西に行ってヘラクレスとモリブリンを解放する。

シャドウが西の円盤を調べると中央が光り、閉ざされた扉が開いた。

「案外あっさり」と攻略できるものだな」

「この辺にはまだまだスピリッツはいるから、私は先に解放するわね」
ベルは残ったスピリッツの解放をするため、一時的に離脱した。

「じゃ、俺達はベルが頑張つてスピリッツを解放している間に……」
「ファイターを助けに行かなくちゃね！」

マリオとカービィは、捕まっている残りのファイターを助けるため、光の神殿を歩いていった。

「あつ、いたぞー！」

倒れた柱や壊れた壁を避けながら進むと、マリオは台座に縛られたファイターを発見した。

茶色い髪、白い翼、白い服の少年——ピットだ。

台座の下からは彼のボディが量産されており、カービィはそれを見て怯える。

「ね、ねえ……どうなつちやうの？ ピット君」

「このまま放つておいたらこいつの身体で悪さをするスピリッツが湧き出るだろ。」

だから、俺達でピットを助けるんだ……よ！」

そう言つて、マリオはピットを縛っている光の鎖目掛けてハンマーを振り下ろす。

すると、光の鎖は小気味よい音を立てて碎け散り、

同時に自由になったピットが双剣に変えたパルテナの神弓を構えて襲ってくる。

「オマエタチ……キーラサマノテキカ……?」

「……」

ルカリオはピットから湧き出る波導を察知する。

「真つ赤な波導がこいつを包んでいる」

「えっ、真つ赤って?」

「こいつは説得には応じないという事だ」

ルカリオはすぐさま戦闘態勢を取る。

つまり、ピットの母体を支配から救い出すには、彼と戦わなければならないのだ。

「……やるしかないようだね」

「ああ」

「立ち止まるわけにはいかない。いくぞ」

リンクとマルスが共に剣を構え、シャドウは静かに銃をピットに向ける。

「私も、ベルさんのために頑張りますよお〜!」

「おお〜!」

ヨッシーとカービイも、共にピットを迎え撃つ体勢に入る。

そして、ピットが突っ込んできたところで、彼との戦いが始まった。

「えいっ!」

カービイは素早くピットをキックで攻撃する。

シャドウはピットの頭部を拳銃で狙い撃ちし、

リンクは怯んだピットをマスターソードで斬りつけた。

「いくよ!」

「……」

「うわっ!」

マルスはピットにファルシオンで斬りかかろうとしたが、

ピットが召喚したイカロス兵に阻まれる。

「いきますよお〜!」

ヨッシーは尻尾をぶんぶん振り回し、ピットとイカロス兵を薙ぎ払った。

「はっけい!」

「……」

ルカリオはピットにはつけいを繰り出すが、衛星ガーディアンズで攻撃を防ぐ。

ヨツシー、シャドウ、マルスは、襲ってきたイカロス兵を卵や武器で追い払った。

「わあっ！ 速いですねえ〜！」

「はっ！」

「バレットパンチ」

ヨツシーはイカロス兵らしからぬ素早さに翻弄されている。

一方、シャドウとルカリオは動き回るイカロス兵を迅速かつ正確に攻撃していた。

シャドウは元々素早く、ルカリオが使ったバレットパンチは素早い相手には効果的なのだ。

「ハイジョー！」

「うわあ〜！」

ピットは豪腕ダツシユアツパーを構え、ヨツシーに突っ込んで渾身の一撃を放ち、

彼を大きく吹っ飛ばした。

「危ない！」

カービィはヨツシーを吸い込んで受け止め、軽く吐き出して何とか助ける。

「助かりましたあ〜」

「ヨシくんはじつとしてて。えいっ！」

カービィは空高く飛んでシャドウを攻撃しようとしたイカロス兵を殴る。

イカロス兵が墜落したところにマルスのファルシオンが命中し、

イカロス兵は戦闘不能になった。

「コイツラハ、ステゴマニスギナイ」

「ピット……」

操られたピットは、イカロス兵に対して残酷な事を吐いている。

こんな事は絶対に言うはずがない、と六人は思っていたが、

今の彼はキーラに操られている状態なのだ。

「せえーいつー！」

「あああああああ……」

「うおおおおおおおー！」

その頃、ベルは光の神殿にいるスピリッツを一人で解放していた。

ロボットのウインドマン、呪術師のサーリヤ、宝箱に化けたモンスタールのミミッツ子、

伝説のポケモンのコバルオン、テラキオン、ビリジオン……。

いずれも強敵揃いだったが、死神のベルの敵ではなかった。

「……ふう」

スピリッツを解放し終えて、ベルは汗を拭う。

傷はついていなかったが、鎌を何度も振ったため徐々に疲労が蓄積していた。

「結構疲れちゃうわ。みんなはファイターを助けてるかしら……一旦、戻りましょうか」

ベルは疲れながらも一行のところに戻っていった。

「おりやつー！」

リンクはイカロス兵を勇者の弓で撃ち墜落させる。

空を飛ぶ敵には弓が効果的だとマルスに教わったためだ。

しかし、イカロス兵は次々と現れ、シャドウ達を数の暴力で蹂躪していく。

「くそっ……数が多すぎる……！」

「ピットに近付けんな……」

倒しても倒しても、イカロス兵は現れ続ける。

ピットに近づく事すらままならない。

それを遠くから見ていたピットは、勝ち誇った笑みを浮かべている。

このまま物量作戦で負けてしまうのか……と諦めかけていたその時。

「うおりやあああああああああああ！」

「!？」

突然、大鎌が全てのイカロス兵を切り裂き、同時にピットの服を破いて吹っ飛ばす。

この事態にピットは驚くが、シャドウは大鎌の正体を知っていた。

「ベル、来てくれたのか！」

「ええ、もうスピリッツは解放したわ。だから、今度は私が相手よ！」

えーっと」

「ピット」

「そうそう、ピット！」

「……エンガンカ……！」

ピットは豪腕ダツシユアツパーを装備し、ベルに突っ込んでいく。

彼女は大鎌でピットの攻撃をいなし、パルテナの神弓目掛けて大鎌を振り下ろす。

神器は壊れなかったが、ピットの手から離れる。

「シマツター！ ジンギガ……！」

「神器が無いピットはただの飛べない天族よ。さあ、とどめよ！ ダウンリーパー!!」

「グアアアアアアアアア!!」

そして、ベルが渾身の力を込めて振り下ろすと、ピットは真つ二つに切り裂かれた。

切り裂かれた彼の身体から光が抜け出ると、ピットは眠りについたかのように倒れた。

「……あれ、ここは？」

ピットは、ゆっくりと身体を起こす。

彼の瞳は今まで戦ったファイターと同様、元の青色に戻っていた。

「僕は今まで何をしていたんでしょう……」

「元に戻ったんだな、ピット」

「ここは光の神殿よ。あんたはキーラに身体を利用されたのよ」

「……あああああつ！ 思い出しました！」

僕の魂が指輪に閉じ込められて、僕の身体が誰かに使われた事を！」

ピットは、かつて天空界であった事件を思い出す。

パルテナに憑依した混沌の遣いに三年間も魂を指輪に封じられ、自らの身体を利用された事を……。

「これはすぐさま行くしかありません！　今も身体を利用されてる人がいるはずです！」

うぐつ、思うように動けない……」

すぐさま皆を助けに行こうとしたピットだが、戦った時の傷のせいで身体が動かない。

ドクターは「無理しないで」と言った後、ピットに塗り薬を塗って傷を癒した。

「ピット君は今、戦ったばかりなんだ。もう少し休んでくれないかな」「あ、はい」

「元気なのはいいんだけど、ちよつとせつかちかな」

ピットの傷は、ドクターの医療術によつて無事完治した。

「もう、元気いっぱいです！　本当にありがとうございました！」

えつと、ドクターさんでしたっけ？」

「うん」

本名は別にあるのだが、皆にはドクターと呼ばせているため、ピットも彼をドクターと呼んだ。

そして落ち着いた後、マリオはピットにこれまでの事情を話した。

「なるほど……大体分かりました。」

つまり、キーラに支配された世界を救いたいって事なんですな？」

「ああ……だが光の結界が邪魔していて思うように動けないんだ。どうすればいいんだ？」

「それなら僕に任せてください！　皆さん、あれを見てください」

「あれ？」

ピットは光の神殿にある青い宝石を指差した。

「もしかしたらあれが、光の結界を作っているんじゃないかな、って思うんですよ」

「本当かしら？」

「……まあ、僕の勘にすぎませんが……とりあえず、やれるだけやってみます。えい！」

ピットはパルテナの神弓を構え、青い宝石目掛けて矢を射る。すると、光の神殿にあった青い宝石が砕け散り、外にあった光の結界が消滅した。

「やりましたー！ ビンゴです！」

「おおー！ よくやったな、ピット！」

ピットの読みは見事に当たり、これで行けるエリアが一気に増えた。

一行が喜んでいると、どこからか不気味な女の声が聞こえてくる。

『光の神殿にいる、全ての母体を解放したか！』

「その声は……キーラ！」

声の正体は、元凶であるキーラだった。

キーラはスマッシュブラザーズが母体を解放した事にかなり怒っていた。

『おのれ……スマッシュブラザーズ如きが、我の邪魔をするとは、小賢しい。』

我が望む新世界が、そんなに憎いか』

「そうだよ！ 平和じゃない世界は嫌いだもん！」

「お前の好きにさせるほど、スマッシュブラザーズは甘くないんだぜ」
「俺達にはやるべき事があるんだ」

「世界を平和にするって事をな！」

マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウのスマブラ四天王が声を上げてキーラに反発する。

キーラはますます怒り狂い、それに応じて光の神殿が震え出す。

「あつ、光の神殿が……！」

『そうまでして我を憎むか。我を嫌うか。ならば……貴様らは罰を受けてもらうー！』

「罰……？」

カービィがきよんとしていると、光の神殿で突然、地震が発生した。

『光の神殿諸共、消え失せるがよい!!』

どうやら、キーラは光の神殿を破壊してスマブラメンバーを生き埋

めにするつもりのようなのだ。

そうはさせないとスマブラメンバーは急いで光の神殿から脱出する。

「みんな、急いでここから出るぞー！」

「ああー！」

「うわっ！」

カービィとピットが転んでしまうが、マリオとリンクはすぐに彼らの手を掴む。

足が遅いドクターなども、アルトリアが風でスピードを上げた。

そして……。

「あゝあ、光の神殿が……！」

光の神殿は、完全に崩壊してしまった。

瓦礫と化した神殿を見たアイシャは落胆する。

そんな彼女の肩に、リンクは優しく手を置いた。

「大丈夫だ、アイシャ。光の神殿は、キーラとの戦いが終わったら必ずみんなで復興させる。

過ぎた事を悔やんでも仕方ない。今は俺達のやるべき事をやろうぜ」

「……ありがとうございますわ、リンクさん……！」

「さ、冰山を降りるぞ」

リンク達は、こうして冰山を降りていった。

44 溶岩城へ

光の神殿は崩壊したが、その中からシモンとピットを助ける事に成功した。

「これからどうしよう……」

「まずは、キーラをどうにかしないといけないわ」

スピリッツやファイターを掌握し、手駒にしている元凶、キーラ。

だが、今はバリアを張っているせいで、キーラに近づく事ができないでいる。

ガレオムを撃破した事でバリアは弱まったが、それでもまだ、キーラには近付けない。

「恐らく、ガレオム以外にも大きな敵は何人が存在するわ。

そいつらを全滅させれば、キーラを守るバリアがなくなるんじゃないかしら」

「そうかもね、ベルベル！」

「それで、ここから近い大きな敵はどこにいる」

「まだ、あそこに行つてなかったでしょ？ ピーチが捕まっている……」

「……あそこ……ああ……！」

あそこ……それはフォックスを探す時にベルがピーチの魂を察知した、溶岩城。

一行はフォックスを助けるために後回しにしていたが、

ようやく、溶岩城に行ける時が来たのだ。

「でも、溶岩城っていうと、熱くないですか？

寒いところから熱いところに行くと、体調を崩しちゃいますよ？」

「大丈夫ですよ、しずえさん。柊さんが魔法で何とかしてくれます」

「いや、そもそも俺、魔法は専門外なんだよなあ」

一行は、再び柊蓮司が持ってきたスペルカード、

エンデュア・エレメンツで溶岩城の気温を和らげる作戦に出た。

当の柊蓮司は、困っていたのだが……。

「これで、熱さは和らぎますね！」

一行はシャドウのカオスコントロールで氷山を後にし、
柊蓮司が持ってきたエンデュア・エレメンツのカードで熱さを和ら
げた。

そして、溶岩城へ行くための山を歩いていく。

「キング・オブ・ザコの登場よー!」

「おうっ!」

山の入り口にはキノコから進化した種族、クリボーのスピリッツが
いた……が、

キング・オブ・ザコなのであつさりとマリオに撃破された。

その次に出会ったスピリッツは、竜の姿をした空の精霊、ヴァルー。

ホープ級なので少し苦戦したが、マルスとリンクが協力して解放し
た。

「結構、この山は高いね」

「そうね……溶岩城はあんなに高いところにあるからね」

ある程度歩くと、途中で道が自然的なものから人工的なものへと変
わった。

溶岩城が近くなっている証だ。

そこに行くための道を守っているのは、せいいいポケモンのフライ
ゴン、

カンフー使いの俳優フェイロン、クツパの部下のブンブンだった。

いずれも百戦錬磨のスマブラメンバーには敵わず、

あつさりと解放されてスピリッツはスピリッツボールの中に入っ
た。

「ちよろいね!」

「甘いな」

「ちよろ甘ですわ」

カービィ、シャドウ、アイシャは、スピリッツを解放した後にこの
決め台詞を言った。

そして、一行はついに溶岩城の入り口に立つ。

ここに、キーラのバリアを守っている大きな敵と、捕まったピーチ
がいる。

マリオはぐつと拳を握り締めた。

「ピーチ……」

「分かるわ。よっぽど彼女の事が大事なのね」

「ああ……。キーラの野郎、ピーチをこんな目に遭わせるなんて許さないぜ」

マリオのキーラに対する怒りは、傍からものはつきりと感じ取れていた。

アイシヤは彼を心配しながらも溶岩城に入ろうとする。

「覚悟はよろしいですか？」

「ああ、できてるぜ……！」

「僕も」

「じゃあ、行くわよ！」

ベルはそう言つて、溶岩城の扉を押した。

ギギイ、という鈍い音と共に、大きな扉が開き、一行は覚悟を決めて溶岩城の中に入った。

「うう……エンデュア・エレメンツをかけていても溶岩城の中は暑い……」

「そうね……なんという暑さなのかしら……」

ポポとナナが暑さからへばりかける。

彼らは寒さには強いものの、暑さには慣れていないのだ。

「だ、大丈夫よ。でも、溶岩に落ちないでね」

「分かってるよ」

ここから溶岩に落ちれば、即死は避けられない。

カービィは唾を飲み込みながら、慎重に歩いた。

「ここにもキーラに操られたスピリッツはいるのね」

溶岩城で最初に遭遇したスピリッツは、クツパ型のロボット、メカクツパだった。

このスピリッツはカービィが解放し、次に南に進むと、

ジュスト・ベルモンドのスピリッツを発見した。

自身の孫という事でシモンは攻撃を躊躇うが、覚悟を決めて何とか彼を解放した。

「ジュスト……祖父を許してくれ」

「もう許しているから安心して。あ、スイッチ発見」

ベルは、向こう側に赤いスイッチを発見した。

しかし、床が透明になっていいるため、無理に進んだら溶岩に落ちそうだ。

一行は赤いスイッチを後にして、透明な床を作動させるためのスイッチがある場所に向かった。

「戦わなければ！」

「最後まで！」

その途中で、レンスター王子リーフのスピリッツと出会ったマルスは、

共に剣を交え、勝利した。

だが、ここに行くための床も、透明になっていた。

「次はこっちだね」

一行は西に行つて、ゲツコウガのボディに宿つたシャドーマンのスピリッツを解放した。

その後、横の土管を通つてワープし、その先の道にいるツインベロスのスピリッツを解放、

ちくわブロックを渡つていくと黄色いスイッチを発見した。

「これで！」

カービィは黄色いスイッチを踏み、黄色いブロックを出した。

これで、赤いスイッチがある場所に行ける道が開いた。

「10まんボルト！」

一行はハウオウのスピリッツを解放した後、黄色いブロックを通つて赤いスイッチを踏み、

赤いブロックを出した。

「これで先に進めるわね」

赤い！ブロックを歩きながら、カメックとグラードンのスピリッツを解放していく。

しかし、その先の道も、ブロックが透明になっていて進めなかった。「点線の色からして、次は紫のスイッチね」

一行は近くの土管に入ってワープし、紫のスイッチがある場所に行った。

ルキナのボディに宿っているアイシャのスピリッツが道を塞いでいたが、

ノービス級なので楽々と解放した。

そして紫のスイッチを踏んで紫のブロックを出し、

ついに大きな敵とピーチが待つ場所へ行くための二つの道が開かれた。

「まずは、ピーチ姫を解放しましょう」

「ああ。ちよつと遠いが、ピーチは必ず助ける」

マリオは拳を握り締め、元来た道に戻っていった。

他のスマブラメンバーも、彼の後を追いかけた。

そして、最後の紫のブロックを歩き終わると、台座に縛られたピーチを発見した。

「ピーチ姫……こんなところにいるなんて……」

「キーラの野郎……よくもピーチを……」

マリオは歯を食いしばった後、ピーチ目掛けてパンチし、彼女を縛る光の鎖を砕いた。

「……ピーチ」

「ダレナノ……？ ソノコエハ……」

操られたピーチは、マリオの事が分からない。

だがマリオには、彼女の苦しみが分かっていた。

「ホ、ホントにピーチ姫なの……？」

「ああ、そうだ。だが今はキーラに操られていて、俺達の敵だ。だから助けてやるんだ」

「戦わなきゃいけないの？」

「ちよつと、こわいでしゅ」

戦いを好まないリユカとプリンは震え出す。

しかし、ここで立ち止まっては、ピーチを助け出す事はできない。

リユカとプリンは覚悟を決めてピーチに戦いを挑む体勢に入った。

「……悪いけど、許さないのはキーラだけだからね」

「罪を憎んで人を憎まず」

「仲間は一人でも多い方がいいだろ？」

「今、光の呪縛から、解放してあげましょう！」

ベルとアルトリアも武器を構え、ドンキーも腕を振る。

そして、マリオも涙を流しながら、ピーチを救出するために身構えた。

「はあっ！」

マリオはピーチに近づいて彼女を投げ飛ばし、ドンキーがパンチで追撃する。

「PKフラッシュュ！」

「えいっ！」

リュカはPKフラッシュュでピーチを怯ませ、その隙にプリンはピーチをはたいた。

ピーチはアルトリアの攻撃をかわした後、野菜を引っこ抜いてマリオに投げつけた。

「いてっ！」

「ウッフ……アナタノシニガオガミタイワ……」

ピーチは邪悪な笑みを浮かべている。

操られているとはいえ、マリオは信じたくなかった。

「俺は、ピーチを助けるまでは、死なない！」

マリオはそう言って、ピーチに正拳突きをぶちかます。

リュカはマリオにライフアップをかけつつ、ぼうっきれやPKファイアーで攻撃する。

ベルは後方から魔法で牽制しつつ大鎌で攻撃した。

「風よ……！」

アルトリアは魔力放出により、突っ込みながら斬りかかる。

ピーチはヒステリックボムで反撃したが、アルトリアはシールドを張って上手く攻撃を防いだ。

「アナタたち、イガイトヤルノネ」

「当たり前です……。貴女を助けるまで、死ぬわけにはいきません……！」

……！」

ピーチはマリオの声を聴いて涙を流した。

マリオも嬉しくて思わずピーチを抱きしめる。

「こんな城に閉じ込められて、怖くなかったか？」

「当たり前でしょ？ 私はマリオが助けてくれる事をずっと信じてたんだから」

「ピーチ……！ その言葉を待ってたんだ……！」

操られている間は、ピーチの意識は奥底に封じ込められていた。

それでも、ピーチはマリオの事を信じていた。

その事実にもマリオはさらに感動する。

「ピーチ……これからも、俺の傍から離れないでくれ……」

「あつたり前じゃない……マリオも私から離れないでよ……！」

マリオとピーチは、再会の喜びからお互いに強く抱き合った。

「……よし」

「残るは大きな敵だけね」

ピーチを助けたため、溶岩城でやるべき事はあと一つ、大きな敵を倒す事だ。

それを倒し、キーラを守るバリアをさらに弱めようと一行は決意した。

「みんな！ 用意はできてるかしら？ 溶岩城のボスは目の前にいるんだからね。」

さあ……イツツ、ショータイムよ！」

「「「おーーーーーっ！」」」

45 大魔王・ギガクツパ

ピーチを救出し、残るはキーラのバリアを守る大きな敵のみ。

一行は拳を握り締め、大きな敵が待つ場所に繋がる道を歩く。

「いよいよ二体目のボスが待つな」

ガレオム以来のボスが、この溶岩城に待ち受けている。

倒せば、キーラを守るバリアがさらに弱まる。

「いいか、みんな。この戦いに必ず勝つんだ。俺達スマブラメンバーを信じてくれ」

マリオはスマッシュブラザーズの代表として、この場にいる皆を応援する。

「私も応援するわ。」

世界を救うためだもの、ここでへこたれるのはスマッシュブラザーズの名が廃れるわ!」

「サンキュー、ピーチ!」

「いいって事よ」

ピーチはマリオに向けてウィンクした。

そして、一行はボスが待ち受ける場所へ歩いた。

しかし、そこにルフレのボディに宿る、紫の髪をした闇魔道士が立ち塞がった。

「僕は魔王、人の弱さを知らぬ強く完全なる王」

「あなたが魔王リオンですね。わたしがお相手いたしますわ!」

アイシヤは戦闘態勢を取り、リオンと戦った。

「ありが……とう……」

「はあ、はあ……」

何とか、アイシヤはリオンを撃破した。

魔王というだけあって強大な魔力を持っていたが、

アイシヤはそれに抵抗して打ち勝ったようだ。

「さあ、どこからでもかかってきなさい!」

「おつ、やる気満々だな、アイシヤ」

「マスターハンド様を助けるためですもの……!」

アイシヤの主であるマスターハンドは、今もキーラに利用されている。

彼女はそれが悔しくてたまらず、死に物狂いで戦っているのだ。

「さあ、来なさい！ ボスは誰ですの!?!」

アイシヤがそう叫ぶと、玉座らしき場所に何者かが落ちてきた。

“それ”は——鋭い爪と角、赤い鬣と眉毛を生やした亀族の大魔王、クツパだった。

クツパが四つん這いになると彼を闇のオーラが取り囲み、

巨大化して瞳は赤くなり、鋭い牙が生えた。

そう、クツパは今、ギガクツパに変身したのだ。

「グガアアアアアアアアアアアアアア!!」

「……来るぞ!! みんな、身構えろ!!」

マリオの掛け声と共に、彼とカービィ、アイシヤ、ピーチは身構えた。

「はあっ!」

マリオは炎を纏った掌底をギガクツパにぶつける。

だが、ギガクツパはそれで怯む事はなく、マリオを爆炎の頭突きで攻撃する。

「ぐあああっ!」

ギガクツパに変身しているだけあり、

その威力は普通のクツパとは比べ物にならないほど高かった。

カービィは空中から回し蹴りで連続攻撃し、アイシヤは後方から皿を投げる。

「そおーれ!」

ピーチはフライパンを取り出し、ギガクツパに向けて振り下ろす。

カービィ、という快音が鳴った……が、ギガクツパはまだ怯まない様子。

「ちよっと、こいつどれだけ固いの? つきやあ!」

「うわあ!」

ギガクツパは甲羅の中に入って回転し、手近な対象を連続攻撃する。

甲羅の棘がマリオとカービィに刺さり、二人は浅くない傷を負う。
「みんなげんきになあれ！」

ピーチは回復呪文を唱え、傷ついたマリオとカービィの体力を回復する。

「サンキュー！」

マリオはピーチにお礼を言った後、ファイアボールで攻撃し、その隙にギガクツパに突っ込んでファイアナグーリで大ダメージを与える。

「えいっ！」

「やあっ！」

カービィは短い脚からのキックを放ち、アイシャは包丁をギガクツパに突き刺す。

ギガクツパは口から炎を吐いたが、マリオはシールドで防御し、カービィは空を飛んで回避する。

「みんな、今がチャンスだ！」

「いつくよー！」

「参りますわ！」

「うふっ♪」

マリオはギガクツパが炎を吐くのをやめた隙に号令をかけ、全員が一斉攻撃をする。

カービィは飛び蹴りと回し蹴り、アイシャはビンタと包丁、

ピーチはフライパンとゴルフクラブ、そして最後にマリオがファイア掌底を放った。

四人の攻撃を受けたギガクツパはついに倒れた。

「よし、やったか!？」

マリオが喜ぶのも束の間、ギガクツパはゆっくりと起き上がる。

そして、ギガクツパは大声で叫び出し、そこから生じる突風がマリオ達に襲い掛かる。

「ぐううう………！」

「凄い風圧………！」

「でも、耐えてください………！」

「ええ、踏ん張るわ……!」

マリオ、カービィ、ピーチ、アイシャは何かギガクツパの風圧を踏ん張った。

「グガアアアアアアアアア!!」

「やるじゃねえか、クツパよ……いや、今はギガクツパか」

マリオとクツパの宿命の対決は、何度も続いた。

操られていても、二人の目は本気だった。

「キーラに邪魔されるのは本望じゃないとはいえ、本気で戦っているのね」

「うん、マリおじちゃんの本気だよ」

「それなら、私もマリオと一緒に戦うわ。一人じゃないって事を教えてあげるために」

ピーチはフライパンを構え、共に戦う事を改めて決意した。

カービィとアイシャも、彼女に続いて構えた。

「うおおおおおつ!」

「ファイナルカッター!」

マリオはギガクツパに突っ込んでボディブローを放つ。

カービィはファイナルカッターで追撃し、

アイシャはピーチの補助魔法で強化された調理道具を投げまくる。

ギガクツパは巨大な顎による噛み付き攻撃で前にいたマリオとカービィを攻撃、

続いてピーチを掴み投げ飛ばした。

「きやあああああつ!」

「グオオオオオオオオ!」

続いてギガクツパは高く飛び上がり、ギガクツパドロップを繰り出す。

「みんな、守れ!」

「はい!」

マリオの号令で全員がシールドを張ってギガクツパドロップを防ぐが、

シールドは大きく削られる。

「くそつ、なんて馬鹿力だ……!」

「本当に倒せますの……!?!」

マリオ達が不安になる中、ただ一人、ピーチだけは真っ直ぐに前を見ている。

「何を諦めているのかしら? 最後まであがいてあがいてあがくのよ」

「あがく……そうか! おい、ギガクツパ! 俺達は最後まであがくからな!

その無様な姿をよく目に焼き付けておけよ!」

「グオオオオオオオオオオ!!」

マリオの挑発に乗ったギガクツパは叫び出し、エリア全土に火の海を放つ。

「うわああああああああ!」

「きやああああああああ!」

全員が強烈な威力の炎に飲み込まれていく。

骨まで溶けてしまいそうだったが、四人は何とか持ちこたえた。

「はあ、はあ……みんな、大丈夫か?」

「はい……でも、このままじゃみんな倒れます……」

「そんな時こそ、私に任せて! みんなあげんきになあれ!」

ピーチは再び回復魔法を唱え、全員が負った傷を癒した。

「ここまでギガクツパの攻撃は強くなったんだから、相手の体力はあと僅か。」

さあ、もう一踏ん張りよ!」

「おう!」

「グオオオオオオオオオオ!!」

ギガクツパは再びエリア全土に火の海を放ったが、四人はそれを見切って攻撃をかわす。

アイシャがビンタしてギガクツパを攻撃した後、カービィは回し蹴りを放つ。

ピーチはヒステリックボムを爆破させ、マリオがギガクツパに突っ込んでいった。

「これで、とどめだ！　ファイア掌底!!」

「グアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして、マリオが渾身の力を込めたファイア掌底を放つと、ギガクツパは叫び声と共に地に伏せた。

すると、ギガクツパは見る見るうちに縮小し、次第に元の大きさに戻っていく。

数分後、変身が解けて元のクツパに戻った。

「……うう……身体中が痛いのだ……」

正氣に戻ったクツパは、痛みから動けないでいた。

その表情に、いつものクツパらしさは無い。

「今、ドクターが治してやるからな」

マリオはクツパを心配している。

宿敵同士であったが、こんなところで死なれるのはマリオの本意ではないのだ。

「これで、よしと。はあ……こんなに働いてばかりで、くたくたになっちゃうよ」

クツパを治療し、汗を拭うドクター。

しかし、何度も治療してばかりいるため、ドクターはうんざりした表情をしていた。

「ごめんよ、ドクター」

「……まあ、それはいいとして、君もキーラに操られた被害者なんだろう？」

「その通りだ。」

我輩の炎をいとも簡単に打ち消したあの光……キーラめ、落とし前は必ずつけてもらうのだ!」

クツパは悔しさのあまり、強く拳を握り締める。

大魔王である自身を利用した怒りは大きかった。

「あ、クツパ」

ふと、ピーチが口を開く。

「何なのだ？　ピーチ」

「クツパが王冠を被ったら、私以上にスタイル抜群なお姫様になった

りして」

「認MEN！ 我輩が女になる事など、認MEN！」

ピーチがクツパを茶化すように言うと、クツパはムキになって叫んだ。

「……ピーチ、何やってるの？ クツパがお姫様？ 変なの」

「クツパをからかってるだけだから気にするな」

ベルはそんなピーチとクツパのやり取りに呆れていた。

マリオは乾いた笑みを浮かべてベルにそう返した。

「くっ……！」

ギガクツパが撃破された事で、キーラを守るバリアがさらに弱まった。

彼女はスマブラメンバーがバリアを破ってきたという怒りから身体を震わせている。

「おのれ、スマッシュブラザーズめ……！ だが、バリアを破ったくらいでいい気になるな。」

我を簡単に倒せると思ったら大間違いだぞ……！」

46 く クール&ビューティーな賞金稼ぎ

ピーチとクツパを救出し、溶岩城を後にした一行は光の結界があった場所に行っていた。

すると、光の結界は綺麗さっぱりなくなっていた。

「お！ 僕の予想通り、光の結界が消えましたね！」

「行ける範囲が広がったな、捕まったファイターも救出できるだろう」
「ですね！ では、光の結界がなくなったところで、東に行きましょう！」

「ミカヤは俺が守る」

一行が東に行くと、緑の髪をした盗賊の少年、サザのスピリッツを発見した。

マリオがサザ目掛けてパンチすると、サザはあっさりと倒され、解放された。

「弱!?!」

「弱かったね」

サザのあまりの弱さに、マリオとマルスはぼかんとする。
しばらくすると、東を覆っていた霧が晴れ、

その先にパワードスーツを身に纏った人物が光の鎖に縛られていた。

「あ、ああっ、サム姉^{ねえ}！」

その人物は、スマッシュブラザーズの古参であるバウンティハンター、サムス・アランだった。

同じく古参のカービィは、サムスの姿を見て驚く。

「今、助けてあげるよ！」

そう言っつて、カービィはパンチでサムスを縛っている光の鎖を砕いた。

すると、サムスはアームキャノンからアイスミサイルを発射した。
カービィは空を飛んでかわすが、ミサイルが当たった地面が凍り付く。

「……」

目はパワードスーツに隠れて見えないが、

サムスはキーラに操られているとカービィは勘で察した。

「やっぱり、君もキーラに操られてるんだね。今、助けてあげるからね！」

「あ、姉ねえって言ったから、もしかしてサムスって……」

「そんなの関係ないわ！ 早くいくわよ、バンジヨー！」

「よおうしー！」

「覚悟はいいか」

「さあ、行くよー！」

「りょうさんのためにも、頑張りますー！」

「さあ、かかってこいー！」

カービィ、シャドウ、バンジヨー、カズーイ、マック、りょう、しずえは、

操られたサムスに戦いを挑んだ。

「目を覚まして、サム姉ー！」

カービィはサムスの位置ギリギリにハンマーを振り下ろす。

「そこだー！」

シャドウはサムスの胸を狙って拳銃で撃つ。

バンジヨーとカズーイはサムスに同時に攻撃し、効果的なダメージを与えていく。

「はっー！」

「えいー！」

マックはサムスに拳を振りかざし、ギリギリで攻撃は命中した。

りょうはその隙に、サムスに斧を振り下ろす。

「……」

「……」
「うわあああああつー！」
「……」

サムスはチャージショットを放ち、爆発させる。

「ううっ……いー！」

しずえは何とか、サムスのチャージショットに抵抗した。

しかし、他のメンバーは攻撃をまともに食らい、身体のうちこちに傷がついている。

「皆さん、今、助けますよ！」

しずえは即席で回復料理を作り、全員の傷を癒す。

「それっ、それっ、それ！」

「いくぞ」

りょうのパチンコとシャドウの拳銃がサムスに命中し、マックとバンジョーが同時にボディブローを放つ。

そして、カズーイがサムスに卵爆弾を投げ、

爆風でサムスを場外に吹っ飛ばして戦闘は終わった。

「ふう……。一時はどうなる事かと思っただわ」

洗脳から解放されたサムスは、いつも通りの冷静な口調で言った。

「こうなる事は、サムスには分かっていたのか？」

「分かっていたわ。あの光は、まともではなかったから」

サムスは自分が操られながらも、他の助かったスマブラメンバーと違って落ち着いていた。

この心強さが、サムスを表すといっても過言ではない。

「そういえばさつき、カービーが『サム姉』って言ってたよね？　じや

あこの人は、女？」

「うん、そうだよ！」

「えええええっ！　そうだったの!？」

「……バンジョー、声で分からなかったの？」

カズーイがさらっと毒舌を吐く。

サムスはそれに動じず、平常心で自己紹介に入る。

「貴方達と出会うのは初めてだったわね。私はバウンティハンターのサムス・アランよ」

「あ、こんにちは。ボクはバンジョーです」

「あたいはカズーイよ」

バンジョーとカズーイは初めて出会うサムスに自己紹介をした。

バンジョーはサムスが女性であるためか、少し緊張した様子だった。

「……バンジョー、肩を張りすぎよ」

「ごめんなさい、サムスさん」

「呼び捨てでいいわ。それよりも……。！ みんな、待ちなさい！」
サムスはそう言つて、アームキャノンを構えた。

「！ サムス、何か来るの？」

「空が震えている……。誰かが来る！」

「えっ、どこどこ!?!」

カービーが慌てて空を見上げると、バリアに覆われたキーラが震えていた。

—ほう……。？ 我に気が付くとは。

「光の化身キーラ……。！」

—なかなかの勘の鋭さだ。最古参の名は伊達ではなさそうだ。

「……」

サムスはアームキャノンを空に向けている。

ここから撃つのは無駄だと分かっているため、それ以上は動かして
いない。

「一体、何をしたいの？」

—我のプレゼントを、受け取るがよい。

そう言つてキーラが火の玉を呼び出すと、それを遠い南のアローラ
島に放った。

すると、南の方から禍々しい気配が漂うようになった。

「プレゼント……。要するにボスだったのね。でも、狼狽えてはいけな
いわ。」

その時点で、相手の思う壺よ。もう少し準備をしてから、乗り込み
ましょう」

「はぁーい！」

何はともあれ、バウンティハンターのサムスをキーラの呪縛から解
放したスマブラメンバー。

美しく、そして冷静沈着な彼女は、スマブラメンバーの中でも頼り
になるだろう。

47 乱闘 その道化の名を呼べ

サムスを仲間にした一行は、しばらくの休憩と準備の後、北の山道に登っていった。

アースボーンズのダンジョンおとこやがんせきポケモンのイシツブテを退けつつ、

一行はファイターを解放するため、歩き続ける。

「うぬの力、我に示せ！」

「いくよ！」

ガノンドロフのボディに宿るは、ヴァルム帝国の皇帝ヴァルハルト。

ランクはエースと手強かったが、マルスは彼との一騎打ちに勝利した。

「ここから先には行かせない！」

「行かせてもらうぜ！」

地のエナジストにして後にロビンの義兄となるガルシアは、ファルコンが解放した。

「あたちたち、いまはここをやってるの」

「あちがはよくなるよ！」

「……元々は僕達をサポートしていたのに」

「今はこんな身分なんだな」

アシストファイギュアから道場の主となった双子のくノ一・カットとアナを、

シークとシャドウは哀れみながらも解放した。

「これは……乗り物か？」

そしてファントムを解放した時、シャドウは乗り物を発見する。

それは、多くの人を乗せる事ができる汽車だった。

「シャドウ、運転できるの？」

「車やバイクを運転した事はあるが、汽車はないな。」

だが、僕に運転できない乗り物は無い。……乗れ」

そう言っつて、シャドウは汽車の運転席に行く。

スマブラメンバーが汽車の中に入ると、シャドウは汽車を運転した。

「シャド兄、大丈夫？ ちょっと揺れてるけど」

「この乗り物は速くないし、地面も不安定だからな。慎重に運転せねばならない」

「よつちやうでしゅ……」

シャドウは汽車を運転しているが、ちよつときこちないとカービイには感じた。

プリンなどの他の子供組も、不安定なシャドウの運転に不安になる。

「またスピリッツか」

すると、シャドウは道中でピカチュウのボディに宿った

ドン・チユルゲのスピリッツを発見する。

シャドウは汽車の窓を開け、中から拳銃を撃ってドン・チユルゲを解放した後、運転を続ける。

だが、途中のレールが縦になっていて、左側のレールは進めそうになかった。

「よし、ここまでにしよう」

シャドウは右側のレールを進み、汽車から降りた。

「あー、ドキドキした。地面ガタガタだったよ。こんなにドキドキしたのは久しぶりかな？」

「そうかもな」

ふうふうと息を切らすカービイ。

揺れる車内とシャドウのぎこちない運転に、久しぶりにドキドキしたようだ。

「確かに、地面は平らではなかったし、キーラに操られたスピリッツもいた。

でも、それだけだったでしょ」

「サム姉、慣れてるんだ〜」

「私は様々な惑星を渡ってきた、これくらい平気よ」

「じゃ、安心だね！」

サムスの自信に安心したカービイは、るんると山を登っていった。

その道中、レオタードのような服を着た女性、キャミイのスピリッツが道を塞いでいた。

「嫌な思いをしないように、一太刀で決めるわ」

ベルが大鎌を振るってキャミイを解放すると、先の霧が晴れていった。

次の瞬間、火山の熱気が一行を襲った。

「うっ……！」

「なんて熱さだ……！」

「気分が悪くなりそう……！」

氷山と打って変わって、こちらの気温は高すぎて汗が出そうだ。

防寒着を着ているアイスクライマーの顔からはとつくに汗が出ている。

しかも、入り口には巨大な岩が立ち塞がっている。

「この岩、どうやって壊そうか……」

「えいっ！」

カービイはハンマーを取り出し、巨大な岩に振り下ろした。

岩に罅が入るが、まだ壊れそうにない。

「それっ！」

もう一度、カービイはハンマーを振り下ろす。

だが、やはり岩には罅が入るだけだ。

その後も、何度もハンマーを振り下ろしたが、罅ばかりが入ってなかなか壊れなかった。

「うう、疲れちゃった……」

カービイはハンマーを振り下ろし過ぎて疲れてしまった。

すると、彼に出来るかのように、

スピリッツボールの中からボンバーマンのスピリッツが姿を現す。

「あ、しろ君……」

『お疲れ様、よく頑張ったな。後はボクに任せろ』

ボンバーマンは爆弾を取り出すと、罅が入った岩目掛けて爆弾を投

げ、破壊した。

「うわあ、凄いな、しろ君」

『どういたしまして』

役目を終えたボンバーマンは、スピリッツボールの中に戻った。

こうして、ボンバーマンのおかげで火山に行けるようになった。

「やっぱり暑いよお……」

「エンデュア・エレメンツ！」

暑さにへばるアイスクライマーに、ベルはエンデュア・エレメンツの魔法をかける。

「ふう、ありがとう、ベル」

「使いすぎるといざという時に魔法が使えなくなるわ。時には我慢した方がいいのよ」

頻繁に呪文を唱えていると魔力が減り、本当に魔法が必要な時に困った事になる。

魔力を回復する薬はあるにはあるのだが、大半は体力を回復する薬より高いため、

そうたくさんは持ち歩けないのだ。

「は〜い」

「分かったわよ」

アイスクライマーは素直にベルの言う事を聞き、暑いながらも頑張って火山を歩く事にした。

「わしの眠りを妨げる者どもよ、地獄の炎の中で苦しみながら焼け死ぬがよい」

「また、戦う事になるとはね……」

リドリーのボディに宿るメデイウスには、マルスがファルシオンを持って対抗した。

ランクはホープ級なので、以前と比べてそれほど苦戦せずに倒せた。

「ふう、ふう、暑い暑い」

「思わず脱ぎたくなっちゃうよ」

「でも、人前で脱いじゃダメだからね」

火山の暑さにへばりつつも、一行はスコークス、ダルケル、ジエームズ・マクラウドのスピリッツを解放しながら歩いていく。火山の火口際に着くと、より一層暑さが強くなり、アイスクライマーは汗をかき続ける。

「何なの、この暑さ？」

「苛々しちゃうわ」

「まあまあ二人とも、落ち着いて……暑いのは僕達も同じだから」

その暑さに流石のアイスクライマーも苛々する。

何とかなりようは彼らを宥めるが、このまま暑い場所にずっとでは危険だ。

しかも、西は幻のポケモン・ボルケニオンのスピリッツが立ち塞がっている……が、

ベルはボルケニオンを見て目を輝かせていた。

「ボルケニオンには雪の女王って呼ばれてる妹がいるんだって。一度、会ってみたいわ」

「雪の女王って誰だ？」

「まあいいわ、ボルケニオンのスピリッツを解放して進みましょう」

ベル、シモン、サムスは武器を構え、ボルケニオンのスピリッツと戦った。

そして、スピリッツを解放した後、一行が西へ歩いていくと、

黒髪の少年が光の鎖に縛られていた。

不老不死の少女から超能力を授かった皇子のように整った顔立ちをしていた。

軍人の姿をしたネットナビのように、人を率いる才能も併せ持っている。

高校生らしく、英雄に憧れる金髪の少年のような無邪気さもあるかもしれない。

「ようやく捕まったファイターを見つけたわ。こいつの母体は解放してやらなくちゃね！」

ベルはそう言つて、少年を縛っている光の鎖を大鎌で一閃、少年は光の鎖から解放された。

「……」

少年の瞳が赤く光ると、背後に悪魔が召喚された。

「これは……ペルソナ!？」

「もし、こんな状況に遭遇したら、必ずこう言うでしょう」

「まさか!」

マールとシズエが驚いたところで、少年と悪魔が襲い掛かってきた。

「行くぞ、みんな!」

「!はい!」

「参る」

「みんな、見ていてくれ!」

マリオ、ロックマン、ピット、ルカリオ、ランス、マルスは少年を迎え撃つ体勢に入った。

「バラージアイスボール!」

マリオは少年目掛けて氷の玉を乱射する。

「うおっ!」

「当たらないよ!」

少年は短剣を振るってマリオに反撃、身体をねじらせてロックマンにフェイントを仕掛ける。

だが、ロックマンはひらりと身をかわした。

「えいっ!」

「……」

少年はロックマンの攻撃を飛び上がったかわす。

その直後にロックマンを短剣で切り裂き、ピットが放った矢を闇魔法で防ぐ。

「はっけい!」

「えいっ!」

ルカリオは少年目掛けて気を纏った掌底を放ち、ランスが槍で少年を突いて追撃する。

「マーベラスコンビネーション!」

「動かないでね!」

マルスは少年を流れるような連続攻撃で切り裂く。

ロックマンはバスターを弱めて威嚇射撃をして少年を怯ませる。

その隙にマリオは少年に突っ込みパンチし、マルスはドラゴンキラーで少年を斬りつけた。

「ワドスピアスロー！」

ランスは遠くから槍を投げて攻撃し、ルカリオは少年の懐に近付き投げ飛ばした。

「ファイア掌底！」

「ロックバスター！」

「パルテナの神弓！」

マリオは少年に炎を纏った掌底を放って攻撃、ピットとロックマンは同時に少年を撃った。

少年は距離を取って闇魔法で反撃し、銃を撃った。

「うおっ、こいつ銃も撃ってくるのか！」

「何でもできるんだね」

少年の多芸さに驚くマリオとマルス。

短剣も、銃も、魔法も使え、動きが素早い……だからこそ助けたいと二人は決意する。

「今、助けてやるからなっ」

マリオはそう言つて少年にファイアボールを放つ。

ロックマンはフレイムソードで斬りつけ、少年をさらに燃やす。

「闇にはこれが一番効くんですよ！　これで、とどめです！　デュアルアタック!!」

「ぐあああああああああああ！」

そして、ピットがパルテナの神弓を双剣に変え、少年に向けて同時に振り下ろし、

彼を戦闘不能にし、戦闘を終えた。

「……っ！」

ピットが少年を撃破すると同時に、少年の背後にいた悪魔が消える。

気を失った少年はばたきと、地面に崩れ落ちる。

「……勝ったんですか？」

「そうみたいだな……」

倒れている少年を見て、マリオは呟く。

すると、スピリッツボールの中からサクラのスピリッツが飛び出した。

サクラは少年の傍にやってきて、祓串を少年の前にかざした。

すると、少年が負っていた傷は癒え、サクラはスピリッツボールの中に戻った。

痛みはまだ残っているようなので、少年は痛みを引き摺りながら立ち上がる。

「いたたた……ここは、どこだ？」

「あ、起きたんだね。あまり無茶しないでね」

「う、ぐっ」

しばらくして、少年の痛みが完治した後、マリオは今までの事情を少年に話した。

「なるほど、そういう事があったのか。それで俺は、こんな火山にいたのか」

「大丈夫だった？」

「ああ、ちよつと痛いのが平気だ。……それよりも、名前を名乗っていないかったな。

俺は雨宮蓮、コードネームはジョーカーだ」

ジョーカーは自身の本名とコードネームを名乗る。

一行もジョーカーに改めて自己紹介をした。

「……しかし、お前はナイフも、銃も、闇魔法も使えるんだな。

お前は公認ファイターなのに、銃も使う僕は非公認ファイターとは、一体どういう事なんだ？」

シャドウは嫉妬の目をジョーカーに向けていた。

「いや、ナイフも銃も玩具おもちゃだから大丈夫だ。闇魔法はエイハという呪怨属性の魔界魔法だ。

それに、そんなに嫉妬するな。俺とお前は同じ属性なんだぞ？」

「同じ属性……か。だからこそ、妬むかもな」

「……」

シークは、シャドウとジョーカーのやり取りを見てちよつぴり不安になっていた。

こんな調子でキーラを倒して世界を救う事ができるのか、と。

とはいえ、ジョーカーを助けて仲間が増えたため、その辺は良い成果になった。

一行は、次の仲間を助けるために火山を下山するのだった。

48 〽 穏やかじゃない冒険

「俺を助けてくれてありがとう、みんな」

「どういたしまして」

ジョーカーを救出した一行は、楽しく会話しながら火山を下山していった。

アイスクライマーは、もう、こんなに暑いところはもうたくさんだという表情をしていた。

「大変だったな、アイスクライマー」

「だって、僕達は寒いところに住んでるもん」

「火山を歩くのは初めてだったわ。あゝ、疲れた」

ポポとナナは汗をびっしょりとかいていた。

ジョーカーは彼らを「お疲れ様」と労った。

「さて、次の目的地は……」

下山しながら、ベルは次の目的地を探していく。

しばらく歩くと、いかにも近未来的なエリアに辿り着いた。

「あ、ここ見た事あるヨー！」

「知ってるの？ パックマン」

「うん！ ボクについてきて！」

一行はパックマンの案内で、そのエリアに入った。

まず道中でオービュロンのスピリッツを解放する。

「この丸い場所に乗ると、ワープするヨ。ワープ先は全部決まってるヨ」

「それで、この場所にファイターは捕まっています？」

「ちよつと待っていてね……」

ベルはファイターの居場所を察知する体勢に入る。

「いるわ。場所は……あっちね。パックマン、行き方を教えて」

「オッケー！」

一行はパックマンの導きで、次々とワープ床を乗り継いでいく。

カービイはわいわいとはしゃぎながら、あちこちを見ていった。

そしてパックマンの導き通り、着いた場所にはファイターが光の鎖

で縛られ、

サイドステツパー（カニさん）とニツキーのスピリッツが取り巻きになっていた。

「このファイターはMr. ゲーム&ウオツチ、通称ウオツチだネ」

「あら、ご存知なのね」

「ボクと同期だから知ってるヨ。でも、茶番はまたあとで。まずは助けてからネー！」

パツクマンがパンチを繰り出し、ウオツチを縛っている鎖を破壊する。

鎖から解放されたウオツチは、いきなり一行に襲いかかってきた。

「みんな、来るヨー！」

「……来い！」

パツクマン、シャドウ、ジユカイン、しずえ、オリマー、アイスクライマーは、

操られたウオツチを迎え撃った。

「いあいぎりー！」

ジユカインは素早い斬撃をサイドステツパーとニツキーに放つ。

「えいっー！」

しずえはサイドステツパーをピコハンで叩き、サイドステツパーのスピリッツを解放した。

「元に戻ってー！」

パツクマンはウオツチにフルーツターゲットを投げるが、

ウオツチにはギリギリで当たらなかった。

しかし、オリマーがピクミンに指示を出し、数の暴力でウオツチに大ダメージを与えた。

「アイスショット！」

アイスクライマーはハンマーから同時に氷の塊を飛ばしてニツキーを攻撃する。

「はっー！」

シャドウはウオツチに体当たりを繰り出す。

ウオツチは反撃を繰り出すが、シャドウが空間をずらしてしずえに

ターゲットを変えた。

「きやつ、何するんですかシャドウさん！」

「問題はない」

「問題はない、じゃないですよ……ううう……」

シャドウの無遠慮な発言にさすが泣きかける。

アイスクライマーはあららと呆れながらニツキーにハンマーを振り下ろし、

彼女のスピリッツを解放した。

「むっ、私のピクミンをかわすか」

オリマーはウオッチがピクミンをかわして驚く。

「だったらオレがカバーする！ エナジーボール！」

ジユカインは口からエネルギー弾を放ち、ウオッチを遠距離から攻撃する。

「シャドウさん、冷たくしないでくださいね」

「……」

しずえは果物を取り出して食べ、体力を回復する。

シャドウはウオッチに拳銃を撃って攻撃した。

「えーいー！」

「カオススパア！」

アイスクライマーはウオッチにハンマーを振り、

怯んだところにシャドウのカオススパアが命中。

「元に戻って、ウオッチー！」

そして、パックマンが変身して体当たりすると、ウオッチは場外に吹っ飛ばされた。

今ここに、ウオッチとの戦闘が終わった。

「モウシワケアリマセン。ワタシノセイデアナタタチヲキズツケテシマッテ」

パックマン達の活躍で正気に戻ったウオッチは、ファイター達を攻撃した事を謝る。

「いいんだヨ、ウオッチ。終わりよければ全てよし」

「アリガトウゴザイマス、パックマンサン。オヤ？ アナタタチノカ

オハハジメテミマスネ。

ワタシハ、ウオツチトモウシマス」

「私はインクリングのマールだよ」

「わたしは、シーズーのしずえと申します」

「私はシモン・ベルモンドだ」

「ボクはバンジョー」

「あたいはカズーイよ」

ウオツチと第五期のスマブラメンバーは、お互いに自己紹介をした。

「僕はシャドウ・ザ・ヘッジホッグだ」

「ボクはバンドナワドルデイ、ランスって呼んでね」

「オレはジユカインだ」

「私はベル・クリーブよ」

「わたしはアイシャ・クルースニクですわ」

「俺は柘蓮司だ。終って呼ばれる事が多いぜ」

「セイバー、アルトリア・ペンドラゴンと申します」

「ヨロシクオネガイシマス」

シャドウ、ランス、ジユカイン、柘蓮司、アルトリアも、非公認の身ながら自己紹介をする。

そしてベルとアイシャも、自己紹介をした。

「ソレデハ、イキマシヨウ」

「そうだね。みんな、ボクについてきて」

「ハイ」

一行はワープゾーンを移動しながら、リドリーに宿ったデビル、ピチューのボディに宿ったロトムを解放する。

次に右のワープゾーンに乗り、ドンキーコングJR、グルッピー、スプラッシュを解放する。

最後のスプラッシュを解放すると、東の雲が晴れ、山と滝が見えるようになった。

「今度は山を登るみたいね」

「山登りなら僕達に任せて！」

「伊達に氷山、登ってないんだからね！」

アイスクライマーは火山のへばり具合が嘘のようにやる気満々だった。

ジョーカーは「ははは」と笑いながら、滝がある山に登る準備をするのだった。

一行は仲間を探すため、滝がある山を登っていく。

「エイハー！」

ジョーカーは呪怨属性の魔界魔法を操り、

リップと幼少アルム&セリカのスピリッツを解放する。

「すごいねー、ジョーカー！」

「はは、褒めてくれてありがとう。……おや？」

山を登っている途中で、ジョーカーは壊れた橋を発見した。

「困ったな……俺のペルソナに橋を直す力はないな」

「それじゃ、私に任せて！ 樵三人組《サジマジブーツ》！」

ベルはスピリッツボールの中からサジ&マジ&ブーツのスピリッツを取り出す。

『何をすればいいんだ？』

「壊れた橋を直して。このままじゃ先に進めないの」

『分かったぜ、サジ、ブーツ！』

『俺達の底力、見せてやる！』

サジ&マジ&ブーツは、三人で力を合わせて壊れた橋の修理にかかった。

ノービス級だったが流石は木こり、手早く橋の修理作業が終わった。

「ご苦労様、はい、戻って」

『ありがとなー！』

橋の修理が終わった後、

ベルはサジ&マジ&ブーツのスピリッツをスピリッツボールの中に戻した。

「さ、行くわよ」

「ああ」

橋が直ったため、一行は先に進めるようになった。

ジョーカーとシャドウは前に立ち、とうさんぞう、ウィルスのスピリッツを解放する。

山は相変わらず高かったが、魔法と食糧で何とかへばらずに登る。

その道中で、一行はノポン族のリキを発見する。

「あ、キミは誰?」

「リキっていうも」

「……子供?」

「リキは子供じゃないも! これでも結婚して子供が11人いる40歳のノポンだも!」

「……えっ、ボクと同じ!?!」

リキは、こう見えても妻子持ちの地球で言う中年男性である。

(二応) 同じ妻子持ちであるパックマンは、その真実に驚く。

「ご、ごめんなさい」

「初めて見る人は割と間違えるも。それで、リキに何の用だも?」

「今は無いヨ。でも、応援はしてほしいヨ」

「やるも! 頑張れ、頑張れ、だも!」

リキはカムカムを振って、冒険しているスマブラメンバーを応援した。

彼の応援に、スマブラメンバーの士気が上がる。

「ありがとう、リキ。元気になったよ」

「どういたしましてだも! じゃ、いってらっしゃいだも!」

「いってきます」

「綺麗な滝だね」

リキに別れを告げた一行は、滝を見つつ山に登る。

流れる滝の音が、疲れを癒していく。

「うーん、癒される。リキも応援してくれたし、がんばりーりエましよう!」

「おーーっ!」

5分後、一行はようやく滝がある山の頂上に辿り着く。

すると、左目が隠れた紫の長髪の、妖艶な容姿をした女性が黒竜に

乗っていた。

「カムイ……ああ、カムイはどこ……?」

女性はカムイの名前を呟きながら、ふらふらと空を飛んでいた。

「あれもスピリッツみたいね。解析してみましよう」

そう言つて、ベルはそのスピリッツを能力を使って解析した。

「この人は暗夜王国の第一王女、カミラよ」

「うわあ、綺麗ですわ」

「でも、この身体は、ちよつと胸がきついわ」

アイシヤは、カミラのスピリッツが宿っているカムイのボディを見て感心する。

カミラはカムイと体格差が大きいため、やや苦しそうな様子だった。

「そこのあなた、カムイを知らない?」

「知らないぞ」

カミラはマリオにカムイがどこにいるかを聞いた。

もちろん、マリオは彼女の行方を知らないため首を横に振る。

「ふうん、知らないのね。」

なら、あなたはどうでもいい……と言いたるところだけど、

あなた達は今、私と対峙してるんでしょ?」

「そうだな」

「あなた、こういう言葉を知らない? 『悪魔は身内には優しい』。」

でも、『飽くまで』身内だけ。だから……あなた達を殺してあげるわ」

カミラは駄洒落を言いながら微笑む。

しかし、その目は笑っておらず、カミラは斧を構えてマリオ達に襲い掛かってきた。

「これでとどめだ!」

「いやあああああああつ!」

マリオ達は何とか、エース級のカミラを撃破する事に成功した。

ボロボロになったカミラは、ボディのせいでさらに苦しそうな顔をしている。

「私はカムイを見つけられないまま……ここで事切れるの……？ ああ、カムイ、カムイ……」

「そんな事はどうでもいい。それよりも……さっさと、カムイから出ていってもらおうかッ！」

柘蓮司は、カムイのボディに宿ったカミラに、激しい言葉を投げつけた。

すると、カミラが頭を抱えて蹲った。

「……………う……………あ……………カム……………イ……………」

カムイの中から、カミラのスピリッツが抜け出る。

ベルはそれを逃さないように、鎌を構えて彼女を捕まえる態勢に入る。

「捕まえ……たっ！」

「イヤアアアアアアアアアアアアアア!!」

ベルの鎌がカミラを一閃すると、

彼女のスピリッツはスピリッツボールの中に吸い込まれていった。

そして、カミラのスピリッツが抜け出たカムイのボディは、塵と成ってこの世から消えた。

「なんか、色々めんどくさい奴だったな、カミラは」

柘蓮司はカミラについて簡素な感想を述べた。

「……………うーん、でも、カムカムはどこに居るのかな」

カムイは、あの光を浴びた後、一体どこに消えたのだろうか。

カービーが彼女を心配していると、突然、

光の鎖で縛られた金髪碧眼のファイターが姿を現した。

モナド使いの青年、シユルクだ。

台座の下からは、シユルクのボディが次々と生成されていく。

「! どうやら、カミラを倒したためにファイターが現れたみたいだな。

彼の母体を解放すれば、また一つ世界は変わる。みんな、覚悟はい

いか?」

「うん!」

「いくぞ……はあっ！」

シモンがヴァンパイアキラを振り、光の鎖を切り裂くと、シユルクの母体が解放され、彼はモナドを構えて戦闘態勢に入る。シモンと共に前に立っているのは、シーク、ファルコン、ルカリオ、ダックハント、マック。

「……シモン、キミモボクトキーラサマニハムカウノカイ？」

「私はお前を解放しただけだ。だが、キーラには刃向かう」

「フン。ソレト、チョットキノドクナンダケド、

キミタチニハ、ヤクソクシテモラワナキヤナラナイコトガアルンダ。

エターナル・サイレンス……エイエンノチンモク、ヲネ」

「来るぞッ！」

シモン達は、操られたシユルクを解放するために、彼と戦った。

「モナドアーツ『疾』」

シユルクはモナドアーツを発動し、自身の回避率を上げる。

「いくぞ！」

「アタラナイヨ」

シモンとファルコンはシユルクに渾身の一撃をぶつけるが、モナドアーツの効果でひらりとかわす。

「はどうだん」

ルカリオはシユルクに波導の力を溜めた弾を放つ。

シユルクはそれかわそうとするが、はどうだんはシユルクを狙い、攻撃は命中した。

「ヒツチュウワザダト!？」

「ばうわう！」

「くっ！」

シユルクはダックハントの狙撃をかわした後、モナドでシモンに斬りかかる。

シークはシユルクの行動に合わせて仕込針を投げ、マックが追撃する。

「はっけい！」

「ばうっ！」

ルカリオはシユルクの急所にはつけいを当て、ダックハントはシユルクに早撃ちを仕掛ける。

「ファルコンパンチ！」

そして、ファルコンが炎のパンチをシユルクにぶちかまし、彼を吹っ飛ばして戦闘を終えた。

「はあ、はあ……僕は一体、何をしていたんだろう……しかも、見慣れない場所だな……」

シユルクは、自分が違う場所に飛ばされ、しかも母体を利用された事を忘れていた。

「かくしかで捕まったファイターを探している」

シャドウがシユルクに事情を話すと、シユルクはがっくりと項垂れる。

そして自分の警告が間に合わなかった、と謝った。

「未来視^{ビジョン}が間に合わなくて、ホントにごめん」

「いや、間に合っていた。だが、相手の方が一枚^{うわて}上手だったようだ」

「シャドウ……」

シユルクの未来視による危機回避も、「あの時」はキーラの速さの前に通用しなかった。

フィオルンの事件もあつてか、あの時、仲間を守れなかったシユルクの心は傷ついていた。

『シユルク、落ち込まないで』

「フィオルン……！」

そんなシユルクの前に姿を現したのは、フィオルンのスピリッツだった。

『シャドウの言う通り、シユルクの予知は間に合っていた。』

あなたの行動は決して無駄じゃなかった。

だって、あなたのおかげで、カービイト、シャドウと、ベルを逃がせたじゃない』

「ホントだ！」

微力ながらもシユルクの行動は希望を繋いでいた。

どうして気がつかなかったんだ、とシユルクは思い出す。

『自分を責めないで。シユルクが悲しいと、私も悲しくなるよ。だから、ほら！ 笑って！』

「……ファイオルン……ごめん、ホントにごめん。」

そして、絶望の底から引きずり出してくれて、ありがとう」

ファイオルンの慰めにシユルクは涙を流した。

そして、シユルクは満面の笑みをファイオルンに浮かべた。

『私、シユルクが勝つ事を信じてるからね』

そう言つて、ファイオルンはスピリッツボールの中に戻つた。

一段落した後、シャドウは立ち上がる。

「……感動の再会といったところで、そろそろ戻るとしよう」

「そうだね、まだ捕まつてるファイターがいるしね。じゃあ、どうやって帰ろうか？」

「……滝を降りるか」

「えー？ また潜るのー？ カオスなんかを使えばいいのにー」

シャドウの「滝を降りる」という提案に、カービィは少しだけ文句を言う。

「何度もカオスコントロールは使えないと言っただろう。それとも、お前だけここに残すか？」

「……分かったよ」

カービィは渋々滝に飛び込んだ。

そして、他のメンバーも次々と滝に飛び込み、山を脱出するのだった。

49 く ラプラスにのって

ウォッチ、シユルクと立て続けにファイターを救出し、スマブラメンバーの数はどんどん増えていった。

「さて、次はどこに行きましようか」

「アローラ島にある『贈り物』を探しましょう」

「……キーラが出した、アレ？」

「そうよ。反対は、無いわね？」

「もつちろん！ 行こう、サム姉！」

サムスの提案で、一行はアローラ島がある砂浜に行く事になった。

砂浜は遠かったが、パックマンエリアを通り、1時間後に何とか辿り着く事ができた。

「ふう〜、疲れた」

「これくらいで音を上げないで」

「サムスは魔物顔負けの体……何でもないわ」

涼しい声のサムスにベルが言いかけるが、

サムスの怒りを買いそうな気がしたので慌てて口を押さえた。

「わあ〜、綺麗だねえ」

砂浜は自然が豊かで、たくさんの生き物が住んでいた。

しかし、キーラ軍の襲撃により、スピリッツがたくさん浮遊している。

「……やるしかないみたいだな」

「ええ、行くわよー！」

カービー、シャドウ、ベルは、率先して戦い、キーラに操られたスピリッツを解放する。

チアガールズ、リト族の少女・メドリ、ドラゴンポケモン・ボーマンダ。

彼らは最初の生き残りだけあって、他のスマブラメンバーより覇気があった。

「わあ〜！ かつこいいでちゅ〜！」

「凄いなあ、三人とも」

「僕達から冒険が始まったんだからね」

「これが、究極の力だ……」

「ふふふ、私は死神なのよ」

リユカ、りよう、ピチュー、ピットなどの子供達は三人の戦いぶりを見て感心している。

彼らの姿は、スマブラメンバーを勇気付けていた。

しばらく進むと、赤い帽子と赤い服の少年が、光の鎖で縛られていた。

「あつ、ロートー！」

少年はポケモントレーナーのロートである。

そこからは、ゼニガメ、フシギソウ、リザードンのボディが生成されていた。

「待ってて、今僕が助けてあげるよー！」

りようがボウリングの玉をロートに向けて投げ、彼を光の鎖から解放する。

そして、ロートがポケモンを出そうとすると、ベルは闇を纏った手で彼をビンタした。

「はーい、これにて救出成功！」

「えっ、成功？」

「ふふつ、これは彼自身に戦う力が無いからこそできるのよ」

ベルが涼しい顔で言うと、ロートはぱちぱちと瞬きする。

「……なんで俺は、アローラ島にいるんだ？」

「よかった、上手くいったみたい。あんたのポケモンのボディは、もうこれで生成されないわ」

「ボディ……？」

「あ、混乱してるみたいね。便利な言葉、かくしか」

ベルはこれまでの事情をロートに話した。

キーラ軍の襲撃で世界が危機に瀕している事、肉体を失ったスピリッツが徘徊している事、

キーラに捕まった仲間を助けている事。

これらを全て話すと、彼は納得して頷いた。

「分かったぜ。要はキーラを倒せばいいんだろ」

「そうよ」

「よし！俺は戦えないが、トルトウ、ファイオーレ、ブレイズが力を貸してやる。」

「だから、一緒に俺もついていくぜ！」

「ええ、もちろんよ」

そう言っつて、ベルとロートはがしつと握手した。

今ここに、チャンピオンを目指すポケモントレーナー・ロートが、スマブラメンバーの仲間になるのだった。

「さて、と。ロートを仲間にしたのはいいけど、贈り物を見つける方法が見つからないわね」

サムスがふむ、と顎に手を当てて言う。

ロートはそのための方法を探すべく、あちこちを見渡した。

すると、ロートは何かを発見し、目を光らせる。

「おっ、あれは……ポケモンだ！」

「ポケモン？」

ロートはすぐに南西側に走り出す。

「待ってよ、ロート〜！」

カービー達が彼を追いかけると、アイスクライマーのボディに宿ったのりものポケモン、

ラプラスのスピリッツがいた。

「ほら、見つけたぜ」

「お、ラプラスだ」

「こいつに乗せてもらえばいいんじゃないか？　なんていったって、のりものポケモンだからな」

ラプラスは背中に人やポケモンを乗せて運ぶのが好きなポケモンだ。

しかし、今はキーラに操られていて、とてもラプラスの背中に乗れるような雰囲気ではない。

「ま、いつも通り、戦ってゲットするしか」

「ないよな！」

ラプラスには、ピカチュウ、プリン、ピチュー、ルカリオ、ジュカイン、

ロートの一人と五匹、いや、一人と八匹が挑戦した。

「ラプラス、ゲットだぜー!」

ロート達は無事にラプラスの解放に成功した。

これで海の向こうに渡る事ができるようになった。

一行は砂浜に行きラプラスを呼び出す準備に入る。

「ゆけっ、ラプラス!」

「ラ〜ラ〜ラ〜♪」

ロートはベルのスピリッツボールを借りて、中からラプラスを取り出す。

ラプラスは嬉しそうに歌いながら、スマブラメンバーを乗せようとする。

「……こんなにたくさんは、乗れないよなあ」

だが、人数が多すぎるため、何回かに分けて移動する事になった。ちなみに、内訳はこのようになっている。

・ 1回目

カービィ、アイシャ、ランス、しずえ、ジュカイン、終蓮司、プリン、リンク、ピカチュウ、

スネーク、オリマー、ロックマン、パックマン、リユカ

・ 2回目

ベル、ソレイユ、リユンヌ、りょう、アイスクライマー、ヨツシー、アルトリア、ピット、

ダックハント、シーク、マール、サムス、ジョーカー、ドクター

・ 3回目

シャドウ、マック、ファルコン、フォックス、マリオ、マルス、クッパ、ストーム、

ルカリオ、ピーチ、ピチュー、シモン、ドンキーコング、バンジョー & カズーイ

「船がなくても、泳げなくても、君を呼んだら旅が始まるのさ〜♪」
アイシャはラプラスの上で「ラプラスにのって」を歌った。

ピンク玉二人は歌うと危険なので、アイシヤは歌わないように言った。

「わあ、歌が上手いですねえ〜！」

「ああ、なかなかいい声だな」

しずえと柊蓮司がアイシヤの歌声を評価する。

ラプラスもそれに合わせて、綺麗な声で歌った。

海は広く、光が反射して美しい青が映える。

途中で魚男を解放しながら、のんびりと海を渡る。

「海は広いな大きいな〜♪」

爽やかな風が、一行を包み込む。

ラプラスは、皆を笑顔で目的地まで運んでいった。

「着いたぜ、ラプラス。残った奴らも運んでくれよ」

「ラップラー！」

最初の14人がアローラ島に到着した後、ラプラスはロートの指示で砂浜に戻っていく。

次にベル組、シャドウ組がラプラスに乗り、全員がアローラ島に到着した。

「ご苦労様、ラプラス。戻ってね」

「ラップラー！」

ベルは全員を運び終えたラプラスをスピリッツボールの中に戻した。

「アローラ島かあ……。ちょっと日差しが強いけど、自然が豊かだね」

一行が着いたアローラ島は草や花がたくさんあり、砂浜もきらきらと光っている。

ここに、サムスが言った「贈り物」がいるという。

ベル達が歩いていくと、オレンジ色の服を着た幼い兎と、

蝶ネクタイをつけたチャオと出会った。

「あ、シャドウさん！ お久しぶりデス！」

「チャオー」

この兎とチャオはシャドウの事を知っているようで、彼に笑顔で声を掛ける。

「何かあったの？」

「シャドウさんは、お城の中で迷子になったワタシとチーズを助けてくれた事があるんデス」

「エミーに言われたがな」

相変わらずシャドウは素直ではなかった。

「で、あんた誰？」

「ワタシはクリーム・ザ・ラビット、こっちは友達のチーズデス」

「チャオチャオ」

兎とチャオは一行に自己紹介をした。

シャドウ以外の一行もクリームとチーズに名前をを名乗った。

「よろしくね、クリーム」

「よろしくお願ひしマス！ ……あつ」

「チャオ？」

互いに自己紹介を終えた時、クリームとチーズがカービイのところに向かって歩き出す。

「ど、どうしたの、クリームチーズ？」

「か、身体が勝手に動くんデス！ 戦いたくないのに！ た、助けてくだサイー！」

「あ、いつものバトルだね。よし、いくぞ！」

キーラに操られたクリームとチーズは、カービイが解放する事にした。

「ありがとうございます、カービイさん」

「チャオ！」

「どういたしました、クリームチーズ」

「……それとカービイさん、ワタシの名前はクリームチーズじゃなくて、

クリーム・ザ・ラビットデス」

カービイに名前を間違われたクリームは、少し悲しそうに彼に説明した。

「あ、ごめんね、クリーム……と、チーズ」

カービイがクリームとチーズに謝った後、二人はスピリッツボール

の中に入った。

「うーん、綺麗な島だなあ！ 初めてなのに、やっぱり懐かしいぜ」

ロートはアローラ島の感想を素直に言った。

赤い花に白い斑点模様が描かれ、土管の中に入った奇妙な植物が踊っていた。

マリオ、ピーチ、ヨッシー、クッパはそれに見覚えがあった……パツクンフラワーだ。

「**「「パツクンフラワー！」**」

「ガブ、ガブガブ、ガブガブ！」

「……何言ってるんだ？」

「分からないわ」

「私にはさっぱり分かりませんね〜」

マリオ、ピーチ、ヨッシーには、パツクンフラワーの言葉が分からなかった。

すると、クッパがパツクンフラワーの前に出る。

「クッパ、お前分かるのか？」

「こいつは我輩が作ったようなものだからな、我輩には全てお見通しなのだ」

実はパツクンフラワーはクッパの魔力で凶暴化した植物のため、

クッパにはパツクンフラワーの言葉が分かるのだ。

「ガブ、ガブガブ、ガブガブ！」

「何々……『俺の踊りについてこい』？ ほほう、ダンスには自信があるみたいだな」

「ダンス……？」

クッパがパツクンフラワーの言葉を翻訳する。

「どうやら、パツクンフラワーはダンスを得意としているようだ。」

「ふむふむ、なるほど……分かったぞ。マリオ、ピーチ、ヨッシーよ！

こいつはお前達とダンスで対決したいらしいぞ！」

「おつ、ダンスか。久しぶりだな。ピーチ、ヨッシー、一緒にダンス乱闘するか！」

「ええ。ドレスは少し動きづらいけど、

パッくんフラワーのダンスがどれほど上手いか、見せてもらうわよ！」

「私も張り切って、踊りますよ〜！」

マリオ、ピーチ、ヨッシーは構えを取り、クツパとパッくんフラワーも遅れて準備する。

今ここに、異色のダンス乱闘が始まるのだった。

「ぞら、よっ〜！」

マリオは基本の動き、アイソレーションでパッくんフラワーを翻弄しようとする。

しかしパッくんフラワーは動じず、くねくねと身体を動かしてヨッシーに見せる。

「ガブガブ?！」

「見惚れてないでね?！」

ピーチはタップダンスを踊り、ヨッシーも彼女に合わせて踊る。

会心のダンスがパッくんフラワーに響いたのか、パッくんフラワーは動けなくなった。

その隙に、クツパはクツパドロップでパッくんフラワーを攻撃した。

「パッくんフラワーよ、お前のダンスを我輩に見せるがよい！」

クツパがパッくんフラワーを挑発すると、パッくんフラワーは渾身のダンスを披露する。

首を上げたり、捻ったり、葉っぱを動かしたりと大胆なダンスだった。

「むぐう！ なかなかのダンスであった」

「では、私も踊りますよ〜！」

続いてヨッシーがクリケットとバタフライでパッくんフラワーの気力を削る。

「それっ〜！」

「ガブツ〜！」

その隙にピーチはパッくんフラワーを投げて転ばせ、フライパンの一撃を与えた。

パッくんフラワーは首を捻り、鞭のようにしならせてマリオを攻撃する。

マリオはボックスステップを踏んでパッくんフラワーに反撃する。

「とどめだ！ エンドレスナインティー!!」

そして、マリオが片手で逆立ちして体を固めて、床を漕いで回転しながら蹴り飛ばす。

その一撃でパッくんフラワーは吹っ飛ばされ、今ここにパッくんフラワーとの戦いが終わった。

「ガブガブガブ……」

『オレの負けだ、好きにしろ』と言っているのだ

パッくんフラワーはそう言って、マリオ達に負けを認めた。

「……うーん、好きにしろって言っても……」

このまま放っておくわけにはいかないよな、とマリオが呟き、他のメンバーも頷く。

一方で、ランスは複雑な感情をしていた。

「パッくんフラワーって、ダンスしてたけど、ボクみたいに戦えるのかな？」

「ガブガブ！」

『失礼な！ ちゃんと戦えるんだぞ！』

「あ、それならよかった。それじゃあ、よろしくね、パッくんフラワー」

そう言っって、ランスはパッくんフラワーと握手した……ランスには指が、

パッくんフラワーには手が無いが。

「ガブ！ ガブガブガブ、ガブガブ！」

『それじゃあ、他のファイターも解放するぞ！』

「おー……おーっ!!」

こうして、一輪の大口、パッくんフラワーが仲間になるのだった。

50 一狩り行こうぜ!

パッケンフラワーを仲間にして、

一行はサムスが言っていた「贈り物」がどこにあるかを探索する。アローラ島は意外に広いため、探索に時間がかかった。

そんな時、ジユカインがパッケンフラワーを持ちながらダックハントと共に植物のにおいを辿って歩いている。

「ガブ、ガブガブ」

「わんわん」

「こいつらが贈り物まで案内してくれるらしいぜ」

「やるな、パッケンフラワー、ダックハント」

「ガブ!」

「ぼう!」

どうだ! と勝ち誇るパッケンフラワーとダックハント。

彼らの探索能力は、いくつもの冒険をしてきたマリオも眼を見張るほどだった。

一行はパッケンフラワーとダックハントに案内してもらい、贈り物がある森丘まで辿り着いた。

そこには、赤い身体のワイバーンのような姿をした巨大竜、リオレウスがいた。

「うわー、おっきいー」

カービィはあまりの大きさに天を見上げる。

他のメンバーも、リオレウスの巨大さに釘付けになっていた。

「これが贈り物なのね」

一方のサムスは、「贈り物」であるリオレウスを冷静に見ている。

「サム姉?」

「恐らくは、こいつが最後のバリアを守るボスよ」

サムスがそう言うと、リオレウスは翼を羽ばたかせて森丘の頂へと飛び去った。

「各地にはスピリッツがたくさんいる。解放しながら進むわよ」
「うん!」

自然が豊かな森丘。

しかし、そこもキーラの侵略に遭っていた。

一行はリオレウスを狩るべく、スピリッツを解放しながら進む。

「えいー！」

「PKサンダー！」

「インフアイト！」

空を飛ぶブロントバートや、胞子を振りかけるあるくキノコ、

あばれうしポケモンのケンタロスを倒しながら、一行は森丘をキーラの支配から解放する。

「よし、これを押して……」

リンクが赤いスイッチを押すと近くに橋が現れた。

その橋を慎重に渡り、今のリンクと同じ世界のゼルダ姫を解放して先に進むと、

光の鎖に縛られたトウーンリンクが台座に置かれていた。

「トウーンー！」

台座からは、次々とトウーンリンクのボディが生成されている。

リンクは、歯をくいしばってトウーンリンクをマスターソードで斬りつけた。

するとトウーンリンクが赤い瞳をぎらつかせてリンクに襲いかかってきた。

「俺が相手だ！ 来い！」

リンクはトウーンリンクに一騎打ちを挑んだ。

「せやあーっ！」

「グワアーツ！」

リンクは何とか、トウーンリンクとの一騎打ちに勝利し、彼を正気に戻した。

「ボクは一体、何をしていたんだ？」

「トウーン、お前は悪い夢を見ていたんだ」

「そうだったのか……。皆さん、リンクを傷つけてごめんなさい」

トウーンリンクはスマブラメンバーに謝った。

別人とはいえ、リンクの名を持つ仲間だからだ。

「俺も、仲間のお前と戦ってすまなかつた。

でも、今はみんな、キーラに操られていて、戦わなきゃ元に戻せないんだ。

「……分かってくれたか？」

「うん、分かったよ！ ボクもみんなを助けてあげればいいんだよね？」

「ああ、そうだ」

トウーンリンクは理解してくれたようで、リンクは一安心した。

「じゃあ、よろしくな！ トウーン！」

「うん！ みんな、よろしくね！」

リンクとトウーンリンクは互いに握手を交わし、スマブラメンバーの仲間が増えた。

一行は仲間にしたトウーンリンクと共にランビ、モーリイ、トリツキー、ガブリアス、

ムツシュ、メリア・エンシエントを解放し、リオレウスが待つ頂へと辿り着いた。

「我輩よりも大きいとは……」

リオレウスの巨体は、大きなクツパでさえも簡単に見下ろすほどだった。

普通の人間なら、まずその巨体だけで威圧されるだろう。

だが、彼を倒せばキーラのバリアが消滅し、キーラに戦いを挑む事ができるのだ。

ここで逃げ出すわけにはいかない。

「リオレウスは鋭い爪と強靱な顎あぎと、そして強力な火炎のブレスで攻撃してくるわ。

彼の弱点は尾。何発か当てれば、破壊できるわ」

ベルがリオレウスの弱点を説明すると、火竜リオレウスが襲い掛かってくる。

彼を迎え撃つのは、リンク、サムス、ランス、そしてアイシヤだった。

「ボクは、大王様のためにも、絶対に負けない！」

「覚悟しなさい、リオレウス」

「はあっ！」

「えいっ！」

リンクはマスターソードでリオレウスの尾を狙って斬りつける。

ランスも彼に続き、槍でリオレウスの尾を貫いた。

アイシヤとサムスは後方から攻撃した。

「グオオオオオ！」

リオレウスは巨大な顎を開き、手近な対象……リンクとランスに噛み付く。

「ぐううっ！」

「うわあっ！」

リンクはハイリアの盾、ランスはパラソルで防御するが、威力は凄まじくそれらを貫通してダメージを食らった。

「だ、大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……つつ、痛い」

何とか二人は耐えたが、苦しそうな表情をする。

アイシヤは癒しの力を使い二人を癒す。

「あまり無理しないでくださいね。わたしの癒しの力は、弱まっていますから」

「ああ……」

リンクとランスは再びリオレウスの尾を狙って武器で攻撃する。

「凍りなさい」

サムスはアイスマサイルを放ち、リオレウスを凍らせて攻撃を防ぐ。

「よし、このまま一気に攻めるぞ！」

リンクは飛び上がってマスターソードでリオレウスの尾を突き、ランスも槍を投げて追撃する。

アイシヤは包丁を振り回してリオレウスを切り刻み、

サムスがリオレウスに突っ込んでボムを爆発させる。

リオレウスの尾に、ヒビが入ってきた。

「……食うのか?」

「まさか！ 食べませんわよ！ 何にしろ、あと少しでリオレウスの尾を破壊できますわ。」

もう一踏ん張りですわ！」

「ああー！」

リンクはリオレウスに突っ込み、ヒビが入った場所を突く。

「これで、どうだ！」

そしてランスが槍を突き刺すと、豪快な音と共にリオレウスの尾は碎け散った。

「やった！ リオレウスの尻尾を壊せた！」

リオレウスの尾を破壊し、喜ぶランス。

しかし、リンクは固い表情を崩さなかった。

「いや、まだリオレウスは倒れていない」

「しかも……」

リオレウスは唸り声を上げている。

尾を壊された事で、怒っているようだ。

「グオオオオオオオ！」

リオレウスは顎を開き、火炎を吐き出す。

リンクはその炎をかわすが、余波がランスに飛び火し、ランスは身を灼かれる。

「だが、怒ってるという事は、あと少しでリオレウスを倒せるという事だな。一気にいくぞ！」

「はいー！」

アイシヤはリンク、ランス、ピーチを鼓舞し、三人はリオレウスに一斉攻撃を仕掛ける。

リオレウスは巨大な顎による噛み付きで反撃し、さらに高熱の火を噴く。

その威力が及ぶ範囲は広く、スピードも上がっている。

「かわせるか!？」

「おっととー！」

「当たらない」

「負けませんわ！」

リンク、ランス、サムス、アイシヤは緊急回避をし、奇跡的に全ての攻撃をかわした。

「よし！ 決めるぞ！」

「ワドスピアスロー！」

「この一撃で！」

リンクはブーメラン、ランスは槍、アイシヤは食器をリオレウスに投げつける。

サムスはその間に、エネルギー弾を溜めていた。

「それっ！」

アイシヤが皿を投げた時、サムスはリオレウスにとどめを刺す体勢に入った。

「一狩り……いかせてもらおうわ！」

サムスがチャージショットを放つと、巨大なエネルギー弾が一直線に放たれ、

リオレウスを飲み込む。

エネルギー弾が命中すると、大爆発が起きる。

そして、大爆発が治まった時、リオレウスは地に伏せた……リンク達の勝利だ。

「やったああああああ!!」

「勝ったああああああ!!」

「私達は、勝ったのね」

「やりましたわ、わたし達の勝ちです！」

四人は、その身体や声で、大いなる喜びを表すのだった。

「邪悪な力が……！」

リオレウスを撃破した事で、森丘から邪悪な気配が消えていく。

そしてキーラを守るバリアが消滅し、光の階段が現れ、ついにキーラへの道が開いた。

「やった！ これでキーラと戦えるね！」

カービィはようやくキーラと戦えるため喜ぶが、ベルは珍しく冷静にこう言った。

「ちよつとカービィ、早まらないで。この世界にはまだ捕まったファ

イターが残っているわ」

「……そうだな、僕達がまだ行っていない場所はある。そこを攻略して、改めてキーラに挑もう」

「あつ、言われてみればそうだ！ よーし、みんなを助けて、キーラをやっつけよう！」

「決まったな。では……カオス、コントロール！」

一行は残りのファイターを助けるため、

シャドウのカオスコントロールで森丘を後にするのだった。

51 〽 DKアイランド

リオレウスを撃破し、ついにキーラを守るバリアが消滅した。だが、キーラに捕まったファイターはまだこの世界に散らばっている。

一行は残ったスマブラメンバーを助けるため、ベルを先頭に歩いていった。

「次は……あつ、見つけたわ！ こつちね」

ベルは何かを発見したようで、滝がある山がある方角にいきなり走り出す。

「ベルベル、何見つけたの？」

「仲間よ、仲間の魂よ！ キーラがいる方とは逆だけど、仲間は助けなきや！」

ほら、ついてらっしゃい！」

「あつち行ったり、こつち行ったりと、忙しいな」

ベルは、仲間がいるという北東に行き、皆を誘導した。

あちこちを行き来する忙しさに、柊蓮司はぽつりと呟いた。

「久しぶりのDKアイランドだ！」

こうして、一行はファイターが捕まっている場所、DKアイランドに辿り着いた。

ドンキーコングは懐かしさから少し熱い声で叫ぶ。

「DKアイランド！ とうとう深緑の森の軒先にまで来た。今が戦争中とは残念至極！」

久々に故郷、DKアイランドに帰ってきたドンキー。

椰子の木が島を覆い、住むものも木を使って家を建てている。

昔ながらの生活が、ここには存在するのだ。

「聞こえるかしら……？」

すると、ドンキーの目の前に、帽子を被った老婆の幽霊が姿を現した。

「きやあああああ！ お化けええええ!!」

しずえは驚いてベルの後ろに隠れる。

ベルは「何をするの!」と叫んでドンキーの前に立ち、大鎌を構える。

「おいおい、ベル、やめろって! オレのばあさんだぞ!」

「え……あんたのおばあちゃん……?」

ベルは幽霊の正体をドンキーから聞いた後、すぐに大鎌をしまった。

「そうよ。私はリンクリー、ドンキーちゃんのおばあちゃんだったわ」

ドンキーコング、ベル、なおも震えるしずえの前で、幽霊は自己紹介をする。

「だった?」

「デイクシーちゃん、デインキーちゃん、ドンキーちゃん、

デイデイーちゃんが帰ってきてすぐに、私は死んじやったわ」

リンクリーはデイクシーとデインキーが冒険を終えた後にこの世を去った。

しかし、その魂は不滅であり、こんな風に幽霊として元気に暮らしていると言った。

「だから、怖がらないでね、若い犬さん」

「でも、やっぱりお化けは怖いです……」

「あらあら……。でも、私がここに現れた理由は、あなた達に伝えたい事があるからなの。

実は、島のみんなが急にキーラを崇め出して、逆らう子を排除したがるみたい。

私はモノに触れないから、あなた達に頼みたいの。お願いよ、島の人みんなを助けてね」

そう言うと、リンクリーはスピリッツボールの中に入っていった。

どうやら、このDKアイランドもキーラの影響を受けているようだ。

リンクリーがいなくなったため、しずえはようやく落ち着きを取り戻す。

「はあ、びつくりしました。島にはお化けもいたんですね」

「……ばあさんが応援してくれた。なら、やるっきやないだろ」

祖母の応援に勇気づけられたドンキー。

彼女のためにも、DKアイランドをキーラの支配から解放しなければならぬ。

「よし、いくぜ、みんなー！」

「はいー！」

ドンキーの鼓舞で、一行はDKアイランドの冒険をするのだった。

「ピヤッハーハー！！！」

「くっ、わたしを殺せるものなら殺してみなさい！」

アイシヤはクレムリン軍団の下っ端、クリッター相手に少し苦戦していた。

一方のクリッターは、見た事がない人間に興味津々だ。

「はあっー！」

アイシヤは包丁でクリッターを斬りつけて怯ませ、メイドキックでクリッターを追撃する。

威力は低いが、何度も攻撃していくうちにクリッターは弱まってきた。

「とどめですー！」

そして、アイシヤが包丁でクリッターを突き刺し、クリッターのスピリッツを解放した。

「……そういえば、キングクルールさんはどこにいたのでしょうか？」
消滅したキングクルールのボディがあったところを見て、アイシヤは呟く。

そういえば彼も新参者だったな……と思う。

「さあ、分からないな。でも、ここには多分いないと思うぜ」

「よし、いきましようー！」

「キーラ様、キーラ様……」

「じいさんー！」

次に立ち塞がるのは、ドンキーの祖父克蘭キー。

彼もキーラの光により彼女を崇拜しているようだ。

「キーラ様、見ていてください。ワシはこいつらをけちよんけちよんにしてやるぞー！」

克蘭キーが戦闘態勢を取り、ドンキー達を排除しようとする。
ジョーカーとシユルクは彼を止めるべく、武器を構えてドンキーの
前に立った。

「覚悟はいいか？」

「僕はできてるよ」

「……見えた」

シユルクは未来視を使って克蘭キーの行動を予測する。

「ジョーカー、克蘭キーはこっちに向かって突進してくるよ」

「そうか。スクンダー！」

ジョーカーは呪文を唱え、突進してくる克蘭キーの動きを鈍らせる。
る。

「バックスラッシュユ！」

シユルクはその隙に背後に斬りかかり、克蘭キーにダメージを与
えた。

ジョーカーは距離を置いて銃を撃ち、シユルクはシールドを張った
克蘭キーを投げ飛ばす。

「いい夢見ろよ」

隙ができた克蘭キーに、ジョーカーは針を撃ち込んで眠らせる。
「今、僕が助けるからね。モナドスマッシュユ！」

そしてシユルクがモナドの剣先で克蘭キーを貫き、彼を場外に
吹っ飛ばした。

ベルはボディから飛び出した克蘭キーのスピリッツにスピリツ
ツボールを向け、

彼の魂を吸い込んで回収した。

「回収完了！」

ベルは、スピリッツボールを閉じてそう言った。

「あんだ達の戦いを見ると、前世の事を少しだけ思い出すわ」

ジョーカーとシユルクを見たベルは、前世の記憶を懐かしんでい
た。

二人が？マークを浮かべると、ベルは「個人的な話よ」と言っ
てすぐに切り上げた。

その後、一行はどんどん先に進み、ジンガー、エンガード、ファンキーコング、

キャンディーコングのスピリッツを解放した。

「マスタースピリットなのに、ミーの扱いバッド！」

「私も同感よ」

「ごめんなさい、私達は先を急いでいるのよ」

そして、一行は捕まっているファイターの下に辿り着く事ができなかった。

そのファイターは、ドンキーの相棒、チンパンジーのディディーコングだった。

「ディディー、どうしたんだ！」

ドンキーはディディーに呼びかけるが、ディディーは全く反応しない。

「……どうやら、キーラの呪縛のせいでも聞こえないみたいだな」

「やっぱり、やるしかないのかよ！ やるしか！」

乱闘以外でディディーと戦うのを、ドンキーは避けていた。

だが、ここで戦わなければ、ディディーを助ける事はできない。

ドンキーは覚悟を決めて、光の鎖にジャイアントパンチを放った。

「……」

光の鎖から解放されたディディーは、真っ赤な瞳をドンキーに向ける。

「待ってるよ、今助けてやるからなー」

「僕も一緒に戦う！」

「やめろ」

カービィがドンキーと共に戦おうとするが、ドンキーは彼を制止する。

「こいつはオレの永遠の相棒だ。だから、オレ一人で戦わなきゃ意味がない！」

お前達はオレを信じてくれ！」

「……分かったよ」

カービィは、ドンキーとディディーの戦いから身を引き、彼らを仲

間と共に見守る事にした。

「いくぞ、デイディー！」

「ウオオオオオオオオオオオオオ!!」

今、ドンキーとデイディーの、一対一の戦いが始まろうとしていた。

「ヒカリノチカラヨ……」

デイディーはまず、光の力を使って自身の分身を7体召喚する。

本来はデイディーが使えない技だが、キーラに操られている間は一時的に使えるようだ。

「おらー！ おらー！ おらー！」

ドンキーはハンドスラップでデイディーの分身を5体一掃する。

その後、ドンキーはデイディーの分身に突っ込んで転がるが、分身はそれを回避する。

「……と、見せかけて、おりゃー！」

ドンキーはデイディーの分身が回避したところにボディブローをぶち込む。

デイディーはピーナッツ・ポップガンを撃つてドンキーを遠距離から攻撃する。

「こいつ、オレが飛び道具を持ってないのいい事に、遠距離から攻撃してきたな！」

「クククク……」

「デイディー、負けるんじゃないぞ。そしてキーラ、絶対に許さないからな」

不敵な笑みを浮かべるデイディーを睨むドンキー。

ドンキーは腕を振って分身を消し去った後、傍にあつた樽をデイディーに投げつける。

「イテテテテ……」

「よし、今だー！」

ドンキーは怯んだデイディーを掴み、リフティングで持ち上げる。「いいか、デイディー。大人しくしてるんだぞ」

「ハ、ハナセー！ ハナセエツ！」

暴れ回るデイディーを、ドンキーは必死で押さえ込む。

すぐにドンキーは走り出し、場外に向かって飛び降りる。

「ハナセエエエツ！」

そして、デイディーがドンキーを振り落とすと、ドンキーは急いで崖に掴まる。

その勢いで、ついにデイディーは場外に落ちた。

「……はあ、はあ、どうだ」

「……」

戦いに敗れたデイディーは気を失っている。

ドンキーは疲れながらも、デイディーを見下ろしていた。

「……ん、ここ、は……」

しばらくすると、デイディーがゆっくりと起き上がる。

その目は、澄んだ色に戻っていた。

「……オイラは、何をしてたんだ……」

「デイディー！ 元に戻ったんだな！ ああ、本当に良かったぜ」

「うん！ オイラは大丈夫だよ！」

「ああ、本当に、お前が無事で良かったぜ……！」

キーラに操られドンキーに牙を剥いたデイディー。

しかし、ドンキーが戦った事によりデイディーはドンキーの相棒という自分を取り戻した。

ドンキーの勝利に、スピリッツボールから克蘭キー、リンクリー、キャンディーのスピリッツが飛び出してくる。

『よくやったな、ドンキー』

『うふふ、私はドンキーちゃんに勝つ事を信じていたわ』

『ドンキー、見事な勝利、おめでとう！』

「じいさん、ばあさん、キャンディー……！」

祖父、祖母、ガールフレンドから祝福を受け、ドンキーは頭を掻き、顔を赤らめた。

スマブラメンバーも（一部を除いて）拍手した。

「えへへ……ありがと、ドンキー。オイラ、身体が動かなくて怖かったんだよ。」

でも、ドンキーの声が聞こえてきて、身体が動くようになって……

そっちの方に行ったら……ドンキーがいたんだよ。本当にありがとう、ドンキー……！」

「デイディー……オレはもうお前を、二度と離さないから……！」

ドンキーとデイディーは、涙を流しながらお互いに抱き合った。

こうして、離れ離れになった二頭は、ようやく再会を果たすのであった。

52 雲の上で

ドンキーコングとデイディーコングが再会し、仲間の数は順調に増えていった。

「次は……ここちに行けばいいわね」

ベルは誰かのスピリッツを感じし、西へ真っ直ぐに走っていく。

一行が西に行くと、土管があった。

「みんな、ここの土管を通って。仲間はこの先にいるわ」

「よし、待っててね！」

全員が土管の中に入ると、桜色の雲がかかった場所に辿り着いた。

この雲には魔力があるのか、クッパのような重量級が乗っても消える事はない。

「わーい、ふかふかしていい気持ちいいー！」

「ほんとでしゅー！」

カービィとプリンが桜色の雲でトランプリンのように跳ねている。

「はしやぐのはいいけど、まずは仲間を探すのが先」

「あ、そうだったね」

カービィとプリンは跳ねるのをやめて、すぐにサムス達の傍に行った。

辺りは雲で覆われており、何も見えないが、マムーのスピリッツは浮いていた。

サムスがマムーを解放すると雲が晴れ、隠れていたファイターが姿を現した。

赤い野球帽とバットがトレードマークの少年——最古参メンバーの一人、ネスだ。

彼の傍には、操られたフライングマンがいる。

「ネス君……！」

リユカは、親友のネスがこんな姿になった事にショックを受ける。しかし、ここで動かなければ、ネスを助ける事はできない。

「第一次亜空軍異変で、ボクはネス君に助けられた。でも、今度はボクが、助ける番だよ！」

リユカはぼうつきれをネスに振り下ろし、ネスを縛っていた光の鎖を打ち砕く。

すると、ネスは赤い瞳を光らせてバットを振り回し、リユカに襲いかかった。

「……コロス」

「リユカは私達が守るわ」

「ああ……やられたらまずいからな」

「ネス、必ず僕達が助けるからね」

「ワルイユメハ、ワタシタチガサマシマス」

「大丈夫ですわ、ちよつとだけ待つてください」

サムス、ピカチュウ、りょう、アイシャ、ウオツチは、リユカを守るように前に立つ。

リユカは勇気を振り絞り、彼らと共にネスを助けるために、戦った。

「……ディフェンスアップ」

ネスはPSIで障壁を張り自身の防御力を上げる。

りょうはネスに向けてパチンコを飛ばすも、ネスが張った障壁に阻まれる。

「イケ」

「うわあああ！」

ネスの指示でライニングマンがりょうに向けて体当たりしてきた。りょうはシールドを張ろうとするが、PKファイアーで妨害され、そのままライニングマンに吹っ飛ばされた。

「リョウサン！」

「余所見するな！」

「今はこつちに集中するのよ」

ウオツチがりょうの吹っ飛んだ方を思わず見る。

ピカチュウはネスに突っ込んで10まんボルトで攻撃し、サムスはネスにミサイルを放つ。

「PKフリーズ」

「当たりません！」

ネスはアイシャを凍らせようとするが、アイシャは緊急回避で彼の

PSIをかわす。

ウオッチは相手の出方を伺いながら攻撃する。

リュカはPKフリーズでネスを凍らせ、アイシャはその隙に包丁でネスを斬りつけた。

「落ちなさい」

サムスはネスを浮かせて蹴り飛ばす。

ネスは空中で体勢を整え、アイシャにPKファイアーを放った。

「いやあああつー！」

アイシャはあまりの熱さに悶えるが、何とか気合で耐え切る。

「負けるものですか……！ 行きますわよ、ピカチュウさん！」

「ああー！」

ピカチュウはアイシャの包丁に雷を纏わせ、雷の包丁がネスを切り裂く。

その衝撃でネスが怯んだため、リュカは急いでネスに突っ込む。

「ネス君……元……戻ってえええええ!!」

リュカは、最大まで溜めたぼうつきれを振り下ろし、

傍にいたライングマンとネスを一撃で場外に吹っ飛ばした。

この瞬間、彼らの勝利が決まるのであった。

「……う……う……う……」

「大丈夫？ ネス君……」

リュカは意識を失ったネスにゆっくりと近づいて呼びかける。

「……その声は……リュカ……？」

「そうだよ。ボクだよ、ネス君。ボクが見える？」

「うん……見えるよ……」

「よかった……！」

ネスは瞬きした後、リュカの顔を真っ直ぐ見た。

彼がリュカに気付いてくれて、リュカは安堵の笑みを浮かべる。

「ああ、ネス君が無事で、本当によかった。キミがいなくなって、不安だったんだよ。

でも、生きてたんだね」

「当たり前さー！ 君が助けに来るって信じていたんだよ」

たとえキーラに捕まっても、親友を信じる心は折れなかった。

それは、リユカにとつても、他のみんなにとつても嬉しかった。

「ネスもリユカも、嬉しかったんだね。ちよつと泣いちゃうよ」

「あいつらは固い絆で結ばれているからな」

「そしてその絆は、キーラにも破れないのよ。二人ともよく頑張ったわね」

カービィ、シャドウ、ベルは、二人の固い絆を見て少しだけ感動するのだった。

「さて、これからどうしようかな。シャド兄に連れてつてもらおうかな？」

カービィが一步步き出すと、突然、

スピリッツボールの中からホウオウのスピリッツが飛び出してきた。

「ホウオウじゃない。どうしたの？」

ベルがホウオウに呼びかけると、ホウオウは上空に向かって飛び立った。

すると、不思議な事に（？）ホウオウの通った道が虹に変わった。

空に長く美しい虹がかかると、ホウオウはスピリッツボールの中に戻った。

「ありがとう、ホウオウ〜！」

カービィが空に向かって手を振ると、一瞬だけ空が光ったような気がした。

にじいろポケモンの手助けにより、一行はさらに空に上がる事ができた。

空にはたくさんさんの孤島が浮かんでおり、大きな星や滝、さらには船も浮かんでいた。

「うわあ〜！ 綺麗〜！」

「ホントだね！ とつても高いネ！」

「……こんなに高いところに来るのは初めてだ」

カービィとパックマンは素直に喜ぶが、マックは険しい表情をしていた。

「とりあえず、まずはスピリッツを解放しましょう」

「ああー」

一行はキーラに操られたスピリッツを解放するために歩き出した。イカロス、オデッセイ号、ペガサス三姉妹、リーバル、スーパースター、チャオ、チキ、

マロ、ビツクリ大好き精霊、そしてヒュードラー。

空中のスピリッツは、その全てが「空」と関係あるものだった。

「これで全部？」

一行は、空に浮かんでいるスピリッツを全て解放した。

これでおしまい……というわけがなく、ベルは浮いている星をじつと見ていた。

「まだ残っているわよ」

「あの星？」

「そうよ。あそこにファイターの気配を感じるわ。……みんな、行ってみましょう」

「うん」

ベル達が星に飛び込むと、そこはある試合の会場だった。

たくさんの食べ物と、奥にある表彰台。

その会場は、カービイには見覚えがあった。

「もしかして、グルメレース!?!」

そう……ここはグルメレースの会場だったのだ。

入り口には「最高記録 10個」と書かれてある。

これを上回る記録になれば何か良い事があるとか。

「はい！ グルメレース、僕が参加する！」

そう言っ手て手を挙げたのは、もちろんカービイ。

ランスは頷いて、カービイを信じている。

「大丈夫なの？」

「うん！ 僕、デデデに一つも食べ物を与えないで勝った事があるんだよー！」

「ええええええええええ!! それは凄い！」

そこまでに相当な努力をしたけどね……とカービイは呟いた。

とにかく、グルメレースにはカービイが挑む事になった。

「よーし、いくぞー！」

カービイは上の方に進んで梨を食べ、橋を渡って右に曲がり紅茶を飲む。

すぐに左に曲がってコーラを飲み、その後にホットドッグを食べる。

カービイは左に曲がった後にコーンスープを飲み、最初の道を右に曲がってサラダを食べた。

「ケーキがあるけど我慢、我慢」

カービイは美味しそうなケーキを見るが、珍しくそれを我慢して食パンを食べ、

すぐ右に曲がって林檎を食べる。

その後に焼き鳥と七面鳥と鶏肉を連続で食べ、最後に葡萄を食べてゴールした。

ーパンパカパーン！

『おめでとうございませう、優勝しました！』

「やったあー！」

ファンファアールと共に、紙吹雪がカービイを包む。

どうやら、カービイはグルメレースに優勝したようだ。

『それでは、チャンピオンであるあなたには、この方と戦っていただきます！』

アナウンスと同時に表彰台の前に現れたのは、台座に縛られたデデデだった。

「大王様!!」

主との再会に、ランスはとても驚いた。

「ウウウウウ……ミナゴロシ……ミナゴロシダゾイ……」

「デデデ、目を覚まして！」

「大王様！ ボクの声が聞こえますか!？」

カービイとランスはデデデに呼びかけるが、もちろん彼は全く反応しない。

「どうしよう……」

「何を怯えている。こうすればいいのだろうか？」

ストームはそう言うのとデデデ目掛けて矢を放った。すると、光の鎖は砕け散り、デデデはいきなりカービィにハンマーを振り下ろした。

「……ランス」

「大王様が牙を剥くなんて、ボクには信じられない。でも、戦わなきゃいけないんだよね……？」

カービィはデデデの攻撃をかわし、構える。

敵に操られたデデデと何度も戦ったため、カービィに迷いはなかった。

ランスも迷いながら槍を取り、ストーム、ドクター、ロックマン、パクションフラワーも戦闘体勢を取る。

「いくよ、デデデー！」

「ウオオオオオオオオオ!!」

そして、カービィとデデデがハンマーを同時に振り下ろし、戦いが始まった。

「ボクの目を見てください！」

ランスはデデデに槍を振るが、デデデは上手く緊急回避でかわす。

ロックマンはデデデを掴んで投げ飛ばし、パクションフラワーは首を伸ばして追撃する。

「僕達が助けるからー！」

「大人しくしろよ」

ストームはやぎりのスラッシュで素早く切り、

カービィは上空からストーンを使ってデデデを押し潰した。

「グググ……コウシテヤルゾー！」

「ガブツ!？」

デデデはジェットハンマーを勢いよくため、

思い切りぶちかましてパクションフラワーを戦闘不能にした。

「ツギハダレダ……」

操られたデデデは、ゆっくりとランスに近づく。

ランスは怯えてカービィの後ろに隠れる。

「大王様は、ボクの事が分からないんですか？　ボクですよ、ランスですよー！」

ランスはデデデに何度も呼びかける。

それでも、デデデは反応せず、ランス目掛けてハンマーを振り下ろした。

「……」

しかし、そのハンマーがランスに当たる事はなかった。

何故なら、ストームがデデデに矢を放ち、彼の動きを一瞬だけ止めたからだ。

「ありがとう、ストーム！」

「……別に」

ランスの感謝に、素っ気ない態度を取るストーム。

デデデが力を溜めて次の攻撃に備えている中、ドクターはパクションフラワーを治療する。

「ガブガブガブ！」

「？　？　？」

復活したパクションフラワーは、デデデにフェイントをかけ混乱させる。

その隙にストームとカービィは一斉に攻撃し、デデデの体力を減らしていく。

「ウオオオオオオ！」

デデデは渾身の力を込めたハンマーをロックマンに振り下ろす。

この一撃は避けられないと感じたロックマンは、シールドを張って攻撃を防ごうとする。

しかし、その強烈な一撃にシールドが耐え切れず、シールドブレイクしてしまう。

「ふらふらする……」

「でも、チャンスはできた！　隙ありだよ！」

「グアアアアアアアアアア!!」

そう言って、ランスは槍をくるくると回し、デデデに勢いよく突き刺す。

槍はデデデの急所を突き、大ダメージを与える。

「今だよ、カービー！」

「うん！　これで、終わりだ！　鬼殺し……火炎ハンマアアアアアア!!」

カービーは炎を纏ったハンマーを振り回す。

その一撃がデデデに命中すると、デデデは場外に吹っ飛んでいった。

「大王様、勝ちましたよ……！」

ランスは空を見ながら、笑顔でそう呟いた。

53 拳を磨く男達

キーラに操られたデデデ大王は、カービィ、ランス、ストームとその仲間により解放された。

「ワシとした事が、またもや操られるとは……まったく、面目ないゾイ」

「何度もあつたんでしょ？ 気にしないで」

「お前がよくてもワシは全然よくないゾイ！」

デデデはカービィの悪意なき発言に怒っている。

「あはは、ごめんねデデデ。でも、これで仲間はみんな見つかったよね？」

「いいえ」

ベルは首を横に振った。

キーラを倒すには、まだ戦力が不十分なのだ。

「うーん、まだまだ仲間が残っているのかな？」

「ええ。でも、この光の世界に残っている仲間は後二人よ」

「後二人!? やったあああ！」

この世界に残された仲間が後二人と聞いて、カービィは歓声を上げる。

他のメンバーも、一部を除いて喜んだ。

「その仲間がどこにいるかは、自分の足で何とかしましょう。」

「というか、まずはここを出てからね」

「はい」

一行はシャドウのカオスコントロールで空を後にして、再び地上に戻った。

高いところがあまり好きではないマックは、ふう、と一安心する。

「それで、これからどうすればいい」

「とりあえず、地上は粗方探索し終えたし……海を渡りましょう」

「よし、僕に任せて。ベル、スピリッツボールを開けて」

「分かったわ」

「かっぺい、出てきて！」

りようが叫ぶと同時に、スピリッツボールの中からかつぺいが飛び出してきた。

乗る順番と人数は、アローラ島でラプラスに乗った時と同じなので省略する。

かつぺいはボートを運転しながら、一行を目的地へと運んでいく。道中では魚やマーメイドのスピリッツがいて、それらをキーラの魔の手から解放しながら進む。

それ以外に障害はなく、一行は無事に目的地に到着した。

「ち、地球!？」

一行が着いた場所は、なんと地球そっくりだった。

ユーラシア大陸やアフリカ大陸などの大陸が多くあり、島もたくさんある。

今、自分達が立っている場所は、中国大陸だ。

そして中国大陸には、青いチャイナドレスとシニヨンが特徴的な女性が立っていた。

皆が困惑する中、女性は笑顔でこの世界について説明した。

「ここはワールドツアーという小世界よ。」

この小世界で七人の強者達と勝ち抜き戦をして、七連勝すれば決勝に進出できるの。

この試合に参加できるのは一人だけ。

そして最初の相手は私、チュンリー春麗。さあ、誰が相手かしら?」

「……俺だ」

「おい、ルカリオ……」

立候補したのは、ポケモンの中でも格闘に秀でたルカリオだった。ピカチュウは、ルカリオの一人称がいつもと違う事に違和感を抱く。

「なんで『俺』って言ってるんだ?」

「武闘家として使っている言葉だからだ。勇者としては『私』、武闘家としては『俺』。」

今はこのワールドツアーで戦う身だからな」

「……ああ、分かったぜ。頼むぞ、ルカリオ」

「来い！」

「望むところよ！」

ルカリオが波導を纏った拳を春麗に振るい、春麗はすらりと伸びた脚でルカリオを蹴る。

二人は距離を取った後、渾身の一撃を放つ。

「お前、なかなかの美脚だな」

「あなたもいい腕をしているわ」

「だが、勝つのは俺だ！ はっけい！」

ルカリオは掌を突き出し、高密度の波導を発して春麗を打ち据える。

その一撃は強く、春麗はそれにより倒れた。

「よく頑張ったわね。一回戦突破よ！」

「ああ、ありがとう」

ルカリオと春麗は、互いの健闘を称えて握手した。

この大会が「スポーツ」である事の証明である。

「それじゃ、この飛行機に乗ってね」

「ああ」

ルカリオ達が飛行機に乗ると、あっという間に南米のブラジルに辿り着いた。

ブラジルで待っていたのは、ドンキーコングのボディに宿るブランカだった。

ルカリオは二回戦の相手であるブランカを瞬時に撃破した後、

飛行機に乗ってロシアに到着した。

三回戦の相手は、真っ赤なパンツが特徴的なレスラー、ザンギエフだ。

「オレが相手だ！」

「……相手のボディはガオガエンか。俺には不利だが……逃げるわけにもいかないな。いくぞ！」

ルカリオとザンギエフは互いに構えを取った。

「よく頑張ったな！ 三回戦突破だ！」

「ありがとう」

ルカリオとザンギエフは互いに握手した後、別れを告げて次の場所に向かった。

飛行機に乗って着いた目的地は、超大国アメリカ。

そこには、シャドルー幹部の一人、マイク・バイソンがいた。

「Don't Stop Me!」

「立ち止まるな、という事か。相手に不足はない!」

ルカリオとマイク・バイソンの戦いが始まる。

「はっ!」

最初に攻撃を仕掛けたのは、ルカリオ。

驚異的な速度による一撃——しんそくは、

攻撃しようとしたバイソンに大きなダメージを与えた。

ルカリオは常に先制を取り、攻撃を受けながらも相手の体力を削る。

その後、ルカリオ優位なまま、マイク・バイソンとの戦いは終わった。

「流石は波導の勇者……いや、今は武闘家だったかしら。やるじゃない!」

「ルカ兄、すごい!」

ベルはルカリオの活躍を見て笑顔になる。

カービイも、ぱちぱちと拍手していた。

「ここにも仲間が囚われているのだろうか? 救出のために俺は戦っているに過ぎない」

ルカリオは相変わらず冷静だった。

そしてマイク・バイソンを撃破した後、一行は飛行機に乗ってスペインに辿り着く。

五回戦の相手は、仮面の戦士バルログ。

メタナイトのボディに宿っている彼は、爪の代わりに剣でルカリオと戦った。

「こいつ、速いな」

「我が美に酔いしれるがいい……」

ルカリオはバルログの速さに苦戦する。

しかし、ここで負けてしまつては、キーラに操られた仲間を助ける事ができない。

ルカリオは相手の隙を伺いながら、波導の力でバルログを攻撃していった。

「インフアイト!!」

「ぬおおおおおつ!!」

そして、ルカリオのインフアイトがバルログに炸裂し、彼は戦闘不能になった。

「……五回戦突破だ。だが、次の相手は私よりも強いぞ……。心してかかるがいい……」

「……無論」

バルログに勝利したルカリオは、仲間と共に飛行機に乗り、タイに到着。

六回戦の相手は、帝王サガットだった。

「ここまで辿り着いたという事は、かなりの強者という事か」

「お前は……」

「サガットだ。お前に勇気があるなら、見せてみる。退かぬ、媚びぬ、省みぬ。」

帝王に逃走はないのだ」

そう言つて、サガットは静かに構えを取る。

ルカリオは彼の波導を感知するが、バルログよりも遥かに強い波導だった。

「……来るがいい!!」

「バレットパンチ!」

ルカリオはまず、バレットパンチで先制攻撃する。

サガットはルカリオを蹴ろうとするが、ルカリオは上手く彼の攻撃を防御する。

「はどうだん!」

「タイガーショット!」

ルカリオとサガットは互いに距離を取り、気弾を放つて攻撃する。

「タイガーアツパーカット!」

「見切った！」

ルカリオはサガットの対空技を見切ってかわし、サガットに近付いて投げ飛ばす。

そして、ルカリオがインファイトを放つと、サガットは倒された。

「流石だ。帝王に勝利したか」

サガットはルカリオの肩に手を置く。

彼は試合に敗れたのだが、ルカリオの強さを認めてくれたのだ。

今までのキーラに操られたスピリッツとは、全く異なっていた。

これは戦いではあるが、スポーツでもあるのだ。

サガットがスピリッツボールの中に入った後、ルカリオは次の対戦相手を待つ。

「……さあ、次の相手は誰だ!?!」

ルカリオが構えを取ると、突然、ワールドツアーを眩い光が包み込む。

そして光が治まると、ルカリオの目の前には、

倒れているマントを纏った赤い服の男と、

男を倒したと思われる赤い鉢巻を巻いた白い道着の男がいた。

「……」

「お、お前は、^{リュウ}隆!?!」

ルカリオが驚いていると、ガノンドロフのボディから

ベガのスピリッツが抜け出てスピリッツボールの中に入る。

その後、ベガのスピリッツと入れ替わりで春麗のスピリッツが飛び出してきた。

「七回戦を飛ばして決勝戦に突入したみたいね。決勝戦の相手は、不
断の探求者、リュウよ!」

春麗がそう言うと、ガノンドロフのボディは消滅。

キーラに操られたリュウは、ゆっくりと構える。

「お前もキーラに操られているのか……。だが、俺は必ず、この大会で
優勝する。」

俺の精神力と不屈の心は、決して消えはしない!」

「……」

ルカリオとリュウが互いに拳を振るう事で、ワールドツアー決勝戦が始まった。

「たんだー！」

ルカリオはリュウを掴み、波導の力で前方に押し出す。

続いてはつけいでリュウを吹っ飛ばし、距離を取り、はどうだんを放つ。

リュウは防御を固めて攻撃を防ぎ、波動拳で反撃、蹴りを放ってルカリオを攻撃する。

「はとうげきー！」

ルカリオは波導を纏った拳を力強く放つが、リュウはジャンプでかわし、三連続でパンチする。

それでもルカリオは攻撃を続け、リュウに反撃の隙を与えない。

そしてリュウが場外に飛んだ隙にルカリオも場外に飛び、

リュウを蹴った後、しんそくで復帰する。

リュウは竜巻旋風脚と昇竜拳で復帰しようとするが、

かなりの距離があったようで復帰できず、そのまま場外に落下した。

「終わった、か」

ワールドツアーは、ルカリオの優勝で幕を閉じた。

キーラの呪縛から解放されたリュウは、ゆっくりと目を開ける。

彼の目に最初に入ったのは、ルカリオの顔だった。

「……………は……………？」

「大丈夫か、リュウ。…………いや、俺ももう疲れてしまった。話は外に出てからにしよう」

「そうね。じゃあ、戻りましょう」

「ああ……………」

一行がワールドツアーを後にする中、外ではキーラが怒りに震えていた。

「おのれ、おのれおのれおのれ……………！ 我が駒をこうも容易く解放するとは……………！」

スマッシュブラザーズめ、絶対に許さんぞ……………！ 必ずや討ち取つ

て見せる……！」

54 く スペース・トラベル

ワールドツアーで優勝し、リユウをキーラから取り戻したルカリオは、

彼を安全な場所で休ませた。

「もう大丈夫だ、お前の身体はキーラに利用される事はない」

「助けてくれてありがとう、ルカリオ」

リユウは助けてくれたルカリオにお礼を言った。

ルカリオとリユウは互いに握手をし、断ち切られた友情が再び結ばれた。

「よかったな、二人とも」

「やったね！」

この光景に、カービィとフォックスは喜んだ。

これで、光の世界に残った仲間は、あと一人。

果たして、それは一体誰なのか。

一行はかつぺいが漕ぐボートに乗って、ワールドツアーがあつた川を後にした。

「うーん、最後は一体誰が捕まっているのかしら」

「さあ、分かりませんわ……。ここを一通り探索しましたが、まだいるという事は……」

光の世界で最後に見つかる仲間は、地上にも空にも、海にもいない。

という事は……とアイシャが感づいた瞬間、白い右手袋がアイシャに飛びかかった。

「きゃーーーーーっ!!」

「アイシャ!？」

突然の襲撃に、アイシャは戸惑ってしまう。

手袋はアイシャを掴むと、そのまま冰山を越え、空の彼方へと飛び去ってしまった。

その手袋は、皆、見覚えのあるものだった。

「マスターハンド……!!」

それは、キーラに率いられて襲ってきた、マスターハンドだった。

「どうしてここに来たのかしら……」

「でも、アイシヤが……」

唾然とするベルだが、仲間の一人がさらわれた事実に変わりはない。

マスターハンドとアイシヤが飛んだ方向は、氷山を越えた先にある空の彼方だ。

またボディをキーラに利用されては、もうこちらに勝ち目はない。

「追いかけるぞ。氷山は遠いが、頑張れば追いつく」

「氷山なら僕達に任せて！」

「はぐれないですよ！」

「うん！」

一行はルカリオとアイスクライマーを先頭に、氷山に向かって走り出した。

道は遠かったが、二人と一匹のおかげで今までよりは楽に攻略できた。

そして、空へ行くための道に辿り着いたが、メタルギアRAYが道を塞いでいた。

「そこをどけ」

「波動拳！」

スネークとリュウが協力してメタルギアRAYを撃破すると、目の前に宇宙船が見えた。

これを運転すれば、アイシヤがさらわれた場所へ行く事ができる。

「ねえ、これ、誰が運転するの？」

「僕が運転しよう」

「シヤド兄、できるの？」

「宇宙生物にも乗った事があるからな。いいか、振り落とされるな」

シヤドウはそう言って、宇宙船に乗り込み、ハンドルを取って運転した。

そして、宇宙船は宇宙の彼方へと飛んでいった。

「うわあ〜！ 綺麗な星〜！」

「ああ……たくさんの惑星が見えるな……」

カービイは宇宙船の窓から星をたくさん見ていた。
宇宙に行った事があるフォックスやカービイは、目を輝かせて外を
見ている。

一方で、シャドウは真剣な表情で宇宙船を運転していた。
すると、北の方に生命反応を発見した。

「ファイターの気配がいる……。こっちだ」
「うん」

シャドウは北に向かって宇宙船を運転する。
すると、台座に縛られた青い雉と、彼を取り巻くように星船マリオ
とアパロイドが見えた。

青い雉は、フォックスには見覚えがあった。

「ファルコ!!」

そう、彼こそがスターフォックスのエースパイロット、ファルコ・
ランバルディなのだ。

フォックスはファルコを助ける事ができず、悔しくて歯を食いしば
る。

「くそっ……俺にもっと力があれば……!」

「そんなに自分を責めるな、フォックス。オレも一度捕まった身なん
だ。

だから、自分の手で助け出せばいい!」

マックは落ち込むフォックスを叱責する。

「ああ、そうだよな……。いつまでもじめじめしていちやダメだよな。

よし、ファルコ! 今、助けてやるからな!」

フォックスはブラスターを取り出すと、ファルコを縛っている光の
鎖を撃ち抜いた。

すると、ファルコは赤い瞳を光らせてフォックスに襲い掛かってき
た。

「コロシテヤルゼ」

「来るぞ!」

フォックス、ネス、リュカ、マック、マール、ジユカインは、
ファルコとスピリッツを解放するべく、戦いに挑んだ。

「はっ！」

フォックスは空を飛んでいる星船マリオに蹴りを放つ。攻撃はギリギリで命中し、星船マリオは地面に落ちる。

「PKファイアー！」

ネスは星船マリオをPKファイアーで燃やし、反撃の隙を与えない。

「お願い、目を覚まして！」

マールはファルコにわかばシューターを撃つが、ファルコは緊急回避でかわす。

リユカは、ファルコがかわした方にPKフリーズを放ち、一時的に凍らせた。

「いあいぎり！」

「くそっ、かわされたか！」

アパロイドはジュカインのいあいぎりとマツクの正拳突きをギリギリでかわし、

ジュカインに反撃しようとしたが、フォックスが庇い代わりにダメージを受けた。

「ファルコ……。仲間と戦うのは苦しいか？ 苦しいなら、今すぐ武器を納めるんだ」

「コロシテヤルゼ」

フォックスはファルコが仲間思いである事を知っており、彼を説得しようとする。

しかし光の呪縛を受けたファルコは聞く耳を持たず、フォックスに襲いかかった。

「やめろ！」

「……」

フォックスはファルコの空中からの攻撃を諸に受ける。

ジュカインは思わず叫びそうになるが、理性でそれを抑える。

「えい！」

「PKフラッシュ！」

「やあ！」

マールはアパロイドをわかばシューターで撃ち、
ネスがファルコをPKフラッシュで怯ませた後にリュカがぼうっ
きれを振り下ろした。

「ぐおっ！」

「エナジーボール！」

アパロイドはマックに光線を放ち、ジユカインはアパロイドをエナ
ジーボールで攻撃する。

フォックスとファルコは互いに体術をぶつけ合う。

ネスと星船マリオの攻撃はどちらも当たらず、マールはスプラ
シューターでファルコを撃った。

「ライフアップ！」

ネスはフォックスを治癒するが、思うように回復はしなかった。

「ごめんね、フォックス」

「気にするな」

「タネマシンガン！」

ジユカインは口から種を吐いてアパロイドを撃ち、

星船マリオはリュカ、マックとアパロイドは互いを攻撃する。

「シールド！」

リュカは光の壁を作り出し、全員を覆った。

ファルコは翼でネスを斬りつけるが、光の壁がそれを阻んだ。

「PKファイアー！」

リュカがアパロイドをPKファイアーで燃やすと、アパロイドは戦
闘不能になった。

「おらっ！」

ファルコはマックのストレートをジャンプでかわし、空中からの
ファイアバードで反撃する。

マールはインクを回復した後、スプラッシュボムをファルコに投げ
る。

爆発で怯んだ隙に、フォックスはファルコに回し蹴りを放つ。

「リーフブレード！」

ジユカインのリーフブレードが星船マリオを一閃し、残るはファル

コのみとなった。

「今だぜ、フォックス！」

「ああ！」

フォックスは頷くと、ファイアフォックスでファルコに突っ込んでいき、

すぐに彼に組みついて動きを止める。

「ファルコ、今、悪い夢から覚ましてやるからな！ うおお!!」

力を溜めるフォックスを見たファルコは逃げようとするが、

マールとジユカインの射撃で阻まれる。

「邪魔しないで」

「援護はオレ達がする！」

「ありがとう、マール、ジユカイン。……元に戻れ、ファルコ!!」

「グオオオオオオオオオオオオ!!」

そして、フォックスの光り輝く拳がファルコの偽りの光を打ち砕くと、

眩い光が戦場を包み込んだ。

光が治まると、ファルコがフォックスの前で倒れていた。

フォックスはファルコをゆっくりと起こすと、宇宙船の中に運んだ。

「……目覚めてくれよ、ファルコ」

「死んじゃ、やだよ」

「ちやんと、目を開けてね」

フォックスは、気絶したファルコを見守っていた。

ネスとリユカも、ファルコを信じ見守った。

「……んっ」

数分後、ファルコはゆっくりと目を開けた。

その瞳の色は、元の緑色に戻っていた。

意識を取り戻したファルコを見て、三人はぱあっと顔を明るくする。

「ファルコ！ 元に戻ったのか！」

「よかったあ……！」

「つたりめえだろ、俺がこんなところでくたばるわけがねえ」

ファルコはいつも通りの乱暴な口調で笑った。

その表情に、黒い部分は全くなかった。

普段のファルコだと確信したフォックスは笑みを浮かべる。

「でもよ、お前らはどうしてここに来たんだ？」

「俺達は光の世界でキーラに操られた仲間を探していたんだ。

まさか、お前が最後の一人だったとはな」

フォックスは手短かにファルコに情報を伝えた。

「なるほどな。じゃあ、今すぐにキーラに挑めるだろ？」

「……」

ファルコが微笑むが、フォックスは首を横に振る。

「ん？ どうした、フォックス？ 元氣ないぞ？」

「それが……仲間の一人がマスターハンドにさらわれてしまったんだ

……」

「何!? あの右手袋が仲間をさらうだと？ 今日は雨でも降るのか

……？」

仲間がマスターハンドにさらわれた、という情報を聞いてファルコ

は驚く。

ファルコは信じられないといった表情をしたが、確かに仲間——ア

イシャの姿はない。

「その人はアイシャ・クルースニクって言って、マスターハンドのメイ

ドなの。

「主が従者を裏切るなんて」

「あり得ないな。でも、なんでだ……？」

「とにかく、アイシャを探しに行くぞ。光の世界の攻略はもうすぐ終

わる」

「必ず、アイシャは連れ戻すわよ」

「ああ……！」

仲間思いのファルコは、すつくと立ち上がった。

今ここに、光の世界に散らばった仲間は、全て救出されたのだった

……一人除いて。

「しゅっしゅ」

シャドウが運転する宇宙船はファルコがいた橙色の惑星から南に行き、灼熱の惑星に辿り着く。

その惑星にはトレースのスピリッツがいて、サムスとシモンが協力して解放した。

次に、東の桃色の惑星に行つてジョディ・サマーのスピリッツを解放し、

ロックマンとリンクがギャラクシーマンのスピリッツを解放した。

「いよいよか……」

そして、ついに光の階段が見えてきた。

この先に、この世界の全てを奪ったキーラが待ち受けている。

しかし、光の階段に行くための道は、ウルフェンのスピリッツが塞いでいた。

フォックスとファルコは頷くと、ブラスターを構えてウルフェンに戦いを挑んだ。

「かかってこい!!」

「……ふう」

「やったぜ」

フォックスとファルコは、ウルフェンのスピリッツを解放し、

ついに光の階段に繋がる道を開けた。

桃色の空には、光の化身キーラとマスターハンド、

そして光に包まれたアイシャが宙に浮いている。

マリオ、カービィ、シャドウ、ベル、アルトリア、

柊蓮司はその異様な光景にごくりと唾を呑んだ。

一行はゆっくり、ゆっくりと、光の階段を登る。

そして、マリオ、カービィ、シャドウ、アルトリア、柊蓮司、

ベルの順番に辿り着いたところで、キーラは六人にテレパシーで語り掛けた。

「……まさか我の駒を全て解放するとはな」

キーラは、光の世界に散らばった仲間を全て救出した事に驚く。

「僕達はみんなを助けるためにここまで来たんだ」

「アイシヤを返して倒されると、倒されてアイシヤを返すのと、どちらか選びなさい」

「月並みで悪いが、どちらも断ると言ったら?」

「じゃあ、私が決めるわよ」

ベルは虚空から大鎌を取り出し、構える。

マリオ、カービー、シャドウ、アルトリア、柊蓮司は、彼女のただならぬ様子に緊張する。

キーラはそんな六人を嘲笑うかのように言う。

「新たな創世を受け入れればいいものを……貴様らにはつくづく呆れたよ」

「受け入れるわけねえだろ! 俺達は、お前から世界を救うために戦っているんだ!」

「貴様が奪ったものは、全て返してもらおう」

柊蓮司は強い意志で、キーラに向かって叫ぶ。

アルトリアもアイシヤを連れ戻すという目でキーラを真っ直ぐに見据えた。

「マスターハンドもこの女も、既に我が手中にある。……それでも、返してほしいのだな?」

「いいだろう……我に勝てたらな」

「アイシヤ!?!」

「マスター!?!」

キーラの身体が眩く光ると、アイシヤを包んでいた光が消える。

そして、アイシヤは虚ろな表情で包丁を構え、無言でカービーに斬りかかってきた。

「うわっ!!」

カービーは何とか攻撃を防ぐが、続けてマスターハンドが襲い掛かる。

「アイシヤ! どうしたんだよ!!」

「待て……アイシヤは、キーラの光の呪縛で操られているようだ」

「ぐっ……! 卑怯だ……卑怯だ、キーラ!」

「仲間同士で戦う……いい光景だろう?」

キーラはどこまでも六人を嘲笑っている。

生物の身体を奪い、スピリットに変え、

さらにはファイター達を母体を生み出す道具に変えた光の化身キーラ。

彼女が行ったあまりにも非道な行為に、ついに六人の怒りは爆発した。

「僕の体と心が叫んでいる。——貴様を滅ぼせ、と」

「ここままでめえが外道だと、逆にすつきりするぜ」

「……このような者を見るのは久しいですね……」

「これ以上、あなたの好きにはさせないわ。私は死神、世界の秩序を守る者なのよー!」

「俺達は絶対にお前を許さない。全てを奪ったお前を、全てを支配しようとしたお前を!」

「僕達はスピリッツになったみんなや、助けたみんなの思いを背負っているんだ。」

「だから、僕達は絶対に、勝つ!!」

そして、カービーが強く叫ぶと、

六人は一斉にキーラ、マスターハンド、アイシャに突っ込んだ。

今、光の化身との決戦が始まろうとしていた。

55 光の化身キーラ

キーラと、彼女に操られたマスターハンド、そしてアイシャとの決戦が、始まった。

「まずは守りを固めるわよ！」

ベルは闇の魔力を展開し、六人の防御能力を高める。

キーラの攻撃は強烈なので、それを防ごうとベルは判断した。

「はあっ！」

「効かん」

終蓮司は魔剣をキーラに振るが、キーラは光の壁で彼の攻撃を防ぐ。

アルトリアは、相手の出方を伺っている。

「うああああああ!!」

アイシャは終蓮司に包丁を振り回す。

やたらめったら振ったためか終蓮司に掠って傷を負わせる。

「つつー……」

「おらっ！」

マリオはキーラにハンマーを鋭く振り下ろす。

「アイシャ、元に戻ってよ！」

「うああああああああ!!」

アイシャはカービィの投げをかわし、包丁で反撃する。

「受けてみよ」

「くっ！」

キーラはシャドウに光の球を無数に飛ばす。

シャドウは何とか抵抗したが、ダメージはかなり大きかった。

「はあっ！」

「カオススピア！」

アルトリアはキーラを不可視の剣で斬りつけるが、なかなかダメージを与えられない。

シャドウは光の矢をマスターハンドに放ち、牽制した後にサブマシンガンで撃ちまくる。

「眩しいか？」

「ああ、でも嫌な眩しさだぜ……！」

キーラは柊蓮司の攻撃をかわし、あの光のレーザーで反撃する。あの時より威力は低かったが、カービィ達を軽く混乱させた。

「せいっ！」

ベルはキーラの隙を突き、素早く飛び掛かって大鎌を振り降ろす。カービィは光の球を吸い込んでマスターハンドに吐き出す。

「当たらないわよー！」

「ふっ！ はっ！ 食らえ！」

「ド・オヴァ・デ・シー！」

キーラは光のレーザーでベルに反撃するが、ベルは緊急回避で攻撃をかわす。

シャドウは拳銃を三連射してマスターハンドを撃ち、

ベルはシャドウの傷を魔法で癒した。

「キーラがこんなに強いなんて……！」

光の化身キーラは非常に強かった。

桁外れの攻撃力に、こちらの攻撃をほとんど通さない防御力。

さらに、マスターハンドとアイシヤを味方につけていると隙は無かった。

「全てを奪っただけはあるな。それでも、僕は決して諦めはしない。

お前達は時間稼ぎをしろ、僕が奴らを吹き飛ばす！」

シャドウはカオスエメラルドに力を溜め、大技の準備に入る。

カービィ達は頷くと、シャドウを守るために攻撃に入る。

「クリーンだよ！」

カービィはアイシヤが振ったモップを吸い込んでクリーンをコピーし、

箒で地面を掃いて動きやすくする。

身軽になった柊蓮司とマリオは飛び道具でキーラを牽制する。

キーラは光の羽をシャドウに飛ばしてくるが、アルトリアが攻撃を受け流す。

「来た」

しばらくするとシャドウの身体が赤く光り出した。
大技を発動する準備ができたのだ。

「シャド兄ー！」

「カオス……ブラスト!!」

カービィの掛け声を聞いたシャドウは全身から衝撃波を拡散し、
キーラ、マスターハンド、アイシャを吹き飛ばして大ダメージを与えた。

その威力は、マスターハンドを消滅させ、キーラを守る光を剥がすほどだった。

衝撃波が治まると、光の球になったキーラは宙に浮かんだ。

「おのれスマッシュブラザーズ……許さんぞ!!」

キーラは全身から強い光を放ち、再び全身を光の翼で覆った。

恐らく、追い詰められた彼女は怒りでホンキを出したのだろう。

「みんな、しっかりしてー！」

「ああ、分かってるー！」

柊蓮司はホンキを出したキーラを魔剣で斬りつける。

防御力が下がったのか、柊蓮司は手ごたえをすっかり感じた。

キーラは翼を槍のようにしてマリオ、シャドウ、ベルを貫く。

「ははは……どうだ」

三人の苦痛に歪む顔を見たキーラは、高らかに笑い声を上げる。

「マリおじちゃん、シャド兄、ベルベル！ もう、許さないよー！」

カービィはクリーンを捨てて能力星をキーラに吐き出し、

ハンマーを構えてキーラに突っ込んでいく。

勢いがついたハンマーは、キーラのコアを的確に殴り、さらなるダメージを与える。

「えいっ！ やあっ！ とおっ！」

キーラはワープを繰り返しながら、翼を変化させた槍を次々と突き刺す。

たくさん予告線を展開し、キーラがコアを一瞬光らせるとそれが
無数のレーザーに変わった。

レーザーはカービィを貫くが、カービィは怯まずキーラに突っ込

み、

短い手足で懸命にキーラを攻撃した。

「我を崇めもせず、恐れもしないとは……貴様は本当に、我を楽しませてくれる」

キーラはカービィを嘲笑うかのように光る。

カービィは真剣な表情でキーラを睨みつける。

「言ったよね？ 僕はみんなの思いを背負って戦っているって。

だから……絶対に、勝って、世界を元に戻すんだ!!」

強く叫ぶカービィを見たキーラは一瞬驚くが、しばらくするとワープして光の爆弾を設置する。

「まずい！ アレはこちらをまとめて攻撃するものです！」

「うん！ 任せて！ ずおおおおおおお！」

アルトリアは光の爆弾を見てカービィに警告する。

カービィは領くと光の爆弾を吸い込み、それをキーラに吐き出していく。

が、一部の爆弾は処理できず、爆発してダメージを食らった。

「いたたた……」

「今度はこれを見るがいい」

そう言うと、キーラは青い光を出し、それらをパクションフラワーとピチユウの姿に変える。

「貴様が解放したファイターだ。さあ、食らえ！」

「させないっ……！」

カービィは体術で光のファイターを攻撃するが、光のファイターの攻撃は激しい。

ピンチになるカービィだったが、その時、

光のファイター目掛けて銃弾が二発放たれ、瞬く間に爆発して消えた。

その銃弾を放ったのは、もちろん、シャドウだ。

「シャド兄！」

「キーラの体力は後僅かだ。決めろ、カービィ！」

「うん！」

カービィはそう言って、ハンマーに炎を溜める。

カービィは再びレーザーで反撃するが、カービィは全てかわし、カービィに肉薄する。

「とどめだ！ 鬼殺し……火炎ハンマアアア!!」

そして、カービィは炎を纏ったハンマーを、思いつきりカービィにぶちかました。

それがとどめになったのか、カービィを自らと同じ眩い光が打ち据え、

やがてカービィ自身を光が包み込み……砕け散る。

「この我が、新世界の創り手が、スマッシュブラザーズ如きに、敗れるとは……!」

その声を最後に、カービィは力尽きる。

そして、マスターハンドと共に海へ墜落しようとしていた。

「……長かったわね」

「ああ……本当に長かったな」

「だが、これでもう、この世界を脅かす者は誰もいなくなるだろう」

「うん……また、美味しいご飯を食べて、たくさんお昼寝ができるね」

「ふふっ……皆さん、よく頑張りました」

「本当にお疲れ様、だぜ」

「……」

多くの戦士達の体を奪い、支配下に置いたカービィ。

この争いの世界で最大規模の異変を起こした存在。

その、カービィとの戦いに勝利した事を喜ぶカービィ、シャドウ、ベル、マリオ、

アルトリア、柊蓮司だったが、リンクだけは浮かない表情をしていた。

「……どうしたの？ カービィに勝ったから、嬉しいんじゃないの？」

「……いや……俺はどうも納得がいかないんだ。」

俺達が助けたファイターは……これで全員だったか？」

「全員？ あ……!」

リンクの言葉により、カービィは気付いた。

スマブラ四天王ら主要メンバーは助けたが、ゼルダ姫も、マリオの双子の弟ルイーゾも、まだ助かっていなかった。

「どこにいるのかしら！ 助……えっ！」

ベルは急いで行動に移ろうとするが、突然、空間に罅が入り、ポロポロと破片が落ちていく。

その破れた空間の中から、不気味な一つ目と無数のクレイジーハンドが姿を現した。

「何、あれ……！」

「不快な……！」

カービィは見た事のない敵に唾然とし、シャドウはある敵を思い出さず、不快な表情になった。

無数のクレイジーハンドは、マスターハンドに襲い掛かって来た。

「まさか、こいつが隠れていたなんて……！」

”神”であるベルでさえも、その目を見て戦慄する。

光の化身キーラを破った事で、抑えられていた闇が暴走した。

キーラが天に帰る前に、彼女が部下にした無数のマスターハンドが無数のクレイジーハンドに襲い掛かり、その命を散らす。

そして、キーラが天に帰った時、破れた空間から無数の不気味な触手が現れる。

「……！」

シユルクは未来視^{ビジョン}を使い、これから来る出来事を予測した。

あの時のように、また、ファイター達が全滅しないように。

「みんな、逃げて!!」

「え……!?!」

シユルクは皆にその場から避難するように叫んだ。

カービィなどの子供達は突然の叫び声にあたふたしながらも、その場を立ち去ろうとしていた。

だが――

「な……っ！」

闇は、争いの世界を飲み込んでいった。

ファイター達が逃げ出すよりも、早く。

「きやあああああああ！」

「うわあああああああ！」

そして、瞬く間にこの世界の一部は漆黒に落ち、

その場にいた全てのファイターは、闇の中に飲み込まれていった。

ファイターとスピリッツを配下に、この世界の掌握を狙う、もう一つの勢力。

混沌と闇の化身、その名は “ダーズ” ——

第二部：闇の世界

56 〽 バラバラの仲間達

「……………は……………」

シャドウが意識を取り戻すと、見慣れない場所に立っていた。

周りには、カービイもベルもいなかった。

さらに、大半のスラブラメンバーもいない。

マリオ達も、何が起こったのか分からず、困惑していた。

「思い出したぞ。あの時、キーラを倒したが、謎の敵が現れて僕達は闇に飲み込まれた……………」

シャドウはこれまでの出来事を思い出す。

光の化身キーラを倒したはいいものの、空間が裂けて

不気味な一つ目と触手を持つ敵が現れてファイター達は闇の中に落ちていった。

カービイとベルがいないため、みんな別々の場所に着いたようだ。

「ネス君はいるけどみんなとはぐれちゃったし……………」

「俺を助けてくれたルカリオも、いない」

「りようさん……………うううう、寂しいです……………」

シャドウチームの内訳は、マリオ、ドンキー、リンク、ヨッシー、ネス、ファルコ、

ピチュウ、マルス、リユカ、デデデ、リトルマック、ダックハント、

リユウ、しずえ、ランス、ストーム、そしてリーダーのシャドウの17人である。

今は彼らだけで、ここを探索しなければならない。

「まずは、ここを出るぞ。ついてこい」

シャドウは他の16人を率いて、道を歩いていく。

上に行くための橋は崩れ落ちて進めないため、一行は只管に進んでいく。

まず、彼らが最初に出会ったスピリッツは、シャドウと同じ世界にいるカオスだった。

ベルがいないため、詳細な説明は分からなかった。

「こいつは初めて見るな」

シャドウはカオス異変の事を知らない。

だが、カオスは鋭い目でシャドウを見ている。

「よし、サクッと行きますか!」

「ああ……初めての敵だが、究極の力を見せてやろう!」

リンクとシャドウはカオスのスピリッツに挑んだ。

「なるほど……確かに手ごたえはあったな」

カオスのスピリッツは、インフィニットと同じホープ級だった。

シャドウはその手ごたえをしつかりと感じる。

しばらくすると黒い霧が晴れ、先が見えてくる。

シャドウ一行が先に進むと、ルカリオのボディに宿る元ゲンのスピリッツを発見した。

彼をリュウが解放すると、目の前に不気味に動く左手の姿が見えた。

「あれは、クレイジーハンドか」

クレイジーハンドに遭遇しながらも、シャドウは至って冷静だった。

「恐らく、こいつもあの目玉に操られているだろう。」

ならば、僕の向かうべき道は一つ。こいつを倒して先に進むだけだ」

シャドウはクレイジーハンドを倒すべく身構える。

マリオ、ファルコ、マルス、デデデ、ダックハントも彼と共に戦闘態勢を取った。

「アアアアアアアアアア!」

「うわっ!」

「これで怖気づくワシじゃないゾイ!」

クレイジーハンドは爆弾を落としてマルスとデデデを攻撃する。

デデデはハンマーを振り下ろし、マルスはファルシオンで斬りかかる。

「ばうばう!」

「おっとー！」

クレイジーハンドは身体をドリル状にしてダックハントとファルコを貫く。

ファルコはギリギリで攻撃をかわし、リフレクターシユートで反撃する。

「ばうー！」

「はっー！」

ダックハントは見えないガンマンを呼び出してクレイジーハンドを連続で攻撃する。

シャドウはホーミングアタックを繰り返した後、回し蹴りからの銃撃を放つ。

「食らうゾイー！」

「マーベラスコンビネーション！」

デデデはゴールドーを投げ、マルスは流れるような剣撃でクレイジーハンドを切り裂く。

とどめの一発がクレイジーハンドに当たると、クレイジーハンドは気絶した。

「ウイングエッジー！」

「カオスバースト！」

「メガトンハンマーー！」

「ばうばうばうー！」

「シールドブレイカーー！」

その隙にファルコはウイングエッジ、シャドウはカオスバーストなど、

それぞれの強力な攻撃でクレイジーハンドに大ダメージを与える。

「とどめだ！ ファイア掌底!!」

「グギャアアアアアアアア!!」

そして、マリオがとどめにファイア掌底を繰り返しクレイジーハンドを撃破するのだった。

「ただ叫ぶだけのクレイジーハンドは、僕の相手ではなかったな」

敗れたクレイジーハンドは、爆発して消えた。

大した手ごたえが感じられない事から、このクレイジーハンドは偽物だと推定した。

「こいつを生み出した敵が誰なのか知りたかったが、ベルがいない以上無理だな」

「あおーん……」

この世界の事を知っているベルは、謎の敵の襲撃でどこかに散っていった。

彼女と合流するのは、もう少し先の事になる。

シャドウ達は脱出の方法を探すため、まずはスピリッツの解放に向かうのだった。

北西の木の道を通った先にいたのは、タコガール&タコボーイのスピリッツ。

西側にはライコウ&エンテイ&スイクンのスピリッツがいた。

どちらもエース級だったが、マリオ、リュカ、ネス、ストームが頑張って解放した。

そのおかげで雲が晴れ、たくさんのおスピリッツがいる火山と

枯れた木がたくさんある場所が見えた。

一体どんなスピリッツがいるのか……シャドウ一行は歩みを止めなかった。

「ん？ こいつは……」

「こわいでちゅ……」

リザードンのボディに宿るサザンドラを見て、ピチューは身震いした。

それもそのはず、このポケモンはイツシユ地方における

「600族」と呼ばれるポケモンだからだ。

「わ、わたしもちよつと怖いです。シャドウさん、何とかしてくれませんか？」

「まったく、世話の焼ける奴だ」

そう言っつて、シャドウは拳銃を構えてサザンドラに戦いを挑んだ。

「どうだ」

シャドウは無事にサザンドラの解放に成功した。

「ありがとでちゅー！」

「ありがとございます」

「……」

ピチューとせずえはシャドウにお礼を言った。

それに対しシャドウは相変わらず、無表情だった。

そして一行が歩いていくと、マルスが目の前のスピリッツに気づく。

「き、君は……！」

銀の鎧と赤い服を纏った青い髪の少女のスピリッツが宙に浮いていた。

その少女は、マルスには見覚えがある人物だった。

「シーダ！ シーダじゃないか！」

「マルス様！ 無事だったのね！」

「ああ、僕はこの通り無事さ」

彼女はタリス王国の王女で、マルスの婚約者であるシーダだった。

闇の世界で再会した二人は、じつとお互いの目を見つめている。

周りの様子が目に入らなくなるくらいほど、二人の愛は強く、そして一途だ。

「おい、マルス。一体どうしたんだ？」

「あ、ごめんね。気が付かなかった。彼女は僕の婚約者でタリスの王女、シーダだよ」

ようやく気付いたマルスは、シーダについてマリオに簡単に説明する。

「まさか、こんなところで再会するとはね。でも、君と出会えてよかったよ」

「マルス様……それは、私も同じ気持ちよ」

「もう大丈夫だよ、シーダ。僕と一緒にこの世界に帰ろ……え？」

マルスがシーダの手を握ろうとすると、彼女の身体はすり抜けてしまふ。

そしてシーダのスピリッツは近くにあったルキナのボディに入り込み、

実体を得てマルスの前に改めて姿を現した。

「シーダ……?」

「いやあああああつ!」

すると、ルキナのボディに宿ったシーダがいきなりマルスに斬りかかった。

マルスはある得ないといった表情で自分に斬りかかったシーダを見ている。

「シーダ、どうして僕を攻撃したんだ!」

「ち、違うの、マルス様、私の意思じゃないわ」

ルキナのボディに宿っているシーダが苦しそうな表情で呟く。

シーダの表情と行動から察するに、彼女の言葉が嘘ではないと見抜くマルス。

「つまり、シーダは操られてるって事?」

「私、操られているんだ……。……マルス様を傷つける事は望んでない。

マルス様……。どうか、私を助けて!」

シーダはペガサスを呼び出して騎乗した。

彼女の身体とペガサスには、不気味な闇の鎖が巻き付いていた。

マルスはファルシオンを抜き、切っ先を闇の鎖に突きつける。

彼はシーダではなく、彼女を操る鎖を断ち切るために剣を取ったのだ。

「悪い夢は、僕が覚ましてあげるよ。だから……。安心して、シーダ」

「はい、マルス様!」

「もう大丈夫だよ、シーダ」

シーダのスピリッツを解放したマルスは、ルキナの身体から抜け出した彼女に触れようとする。

だが、実体を持たなくなつたため、マルスの手はすり抜けてしまった。

「……。シャドウ」

「なんだ?」

「カービィとベルと合流するまで、シーダを僕の身体に宿してほしい」

「何、正気か？」

スピリッツをボディに宿すと、体格と精神がスピリッツのそれに変わる。

それではマルスではなくなってしまうとシャドウは反対するが、マルスは真剣な表情を変えなかった。

「ようやくシーダと再会できたんだ。だから、もう、二度と離れたくない。頼むよ、シャドウ」

『マルス様もそうおっしゃっているわ。そして、私からも頼むわ。』

お願いよ、私もマルス様と一緒にいきたい』

「仕方ないな……」

シーダのスピリッツも姿を現し、二人は必死でシャドウに頼み込む。

流石に二人がかりで頼まれてはシャドウも放っておけず、渋々了承するのだった。

そして、シーダのスピリッツはマルスの身体の中に入り込んだ。

「さて、気を取り直して……」

シャドウ一行はシーダのスピリッツを解放した後、南に向かって真っ直ぐに歩く。

すると、闇の鎖で縛られた赤と黒の猫ポケモンが沼地の台座の上に立っていた。

第五期からスマブラメンバーになったヒールポケモン、ガオガエんだ。

台座からはガオガエンのボディが次々に生成され、ガオガエンは苦しそうな様子だ。

「あああつ！ 今、助けますから！」

しずえはそう言って、ピコハンでガオガエンを縛る闇の鎖を打ち砕く。

すると、ガオガエンは赤い瞳をぎらつかせてしずえに襲い掛かってきた。

「コロシテヤル！」

「させないゾイ！」

デデデは襲い掛かるガオガエンに対しハンマーで応戦した。

ガオガエンはすぐに飛び退くが、一行への殺意は変わらなかった。

「グルルルルルル……」

「相手が誰であろうと僕は手加減しない。究極の力、見るがいい！」

「頑張ります！」

「かかってくるんだゾイ！」

「邪魔をするなら、この嵐の弓で吹き飛ばす」

この世界にも、操られたファイターはいた。

シヤドウ、しずえ、デデデ、ストームは、

操られたガオガエンを正気に戻すべく、戦いを挑んだ。

57 〽 戦闘！ ガオガエン

操られたガオガエンとの戦いが始まった。

「風よ」

ストームはトルネイドのARTSを応用して、小さな竜巻を作り出す。

「はあっー！」

「えい、えい、えい！」

シャドウがホーミングアタックを繰り出し、しずえがピコハンを連続で振って追撃する。

「食らうゾー！」

「風の矢よ」

「グアアアアアア！」

デデデは力を溜めた後、ゴルドーを投げつける。

ストームは小さな竜巻を矢に纏わせ、弓から矢を放ちガオガエンを巻き込む。

「ウオオオオオオオオオ！」

ガオガエンは両腕を振り回してシャドウとデデデを攻撃した。

彼だけが使える物理技、DDラリアットだ。

シャドウとデデデはシールドを張り、何とか攻撃を防ぐ。

「風よ……」

シャドウは無数の光の矢を作り出し、

ストームが呼び出した竜巻と共にガオガエンに向けて放つ。

しずえはガオガエンが通りそうな道にハニワくんを設置する。

彼女の読みは当たり、ガオガエンはハニワくんを踏んで吹っ飛ぶ。

「マジカ・スターアロー！」

「食らうんだゾー！」

ストームは力を溜めた矢を放ち、ガオガエンの防御を貫く。

デデデはジェット噴射したハンマーを思い切りガオガエンにぶちかました。

「……フレアドライブ」

ガオガエンが炎のエネルギーを纏って突進する。

その先にいたのは、デデデとストームだ。

「ぐあああああああああ！」

「ぬおおおおおおおおお！」

攻撃をまともに食らったデデデとストームは、大ダメージを受けて吹っ飛ばされた。

二人は空中ジャンプを何回か使って復帰するも、その威力の強さを思い知る。

ガオガエンは攻撃の反動を受けて体力が減少している。

その隙に、シャドウ、しずえ、ストーム、デデデは一斉にガオガエンを攻撃した。

「半分削ったゾイ！」

「よし！」

「……ヤルナ。フレアドライブ」

「うおおおおおっ！」

ガオガエンはデデデの隙を突き、フレアドライブで大ダメージを与えた。

デデデはその威力に耐え切れず、ついに戦闘不能になった。

「ああっ、デデデさん！ 今、治しますからね！ ……不味いですけど、我慢してください」

しずえは倒れたデデデに近付き、目覚しいスピードで

魚の内臓と果物を発酵させた料理を作り、デデデの口の中に入れる。

すると、デデデは驚いて戦闘不能から復活した。

「チッ」

ガオガエンは舌打ちし、闇の力を溜めて攻撃に備える。

ストームはその間に竜巻を矢に纏わせ、しばらく溜めた後に矢を放った。

シャドウはガオガエンに飛びかかり、至近距離から銃弾を一発撃つ。

「グアアアアッ！」

「僕の攻撃は体術だけではない」

「クソオツ！」

「えいつ！」

ガオガエンが悔しそうに顔を歪めると、デデデが勢いよくゴルドーを投げつけた。

しずえも傘を振って追撃する。

「フレアドライブ」

「やらせないゾイ！」

ガオガエンはフレアドライブでストームを吹っ飛ばそうとするが、デデデが底い代わりに彼がダメージを受ける。

「ぐうううううう……！」

「デデデ、これ以上攻撃を食らうな！」

「いや……皆を守れなければ、大王の名が廃れるんだゾイ……！」

苦痛に顔を歪めるデデデを心配するストーム。

デデデは大王としての意地があり、ここで負けるわけにはいかないのだ。

「……ココマデオレヲオイツメルトハ、タイシタモノダナ。ナラバ、コレデドウダ……！」

すると、ガオガエンの周囲でみるみる闇が満ち、さらなる暗黒の世界が出現した。

どうやら、大技を発動するつもりのようなのだ。

その前に彼を倒さなければ、全滅してしまう。

「早く止めるゾイ！」

デデデはハンマーを振り下ろし、ガオガエンの体力を削っていく。

ストームは続けてマジカ・スターアローでガオガエンを撃ち、彼の攻撃を阻止した。

「いきますー！」

「はあっ！」

しずえは道路標識でガオガエンを浮かせ、

シャドウはカオスエメラルドの力で身体能力を強化して連続打撃を繰り返す。

彼らの猛攻があつて、ガオガエンの体力は残り僅かになった。

「カオス・コントロール！」

シャドウはカオスエメラルドの力で時空を歪め、ガオガエンの動きを止める。

その隙にシャドウはホーミングアタックを繰り出し、

光の矢を大量に生成してガオガエンを包囲する。

デデデ、ストームも飛び道具でガオガエンを攻撃する。

「とどめだ！」

「!?」

効果が切れ、ガオガエンはようやく動けるようになる。

倒されるものかとガオガエンは逃げようとするが、

周囲には光の矢があり、それらは正確にガオガエンの身体を貫いた。

そして赤と黄色の大爆発が、戦場全体に起こった。

「う……う……」

倒れたガオガエンは呻き声を上げている。

しずえがガオガエンの目をよく見ると、彼の目は元の色に戻っていた。

闇の呪縛から解放されたのだ。

「んあゝ、よく寝た」

しばらくして、ガオガエンは両手を伸ばし、気持ちよさそうに起き上がる。

「おはようございます」

「といつても、こんな場所ではそんな事は言えないがな」

しずえとシャドウはガオガエンを迎える。

ガオガエンは辺りをきよろきよろと見渡した。

「じゃあ、ここはどこだ？」

「あたりがまっくらでこわいでちゅ……」

ピチューは辺りが暗いため、怖くなってシャドウに抱きついた。

シャドウは冷静に、ここがどこなのかを分析する。

「ここは闇の世界のようだな。しかも、ここ一帯が全てではない……」

「俺達はとんでもない場所に飛ばされちまったみたいだな」

改めて、この闇の世界が危険である事を知ったシャドウ一行であった。

「そういえば、君は誰だ？ どこかジュカインのような雰囲気だが」「ジュカイン？ あんまりよく分かんねーな。おれはヒールポケモンのガオガエんだ。」

ヒールは悪役レスラーって意味だからな」

ガオガエンは自身の名前、というか種族名をストームに名乗る。

「なるほど、ポケモンだったのか。僕はストーム」

「シャドウ・ザ・ヘッジホッグだ」

「みんな、よろしくな！」

ストームとシャドウがまずガオガエンに自己紹介をして、他のメンバーも続けて自己紹介する。

ガオガエンは「はっはっは」と笑った。

「ところで、ピカチュウやルカリオはどこに行っちゃったんだ？」

「かくしか」

シャドウは、キーラを倒したら闇に飲み込まれて散り散りになった事をガオガエンに話した。

「翼ヤローをぶっ倒したら目玉ヤローが襲ってきたんだな？」

「そうなるな」

「あの目玉ヤロー、戦力にするって言いながらおれを捕まえやがって……」

「その『目玉ヤロー』の名前は？」

「決まってんだろ！ ダースだよ、ダース！」

どうやらスマブラメンバーをバラバラにした敵の名前は、ダースというそうだ。

彼もまた、世界を支配するためにファイター達を捕らえてボディを生成し、

スピリッツを入れて操っているようだ。

「くそっ、目玉ヤローめ……おれの猛火が燃えてるからな！」

ガオガエンは目玉ヤロー、つまりダースに利用された事に怒ってい

る。

シャドウ以外の全員はキーラに利用されていたため、ガオガエンの怒りに共感した。

「それじゃあ、俺達と一緒にいこうぜ。目指すはみんなとの合流だ！」
「ああ！」

マリオとガオガエンは、互いに握手を交わした。

リングの猛火が今ここに、シャドウ達の仲間に加わったのだった。

58 聖地突入

ガオガエンをダーズから解放したシャドウ一行。しかし、今の戦力ではダーズに勝つ事は難しい。

まずは仲間を探し、ダーズに操られたスピリッツを解放して先に進むのだ。

一行は南西の火山に行き、スピリッツの解放に向かう。

「……熱いな」

「アイシヤかドリイがいれば、魔法で何とかなるんだが……」

闇の世界の火山もやはり熱く、さらに暑さを軽減する手段もないため、

シャドウとリンクは嘆いた。

すると、ガオガエンが皆の先頭に立ち、ついてこいとも言うように腕を振る。

「おれなら熱いのは平気だぜ！」

「そっか、ほのお・あくタイプだからね。頼りにしているよ、ガオガエン」

「食らえー！」

「いくぜー！」

ガオガエンが先頭に立ち、ランドマスター、ロック・ヴォルナット、クレイド、ユガと続けて解放していく。

しばらく進んでいくと、火山に似つかわしくない、水晶で覆われたワープゾーンがあった。

しかも、ここだけは気温が低くなっている。

シャドウ達はここでしばらく休んだ後、ワープゾーンに乗って別の場所に転移した。

「ここは……」

「聖地……か」

リンクはこの場所に見覚えがあった。

大地は三つの三角が並んだような形をしており、その先端には強い光が宿っている。

これは、リンクがいた世界に存在した「トライフォース」というもので、

上は力、左下は知恵、右下は勇気を表すのだ。

だが、上は黒雲に覆われて進めないため、一行はひとまず、南西に行く事にした。

立ち塞がっていた封印されしものを解放すると、目の前に梟の像が見えた。

梟の像を調べると目が光り出し、テレパシーで彼らに話しかけてきた。

―我 真実を語る者 そなたの助けとならん

「な、なんだこいつは」

「これはケポラ・ゲボラっていう梟を元にした像だ。俺に色々教えてくれるんだよな」

「つまり、謎を解いていけば、ここから脱出できるんだな」

リュウは聖地を一步一步歩いていく。

ここを出るためには、謎を解く事が必要なのだ。

「しかし、ここもやっぱり熱いな」

「ガオガエンがいなかったら、僕達は倒れてたね」

一行は右から3本目の道に行き、厄災ガノンとムートを解放した後、

左下の広場のような場所に着く。

そこは一転してのどかな風景であり、熱さが少しだけ引いてきている。

広場の中央には赤い火と青い火が灯っており、まるで時計のような形になっている。

「ぼうぼう、ぼうぼう」

「これが何を表すのか梟の像に聞いてみましょう」

一行はムート、マジカルバケーションの主人公、どんべ&ひかりを解放し、

梟の像がある場所に行った。

「12時10分……？」

ネス、リュカ、リュウは、これが何を表しているのかを考えた。しばらくすると、リュカが何かを閃き二人に話す。

「分かった！ 広場の赤い火と青い火を12時10分のところに合わせるんだよ！」

「そうか、ありがとうリュカ！」

「えへへ」

ネスに褒められ、照れて頭を掻くリュカ。

一行はリュカの言う通り、赤い火を12時の方向、青い火を2時の方向に灯した。

すると、中央にシークのボディに宿ったスピリッツ、インパが現れた。

リュウとしずえが彼女を解放すると、左下にあつた岩が音を立てて崩れ去る。

「おお、仕掛けが解けたみたいだゾイ！ 早速行ってみるゾイ！」

そう言ってデデデが左下に行くと、闇の鎖に縛られたゼルダ姫と、同じく操られたユクシー&エムリット&アグノムがいた。

しかし、そこにシモンのボディに宿るエルザのスピリッツが立ち塞がっていた。

「女の名前なのに……なんだ、男か」

マリオがそう呟きながらエルザを解放し、

一行はゼルダ姫とユクシー&エムリット&アグノムがいる場所に辿り着く。

敵に操られたゼルダを再び見たリンクは歯を食いしばる。

「なんだよ……こういうのを見るのは、もうたくさんだよ……！」

「リンク……」

マリオはリンクの姿を見て不安になった。

ゼルダ姫が操られるのは、これで何回目だろう。

リンクの心の余裕はかなり減ってきていた。

だが、戦わなければゼルダ姫を救う事はできない。

リンクは涙を流しながらも、ゼルダ姫を縛る闇の鎖をマスターソードで斬りつけた。

「……」

「きょううん！」

「きょううん！」

「きょううん！」

ユクシー&エムリット&アグノムは、ゼルダを守るように前に立つ。

シャドウは落ち着いて一人と三匹の様子を見る。

「こいつは……同時に倒さないと何度も復活し、ゼルダも超能力で回復させる。」

お前達はしばらく耐えろ、僕があいつらを一撃で仕留める」
「分かったぜ」

シャドウはカオスブラストでユクシー&エムリット&アグノムを瞬殺するらしい。

ガオガエンは頷いた後、戦闘態勢を取る。

「ユクシーが好き迷子の女の子もいるらしいぜ」

「こわいけど……ぴちゅもがんばるでちゅ！」

「私も恐竜ですからね〜！」

「ゼルダ姫は僕が解放する！」

「目を覚ますんだ、ゼルダ！」

「リンクにこれ以上苦しんでほしくない。だから俺達はお前を、必ず救^{たす}ける！」

マリオ、リンク、ヨツシー、ネス、ピチュー、ガオガエンは、

ゼルダとユクシー&エムリット&アグノムに戦いを挑んだ。

「はっ！」

マリオはファイアボールでゼルダを牽制した。

ゼルダは魔力を纏った手刀でピチューを斬る。

「うええん、ゼルダおねえちゃん、いたいでちゅ」

「……」

ピチューは泣くが、ゼルダは当然反応しない。

エムリットはネスをサイコキネシスで浮かせ、地面に思いつき叩きつける。

「うわあああつー！」

「……」

ゼルダはユクシー&エムリット&アグノムの加護で受けたダメージを癒していく。

「僕の予想通りだったな」

「きょううん！」

「うあああああつー！」

「あたま、ふらふらしまちゅ……」

「目が回ります〜」

ユクシーは超能力を広範囲に放ち、マリオ達をまとめて攻撃する。

マリオ、リンク、ネス、ガオガエンは抵抗したが、

ヨッシーとピチューは衝撃を受けて混乱する。

「ゼルダ……また、俺の目が見えなくなったのかよ……」

「目を覚ましてくださ〜い！」

「……」

リンクとヨッシーは同時にゼルダに攻撃する。

前者の攻撃はギリギリで、後者の攻撃は上手いところに命中した。

しかし、ゼルダはまたもや加護で傷を癒す。

「シャドウ、まだなのかよ！」

「もう少しで終わる……待っている」

「うんっ」

ユクシーはガオガエンを攪乱し、エムリットは広範囲に念力を放つ

て混乱させ、

アグノムはガオガエンに体当たりする。

ヨッシー、リンク、ネスはシャドウの攻撃が来るまでしっかり防衛

している。

「うわあああああつー！」

「ピチューさ〜ん、危ないで〜すー！」

アグノムはピチューをサイコネシスで攻撃するが、

次の攻撃で倒されると判断したヨッシーは彼を庇って吹っ飛ばされる。

背後ではシャドウの身体が赤くなっている——もう少しで、大技が発動するのだ。

「……」

ゼルダはマリオのファイア掌底をかわす。

そこに、リンクの斬撃が命中したところでシャドウは構えに入つた。

大技を発動する準備ができたのだ。

「カオス……ブラスト!!」

シャドウの周囲から、真紅の衝撃波が広がる。

それが命中したユクシー&エムリット&アグノムは場外に吹っ飛ばされ、

ゼルダを癒す加護も消えた。

「よし！ やったな、シャドウ！」

「……まだだ」

「ああ、ゼルダを助けるんだったな！」

ガオガエンは高く飛び上がり、勢いよくゼルダに体当たりする。

ゼルダはフロルの風でかわし、ガオガエンの背後に回って魔法で攻撃した。

「ぐおおー！」

「ぴちゅうー！」

ピチューはゼルダに10まんボルトを放って攻撃する。

リンクは距離を置いてブーメランを投げる。

「PKフラッシュュー！」

「……」

ゼルダの魔法とネスの超能力がぶつかり合い、大爆発を起こす。

大爆発が治まった時、マリオはハンマー、

リンクはマスターソードをゼルダに振り下ろそうとしていた。

「ゼルダ……」

「元に……」

「戻れええええええええ!!」

そして、マリオとリンクの武器がゼルダの脳天目掛けて振り下ろさ

れると、
彼女は大ダメージを受け、場外に吹っ飛ばされるのであった。

59 謎を解け

ダーズに操られたゼルダは、リンク達の活躍により無事に解放された。

「私を助けてくれて本当にありがとうございます」

ゼルダはシャドウ達にお礼を言う。

彼女の手の甲は三角形に光っていた。

「その手……やっぱり知恵のトライフォースだな」

「はい。これは決して悪用されてはならない者。そして、貴方達を導く希望の光です」

「希望の光……」

つまり、バラバラになったみんながまた集まる、という意味か、とシャドウは理解した。

離れてしまった「彼」とも会えるかもしれない。

シャドウはそう思いながら、ゼルダを一行に加えるのだった。

「では、知恵のトライフォースを解放いたします」

ゼルダが手を掲げると、上空に三角形が現れた。

知恵のトライフォースの解放に成功したのだ。

「あなた達の旅に幸あらんことを」

ゼルダは天に祈りを捧げ、一行と次の入り口付近に戻っていった。

次に、シャドウ達が行ったのは、一番手前の道。

ナバルをシーダが説得した後に進むと、一行は霧に包まれた森に入った。

「ようやく熱くなくなりました」

火山の熱さから解放されたヨッシーは、ほっと一安心する。

リンクは方向感覚を頼りに、霧の森を歩いていく。

「みんな、俺についてこい」

「ああ」

リンクを先頭に一行が進むと、北の突き当たりに梟の像を発見した。

「友を待つ少女の想い 『勇気』に通ず」

リンクが梟の像に書かれた文字を読んだ後、一行は行き止まりでない方の道に進む。

おかあさん&まいこちゃんを解放してさらに進み、リンクは梟の像にある文字を読む。

「東、南、そのまま南。見えざる路《みち》がそなたをいざなう」

「つまりこの順番に進めばここを抜けられるんだな」

「ああ」

一行はまず、ミミツキユのスピリッツを解放する。

ピカチュウを真似たいだけでなく、ついにピカチュウのボディに宿るようになったミミツキユ。

ホープ級だったので、いきなりダメージを受けても楽々とガオガエンは解放する事に成功。

次に、一度道に戻って、梟の像の言う通りに東に進むと、セレビイのスピリッツを発見した。

「オオオオオオオオオオ……」

本来は温厚なセレビイも、ダーズに操られて凶暴化しているようだ。

セレビイは植物を身に纏うと、魔導生物のように巨大化した。

「これは……暴走したみたいだね……」

「さぞかし、セレビイ・ゴーレムといったところだろう。みんな、止めるぞ」

「いくぜー」

「ぼうー」

マルス、リトルマツク、ダックハント、リュウ、ガオガエン、ストームは、

セレビイ・ゴーレムとの戦いに臨んだ。

「まずは装甲を剥がすよー」

「ぼうー」

マルスとダックハントは、セレビイを覆う植物を切り裂いていく。

鳶はマルスとガオガエンに向かって伸びるが、ガオガエンは防御し、マルスは回避する。

「波動拳！」

「マジカ・スターアロー！」

リユウは波動拳を放ち、ストームは矢を射るが、植物は堅くなってストームとリユウの攻撃を防いだ。

セレビイは鳶を伸ばしてガオガエンを縛り上げ、思いつきり地面に叩きつけた。

「ぐあああつー！」

「ガオガエン！　このおつー！」

リトルマツクはジャブとストレートで連続攻撃し、セレビイ・ゴーレムの装甲を剥がす。

「ばうばうー！」

ダックハントも協力して攻撃し、装甲を剥がして防御力を減らしていく。

セレビイ・ゴーレムは鳶や葉っぱで抵抗する。

「昇竜拳！」

「シールドブレイカー！」

リユウは飛び上がりながらセレビイ・ゴーレムの装甲を攻撃する。マルスはシールドブレイカーで装甲を貫く。

セレビイ・ゴーレムの装甲はどんどん崩れていく。

「アアアアアアアアアアアアアア！」

「ぐあああああつー！」

セレビイは反撃とばかりに腕を大きく振り回し、マルスに大ダメージを与える。

それでも、リトルマツクのストレートが決まり、ついにセレビイ・ゴーレムの装甲は崩れた。

後はもう、本体のセレビイを狙うだけだ。

「ばうばうー！」

「マジカ・スターアロー！」

ダックハントとストームの射撃が命中し、セレビイに大ダメージを与える。

「オオオオオオアアアアアアア！」

セレビイはリーフストームで反撃するが、リトルマックはしっかりと防御して耐える。

「真空……波動拳!!」

そして、リュウの真空波動拳が決まり、セレビイのスピリッツは解放されるのだった。

「ビィィィィィィ……」

「……? 一緒に行くのか?」

セレビイは操られた事を謝罪するようにシャドウの周りを回り、彼の中に入ろうとする。

どうやら、セレビイは何かを予知しているようだ。

「僕にはよく分からないが……せっかく解放したのに無下にするのはベルに失礼だしな。」

セレビイ、ついてくるがいい」

「ビィー!」

セレビイのスピリッツはシャドウの中に入り込む。

レジエンド級だったが、セレビイ自体は戦いを好まないため、

シャドウの肉体を操ったりはしなかった。

「次はこう行くんだ」

シャドウ達は東に行った後、次に南に行つて、ルイージのボディに宿るミスターLを解放。

光る道標を頼りにそのまま南に進むと、再び梟の像が見えてきた。

「北、西、北、そのまま北。勇気を持って飛び込め」

「飛び込め……」

シャドウはふむ、と顎に手を当てる。

どこかに飛び込める場所があるのではないかと推理している。

「道標を頼りにした方がよさそうだな」

「ああ」

タイニーコングを解放した後、シャドウ達は光る場所を道標として、

北、西、北と、迷わないように行つた。

すると、シャドウが推理した通り、池を発見した。

「勇気を持って飛び込む、か。ついてこい」

そう言つてシャドウは池の中に飛び込む。

マリオ達も、彼の後を追つて池に飛び込んだ。

「ふっ、やはり僕の目星は当たつたようだな」

一行が辿り着いた場所は、霧で覆われた大きな池だった。

ここに、勇気に繋がる道があるという。

「後は道なりに進めばいいというわけだ」

シャドウ達は分かれ道を東に進み、霧に気を付けながらも迷う事なく奥に進む。

すると、闇の鎖に縛られた緑の服と帽子の少年剣士を発見した。

リンクの真の姿、こどもリンクだ。

「……こどもリンク……」

「お前は下がっている、こいつは僕がやる」

そう言つて、シャドウはリンクの前に立つ。

操られた仲間とリンクを戦わせたくないという、彼なりの気遣いだったが、

もちろんリンクは気付かない。

「ハアッ！」

シャドウは混沌の力を使い、こどもリンクを縛っている闇の鎖を打ち砕く。

解放されたこどもリンクは赤い瞳を光らせ、コキリの剣を構えてシャドウに斬りかかる。

シャドウはそれをかわし、身構える。

「……オマエタチハ……ミナゴロシダ」

こどもリンクはサリアとスタルキッドを呼び寄せ、取り巻きとして自身を守るように立たせた。

「そうか……友を待つ少女とは、こいつの事だったのか。……来るぞ！」

「ああ！ リンクのためにも、負けないぞ！」

「こどもリンク……どうか、自分を取り戻してください！」

シャドウ、マリオ、ネス、ゼルダ、ファルコ、デデデは、

ダーズの呪縛から彼らを解放するべく、戦いに臨んだ。

「煌めきの風よ」

ゼルダは呪文を唱え、シャドウに優しく追い風を吹かせその行動を補助する。

追い風を受けたシャドウはホーミングアタックでサリアに会心の一撃を与える。

マリオはスタルキッドに近付いて投げ飛ばした。

「ケケケケケケ！」

スタルキッドは妖精トレイルに命じて光の弾丸をばら撒いて攻撃する。

範囲は広がったが、大したダメージではなかった。

ネスは犬の散歩でサリアを攻撃しようとするが、サリアは楽々と攻撃をかわす。

「おらあー！」

「ケケケケ！」

「はっ！」

デデデはスタルキッドにハンマーを振り下ろすが、スタルキッドには当たらなかった。

ファルコはスタルキッドをブラスターで撃ち抜く。

「うおりゃああああー！」

「ゲエーッ!!」

デデデは豪快にハンマーを振り、スタルキッドを一撃で倒した。

その直後、サリアがオカリナを吹き、デデデとファルコを同時に眠らせる。

「ZZZZZ……」

「ZZZZZ……」

「二人とも、しっかりしてください。デインの炎！」

ゼルダはデデデとファルコに声をかけるが、ぐうぐう眠っていて反応しない。

仕方なく渦巻く紅蓮の炎でこどもリンクを攻撃、炎に包んで継続的にダメージを与えた。

「うう、熱い……」

「大丈夫です、すぐに楽になりますから」

「アイスボール！」

マリオは手からアイスボールを放ち、サリアとこどもリンクを攻撃。

ネスはこどもリンクの攻撃をかわしてバットでサリアを攻撃し、シャドウはこどもリンクに拳銃を三連射した。

「これで、終わりだあああつ！」

「グアアアアアアアアアア!!」

最後にマリオのガツーンハンマーが決まり、こどもリンクはサリアと共に吹っ飛んでいった。

「ううう……ここは一体……」

ダーズの呪縛から解放されたこどもリンクの目は、元の青色に戻っていた。

彼の目に最初に映ったのは、マリオとリンク。

「あ、リンク……それに、マリオも……。ボク、今まで何をしてたんだろう……」

「大丈夫だよ、こどもリンク。君は悪い夢を見ていただけなんだ」

「悪い……夢……」

ネスは優しく、こどもリンクに言った。

こどもリンクは頷くとゆっくりと立ち上がる。

「うぐっ！」

「まだ休んだ方がいいな」

「そうだね」

一行はこどもリンクと共に、しばらく安全地帯で休んだ。

「ボクの勇気が、道を開く」

その後、こどもリンクは手を掲げ、上空に黄色い三角が現れる。

勇気のトライフォースを解放した事で、マスターソードへの道が開いたのだ。

「やったね！ これで先に進めるよー！」

「……」

これで先に進めると思いきや、シャドウがカオスエメラルドを取り出す。

「……シャドウ?」

「……森の宝、その中に聖痕の剣士への道在り。カオスコントロール!」

一行は時空転移術で、森の沼地の奥にある宝箱がある場所に着く。シャドウが宝箱を開けると、そこには何も入っていないかった。しかし、シャドウはじつと睨んでいる。

「な、なんで分かったの?」

「……僕の勘が騒いでいるからな。入るぞ」

「えっ、ええええ!?!」

一行は戸惑いながらも、宝箱の中に入る。

すると、森にあつた宝箱が開き、そこには闇の鎖に縛られたクロムが立っていた。

「聖痕の剣士……そっか、シャドウは遠くにある梟の像を読み取ったんだな!」

混沌の力って相当なものなんだな、とリンクが脱帽していると、マルスがポンポンと肩を叩く。

「マルス?」

「僕の子孫が苦しんでいるなら、助けないわけにはいかないだろ?」

「あ……ああ……」

リンクは戸惑いながらも、クロムを縛る闇の鎖を切り裂く。

するとクロムは真っ赤な瞳をぎらつかせ、まるで屍王のように斬りかかろうとした。

「危ないっ!」

マルスはファルシオンで攻撃を受け止める。

「グウウウウ……」

「待っててね、クロム。今、僕が助けるから!」

今ここに、新旧のファルシオン対決が始まった。

「はあっ! やあっ!」

「……」

マルスのファルシオンを、クロムの封剣ファルシオンが軽く受け流す。

「シールドブレイカー!」

マルスは隙を突いてクロムの防御を貫く。

「エクスプロージョン」

「うぐうっ!」

クロムは裂帛の気合を封剣ファルシオンに込めてマルスに斬りつけた。

気合が爆発してマルスに浅くない傷を負わせる。

「マーベラスコンビネーション!」

「グアアアアアアア!」

マルスもマーベラスコンビネーションで反撃し、距離を取って渾身の一撃を放つ。

「とどめだ!!」

「ウアアアアアアアアアア!!」

そして、クロムが怯んだ隙にマルスがとどめの一撃を放ってクロムを撃破するのだった。

「……………ここは、どこだ……………」

正気に戻ったクロムは、やはり今までの事を全く覚えていなかった。

マルスは微笑みながらクロムに手を伸ばす。

「もう、君は縛られなくていいんだよ」

「お前は……………まさか、マルス……………」

あの目とあの剣は、間違いなく先祖のマルスだ。クロムはマルスに釘付けになっていた。

「ああ、そうさ。僕は君の先祖の、マルスだよ」

そこに、マルスの中からシーダが現れる。

『私はマルス様の伴侶、シーダよ』

「シーダ……………?」

自分の先祖とその伴侶が現れた事で、クロムの混乱はさらに加速した。

マルスは「ごめんね」と謝った後、すぐに彼を安全な場所で休ませた。

「……というわけで、僕達は散らばった奴らを探しつつ、合流を図っている」

「なるほどな、大体分かった」

クロムはシャドウから事情を聴いて頷く。

つまり、自分と同じように操られた仲間を助ければいいんだな、と理解した。

「おっと、自己紹介を忘れていたな。俺はイーリス聖王国の王子、クロムだ」

「よろしくお願いします」

「よろしく」

第五紀から新たに参戦したクロムは、一行に自己紹介をした。

「俺が案内する、ついてこい」

「ああ」

一行はクロムと共に、リンクの案内で「東、南、そのまま南」と書かれた銅像の前に戻り、

今度は、先ほどとは別の道を進む。

シャドウの足取りが重くなっていたが、一行はまだ気にしていなかった。

しかし、道中でチャッピーとランディアを解放して東に進んでいくと、

一行は衝撃的なものを発見した。

「……お前は……！」

60 絶望の青と希望の黒

シャドウ一行は聖地でダーズに操られたゼルダ姫、こどもリンク、そしてクロムを解放した。

今はバラバラになっているため、合流を図らなければならないが、手掛かりはなく、仲間の救出に専念した。

そして、森の奥にいたチャッピーとランディアのスピリッツを解放すると、

一行は衝撃的なものを発見した。

「……お前は……ソニック……!」

それは、ピカチュウを助けようとして光に飲み込まれた青いハリネズミ、ソニックだった。

シャドウの足取りが重かったのは、彼の気配を察知していたからだ。

「嘘でしょ、ソニックがこうなるなんて!」

「嘘ではない、これは事実だ。こいつは今、ダーズに自由を奪われている」

シャドウは鬼気迫る表情で一行に言う。

彼にとつてソニックは気に入らない相手だったが、

ほとんど操られないソニックがこうなった事には衝撃を隠せなかった。

「どうするんですか、シャドウさん」

「……こうなった以上は、僕が戦う。」

この中でこいつの事を一番知っているのは、他でもない、僕、なのだからな」

しずえがシャドウを心配していると、シャドウは銃を構え、ソニックを縛る鎖を連続で撃った。

すると、ソニックは赤い瞳を光らせて、超音速でシャドウに体当たりした。

シャドウはすぐに攻撃を受け流した後、ソニックの前に立つ。

「……」

「ソニック！ お前の自由は、僕が取り戻す！」

シャドウとソニックの、何度目かも知らない一騎打ちが始まった。
「はっ！」

最初に攻撃を仕掛けたのは、シャドウだった。

シャドウは地面を駆り、勢いをつけて丸くなり、ホーミングアタックを繰り出す。

ソニックも鋭いホーミングアタックで反撃する。

「ぐああ！ だが……！」

シャドウはサブマシンガンを構え、ソニックに乱射して反撃の隙を与えない。

その後にはシャドウは距離を取り相手の出方を伺う。

「うぐつ、ううつ、ぐあっ！」

ソニックはホーミングアタックでシャドウに近付き体術で連続攻撃した。

「ダーズサマノ……シンセカイノ……ジヤマハサセナイ……」

「……ソニック。ダーズに君の好きな自由を奪われて、苦しいか？」

「……ダレ……ダ……」

「僕はシャドウ・ザ・ヘッジホッグ。名前は何度も聞いた事はあるだろう？」

究極生命体……分かるか？ ……なんで僕がこんな事をしてるんだ……」

シャドウは、操られているソニックに呼びかける。

ソニックが愛する自由をダーズに奪われた事が、彼にとって苦しいのをシャドウは理解している。

そのため、本人は乗り気ではなかったが、

ソニックを説得する事で彼を戦わずに助けようとしているのだ。

「オマエモ……ダーズサマニ……サカラウキカ……。コノセカイカラ……キエサレ!!」

「ソニックー！」

しかし、ソニックの自由な魂も、ダーズの呪縛には逆らえず、

ソニックはシャドウに超音速で体当たりした。

シャドウは、混沌の力を使って、何とか体当たりを回避した。混沌の力と自身のスピードであつてもギリギリと言つていい回避で、

ソニックのただでさえ速いスピードが、闇の力によってさらに速くなつたとシャドウは思い知つた。

「ちつ……流石に速いな。だが、『アレ』はまだ……使うべきではないようだ」

シャドウは舌打ちした後、混沌の力を使ってソニックに接近し、連続攻撃を叩き込んだ。

ソニックは防御していたがシャドウの猛攻が上回り最後の一撃でソニックはダウンした。

「よし……！」

「マダダ……」

ダウンしたソニックはゆっくりと立ち上がる。

彼に宿る闇の闘志はまだ消えておらず、それどころかさらに燃え上がった。

ソニックの動きはますます速くなり、シャドウの攻撃を次々にかわしていく。

「くっ……！」

これがソニックの本気か、とシャドウは感じる。

ソニックとシャドウの動きは非常に敏捷で、他のメンバーの目には映らなかつた。

今のところ、戦況はシャドウが劣勢になっている。

「カオスブースト！」

「グアアアアアアアアアア!!」

シャドウは状況を打破するべく、カオスエメラルドの力を使って他方からの同時攻撃を放つ。

三回のチャンスで確実、かつ大ダメージを狙える技により、ソニックに大ダメージを与えた。

「……」

「ぐうううっ！」

しかし、ソニックもただやられるだけではない。

ソニックはホーミングアタックで、シャドウの急所を狙い定めた一撃を繰り出す。

互いに大きなダメージを食らった後、二人はもう一度構え直す。

「オマエハ、ホントウハホカノファイターガニクイノダロウ？」

ホカノファイターニフクシユウヲシタイノダロウ？」

「復讐……か。かつては僕もそう思っていたが、今の僕は違う」

そう言つて、シャドウはソニックに発砲をした。

ソニックはそれをひらりとかわすが、シャドウは熱く冷たい表情をしていた。

「……ナゼ、ミトメナイ。オマエハ、ヒトノオモイヲウケタアマリニ、タニンノイバシヨヲウバツタ、フトドキモノナノダゾ」

「そんな事を言う時点で、お前はソニックではない！ 人の思いは底なしとは言う。」

それは時に、絶望を呼び起こすものとなる。

それでも、人の思いというものは、時に希望を生み出す事がある。

その希望があるから、今、僕はこの場に立ち、お前と戦っている！」

「ウラギリモノハ、オトナシクシヌガイイ……」

「そんなの、僕が許さない」

普段は冷静沈着で、感情を表に出さないシャドウ。

しかし、相手に侮辱されたため、目の前の存在に対し怒りを露わにしている。

まだ、本気で怒ってはいないようだが……。

「オソイツ」

「遅いぞっ」

ソニックはシャドウの攻撃を避けながら、シャドウに確実にダメージを与えていく。

何とか隙を突けないかと、シャドウは相手の出方を伺いながら走る。

しかし、ソニックの動きは自分よりも遙かに速い。

(どうにかして隙を突けないか……)

「うぐうっ！」

防戦一方のシャドウに、ソニックの容赦ない一撃が入る。

「そこかっ！」

シャドウはソニックの背後を取り、拳銃で撃つ。

効果的な一撃を与える事に成功したシャドウだが、彼の反撃も後半から緩まる。

対照的にソニックの猛攻はさらなる激しさを見せ、シャドウを追い詰めていく。

防御するシャドウだが、シールドに罅入り、ついには砕け散り動けなくなる。

「油断したか……ちっ」

そしてシャドウはソニックの猛攻を食らい、ついにダウンした。

「……」

「ソニック……」

次で決着がつく、第三戦。

シャドウとソニックは互いに睨み合った後、大地を蹴り、拳による一撃を放つ。

与えたダメージは、シャドウの方が僅かに大きかった。

「カオスブースト！」

シャドウはカオスエメラルドの力を使い、さらなるスピードでソニックを連続攻撃する。

「……コロス」

ソニックは赤い瞳を光らせ、狙いを定める。

「させるものか！」

攻撃を止めようとするシャドウだが、タッチの差でシャドウに命中した。

その後も、第三戦はソニック優位で進んでいく。

シャドウは再びカオスエメラルドの力を使い、他方からの同時攻撃を放つ。

「グウウウウウ……！」

ソニックは全ての攻撃を食らってふらつく。

今がチャンスと、シャドウはソニックに近付く。

「ソニック！ これ以上戦っても無駄だ。その手を下げて、戦いをやめろ」

シャドウはソニックを説得し、戦いを終わらせたいという気持ちでいっぱいだった。

彼自身、このような一騎打ちは望んでいなかった。

今は闇の呪縛を受けているが、何度も説得すればいずれ戦いは終わる……。

シャドウはそう、信じていた。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

だが、ソニックは攻撃を緩めない。

ソニックは容赦なく、シャドウに襲い掛かる。

「……そうか……分かった」

ソニックが自身の説得に応じないと知ったシャドウは、覚悟を決めてリミッターを外した。

「今、楽にしてやる」

「……!!」

「逃がしはせん。カオスコントロール!」

ソニックは攻撃が届く範囲から逃れようとするが、

シャドウがカオスコントロールで動きを封じる。

その超反応は、まさしく”本気”のシャドウだった。

シャドウはソニックを取り逃がさないように、彼を強い力で握り締めめた。

「ハナセツ！ ハナセエツ!!」

「……心配するな、ソニック。自由じゃないのは、辛いだろう……。

独りぼっちは、寂しいからな……。共に行こう……。ソニック……」

シャドウは、ソニックがいつも見せる意地悪っぽい笑みを皆に見せた。

まるで、不老不死の自身に訪れる、最期のように。

「カオス………ブラスト!!」

そして、全てを吹き飛ばす真紅の衝撃波が、ソニックとシャドウを

包み込んだ。

「あ……ああ……ソニックさん……シャドウさん……どうして……どうして……！」

衝撃波が治まると、その場には青と黒のハリネズミが倒れ、拳銃と、サブマシンガンと、2つのリミッターが落ちていた。

それを見ていたしずえは、ショックのあまり膝から崩れた。

ダーズに操られたソニックを解放するためにシャドウがリミッターを外し、

ソニックと相打ちになったのだ。

二人が生きているのか死んでいるのか分からないほどの重傷を負っているのは目に見えていた。

「ソニック！ シャドウ！ しつかりしろ！」

マリオが倒れているソニックとシャドウに呼びかけるが、

二人は死体のように何も言わなかった。

「まさか、死んでいるのですか……？」

「で、でも、これをかければ……ヒーリング！」

「ライフアップ！」

ネスとリユカがソニックとシャドウに回復のPSIをかけるが、二人の傷は癒えない。

「あれ？ どうして起きてくれないの？」

「……二人から感じる生命の気配が弱いです。あなた達のPSIでは回復しないでしょう。」

つまり、この二人は……」

「そんな……」

ゼルダが悲しそうな顔で言う。

せつかく、ソニックを見つけたというのに。

せつかく、シャドウが彼を助けたのに。

こんな、最悪の結果で終わってしまうのだろうか。

その時だった。

『ビーー！』

「お、お前は……セレビーー!?!」

悲しみにくれるマリオ達の前に、セレビイのスピリッツが現れる。セレビイは「どうにかできるよ」とでも言うように宙に浮いた後、ソニックとシャドウに近付き、二人の周りをくるくると回転する。すると、倒れているソニックとシャドウの身体が宙に浮き、

淡い緑の光に包まれてソニックとシャドウの傷が見る見るうちに癒える。

マリオ達の思いが、今、奇跡を起こしたのだ。

そして、役目を終えたセレビイはそのままどこかに飛んでいった。恐らく、ベルのスピリッツボールの中に入っていったのだろう。

「……………」

シャドウはゆっくりと起き上がって、落ちていた2つのリミッターを装着する。

彼の隣で、ソニックも目を開けて立ち上がる。

最初にソニックが見たのは、シャドウの真紅の瞳だった。

「……………」
シャドウ……？ シャドウじゃないか！ まさか、こんなところで再会するなんて……………」

満身創痍だったのが嘘のような二人の顔色。

二人が再会できたのも、まさしく奇跡と言える。

ソニックは嬉しさのあまり、シャドウの手をぎゅっと握り締める。

「何をする」

「俺、闇の触手が絡みついてから意識がなくなって、自由がなくて苦しかったんだ。

でも、お前のおかげで自由になれたんだ」

ダースから解放してくれたシャドウに、ソニックはただただ感謝する。

シャドウはふと、ソニックと戦う前に言っていた事を思い出す。

「そうか……………」
僕はお前の自由を取り戻すために戦っていたんだな……………」
すっかり忘れていた」

シャドウは純粹なので、ただ一つのみを遂行し、それ以外は全く頭の中になかった。

それをソニックに指摘されたシャドウは、ふん、と後ろを向いてこ

う言った。

「まったく、ソニックの奴は相変わらず……」

「相変わらず、なんだ？」

「……お前に言う気はない」

ソニックとシヤドウ以外の一行は、そんな二人を見守っていた。

こうして、青と黒のハリネズミは感動の再会を果たすのであった。

61 　　アドベント・チルドレン

ダーズに操られたソニックは、シャドウの手により解放された。

「この僕が闇からお前を引きずり出すとはな」

「でも、おかげで自由を取り戻せたんだ。Thank you、シャドウ」

「別に、君に感謝された覚えはない」

相変わらず、シャドウは素っ気ない態度を取った。

これでようやくソニックとシャドウは再会した。

後は残っている仲間を助けて、ここから脱出する手段を探せばいいのだ。

「ソニック、あまり速く走ったら俺達は置いてけぼりになるからな」

「分かってるって」

クロムは念のためにソニックに釘を刺し、

シャドウと共に前に立って一行を率い、霧の森を進んでいった。

視界は悪かったが、ゼルダの魔法で何とか前が見えるようになった。

そして10分後、一行が霧の森を抜けると、リンクが北に何かを発見する。

「あれは……マスターソード?!」

「と、言いたいところだけど、とりあえず梟の像を調べないと」

こどもリンクは南に行き、梟の像の文章を読む。

「勇者の訪れを待つものがある。これってもしかして、ボクとリンクの事?」

「多分な」

文章を読み終わった後、一行はマスターソードがある場所に行く。

だが、マスターソードを守るように、闇の鎖に縛られた金髪の青年が立つ。

異世界の剣士、クラウド・ストライフだ。

「こいつは誰が助ける?」

「オレに任せろ! 久しぶりの出番だからな!」

ドンキーコングがぶんぶん腕を振る。

世界的には無関係の両者だが、ドンキーは久しぶりに戦えるので、かなりやる気満々なのだ。

「おりやああああっー！」

ドンキーはジャイアントパンチでクラウドを縛る鎖を打ち砕く。

すると、瞳が赤く染まったクラウドがバスターソードでドンキーに斬りかかってきた。

「うおっー！」

意外に身軽な動きで、クラウドの攻撃をかわすドンキー。

母体をダーズの支配から救い出すため、彼は戦う。

「セエイッー！」

クラウドはバスターソードから衝撃波を飛ばす。

「おらあー！」

ドンキーはパンチを繰り出すが、クラウドはドンキーの攻撃を回避する。

拳と剣がぶつかり合い、二人は距離を取り直す。

「そお……らあー！」

ドンキーはクラウドに突っ込んで転がる。

クラウドはドンキーの攻撃をその場回避でかわすが次に行ったパンチが命中する。

「……」

「うおっー！」

クラウドは空中から凶斬りを繰り出し、切り刻む。

ドンキーは、上にいたクラウドを拳で払い、クラウドのシールドを削っていく。

シールドブレイク直前でクラウドは右に回避し、空中からバスターソードを叩き込む。

その隙にクラウドはドンキーの攻撃が届かない場所に移動し、リミットゲージを溜める。

「……」

「うおあああっー！」

リミットブレイク状態になったクラウドはドンキーに突っ込んで切り刻む。

さらに、怯んだところに凶斬りが入る。

「こいつ、強いぜー！ でもよ、オレはもつと強い！」

そう言つてドンキーはジャイアントパンチをぶちかますが、

クラウドはドンキーの背後に回り込んで斬りかかる。

「くそっ！ もつと攻めないとダメかー！」

「……」

クラウドは距離を取つて衝撃波を放ち、再びドンキーを切り刻む。

その威力は高く、ドンキーは肩を押さえて蹲る。

「……」

苦しむ顔のドンキーを、クラウドは赤い瞳で睨みつける。

このままでは、ドンキーは倒されてしまう。

「やめろ、ドンキーー！」

「いやだ……オレは……諦めない……！ お前を助けるまで……オレ

は諦めない……！」

「……」

ドンキーの必死の言葉にも、クラウドは全く反応しない。

「目を覚ましてくれ……クラウド……！」

ドンキーがクラウドを攻撃しようとする、

クラウドがバスターソードによる凶斬りを繰り出す。

直後の切り返しをドンキーはシールドで防ぎ、クラウドを掴んで投げ飛ばす。

その後、すぐに突っ込んでドンキーヘッドバットでクラウドを地面

に埋め、

ぐるぐると腕を振る。

「間に合つてくれ！」

クラウドが抜け出すのが先か、ドンキーが最大まで力を溜めるのが

先か。

全員、固唾を呑んで見守っていた。

「クラウドオオオオオオオオオオオ！」

「クラウドオオオオオオオオオオオ！」

そして、クラウドがまさに抜け出そうとした直後。
ドンキーのジャイアントパンチがクラウドに命中、
クラウドは場外へと吹っ飛ばされるのだった。

「……………」

ドンキーにより、クラウドはダーズの呪縛から解放され、元の青い目に戻った。

「実は、僕達はかくかくしかじか……………」

シャドウは、これまでの事情をクラウドに話した。

キーラを撃破したが、新たな敵が現れて皆がバラバラになった事を話すと、

クラウドは理解して頷く。

「……………また同じ目に遭うとはな」

「同じ目?」

「一度、元いた世界で操られた事があってな」

はあ、と溜息をつきながらクラウドは左手で頭を押さえる。

「でも、もう大丈夫だぜ。元氣出せよ、クラウド」

「そうですね。貴方は何も悪い事はしてなかったでしょ?」

「二人とも……………俺を許してくれるのか……………」

「もちろんだ(です)!!」

マリオとヨッシーが、落ち込むクラウドを元氣付ける。

いつでもどこでも前向きなこの二人に、クラウドは僅かながら笑みを浮かべた。

「……………ありがとう……………」

その後ろでは、ドンキーがぶつぶつと呟いていた。

「そもそも助けたのはオレなんだけどな……………」

マリオ、クラウド、ヨッシーという人気の高い三人が今ここで再会を果たした。

そして、リンクはゆっくりとマスターソードがある場所に向かって歩く。

「さあ、勇氣よ、闇を打ち破れ!」

リンクがマスターソードを抜くと、マスターソードが輝き、大地を

覆う闇を打ち払った。

その様は、まるで鍵の形をした剣を持った勇者のようだった。

62 悪魔の子と呼ばれし勇者

シャドウ一行はクラウドを仲間にし、リンクはマスターソードを抜いて闇を払った。

マスターソードがある道を降りて、来た道とは逆の道に進む。

そこに立ち塞がるジョーカーを倒すと、何故か狙撃銃を落とした。

「神話世界に、なんで銃が落ちてるのだろうか」

「だが、この銃はまだ使えそうだ」

クロムが突っ込んだ後、シャドウは狙撃銃を拾う。

久しぶりに新たな銃を手に入れたため、シャドウは少しだけ興奮していた。

よく見ると、この道は以前に訪れた広場に繋がっていて、マロンが道を塞いでいる。

「……よし」

シャドウは早速、手に入れた狙撃銃を構え、狙撃体勢を取る。

そして、マロンに気付かれないうちに彼女を仕留め、スピリッツを解放した。

「流石シャドウだなー」

ソニックはシャドウの見事な狙撃に拍手する。

一行は広場に戻り、梟の像を確認する。

「04:40」と書かれてあったため、ネスがその通りに火を灯すと、広場の中央に闇の鎖に縛られた茶髪の少年が姿を現した。

最近スマブラメンバーになったばかりの勇者、イレブンだ。

「まさか、この人もダースの傀儡に……!?!」

こどもリンクは驚いて目を見開く。

彼は多彩な呪文と剣技を扱い、性格も良いとまさに勇者だった。

だが、彼もダースの呪縛には抗えなかったのだ。

こどもリンクはコキリの剣を振り、イレブンを縛る闇の鎖を切り裂く。

すると、操られたイレブンの周囲に、水色の髪を逆立たせた盗賊の青年カミュ、

金髪を三つ編みにした赤い服の少女ベロニカ、金のロングヘアをした緑の服の少女セーニヤが姿を現した。彼らは、イレブンと共に戦った仲間なのだ。

「来るぞー！」

「うん！」

こどもリンク、ソニック、ガオガエン、クロム、ストーム、ダックハントが同時に身構えたところで、勇者一行との戦いが始まった。

「はっ！」

こどもリンクは相手の様子を伺い、ソニックはイレブンにホーミングアタックを繰り返す。

ストームはベロニカに矢を射るが、矢は明後日の方向に飛んでいく。

「はあっ！」

「ばう！」

クロムはまず回復役から倒すため、セーニヤに会心の一撃を放つ。ハントは狙撃態勢を取り、セーニヤの急所を見えないガンマンが撃ち、一撃で倒した。

「よくもセーニヤを、メラミ！」

ベロニカは怒りで火炎弾をダックハントに放つが、シールドで防がれた。

さらにガオガエンがベロニカに突っ込んで投げ飛ばし、状況はこどもリンク側の優勢になった。

「そーれ！」

「……ザオリク」

だが、六人の優勢もここまで。

イレブンはこどもリンクのブーメランをかわした後、ザオリクでセーニヤを復活させる。

ダックハントの攻撃もベロニカには当たらず、

カミュの短剣による一撃がクロムにギリギリで命中し、大きなダメージを与える。

「くっ、攻撃が……！」

「当たらない！」

ソニックのホーミングアタックとクロムの剣も、カミュに避けられる。

「おらあああああ！」

「ベギラマ」

ガオガエンはセーニヤに渾身の一撃を放つも、セーニヤは上手く防御に成功。

そして、激しい火炎がクロムを飲み込み、クロムは戦闘不能になった。

「マジカ・スター……」

「バギ」

セーニヤは矢を放とうとしたストームを竜巻で切り刻む。

「うおっと、目を覚ませ！」

カミュの攻撃をソニックは何とかギリギリでかわし、ソニックはイレブンに連続で攻撃する。

「そこかっ！」

「DDラリアット！」

こどもリンクはカミュの急所をコキリの剣で突いて倒し、

ガオガエンはDDラリアットをセーニヤにギリギリで当てて倒す。

「マジカ・スターアロー！」

ストームはベロニカに会心の矢を放つ。

やはりスクルトが阻害していたが、ベロニカには致命的な一発だった。

「ばうばうーっ！」

「きやあーっ！」

そして、ダックハントの狙撃がベロニカに命中し、ついにベロニカを倒した。

「よし、後はイレブンだけだ！」

「ああ！」

ハントはfrisbeeでイレブンを怯ませ、その隙にソニックがホー

ミングアタックを放つ。

さらにガオガエンはイレブンにタツクルして怯ませ、こどもリンクの炎の弓矢が命中。

「トルネイドサーティーン!!」

そして、ストームの最後の切り札でイレブンが竜巻に包まれ、切り刻まれていく。

竜巻が治まると、そこには倒れているイレブンがいた。

「……僕は一体……何をしていたんだ……」

倒れているイレブンが、青い瞳を一行に向ける。

彼はダーズの呪縛から完全に解放されたのだ。

「イレブン、お前が気に病む事じゃないから、気にするな。ほら、立てよ」

戦闘不能から復活したクロムが、イレブンの手を握り、立ち上がりせる。

「ありがとう……。そうだね、もう過ぎた事だし。ところで、君は？」

「俺はクロム、こっちにいるのはこどもリンクだ」

「よろしくね」

「僕は勇者イレブン。よろしく」

クロム、こどもリンク、イレブンは互いに自己紹介をする。

同じ剣を使う者だけあって、三人はすぐに打ち解けた。

その後、クロムはシャドウ一行にイレブンを紹介し、

イレブンは改めてシャドウ一行の仲間に加わるのだった。

63 小さな大魔王（候補）

イレブンを仲間にしたシャドウ一行は、聖地から脱出するため、トライフォースがある火山に進み、入り口付近から奥に進む。しかし、火山には強力なスピリッツがいた。

「うわあ、メタグロスだ！ こいつ、硬いよ！」

てつあしポケモン、メタグロスのスピリッツはランスが苦戦しながらも解放。

フレイ&フレイヤのスピリッツはリンクが解放。

次に、分岐の銅像の文章をリンクが読む。

『知恵』から登るは修羅の道

「知恵、という事は、東側ですね」

一行は東側に進む。

そこで待っていたスピリッツは、西側以上に強力なスピリッツが多かった。

エース級のメガミュウツーYには、リトルマックとイレブンを挑んだ。

「そらっ！」

「う……頭が痛い」

リトルマックはメガミュウツーYに接近し、連続でパンチを叩き込む。

メガミュウツーYは念力でイレブンを浮かせ、一瞬だけ混乱させる。

しかしすぐに頭を振って理性を取り戻し、デインを唱えて反撃した。

「サイコキネシス」

「うああっ！」

メガミュウツーYは攻撃しようとしたリトルマックをサイコキネシスで攻撃する。

イレブンは隙を突いて勇者のつるぎで斬りつける。

その後、ライデインでメガミュウツーYにとどめを刺し、戦闘は終

わった。

「ベホイミー！」

イレブンは傷ついたマックに回復呪文を唱える。

「助かるぜ、イレブン。さて、次の相手は……」

一行が修羅の道を歩くと、機械化ファイオルン、通称メカルンがシャドウ達の前に現れた。

彼女もまたレジェンド級のスピリッツであるため、シャドウ、デデデ、フアルコ、

クロムは全力でメカルンに挑み、彼女を解放した。

「オレが相手だ！」

最後のレジェンド級スピリッツ・アキラにはドンキーが挑む。

互いにノーガードのぶつかり合いが炸裂し、

最後はドンキーのジャイアントパンチが決め手になりアキラは倒れた。

「エース級にレジェンド級がなんだって？」

ドンキーは腕をぐつと上げ、力こぶを作る。

今や彼らの力は、エース級やレジェンド級を大きく上回るようになったのだ。

「……お前は、ジュニア……」

「こいつも、ダーズに操られたみたいだな……」

一行が前に進むと、梟の像付近にあるピラミッドに、クツパの子、ジュニアが闇の鎖に縛られていた。

もしこの場にクツパがいたら、どんな反応をしていただろうか。

マリオはそう思いながら、闇の鎖をファイアボールで燃やし、ジュニアを解放した。

「コロス！ コロス！ コロス！」

「……来るぞー！」

「ええー！」

襲いかかるジュニアに、マリオ、ピチュー、クラウド、イレブン、しずえ、ランスは戦いを挑んだ。

「……」

ジュニアはメカクツパを四体召喚し、自らを闇のボールで被う。
メカクツパはカタカタと動き出し、ランスとピチューを攻撃する。
「闇のボールか……こいつは自然治癒力と防御力を高めるみたいだな」

シャドウが後方から六人にアドバイスする。

この闇のボールをどうにかしなければ、

ジュニアにまともなダメージを与える事はできないのだ。

「ジュニアちゃん、もともにもどるでちゅー！」

「グアアアアアアアアアア!!」

ピチューはジュニアにしがみつき、10まんボルトで痺れさせる。

ダメージは少なかったが、ジュニアを取り囲む闇のボールを少し剥がした。

ジュニアはクツパクラウンからボクシンググローブを出し、しずえを連続で殴る。

「はっー！」

イレブンはジュニアに会心の一撃を放ち彼の闇のボールを剥がす。

「メカクツパにはこれが効くぞー！」

マリオは手からアイスボールを乱射し、メカクツパを全て凍らせる。

その後メカクツパを飛ばし、別のメカクツパにぶつけて同時に破壊し、

全てのメカクツパを破壊した。

「ゲゲゲー！」

「うおっ！」

メカクツパが全滅した事を知ったジュニアは驚いてマリオに体当たりして攻撃する。

マリオはそれをかわした後、ファイアボールで闇のボールに穴を開ける。

「狙えー！」

「いくぞ、百裂スピア!!」

ランスはジュニアの闇のボールに開いた穴を槍で穿ち、ついに闇の

ベールを破壊した。

「やりましたよ、皆さん！」

「ああ、一気に攻めるぞ！」

「はい！」

しずえは道路標識を呼び出してジュニアを打ち上げ、

クラウドは飛び上がってバスターソードをジュニアに振り下ろす。

ジュニアは抵抗するが、マリオ達は攻撃の手を緩めない。

「凶斬り」

「かえん斬り」

クラウドはバスターソードで「凶」という字を書くように斬り、

さらにイレブンは炎を纏った剣を振る。

世界の根源を同じくする者同士の斬撃は、ジュニアの体力を確実に減らしていった。

「オノレ、オノレ……！」

「これでとどめだ！」

ジュニアは徐々に追い詰められ、焦る。

しかし、これで攻撃の手を止めるスマブラメンバーではない。

ランスはとどめに槍で十字に薙ぎ払い、ジュニアを倒すのだった。

「おかしいな、ここ最近の記憶がないよ。もしみんなが疲れたとしてもぼくは知らないよ」

マリオ達に倒され、正気に戻ったジュニア。

「大丈夫か？ ジュニア」

「うん、ぼくは平気、わつとと！」

ジュニアはクツパクラウンに乗りながらも、疲れからかふらついてしまった。

マリオはジュニアをクツパクラウンごと支える。

「あ、ありがと、マリオ」

「どういたしまして」

マリオとジュニアは、互いにお礼を言った。

「そういえば、ジュニアという事は誰かの子供か？」

「うん！ ぼくのお父さんは、クツパっていうんだ！ とっても強く

て、かつこいいんだぞ！」

ジュニアは両手を広げて、クツパの偉大さをシャドウに言う。
クツパの子供だけあって大胆だが、純粋な性格だ。

「……それで、クツパの子供はお前だけなのか？」

「ううん、他にも子供が七人いるよ。ぼくとは違うお母さんから生まれただけだね」

ジュニアはシャドウにきょうだいがいる事を話す。

実はコクツパ七人衆は表向きはクツパの部下だが、

本当はジュニアの腹違いのきょうだいなのだ。

「話は変わるけど、お父さんがどこにもいないね。どうしてなんだろう？」

「実は……」

シャドウは、ジュニアにこれまでの事情を話した。

「えーっ！ みんなとはぐれちゃったんだ！」

「そういう事だ……」

「でも、必ず会う事はできるから、そんなに落ち込む事はないぞ、ジュニア」

父に会えなくて残念がるジュニア。

そんな彼の肩に、マリオは優しく手を置いた。

「ありがとう、マリオ！ よし、やる気が出たぞ！」

「それで、この後はどうすればいいんだ？」

「ぼくがやるよ。それっ！」

ジュニアはハンマーを取り出し、

先の道にあつた岩に向かって振り下ろすと、岩が音を立てて崩れた。

「やるな、ジュニア」

「へっへーん！ どんなもんだい！」

「おかげで先に進めるようになった。さあ、いくぞ」

「おうー！」

こうして、シャドウ一行はダーズの呪縛からまた一人、ファイターを解放するのだった。

64 蘇る魔王・ガノンドロフ

ジュニアを仲間にしたシャドウ一行は、彼のおかげで通れるようになった道を歩く。

道を歩くと、巨大なヨツシーのボディに宿ったテイラノのスピリッツを発見する。

「テイラノさん、強そうですね〜！」

「俺が解放しよう」

ヨツシーはテイラノを見て目を輝かせている。

そのテイラノにはリユウが挑んだ。

「昇竜拳！」

戦いは、リユウが少しダメージを受けたが、苦戦せずに倒す事ができた。

「テイラノさんもリユウさんも、かっこよかったですよ〜」

「ありがとう、ヨツシー」

ヨツシーの拍手で喜ぶリユウ。

一行は左に進み、次の分岐をさらに左に行き、梯子の上をゆっくりと昇っていく。

すると、岩山の道が、遺跡の道に変わっていった。

一行を待ち受けていたスピリッツは、

リザードンのボディに宿ったフォルテイトウードのスピリッツだった。

「さあ、来い！」

フォルテイトウードにはリトルマックが挑んだ。

低重力化により、空中戦が苦手なりトルマックも楽に空中に浮けるようになった。

それでもフォルテイトウードが吐く炎に苦戦するが、

何とかリトルマックはフォルテイトウードを解放した。

道は次第に険しくなっていく、一行の表情も同じように険しくなる。

セレスのスピリッツには、ドンキーが挑む。

「こいつ、固いな」

セレスは結界を張っているため、ドンキーの力技がなかなか通らない。

また、セレスの反撃も意外にそこそこ強かった。

「おりゃあー」

ドンキーは隙の少ない弱攻撃でセレスを連続攻撃するが、彼女は近くにあった食べ物食べて大幅に体力を回復する。

「ちまちま攻撃してもダメか……なら、とっておきの一発だぜ！」

ドンキーは両手を組み合わせて振り上げ、勢いをつけてセレスの頭部へと振り下ろす。

その勢いによってセレスの脳は揺れ、まともな判断が難しくなった。

その隙にドンキーは腕を回して力を溜める。

数秒後にセレスは意識を取り戻すが、既に彼女の目の前にドンキーの拳が迫る。

「ジャイアントパンチ!!」

ドンキーの拳がセレスにクリーンヒットし、セレスは場外に吹っ飛んでいった。

「よし、倒したぜー」

「次の相手は誰だ……?」

セレスを倒した後、一行は険しい道を歩く。

そこには、リドリーのボディに宿った風の魔人グフーが待ち構えていた。

「ブフオフオフオフオ……」

「こ、怖いー」

グフーは不気味な笑い声を上げる。

しずえは彼の容姿と声で怯んでしまうが、何とか立ち直して身構える。

「グフーさん、わ、わたしが相手ですよー」

「キミ一人じゃ難しいから、ボクも手伝うよー」

しずえとランスは、グフーに戦いを挑んだ。

「風が強い……!」

グフーがいる場所では、向かい風が吹き荒れる。

これにより、グフーの行動力、回避力、抵抗力が大きくなった。

「喰らうがよい」

「きゃあ!」

グフーは空を飛んだあと、空中からしずえに雷の弾を放って攻撃する。

風属性のもう一つの側面、雷も操れるようだ。

しずえは何とか、シールドで攻撃を防いだ。

「高い場所にいるから攻撃が届かない……。でも、この攻撃なら!」
月落とし!」

「ブフオオオオオッ!」

ランスはジャンプして、落下しながらグフーを攻撃する。

その一撃が効いて、グフーは地上に落ちていった。

「えいっ!」

さらに、しずえは落ちていくグフーに釣り竿を引っかけ、彼を引き寄せた後にクラッカーで吹っ飛ばす。

「ブフオオオオオオオオ!」

「うわっ!」

「ひゃああっ!」

グフーは暴風を起こしてランスとしずえを上空に吹っ飛ばし、地上に落とす。

ランスがやった事を、そのままやり返したのだ。

「この……! グフーめ! やられたらやり返す、倍返しだ!」

ランスは槍をくるくると回し、グフーに突っ込んでいった。

槍がグフーに突き刺さった後、槍ごとグフーを投げ飛ばす。

「風車!」

「グオオオオオオ!!」

そして、槍を回してグフーに思いっきり突き刺し、グフーを場外に吹っ飛ばして撃破した。

「やったね!」

「わたし達、勝ちましたよ!」

ランスとせずえが勝利のハイタッチをする。

「これで、この道にいる全てのスピリッツは解放したな。残っているのは……」

シャドウが辺りを見渡すと、一番奥にファイターの影を発見した。

リンクがその影を見ると、眉をしかめた。

「……本当に解放するのか?」

「リンク、知ってるのか?」

「知ってるも何も、俺の宿敵だからな」

「という事は……」

一行が重い足取りで歩いていくと、黒衣を纏った赤毛の男が闇の鎖で縛られていた。

力のトライフォースを奪った魔王ガノンドロフだ。

宿敵同士であるため、できれば「仲間」にしたくなかったが……。

「あのプライドの高いガノンがまた誰かに利用されて本人は屈辱だそうだからな……仕方ない」

リンクはマスターソードを抜き、ガノンドロフを縛る闇の鎖を切り裂いた。

すると、ガノンドロフは闇のオーラを放ち、モリブリンとスタルベビーを召喚した。

「いいか、こいつは俺の宿敵だ。でも、それだけで見捨てていい奴じゃない。

俺達が今、戦うべき敵は、ダーズだからだ!」

リンクはそう言つて、マスターソードを掲げた。

「今は一時休戦……というわけですよ!」

「決着は目玉ヤローを倒してからだ!」

こどもリンク、ゼルダ、ファルコ、ガオガエン、ランスも領いて、戦闘態勢を取った。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

ガノンドロフが叫ぶと同時に、戦闘が始まった。

「えいつ、えいつ!」

こどもリンクはモリブリンに鋭い斬撃を放つ。
一度は外したものの、もう一度放った事でモリブリンは切り伏せられる。

同時に、統制を失ったモリブリンが逃げ出す。

「よし、俺達は雑魚を倒すぞ！」

「オツケー！ ワドスピアスロー！」

「バードウィップ！」

ランスが槍を投げ、ファルコが回し蹴りを行う。

これによりスタルベビーはバラバラになった。

「後は骨も残さず砕くだけだ！」

ガオガエンがスタルベビーの骨を砕き完全に倒す。

「ガノン、また操られてるのか!?!」

以前もガノンドロフはハオスに操られた事がある。

ガノンドロフにとってはかなりの打撃だ。

今回もまた、第三勢力に操られている……ならば、戦って倒す、とリンクは決めた。

「たあつ！」

「グオオオオツ！」

リンクは気合を込めた斬撃をガノンドロフに放つ。

闇に属するガノンドロフには絶大な威力だ。

「……」

「うわあ！」

「うおつ！」

ガノンドロフは大剣を振り回して薙ぎ払う。

ランスとガオガエンは攻撃を食らい、浅くはない傷を負う。

「ファイアバード！」

ファルコはガノンドロフとスタルベビーの攻撃をかわし、ファイアバードで反撃する。

「DDラリアット！」

「グアアアアツ！」

ガオガエンは両腕を回し、何とかガノンドロフに大ダメージを与え

る。

だが、ガノンドロフは闇の力で体力を回復した。

「しぶといなあ」

「しかも雑魚が多いしな……」

「とりあえず、雑魚から倒そう!」

こどもリンクはスタルベビーにブーメランを投げて牽制する。

「フレアドライブ!」

その後、ガオガエンは炎を纏った突進でスタルベビーを全員倒した。

「ガノン、今正気に戻してやるからな!」

リンクは繰り返し、ガノンドロフを斬りつける。

ガノンドロフの表情は苦痛に歪んでいる。

「ガノン、あなたはいかなるものにも屈しないはずです。どうか、自分を取り戻してください!」

「グオオオオオオオオオオ!!」

そして、ゼルダが魔力を纏った手刀を放ち、ガノンドロフを切り裂いて倒した。

「……また、操られてしまったとはな」

何とか、リンク達はガノンドロフをダークの呪縛から解放した。

ガノンドロフは悔しそうな表情をしている。

「すまないな……気づけなくて」

「いや、そんな事はどうでもいい。勝負はお前の勝ちだ」

「……」

ガノンドロフは珍しく、素直に負けを認めてくれた。

リンクとゼルダは複雑な表情になるが、すぐに微笑みを浮かべた。

「……じゃあ、力のトライフォースを返してもらおう」

「私達が勝ちましたからね」

「ああ……。力よ!」

ガノンドロフはそう言って、力のトライフォースを解放した。

「勇気よ!」

「知恵よ!」

「今、三つは一つになる!!」
リンクも勇気のトライフォース、ゼルダも知恵のトライフォースを解放する。

三つの三角が合わさった事で、ついにトライフォースが完成した。
「これが……トライフォースか……」

シャドウは完成したトライフォースを見て驚く。
すると、強烈な地震がシャドウ一行を襲った。

「皆、踏ん張れ!」

マリオが皆に指示を出し、必死で地震に耐える。

しばらくして地震が治まると、先ほどまで岩で覆われていた場所の岩が全てなくなり、

禍々しい漆黒の城が現れた。

まやかしを打ち破り、魔王の城が出現したのだ。

「……ついに魔王のお出まし、か」

聖地を支配しているのは、ガノンドロフにしてガノンドロフではない、魔王ガノン。

彼を倒せば、シャドウ達は聖地から脱出できる。

一行はぐつと拳を握り締め、魔王ガノンを倒す決意を固めた。

「さあ、行くこうぜ。シャドウ」

「ああ」

一行は元来た道を戻り、魔王の城へと辿り着いた。

この中に、魔王ガノンが待ち構えている。

特別な仕掛けなど全くない、真っ向勝負だ。

一行が魔王の城に入ると、ガノンドロフが姿を変えた。

二本の曲がった角、豚のような鼻、二振りの大剣……。

最早、ガノンドロフの面影などどこにもなかった。

「……こいつは、僕が相手する」

最初に魔王ガノンの前に出たのは、シャドウ。

彼は真紅の瞳と銃を鋭く魔王ガノンに向けている。

「お前と共闘するとはな」

「自分同士で戦うなんて、複雑な気分だが……まあ、やるしかない……」

な」

「知恵のトライフオーズの守護者として、私は、必ず魔王に勝ちます」
リンクはマスターソード、ガノンドロフは大剣を構えている。

ゼルダも知恵のトライフオーズの守護者として、魔王ガノンを迎え
撃つ体勢を取った。

「……いくぞ!!」

シャドウ、リンク、ゼルダ、ガノンドロフは、魔王ガノンとの決戦
に臨んだ。

65 大魔王・ガノン

魔王ガノンとの決戦が、始まった。

決戦に挑むのは、リンク、ゼルダ、ガノンドロフ、そしてシャドウの四人だ。

「弱点は尻尾だ！ そこを狙え！」

「ああ、カオススピア・バラージ！」

シャドウは無数の光の矢を魔王ガノンに放つ。

突き刺さった部分から爆発が起こり、魔王ガノンに大ダメージを与える。

「行きなさい、ファントム！」

ゼルダは魔力でファントムを構築する。

ファントムは魔王ガノンを切り刻んだ後、塵に戻っていった。

「斬岩」

ガノンドロフは大剣で魔王ガノンを斬りつける。

大剣は命中率が悪かったが、ファントムの援護で当てる事に成功。

「おりゃあっ！」

リンクは魔王ガノンの下をくぐり抜け、尻尾目掛けて斬撃を繰り出す。

魔王ガノンは大ダメージを受けながらも、四人の様子をじっと伺っている。

「一体、何をするんだ……？」

「リンク、油断大敵です。相手は強烈な攻撃を仕掛けるのかもしれない」

「ありがとう、ゼルダ」

ゼルダの言う通り、何が来るのか分からない。

リンク達は油断せず、魔王ガノンを睨み返した。

「カオスブースト！ はっ！ ふっ！ いくぞ！」

シャドウはカオスエメラルドの力で速度を速め、魔王ガノンに連続で打撃を与える。

リンクは回転斬りを繰り出し、古代兵装・剣を抜いて魔王ガノンに

癒えない傷をつける。

ゼルダはデインの炎を放って遠距離から攻撃し、ガノンドロフは大剣と拳で攻撃した。

「まだ攻撃をしない……か」

「いつ強烈な攻撃が来るかは分かりませんよ」

「ああ、決して油断してはならない」

一瞬の油断が死を招く。

シャドウ、リンク、ゼルダ、ガノンドロフは緊張感を持って魔王ガノンと戦う。

「はあっ！」

シャドウは狙撃銃を構え、魔王ガノンの尻尾を狙撃する。

狙撃できる余裕がなくても成功するほど、シャドウは銃の扱いに長けていた。

「半分削ったぞ」

魔王ガノンの動きが少し鈍る。

これで、魔王ガノンの体力は半分になったのだ。

「一気に行くぞ！」

「はい！」

ゼルダは魔法で魔王ガノンの動きを制限し、ガノンドロフは大剣を一閃する。

そして、リンクは魔王ガノンに突っ込んでマスターソードで連続で斬りつけた。

「グオオオオオオオオオオオオオ!!」

「……！」

魔王ガノンは腕を交差させて力を溜め、ビームでシャドウとゼルダを薙ぎ払った。

巨大な岩を一瞬で泥に変えるほどの威力を持つそのビームを、シャドウは避ける事ができなかった。

ゼルダは何とか緊急回避でかわすが、かわした後には、瀕死のシャドウがいた。

「……なんて威力だ……。身体が動かん……」

「大丈夫ですか、シャドウさん！ 勇気の女神フロルよ、彼の者の傷を癒したまえ！」

ゼルダはフロルの力を借りて、瀕死のシャドウの傷を癒した。

これでシャドウはまた、戦えるようになった。

「グオオオオオオオオオオ!!」

攻撃を食らい続け、攻撃的になった魔王ガノンは、その肉体から禍々しい瘴気を発する。

周囲の空気が不快な湿気を孕み始める。

今、魔王ガノンの近くにいると、まともに攻撃ができなくなるため、シャドウ達は魔王ガノンから一旦離れた。

「グオオオオオオオオオオオオ!!」

「カオスバースト！」

「力の女神デインよ、その炎で悪しき者を焼け！」

魔王ガノンは両腕を交差させ、再び極太ビームを放った。

シャドウとゼルダはビームをかわし、カオスバーストとデインの炎で反撃する。

「はあっ！」

「でやっ！」

「ウグオオオオオオオオ!!」

リンクとガノンドロフは、剣で魔王ガノンの尻尾を切り裂く。

宿敵同士の二人だが、剣の腕前は互角だった。

「グオオオオオオオオオオオオ!!」

「効かん」

「当たりません！」

シャドウとゼルダは魔王ガノンのビームをかわす。

流石に三度目となれば、行動パターンも読める。

「スピッキック」

シャドウは魔王ガノンの尻尾に拳銃を撃った後、回し蹴りを繰り出して追撃した。

「斬岩」

「フアントム！」

ガノンドロフとゼルダが呼び出したファントムの斬撃が、魔王ガノンに命中する。

これにより、魔王ガノンは瀕死に陥り、同時にリンクの身体も光る。最後の切り札を発動する事ができるようになった。

「今です、リンクー！」

「あいつにとどめを刺せ！」

「ああー！」

リンクは古代兵装の弓矢を取り出し、弦を引いて魔王ガノンを狙った。

「とどめだ、魔王ガノン！ 食らええええええええ！！」

リンクが弦を離すと、無数の青い光の矢が魔王ガノンを貫く。

古代兵装・矢が魔王ガノンの体中に突き刺さると、刺さった部分から爆発が起こる。

その爆発が魔王ガノンを包み込み、やがて青い大爆発が起こった。

そして——大爆発が治まると、魔王ガノンの肉体は完全に消滅した。

彼のスピリッツは、そのまま空に飛んでいった。

リンク、ゼルダ、ガノンドロフ、シャドウは、疲れが溜まったのか、ばたりと倒れた。

「お疲れ様、だな」

意識を失った四人に、クラウドがケアルをかける。

数分後に四人は意識を取り戻した。

「俺達……勝ったんだな……」

「そのようみたいですな……」

そう、リンク達は魔王ガノンに勝利したのだ。

シャドウが立ち上がり、辺りを見渡すと、城からは既に邪悪な気配が消えていた。

「聖地は、闇から完全に解放されたみたいだな……」

魔王ガノンを倒した事で、闇に包まれた聖地が徐々に光に包まれようとしていた。

まるで、大きな敵を打ち破った四人の戦士、

シャドウ、リンク、ゼルダ、ガノンドロフを祝福するかのようだった。

そして、魔王の城に大きな白い光の渦が出現する。

「この光は……!」

「もしかして、聖地から脱出できるのか……!?!」

シャドウが光の渦を覗き込むと、さらに激しく渦巻いた。

彼はそこに飛び込めば聖地を出られると推測した。

「飛び込むぞー!」

「ああ!」

リンク達は頷くと、シャドウと共に光の渦の中に飛び込んだ。

66 左手の従者は魔法を操る

その頃……。

「あくあ、なんでこんな場所に飛ばされたのかしら」

「仕方がないだろう、想定外だったからな」

死神の女性、ベルが愚痴を吐きながら歩いていく。

ベル達もまた、謎の敵が襲撃した事によりカービィやシャドウなど、他のスマブラメンバーとはぐれてしまった。

今、周りにいるのはリーダーのベルの他に、サムス、フォックス、ファルコン、プリン、

クツパ、ピーチ、ルカリオ、デイドーコング、トウーンリンク、オリマー、りょう、

シユルク、マール、パツクンフラワー、ジョーカー、アルトリアの17人だ。

「とにかく、先に行くしかないみたいね」

四方八方は闇で覆われており、行ける場所は吊り橋のみ。

もし、足を踏み外せば……そう思うと足がガクガクと震え出す。

だが、立ち止まってしまうまで経っても前には進めない。

「こ、こわいでしゅ……」

一行は吊り橋を慎重に渡っていく。

ミシツ、ミシツ、という音が、一行の不安を煽る。

「プリン、僕がいるから大丈夫だよ」

怖がるプリンを、シユルクは元気づける。

といっても、プリンの体重は軽いのだが、問題はこの中で最も重いクツパだ。

「我輩が渡れば、吊り橋は落ちてしまうのだ。一体、どうすればよいのだ？」

「あまり気は進まないけどね。ド・テラ・デ・ヴェン！」

ベルは精神を集中し、クツパにレビテーションの呪文を唱える。

すると、クツパの身体がゆつくりと宙に浮いた。

「か、身体が軽いのだ！」

「これはレビテーションという、様々なものを宙に浮かせる魔法よ。

これなら、あんたを安全に向こうに運べるわよ」

クツパは吊り橋の上を浮きながら通り過ぎる。

これで、クツパの重さで吊り橋が落ちる事はなくなった。

「ありがとうございます、ベル」

「ええ、どういたしました」

アルトリアはベルに笑顔でお礼を言った。

こうして一行が何とか吊り橋を渡り切ると、魔獣ゴモラのスピリッツに遭遇した。

向こうは分厚い黒い雲に覆われていて、スピリッツを解放しなければ先に進めないようだ。

「これでおしまいっ！」

ピーチが魔獣ゴモラのスピリッツを解放すると、分厚い雲が晴れ、先に進めるようになった。

「何が待っているのかしら」

ベル達は大きな裂け目が中央にある、円形のエリアをぐるっと回っていく。

そのまま先に進もうとすると、クレイジーハンドと虚ろな目のメイドが立ち塞がった。

「おねえさん、だれでしゅか?」

「……ワタクシハクレイジーハンドサマニツカエル、ドリイ・ナハツエーラーデゴザイマス。」

イエ、イマハダースサマニオツカエスルミデス」

「グオオオオオオオ」

メイドは機械的な声で、ドリイと名乗った。

クレイジーハンドは相変わらず暴れ回っている。

彼女が言う「ダース」こそ、ベル達が相手になる新たな敵だろう。

「クレイジーハンドまで操られるなんて……でも」

ベルは落ち着いてクレイジーハンドの様子を見る。

すると、クレイジーハンドが偽物だと分かった。

「こいつは、本物のクレイジーハンドじゃないわ」

「どういう事……?」

「以前にやったマスターハンドと同じ、コピーよ」

このクレイジーハンドはダースの手駒に過ぎない。だがコピーとはいえ力は本物にも引けを取らない。

ベルは油断せず、大鎌を構える。

「用意はいいかしら?」

「ええ、できています」

「私もよ」

「やらなきや!」

アルトリア、ピーチ、マールは武器をクレイジーハンドとドリイに向ける。

「しずえが悲しむ顔を見たくないから、僕も頑張る」

「私にも帰るべき場所があるからな」

りょうとオリマーも戦闘態勢を取った。

「……さあ、戦闘開始よ!!」

ベル、アルトリア、ピーチ、オリマー、りょう、マールは、

操られたクレイジーハンドとドリイに戦いを挑んだ。

「グオオオオオオオオ!!」

「なんだ……この震えは……!」

クレイジーハンドは闇の波動を放ち、ベル以外の全員を恐怖で怯ませる。

五人は思わず、攻撃の手を止めてしまう。

「ナイトメア!」

ベルは大鎌を勢いよくクレイジーハンドに投げる。

すると、ドリイは杖を構えて障壁を作り出した。

大鎌が障壁に命中すると障壁は砕け散るが、ドリイとクレイジーハンドにダメージはない。

「クレイジーハンドサマハ、ワタクシガオママモリイタシマス」

操られたドリイは、機械的な声色で話す。

ベルは額に汗を掻きつつ、戻ってきた大鎌をしっかりと握り締める。

「ネムリナサイ……ラ・ポク・デ・イス！」

「ZZZZZZZZ……」

ドリイは杖を回し、呪文を唱えて無味無臭の誘眠性ガスを発生させる。

ベル以外の全員はドリイの魔力に耐えられず眠る。

その隙にクレイジーハンドはオリマーに爆弾を落として攻撃する。

「ぐっー！」

オリマーは衝撃で目を覚ます。

ドリイは杖から魔法の矢を放って追撃した。

「なかなかやるな……」

「スベテハクレイジーハンドサマノタメニ」

「ならば、まずは君を眠らせるしかないようだ」

オリマーは攻撃力が高い紫ピクミンを三匹ともドリイに投げつける。

強力な攻撃を食らったドリイは戦闘不能になった。

「後はクレイジーハンドだけね。でやああつー！」

ベルは炎を纏った大鎌を振り回して攻撃する。

クレイジーハンドは空を飛び、中指を突き出してりょうように体当たりする。

「うわっー！」

その衝撃でりょうは目を覚まし、軽く吹っ飛ぶ。

次に、クレイジーハンドは大量の爆弾を落とすが、

ベルはそれを全てかわし、背後に回り込んで大鎌で斬りつける。

「グギャアアアアッー！」

「それっー！」

ベルの一撃で、クレイジーハンドは墜落した。

りょうはボウリングの玉を落として攻撃する。

「とどめよー！ ダウンリーパー！！」

「グアアアアアアアアアアア！！」

そして、ベルがクレイジーハンドを鎌で刈り取り、クレイジーハンドは爆発四散する。

戦闘はベル達の勝利に終わるのだった。

「……ここは、どこでしょうか。私は、わたくし一体……」

戦闘が終わり、気絶していたドリイは目を覚ます。ダーズに操られていた記憶は、彼女にはなかった。

「あ、ドリイ、目が覚めたのね。おっはよー」

ベルはドリイに手を振って声をかける。

「……ベル？」

「あれ？ ドリイって、ベルと知り合いなの？」

「話を聞きたいところだけどちよつと休んでからね」

ベル達は安全地帯にドリイを運び、そこで彼女を休ませた後、事情を話す。

「……というわけで、私達はここから脱出する方法を考えているのよ」

「なるほど……そして、申し訳ありませんでした」

ドリイは操られた事を皆に謝罪する。

「気にしないで、自分の意思じゃなかったでしょ？」

「ガブガブガブ！」

『許してやるよ』と言っているのだ」

「あ、デイディーさんに、パツクンフラワーさん……」

わたくし私を許してください、ありがとうございます」

デイディーとパツクンフラワーが落ち込むドリイを元気づけた。

パツクンフラワーの言葉はドリイには分からなかったが、

クツパに翻訳してもらった事で理解できた。

「ところで、あんたが操られた時に言っていた、ダーズつてのは一体どんな奴なの？」

「混沌と闇の化身ダーズ……彼は、目玉に触手がついた不気味な姿をしておりました」

「！」

ダーズの特徴を聞いて、ベルは思い出した。

キーラを倒した時に現れた彼こそが、ダーズだと。

「分かったわ！ そいつがダーズつていうのね！ ……で、ドリイはこれからどうするの？」

「クレイジーハンド様がない以上、

貴方達についていくという道しか、今の私にはありません」

つまり、ドリイが仲間になる、という事なのだ。

もちろん、仲間は多い方が楽に冒険できる。

ベルは頷くと、ドリイに左腕を伸ばし、彼女の右腕と共に握手した。

「じゃあドリイ、私達と一緒に行きましょう！」

「ええー！^{わたくし}私の魔法を是非見てくださいね！」

こうして、クレイジーハンドに仕えるメイド、ドリイ・ナハツエー

ラーが仲間になった。

彼女の魔法は、この闇の世界でも役立つ事だろう。

67 未来を知る王女

クレイジーハンドに仕えるメイド、ドリイを仲間にした一行は、広場を後にして東に歩いた。

古いパイプがたくさんあり、大小様々な歯車も置かれている。

「見て、スピリッツよ！」

すると、デデデのボディに宿ったクラッコのスピリッツを発見した。

「我輩が相手だ！」

クラッコのスピリッツにはクツパが挑戦し、デデデ(?)との重量級対決となった。

護衛のピカチュウがいたが、クツパはあっさりとクラッコの解放に成功した。

「伊達に大魔王と呼ばれてはいないのだ！」

クラッコを解放すると分厚い雲が晴れる。

しかし、見えない茶色の雲が邪魔をしていた。

ベルは精神を集中し、雲で隠れた場所を目星する。

「みんな、私についてらっしゃい」

「うん」

ベルは落ち着いて雲で覆われた道を通り抜け、それ以外の全員は彼女についていく。

(どんなに隠していようと、死神の目は誤魔化せないのよ)

死神であるベルは見えないものを見る事ができる。

それは、探索で大いに役立つ能力だった。

おかげで無駄に戦闘せず済み、一行は無事に歯車エリアに着いた。

「なんと！ これほどまでに機械が多いとは」

「まさに発条《ぜんまい》仕掛けね……」

(なんだか、緊張するわ……)

(そうだな……)

ベルとドリイが口を開けながら歩き、ピーチとオリマーは緊張して

いる。

一方で、アルトリアとサムスは表情一つ変えずに淡々と歯車の上を歩いていた。

「皆、慌てないでくださいね」

「こういう時こそ落ち着くんのだ」

「は〜い」

一行が歯車の上を歩いていると、東にロキのスピリッツを発見した。

「こいつは俺が相手だ！」

エース級のロキには、フォックスが挑んだ。

カードと時空魔術を武器とするロキにフォックスは苦戦するが、

アイテムに気を取られている隙にダメージを与え続け、何とか彼を解放した。

ロキを解放すると分厚い雲が晴れ、たくさんの赤い水晶と大きな歯車が見えた。

「雲で覆われて見えないわね。でも、迷わないで」

「うん」

サムスを先頭に、歯車と霧の中を歩いていく。

途中でメタナイト、デンリユウ、オメガリドリーのスピリッツと遭遇、

それぞれオリマー、ジョーカー、シユルクが解放した。

オメガリドリーはレジエンド級だったので、シユルクはかなり苦戦したようだ。

「はあ、はあ、はあ……こんなの、何度も相手にしたから、ね……」

シユルクはふらつきながらも、しっかりモナドを持っている。

機械相手にはシユルクはそれなりに強いようだ。

すると、分厚い雲が晴れ、縛られているファイターが見えた。

クロムの長女で、未来を知る王女・ルキナだ。

「オトウ………サマ………イマ………ドコニ………」

ルキナは操られながらも、必死で抗っている。

この場にマルスやクロムがいたら、彼らはどんな反応をしていただ

ろう。

「……彼女が苦しむ姿は見えてられません！」

そう言って、アルトリアはルキナを縛る黒い鎖を不可視の剣で切り裂いた。

「ウ……ウ……ウアアアアアアアアア!!」

すると、ルキナは両手で頭を押さえた後、裏剣ファルシオンを構えて襲ってきた。

そして、彼女の周囲にマーク、ウッド、シンシアの幻影が現れる。

「今、助けます！」

「せめて痛みを知らずに安らかに死になさい」

「いや、ルキナが死んだらまずいってば！」

トウーリンクとアルトリアは剣、ドリイは杖を構える。

ジョーカーもペルソナ「アルセーヌ」を召喚した。

「いくぞ、デイディー！」

「おうっ！」

フォックス、デイディーも身構え、戦闘が始まる。

「ウアアアアアアアアアアア!!」

「はああああああああああ!!」

アルトリアの剣とルキナの剣がぶつかる。

二人は同時に飛び退き、様子を伺う。

「えいっ！」

「アアアッ！」

デイディーはルキナの攻撃をギリギリでかわし、

黒いペガサスに乗っているマークに同じくギリギリでキックを当てる。

「ペガサスが眩しいな……なら、これで！」

ジョーカーは漆黒の矢を放ちシンシアを攻撃する。

シンシアはギリギリで抵抗し、ダメージを抑える。

「はあっ！ はああああっ！」

フォックスはキックとパンチを駆使してウッドを追い詰め、スマッシュ攻撃で吹っ飛ばした。

「サンダー」

「うわっ！」

マークはトウーンリンクにサンダーを放つ。

トウーンリンクが痺れた隙に、マークは槍で追撃。

「エエエエイツ！」

「うわっ！」

シンシアは光の槍でジョーカーを突き刺す。

闇属性のアルセーヌには効果が抜群だ。

「ジョーカーに何するんだ！」

「キヤアアアッ！」

フォックスはブラスタでシンシアが乗っているペガサスを撃ち、

墜落したシンシアを回し蹴りで吹っ飛ばした。

「ここまでおいで！」

「やつ！」

デイディーは仕掛けたバナナの皮をルキナに踏ませ、転ばせる。

その隙にトウーンリンクはルキナを斬りつけ、ジョーカーはマークをナイフで攻撃する。

「マーベラス・コンビネーション」

「ぐあああああっ！」

ルキナはフォックスを流れるように連続で斬る。

シールドで防御する隙も無く、フォックスはまともに攻撃を食らい重傷を負う。

「デイアー！」

ジョーカーはフォックスに回復魔法を唱えた後、マークをナイフで斬りつける。

「ラ・テラ・マ・ギ・ラ・テラー！」

ドリイは杖を振り、呪文を詠唱して杖をルキナ達に向ける。

すると、アルトリア達の目の前に情報が現れた。

魔法の目で全てを見通す呪文、サーチアイだ。

「ルキナはシールドで防御し、マークは私に渾身の^{わたくし}一撃を放つでしよう」

「ならば、これです！」

「ウアッ！」

アルトリアは防御するルキナを掴み、後ろに投げ飛ばす。狙いは決まり、ルキナは転倒する。

「あつたれ〜！」

「それっ！」

デイデューは転倒したルキナにピーナッツ・ポップガンで追撃する。

さらにフォックスがファイアフォックスで攻撃。

トウンリンクはマークを勇者の弓で攻撃した。

「ド・ゲイト・デ・テラ・マ・ギ！」

「……」

「きやあ！」

ドリイは魔法の矢を放ちマークに重傷を負わせる。

マークは最後の抵抗とばかりにドリイに渾身の一撃を放った後、倒れた。

「これでとどめです、ストライク・エア風王鉄槌!!」

「ウワアアアアアアアアアアア!!」

そして、アルトリアが剣を振り抜いて纏っている風をルキナに叩き付け、

ルキナを場外に吹っ飛ばすのだった。

「……はあ、はあ、はあ……あれ、私は一体……」

ダーズの呪縛から解放され、正気に戻ったルキナは、ぱちぱちと瞬きしていた。

アルトリアは笑みを浮かべてルキナに手を伸ばす。

「大丈夫でしたか、ルキナ殿？」

「ア、アルトリアさん……うぐっ！」

ルキナは先程の戦闘で受けた痛みが激しく、まだまともに立てなかった。

「分かりました、貴女が治るまで待ちましょう」

アルトリアはルキナの痛みが引くまで、彼女を待っている事にし

た。

しばらくして、ルキナの痛みが完全に引き、彼女はゆっくりと立ち上がった。

「私を助けてくれてありがとうございます」

ルキナはベル一行にお辞儀し笑顔でお礼を言った。

だが、この状況を見て、笑顔はすぐに消える。

「それにしても……ここは一体、どこでしょうか。ルフレさんも、お父様もいないなんて……」

この暗闇の世界に、クロムやルフレはいない。

ルキナは寂しさから、少し塞ぎ込んでしまう。

「確かに、あなたの仲間がいないのは寂しいわね。でも、私達だって同じ気持ちよ」

「えっ……？ どういう事ですか？」

「私達は光の世界で大きな敵を倒したんだけど、触手と目玉の化け物・ダーズが出てきて、

みんながバラバラになっちゃったの」

ベルはルキナに簡潔に事情を話す。

世界に異変を起こしたキーラを倒したと思いきや、

新たな敵・ダーズが襲来してスマブラメンバーは散り散りになったのだ。

「貴女一人が辛い目に遭う必要はありません。苦しい事は分かち合いましょう」

「はい……」

ルキナは故郷では非常に辛い目に遭い、相当なストレスが溜まっていた。

それを知ったアルトリアは、ルキナの負担を少しでも和らげようとした。

「ありがとうございます。私、皆さんと一緒にいきますね！

お父様やルフレさんを見つuckerために……」

ルキナは立ち上がるとアルトリアの手を握り、アルトリアについていく事を決めた。

クロムやルフレを見つける事ができる、と信じて。

「じゃあ、行きましよう、ルキナ！」

「はい！ ベルさん！」

こうして、未来を知る王女が、死神一行の新たな仲間に加わるのだった。

68 突入！ ドラキユラ城

未来を知る王女・ルキナを仲間にしたベル一行は、歯車を歩きながら出口を探していた。

冷静なサムスト、勘が鋭いベルがいるため、一行は大して迷わずに歯車を抜け出した。

パツクンフラワーがクイツクマンを解放した後、一行が出会ったのはサイボーグ忍者。

「俺に生きる実感をくれ……！」

「心の怪盗、見参。その闇の鎖、いただくぞ」

サイボーグ忍者には、ジョーカーが単独で挑んだ。

怪盗と忍者の一騎打ちが始まる。

「うっ！」

「そうだ、それでいい」

「いい夢を見るよ」

サイボーグ忍者は高周波ブレードでジョーカーを切り裂く。

ジョーカーは反撃でサイボーグ忍者に針を撃ち込み怯んだところに渾身の一撃をぶつける。

サイボーグ忍者とジョーカーは互いの攻撃を敏捷な動きでかわしながら隙を伺う。

「な、なんなのだ、あの動きは？」

クツパは二人の動きについていけなかった。

サイボーグ忍者のブレードとジョーカーのナイフがぶつかり合い、鋭い音が戦場に鳴り響く。

「戦いの基本は、格闘だ」

「しまった！ ぐああ！」

だが、サイボーグ忍者はジョーカーが自身を観察している隙に、彼の腹部をブレードで斬りつけ、重傷を負わせる。

「とどめだ」

「ジョーカー！」

「心配はいらない。奪えつ、アルセーヌ！」

重傷を負ったジョーカーは、アルセーヌの特殊能力「逆境の覚悟」を発動。

自身の能力を一時的に大きく上げ、とどめを刺そうとしたサイボーグ忍者の攻撃をかわす。

「何っ!?!」

「エイハー!」

「うああああああああ!!」

そして、漆黒の矢をサイボーグ忍者にぶつけ、サイボーグ忍者を倒した。

「何とか片付いたな……」

ジョーカーはナイフと銃を鞘に収め、自身のペルソナのアルセーヌもしまった。

「いたいのとんでけ!」

ピーチは回復魔法を唱えて、ジョーカーの傷を癒した。

その後、サイボーグ忍者のスピリッツは、スピリッツボールの中に吸い込まれた。

「さて、と。これからどうしようかしらね」

「うーん……」

ベル達はダーズの襲撃で、皆とはぐれてしまった。

どうすれば、元の場所に戻れるのだろうか。

その答えは、まだ誰も知らなかった。

「おい、見ろ、みんな!」

フォックスは、紫色の渦巻いている穴を見つけた。

ベルが覗くと、どこかの空間に繋がっていた。

「あー! もしかして、ダンジョンかしら?」

ここがどこに繋がっているのかは、分からない。

子供のプリン、デイディー、りようは不安になるが、ベルとシユルクは三人を励ました。

「怖くないよ。僕達がついているから」

「そうよ! だから怖気づかないでね!」

「ありがとうごさいましゆ……」

「ありがとう……」

「サンキュ……」

プリン、デイディー、りょうを励ました後、ベル一行は穴の中に飛び込んだ。

すると、歯車があつた場所とは異なる、中世ヨーロッパを彷彿とされる地に着いた。

道には、頭のない像や後ろを向いた彫像があり、灯火が暗い場所を仄かに照らしている。

「見て！ 城よ、城！ 確か、名前はド、ド……」

「ド、ドラキュラ城だぜ」

ファルコンは何とか知恵を絞って、この城の名前を思い出す。

ここはシモンとリヒターの故郷の世界にある、吸血鬼・ドラキュラが住まう城なのだ。

「いかにも何か出そうだな」

「怖いなあ……」

「こわいでしゅ……」

ベル達は、ゆっくりと道を歩いていく。

りょうは怖がっていて、プリンも震えている。

すると、この城に相応しいアンデッドモンスター、リーデット（のスピリッツ）と遭遇した。

「うっ……」

ルキナは屍兵を思い出し、不快になって思わず吐きそうになる。

りょうも気分が悪くなるが、プリンは精神を集中していた。

「プリン？」

「へいきでしゅ……プリンはへいきでしゅ……」

自身を鼓舞しているのだろうか。

シュルクは、プリンがリーデットに何かの技を使おうとした事を察した。

「マジカルシャイン!!」

「オオオオオオオオオオオオオオ」

プリンがリーデットに強力な光を放つと、リーデットは叫び声を上

げて崩れ去った。

アンデッドには聖なる攻撃が効果的なのだ。

「凄いな、プリン」

「プリンはもうよわむじじゃないでしゅ」

リーデットを倒した後、一行は城の中に入る。

すぐ近くには、触れると周りの様子を元に戻す大きな砂時計がある。

階段の上には大砲、大砲の下には砲弾があり、螺旋階段には不気味な亡霊がいた。

「まずは、大砲に必要な砲弾を探さなきゃ」

ベルは階段の下を歩き、銀の砲弾を手に入れた。

「もしかしたら、この砲弾で幽霊を倒せるかもしれませんね」

「そうね」

ベル達が階段を上がり、大砲に銀の砲弾を入れようとする時、

ヘルガーのスピリッツが待ち構えていた。

「私が勝てるかどうかは分からないな……」

「じゃ、任せて」

ヘルガーのスピリッツには、ルカリオの代わりにマールが挑戦した。

ブキで無事に解放した後、ベルは銀の砲弾を大砲に入れ、幽霊目掛けて発射し、撃退した。

「この幽霊も、ドラキュラの手先かしら？」

「えっと、ドラキュラって？」

「ドラキュラとは、吸血鬼の中でも古い時代から生きる『伯爵』です。

特に若い女性の血を好み、血を吸った者を自らのしもべに変える事ができます。

勘違いしがちですが、ドラキュラは吸血鬼の中の一人に過ぎませんよ」

「ひいー」

ドリーの説明を聞いたデイデーは震え上がった。

しかも、ドラキュラと何度も戦ってきたシモンは、今は別の場所に

飛ばされている。

不安を隠せないベル一行であったが、アルトリアは真剣な表情で言った。

「ご安心ください。私の血は、魔の者に簡単に汚されはしません」

「さっすが〜！」

普通の人がこれを言うに俗に「死亡フラグ」だが、

アルトリアは最優のサーヴァントなので「強者の余裕」と言うのが正しい。

ベルは、年下に見えるそんな少女に感心するのだった。

幽霊を撃退した後、ベル達は螺旋階段を上って二階に上がった。

「ガブー！ ガブガブガブー！」

「あ、バックンフラワー、何か見つけたの？」

「ガブガブガブー！」

バックンフラワーはぴよんぴよんと跳ねている。

彼（？）がいるところに向かうと、そこには梯子があった。

ルカリオは梯子を登り、先にあつたレバーを倒すと縦になっていた壁が横になった。

その後にナイトマンのスピリッツをファルコンが解放し、

メデイウサのスピリッツをりょうが解放した。

次に、木の階段を上がつて銀の砲弾を拾い、階段を下りて左側の螺旋階段を上ると、

デイジー姫が闇の鎖に縛られていた。

「まあ、大変！ デイジーが捕まってるわ！」

しかし、デイジーがいる場所には幽霊がいる。

幽霊は銀の砲弾を使わなければ倒せない。

仕方なく、三階に上がつて大砲を使おうとするが、ほねクツパのスピリッツが待ち構えていた。

「な……こいつ、高位のアンデッド!?!」

ベルは、ほねクツパを見て驚く。

それもそのはず、ほねクツパはジェフやシーダ、ポリーンなどと同様にレジエンド級だからだ。

気を抜いたらやらされる。

「……絶対に勝つよ。絶対によ！」

ベル、フォックス、クツパ、シユルク、マール、ジョーカーは真剣な表情で身構えた。

「ぐあっ！」

ほねクツパはフォックスに引つ掻きを繰り返す。

マールはわかばシューターでほねクツパを牽制。

「それっ！……かわされた!?!」

シユルクの攻撃は、ほねクツパにはギリギリで当たらなかった。

「我輩の攻撃も、当たらないのだ！」

クツパの渾身の一撃も決まらなかった。

「だったらそれを」

「カバーする！」

シユルクとクツパのミスを、フォックスとジョーカーが上手くカバーした。

「全然運がないな」

「よし、私が運気を上げるわ！」

ベルが鎌を突き刺すと、周囲に魔力が広がる。

これにより、ベル達の運気が高まった。

「おらあっ！」

フォックスはほねクツパに跳び前蹴りを放った。

ほねクツパは攻撃をかわすが、かわした場所に一発命中した。

おかげで、シユルクに攻撃しようとしたほねクツパを妨害する事に成功。

「ぎゃあー！」

「うわっ」

しかしマールに渾身の攻撃が届いてしまい、シユルクの攻撃もほねクツパには当たらなかった。

「運がいいのか分からないのか、微妙だな」

「でも、良くはなっているわ。さあ、これでとどめよ！ ナイトメア！」

ベルが大鎌をほねクツパに投げつけると、ほねクツパの身体は真っ二つになる。

そして、崩れたクツパのボディから、ほねクツパのスピリッツが飛び出した。

ベルはすぐにそれにスピリッツボールを向け、スピリッツを回収するのだった。

「もう大丈夫よ、マール」

「ありがとう、ピーチ」

ピーチは傷ついたマールに回復魔法を使う。

ベルは今度こそ三階に上がり、大砲を使って幽霊を撃退した。

そして、ベルは闇の鎖に縛られたデイジーを、大鎌を使って解放する。

「デイジー！ 私が来た！」

「……」

ベルがデイジーに対しそう叫ぶが、闇に飲まれたデイジーは反応しない。

仕方ないわね、とベルが溜息をついた後、大鎌を振ってデイジーを斬りつけた。

すると、彼女の身体に巻き付いた闇の鎖が真っ二つになった。

同時に、デイジーがベルに襲い掛かってくる。

「みんな！ 準備はいいかしら!？」

「ああ！」

「ええ！」

「ガブガブ！」

ベル、ファルコン、プリン、ピーチ、りょう、パツクンフラワーは、ダーズに操られたデイジーと戦った。

「……」

デイジーは闇の力を操り、自身の攻撃力を高めて五体の分身を作り出す。

りょうはデイジーの動きを観察していた。

「まずい！ サンダーを拾って使うみたい！」

「そうはさせないわ！」

「とめましゅー！」

サンダーが当たると、小さくなって動けなくなる。

それを阻止するべく、ピーチとプリンはデイジーに突っ込むが分身が邪魔する。

その隙にデイジーはサンダーを拾い、六人を一気に小さくした。

「きゃっー！」

小さくなった六人は、攻撃力と防御力、そしてリーチが下がってしまった。

六人はデイジーと分身の一方的な攻撃を受ける。

何とかサンダーの効果が切れて攻撃を凌いだ後、

ファルコンはデイジーの分身をファルコンキックで攻撃する。

「ダークマジック」

ベルは闇の魔法陣を設置し、踏んだデイジーを縛った後に鎌で一閃した。

「ガブガブー！」

パッコンフラワーはデイジーの分身に鉄球を放ち、デイジーの分身を吹っ飛ばした。

しかし二体の分身から包囲攻撃を受け、すぐに戦闘不能になってしまった。

「ああ、パッコンー！」

「……」

デイジーは驚くピーチに揺らめく炎を放つ。

その後、分身をりよう、プリン、ファルコンにけしかける。

「ファルコンパンチ！」

「えいつ、えいつ、えいつー！」

「それっー！」

三人は何とか攻撃をかわし、分身を攻撃して消し去った。ベルは大鎌で分身を消し、残る分身は一体だけになった。

「……」

だが、プリンにデイジーが放った炎が迫る。

「危ない！ うわああああああ!!」

りようはプリンを庇い、代わりに攻撃を受けた。炎の中に包まれたりようは様々なものが燃える。その炎が消えた後、りようは意識を失った。

「よくも、りようとパツクンフラワーを！」

「もう許さないぞ！ ファルコン……パンチ!!」

ファルコンは炎の鳥を纏ったパンチをデイジーの分身に繰り出し、消し去る。

ベルは大鎌を振るい、闇を飛ばしてデイジーの身体にまわりつかせる。

「ウ、ウゴケン……！」

「でいじーしゃん、もともにもどるでしゅー！」

「グアアアアアアアアアア!!」

プリンはデイジーにマジカルシャインを放つ。

強烈な光を浴びたデイジーは、闇の力を受けているため大ダメージを受けた。

「……デイジー姫」

炎を振り払ったピーチは、フライパンを構える。

それに対し、ファルコン、プリン、ベルは静かに彼女を見守った。

同じ姫として、最後は彼女が倒すのだから。

「私は……あなたを信じるわ!!」

「ウグアアアアアアアアアアアア!!」

ピーチのフライパンがデイジーの脳天に命中すると、彼女は凄まじい叫び声を上げた。

そして、くるくると回転した後、ばたり、とその場に倒れるのだった。

「はあ、はあ、はあ……」

ピーチは倒れたデイジーを見て激しく息を切らす。

危うくフライパンを落としそうだったが、彼女は気合でフライパンをしっかりと持った。

「私達の……勝ちよ!!」

(美味しいところは持っていくのね……)
そして、ピーチはここに勝利宣言をするのだった。

69 狡猾の死神

ベル達は操られたデイジーに勝利し、彼女をダーズの呪縛から解放した。

「光の力よ、彼女を目覚めさせて！ おねがいカムバック！」

ピーチは倒れているデイジーに対し、蘇生魔法「おねがいカムバック」を使った。

これにより、デイジーは意識を取り戻した。

「う、うくん……」

「大丈夫？ デイジー」

ピーチはデイジーを安全な場所に移動させた。

デイジーは戦闘の反動で、頭がくらくらしていた。

「つつー、頭が痛い……。ちーとばかり休ませてくんまし」

「ええ、それがいいわ」

デイジーはしばらくして、完全に元に戻った。

「あー、ホンマに辛かったわ。

自分らがおらへんかったら、今頃ウチは道具として使われたかもしれへんなあ」

「もう大丈夫よ、デイジー。あんたはダーズから解放されたんだから」

「ダーズ？」

「目玉に触手がついた、思い出したくもない敵よ。せつかくキーラを倒したと思ったのに……」

ベルはデイジーに苦々しい顔でダーズの事を話す。

デイジーは「キーラ」という人物を知らないように頭をマークを浮かべている。

「自分が言った『キーラ』って誰や？」

「キーラは、私達の世界を侵略しに来た光の化身よ。」

最初はカービィやシャドウと一緒にキーラを倒すための戦力を蓄えて、

その後にキーラを倒したんだけど、みんなバラバラになっちゃってね」

これまでの事情をベルから聞いたデイジーは、へえー、ほおーと相槌を打つ。

「要するに自分らはみんなを集めた後、ダーズをやっつけるって事やな？」

「ま、そういう事になるわね。そのためには、あんたの力も必要かしら」

「ウチの力かいな？　もち、オツケーや！　自分らにしつかりついてくでー！」

デイジーは元気いっぱいに腕を上げ、ベル達の仲間になる事を告げた。

今ここに、サラサランドの元気姫が仲間になった。

「次は、ここね……」

ベルは死神&子死神を解放してレバーを倒し、インスパイアド、スカルマン、ミイラ男、

ワリオをとりあえず解放した後、梯子を使って下まで降りた。

梯子の下は、水晶がたくさんある洞窟だった。

「なんやここ、めっさ暗いなあ……」

「ドラキュラ城自体が、暗い場所だけどね」

デイジーは様子が変わったドラキュラ城に不安になる。

ベルはきよろきよろと、辺りを見渡している。

「ここに捕まったファイターがいるみたいだけど、一体どこにいるのかしら」

ファイターを探すため、ベルが先頭に立って歩く。

だが、ファイターの姿はどこにもなかった。

「あ、スピリッツー！」

ベルはゾーラ族のスピリッツを発見し、そのスピリッツを解放すると後ろに道ができた。

道は、橙色の光が明るく照らしていた。

「戻る時に近道になりそうね。覚えましょう」

「うん」

上には銀の砲弾があつたが、幽霊が邪魔をされていて進めない。

仕方なく一行は先に進み、シユルクのボデイに宿ったアレンのスピリッツを解放し、

先に進んでゼルダのボデイに宿ったマリア・ラーネツドのスピリッツを解放する。

「それっ！ やあっ！」

トウーンリンクは動物や聖獣による攻撃にやや苦戦するが、解放に成功した。

「この子、意外に強かったなあ」

「魔物使いは魔物こそが友達なのよ。さ、次に行きましょう」

「うん」

「はっけい！」

「ファルコンナツクル！」

その後、エース級のナツクルジョーをルカリオとファルコンが解放し、銀の砲弾を手に入れる。

「せいやー！」

梯子を下りて左側にある大砲を使い、邪魔な二匹の幽霊を同時に倒した。

銀の砲弾は貫通するという特性を利用した技だ。

ルカリオは梯子を下りて銀の砲弾を拾った後、奥の梯子を上って一番上上がり、

銀の砲弾を壁に当てて反射し、二匹の幽霊を同時に倒した。

「これで邪魔者はいなくなったわね」

「さあ、梯子を登るぞ」

邪魔な幽霊を全て倒した後、ベル達は一番奥の階段を上り、梯子を上って地上に行った。

宝箱を開けておやつを手に入れた後、梯子を下りて洞窟に戻り、

2つある穴のうち上にある穴に入り、階段を上がって地上に行った。

そこはたくさんの鉄格子や壊れた鉄格子があった。

最初に一行が出会ったのは、フランケンシユタイン&のみ男のスピリッツだった。

「よおっしー！」

デイジーがやる気満々に前に立つ。

「こいつらの相手はウチがする。ええか、ベル？」

「ええ、もちろんよ」

「ほな、いくで〜！」

デイジーは満面の笑みを浮かべて、

フランケンシュタイン&のみ男のスピリッツに戦いを挑んだ。

「ウチの大勝利やー！」

「やったわね、デイジーー！」

デイジーが勝利ポーズを決めると、洞窟の中に梯子が現れ、

闇の鎖に縛られたファイターが現れた。

「どうやら、ダーズの力で隠されていたようだ。」

一行はすぐに、ファイターがいる洞窟へと戻る。

そして、梯子を下りて一番下まで行くと、闇に囚われた紫の翼竜を

発見する。

スペースパイレーツの最高司令官、リドリーだ。

「……リドリー……！」

サムスの両親を殺した、狡猾の死神。

宿敵の姿を見たサムスは、リドリーにアームキャノンを向ける。

その声は、いつもより冷徹だった。

「ウチがやったるでえ！ 覚悟しいな、リドリーー！」

「待ちなさい、デイジー」

デイジーがリドリーに戦いを挑もうとするが、サムスが彼女の前に立つ。

「こいつは因縁の相手。私が倒す」

「しゃーないなあ……。今回は自分に譲るで」

サムスとリドリーは宿敵同士である。

それを邪魔する事はできないため、デイジーは素直に身を引いた。

サムスはアームキャノンでリドリーを縛る闇の鎖を破壊する。

すると、リドリーが赤い目を光らせて襲ってきた。

「グギャアアアアアアアアアア!!」

「来なさい、リドリ。……私が、相手よ！」

サムスとリドリーの一騎打ちが始まった。

「そこよ」

サムスはアームキャノンにエネルギーを溜め、リドリに発射して吹っ飛ばした。

「グギャオ！」

リドリは崖に掴まって復帰した後、サムスに接近して爪で切り裂く。

パワードスーツがあつたが、十分なダメージだ。

サムスは距離を取った後、ミサイルを放つ。

リドリは爆風で吹っ飛ぶも、すぐに崖に捕まって復帰する。

「グギャオオオオオオ！」

「くうっ！」

リドリは口から火炎のブレスを吐く。

サムスはシールドを張り、リドリーの攻撃を凌ぐ。

「グギャオオオオオオオ！」

リドリは空を飛び、体当たりしてきた。

サムスはボムで反撃した後、ジャンプでかわすが、リドリは隙を突いてサムスを掴み投げた。

その後再び突っ込むがサムスはかわしてミサイルで反撃する。

「ギャオオオオオオオオ！！」

「……っ!!」

リドリブレスが命中したサムスは軽く吹っ飛ぶ。

サムスはミサイルを撃つてすぐにジャンプして距離を取り、アームキャノンにパワーを溜める。

「しまった！」

しかし、パワーが半分ほど溜まったところにリドリが現れ、

サムスを掴むとグラビングスクラッチで攻撃した。

サムスは何とかジャンプとスクリューアタックを駆使し、崖に掴まって復帰した。

「グギャオオオオオオオ！」

「その攻撃は、見切ったわ」

着地したサムスにリドリリーはもう一度グラビングスクラッチを放つが、

サムスはリドリリーの攻撃を見切り、回避する。

アームキャノンによる打撃でシールドを削りつつ、ミサイルやボムで反撃する。

しばらくすると、サムスの身体が光った。

「ゼロレーザー……発射!」

サムスはチャージ切り札「ゼロレーザー」を発動、アームキャノンから極太レーザーを発射した。

「ギヤアアアアアアアアアアアアア!!」

極太レーザーをまともに浴びたリドリリーは凄まじい叫び声を上げる。

「す、凄い……」

ベルはゼロレーザーを見て、とある普通の魔法使いを思い出した。

そして、レーザーを発射し終わった後、リドリリーは場外まで吹っ飛ばされた。

「グウウウウ……」

サムスに敗れたリドリリーは、仰向けになりながらぐったりしていた。

彼にはもう、戦う力は残っていなかった。

「とどめよ」

「待って、サムス!」

サムスはそのままりドリリーにとどめを刺そうとするが、ベルが止める。

「何故、私を止める」

「今、あんたが倒す敵はリドリリーじゃないでしょ!」

「こいつもダーズに操られた被害者なんだから!」

「……そうだったわね」

ベルの言葉を聞いたサムスは、アームキャノンをしまった。

これ以上の戦いは、無意味なのだろう。

「こいつはとりあえず、安全な場所に運んでおくわ。ファルコン、一緒に運びましょう」

「ああ」

ファルコンとベルは、倒れたリドリーを安全な場所に運んでいった。

「おねがいカムバック！」

ピーチがおねがいカムバックでリドリーを目覚めさせる。

「……」

「……サムス……リドリー……」

サムスとリドリーは互いに睨み合っている。

同じ仕事仲間として、ファルコンはサムスを心配していた。

リドリーは俗に言う「ヴィラン」なのだが、

今は共通の敵（ダース）がいるためそんな事を気にするわけにはいかないのだ。

「サムスもリドリーも、まだピリピリしてるのか？」

「グウウ……」

「……」

「決着はいつでもつける事ができるぞ。だから、今は一時休戦だ。ダースを倒し、ここを出よう」

「……そうね、無駄な行動はしないわ。仕方ない、リドリーも行きましょう」

「グオオオオオオ……」

ファルコンは何とかサムスとリドリーを説得する。

現在の彼らの敵は、闇の化身ダースだ。

それぞれの戦いはいつでも行う事ができる。

リドリーは渋々、ベル一行についていくのだった。

70 　　ダッシュファイターズ

ベル一行はリドリーをメンバーに加えた後、仲間を救出するために一度上に上がった。

三階まで上がり、奥まで行くと、

城の外に闇の鎖に縛られたケン・マスターズと豪鬼の姿があった。

「グギャオオオオオオオオオオオ！」

「こいつらが捕まった仲間やな？」

「ええ、そうよ。リュウの戦友、ケン・マスターズと、彼らの師匠の弟、豪鬼よ。」

「まずは……それっ！」

デイジーとリドリーは、かなりやる気満々だった。

ベルは鎌を構えると（洒落ではない）、ケンと豪鬼の鎖を一閃した。

「おおー！ 真つ二つ〜！」

「ギャオオオオオオオオオ！」

デイジーとリドリーが叫ぶと、ダースに操られたケンと豪鬼が襲ってきた。

二人はすぐに、彼らと戦う構えを取る。

「フォースと共に」

「グギャアアアアアアアア！」

『「あらんことを！」』って言ってるわ」

今ここに、ストリートファイターと、狡猾の死神と、お転婆姫の戦いが始まった。

「ギャオオオオッ！」

「ぬうん！」

豪鬼はリドリーの攻撃を見切つてかわす。

「せいやっ！」

「……波動拳」

「いったあ！」

デイジーは野菜を引っこ抜いて、ケンにぶつける。

ケンも反撃としてデイジーに波動拳を放った。

「ギャオオオオッ！」

「ふんっ」

「それっ！」

リドリリーはケンのフェイントをギリギリでかわし、デイジーはケンに突っ込んでビンタする。

豪鬼の拳とリドリリーの爪が同時に命中する。

「ギャオオオッ！」

豪鬼の攻撃をリドリリーは軽くかわし、渾身の一撃を放ち吹っ飛ばした。

しかし、豪鬼はすぐに崖に掴まって復帰する。

「ケン！ ウチが目え覚ましてやるでえー！ デイジーボンバー！」

デイジーはお尻をケンに向け、突っ込んでいく。

花の爆発が起こり、ケンは軽く吹っ飛んだ。

「ぬうん！」

「うわあ！」

豪鬼とケンがデイジーに突っ込んで攻撃する。

デイジーは豪鬼の攻撃を食らい、シールドを削られてしまう。

「何するんやー！」

「……」

デイジーは怒るが、ケンと豪鬼は何も反応しない。

「わわっどー！」

デイジーはギリギリでケンの攻撃をかわすも、豪鬼の攻撃で大ダメージを受ける。

「あかん、ウチらもうへバリそうや。

真剣勝負に水差すようで失礼やけど、ピーチ、助けてくれへんか!？」

「え、え、いいわよ」

ピーチはデイジーとリドリリーに「みんなげんきになあれ」をかけた。おかげで減少していた二人の体力は回復した。

「形勢逆転やー！」

デイジーは花の魔力を纏ったビンタを豪鬼にぶちかます。

その威力は相当なものであり、豪鬼が一撃の下に倒れた。

「ギャオオオオオオオオオオ!!」

そして、リドリリーがケンに飛び蹴りを放ち、ケンを場外まで吹っ飛ばした。

「回収完了!」

「ケンさん、もう大丈夫ですよ」

豪鬼のスピリッツはスピリッツボールの中に吸い込まれ、ケンも正気に戻った。

ケンは、ルキナが持ってきた傷薬で全快した。

「……ん、ん……ここ、は、どこ、だ」

ようやく、意識を取り戻したケン。

デイジーやリドリリーと戦っていた時の記憶は残っていないようだ。

ベルはケンにこれまでの事情を（適当に）話した。

「なるほど……つまり、散らばった仲間を探している事になるのか」

「ま、そんな感じね」

ケンは真面目で素直な性格のため、ベルの適当な話もしっかり理解できた。

まだ仲間が全員揃っていない以上、下手に動くのは危険だ。

「で、あなたはこれからどうするの?」

「俺も一緒に行こう。リュウが心配だからな」

「あら、仲間思いね。もちろんいいわよ!」

そう言って、ベルとケンは互いに握手した。

こうしてケンを仲間にした一行は、一旦右まで戻る。

「とどめなのだ!」

クツパはヒュー・ボールドウインを倒し、奥にあつた銀の砲弾を手に入れる。

次に、近くの梯子を登り、四階に行つてデイディーがカナンを倒し、銀の砲弾を手に入れる。

「これで砲弾は二つね」

その後、一行は梯子を使つて三階に降りる。

「シールドブレイカー!」

ルキナはキングクルールのボディに宿ったドーガを倒し、階段で四

階に登った。

しかし、五階に行くための階段には、ルフレのボディに宿った死神のスピリッツが立ち塞がっていた。

「さあ、勝負よー！」

エース級の死神には、もちろん、本物の死神であるベルが挑んだ。死神の鎌をギリギリでかわしながら、ベルは死神の解放に成功した。

「伊達に私は死神と呼ばれてないわよっ！」

「さっすが〜」

くるくると鎌を回すベル。

白い服に軽い性格と、とても死神には見えないベルだったが、実力は本物だった。

次に、ベルは丸い額縁の下にある暖炉を覗く。

「ここから中に入れそうね」

「そうだね」

ベルを先頭に一行が暖炉の中に潜っていく。

そこには、キノコワールドの幽霊・テレサと、彼らを率いるキングテレサがいた。

テレサとキングテレサにはベルが挑み、勝利した。

「あんたの魔法、ドリイ並に役立つと思うけど。死神として頼むわ。協力してくれない？」

「断る。俺様はテレサのキング。そう簡単に仲間にはならねえからな」

「あら、残念……じゃあ、大人しくスピリッツボールの中に入ってね」
「……」

ベルはスピリッツボールをテレサとキングテレサに向け、彼らを中に吸い込ませた。

まるで、ルイージのオバキュームのように。

「あああ！ スポスポスポスポスポスポスポスポスポスポスポスポ
スポスポスポ

吸い込みやがってえ〜〜!!」

キングテレサは断末魔を残し、スピリッツボールの中に入った。

「さて、ここにもファイターがいるらしいけど……」

ベルが能力で近くにいたファイターを感知する。

すると、ピットと瓜二つだが、全体的に黒系の容姿となっている、闇の鎖に縛られたブラックピットを発見した。

彼の周囲には三体の自然軍の一員、ポックリ、ブレイダー、カーカーがいる。

「ブラピー！ キミの身体、これ以上利用されたくないでしょ？」

「……」

デイデューはブラックピットに呼びかけるが、やはりブラックピットは全く反応しない。

「聞こえないみたいだね。なら……オイラが助けてあげるよ！」

そう言つて、デイデューはピーナッツ・ポップガンを放ち、

ブラックピットを縛る闇の鎖を砕いた。

すると、ブラックピットは赤い目を光らせてデイデューに襲い掛かってきた。

「危ないっ！」

不意打ちを受けようとしたデイデューを守ったのはトゥーンリンクとジョーカー。

さらには、りょうとマール、リドリーもいる。

「グオオオオオオオ！」

「みんな……!?!」

「困った時はお互い様だよ。……ダーズの被害者はまだまだたくさんいる。」

ボク達が一人でも多く助けないとね！」

「お前に潜む心の闇は、心の怪盗にとっては最高のオタカラだ。是非、いただこう」

「オノレ……」

ブラックピットは、デイデューを倒そうとしたがそれを阻まれたため、舌打ちする。

デイデュー、トゥーンリンク、りょう、マール、リドリー、

ジョーカーの六人は真剣な顔で構える。

「オノレ……ミナゴロシダ!!」

ブラックピットは神弓シルバーリップを双剣に変え、同時に抜いて宣言する。

ダーズに操られたブラックピットと自然軍の敵との戦いが、始まるのだった。

「えいっ!」

トウーンリンクはポツクリにブーメランを投げる。

ポツクリは攻撃をかわし、ジョーカーにフェイントをかける。

「怪盗にフェイントとは、いい度胸だな」

「あくん、当たらないよ〜!」

「こつちもだよ!」

ポツクリのフェイントをかわしたジョーカーは、素早くナイフで切りかかり、

ブラックピットをエイハで攻撃する。

デイデーとりようはポツクリに突っ込むが、ポツクリは身を隠して無敵になった。

「……」

ブラックピットは神弓シルバーリップから黒い矢を放つが、矢は明後日の方向に飛んでいく。

「うわっ、危ない!」

「グギャオオオオオオオオオ!!」

マールはポツクリの攻撃をギリギリでかわし、ローラーでポツクリを地面に埋めた。

リドリーはブレイダーをブレスで攻撃した。

「スクンダー!」

ジョーカーはポツクリの攻撃をかわし、スクンダでポツクリを弱らせた。

リドリーの攻撃はポツクリにはギリギリで当たらなかった。

マールはリンクの中に潜ってポツクリの攻撃をかわし、スプラッシュボムで反撃した。

「……」

「当たらないよ！」

トウーンリンクはブラックピットの黒い矢を盾で防ぎ、勇者の弓から矢を射る。

デイデューはそのまま追撃しようとするが、カーカーとブレイダーに阻まれる。

「痛いじゃないか!!」

デイデューはピーナッツ・ポップガンでブレイダーを攻撃する。

りようはカーカーの攻撃を防ぎ、ボウリングの玉で反撃した。

「……」

「グギャオオオオオオ！」

「ウオツ!!」

ブラックピットの攻撃は、マールには当たらない。

さらに、リドリーが渾身の一撃を放ち、ブラックピットを吹っ飛ばした。

「グ……」

ブラックピットは何とか崖に掴まり、復帰する。

トウーンリンクは勇者の弓でブレイダーを撃った。

「えーいっ！」

りようはポツクリに思いつきり斧を振り下ろす。

自然軍であるポツクリに、効果は抜群だ。

「わっと！」

「エイハ！」

マールはブレイダーの攻撃をかわし、ジョーカーと共に遠くから射撃。

これにより、ブレイダーは倒れた。

「やあっ！」

「それ、それっ！」

デイデューもポツクリを平手打ちで吹っ飛ばし、トウーンリンクも続けてポツクリを倒した。

そのままの勢いでデイデューはブラックピットに突っ込んでいき、

彼を掴んで拘束する。

「今だよ、ジョーカー！」

「ああ……。お前のオタカラ、いただくよ！」

「グウツ！」

ジョーカーはブラックピットの背後に忍び寄り、アルセーヌと共に致命的な一撃を与えた。

ブラックピットは致命傷を受け、ぼたりとその場に倒れるのだった。

「……安心しろ。怪盗は命までは取らないからな」

ジョーカーは倒れているブラックピットを見て、静かにそう呟くのだった。

71 囚われの師

こうして、ダーズに操られたブラックピットは、ジョーカー達により正気に戻った。

「お前らと協力する気はねえが……仕方ねえな」

ブラックピットは文句を言いながら、ベル一行に入って三階に降りる。

しかし、五階に行くための階段には、

ルフレのボディに宿った死神のスピリッツが立ち塞がっていた。

「さあ、勝負よー！」

エース級の死神には、もちろん、本物の死神であるベルが挑んだ。死神の鎌をギリギリでかわしながら、ベルは死神の解放に成功した。

「伊達に私は死神と呼ばれてないわよっ！」

「さっすが〜」

くるくると鎌を回すベル。

白い服に軽い性格と、とても死神には見えないベルだったが、実力は本物だった。

こうしてベル一行は五階に上がり、レオン・ベルモンドをオリマー、お面屋をトゥーンリンクで倒して先に進む。

階段を降りると、ベルは巨大な歯車と砲弾、そして闇の鎖に縛られた男女のファイターがいた。

「あれは……ルフレさん!?!」

「見かけない人ね……」

銀髪で黒い服を着た男はルフレだが、黒い服を来た長身の女は初めて見る人物だ。

だが、その先には幽霊がたくさんいる。

「でも、幽霊がたくさんいますね……」

「しかも、歯車が邪魔しているわ。私がどうにかするから、待ってて」
このまま銀の砲弾を発射すると、歯車に阻まれてしまう。

まずはこの歯車をどうにかするため、

ベルは一番上の歯車を歩き、梯子を登ってレバーを倒した。すると、下にあった壁の向きが変わった。

「幽霊に触らないように……」

ベルは幽霊にぶつからないように梯子を下り、一番下の大砲に銀の砲弾を入れ、発射。

銀の砲弾は壁にぶつかって反射し、上にいた幽霊と、幽霊ごと歯車を攻撃した。

歯車は意外に脆く、銀の砲弾一発で崩れ落ちた。

これにより道が変化し、ベル一行は先に進めるようになった。

「やりました！ ベルさん！」

「どんなものよ」

一行は壊れた歯車の上を通り、逆側の歯車まで移動した。

そして、大砲の近くにいた狼男のスピリッツをケンが解放し、

大砲に銀の砲弾を入れて発射する。

砲弾は真っ直ぐになった壁にぶつかって跳ね返り、邪魔な幽霊を撃退する事に成功した。

「後はルフレさんと知らない女性を助けるだけですわ……」

ベル一行は梯子を上り、ルフレと女性がいた場所に行く。

「……ごめんなさい、ルフレさん！」

ルフレと女性を縛る闇の鎖を、ルキナは裏剣ファルシオンで切り裂く。

案の定、ダーズに操られたルフレと女性がルキナに襲い掛かってきた。

「また、戦うなんて、信じられませんが……。……やるしか、ないようですね」

「そうよ、あんたの仲間なんですよ？ あんた自身が助けなきや！」

ベルも大鎌を抜いて、戦闘態勢を取る。

彼女の勇気を見たルキナは、勇気づけられる。

「あなた達の母体は、私が保護します」

「私だって、やる時はやるんだからね！」

「今度は俺が、仲間を助ける番だ」

ドリイは杖を持って祈りを捧げている。

ピーチもフライパンを構え、ケンはファイティングポーズを取っている。

「僕は、すま村の村長なんだ。ここで逃げるわけにはいかない」

「りようさん……！ はい……決めました。ルフレさん、必ず私が助けます！」

ルキナは真剣な表情で裏剣ファルシオンを向ける。

闇に操られたルフレに刃を向ける、それはルキナにとって辛い事だった。

だが、五人の後押しがあつて、迷わなかった。

「イイネエ、ソノカオ。ダーズサマニミセタイヨ」

「……デモ、ソレモココマデダカラ」

ダーズに操られたルフレと女性は、剣を構える。

「行きますっ!!」

ルキナ、ベル、ピーチ、ケン、りよう、ドリイは仲間を助けるために戦った。

「……」

ベルは鎌を持って精神を集中する。

「ド・ゲイト・デ・テラ・マ・ギ」

ルフレと女性は、赤緑騎士のソールとソワレ、ペガサスナイトのスマアとティアモが守っている。

彼らを倒さなければ、ルフレと女性に攻撃は届かない。

ドリイはソワレに魔力の矢を放って攻撃した。

ソールは身を守り、相手の出方を伺っている。

「コノオツ！」

「きやつ！」

ソワレはドリイに槍で反撃する。

「君の戦術を見せてもらおうよ」

りようはルフレをじっくりと観察し、何を行動するのかを予測した。

「目を覚ましてねっ」

ピーチはラケットでソワレを攻撃するが、

ソワレはギリギリで防御して大してダメージを受けなかった。

「たあつー！」

「……」

ケンはずミアに正拳突きを放つが、ずミアは舞うように攻撃をかわす。

「あらよつと」

「……」

「!?」

ピーチはルフレの攻撃をかわすが、それはフェイントだったようで一時的に混乱する。

その隙に女性はドリイにデクの実を投げ怯ませた。

ティアモは槍でベル達を薙ぎ払う。

「ソールさん……恨まないでくださいー！」

ルキナはソールを裏剣ファルシオンで斬りつける。

「きやあつー！」

ルフレと女性の攻撃がピーチを襲う。

ピーチはドレスを切られないように慎重に動いた。

「やっー！」

「波動拳！」

りょうはずミアにパチンコを放って攻撃し、ケンはソールに波動拳を放つ。

「ナイトメアー！」

「ウツワ！」

ベルは思いつきり大鎌をソワレに投げつける。

ソワレは攻撃を回避するが、ブーメランのように戻ってきた大鎌がソワレを切り裂いた。

ずミアは槍を振り回し、ベル以外の全員を攪乱させる。

「コレデ、トドメヨ」

「させないわー！」

ティアモがとどめを刺そうとするが、ベルが闇の力を使って痺れさ

せた。

能力の反動で、ベルの体力が削られた。

「イクヨ、ソール」

「アア！」

「ぐわあっ！」

「きやあっ！」

ソールとソワレはドリイとケンに連携を放ち、そこそこのダメージを与える。

「みんなげんきになあれ！」

ピーチは癒しの光を振り撒いて、全員の体力を回復し状態異常も治す。

「ありがとうございます、ピーチさん」

「うふふ、どういたしまして」

「昇竜拳！」

「ウワアアーーーーッ!!」

ケンはソワレを昇竜拳で吹っ飛ばした。

「……」

「うっ！」

女性はルキナを相性の良い槍で突き刺す。

ピーチはソールの攻撃をかわし、ビンタで反撃。

「闇の力よ！」

ベルは闇の力でスミアとティアモを妨害した。

「相手の攻撃は激しいわ。守ってあげる！」

ピーチは呪文を唱え、味方全員を不可視の壁で包んだ。

これにより、攻撃で受けるダメージが減少した。

「……クラエ」

「痛っ！……くない？」

ルフレはドリイに渾身の一撃を放ったが、魔法結界のおかげでドリイはけろっとした。

「……チッ」

ルフレは舌打ちして、サンダーソードを構え直す。

ケンソールにギリギリで会心の一撃を放った。
ルキナはスミアの攪乱攻撃で混乱している。

「ド・ゲイト・デ・テラ・マ・ギ」

ドリイはスミアに魔法の矢を放つ。

が、ペガサスナイトは魔防が高く、スミアも抵抗したので大したダメージにはならなかった。

続けて、ティアモがりを槍で突き刺し、りょうがボウリングの玉で反撃する。

「闇の力のしもべ達よ！ とつととお家に帰りなさい！」

「ウ、ソワ、レ……」

「ソナ……」

ベルは鎌を大きく振り、病毒の炎を振り撒いた。

ルフレ達は炎に触れ、表皮が弱り痛みが増幅する。

さらに、炎によってソールとスミアが倒された。

「リザイア」

ルフレはドリイに近付き、闇魔法・リザイアで体力を吸収した。

スミアとティアモは相手の出方を伺っている。

「ティアモさん……別世界では、お父様と結ばれるといいですね」

ルキナはティアモをシールドブレイカーで貫く。

流星のティアモもこれには耐え切れず、倒れた。

「後は君達だけだね。いくよー！」

「みんなげんきになあれー！」

りょうは女性に鋭い一撃を放ち、大ダメージを与える。

ピーチはみんなげんきになあれで全員を回復。

「流星にこれは耐え切れないでしょ？」

「……」

ベルは闇の渦を呼び出してスミアを飲み込んだ。

「ルフレさん……私はもう迷いません！ マーベラスコンビネーションー！」

ルキナは流れるような連撃でルフレを切り裂く。

それが決め手となり、ようやくルフレは倒れた。

「昇竜拳!!」

そして、ケンも昇竜拳で女性を上空に吹っ飛ばす。

これにより、ベル達は勝利したのだった。

「……うーん、まさかまた操られるとはね。ごめんよ、ルキナ。気づけなくて」

「すまない……」

ルフレと女性は、ダーズに操られた事を謝る。

「ま、いつもの事よ。ところで、あんた誰？」

「ベルさん、失礼ですよ!」

見ず知らずの人にそんな事を言うのは失礼だ。

ルキナは「ごめんなさい」と謝った後、改めて女性の名前を聞き出した。

「私はルキナといいます。貴女は？」

「自分はベレス。元いた世界では、士官学校で教師をしていた」

黒い服の女性はベレスと名乗った。

「つまり師せんせいって事ね」

「……エル以外にもそう呼ぶ人、いたのね」

ベレスが言う「エル」とは、アドラステア皇女エーデルガルトの事だ。

今はこの世界にはいないが、スピリッツとなっている事は言おう。

「よろしく」

「ああ、よろしくね、ベレス」

「あなたの名前は？」

「僕の名はルフレ、自警団では軍師をしていたんだ」

ルフレもまた、ベレスに名を名乗る。

異なる世界に生きる者として最初に行うのが、この挨拶である。

「……なるほど。貴方も教え導く者なのか。それは興味深い。是非、貴方を見せてもらいたい」

「君も同じ『師』だろうか？ もちろんだよ」

ルフレとベレスは互いに顔を合わせた。

「じゃあ、ルフレ、ベレス、行きましよう!

いなくなった仲間を見つけて、ドラキュラ城から脱出するために
！」

「……ああ！」

「……うん！」

こうして、ベル一行はダーズに操られた師を、二人とも救い出す事に成功したのだった。

72 夜の伯爵、ドラキユラ

ルフレとベレスを仲間にしたベル一行は、ドラキユラ城脱出のために階段を上っていった。

「大きな敵の気配を感知したわ!」

ベルはドラキユラ城にいるボスの気配を感知した。

この城に住むボスとはいえば……「彼」だ。

「ドラキユラ伯爵……」

ヴァンパイアハンターが幾度となく戦ってきた偉大なる吸血鬼・ドラキユラ。

彼を倒せば、このドラキユラ城から脱出する事ができる、とベルは信じていた。

「ドラキユラは生半可な力では倒すどころか、傷つける事も不可能よ。だから、ヴァンパイアハンターの力が必要なのだ」
ベルは階段を上りながらドラキユラについて話す。

しばらく歩くと、シモンのボディに宿ったアルカードのスピリッツを発見した。

「むっ! レジエンド級のスピリッツか……」

ルカリオはアルカードからだだならぬ力を感じる。

「下がっている、ここは私が相手する」

「いいわよ」

そして、ルカリオは皆の前に立ち、アルカードに戦いを挑んだ。

結果はルカリオが勝利し、スピリッツの解放に成功した。

すると、ドラキユラ城の玉座の前に、

闇の鎖に縛られた茶髪の男と、瞳が金色になっている女を発見した。

この男こそ、代々ドラキユラと戦い続けてきたヴァンパイアハンター、

リヒター・ベルモンドだ。

女は異次元の旅人の一人である、「真祖」ミロだ。

「リヒター!」

「ミロ！」

「う……ぐうううつ……」

「ウオオオオオオオオ……」

リヒターとミロは苦しそうな表情を浮かべている。

ミロはダーズの呪縛にかかっていたいなかったが、

いつも身に着けている十字架のペンダントが外れており、吸血衝動に侵されていた。

また、リヒターを助ければ、ドラキュラと戦う力を得る事ができる。

「二人とも、苦しそうだ。今、助ける！」

そう言つて、ベレスは天帝の剣を鞭のようにバラバラにして振り抜いた。

リヒターを縛る闇の鎖は消え、同時にリヒターとミロが襲い掛かる。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

「うああああああああああ!!」

「……ルフレ、来る！」

「ああ。ベレス、共に信じよう！」

ルフレとベレスは、リヒターとミロを助けるべく、共に剣を抜いて戦闘態勢を取った。

「ふっ！」

ベレスは天帝の剣を鞭状にして振った。

だが、リヒターは上手くこれをかわし、手斧を投げて反撃した。

「痛い……」

「剣で守らなかったのかい？」

「自分のいた世界に、武器の相性はない」

ベレスが元いた世界には、剣は斧に強い、などの相性はない。

ルフレは「へえ」と感嘆しつつ、相手の動きを観察している。

「ベレス！ 攻撃が来るよ！」

「！……危ない！」

ルフレとベレスは、ミロの爪攻撃をギリギリでかわした。

リヒターが隙を突いて鞭を振るが、ベレスは鞭が届かない位置まで

移動し、

魔弓フェイルノートでリヒターを撃つ。

「ギガサンダー！」

ルフレは魔道書を開き、雷魔法でリヒターとミロをまとめて攻撃した。

さらに、ルフレはリヒターが近づくのを待ってからエルファイアーで足止めし、

ベレスが魔斧アイムールを思い切り振りかざしてとどめを刺した。

「十字架が……！」

すると、リヒターの手からぼろりと十字架が落ち、

ルフレがそれを拾ってミロの首にかけるとミロは正気に戻った。

「……はあ、一時はどうなる事かと思っただわ」

「どうやら、無事みたいだね」

「あたしがこんなので倒れるわけがないわ」

えっへんと威張るミロ。

彼女の身体にはほとんど傷がなかった。

ベレスに倒されたリヒターはというと、星を出しながら気絶していた。

しばらくすれば、元に戻るだろうと、ルフレとベレスは彼を見守った。

「……んっ、ここは、どこだ」

「お帰り。ここはドラキュラ城だよ」

ようやくリヒターは正気に戻り、起き上がる。

「ドラキュラ城……そうか、俺は奴の手駒に……」

リヒターは胸に手を置く。

どうやら彼は、操られていた時の記憶を僅かながら覚えていたようだ。

再び操られてしまったために、リヒターは、はあ、と溜息をついた。

ベルはリヒターが落ち着いたのを確認して、改めて、彼に事情を話す事にした。

「……というわけで、この城を脱出して、みんなと合流するのが目的な

のよ」

「なるほど、仲間を探した後に巨悪を倒すのか。ならば、話は速い。俺も同行しよう」

「待って。貴方の名前は？」

「俺の名はリヒター・ベルモンド、ヴァンパイアハンターだ」

リヒターはベレスに自身の名を名乗る。

「ベルモンド……。強そうな気がする。……自分はベレス・アイスナー。よろしく」

「ああ、よろしくな」

新参者のベレスも静かにリヒターに名乗り、リヒターはベレスを快く迎えた。

「あつ、あたしも自己紹介するわ。あたしはミロよ」

「ミロ、よろしく」

「……ベレス、彼女からあいつの臭いを感じるぞ。気を付けた方がいい、血を吸われ……」

「ちよつと！ あたしはそんな事しないわよ！」

リヒターは人間に見えるミロを吸血鬼と見破った。

伊達にヴァンパイアハンターをしていないようだ。

「信じていい？」

「どうか信じて」

「分かった」

「いよいよだな……」

「どうなるのかしら」

リヒターとミロを仲間にしたベル一行は、いよいよドラキキュラがいる玉座に入る。

ヴァンパイアハンターの血が騒ぐリヒターに、やや不安そうな表情のミロ。

ドラキキュラは強敵だ、気を抜くわけにはいかない。

「……さあ、入るわよ」

ベルは覚悟を決めて、大きなドアを開けた。

ドラキキュラ城の玉座には、黒いマントを纏い、赤い模様の豪華な服

を着た男が座っていた。

男は玉座から立ち上がり、マントを翻す。

この男こそ、ベル達が倒すべき敵——吸血鬼・ドラキュラ伯爵だ。

「現れたな、ドラキュラ」

リヒターはヴァンパイアキラーを構えている。

彼とドラキュラは、何度も戦ってきた宿敵だ。

「ドラキュラは単純に力だけで勝てる相手じゃない」

「だから、軍師として、僕も君と一緒に戦うよ」

「ルフレ……」

どうやら、ルフレもドラキュラとの戦いに協力してくれるようだ。

頼りになる仲間に、リヒターは笑みを浮かべる。

「さあ、来い！ ドラキュラ!!」

「私達が相手してやるわ!!」

ミロ、ベル、リヒター、ルフレは、ドラキュラ伯爵との決戦に望んだ。

ドラキュラは玉座からワープし、四人の前に立つ。

「ファイアー！」

ルフレは魔道書を開き、炎の玉を放つ。

ダメージは大きくなかったが、牽制はできた。

「せいっ！」

「おらおらおら!!」

ベルは大鎌を振り回し、ドラキュラを切り裂く。

ミロはドラキュラに接近し、爪で連続攻撃した。

彼女は力を制御しているとはいえ吸血鬼、その身体能力は相当高い。

「いくぞー！ リヒター無敵アッパー！」

リヒターは、ドラキュラに勢いよくアッパーを繰り出す。

だが、ドラキュラは怯まず、マントを翻すと、蝙蝠の姿に変化してベルとミロに突っ込む。

「きゃあっ！」

ベルとミロは防御が間に合わず、まともに攻撃を食らってしまっ

た。

「次に攻撃を食らったら君達は倒れるかもしれない。ここは一度下がって。僕が引きつけるから」

「あたしに下がっていろって言うの!？」

「そうじゃないよ、君達は前に出てるから結構攻撃を食らってる。」

このままだと、君達は倒れるんだよ」

ルフレはベルとミロに助言をする。

確かにこの二人はドラキュラの攻撃を食らってかなりのダメージを受けている。

回復でもしない限り、無理をすれば待つのは死だ。

ここは傷が癒えるまで待つのが賢い選択だとルフレは判断したのだが……。

「敵に後ろは見せないわ!」

「ダメだよ、ミロ、ベル!」

ベルとミロはルフレの話を聞かずに、ドラキュラに突っ込んでいく。

案の定、ドラキュラは火炎弾を放ち、ベルとミロは重傷を負ってしまった。

「きやあああああ!!」

「でも、私は死神なのよ……!」

「ドラキュラは単純に力だけで勝てる相手じゃない、ってリヒターが言ってたよ。」

逃げるは恥だが役に立つ! 時には引く事も必要なんだよ!」

「……分かったわ」

「あんたの言う事も、信じた方がいいのね」

ベルとミロはようやく折れて、攻撃が届かない安全な場所に行った。

ルフレはサンダーソードを構え直し、ドラキュラの間を突いてサンダーソードで斬りつける。

リヒターはドラキュラの攻撃が届かない位置に潜り込んでヴァンパイアキラーで攻撃する。

ドラキュラはワープした後、火炎弾を放つ。
ルフレとリヒターは緊急回避で背後に回り、ドラキュラの攻撃をか
わした。

「ここは身を護るのが正しい」

ドラキュラは蝙蝠の姿に変化し、突進する。

ルフレはジャストシールドで攻撃を防ぎ、リヒターは鞭を振ってベ
ルとミロを攻撃から守った。

ドラキュラはマントを広げ、炎を周囲に回転しながら放つ。

「エルファイア！」

ルフレは一旦距離を取った後、魔道書から火炎弾を放つ。

ベルとミロは何とか身体を動かして炎を回避し、

ルフレとリヒターは落ち着いて攻撃をかわした。

攻撃が終わった後、ドラキュラは再びワープする。

「次はどこに行くか……」

ルフレはドラキュラの攻撃を予測しながら歩く。

「……そこか！」

どうやら、ルフレの予測は的中したようだ。

サンダーソードがドラキュラの身体を切り裂き、電撃によってさら
なるダメージを与える。

「今だ、リヒター！」

「ああ！ 食らえっ、ドラキュラ!!」

リヒターはヴァンパイアキラーを、ドラキュラの頭部に勢いよく叩
きつけた。

その一撃が決まり、ドラキュラは崩れ落ちる。

「ふう……落ち着いてきたわ」

「あたしも、もう大丈夫よ。もう前に出て大丈夫？」

「ああ、大丈夫さ」

ちようど、ベルとミロの傷も癒えたところだ。

二人はゆっくりと立ち上がり、再び前線に出る。

すると、ドラキュラは両手を大きく広げ、四人の周囲に邪悪なオー
ラを放つ。

ドラキュラは山羊の角、悪魔の翼、ねじれた尾と、筋骨隆々の悪魔のような姿になった。

「変身した!?!」

「ああ、ドラキュラは追い詰められるとこんな姿に変身するんだ」

ルフレは変身したドラキュラを見て、ごくりと唾をのむ。

自身がかつてそのような姿になり、未来を滅ぼしてしまった事を思い出した。

「ドラキュラは『竜の子』って意味よ! ここからは油断大敵!」

「ぐあああつ!」

ベルがそう言った瞬間、ドラキュラが爪でリヒターを切り裂いた。空を引き裂くその爪は、リヒターの体力を大きく削った。

ドラキュラは闇の玉を連続して放つ。

「この攻撃は回避しにくい、防御に専念だ!」

「ああ」

ルフレの指示で、リヒター、ミロ、ベル、そしてルフレはシールドで防御する。

その後にリヒターは聖水、ベルは大鎌を投げ、ミロはドラキュラの背後に回って爪で引き裂く。

ドラキュラは力を溜めた後、両手から雷のエネルギー弾を放つ。

「きやあ!」

「見切った!」

ミロはまともにダメージを食らうが、リヒターはジャンプしてかわした。

ドラキュラは連続で爪で攻撃し、ミロ達を追い詰めていく。

「負けないわよ!」

ミロは反撃として同じく爪でドラキュラを引き裂きベルは大鎌でドラキュラを一閃する。

ドラキュラはジャンプして間合いを取り、再び雷のエネルギー弾を放つ。

何とかシールドで防ぐものの、威力は大きくシールドを大きく削られてしまった。

だが、ドラキュラの体力も残り僅か。

四人は隙を伺いつつ、ドラキュラに攻撃していく。

「見切った！ トロン！」

ルフレはドラキュラの爪攻撃をかわした後、トロンでドラキュラに大ダメージを与える。

「これでとどめだ！ ドラキュラ!!」

リヒターが勢いよく鞭を一閃すると、ドラキュラは苦しみながら爆発する。

そして、ドラキュラの身体に十字架が現れ、十字架が消えると同時に、

ドラキュラもまた消滅するのだった。

「か……勝ったわ！」

——こうして、深い理由など全くない、ドラキュラ城での戦いは終わった。

少なくとも、ベルにとっては、だが。

そして、ドラキュラを倒したため、玉座に白い光の渦が現れる。

ここに飛び込めば、ドラキュラ城を脱出できる。

「さあ、みんな……戻るぞ！」

「ええー！ もう、ここはおさらばね。……カービィとシャドウは、無事かしら……？」

そう言っつて、ベル達は光の渦の中に飛び込んだ。

全員が飛び込むと、光の渦は消滅するのだった。

73 謎の空間

その頃、カービー達はどうと。

「どうでもいいけど、ボク達ここまで空気になってない？」

「確かに……こんな場所に来てからね」

シヤドウやベルと同じく、見慣れない場所に飛ばされてしまった。ちなみに、今喋っているのは、ここまで出番がなかったバンジョーとカズーイである。

「ごめんごめん、すっかり忘れてた。でも、みんななくなっちゃったね……」

今、カービーと一緒にいるスマブラメンバーは、ピカチュウ、シーク、アイスクライマー、

ウオッチ、ドクター、ロート、ピット、スネーク、ロックマン、パツクマン、

ソレイユ、リユンヌ、シモン、バンジョーとカズーイ、ジュカイン、アイシャ、

終蓮司の17+1人だ。

「これからどうしよう……」

みんなとはぐれてしまい、帰るような道もない。

カービーが途方に暮れていると、アイシャが彼をひよいつと持ち上げた。

「どうしました、カービーさん？　いつもの元気がありませんね」

「わわっ、何するのアイシャちゃん！」

「カービーさんはどんな時も明るく元気なはずです。」

なのに、こんなに落ち込むなんて、カービーさんらしくありませんよ」

確かに、今のカービーは落ち込んでいる。

そんなのは彼らしくないだろうと、アイシャが気遣ってくれたのだ。

カービーは少し迷うが、アイシャの好意に答えないわけにはいかないと、素直に微笑んだ。

「……そうだよね。元気じゃないとね。ありがとう、アイシャちゃん。よーし！ 頑張るぞー！」

ぶんぶん小さな腕を振るカービィ。

いつもの彼に戻ったアイシャは、安心して微笑むのだった。

「じゃ、脱出方法を考えよう」

「そうだな。……つと、ちよつと待て」

先に進もうとするとダークリンクのボディに宿ったターゲットナツクのスピリッツがいた。

「傀儡となったスピリッツだな。私が解放しよう」

ターゲットナツクをシモンが解放すると、分厚く覆っていた暗黒の雲が晴れた。

岩の床が宙に浮いており、奥には町や森があり、罅割れて先に進めないところもある。

簡単に言えば……「カオス」だ。

「……何、これ」

「どんな場所なんだよ……」

カービィはあまりのカオスさにぼかんとする。

アイスクライマー、パツクマン、ジユカインも頭に？マークを浮かべていた。

さらに、罅割れた場所にはクレイジーハンドと鎖で縛られた赤い帽子の男もいた。

最近スマブラメンバーになったばかりの、テリー・ボガードだ。

「テ、テリくん！」

「彼も被害者になるとはな……」

同じ異世界の住人であるシモンが冷静に言う。

「た、助けてよ！」

「もちろんそのつもりだ。だが、落ち着け。慌てたら相手の思う壺だ」

「そ、そ、そうだね、シモ兄……」

シモンに言われたカービィは逸る気持ちを抑えた。

「とはいえ、こんな不思議な空間は、さっさと脱出しなくちゃな」

カービィ一行が北東に向かって走ると、

ロックマンのボディに宿るアクセルのスピリッツを発見した。

ジュカインが楽々解放した後、一行は色とりどりのキューブを見ながら足場を歩いていく。

「綺麗だね」

「そうね」

アイスクライマーがキューブを見てそう言う。

しかし、不気味な空間にぼつんとあるキューブが、逆により一層不気味な空間にしていた。

そして、橋を渡ろうとした一行は、クレイジーハンドと闇の呪縛を受けたテリーと対峙する。

「頼むぞ、ブレイズ」

ロートは、リザードンのブレイズが入ったモンスターボールを持っている。

クレイジーハンドとテリーには、ロート、スネーク、ジュカイン、アイシャ、柊蓮司、

バンジョーとカズーイの四人と一匹と二頭と二羽が挑む。

「強そう……でも、諦めないよ、カズーイ」

「あつたりまえよ！ あたいとバンジョーの絆はとっても強いんだよ！」

「今、助けますわ、テリーさん！」

「おっし！ 俺もやるぜ！」

アイシャは懐から包丁を抜き、柊蓮司は魔剣を構える。

「さあ、いくぞっ!!」

スネークの掛け声と共に、戦闘が始まった。

「それっ！」

「やあっ！」

バンジョーとカズーイはクレイジーハンドとテリーを同時に攻撃する。

ジュカインはいあいぎりを放つが、クレイジーハンドとテリーには当たらなかった。

「うわっ」とー！」

終蓮司は躓いてしまい、魔剣が上手く振り下ろせなかった。

「ブレイズ、かえんほうしや！」

「リザアアアア！」

「こっちですわ！」

ブレイズはロートの指示で、口から火炎を放つ。

アイシャは様子を見つつ、味方を援護する。

「そこだ！」

スネークはアイシャの援護を受け、クレイジーハンドにギリギリで狙撃銃を当てた。

アイシャはクレイジーハンドとテリーの攻撃をギリギリでかわし、包丁で反撃する。

「……バーンナツクル」

「危ないですわ！」

「わわっとと！」

テリーは炎を纏った拳を振り、バンジョーとカズーイに突っ込んでいく。

アイシャのおかげで、バンジョーとカズーイは何とか攻撃をかわす事に成功した。

「生命の刃！」

「ギアアアアアアアアアアア!!」

終蓮司は生命力を注ぎ込んだ魔剣を何とかクレイジーハンドに当てる。

その一撃が効いたのか、クレイジーハンドは叫び声を上げる。

「いくわよ！」

カズーイは口から卵爆弾を放ち、クレイジーハンドに追撃する。

「エナジーボール！」

「ブレイズ、いわくだき！」

「リザアアアアアッ！」

ジュカインはエネルギー弾を放射状に放ち、

クレイジーハンドの体力をそこそこ、テリーの体力を少し減らす。

ブレイズもテリーをいわくだきで殴りつける。

「身支度を！……きやあつ！」

アイシヤは手早く身支度を手伝い、味方全員の攻撃へ対する回避率を一時的に向上させる。

だが、アイシヤ本人の回避力が下がったため、クレイジーハンドの攻撃を受けてしまった。

「なんて強さだ……」

「俺の攻撃も、なかなか当たらなかったぞ」

ロートとスネークは、クレイジーハンドとテリーの強さに啞然とした。

闇の呪縛を受けたとはいえ、この強さなのだから。

「カズーイ……これ、負ける気がしない？」

「馬鹿！ 何言ってるのよ！ あたいとバンジヨーが負けるわけないでしょー！」

弱気になるバンジヨーを叱咤激励するカズーイ。

「そうだよね、カズーイ……うん、負けないぞー！」

元氣を取り戻したバンジヨーは、クレイジーハンドに突っ込んでいく。

ジユカインとテリーは互いの攻撃をかわす。

「これで、どうですか？」

アイシヤはボム兵をクレイジーハンドに投げる。

ボム兵は大爆発し、テリーにも僅かなダメージを与えた。

「いくぞっ！ なぎ払いー！」

柊蓮司は魔剣を薙ぎ払い、クレイジーハンドを切り裂いた。

その一撃により、クレイジーハンドは倒れ、無防備になった。

「このまま決めるぞー！」

柊蓮司は魔剣を連続で振ってクレイジーハンドを攻撃する。

「シザークロス！」

ジユカインはテリーを十字に切り裂いて怯ませる。

バンジヨーとカズーイはクレイジーハンドに突っ込んで連続攻撃した。

「ブレイズ、フレアドライブ！」

「リザアアッ！」

ブレイズは炎を纏った突進で、クレイジーハンドに大ダメージを与える。

アイシヤは身を守り、相手の出方を伺った。

「はっ！」

スネークは麻酔銃を取り出し、テリーを撃ち、彼を無力化する事に成功した。

「後はクレイジーハンドだけだが……」

テリーを無力化したため、残る敵はクレイジーハンドのみ。

だがクレイジーハンドは攻撃の手を緩めない。

「グギャアアアアアアアアアアア!!」

「ぐわあああつ！」

「きやあああつ！」

クレイジーハンドは大暴れして、全員に大ダメージを与える。

六人はダメージが蓄積し、ふらふらしていた。

だが、これがクレイジーハンドの最後の足掻きなのか、これ以上強力な攻撃はしなくなった。

「このまま一気に決めるぞ！」

「ああ！」

柊蓮司は魔剣から衝撃波を飛ばし、ブレイズはかえんほうしゃ、

バンジューとカズーイはワンダーウィングで攻撃する。

「殺菌消毒ですわ！」

アイシヤは調理器具を大量に取り出し、クレイジーハンドに連続で投げつける。

「ブレイズ、フレアドライブ！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアア!!」

何度も攻撃を食らったクレイジーハンドに、ブレイズがフレアドライブで突っ込んでいった。

そして、今の一撃でとどめを刺されたクレイジーハンドは爆発四散するのだった。

「う、うくん……ここは、どこだ？」

ダーズの呪縛から解放されたテリーは、瞬きしながら起き上がる。彼の眼は、元の青色に戻っていた。

「ジツハ、カクカクシカジカデス」

ウオツチは、これまでの事情をテリーに話した。

「ああ、大体分かったぜ。要するに、みんながバラバラになったから、合流したいんだろ？」

「ソウデスネ。」

コノニンズウデハ、チョットココロボソイノデ、アナタモイツシヨニイキマシヨウ」

「ああ、そのつもりだ。おっと、自己紹介を忘れてたな。俺はテリー・ボガード、よろしくな！」

「ヨロシクオネガイシマス」

ウオツチとテリーは、お互いに握手した。

こうして、伝説の狼、テリー・ボガードが仲間に加わるのであった。

74 星を見るもの

クレイジーハンドを倒し、テリーを仲間にしたカービー一行は、謎の空間を脱出するために歩いていった。

テリーはマーシャルアーツの使い手なので、リュウやケンと仲良くなれそうだ。

ねじり曲がる道を歩くと、パンドーラのスピリッツを発見。

ドクターがパンドーラを解放すると、分厚い黒い雲が晴れて道が見える。

そこから西に進んでいくと、ピンクのハリネズミの少女を発見した。

大きな耳を持つ白い犬のように可愛らしい。

年齢は、藤林の姓を持つ幼いくノ一と大した違いはないだろう。

何かと目が行き届かない三姉妹の末っ子のような感じかもしれない。

「あら、あなたは？」

「私はエミー・ローズ。ソニックを知らない？」

「知りませんわ」

少女は名前を名乗った後、アイシャにソニックの行方を問う。

だが、当然彼女は行方を知らず、首を横に振る。

「ふーん、そうなんだ。じゃ、あなたについていい？」

「え!?! いいんですの!?!」

戦わずにエミーが仲間になるのは、驚きだ。

逆に言えば、エミーにかけられた呪縛が完全ではないという証なのだ。

「か、構いませんわよ、エミーさん。」

一緒についていくならば、きつと、ソニックさんも見つかりますわ」

「よし! 決定ね!」

エミーはソニックを追いかけるため、自分から仲間になった。

『ソニック、どこにいるのかしら。っていうか、ちよつと不思議じゃな

いっ。』

エミーは興味津々そうに謎の空間を歩いていた。

あくまで同行者なので一緒に戦えないが、アイシャは微笑みながらエミーの手を引いていた。

床には水色と白のキューブが描かれていて、空中にはたくさんの凶形が浮かんでいる。

さらに先に進むと、4つに分かれた道と、サイケデリックな風景が見えた。

4つの道には全てスピリッツがいたが、

カービィ一行は左から二番目のカエル&へビのスピリッツに挑んだ。

スピリッツを解放した後、分厚い雲が晴れ、新たな道が見える。

一行が歩いていくと、闇の鎖に縛られた緑のドレスの女性と、

ロックマンとよく似たスピリッツがいた。

前者はロゼッタとチコ、後者はロックマン。EXEだ。

「ロゼ姉……」

カービィは苦しそうな表情のロゼッタを見て、同じように悲しい表情になる。

「今、助けるよー!」

『私もやるわ!』

「お待ちください、あなたはスピリッツでしょう? 無茶はなさらな

い方がいいですわ」

『えー、どうして!? 一緒に戦いたいのに! ほら、ピコハンで……あれ!』

エミーが戦おうとすると、アイシャが止める。

彼女は食い下がり、ピコハンでロゼッタに振り下ろすが、ピコハンはずり抜けた。

「……言ったでしょう? スピリッツは、それだけでは戦う力を持ちませんわよ。」

エミーさんは大人しく下がってください」

『分かったわよ……』

そう言って、エミーは後方に行った。

「ロゼッタサン、イマ、ワタシタチガタスケマスカラネ！」

「だから、目を覚まして！」

カービーがハンマーを振り回し、ロゼッタとチョコの闇の鎖を砕く。赤い瞳を光らせて襲い掛かるロゼッタとチョコを、カービー、アイスクライマー、ウオッチ、

バンジューとカズーイ、テリー、柊蓮司が迎え撃つ。

「Are you Ready?」

「Let's Party!」

「せいっ！」

「やあっ！」

バンジューとカズーイはそれぞれロゼッタとロックマン。EXEに体当たりで攻撃する。

「サイコキネシス！」

「うっ！」

柊蓮司は念動力を操り、ロックマン。EXEを撃つ。

カービーは落ちていたボム兵を拾って投げた。

「えい！ えい！ えい！」

「サイコバリア」

ポポとナナはロゼッタをハンマーで連続で殴る。

ロゼッタは超能力でバリアを張り、ポポとナナの攻撃を軽減した。

「イキマスヨ！」

ウオッチは高く飛び上がった後、鍵を持ってロゼッタ目掛けて突き刺した。

「ライジングタックル！」

「……」

ロゼッタはテリーのタックル攻撃をギリギリでかわし、バンジューにチョコをぶつける。

続けてロゼッタはチョコを操り、テリーに襲わせた。

「うおっ！」

柊蓮司はロックマン。EXEの攻撃をかわし、魔剣で反撃。

カービーの短い手足での攻撃は、ロックマン。EXEには当たらない

かった。

「アイスショット！」

アイスクライマーはハンマーから氷を出し、ロゼッタを遠距離から攻撃する。

「それっ！」

バンジューはすぐにロゼッタを投げようとするが、ロゼッタは緊急回避で回り込む。

「うわあ！」

「いやあっ！」

ロックマン・EXEはカービィ、アイスクライマー、柊蓮司を

バトルチップ・ワイドソードで切り裂いた。

テリーはその隙にロックマン・EXEに近付き、素早く投げ飛ばしパワーダンクで追撃した。

「ちこしゅくと！」

カービィはロゼッタを吸い込んでコピーし、チコシュートでロゼッタを攻撃した。

「ワイルドアッパー！」

「グリーンハウスデス」

テリーがアツパーカットでロゼッタを浮かせ、ウォッチがグリーンハウスで追撃する。

そしてカービィはハンマーにパワーを溜める。

「鬼殺し火炎ハンマー!!」

「ウアアアアアアアアアア!!」

炎を纏ったハンマーがロゼッタに命中すると、ロゼッタは場外に吹っ飛んでいった。

同時に、ロックマン・EXEも光となって消え、スピリッツはどこかに飛んでいった。

「ここはどこだ？ 私は一体、何をしていたんだ」

「ピィィ……」

「あ、ロゼ姉もチコチコも覚えてないんだね」

ロゼッタとチコは、カービィ達の活躍によりダーズの呪縛から解放

され、正気に戻った。

他のスマブラメンバー同様、ダーズに操られていた時の記憶はなかった。

「でも、ロゼ姉はもう大丈夫だよ」

「あなたの身体は自由になりましたからね」

もうロゼツタの母体は生成されなくなった。

ロゼツタは手足を動かす。

自由になった事を証明する、滑らかな動きだ。

「本当だ、自由になっている。私を助けてくれて、ありがとう」

「ピィ♪」

ロゼツタとチコはカービィ達にお礼を言う。

すると、カービィの背後からひよつこりとエミーのスピリッツが出てきた。

『あら、もしかしてあなた、お姫様？』

「あ、ああ、そうだが……」

『すつごい綺麗！ 初めて会った気がしない！』

エミーがロゼツタを見て目をキラキラ光らせる。

実はこの二人は、かつて国際的なスポーツ大会で出会った事があるのだ。

「ところで、君の名前を覚えてくれないか」

『私、エミー・ローズ。ソニックに会うためにしばらく同行しているの』

「私はロゼツタだ。こっちは星の子のチコ」

『よろしくね！』

「ああ、よろしく」

「ピィピィ！」

「……あのー」

エミーとロゼツタが互いに自己紹介をしたところでカービィが困り顔で手を挙げる。

「どうしたの？」

「僕の事、忘れてない？」

『あ』

——何はともあれ、無事にロゼツタをダーズの魔の手から解放したカービィ一行。

しかし、この闇の世界での冒険は、まだまだ続く。

75 く クイズに答えてちよーだい！

ロゼッタを仲間にしたカービー一行は、謎の空間を歩き回っていた。

「ついでに」

どこが北でどこが南なのか分からないため、超能力が使えるロゼッタが案内役になった。

一行は一番右の道にいるピンス先生のスピリッツを解放し、ワープポイントへと到達した。

「ここに飛び込めばいいんだね」

「ああ」

ワープポイントに飛び込むと、そこはよく分からない風景が広がっていた。

宇宙空間が真っ直ぐになっていたり、水晶が地面にたくさんあったりと、とてもカオスだった。

「酔っちゃうよお」

「心配するな、私とチョコがいる」

「ピピー」

「ありがとう、ロゼ姉」

ロゼッタとチョコがカービーを元気づける。

ふと、テリーは三叉路の中央に白い煙を発見した。

「みんな、向こうに白い煙があるぞ」

「なんだなんだ？」

シモンが白い煙を踏むと、突然、三叉路の先に三体のスピリッツが現れた。

そして、空間に白い文字で文章が浮かび上がる。

【この中で、空中に浮くことができるスピリッツはどれ？】

「え〜と……」

左には紫ピクミン、上には黄ピクミン、右には羽ピクミンのスピリッツがいた。

オリマーがいないので最初は迷ったが、空中に浮く、という文章で

すぐに答えが分かった。

「こつちだねー！」

カービィ達は右にいる羽ピクミンのスピリッツに挑み、勝利した。すると、ピロン、という音が鳴り、カービィ達の前に光の道ができた。

「正解すると光の道ができるようだな」

「よし、どんどん答えるぞー！」

カービィはやる気満々で光の道を進み、一行も彼の後に続いている。

こうやってクイズに正解すれば、謎の空間から脱出できるかもしれない。

そんな思いを抱きながら、一行は光の道を通り、謎の空間を進んでいった。

「OK!!」

テリーがプーを解放した後、一行は西へ進む。

すると、先程とは打って変わって草原に辿り着く。

「岩の次は草原みたいね」

「謎だねー。謎だねー」

子供らしく、アイスクライマーは無邪気に感想を言った。

ある程度進むと道が左右に分かれていたが、一行は右の道を進み、暗い森に着く。

そこにある白い煙を踏むと、再び空中に白い文字で文章が浮かび上がる。

【普段は家具を売っているスピリットはどっち？】

左にはつねきち、右にはマルヒゲ屋店長がいた。

よく分からないため、アイシャはじっくり考えた。

しばらくすると、アイシャはピン、と閃く。

「右は玩具を売っておりますわ。というわけで、消去法で左ですわね」
カービィ達はアイシャを信じ、左のつねきちのスピリッツを解放した。

すると、正解を表す音と共に、空中に螺旋状に光の道が現れた。

光の道に乗って天へ昇っていくと、東に闇の鎖で縛られた機械がいた。

「リ、リイリイ！」

ファミリーコンピュータロボットこと、リイン。

かつてのエインシヤント卿であった彼女は今、ダーズに母体を支配されている。

「くそっ……何故こんな目に……！」

シークは歯ぎしりを立て、拳を握り締める。

テリーは鋭い目でリインを見ていた。

「なんだか苦しそうだよ、リイリイ。助けようよ、テリ兄」

闇に支配されたリインは、どこか苦しそうだ。

このまま放っておくわけにはいかない。

「……ああ、分かっている」

テリーは拳を突きつけ、リインを縛る鎖を砕く。

闇から解放されたリインは、赤い瞳を光らせ、

二体のロボットと四体のミニロボットを召喚する。

「来るぞ！」

「リイン、君は必ず、僕達が助ける！」

「さあ、トルトウ！ 今度はお前の出番だぞ！」

「ゼニー！」

ロートはモンスターボールからゼニガメのトルトウを呼び出した。

シーク、テリー、スネーク、パツクマン、ロート、リユンヌの六人

は、

ダーズに操られたリインと戦った。

「うおっととー！」

ミニロボットはテリーにまとりついて攻撃する。

「テリーさん、怪我してはいけませんわ！」

「サンキュ！」

アイシャが後方から光を飛ばし、テリーが負った傷を癒した。

シークとスネークはミニロボットの攻撃をかわし、背後に回り込んで投げ飛ばす。

「……」

「うわっっ！」

リインは腕を振り回してテリーを攻撃する。

テリーはリインに反撃しようとするが、ロボットがリインを庇った。

「えいっ！」

ロボットはパックマンが投げたフルーツターゲットをかわす。

リユンヌはヨガを駆使してミニロボットを攻撃し、

シークは背後に忍び寄り手刀でロボットを攻撃した。

「ふんぬぬっ！」

「トルトウ、みずでっぽう！」

「ゼニー！」

スネークはミニロボットを格闘技で攻撃し、トルトウがみずでっぽうでとどめを刺した。

「……」

「ゼニー！」

「ボクはここだよ！」

ロボットはトルトウに鋭い刺突で反撃する。

パックマンはロボットの攻撃をかわした後、消火栓を設置し行動を制限する。

「見切った！」

シークはリインの攻撃を見切り仕込針で反撃した。

スネークはリインを狙撃銃で狙撃する。

「いっくヨー！」

消火栓でミニロボットが押し出されている間に、パックマンはミニロボットを吹っ飛ばす。

「うわあっ！」

二体のロボットはリユンヌに突っ込んで攻撃する。

リユンヌは太陽礼拝による光を飛ばし、リインを勢いよく吹っ飛ばした。

「パワーウェイブ！」

「……いくぞ」

テリーは地面を殴って衝撃波を飛ばし、ロボットを倒した。
シークはリインの背後に回り、鋭い手刀による一撃を放つ。

「トルトウ、休んでくれ」

ロートはトルトウの様子を見て、これ以上の戦闘は危険だと判断。
彼をボールの中に戻し、次のボールを出す。

「いけっ、フィオーレ！」

ロートはボールの中からフシギソウのフィオーレを取り出す。

「バーンナツクル！」

「ふっ、ふっ」

テリーは青い炎を纏った拳で、ロボットを吹っ飛ばす。

リユンヌは腹式呼吸で自分の体力を回復した。

スネークは格闘技によって、ロボットを砕く。

「テリー、リユンヌ、攻撃が来るぞ」

「おっとと、危ない危ない」

「ありがとうございますっ」

ロゼッタの助言で、テリーとリユンヌはロボットの攻撃をかわす。

「パワーダンク！」

テリーは飛びかかってミニロボットをパンチで攻撃し、破壊した。

リインはフィオーレにジャイロを飛ばす。

「フィオーレ、つるのムチ！」

「フッシー！」

フィオーレは蔓を伸ばし、ジャイロを掴み、逆にリインに向かって飛ばす。

身動きが取れなくなったリインに、パックマンが突っ込んでいく。

「とどめだよ!!」

「……!!」

そして、パックマンのとどめの一撃がリインに命中し、リインは吹っ飛ばされた。

「……ここは、一体、どこでしょうか。ボクは何をしていたのでしよう」

「あ、元に戻ったんだネ、リイン」

「皆様にご迷惑をおかけして、申し訳ありません」

シーク達の活躍で、リインは正気に戻った。

リインは人間の姿になった後、謝る。

「過ぎた事は悔やむな。お前はお前だ」

「ありがとうございます、スネークさん」

第一次亜空軍異変で共に戦ったスネークが、落ち込むリインを慰める。

彼女はかつて、エインシヤント卿として不本意ながらタブーに仕えていた経緯があるのだ。

「ん？ あんた、見た事がない顔だな。誰だ？」

「貴方は新参者でしたね……。ボクの名前はリイン。」

かつてはエインシヤント卿だった、マスターロボットです」

リインは初めて見るファイターに自己紹介をする。

「ボク？ という事は、男か？」

「いえ、ボク自身は自分を女性だと思っています」

「ほ、ほえー」

ロボットのには無性別ですけどね……と呟く。

「あ、俺も自己紹介を忘れてた。俺はテリー・ボガードだ、よろしくな」
「よろしくお願ひいたします」

テリーとリインは、互いに自己紹介をした。

種族は違ったが、すぐに仲良くなれた。

「デハ、モドリマシヨウ」

リインが人間からロボットの姿に戻った後、

カービー一行は光の道を降りて次の仲間を探しに行った。

西に行き、白い煙を踏むと、三つのスピリッツが現れて空中に文字が浮かび上がった。

【「ノポン族」のスピリットはどれ？】

左にはイエロースター、中央にはトラ、右にはナゴのスピリッツがいた。

「ノポンって……何？」

どんなものなのか分からず、ぽかーんとしているカービィ。
リィンはしばらく唸った後、手を叩く。

「シユルクサンカラキイタコトガアリマス。」

ノポンゾクトイウノハ、マルクテカワイイシユゾクナンデス」

「ありがとう、リィ姉^{ねえ}。シユルシユルの世界にいるのが正解なんだね」

「ドウイタシマシテ、カービィサン」

カービィ達は中央にいる、トラのスピリッツと戦った。

すると、正解を表す音と共に、向こう岸に光の道ができた。

一行は光の道を通り、歩道橋と道路を通る。

左側に桜が見える分岐地点には白い煙があり、それを踏むと空中に文字が浮かび上がった。

「『影の世界の王』はどのスピリッツ?」

スピリッツは左から、アグニム、ガノンドロフ（トワイライトプリ
ンセス）、

ザント、ギラヒムだった。

「……分からないな」

「消去法で考えると、アグニムとギラヒムは外れ、

残っているのは二人だが……ガノンドロフは魔王だから、答えはザ
ントだな」

「ザントだね! ありがとう!」

今度はロゼッタが答えを出してくれたため、カービィはザントのス
ピリッツと戦った。

この問題にも正解し、中央に螺旋状の光の道ができた。

そして、光の道を通って東に行くと、

舌をマフラーのように巻いた忍者のような蛙のポケモンが闇の鎖
に縛られていた。

しのびポケモンのゲッコウガだ。

「おい、大丈夫かよ、ゲッコウガ!」

ジュカインはゲッコウガに声をかけるが、もちろん、反応しなかつ
た。

「この調子で大丈夫なはずがないだろう……。どいてくれないか」

「嫌だ！」

「……そうか。ならば闇の鎖を切れ」

「ああ、分かっているさ！」

そう言っつて、ジユカインはゲッコウガを縛っている闇の鎖を切り裂いた。

すると、ゲッコウガがいきなり襲い掛かってきて、ジユカインを吹っ飛ばした。

「オレが分からないのか!？」

「落ち着け、ジユカイン。彼は操られているんだ」

何とかジユカインは体勢を整え直すが、ゲッコウガの豹変にジユカインは驚いた。

ピカチュウは何とかジユカインを落ち着かせる。

「貴様ラニソンナ玩具ハ必要ナイ」

ゲッコウガはかげぶんしんを使い、自身の分身を大量に作り出した。

「それっ！……分身?! うわあ！」

ピットはゲッコウガに会心の一撃を放つが、それはゲッコウガの分身であった。

分身に気を取られている隙に、ピットはゲッコウガのみずしゅりけんを受ける。

「リーフブレード！」

「当たラン」

「残念、フェイントなのさ！ 今だ、ピカチュウ！」

ジユカインのリーフブレードも、ゲッコウガには当たらなかった。だが、それはフェイントであった。

「いくぞー！ 10まんボルト!!」

ピカチュウが周囲に強烈な電撃を放った。

でんきタイプに弱いゲッコウガは大ダメージを受け遠くに吹っ飛ばされるが、

ハイドロポンプで復帰する。

「そこか！」

「タネマシンガン！」

ピットとジユカインは復帰したゲッコウガを飛び道具で牽制する。その隙にピカチュウはでんげきでゲッコウガを痺れさせる。

「いい加減、目を覚ませ!!」

そして、ジユカインのリーフストームがゲッコウガに命中し、場外に吹っ飛んだ。

「……俺とした事が、こんな失態を犯すとはな。皆の者、すまなかった」

「慌てるな。必ず勝機は来る」

ダーズの呪縛から解放され、正気に戻ったゲッコウガは、ピカチュウ、ジユカイン、ピットに謝った。

「まずはここから脱出して、その後の事は後で考えればいい。今は合流が先だ」

「……そうだな」

ゲッコウガを仲間にしたカービィ一行は、彼を先頭にして道を歩いていった。

忍び歩きで進むゲッコウガを見たカービィは「かつこい〜」と呟いていた。

そして三又の道にある白い煙を踏むと、空中に文字が浮かび上がった。

【この中で、科学者はどのスピリット?】

左にはアダム・マルコビッチ、中央にはゴールド・ボーン、右にはDr. アンドルフがいた。

「え〜つと……」

カービィがう〜んと唸っていると、ゲッコウガが迷わず右側に目を光らせる。

「コウガ君、分かったの?」

「左は軍人、中央は宇宙盗賊のボス。よって、正解は右のDr. アンドルフだ」

「すっごく〜い、コウガ兄!」

「ふっ」

ゲッコウガは粘膜で苦無を作り出し、ガノンドロフのボディに宿ったDr. アンドルフに戦いを挑んだ。結果は圧勝であり、さらに正解の音が鳴って光の道が出来上がった。

その光の道は飛行機に続いており、飛行機の上には闇の鎖に縛られたファイターとスピリッツの姿まであった。

ダーズの呪縛を受けたファイターの名は、ウルフ・オドネル——スターウルフのリーダーだ。

彼の隣には、青い狐の少女、クリスタルもいる。

「だ、大丈夫?」

「……来ないで!!」

カービイがクリスタルを連れ戻そうとすると、クリスタルは杖を構え、いきなり冷気を放った。

「何するの!」

「身体が勝手に動いちゃうの。私に近付かないで」

「何言ってるの、君は仲間だよ!」

「カービイサン、オチツイテクダサイ。」

ウルフサンモクリスタルサンモ、ダーズニアヤツラレテイルノデス。

マズハ、ウルフサンノボタイヲカイホウシマシヨウ」

そう言って、リインは腕を振り、ウルフを闇の鎖から解放した。

ウルフは赤く光る右目で、カービイとリインを睨みつける。

「グルルルルルル……」

「お願いよ、助けて!」

「もっちろん! 待っててね、狼おじちゃん、狐お姉ちゃん!」

「……私は狐お姉ちゃんじゃなくて、クリスタルっていう名前があるんだけど」

カービイとリインは、ダーズに操られたウルフとクリスタルを解放するため、戦った。

「えいっ!」

「グウウ……」

カービィは歩いてきたボム兵をウルフに投げる。

ボム兵の爆発でウルフは吹っ飛ばされ、さらにリインがジャイロを投げて追撃した。

「あなた達の攻撃は、私には届かないわ」

クリスタルは超能力によってカービィとリインの行動を予測した。

彼女はカービィとリインの行動を読んで、ウルフに対し傷を癒す魔法を使った。

「カイフクサレマシタカ……」

「じゃあ、クリ姉から先に倒そう！」

カービィは短い手足でクリスタルに攻撃する。

「凍りなさい」

「グルオオオオオオオオ！」

「うわあ！」

クリスタルは杖から冷気を放ち、カービィの足を凍らせて足止めした。

ウルフの爪が一閃し、ダメージを受ける。

「カービィサン、ボクガタスケマス！」

リインはカービィの足元目掛けてビームを放ち、カービィの足を覆っていた氷を解かす。

「ありがとう、リイリィ！」

「きやつー！」

カービィはクリスタルに突っ込んでいき、ハンマーで吹っ飛ばした。

クリスタルはジャンプで復帰し、再び超能力でカービィとリインの動きを予測する。

「ウルフ、攻撃がこつちに来るわ」

「グルルルルル」

「かわされた！」

クリスタルの未来視により、ウルフはあっさりと攻撃をかわした。

「この攻撃も見切……きやあ!?!」

しかし、クリスタルはリインの攻撃までは予知できなかった。彼女が放ったレーザーが命中すると、クリスタルは場外に吹っ飛ばされた。

「よし、やっつけたー!」

「ユダンハキンモツデスヨ」

クリスタルは倒したが、まだウルフが残っている。

カービィとリインは警戒しながら、ウルフの出方を伺った。

「あゝん、当たらないよゝゝ!」

「ウワツ!」

必死でウルフに攻撃するカービィだが、ウルフは何度も攻撃をかわしている。

さらに、ウルフフラッシュユがリインに命中し、リインは浅くない傷を負ってしまふ。

何とか勝つために、カービィはウルフを吸い込んでコピーし、

一時的にクローブラスターを覚えた。

「くろーぶらすたー!」

カービィはブラスターを呼び出しウルフに当てる。

攻撃はギリギリで命中し、ウルフも同じくクローブラスターで反撃する。

しかし、その反撃もそこまでだ。

「トドメデス!」

「グアアアアアアアアアアアア!!」

そして、リインが勢いよく腕を振り下ろすと、ウルフは勢いよく吹っ飛ばされるのだった。

「……これで大丈夫ですわ。ウルフさん、どうかお目覚めください」

アイシヤは超能力でウルフが負った傷を癒した。

しばらくすると、ウルフは起き上がる。

ダーズの呪縛によって赤く染まった眼は、元通りになっていた。

「俺は一体、何をしていたんだ……!」

「ダーズに操られた時の記憶がないみたいですよわね」

「何っ、操られた……だと!?!」

ダーズの呪縛から逃れられなかったウルフが、悔しさのあまり拳を握る。

ファルコンは彼の感情を、薄々ながら感じ取る。

「くそっ、この俺様が操られるのは、屈辱だ！ ファルコン、この屈辱を晴らしてくれ!!」

「……」

「つまり、承諾するんだな。……ダーズめ、必ず俺が倒す！ 覚悟するんだな!!」

ファルコンはウルフの敵討ちを黙って承諾した。

こうして、スターウルフのリーダー、ウルフ・オドネルが同行するのだった。

76 仲間を助けて

リイン、ゲツコウガ、ウルフを解放したカービー一行は、新たな仲間を探すため、一度道を引き返した。

レイモンド・ブライスを解放した後、東の橋を渡ってロイドを解放し、

雲の道を渡ると、銀髪赤眼の女性ファイターが闇の鎖に縛られていた。

さらに、女性ファイターの隣には、レジェンド級スピリッツ、アクアがいた。

「……カムイ……!」

「それに、アクアネエまで……」

ダーズの魔の手は、王女二人にも及んでいた。

無差別な攻撃に、柊蓮司は歯ぎしりを立てる。

「ダーズ、俺は絶対にお前を許さねえ!」

柊蓮司はそう言つて、魔剣でカムイの闇の鎖を叩き切った。

同時に、ダーズに操られたアクアもカムイと共に襲い掛かってくる。

「みんな! カムイを助けるぞ!!」

「ついでにアクアネエもね!」

「ああ……一人でも多く、できればみんなを助けるぜ……!」

柊蓮司、カービー、ピカチュウ、テリー、シモン、ソレイユは、

ダーズに操られたカムイとアクアに戦いを挑んだ。

「ていやあああつ!」

「どりやああ!」

柊蓮司は高く飛び上がり、アクアを一閃する。

カービーはアクアに会心の一撃を放った。

「10まんボルト!」

「……」

ピカチュウはアクアに10まんボルトを放つが、アクアはシールドを張って攻撃を防ぐ。

「パワーウェイブ！」

「はあっ！」

テリーは地面に拳を叩きつけ、衝撃波を飛ばし、カムイとアクアを同時に攻撃した。

カムイが剣を槍に変えてシモンに刺そうとするが、その前にシモンの鞭がカムイの肌に掠る。

「……イタイデシヨ」

「ぐおっ！」

「太陽礼拝！ からの、英雄のポーズ！」

アクアは槍をテリーに突き刺して攻撃する。

ソレイユはアクアを光で目晦ましし、英雄のポーズで攻撃した。

「えい、えい、えい、えい！」

「美味い！」

カービィは短い手足で懸命にカムイを殴り、テリーはハンバーガーを食べて体力を回復した。

「すまねえ、カムイにはどうしても攻撃できない！」

「はっ！」

終蓮司はカムイに攻撃できないため、代わりにアクアを斬りつけた。

ピカチュウはでんげきで追撃し、シモンは聖水でカムイを燃やした。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

アクアは人に恋をした水の精霊の歌を歌った。

その歌声は味方に足を与え、魔法から身を護る。

しかし恋の結末は自身の消滅——歌の通り、アクアは声と体力を失った。

「……」

アクアは無言でカムイに目配せする。

カムイは頷くと、剣を構えて突っ込んでいった。

「やめてよ、カムカム！」

カービィは叫びながらカムイに会心の一撃を放つが、カムイを止め

るには至らなかつた。

「おらっ！」

「……」

「ぐあああああああ!!」

ピカチュウの中段前蹴りも、アクアには届かない。

そして、カムイは舞うような剣撃でソレイユ以外を切り刻み、ピカチュウを戦闘不能にした。

「くそっ、ピカチュウがやられた！」

ピカチュウが戦闘不能になったのを見て、柊蓮司は表情を歪ませる。

アクアは槍で柊蓮司を攻撃するが、攻撃をかわし、魔剣で反撃した。

「カムカム〜！」

カービィはカムイを吸い込んで飲み込み、一時的に彼女の能力をコピーした。

「！」

「せいやっ！」

カムイカービィのエネルギー弾と、柊蓮司の風の刃がアクアに命中中。

体力が低いアクアは一撃の下に倒れ、そのスピリッツはどこかに飛んでいった。

「よし！ 後はカムイだけだ！」

「えーいっ！」

柊蓮司はカムイに斬りかかり、カービィはハンマーでカムイを殴る。

テリーはフェイントをかけてカムイを混乱させ、その隙にシモンが聖水でカムイを足止めする。

「それっ！」

おかげでソレイユの攻撃が命中し、カムイを場外まで吹っ飛ばした。

だが、カムイは竜に化身し、翔竜翼で復帰した。

「ちっ……復帰しやがったか！」

ピカチュウは何とか気合で立ち上がり、会心のロケットずつきを放つ。

「カムイ、目え覚ませっ！」

「バーンナツクル！」

柊蓮司は大地を纏った魔剣でカムイを切り裂き、吹っ飛ばす。

続けてテリーがバーンナツクルで追撃し、カムイは次第に追い詰められていく。

「竜ノチカラヨ……！ 跳槍突！」

カムイは自らに眠る竜の力を解放し、高く飛び上がり槍に変えた腕で貫いた。

「うおっとー！」

柊蓮司はギリギリでカムイの攻撃をかわし、サイコキネシスを放って反撃する。

カムイの動きは徐々に鈍くなっていき、あと少しで吹っ飛ばせそうだ。

「柊、とどめは俺が刺す」

ピカチュウは柊蓮司の前に立つ。

それは、これ以上カムイを傷つけさせないという、ピカチュウなりの思いやりだ。

「ピカチュウ……」

「お前はよくやった。手を汚すのは、俺だけでいい。……目を覚ませ、カムイ！」

そう言つてピカチュウはカムイに抱き着き、至近距離から10まんボルトを放った。

「ギャアアアアアアアアアアア!!」

電撃を受けたカムイは、叫び声を上げる。

カムイの身体から闇の煙が抜け出て、天に昇る。

そして、闇の煙が完全に消滅すると、カムイはその場に頽れた。

「……よし、もう大丈夫ですね、カムイさん」

アイシャは治癒の力により、カムイの心身を完全に癒した。

柊蓮司は気絶しているカムイを心配している。

しばらくすると、カムイは目を開け、ゆっくりと起き上がる。

彼女の眼は赤かったが、あの時に見せた邪悪さは全くなかった。

「はっ！……ここは一体どこでしょう。私は何をしていたんでしょう」
カムイはこれまでの出来事を覚えておらず、困惑していた。

それに対し、柊蓮司は優しく彼女に手を伸ばす。

「大丈夫か？　カムイ。立てるか？」

「はい……」

カムイは柊蓮司の手を取って立ち上がる。

そして、カムイは柊蓮司の綺麗な目を見つめた。

「私を助けてくれてありがとう」

「お前が困っていたから、放っておけなかったんだ。

それよりも、早くここから出て、みんなと合流しようぜ」

「ここから出る？　どういう事？」

「かくしか」

「把握」

こうしてカムイを仲間にしたカービー一行は、雲の道に戻って北西に進んだ。

そして木の道を通り、白い煙を踏んでスピリッツとメッセージをを出す。

【先輩・後輩の関係性なのはどのスピリット？】

スピリッツは左から三魔官シスターズ、テンタクルズ、レポーター
&レスラー、

ギヤング&レディ&ポリスだった。

「左は違うなあ。他のは分からないよ」

「でも、落ち着いて考えれば分かりますよ。ええと、つまり、正解は……」

カービーはアイシャの導きで、左から二番目にいるテンタクルズと戦った。

正解を表す音と共に、今いる位置の上空から右に向かって光の道ができた。

その光の道を通り、北に向かって歩き、白い煙を踏んでメッセージ

を出した。

【この中で、クロムの妹はどのスピリット？】

円を中心に、上下左右に道が伸びている。

上の道にはエリーゼ、左の道にはエリンシア、右の道にはリズ、下の道にはミストがいた。

「エリーゼさんは暗夜王国出身なので違いますね。

エリンシアさんもリズさんもミストさんも誰なのか分かりません」
「こんな時にクロ兄がいればなあ……」

この場にクロムがいない事を残念がるカービー。

そのため、今回も消去法により、テリウス大陸のエリンシアとミストを除外し、

しずえのボディに宿るリズと戦った。

そして正解を表す音と共に、今いる位置から左に伸びる光の道ができた。

光の道を、カービー一行は辿っていく。

空中には線路や樹木が浮いていて、

大きな指輪やパラボラアンテナ、紙飛行機、車も浮いている。

そして終点で、青い髪の武骨な青年が闇の鎖に縛られているのを発見した。

グレイル傭兵団の団長、アイクだ。

「アイクさん、わたしの声が聞こえますの？」

「……」

「やはり、聞こえませんか……！」

案の定、アイクはアイシャの声に反応しなかった。

アイシャは包丁を抜いて、アイクを縛る闇の鎖を切り裂いた。

「……」

アイクは無言でアイシャに斬りかかった。

アイシャはギリギリで攻撃をかわし、アイクを拘束しようとするが、

女性の腕ではアイクを拘束できなかった。

さらに、アイクは傭兵団を模した影を召喚し、一斉攻撃を仕掛けよ

うとした。

「危ない、アイシャ！」

「ロックマンさん！」

そこに、ロックマンのロックバスターが上手くアイクに命中し、アイクは怯んだ。

「……ダレデアロウト、キル」

「アイクは平等だ。でも、今はこの『平等』というのが、悪い方に向いたみたいだね……」

ロックマンは真剣にロックバスターを構える。

「カズーイ、これってピンチ？」

「まあ、そうね……あたいらの劣勢ね。でも、一頭と一羽でいれば最強なのよ！」

「そうだヨ！ 早く助けないとネ！」

「今回は私が相手になりましょう」

バンジョーとカズーイ、パックマン、ピット、リユンヌも、

操られたアイクを救うために戦った。

「バブルリード！」

ロックマンは大量の泡を発射してアイクが呼び出した影を攻撃する。

「いくよ、カズーイ！」

「タマゴミサイル！」

バンジョーは華麗な動きでアイクを翻弄し、カズーイはタマゴミサイルで砲撃する。

シノンの影はパックマンにフェイントをかけ、セネリオの影はリユンヌをウインドで切り裂く。

「それっ！」

だが直後にパックマンが投げた果物が命中、シノンの影はあつという間に消えた。

アイシャは素早く身支度し、味方全員の回避率を上げる。

そのおかげでティアマトの影、ガトリーの影、ワユの影の攻撃は当たらなかつた。

「パルテナ様、力を貸してください！」

ピットはパルテナの力を少しだけ使い、味方全員の士気を上げる。これにより、攻撃の威力と命中率が上昇した。

「ありがとうございます、ピット！」

「どういたしまして！」

リユンヌはピットにお礼を言った後、得意のヨガでワユの影を攻撃する。

ピットはアイシャの技の効果で、キルロイの影とアイクの攻撃をか
わす。

「ダッシュアップー！」

ピットは豪腕ダッシュアップーでアイクを宙に浮かせ、リユンヌが
追撃する。

ロックマンはアイクと影の行動を先読みし、威嚇射撃を行って行動
を封じる。

バンジョーとカズーイも、それぞれキルロイの影とアイクを攻撃。

アイシャはとどめを刺すために、構える。

「あなた達はわたしがばっちりお掃除しますわ！」

「……!!」

アイシャが辺り一面に放った炎は、アイクにまとわりつく汚れを根
元から断つ。

炎が消えれば、綺麗さっぱり、何も残らない。

彼女の攻撃は、まさに勝利を呼ぶものだった。

「まさか、この俺があんたらに剣を向けるとはな」

「アイくん、怪我なかった？」

「ああ」

「よかったあ……」

その様子からして、アイクは無事だったようだ。

安心し、胸(?)を撫で下ろすカービー。

「アイくんはなんにも悪くないからね。悪いのは、あの気持ち悪い目
玉だからね」

すると、無愛想なアイクの表情がさらに固くなる。

「気持ち悪い目玉……だど？ そいつが元凶だな。ならば、このラグネルで斬るだけだ」

「おお〜！ アイくん、かつこいい〜！」

かつてアイクは神を倒した事があるため、その態度は自信に満ち溢れていた。

カービィはそんな彼を見て拍手している。

「……だから、俺も仲間に入れてくれ。」

その気持ち悪い目玉とやらを斬れば、全ては終わる……というわけだな」

「もつちろん！ 一緒に行こう、アイくん！」

こうしてアイクを仲間にしたカービィ一行は、道なりに進み、分岐を上に進んだ。

すると、仮面で顔を隠したバタモン族の剣士、メタナイトが闇の鎖に縛られていた。

「メ、メタナイト！」

「グ……ウウツ……」

メタナイトはダースの呪縛に抗っているのか、苦しそうな表情をしている。

「ワ……ワタシト……イツキウチヲ……」

これ以上メタナイトが苦しむ姿を見たくない。

そう思ったカービィは、ファイナルカッターでメタナイトの闇の鎖を切り裂いた。

「ウオオオオオオオオオオオオオ！」

すると、メタナイトは剣を放り投げた後、凄い勢いでカービィに襲い掛かってきた。

カービィは剣を取り、ソードをコピーした後、剣でギヤラクシアと鏢迫り合いになる。

「メタナイト！ 苦しいでしょ!? 今、僕がこの剣で助けてあげるから！」

「剣ではどちらが上でしょうか……?」

カムイはカービィとメタナイトの剣戟を、はらはらしながら見守つ

た。

「えーいつー！」

カービィはメタナイトに斬りかかる。

メタナイトはカービィの攻撃を受け流し反撃する。

この戦いではダメージを受けてもソードの能力は解除されないため、

ただ、剣と剣だけがぶつかり合った。

「……」

「わわっとー！」

メタナイトは高速回転しながらカービィに突っ込んでいった。

シールドで防いだカービィは、メタナイトの隙を突いて斬りつける。

「うりやりやりりや!!」

メタナイトは距離を取り、ドリルラッシュでカービィに連続で攻撃する。

その後、メタナイトはマントを使った高速移動を繰り返しながら、カービィに近付き目にも留まらぬ連続攻撃を繰り返す。

「は、速いよー！」

カービィはメタナイトから逃げるが、メタナイトは容赦なく突っ込んでいく。

ドリルラッシュの最後の一発で吹っ飛ぶが、ホバリングで何とか復帰する。

メタナイトがスマッシュ攻撃を溜めている間にカービィはひやくれつぎりで反撃し、

メタナイトを遠くに吹っ飛ばした。

「よしー！」

「……」

カービィはメタナイトを倒したと思ってガッツポーズをするが、メタナイトはシャトルループで復帰する。

そして、カービィに剣の切っ先を突きつけた。

「そ、そんなー！」

「諦めるな、カービー!! お前には切り札があるだろ!？」

「切り札……そうか!!」

テリーの激励により、カービーの中にあつた潜在能力が一時的に目覚める。

すると、カービーが持っていた剣が大きくなった。

チャージ切り札「ウルトラソード」が発動する。

「切り札は、最後の最後まで取っておくから切り札って言うんだ!

ウルトラ……ソード!!」

カービーは巨大化した剣で、メタナイトを滅多切りにする。

その威力は絶大で、メタナイトには効果的だった。

「ヨクゾ……ワタシニカッタ……!」

そしてメタナイトの仮面は砕け散り、カービーと瓜二つの素顔が見える。

メタナイトはマントですぐに隠し、再び仮面を装着して倒れるのだった。

「カービーさん、おめでとうございます!」

「よく頑張ったな、カービー」

「えへへへへ……」

メタナイトとの剣対決に勝利したカービーを、カムイと柊蓮司が褒めたたえる。

カービーは満面の笑みを浮かべて頭を掻いた。

しばらくすると、メタナイトは正気に戻り、ゆっくりと起き上がった。

「……私は一体何をしていたのだ。ここは一体……」

「大丈夫だよ、メタナイト。君は悪い夢を見ていただけだから。

それと、ここはよく分からない空間だよ」

カービーは彼なりにメタナイトを安心させる。

そして、カムイはこれまでの事情をメタナイトに落ち着いて話した。

「実は、かくかくしかじか……」

「……そうか、新たな敵が私を操っていたのだな」

「そうですよ、メタナイトさんは悪くありません」

「して、私はその敵を倒せばいい、というわけだな」

今、彼らが倒すべき敵は、ダーズだ。

そして、散り散りになった仲間とも再会しなければならない。

そのためにも、メタナイトは仲間にしよう、とカービー一行は決めるのだった。

「これで仲間は全員かな？」

「しかし……まだ誰か一人いる気がするな」

「あと一人？ 誰だろう……」

カービーがきよろきよろと辺りを見渡すと、西側に見えない光の道を発見した。

「メタナイト！ あつちでなんか光ってる！」

「む……光の道か……？」

メタナイトが目を光らせると、確かに、西側に薄い光の道が見えた。

「でかしたぜ、カービー」

「ありがとう、ジユカ兄！ それじゃあ、レッツゴー！」

カービー一行が見えない光の道を通ると、

そこには、こどもリンクのボディに宿った『リンク』のスピリッツと、

緑の帽子とオーバーオールを着用したファイター、

マリオの双子の弟であるルイージが闇の鎖に縛られていた。

「ルイージ！」

「これが最後の仲間ですわね」

この周辺に、ルイージ以外の仲間はいなかった。

アイシヤはこれが最後だ、と身構える。

「皆様、覚悟はできましたか？」

「ルイージは僕……いや、僕達が助けるんだ！」

「彼は同じ、スマッシュブラザーズだからな」

「これも任務だ。許せ、ルイージ」

「大切な友達、見捨てるわけにはいかないよ。ナナ、頑張って勝とう！」

「そうね。ポポ、手加減なしでいくわよ！」

カービー、シーク、ゲツコウガ、ジユカイン、アイスクライマーも身構え、

ルイージと『リンク』を迎え撃つ体勢に入った。

「消毒しますわ！」

アイシヤは特殊な殺菌剤を取り出し、ルイージと『リンク』に振り撒いた。

隅の汚れも見落としてはならないという彼女の信念が届く——事はなかった。

二人は攻撃をかわし、ファイアボールと剣でアイシヤに反撃する。

「きやああっ！」

「うおおっ！」

ジユカインは反撃しようとするが、ルイージは余裕で回避する。

そして、ジユカインに回し蹴りを放った。

「やあっ！」

「それっ！」

ポポとナナは協力してアイスショットを『リンク』に放ち、

怯ませた後にハンマーで突っ込んでいった。

「うわああああ！」

しかし、『リンク』の連続攻撃が命中。

さらにはルイージが拾ったボム兵が二人に命中し、アイスクライマーは吹っ飛んでいった。

「アイスクライマー！」

「落ち着け、君まで吹っ飛ばされるぞ」

ロゼッタは吹っ飛んだ方向を見るが、シークはロゼッタを落ち着かせる。

「ああ……そうだったな。集中せねば。はっ！」

「ゆけ、チコ！」

「ピピィ！」

シークは仕込針で牽制し、ロゼッタがチコシユートで『リンク』を攻撃する。

「ふっ」

「リーフブレード！」

ゲッコウガは水を両手に纏い、腕を交差させた構えから左右に薙ぐように鋭い攻撃を放った。

ジユカインもリーフブレードでルイージと『リンク』をまとめて切り裂く。

「……そこか」

「アタラン……！」

「そうはいきませんわ！」

シークは素早くルイージの背後に回り込み、手刀でルイージの急所を突こうとした。

ルイージはかわそうとするが、アイシャの妨害が入って攻撃が命中した。

「ぎやあああつー！」

それがルイージに触れたのか、ルイージは暴発ルイージロケットで反撃する。

これによりアイシャは吹っ飛ばされたが、何とか崖に掴まって復帰する。

だが、ルイージの体力は残り僅かになっていた。

「ゲ、ゲッコウガさん、とどめを……」

「無論」

「ウワアアアアアアア!!」

ゲッコウガは水の苦無を二つ作り出し、振りかぶってルイージを上空に吹っ飛ばす。

これによりルイージは上空に吹っ飛んでいき、『リンク』も戦意を喪失して降伏した。

「うう……僕は一体、何をしていたんだ……」

ゲッコウガが吹っ飛ばした事により、ルイージは正気に戻った。

彼は辺りをきよろきよろと見渡すと、身震いした。

「って、なんでこんなところにいるんだよ。まあ、今は平気になったけど、さ……」

見知らぬ場所に飛ばされ、母体まで利用されたルイージは、げんなりとしていた。

「それは私達も同じです。でも、ルイージさんは助かったんですよ」

「起こった事を変えられるのは、神でもない限り不可能だからな」

「そうだ、過去を悔やむより今を考えろ」

カムイ、アイク、メタナイトは、落ち込むルイージを勇気付けた。

「そうだね、言われてみれば。ところで、兄さんとピーチ姫、クツパはどこに行ったの？」

「あつ！　じ、実はね……キラをやっつけたらバラバラになっちゃったんだ。

だから、こうしてみんなを探してるの。……言っちゃダメ、だったかな？」

「……」

カービィは包み隠さず、ルイージに話した。

すると、ルイージはまた落ち込んでしまった。

しかし、希望を信じているのか、ルイージはすぐに笑顔に戻った。「でも、みんなは必ず見つかるんだよね。僕はそれを信じているよ。

だから、僕も君達と一緒に行くよ！」

「ありがとう、ルイルイ！」

「……どういたしまして！」

こうして、カービィ一行はダースの手に落ちた

カムイ、アイク、メタナイト、ルイージを取り戻す事に成功した。

元の場所に戻るのも、そう長くない時間だろう。

77 闇を闇から救え

カムイ、アイク、メタナイト、ルイージを救出したカービィ一行は、残る仲間を探すために一度、光の道に戻った。

樹木の上にあつた白い煙を踏むと、メッセージと共にスピリッツが現れた。

「カービィが吸い込む事ができないのはどのスピリット？」

スピリッツはスカーファイ、バグジー、Mr. フロステイ、ワドルドウ、ウイスピーウツズの五体。

全員、カービィには見覚えがあつた。

「答えはスカーファイとウイスピーウツズだよ！」

「え、それでいいのか？」

カービィは迷わず、二つの答えを言った。

テリーは、答えが二つある事にほかんとしている。

「随分と変わった問題ですが、まあ、いいでしょう。カービィさん、その二体を倒しますよ」

「おっけー！」

カービィとカムイは協力してスカーファイを解放し、螺旋状の光の道を生み出した。

次に、二人はウイスピーウツズを解放し、もう一つの光の道を生み出した。

そして、光の道を通ると、薄紫色の身体と紫色の尻尾を持つポケモンが闇の鎖に縛られていた。

「あれは、ミュウツーさん！」

ミュウの遺伝子から生まれた、いでんしポケモン・ミュウツーだ。彼の行動に関しては賛否両論だが、放っておいてはボディを利用されてしまう。

アイシヤは覚悟を決めて、ミュウツーを縛る闇の鎖を包丁で切った。

「……」

ミュウツーは赤い瞳をぎらつかせている。

ピカチュウ、ゲッコウガ、ジユカインは、ごくりと唾をのむ。
伝説のポケモンは、強さもオーラも桁違いだ。

「……ボクモタカイマス」

リインも身構え、ミュウツーとの戦いに臨む。

「ミュウツー！ お前は簡単に操られる奴じゃないだろ!?!」

「むしろ他人を操れますしね」

「任務開始」

「おっしや！ やってやるぜ！」

「君は必ず、僕達が助けるから！」

カービィ、ピカチュウ、リイン、ゲッコウガ、ジユカイン、アイシヤ
は、

ダーズに操られたミュウツーを解放するために戦った。

「おらっ！」

ピカチュウはミュウツーに電撃を放つ。

ミュウツーは防御障壁を張ってピカチュウの攻撃に抵抗し、ダメージを最小限に留めた。

「セイツ！」

リインは大型の光の矢を射出してミュウツーを攻撃した。

その威力は高く、ミュウツーにも効果的なダメージを与える事ができた。

「リーフブレード！」

「……効カンナ」

ミュウツーはジユカインのリーフブレードを障壁を使って防ぐ。

「それっ！ あれっ、当たらない?」

カービィの攻撃も、障壁が防いだ。

ミュウツーは今もなお、意識を障壁に向けている。

意識を逸らさない限りは障壁を崩せないだろう。

「くっ、攻撃が通じんっ」

「シャドーボール」

ゲッコウガの攻撃も障壁に阻まれ、逆にシャドーボールで反撃される。

効果は今一つだったが、ミュウツウの特攻は非常に高く、大きなダメージを受けた。

「障壁がある限り、あいつに攻撃は通じない。まずは、あいつが張ってる障壁から破るぞ」

「うん！」

「見切ツタ」

カービィはミュウツウにフェイントをかけるが、ミュウツウは見切ってかわす。

「10まんボルト！」

ピカチュウはミュウツウに近付いて強い電撃をミュウツウに放つ。

「ソレツッ！」

「ゆくぞ」

リインはジャイロを飛ばして攻撃し、ゲッコウガはかげぶんしんで分身を作り出す。

「エナジーボール！」

ジュカインはエネルギー弾を乱射する。

だがそれも、ミュウツウの障壁に阻まれる。

ミュウツウは一瞬目を光らせると、超能力で周りにあるものを浮かせ、カービィ達に放った。

「皆、シールドで防ぐぞ！」

「ああ！」

「こんなの、へっちゃらだ！ うわあ!？」

「ああ……くっ！」

ピカチュウ、ジュカイン、リイン、アイシヤはシールドを張って攻撃を防ぐ。

カービィとゲッコウガは余裕で受けようとする。

だが、何故かゲッコウガに当たってしまった。

「な、なんでコウガ兄に当たったの!？」

「ミラクルアイノ効果だ」

「そうか……!？」

先程、サイコキネシスを放ったミュウツウが、一瞬だけ目を光らせ

ていた。

これがミラクルアイであり、あくタイプを持つゲッコウガに攻撃が命中した理由なのだ。

障壁のせいで攻撃が通らず、ミラクルアイの効果でゲッコウガも危険だ。

「まずは障壁を崩さなければな……!」

「ミュウツーサンノイシキヲソラシマシヨウ」

「うん!」

「いくぞ! うわああつ!」

リインはミュウツーにフェイントをかける。

カービィとジュカインも障壁を崩すべく、互いにフェイントをかけるが、

ミュウツーはどちらも見切った。

「皆様、頑張ってください!」

アイシヤは応援して味方全員の士気を高め、あらゆる行動の成功率を一時的に向上させた。

「ありがとうよ、アイシヤ!」

「そこか」

「……グツ」

ゲッコウガはみずしゆりけんで牽制し、ピカチュウはミュウツーの頭上に雷を落とす。

さらにゲッコウガの分身がミュウツーに追撃する。

「ソコカ!」

「きやあ!」

ミュウツーはアイシヤを浮かせ地面に叩きつけた。

アイシヤは慌ててスカートを押さえて体勢を整え直し、皿を投げて反撃する。

さらに、ゲッコウガとその分身がミュウツーにフェイントをかけて攪乱する。

「そおーれ!」

「そらっ!」

カービイはミュウツウを吸い込んでコピーした。
ピカチュウは会心の一撃をミュウツウに放つ。

「クウ……サイコキネシス!!」

ミュウツウは再び目を光らせ、サイコキネシスを広範囲に放った。
一行はシールドで何とか攻撃を防いだが、大きくよろめいてしまった。

「ナントイウツヨサデシヨウ」

ミュウツウは単独で六人を相手に互角の戦いを繰り広げている。

これが伝説のポケモンか、とリインは脂汗を掻く。

だが、負けを認めるわけにはいかない。

リインとジユカインはミュウツウを攪乱し、ピカチュウは10まん
ボルトとかみなりで攻撃する。

「シャドーボール」

「ぎやあつー」

アイシャはシャドーボールを受け、吹っ飛ぶが、何とか崖に掴まっ
て復帰した。

「……」

その時、ミュウツウが無形の衝撃波を放った。

相対する存在への強い敵意が実体化し、襲う。

「きやあああああー!」

「……!!」

負の衝動をまともに受けたゲッコウガとアイシャは場外に吹っ飛
ばされてしまった。

「アイ姉、コウガ兄……!」

二人が吹っ飛ばされてショックを受けるカービイ。

「次ハオ前ダ」

「させないよー! しゃどーぼーるー!」

「グッ!」

カービイはコピーしたシャドーボールをミュウツウに向かって放
つ。

エスパータイプのミュウツウに、効果は抜群だ。

「エナジーボール！」

「ロボビーム！」

ジュカインは自然から集めた命の力、リインは光線で射撃攻撃を行い、

ミュウツールの防御を少しずつ崩す。

「グアアアアッ！」

そこに、ピカチュウの会心の一撃が命中、ミュウツールは一瞬だけ焦りを見せる。

それにより、強固な障壁が緩んだ。

「今だ、カービー！」

「おりやあああああああつ!!」

カービーがハンマーを取り出し、その渾身の一撃で防御障壁は砕け散った。

ピカチュウは即座にカービーの前に立ち、攻撃するふりをして攪乱させる。

再び障壁を張る暇など、与えるわけにはいかない。

「これで、とどめだ！ ロケットずつき!!」

「グウオオオオオオオオオオオツ!!」

ピカチュウのロケットずつきが寸分違わずミュウツールを捕らえる。

その一撃で、ミュウツールは吹っ飛ばされる。

ミュウツールは攻撃力は高いが、障壁を張っていない時の防御力は低かった。

彼はきりもみ回転しながら場外へと飛んでいく。

これにより、カービー達の勝利は決まった。

「……よし、これで大丈夫だ」

ピカチュウはどこからともなくげんきのかたまりを取り出し、瀕死のミュウツールに与える。

重傷を負ったゲッコウガとアイシャは、ロゼッタが回復した。

数分でミュウツールは起き上がり、目を覚ます。

彼の眼は、元の色に戻っていた。

「私とした事が、お前達にまた牙を剥くとはな。

少し早い考えだとは思いますが、罪を償うために、お前達についていく」「ちよつと大袈裟ですわね。別に構いませんわ。仲間は数が多い方がいいですもの」

ミュウツ―はスマブラメンバーの中では善でも悪でもない、微妙な立ち位置だ。

なので、アイシャは大して気に留めない。

「そうか……。では、行ってもいいか?」

「もちろんですわ、ミュウツ―さん!」

アイシャはそう言つて、ミュウツ―を快く仲間を迎え入れるのだつた。

ミュウツ―を取り戻したカービー一行は、スカーファイがいた場所の光の道を通る。

そこにあつた白い煙を踏むと、文章とスピリッツが現れた。

【この中で、ドラキュラ伯爵討伐のため、アルカードと共に戦つたのはどのスピリッツ?】

左上にはネイサン・グレーブズ、右上にはドラキュラくん、

左下にはガブリエル・ベルモンド、右下にはラルフ・C・ベルモンドがいる。

この問題には当然、シモンが答えた。

「答えは我が先祖、ラルフだ」

シモンは先祖のラルフ・C・ベルモンドと戦つた。

結果はもちろん正解で、光の道が現れ、それを通ると宙に浮く船に辿り着く。

そして、その船にいたのは、青紫の肌の女海賊リスキイ・ブーツと、左目が血走っている腹が膨らんだ鰐、キングクルールだった。

さらに、キングクルールは闇の鎖に縛られている。

「あれ?。こいつ、どこかで見たような」

「気がしないでもないわ」

この場にドンキーとデイディーはいないが、バンジョーとカズーイはデジャブだ。

「ん? バンジョー、カズーイ、知ってるのか?」

「ううん、知らないよ。でも、何故か戦いたいんだ」

「あたいの中にある何かが騒ぐ〜！」

「……そういう事なら、俺も戦うぜ」

そう言つて、柊蓮司は魔剣を構え、キングクルールを縛る闇の鎖を切り裂いた。

すると、キングクルールと彼に付き従うクレムリン軍団、

そしてリスキィ・ブーツが襲い掛かってきた。

「よーし！ いくよー！」

「さあ、かかつてこい」

「リユンヌ、健康第一ですよ」

「ソレイユ、共に戦いましょう」

バンジヨー、カズーイ、柊蓮司、パックマン、ソレイユ、リユンヌ、シモンは身構えた。

「周りのクレムリン軍団より、キングクルールを優先するんだ」

「OK！」

「そーれっ！」

バンジヨーはクリッターにボディブローを放つ。

熊だけあつて、その威力は強烈だ。

カズーイもリスキィ・ブーツをつついて攻撃する。

「薙ぎ払え！」

柊蓮司は魔剣を薙ぎ払い、クラップトラップとリスキィ・ブーツを倒した。

キングクルールはバンジヨーとカズーイにフェイントをかけ、一時的に混乱させる。

「みんな！ 頑張つてー！」

「おう！ ありがとよ、パックマン！」

パックマンは味方全員を応援し、士気を高める。

そのおかげで、柊蓮司はクリッターの攻撃を全てかわし、魔剣で反撃した。

「ナタラージャ・アーサナ！」

リユンヌはダンスのポーズでキングクルールに大ダメージを与え

る。

さらに、シモンの鞭がクリッターにクリーンヒットし、とどめの一撃となった。

「ヴィラバド・アーサナー！」

ソレイユは英雄のポーズで追撃し、キングクルールを怯ませる。

「せいやっ！」

終蓮司は剣を振り抜いてキングクルールを吹っ飛ばした。

しかし、キングクルールはフライングバックパックで何とか復帰する。

「それ！」

「とどめですー！ ヴリクシャ・アーサナー!!」

そこに、パックマンのフルーツターゲットが命中。

上に吹っ飛んだキングクルールにリユンヌの立ち木のポーズが命中し、

キングクルールは吹っ飛んでいった。

「なんで俺様がこんな目に遭わなければならぬのだ!? くうう、悔しいく!!」

正氣に戻ったキングクルールは、悔しさのあまり地団太する。

「ちよ、ちよつと落ち着いてヨ！ そんな事してる場合じゃないヨ！」
まるで子供のようなキングクルールを、パックマンは何とか落ち着かせる。

キングクルールは、ふう、と息をつく。

「はっ！ そ、そうだった。こんな事で解決するわけがなかったのだ。

キングの野郎どもは、どこだ？ まさか、お前らか!？」

「違うって！ ボクは熊だよ！」

「あたいは鳥よ！」

キングクルールにキングファミリーと勘違いされたバンジョーとカズーイが慌てて訂正する。

「むう……そうか。それは誤解だった。だが俺様は今、はらわた腸が煮えくり返っているのだ。

いきなり闇が覆ったと思ったら、俺様の意識が消えちまってよお。

気が付いたら、お前らが目の前にいたのだ。つまり……俺様は操られていたらしい」

「そういう事になるね、クルール」

「キングクルールだ！ 覚えておけ！」

「はい」

カービィに名前を間違えられ、訂正を迫るキングクルール。

「とにかく！ この屈辱を晴らすためにも、俺様を操った奴をぶっ潰す！」

そのためにも、まずはそいつを探せ！」

「うん、分かったヨ。一緒に行こうネ、キングクルール！」

「今は一時休戦だからな！」

キングクルールを連れた後、一行は光の道に戻って、

ルイージがいた場所に戻り、東にあった虹色の階段を上がる。

梯子やゴミでできた道を通り、大きな土管にあった白い煙を踏むと、

左右にスピリッツが現れ、空中に文章が浮かんだ。

【クッパ軍団の一員はどっちのスピリッツ？】

左にはジュゲム&トゲゾー、右にはドドリゲスのスピリッツがいる。

「答えは左だね。僕も相手した事があるよ」

ルイージはこの二つのスピリッツを見て即答した。

ジュゲム&トゲゾーを倒して光の道を出す。

「せー、のっ。わわっ！」

ルイージがジャンプすると、ふわっと浮かぶ。

元々ジャンプが独特なルイージだが、性格的に驚いてしまうのだ。

カービィとパックマンは動じずに飛び移り、他のスマブラメンバ―も次々と飛び移った。

そして、光の道を通って北に行くと、紫の光が渦巻いていて、中央は真っ白に光っていた。

「……ここが謎の空間の最奥ですわね……」

「……」

アイシヤはその空間を見て絶句するが、カービイは珍しく真剣な表情だ。

彼は推測している、ここにボスがいる……と。

カービイが白い光を踏むと、端に六体のスピリッツが現れ、空間に文章が浮かび上がった。

恐らくこれが、最後の問題なのだろう。

【亜空軍を作り、ファイター達を襲ったのはどのスピリット?】

スピリッツは上から時計回りに、マスタージャイアント、ダークマター、預言の者、

タブー、メデューサ、エインシヤント卿。

この問題に、カービイはぴんと閃く。

「みんな、分かるよね?」

カービイの言葉に、ほとんどのスマブラメンバーが頷く。

「な、何を……?」

「せーの!」

「二!タブー!!二二」

そして、一斉に問題の答えを言った。

シモン、キングクルール、バンジョー、カズーイ、テリー、ジユカイン、

アイシヤは訳が分からず、ぽかーんとしていた。

「亜空軍? タブー?」

「ボク、聞いた事がないんだけど……」

「あたいもよ」

「話せば長くなるが、世の中には、こんな便利な言葉があるんだぜ。かくしか」

「うん、分かったよ」

ピカチュウは七人に亜空軍異変を簡潔に話した。

そして、レジエンド級のスピリッツ・タブーにピカチュウが挑み、何とか勝利する。

すると、空間の中央が揺れ出した。

「な、なんだ、この揺れは……!」

一行は揺れに踏ん張って耐え続ける。

すると、虚空に穴が開き、大きな渦が出来上がる。

その渦の中に、一行は吸い込まれていく。

「うわあああああ〜！！」

「どこかで見た事ある気がする〜！！」

一行はそのまま、穴の中に吸い込まれていった。

「いったあ〜い！」

カービイは勢いよく地面に倒れた。

テリーやスネークなどは、スタツと着地する。

そこは、奇妙に曲がった地面以外に何も無い、真つ暗な空間の中だった。

空間の中には、赤と青に白い水玉模様が描かれた特徴的な帽子を被った生き物がいた。

カービイは、彼の姿に見覚えがあった。

「キミ達、よくボクが作った問題を全部解けたね」

「君は……マルク！」

「そうサ。ボクはマルク、この空間の支配者なのサ」

この生き物の名前は、マルクというらしい。

マルクはおどけた調子でカービイ達に言う。

「空間の支配者？」

「あのダーズって奴が、貴様はここにいろ、なんて言うからここに来たのサ。」

でも、なぐんにもなかったから、ボクが問題を作っておいたのサ」

混沌と闇の化身ダーズを「奴」と呼ぶマルクに、アイシヤは恐怖で震える。

このマルクという生物を、本能的に嫌悪している。

「ダ、ダーズを『奴』と呼ぶなんて……！」

「ボクはボクのやりたいままに動いただけサ。だから、『奴』って呼んだのもボクの意味サ」

どこまでもふざけて、しかも残酷な言葉。

彼にかける情けは、どこにもなかった。

「おやおや、みんな殺気だってるねえ。でも、そんな事は関係ないのサ。」

キミ達はみくんな、ダーズと戦う前にここで終わるのサ!!」

マルクは虹色の翼を広げて、真の姿を現した。

次の瞬間、闇を纏った暴風がその場を覆った。

「く、来るよ!!」

「ああ! 俺様の力、たっぷり味わわせてやる!」

「油断大敵だ」

「怖いけど……わたし、頑張りますわよ!」

カービィ、キングクルール、スネーク、アイシヤは身構えて、マルクとの決戦に臨んだ。

謎の空間のボス・マルクとの決戦が始まった。

彼と戦うのは、カービィ、キングクルール、スネーク、アイシヤの四人だ。

「それっ、それっ!」

カービィは短い手足を懸命に使い、マルクに連続攻撃する。

「バスタークラップ!」

キングクルールは両手を思いつき振り下ろし、爪でマルクを切り裂いた。

攻撃は荒つぽく当たりにくかったが、何とか命中してダメージを与えた。

スネークはマルクの間を突いて手榴弾を投げ、さらに迫撃砲で追撃をする。

「えいっ!」

アイシヤは食器を投げ、微々たるながらマルクの体力を減らす。

「ケケケケケ!　凍り付くのサ!!」

「おっと!」

「ぐおおおっ!」

マルクは両翼から凍てつく弾を放つ。

カービィとスネークは上手くかわすが、キングクルールはまともに食らって一瞬凍る。

だが、キングクルールは何とか攻撃を耐えた。

「ハンマー!」

カービィは空中からハンマーを振り回し、キングクルールは腹をぶつけて攻撃する。

アイシヤは飛び回るマルクを包丁で斬りつけ、スネークは近距離からM4カスタムを放った。

マルクの頬が膨らみ、しばらくすると、エネルギーが極太の光線となって放たれる。

「うわあ!」

「きやあ！」

「むうっ！」

カービィ、スネーク、アイシャは攻撃を食らい、死にはしなかったが体力が大幅に減った。

「カービィさん、このお茶を！」

「うん！」

アイシャはカービィに紅茶を振る舞い、彼が負った傷を癒す。

その後、アイシャは食器を投げまくり、マルクを牽制してカービィ達をサポートする。

「ストーン！」

「そらよ！」

「受け取った」

カービィはストーンでマルクを押し潰し、キングクルールは王冠を投げて追撃し、

スネークが直後に王冠をブーメランのようにキングクルールに返した。

「フフフフ……これでも食らうのサ！」

マルクの身体が半分に割れると、カービィ達を吸い込もうとする。

闇夜の大気が渦を巻き、飲み込まれば大ダメージを受ける。

「皆様、耐えてください！」

「うん！」

「ふんぬぬぬぬぬ……！」

「……」

カービィ、キングクルール、スネーク、アイシャは踏ん張り、マルクの吸い込みを耐え切る。

それを見たマルクは、悔しくてたまらなかった。

「よくもボクの攻撃をかわしたな。許さないのサ！」

マルクは怒り、彼の周囲に薄い光の幕のようなものが現れる。

それは魔力によって発生した光の壁である。

マルクの防御力が上昇し、さらに闇夜の大気が渦を巻く。

そしてマルクの周囲に無数の植物の槍が起立し、渦に囚われた哀れ

な犠牲者を串刺しにする。

「うぐううううつ……!」

「飲み込まれたらたまりませんわ……!」

「おりやあああああつ!」

キングクルールは大砲を撃ち出し、攻撃しようとしたマルクを怯ませた。

「ぐっ……! 許さないのサ……!」

「許すも許さないも無い。戦場は残酷な場所だ」

スネークは麻酔銃を撃って無力化した後、マルクの光の壁を迫撃砲で打ち砕いた。

「なっ! ボクの壁が!」

「ダイナマイトパンチ!!」

「ぐあああつ!」

キングクルールはボクシンググローブを着け、マルクに全力でストレートを放った。

大ダメージを受けたマルクが苦痛で震える。

「えい! えい! えーい!」

「覚悟なさい!」

カービイも短い手足で全力でマルクを殴った。

アイシヤはカービイの傷を癒しつつ、自らもビンタや調理器具でマルクを攻撃する。

キングクルールはパイレーツキャノンで攻撃し、思いつきり腹をぶつける。

スネークはライフルで狙撃し、カービイはストーンでマルクを押し潰した。

マルクは地面の影に潜り、四人を追いかける。

四人の動きに合わせてマルクも動き、しばらくしてマルクが体当たりする——が、

四人は直前で見切り、攻撃をかわした。

「このおっ! なんて当たらないのサ!!」

マルクは四方にカッターを放って攻撃する。

だがそれも、カービー達には当たらなかった。

「焦っていると、攻撃も当たらんぞ」

劣勢になっていくマルクは、かなり焦っていた。

それとは対照的に、スネークは落ち着いてCCCやスタンナイフで的確に反撃する。

マルクの動きはかなり鈍くなっている。

「チャンスだ！ ダイナマイトパンチ!!」

「ウアアアアアアア!!」

これをチャンスと思つたキングクルールは、再び全力ストレートを放つ。

マルクは瀕死の重傷になり、カービーはとどめを刺す準備に入る。

「今ですわ！ カービーさん！」

「いつくぞー！ 鬼殺し……火炎ハンマアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして、カービーの炎を纏つたハンマーが、瀕死のマルクにクリーンヒットする。

マルクは不気味な叫び声を上げ、翼が砕け散り、身体が四方八方に跳ね返る。

そして、マルクは思いつきり地面に落ち、動かなくなった後、黒い煙になって消えた。

「はあ、はあ、はあ……僕……勝つたんだね……」

「ああ……。これで……」

「これで……皆さんと……」

「……コングの野郎どもと、決着を……」

勝利した四人は、かなり息切れしている。

強大な敵を倒したという達成感よりも、疲労の方が大きかったのだろう。

「みんな、お疲れ様」

「後は私達で治そう」

アルトリアとロゼツタはそう言って、四人を安全な場所へ運ぶの

だった。

「……これで大丈夫だ。もう平気だろう」

「ん……？」

ロゼッタは回復術を唱え、四人を治す。

最初に起き上がったのは、カービーだった。

「ここは……？」

「もう大丈夫です。貴方達は強大な敵に勝利しましたよ」

「うん……」

アルトリアに言われ、改めてカービーは、強敵を倒したんだと実感した。

「……？　これは……？」

すると、謎の空間の中央に光が現れる。

カービーが覗くと、中は大きな渦になっていた。

ここを通り抜ければ、謎の空間を脱出できる。

そう確信したカービー達は、一斉に光の中に飛び込んだ。

「おっとー」

カービーが飛び込んだ先は、不気味な空間だった。

中央から左右に、三つの道が伸びている。

「ここが……闇の世界……？」

「……ようやく戻って来たか」

「お帰り、カービー！」

「シャド……兄？　ベル……ベル？」

カービーが見たのは、シャドウとベルの姿だった。

幻だと思っていたが、二人の表情で、それは幻ではないと確信した。

次の瞬間、カービーの中で何かが弾け飛ぶ。

「うわああん！　シャド兄！　ベルベル！

怖かったよ、寂しかったよ!!」

カービーは溜め込んでいた気持ちを吐き出し、泣きながらシャドウに抱きつく。

シャドウとベルは珍しく、目を開いて驚いている。

「この気持ちをかかなり堪えていたんだな……」

「噴き出すのも無理はないわね」

カービイは気が治まるまで、ただ泣き続けた。

ダーズの襲撃で散った、ピンクの悪魔、混沌を操る黒いハリネズミ、秩序を守る死神。

この三人が今、再び揃ったのだ。

「ただいまー！」

「お帰りなさい」

三人が再び揃ったという事は、バラバラになった仲間も再び揃ったという事。

リヒターやテリーなど、新たな仲間も、散らばったみんなも改めて自己紹介した。

道からは、邪悪な気配が漂っていない。

「という事は……これでボス敵は全滅したって事？」

「そういう事になるな」

「これで、私達はいっしょに……！」

カービイ、シャドウ、ベルがそう言った瞬間。

「これで、闇は広がる……」

「ぎやあああー！」

空間が裂け、不気味な目玉が姿を現す。

目玉は波打っており、カービイとベルはあまりの不気味さに怯えている。

シャドウは真紅の瞳で、ダーズを睨みつけている。

「余は混沌と闇の化身ダーズ。この世を闇で包む者」

目玉のみのダーズは、不気味な声を上げている。

「お前が、ダーズだな……！」

しばらく黙っていたカービイも、ダーズに向かって叫ぶ。

シャドウとベルも身構えて、ダーズに挑む準備をしたが……。

「待て、二人とも」

「今度は俺達が戦う」

「俺達、スマブラ四天王で戦おうぜ。カービイ」

「マリおじちゃん、リン兄、ピカピカ！」

マリオ、リンク、ピカチュウが現れ、シャドウとベルにそつと手を添える。

スマブラ四天王と呼ばれているこの四人、他のスマブラメンバーも一目置く存在だ。

「ただ、流石のスマブラ四天王でも、四人だけでは心許ないでしょう」
「俺も一緒に戦うぜ！」

アルトリアと柊蓮司も、スマブラ四天王と共に戦う決心をした。

この二人も心身共に頑健で、容易に屈しない。

そんな六人を見たダースは、不気味に笑った。

「フフフ……キーラは案外弱かったな」

「ダース……」

「傲慢だな……」

光の化身を「弱い」と見下すダースに、マリオとアルトリアは怒りを隠せない。

「だが、余はキーラとは違う。お主らだけで勝てると思ったか？」

「な、なんて奴だ……許さねえ」

「それは俺だって同じだ。俺達をバラバラにしたんだからな」

「怖いけど、やるしかないよ！」

「ああ、こいつは絶対にぶっ潰してやる」

どこまでも傲慢なダースを、六人は許さなかった。

仲間をバラバラにし、キーラ同様母体を利用した。

彼を倒さなければ、六人の気が済まなかった。

「よかろう。ならば……来るがいい！ 全てを闇に包んでくれる!!」

マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウ、アルトリア、柊蓮司は、闇の化身との決戦に挑んだ。

79 闇の化身ダース

闇の化身ダースとの決戦が始まった。

「デیفエンスブースター！」

「魔力放出！」

柊蓮司は広範囲に防御結界を張り、六人がダースの攻撃に耐えられるようにする。

アルトリアは自らの魔力を身体強化に用いて能力を上げる。

「せい！ やあっ！」

リンクは気を込めた剣でダースを斬り裂く。

ダースは一瞬だけ防御が緩み、そこにリンクが連続突きで畳みかける。

「大地拳！ ……に見せかけての渾身撃！」

柊蓮司はダースに魔力を纏ったパンチを放つ。

ダースは触手で打ち消すが、それはフェイントで、柊蓮司は力を込めて強力な攻撃を繰り出す。

「喰らえ、ガツーンハンマー！」

「ロケットずつきー！」

マリオはダースに向かってダツシュし、ハンマーを振り上げ一気にダース目掛けて殴りつける。

カービィはダースの触手に短い手足での会心の一撃を放ち、

ピカチュウはロケットずつきで大ダメージを与える。

「ぐああっ！」

ダースは弾丸を連射してピカチュウを攻撃する。

命中した弾丸がピカチュウの身体を蝕む。

「はあっ！」

アルトリアは剣をダースの触手に振り下ろすが、弾かれてしまう。

一方で、アルトリアもダースの触手の攻撃を剣で弾き返した。

「食らえ！」

「おっと、させないぜ！ ショットプット！」

ダースは目を光らせ、攻撃しようとするが、柊蓮司が大地の力を込

めた弾丸を放って打ち消す。

「せいやっ！」

「どりゃあー！」

リンクは気合を込めた斬撃でダーズの触手を斬る。

柊蓮司も魔剣で追撃した。

「えいやーっ！」

「ぐおおっ！」

カービイは思いつきりハンマーを振り下ろし、ダーズに大ダメージを与える。

「うわっ！ うわわわわ！」

だが、ダーズは触手で空間を引き裂いた。

空間に巻き込まれたマリオはなすすべなくダーズの猛攻を受ける。

「……なんでしよう、これは……！ うぐあああ！」

ダーズはムカデの尻尾のような姿で動き回り、アルトリアの身体を貫き、内部から破壊する。

精神力が強いアルトリアでもこの攻撃には恐怖を感じ、思わず口を噤んでしまった。

そこに容赦ないガトリング攻撃が入り、アルトリアは大ダメージを受けてしまう。

「この攻撃はどうだ？」

「うわああああ！」

ダーズは目を光らせ、地面から激しい勢いの火柱を起こしてファイター達を攻撃する。

ピカチュウは何とか攻撃をかわしたが、それ以外の五人に命中しダメージを与える。

「くそ、なんて威力だ……！」

「だからといってここで躓くなよ！」

「ああ、分かってる！」

ダーズの攻撃の凄まじい威力に、ふらつく柊蓮司。

だが諦めずに立ち上がり、リンクと共にダーズの触手を切り裂く。

「せいやあああああ！」

マリオは渾身の力を込めてハンマーを振り下ろし、ダーズの触手の一部を打ち砕いた。

「ぐうっ……スマッシュブラザーズよ。この程度で余を追い詰めたとしても?」

「ああ! お前に、この世界を渡しはしない!」

ピカチュウは10まんボルトをダーズに放つが、ダーズは闇の力を放って攻撃を防ぐ。

そして、ダーズはピカチュウを指差す。

「ほら……其方はもうすぐ倒れる」

「何……!? むぐっ!!」

ピカチュウが動こうとすると、急に胸を押さえる。

カービィはそれに気づかず、ストーンでダーズにダメージを与えた。

「……ピカピカ?」

ストーンを解いた後、カービィが見たもの。

それは、倒れているピカチュウの姿だった。

「ピカピカ? どうしたの、ピカピカ?」

カービィは戦闘中にも関わらず、ピカチュウに駆け寄って声をかける。

だが、ピカチュウは全く反応しなかった。

すなわち、それは——戦闘不能という証だ。

それを知った瞬間、明るいカービィの表情が一変、ダーズに対する怒りへと変わった。

「よくも……ピカピカを!」

「其方も葬ってやろう」

ダーズは余裕な態度を崩さず、四つの時限爆弾を設置する。

「えい! やあ! とおおお!」

カービィは素早く動いて時限爆弾を破壊、その結果被害が及ぶ事はなかった。

さらに、回し蹴りがダーズの眼球にクリーンヒットする。

仲間を傷つけられたカービィの動きは、かなりキレが良くなっている。

た。

「やるな！ 霊破斬！」

そんなカービィを見た柊蓮司は負けじとダースの魂目掛けて魔剣を叩きつける。

アルトリアは倒れているピカチュウを見て「これはまずい」と判断し、

鞘の力を使って全員の傷を癒そうとしている。

「させるか」

「それはこっちのセリフだ！ ファイアボール！」

ダースが阻止しようとするが、マリオがファイアボールを放って防いだ。

「この鞘で、どうか……」

アルトリアは鞘の力を解放し、味方全員の体力を回復した。

戦闘不能になったピカチュウが、目を覚ます。

「ん……俺は……生きているのか？」

「よかった、ピカピカ。目を覚ましたんだね」

カービィは復活したピカチュウに笑みを浮かべる。

六人を見たダースは、怒りで身体を震わせる。

「其方等……許さんぞ!!」

ダースは広範囲に闇の衝撃波を放った。

「どうやら、ダースはホンキのようです……。こちらも全力でいきましよう！」

アルトリアは剣を構え直し、ダースに突っ込んで切り裂いた。

「ぬうん！」

「ぐああー！」

ダースは空間を切り裂き、そこから触手を四方八方に呼び出す。

マリオは触手に貫かれ、大ダメージを受ける。

アルトリアは何とか抵抗したが、僅かな傷を負う。

「でえいつー！」

「どりゃあつー！」

柊蓮司とカービィのダブル回し蹴りが、ダースの体力を削ってい

く。

「その程度か」

「ぐあああ!」

ダーズはリンクに触手を伸ばし、締め上げる。

リンクは身体の骨が砕けるような感じがし、叫ぶ。

「ファイア掌底!」

「ぐあああああああ!」

マリオは炎を纏った掌底をダーズの目玉に放つ。

目玉は炎に包まれ、ダーズは悶え苦しむ。

「ヒール!」

「食らえ!」

終蓮司はマリオに回復魔法を使い、アルトリアはダーズを兜割りで攻撃する。

直後、ダーズはガトリングでアルトリアに反撃した。

「かみなり!」

「鬼殺し火炎ハンマー!」

ピカチュウはダーズの真下に立ち、雷を呼んで大ダメージを与える。

カービイは炎を纏ったハンマーでさらに追撃する。

ダーズの動きはかなり鈍くなってきていた。

「これで決めます。約束された……勝利の剣!!」

アルトリアは剣に魔力を込め、振り抜いて巨大な光の魔力をダーズに叩きつけた。

如何なる者といえど、この魔力を纏った攻撃をかわす事は不可能である。

「ぐぎやあああああああああ!!」

アルトリアの一撃がダーズにクリーンヒットした。

ダーズは触手をうねらせて悶え苦しみ、その触手もどんどん縮んでいく。

そして、彼の身体も闇に包まれていき、ついに限界を超えて大爆発した。

そして、熱を伴う光がダーズを追うように異空間の中に入った。
「やつと……ダーズを倒した……」
「でも……あの光は……」

80 ー キーラとダースの過去

スマブラ四天王、アルトリア、終蓮司は、ついに闇の化身ダースを倒した。

しかし、世界はまだ元に戻っていないかった。

光の世界でキーラ、闇の世界でダースは倒したがあくまで撤退しただけで、

完全に敗れたわけではないからだ。

「……うゝむ」

「どうしたんだ、リンク？」

リンクは、一人で腕を組んで考え事をしていた。

気になったマリオは、彼に声をかけた。

「キーラとダースって、この世界を侵略しに来たんだよな。その割に、なんで仲が悪いんだ？」

「そこからかよ」

リンクは、キーラとダースの行動に疑問を浮かべていた。

強大な力を持っているにも関わらず、協力しないのはおかしいと思っただのだ。

それは、現実世界でも同じかもしれないが。

「確かに、どっちも悪い奴なら、一緒に襲ってくるはずだよな」

カービイもこの事については疑問に思っていた。

歴代の大ボスが一齐に迫ってくる事はあったが、今回は何故か一体一体を相手にしている。

どうしてだろうとカービイが考えようとした時。

「鋭いな」

「うわっ!？」

「マスターハンド様!？」

「クレイジーハンド様まで!？」

突然、マスターハンドとクレイジーハンドがマリオ達の目の前に現れた。

ピカチュウ、アイシャ、ドリイは、二柱の神がいきなり出てきた事

に驚く。

マスターハンドとクレイジーハンドは「すまない」と謝った後、事情を話した。

「キーラとダーズが撤退した事で、私達を支配する彼らの力が弱まった」

「だから、君達の目の前に現れる事ができた」

「どうやら、両手袋を支配している光と闇の力が弱くなったため、一時的にこの世界に姿を現す事ができるようになったようだ。」

マスターハンドは早速だが、と口（？）を開く。

「キーラとダーズがこの世界を侵略した理由を調べてみたら、彼らの過去が分かったんだ」

「彼らにはすまないと思うが……ここで話そう」

「いや、君が謝る必要はない。僕にとつて、こいつらは『侵略者』だからな」

シャドウはあくまで、キーラもダーズも、

この世界の侵略したものである事には変わりはないと言った。

マスターハンドとクレイジーハンドは頷くように身体を動かす。

「いいか、最後までちゃんと聞くんぞ」

「これは君達の道を決める、重要な話だからな」

そして、マスターハンドとクレイジーハンドは、

この話がキーラとダーズに聞こえないように認識阻害結界を張った後、

光の化身キーラと闇の化身ダーズの過去を話した。

宇宙空間の中で、翼を持つ白い光と触手を持つ黒い生物がいがみ合っていた。

『世界を照らすのは光だと、あれほど言っても分からないのか？
ダーズ』

『いや、闇こそが至高だ。キーラ、貴様の光は世界に必要な』

『ほう……人々が求める光を必要ない、だと？』

『闇がなければ光が生まれえないと言うが、それでも世界に必要なのは、闇なのだ』

「キーラとダーズは、私達と同時期に生まれた神だった。

キーラは光と秩序を、ダーズは闇と混沌を司った」

「だが、キーラとダーズは折り合いが悪く、事あるごとに衝突を繰り返していた」

全員、マスターハンドとクレイジーハンドの話を真剣に聞いていた。

キーラとダーズは元から仲が悪かったため、衝突するのも無理はないと感じた。

白い光——キーラと黒い生物——ダーズは、互いに光と闇の優位さを説いた。

『光は確かに束縛という悪しきものがある。過去と答えも、時に絶望を生む。』

だが、秩序と安定という、良き部分はある』

『闇は確かに混沌と謎を象徴するものだ。変化も、時に悪い方に傾く。』

だが、自由と未来という、良き部分はある』

「キーラとダーズはどちらが優れているのか、話し合いやそれぞれの行動で決めようとした」

「しかしそれでも、決着がつく事はなかった」

『埒が明かん。どうすればよいのだ』

『ならばキーラよ、ここで一つ、勝負をしようではないか』

『……勝負?』

『この世界でどちらがより優れているのかを決める、単純だが明快な勝負だ』

『そうか……それならば、手っ取り早いな。今までのやり方が、実に愚かしい。賛成だ』

『では、戦場を決めよう。……ここだ!』

キーラとダーズはそう言って、空の彼方へと飛んでいった。

「最終手段として、キーラとダーズは、

どちらがより優れているかという事を証明するために、一つの勝負をする事にした」

「争いの地として選ばれたのは、『この世界』——争いの世界だった。

その世界で争い、優劣を決める事で、雌雄を決しようという事なのだ」

「しかしその世界には元々、様々な動物、植物、種族が住んでいた。だから彼らは、そいつらの肉体を奪い、器に入れ、手駒として使役した」

「それがスピリッツだったのね」

今まで解析・解放してきたスピリッツの生まれ方を知ったベルは、神妙な面持ちになった。

スピリッツも、元はこの世界の住民だったのだ。

「後はご存じの通り、カービィ、シャドウ、ベル以外の全てのスマブラメンバーは

キーラとダーズに敗れ、母体をスピリッツを入れる器として使われた」

「これが、今回の異変の真相だ」

マスターハンドとクレイジーハンドにより、争いの世界で起きた異変の真相が分かった。

争いの世界の住人は、神々の戦いに否応なく巻き込まれたという事になるのだ。

「キーラとダーズは勝負のためなら俺達の都合などお構いなしか」

全ての真実を知ったマリオが呟く。

「いつもは言い争ってる奴らも、こいつらが来れば手を繋ぐ……のはこの世界だけなのよね」

ミロも皮肉たっぷり到现在の状況を言った。

もつとも、彼女の上司は、そんな事が起きたらすぐにやり直せるのだが。

「ぐっ……！」

すると突然、マスターハンドとクレイジーハンドが苦しみ出した。

「ど、どうしたんだ、マスター！ クレイジー！」

「キーラとダーズが、目覚めようとしている」

マスターハンドとクレイジーハンドは途切れ途切れにマリオ達に話した。

どうやら、撤退したキーラとダーズが力を取り戻しているようで、再び彼らに支配されようとしていた。

「私達はこのままでのようだ」

「待ってください、マスターハンド様！」

「行かないでください……！」

アイシャとドリイが止めようとするが、

マスターハンドとクレイジーハンドは苦しそうに「やめてくれ」と言う。

二人のメイドは悲しげな表情になった。

「私とクレイジーハンドは信じている」

「だから、もう……」

「君達が道を決めてくれ」

マスターハンドとクレイジーハンドはそう言い残すと、ファイター達の目の前から消滅した。

「……分かってるよな、みんな」

「うん」

「ああ」

「ええ」

リーダー格であるマリオの言葉で、その場にいるファイター全員が頷いた。

キーラとダーズの過去と野望は全て知った。

だから、ファイター達が取る道は、もう一つしかなかった。

「よく考えてみると、キーラとダーズ、どちらか片方を倒したら、

もう片方の野望が達成しちゃうのよね」

「ええ。白夜に付いても暗夜に付いても、真の平和は訪れませんでした。

つまり、光を選んでも闇を選んでも、未来はない、という証明です」
「キーラもダーズも侵略者である以上、僕達はそいつと戦う使命がある」

「だから、二人ともやつつける！」

そう——キーラとダーズを両方とも打倒し、争いの世界に真の平和

を取り戻すのだ。

「いくぞ。光と闇が混ざる道に……！」

そう言つて、ファイター達は、最終決戦の場に飛び込むのだった。

第三部：最終決戦

81 光と闇が混ざる道

スマブラメンバーが飛び込んだ先は、光と闇が混ざっている場所だった。

周囲には光に包まれたスピリッツや、闇に包まれたスピリッツが浮いている。

その中で、キーラとダーズの戦いは激しくなった。

レーザーが互いの陣営を貫き、戦力を大きく削っていく。

キーラの方が小さく、ダーズの方が大きい、それでも戦いは、終わる事がなかった。

「待てっ!!」

マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウを先頭に、スマブラメンバーが二人の前に姿を現す。

彼らに気づいたダーズは、四人の方を向いた。

キーラもコアを光らせて反応する。

「来たか、スマツシュブラザーズよ」

「どちらを選ぶか……決めるがよい」

キーラとダーズはお互い、こちらの味方になるように促す。

だが当然、マリオ達は首を横に振った。

争いの世界を奪い、自分達を道具のように扱った彼らの味方になるわけがなかった。

「俺達は絶対に負けない……お前達を倒すまで!」

「キーラ、ダーズ……絶対に許さないからな」

「この世界の平和は、取り戻すから!」

「首を洗って待ってるよ、キーラ、ダーズ!」

スマブラ四天王がキーラとダーズにそう宣言した。

最終決戦が今、始まる。

「まずはこっちに行くぞ」

スマブラメンバーはマリオを先頭に、右に進む。

そこには光に包まれたテトラのスピリッツがいた。光に包まれたという事は、キーラ軍の戦力だろう。

「オイラが戦うよ!」

「大丈夫ですか、デイディーさん? テトラさんはエース級ですよ?」
「だーいじょーぶ! この動きなら、あいつを翻弄できるからさ!」

自信満々なデイディーコングを心配するリユンヌ。

だがデイディーコングの宣言通り、彼はテトラを翻弄してあっさり
と勝った。

「これで、回収完了ね」

「久々にそれ、見るね」

ベルはテトラのスピリッツをスピリッツボールの中にしまう。

久しぶりに三人揃ったため、カービィは思わず懐かしく感じた。

その後、バルドルをウルフが解放すると、突然、左の闇が物凄い力
で右の光を押しした。

光のスピリッツを解放し、闇の勢いが増したのだ。

「これって、どういう事……?」

「ぐわ?」

「ぼう?」

「推測だが……光と闇の勢力を均等に倒していけば、キーラとダーズ
の下に辿り着けるだろう。」

だが、闇雲に進めば、倒せない可能性が高い。次は左に進み、闇の
スピリッツを解放せよ」

「ああ」

ゲッコウガの推測通りならば、バランス良く解放すればキーラと
ダーズを倒せるかもしれない。

一行はゲッコウガに従い、分岐を左に進んでペーパー将軍、ゼロ、ロ
ビンを解放した。

そして、西に進むと、光の鎖に縛られた赤毛の少年、ロイを発見し
た。

「ロイ……」

「こんなところにいるとはな」

「キュウシュツガオソクナリ、タイヘンモウシワケアリマセン」

ウオッチはロイに謝り、シエフで彼を縛る鎖を打ち砕いた。

ロイは赤い瞳をぎらつかせながら襲い掛かる。

ピカチュウ、ウオッチ、アイク、ブラックピット、ダックハント、パツクマンは、

ロイを解放するべく、彼と戦った。

「そーれっ！」

パツクマンは腕を振り上げ、青いモンスターを呼び出してロイを打ち上げる。

ロイは無言でアイクとピカチュウに斬りかかる。

「世話が焼けるな」

ブラックピットは衛星ガーディアンズを使い、味方全員の防御力を一時的に上げる。

「ばうばう！」

「アイアンテール！」

ハントはロイに噛みついて身動きを取れなくし、ピカチュウは硬質化した尻尾を叩きつける。

ウオッチはロイの行動をじっくりと見ていた。

アイクはラグネルで、ロイに重い一撃を与える。

パツクマンはロイを連続で殴り、ブラックピットはフェイントをかける。

ピカチュウとウオッチはロイの攻撃をかわし、それぞれ、でんげきとライオンで反撃する。

「……」

「その攻撃、見切った！ 10まんボルト！」

ピカチュウはロイのマーベラスコンビネーションを見切り、10まんボルトで反撃。

ダックハントはワイルドガンマンを召喚し、

ブラックピットは神弓シルバリーリップによる射撃攻撃を行う。

「それーっ！」

「……！」

パックマンのフルーツターゲットと、
ダックハントが召喚したワイルドガンマンの射撃が命中し、
ロイは吹っ飛ばされるが、ブレイザーで復帰する。
さらにダックハントはワイルドガンマンを召喚、自身と共に一斉射
撃を行った。

「ウグ……！」

何度も攻撃を食らったのか、ロイの頭が混乱する。
今がチャンスだ、とパックマン達は一斉攻撃する。

「ゆけつ、アカベエ！」

「アイアンテール！」

「デンシヨツカー！」

「ファイアアタック！」

「ギャアアアアアアアア!!」

パックマンが召喚したアカベエ、ピカチュウの硬質化した尻尾、
ブラックピットの豪腕デンシヨツカー、ウオッチの松明による渾身
の一撃がロイに炸裂。

まともに食らったロイは、空の彼方へと飛んでいくのだった。

「……あれ、ここはどこだ？ 僕は一体、何をしていたんだ？」

「……ん？ 君は、もしかしてアイク？」

「ん？ そうだが？」

「ああ……本物のアイクなんだね！ よかった！」

アイクの顔を見たロイが一安心する。

「どうやら、元に戻ったようだな」

「仲間がまた増えたネ！」

彼の眼は元の青色に戻っており、ピカチュウとパックマンは一安心
する。

「ところで、どうして君達はここに来たの？」

「実は……」

ピカチュウがロイに事情を話すと、ロイは納得して頷いた。

「なるほどね。キーラとダーズを倒すために、光と闇のバランスを
取っているのか」

「どちらが勝っても俺達の世界は終わる。だから、世界を救うには、両方倒すしかない」

「別にあいつを倒してしまっても構わないよね？」

ロイは茶目つ気たつぷりに言った。

「ああ……そして、ここにいる仲間も、全員助ける。そのためには、お前の力も必要だ」

「改めてよろしくね、ピカチュウ！」

ロイは屈んで、ピカチュウの手を握った。

すると、闇の勢力がさらに強くなった。

「ダース側がかなり優勢だな……」

このまま突き進んでいけば、自然とキーラのみと戦う道に着いてしまう。

スマブラメンバーの目的は、キーラとダースを両方打倒する事だ。

故に、ここから光の勢力を強めなければならない。

「次はどこに行けばいいの？」

「こつちだ」

スマブラメンバーは北に行き、ロイの前にいたマスターハンドと戦った。

挑んだのは、シャドウ、ヨッシー、ゼルダ、リユカ、ゲッコウガ、イレブンの六人だ。

シャドウは真つ先に拳銃を三連射する。

「そ〜れ〜！」

ヨッシーは特殊な卵を投げ、一時的にマスターハンドの特殊能力を封じる。

ゲッコウガは両手で斬撃を放つが、マスターハンドは彼の攻撃をかわす。

「デイン！」

「PKファイアー！」

「力の女神デインよ……」

イレブンは呪文を唱えて指から聖なる電撃を放ち、リユカは火の玉でマスターハンドを燃やす。

シャドウは回し蹴りで攻撃し、ゼルダはデインの炎を放つ。

ゲッコウガは高く飛び上がり、足で踏みつけてダメージを与える。

続けて、ヨツシー、イレブン、リュカも追撃した。

「ゆくぞ」

「メラミー！」

ゲッコウガのみずしゆりけんがマスターハンドに命中し、粘膜に包まれる。

イレブンはマスターハンドの急所を狙い、大きな火の玉を放って爆発させる。

「いつきますよ〜！」

「ハッ！」

ヨツシーは空中からバタ足でキックし、マスターハンドを連続で攻撃する。

シャドウはマスターハンドの背後に回り、素早く手刀で一撃を与える。

イレブンは勇者のつるぎを振るい、マスターハンドに大ダメージを与えた。

「とどめだ」

そしてシャドウが距離を取った後、スナイパーライフルでマスターハンドを狙撃。

マスターハンドは自分がどうなったのか分からないまま、消滅するのだった。

「このマスターハンドもフェイクか」

シャドウ達が相手したマスターハンドも、キーラが作り出した偽物だった。

本物のマスターハンドに出会うのは、遠い。

「光の力を弱めてくれて感謝する」

すると、ダーズの低い声が聞こえ、シャドウとゲッコウガは身構える。

だが、この時点でダーズには手を出せない。

「余はさらなる増援を呼ぼう……！」

ダーズは地響きと共に、この空間に増援となる闇のスピリッツ、クレイジーハンド、

そして眼鏡をかけた黒髪の女性を呼び出した。

「皆さん、どうしますか？」

「一度戻るぞ。あの女もまた、スマッシュブラザーズだからな」

「はーい」

一行は入り口に戻り、今度は左に進んだ。

ミドナを解放した後左に進み、リトルバード、ジャンヌ、ルナアラ、鬼神リンクを解放。

そして、スマブラメンバーは女性の前に立った。

「今、助けるよー」

マルスはファルシオンを抜くと、女性を縛っている闇の鎖を切り裂いた。

すると、女性——ベヨネッタは華麗な動きで一行に襲い掛かってくる。

シャドウと目が合ったベヨネッタはこう言った。

「悪いけど、坊やと遊んでる暇はないのよね」

「誰が坊やだ。僕を下に見ているのか？」

「私はダーズ様にお仕えする身なの。ダーズ様は世界を闇に染めてくださるのよ」

「……貴方も、ダーズの呪縛を受けているのね」

そう言って、サムスはアームキャノンでベヨネッタに向ける。

彼女は相変わらず、妖艶な笑みを浮かべたままだ。

「ふふっ、そうねえ。ウズウズしちゃう。闇の鎖がなかったら、もつともつと楽しいのに」

「じゃあ、こつちも全力で行かせてもらおうよ」

「……私も、わたくし手加減はいたしません」

マルスはファルシオンを抜く体勢に入る。

テリーは身構え、こどもリンク、ベレス、ドレイもそれぞれ武器を構えている。

六人を見たベヨネッタは、殺る気満々になった。

「二度と齒向かう気が起きないようにしてあげる」

「……来るわよ！」

「クラエ」

「させん！」

クレイジーハンドはミサイルを放とうとする。

シャドウは後方で狙撃銃を撃ち、クレイジーハンドの攻撃を阻止する。

「ありがとう、シャドウ！」

「せいやつ！」

「バーンナツクル！」

「あなた達の行動が見えます」

マルスはシャドウにお礼を言つて、ファルシオンでベヨネッタを斬りつける。

ベレスは天帝の剣で追撃し、テリーはバーンナツクルを放つ。

サムスとこどもリンクも隙を突いて攻撃。

ドリイはアナライズの魔法でベヨネッタの行動パターンを読んだ。

「ふっふっふ」

ベヨネッタは銃を振り上げ、乱射しつつ連続蹴りでベレスを攻撃する。

テリーは空中からパンチを放ち、ベヨネッタを攻撃する。

マルスは下段より繰り出す強烈な切り上げと喉元への突き下ろしでベヨネッタを切り裂く。

「ド・ポプル・デ・イグニ・デ・フラゴ」

「アアアアッ！」

「……！」

ドリイは呪文を詠唱して巨大な炎の玉を創造し、杖を振りかざして投射した。

炎の玉は空中で爆発し、ベヨネッタに大きな被害を与える。

「やーっ！」

こどもリンクはブーメランを投げて攻撃する。

「……」

「見切った！」

ベレスはベヨネッタの攻撃を完全に見切り、すぐさま死に体を魔槍アラドヴァルで貫く。

その攻撃は不可避であり、その見切りには寸分の狂いもない。

サムスはミサイルを放ち、爆撃する。

「ベヨネッタは回避に専念しています」

「だったら隙を突いて！　でやーっ！」

ドリイはこどもリンクに助言をする。

こどもリンクはベヨネッタの渾身の一撃をかわしてコキリの剣で斬りかかる。

「ラ・ポク・デ・イス」

ベヨネッタは無味無臭の誘眠性ガスにより眠る。

「ありがとう、ドリイ。……はあっ！」

「グウウウウッ！」

ベレスは眠ったベヨネッタに勢いよく魔斧アイムールを振り下ろし、大ダメージを与える。

テリーはベヨネッタをパワードライブで攻撃する。

「凍りつけ」

サムスはアイスマサイルでベヨネッタの足を凍らせアームキャノンによる打撃で氷ごと砕く。

「……！」

眠っているベヨネッタに、マルスの渾身の一撃が命中した。

ベヨネッタは起きるが、一時的に混乱している。

こどもリンクは距離を取り、炎の弓矢でベヨネッタを攻撃した。

ベヨネッタの体力は、残り僅かだ。

「導いてみせる！」

ベレスは魔弓フェイルノートを取り出し、ベヨネッタを狙う。

弦を引き、矢がベヨネッタの身体を貫くと、ベヨネッタは場外に吹っ飛ばされた。

そう、六人の勝利が決まったのだった。

「はあ、はあ、はあ……あなた達と戦えて、とっても楽しかったわよ」

正氣に戻ったベヨネッタは、息を切らしながらも戦闘の感想を述べる。

美しい外見に似合わず、かなりの戦闘狂のようだ。

「で？ 坊や達は何の用なの？」

「……」

「やめてください、シャドウさん」

シャドウは銃口をベヨネッタに向けようとするが、ドリイはシャドウを制止する。

その後に、ドリイは落ち着いてベヨネッタに事情を話した。

「……というわけで、私達はわたくしキーラとダーズを追い詰めて、倒そうとしているのです」

「ふーん、なるほど……ダーズ？ もしかして、あの？ ……そう、そういう事だったのね」

「べ、ベヨネッタさん？」

「一緒に行かせてちょうだい。私を操った責任を、取ってもらってからベヨネッタはダーズに操られていた時の記憶が残っていたようだ。彼女のかすかな怒りを感じ取ったドリイは頷く。

「分かりました。一緒に行きましょう。キーラとダーズは、必ず倒します」

「ええ……お願いね、お嬢ちゃん」

「……はい」

ベヨネッタを解放した事で、少し光が強くなった。

それでも、戦いはまだ、終わらない。

82 狂気の左手

争いの世界を救うため、光と闇を打ち倒す最終決戦が始まった。

ベヨネッタを解放した一行は、この先にいるクレイジーハンドと戦う準備をしていた。

「この先から、ただならぬ気配を感じます」

「ドリイ……」

クレイジーハンドに仕えるメイド、ドリイはごくりと唾をのんだ。

「ラ・ナチュ・マ・ギ・デ・スカト」

ドリイは念のため、防御魔法を味方全員にかける。

相手の攻撃は強力なので、それに備えるためだ。

そして、六人が一步踏み出すと、クレイジーハンドが目の前に現れる。

「……来ますよ!」

「アアアアアアアアアアアア!!」

クレイジーハンドは叫び声を上げながら、ゼルダ達に襲い掛かってきた。

「やあつ!」

ゼルダは力の女神デインの力を借り、炎を発生させて攻撃する。

クレイジーハンドはドリルのようにクツパに突っ込んでいった。

「おらああ!」

クツパは渾身の一撃で反撃するが、クレイジーハンドには当たらなかった。

「くそつ、オレは空が苦手なんだ……」

リトルマックは、空中に浮くクレイジーハンドが苦手だった。

その時、ベルがリトルマックの身体に手を触れる。

「力をあげるわ」

「サンキュー! ロングアッパー!」

リトルマックはベルの魔力により一時的に能力が上がり、遠い間合いから突き上げるように拳を放った。

メタナイトは空を飛び、素早く剣で切り刻んだ。

「オアアアアアアアア!!」

「どうか、正気に戻ってください……。クレイジーハンド様……!」
クレイジーハンドは五本の指から青い炎を放った。

ドリイの防御魔法の効果でダメージは大した事がなかったが、
主の裏切りはドリイの心に傷をつけた。

「邪魔するんじゃないわよー。ナイトメア!」

ベルは鎌を勢いよく投げつける。

クレイジーハンドの指を切り裂いたが、指はすぐに再生しかすり傷
に留まった。

「勇気の女神フロルよ、彼の者に勇気を与えたまえ」

ゼルダはフロルの力を借りてドリイに優しく追い風を吹かせ、その
行動を補助する。

余裕ができたドリイは杖を振り、魔法の矢を飛ばして攻撃した。

「グウウ……ドリイヨ、ナゼワタシニサカラウノダ」

「クレイジーハンド様はそのような事は言わない……。だから私は迷わ
ない!!」

「我輩はここで負けるわけにはいかないのだ!」

「はあああつ!」

ドリイは防御するクレイジーハンドに、魔法の矢を乱射して攻撃す
る。

クツパは回転しながら突っ込んでいき、リトルマツクもロングアツ
パーで追撃する。

ベルも大鎌を振り、クレイジーハンドを切り刻む。

猛攻によりクレイジーハンドは瀕死になっていた。

「今ですよ、ドリイさん!」

「クレイジーハンド様、どうか、正気にお戻りください。

ラ・ナチュ・ド・ステラ・マ・ギ・ド・ヴェン!」

「ギアアアアアアアアアアア!!」

追尾する魔力弾を乱射し、クレイジーハンドを連続で打ち据える。

まともに攻撃を食らい続けたクレイジーハンドは悶絶し、暴れ出

す。

やがてクレイジーハンドは完全に戦意を喪失。

ドリイ達はこの戦いに、勝利したのだった。

「うぐうっ！ うあああああー！」

クレイジーハンドはのたうち回っていたが、

しばらくすると、彼の身体から黒いオーラが消えていく。

そして、大人しくなったクレイジーハンドは宙に浮き上がり、正気に戻る。

ドリイは確信した、彼が本物のクレイジーハンドなのだ。

ベル達は、クレイジーハンドをダーズの支配から解放したのだ。

正気に戻ったクレイジーハンドはのたうち回り、ようやく、完全に落ち着きを取り戻した。

「……私はなんて事をしてしまったんだ……」

「元に戻ったのですね、クレイジーハンド様」

ドリイは寂しそうな顔で、クレイジーハンドに抱き着いた。

ファイター達と違い、クレイジーハンドは操られた時の記憶をはっきり覚えているようで、

クレイジーハンドは彼と戦った六人に謝罪した。

「後はマスターハンドさえ解放すれば、キーラとダーズを倒すための道が開く。」

だが、そのためには、光と闇を均等に……」

「それは分かっております。クレイジーハンド様はもうお休みください。」

後はスマブラメンバーが、道を開きます」

ドリイはクレイジーハンドにそう誓った。

クレイジーハンドがテレポートで姿を消すと、光の勢いが増していった。

「残るはマスターハンド様ですわね」

「ファイターも解放せねば、な」

一行は再び開始地点に戻り、左に進み、ミドナを倒した場所から右に進んだ。

ムムカ、ダークマインドを解放し、分かれ道を右に進み、マグナ、シヤノアを解放する。

すると、偽クレイジーハンドの群れと、黒い身体を持つサムスが宙に浮いていた。

彼女はフェイズンから生まれたダークサムスだ。

「ダークサムス！ ……不快ね」

サムスは。パワードスーツ越しにダークサムスの姿を見て、不快になる。

「はっ。そりやそうだろうねえ。自分と同じ姿の敵がいたら、不快になるさ」

ダークサムスはサムスを嘲笑する。

だが、視線をすぐにカービィとストームに向けた。

「でも、今の私はアンタに用はない。そこにいる球体をいたぶりたいよ」

「何ですって」

「ダークサムス…：僕とカービィと戦いたいのか？」

「そうさ。こいつらをサムスの前で消してから、サムスに苦しみを与えてやるよ」

ダークサムスはアームキャノンを二人に向ける。

「なんて事を…：」

「サム姉をいじめちゃダメ！ 黒サム姉は、僕達がやっつける!!」

「油断大敵、という言葉を教えてやろう」

「相手は天使じゃないけど…：私を楽しませてくれるかしらね」

「サア、ミナサン、ヤミヲハライマシヨウ!!」

「…：言っておくけど、バランスは取ってよ」

「キーラとダーズは両方やっつけるんだからね」

カービィ、ストーム、ウオッチ、ロックマン、ベヨネッタ、トウー
ンリンクが身構える。

次の瞬間、ダークサムスと偽クレイジーハンドの群れが襲い掛かってきた。

「汚れな！」

「うわあ！」

ダークサムスはフェイゾンエネルギーを物体を破壊する力に変えてカービィに放つ。

まともに食らったカービィは、体力が大きく減る。

ストームは十分に距離を取った後、集中力を極限まで高め、必中の矢を放つ。

「ロックバスター！」

「そんなもの！」

ロックマンはチャージショットを放つが、ダークサムスはフェイゾンを盾に抵抗する。

「やあつ！」

「えい！ それ！ うわああつ！」

「グリーンハウス！」

ベヨネッタがスライディングを繰り返した後、スカボロウフェアで連続攻撃する。

カービィはパンチとキックで偽クレイジーハンドを攻撃するが、ミサイルで反撃される。

ウオッチもグリーンハウスで攻撃するが、カービィ同様に反撃を受けた。

「こいつらは近距離から攻撃すると反撃するみたい。だから、飛び道具で攻撃するのよ」

「そっか！ じゃあ、これで！」

トウーンリンクは勇者の弓に矢を番え、偽クレイジーハンドを貫いた。

ロックマンはボンバーマンの特殊武装、

ハイパーボムを投げて周りの偽クレイジーハンドごと爆発に巻き込む。

「固まりなあ！」

「させるか！」

ダークサムスはフェイゾンでトウーンリンクを束縛しようとするが、

ストームが矢を放って打ち消した。

「うふふ、さようなら」

ベヨネツタは大事な部分を手で隠した後、スーツを髪に戻し偽クレイジーハンドを切り裂く。

偽クレイジーハンドは黒い煙になって消滅した。

「鬼殺し……火炎ハンマアアアアアア!!」

「ぎゃああああああああ!!」

そして、カービーが炎を纏ったハンマーをダークサムスに振り下ろし、場外に吹っ飛ばした。

ダークサムスが倒された以上、残った偽クレイジーハンドを倒すのは容易だった。

こうして、ダークサムスとの戦いは呆気なく終わりを告げるのだった。

「……ベルベル、黒サム姉はどうするの？ やっぱり、倒しちゃうの？」

カービーが倒れているダークサムスを見ながらベルに言うと、ベルは首を横に振った。

「倒さないわ。この世界は、誰も死ななくていいやさしい世界よ。」

たとえ、善人でも悪人でも、ね。だから、ダークサムスは戦力として使うわ」

クツパも、ジュニアも、キングクルールも、ガノンドロフも、リドリも、ウルフも、

そして微妙だがミュウツーとワリオも、皆、同じスマッシュブラザーズなのだ。

ダークサムスを除け者にしていいわけがない。

ベルはダークサムスを戦力として加えるのだった。

「これで、クレイジーハンドは全て敗れたか。ふふ……感謝するぞ、スマッシュブラザーズよ」

ダークサムスと偽クレイジーハンドを倒した事で、光が闇を打ち消し、ダーズを追い詰めた。

キーラは今がチャンス、と一際強く光り輝く。

すると、光に包まれたマスターハンドと、光の鎖で縛られたパルテナが現れた。

「パ、パルテナ様……」

「マスターハンドまでいるぜ……」

ピットとブラックピットがそう呟く中、ベルは真剣な表情で二人を見ていた。

カービイもごくりと唾を飲んでる。

「……こいつが最後の、捕まっているファイターね。」

この戦いももうすぐ終わるわ。それでも、気を抜いちゃダメよ」

「キーラは感謝するなんて言ってたけど、感謝なんてするものか。」

お前も絶対に、僕達がやっつけてやる」

スマッシュブラザーズの長い長い戦いは、もうすぐ、終わりを迎えようとしていた。

クレイジーハンドとダークサムスをダーズの呪縛から解放し、残るはマスターハンドとパルテナのみ。

スマッシュブラザーズはシャドウのカオスコントロールを使い、スタート地点に戻り、右に進んだ。

一行はセリス、ティルス、ソルガレオ、ヒカリを倒し、

いよいよマスターハンドとパルテナがいる場所に辿り着く。

「パルテナ様……」

ピットはぎゅっと、パルテナの神弓を握り締める。

彼女が、敵に操られた最後のファイターなのだ。

「ちっ……」

ブラックピットは舌打ちし、神弓シルバーリップを構える。

パルテナの神弓の試作品であるこれは、試作品ながら使いやすい性能を誇る。

「ラ・ナチュ・マ・ギ・デ・スカト」

マスターハンドとパルテナは魔法攻撃を得意とするため、ドリイはレジスト・ヴィレを使った。

「もしも、マスターハンドが本物ならば、仲間を助ける戦いは、これで終わります」

目の前にいるマスターハンドは、本物なのか。

ドリイはぐっと杖を握り締めている。

「ウフフフ……キーラサマニサカラウモノハ、ミンナケシサツテアゲルワ」

「キーラサマコソ、シコウナノダ」

パルテナは恐ろしい笑みを浮かべ、マスターハンドの身体は光に包まれていく。

この二柱は強力だが、彼らを解放すれば、ついにスマブラメンバーは全員集結する。

ピット達は覚悟を決めて、マスターハンドとパルテナに挑もうとしていた。

「オマエタチモ、キーラサマニシタガエ!!」

「誰が……従うものか!!」

「ガブガブガブ!!」

「さあ、みんなをキーラとダーズから助けるわよー」

「怖いけど、僕は逃げないよ」

「邪魔をするなら容赦はしない」

そして、ピット、ドクター、クラウド、パツクンフラワー、

そしてベルは、最後のファイターとの戦いに挑んだ。

「ガブーツー」

マスターハンドはパツクンフラワーに狙いを定め、ミサイルを大量に放って攻撃する。

パツクンフラワーはシールドで攻撃を防ぎ、シューリンガンでマスターハンドに反撃する。

「君の動きは……」

「ミキレナイワヨ?」

ドクターはパルテナの動きを読もうとしたが、パルテナはくすくすと笑った。

「ちよつと、動かないでね!」

「ウフフツ」

ベルが闇の力を霧状にしてマスターハンドとパルテナを包む。

だが、パルテナの奇跡によって、闇の霧は全て消えてしまった。

「そ、そんなー!」

「諦めるな!」

「ガブガブ!」

クラウドはマスターソードを振り、衝撃波でマスターハンドを切り裂く。

パツクンフラワーは首を伸ばしてパルテナに噛みついた。

「やるじゃないの、クラウド、パツクンフラワー」

「ガブー!」

「……」

どんなもんだい、と胸(?)を張るパツクンフラワーと、静かに佇

むクラウド。

だがマスターハンドは容赦なく、ベル達に攻撃を仕掛けてくる。

「危ない！」

ピットは鏡の盾を使って、レーザーを全て防ぐ。

「操られた女神なぞ、くそくらえだ！」

ピットは神弓シルバーリップを二刀短剣に変え、素早くパルテナに斬りかかる。

ベルは大鎌を振り回し、青い炎でマスターハンドを燃やす。

「心臓マツサージ！」

「ギャアアアアアアアア!!」

ドクターはパルテナの胸目掛けて、心臓マツサージを放った。

パルテナは叫び声を上げて、吹っ飛ばされる。

だが、テレポートを使ってすぐに復帰した。

「凶斬り」

クラウドは凶の字を描く斬撃でマスターハンドにダメージを与える。

「オートシヨウジュン」

「ぐあ、あ、パル、テナ、様」

「バクエン」

パルテナは杖を振り、ピットに光の弾丸を放つ。

さらに、怯んだピットに爆炎で追撃した。

「うわああああああ！」

そして、ドクターも握り潰されて地面に叩きつけられ、場外に吹っ飛んでいった。

「ちっ……」

ベルは舌打ちして、鎌を持ち上げる。

「パックン！」

「ガブ!?」

「あんたは私の後ろに隠れなさい！」

「ガブガブ！」

ベルはパックンフラワーを後ろに下がらせる。

パルテナは杖を構えてパクションフラワーを爆炎で燃やそうとしたが、ベルが闇魔法で打ち消す。

「あんた達を助ければ、キーラとダーズに安心して挑めるのよ！」

諸悪の根源であるキーラとダーズを倒せば、争いの世界は平和を取り戻す。

そのためには、全ての仲間を解放するのが必要だ。

ベルは強い思いを込めて、鎌を振り回してマスターハンドとパルテナを切り裂いた。

「……」

「ワタシタチハトメラレナイワ」

「それはこっちの台詞よ！」

マスターハンドは無言で攻撃し、パルテナも様々な奇跡を使って翻弄する。

だがそれも、ベルの鎌と闇魔法が打ち消す。

「俺達も！」

「援護するよ！」

ピットはパルテナの神弓、ブラックピットは神弓シルバーリップから光の矢を放ち、

マスターハンドとパルテナを貫く。

「ガブガブガーブ！」

「それ！」

「破砕撃」

パクションフラワーは至近距離からポイズンブレスを放ち、

マスターハンドとパルテナを毒に侵す。

さらに、ドクターとクラウドも遠くからカプセルや衝撃波で攻撃した。

「これでとどめよ！ ナイトメア!!」

「ギャアアアアアアアアアアアアア!!」

「ウアアアアアアアアアアアアア!!」

ベルは闇を纏った鎌を勢いよく振り、空間ごとマスターハンドとパルテナを切り裂いた。

空中から二人が現れ、そして場外に落下する。

戦場でドゴン、という大きな音が鳴り響き、次の瞬間、周囲の光の力は消滅した。

マスターハンドとパルテナは、キーラの支配から解放されたのだ。

「……………これで、終わった……………」

ベルはそう言うのと、疲労からばたきと倒れ、カチャン、と手に持った鎌が落ちた。

84 　　ホントの最終決戦へ

ついに、スマッシュユブラザーズはキーラとダーズに捕らえられた全てのファイターを救出した。

マスターハンドとクレイジーハンドも、キーラとダーズの支配から完全に解放された。

「みんな、よく私達を解放してくれた」

「私達のコピーも全員倒してくれて、ありがとう」

「正直、また操られるとは思わなかった。また不覚を取ってしまった……すまない」

「いいんだよ、結果オーライでしょ？」

マスターハンドは二度目の洗脳を受けた事を謝罪するが、カービイは笑みを浮かべて許す。

「ありがとう、スマッシュユブラザーズの代表よ」

「このたびは本当に、感謝する」

「え、えへへへ……」

二つの手袋はカービイに心を込めて感謝した。

カービイは嬉しくて照れてしまい、頭を掻いた。

「パルテナ様、本当に無事でよかった……」

「ピット……心配してくれて、ありがとう」

「けっ、女神のファンめ」

ピットとパルテナは、互いに手を握り締めた。

ブラックピットは、冷めた目で二人を見ている。

だが、彼女の事を全く認めていないわけではなく、その証拠に、彼は目を離さなかった。

「お帰り、みんな」

マリオは改めて、スマブラメンバー全員を見返す。

キーラとダーズに囚われたファイターは、もう、どこにもいなかった。

後は、彼らを倒せば、この世界は救われる――

「とにかく、これでみんなをキーラとダーズの支配から解放できたわ」

「スピリッツも均等に解放できたみたいだね」

ドクターとベルが空を見上げる。

光と闇のオーラは、二人の言う通り、均等に広がっていた。

これでキーラとダーズを倒す事ができる。

スマッシュブラザーズは歩みを止めず、光と闇が混ざる空間の最も奥に辿り着いた。

すると、マスターハンドとクレイジーハンドが、交差するように飛んでいく。

互いに身体をすり合わせ、エネルギーが発生する。

エネルギーを纏ったマスターハンドとクレイジーハンドは勢いよく空間に体当たりした。

すると、空間に開いた亀裂が大きく広がり、大きな渦となつて姿を現した。

「この先に、キーラとダーズがいる」

「だが、ここから先に行けば、決着がつかない限りこの空間には戻れなくなる」

「……それでも」

「行くのか？」

マスターハンドとクレイジーハンドが、後戻りはできない、と最終警告をする。

もし負けてしまえば、争いの世界の未来はない。

それでも、スマッシュブラザーズ全員の表情に、迷いは一切見られなかった。

「当たり前だ！」

争いの世界を滅茶苦茶にしたキーラとダーズを、そのまま放っておくわけにはいかねえ！」

「皆を利用したという罪を、その身に受けてもらうために……」

「たとえ何が起ころうとも、僕達は絶対に諦めない！」

「俺達の未来は俺達で決める……キーラとダーズなんかは、未来を決められてたまるか」

スマッシュブラザーズを代表して、マリオ、リンク、カービィ、ピ

カチユウは言う。

覚悟を決めた四人の目を見て、マスターハンドとクレイジーハンドは頷いた。

「私達が道を拓く、君達は先に進め！」

「ああ！ 行ってくるぜ！」

「絶対に勝って、帰ってくるからね！」

スマッシュブラザーズは全員、空間の向こう側に飛び込んでいった。

「こうして全力で戦えるとはな」

「ああ、いつぶりなのだろうか」

「この世界が解放される事を、わたしは信じておりますわ」

「前だけ見なさい、背中はお守りいたします」

「ガギャアアアアアアア！」

「勘違いするなよ、リドリリー。私とアンタはあくまで、利害が一致しただけさ」

その場に残ったのは、マスターハンド、クレイジーハンド、アイシャ、ドリイ、

リドリリー、ダークサムスの六人だった。

アイシャとドリイは主のため、リドリリーとダークサムスは利害の一致のため。

だが、この世界を救いたいという気持ちは、変わらなかった。

「……来たぞー！」

「ええー！」

「スマッシュブラザーズよ、世界はあなた達が救うのです」

「私達もこの戦いに勝つー！」

亀裂の中から、光と闇のファイターが現れる。

マスターハンド達は彼らを迎え撃つべく、戦闘態勢に入った。

「ゆくぞー！」

「せいやあつー！」

マスターハンドが手を叩きつけて、光と闇のファイターを一掃する。

クレイジーハンドも暴れ回ってキーラとダーズの手下を攻撃した。
「流石ですわ、マスターハンド様！」

「クレイジーハンド様……」

アイシャとドリイは、この世界の神であるマスターハンドとクレイジーハンドに感心した。

ただ立っているだけでは従者とは言えないため、アイシャとドリイも主を援護しに入った。

「キーラサマ、キーラサマ、キーラサマ!!」

「させません！ ド・ゲイト・デ・テラ・マ・ギー！」

ドリイは光のファイターに魔法の矢を乱射する。

まともに食らった光のファイターは次々に光となって消滅した。

アイシャは闇のファイターに対し、防戦している。

「ゴガアアアアアアアアアアア!!」

「フェイゾンに飲まれな！」

リドリーとダークサムスは全力で光と闇のファイターを攻撃した。

その攻撃は苛烈にして過激、全く容赦がなかった。

「くっ、まだ来るか！」

しかし、光と闇のファイターが消える気配はない。

それどころか、周りの力を吸収してさらにパワーアップして襲ってきた。

「ぎゃあああああ！」

「危ない！」

ダークサムスは場外に吹っ飛ばうとしたが、マスターハンドが彼女を受け止めた。

「アンタ、何するんだい！」

「文句を言っている場合じゃない。君もスマッシュブラザーズの一員なんだ。」

「宿敵が消えるのは、困るだろう?」

「……当たり前さ！」

「だったら、私達と協力するんだ」

「分かったよ……」

今はいがみ合っている場合ではない。

ダークサムスは渋々ながらも、武器を構え直した。

「きやあああつー！」

「ゴガアアアアアアアアアアアアア!!」

アイシヤに襲つてきた闇のファイターは、リドリーブレスにより燃え尽きた。

さらに、リドリーは油断した光のファイターに不意打ちをかけて力を徐々に削り、

まとめて掴んで動けなくする。

すぐに相手を倒すよりも、いたぶる方がリドリーは好きなのだ。

「皆様……」

アイシヤは、キーラ襲撃の時に逃げてしまった。

だが、今は逃げずに敵に立ち向かっている。

全ては謝罪のために、そして、争いの世界に平和を取り戻すために。

「ふふふ、頑張っていますね」

「ドリイさん……」

そんなアイシヤの隣で、ドリイは微笑んでいた。

彼女のその姿に、感心したからである。

最早敵味方の区別は無く、皆、一丸となつて、キーラとダーズの脅威に立ち向かっていた。

これこそが、真のスマッシュブラザーズだろう。

「私達は必ず、光と闇に勝つー！」

「だから、信じてくれ！」

85 光と闇を倒せ

マスターハンド、クレイジーハンド、アイシヤ、ドリイ、リドリイ、
ダークサムスが光と闇を打ち払いに行っている間、
スマッシュブラザーズはキーラとダーズの下へ向かっていった。
雲に覆われた地平線の向こうに太陽が見える。

あの空の向こうに、全ての元凶であるキーラとダーズが待ち構えて
いるのだ。

一部のスマブラメンバーは、ちらちらと後ろを振り返っていた。
後ろでは、マスターハンド達が光と闇のファイターに立ち向かって
いた。

「大丈夫かなあ……？ マスター、クレイジー……」

「りようさん、大丈夫です。あの方達なら、光と闇を倒せます。」

わたし達でできる事をやりましょう」

「……ありがとう、しずえ」

不安になるりようを、しずえは励ました。

「うわっ!？」

「りようさん、危ない!」

突然、りように向かってボコブリンが飛びかかってくる。

しずえはりようを庇い、シールドを張った。

目の前にはオクタロックやチュチュなど、たくさんの魔物が立ち塞
がっている。

「しずえ、ありがとう!」

「りようさんは先に行ってください。ここは、わたし達が食い止めま
す」

「……うん」

リトルマツク、ファルコ、ウルフ、しずえ、トゥーンリンク、
キングルールが魔物に立ち向かった。

りよう達は彼らが食い止めている間に、大急ぎで奥に向かっ
た。

「そらよー!」

「ウルフフラッシュユ！」

ファルコは空中に飛び上がり、炎を纏った体当たりで魔物を一掃する。

ウルフは体当たりして魔物をまとめて倒した。

「まさかこの俺様がお前と手を組むとはな」

「リドリーとマスターハンドが手を組んだんだ、今は敵味方の区別なんていらなげ」

「……ああ、そうだな！」

ファルコとウルフは互いに手を取り合う。

ライバル同士が結託した瞬間である。

「おいおい、俺様を忘れたら困るぜ！」

「それ！ えい！ そおれっ！」

キングクルールはファルコとウルフが取りこぼした魔物を倒していった。

しずえはピコハンや傘を使って、一生懸命に魔物と渡り合っている。

「我らの邪魔はさせん！」

「散れ！」

「そうはいかねえ！」

道中、キーラとダーズの妨害が入るが、キングクルールがそれを阻止する。

「とりやーっ！」

「たあーっ！」

リトルマツクの拳とトゥーンリンクの剣——どちらも「けん」と読む攻撃が、

魔物を次々に吹っ飛ばしていく。

それでも魔物は数の暴力で攻めてくるが、六人は攻撃の手を休めない。

「ぎゃー！」

「危ない！」

しずえにボゴブリンの棍棒が振り下ろされる直前、リトルマツクが

庇い、反撃する。

「マックさん、ありがとうございます」

「困った時はお互い様だろ？」

「……そうですね。わたしも、守られているだけじゃありません。

りょうさんのためにも、必ず勝ちます！」

「ああ、その意気だ！」

マックに応援されたしずえは、全力で魔物に立ち向かっていった。

彼女としては、本当はウルフに応援してもらいたかったのが本音なのだが……。

「キーラとダースめ……」

「やっつけるでちゅー！」

スマブラメンバーは魔物と戦っている他のメンバーを信じて、走り出す。

次の瞬間、冥府軍と自然軍の魔物が一斉に襲ってきた。

「くそっ、敵か！」

「ここは俺達に任せろ！ お前達は先に行け！」

「うん！」

メタナイト、ブラックピット、リュウ、ケン、ピチユー、ゲッコウガ、ストームが身構え、

他のスマブラメンバーを走らせる。

ブラックピットとストームが後方から矢を放つ。

ゲッコウガは隙を突いて背後を取り、音も立てずに冥府軍の敵を仕留めた。

「流石だな、ゲッコウガ」

「静かにしろ」

「……あ、ああ」

リュウはゲッコウガに言われた通り、音を出さずに相手の出方を図る。

すると、不気味な音と共にオーンが姿を現した。

「オーンだ！ あいつに触ったら即死する！」

「どうすればいい？」

「浄化の力があれば倒せるが……」

ブラックピットは神弓シルバーリップを引き、光の矢をオーンに放ち、消滅させた。

しかし、オーンの数は減るところか増えている。

「どうすればいいんだ」

「僕に任せろ。トルネイド・バリアー！」

ストームはトルネイドのARTSを使い、七人全員に竜巻のバリアを張った。

「このバリアさえあれば、オーンの影響を受けずに戦う事ができる。

ただし、このバリアの制限時間は5分だ。それまでに決着をつける！」

「ああー！」

メタナイト達はオーンの群れに突っ込んでいった。

「ぴちゅううー！」

ピチューはかみなりで広範囲のオーンを一掃する。

「波動拳！」

「昇竜拳！」

「うりやりやりやりや!!」

リユウとケンの格闘技でオーンは消滅する。

メタナイトは彼らを取りこぼしたオーンをギャラクシアで滅多切りにした。

「いくぜっー！」

「……」

ブラックピットは神弓シルバーリップを双剣に変えオーンの群れを次々と切り刻む。

ゲッコウガは静かに、確実にオーンを仕留める。

「お前らは早く先に行け！」

「ああー！」

そんな仲間の勇気を見て、スマブラメンバーは先に進むのだった。

スマブラメンバーはキーラとダーズを追い、空間を只管上へ上へ昇っていった。

しかし、魔物は彼らの前に立ち塞がっていく。

「オレ達が相手だ！」

「まっけないぞ〜！」

魔物に立ち向かうは、ドンキー、デイディー、スネーク、ゼルダ、シーク、アイスクライマー。

デイディーはピーナッツ・ポップガンを抜いてクリボーやノコノコを倒していく。

「いくぞー！」

「はあっ！」

シークが前に出てカキボーにダメージを与え、ゼルダが魔法でとどめを刺す。

元は一つだったゼルダとシークの息はぴったりだ。

「トルネードハンマー！」

息ぴったりなのはゼルダとシークだけではない。

冰山を登るアイスクライマーも、だ。

ポポとナナは二人同時にハンマーを振り回し、周囲にいたカロロンが砕け散る。

「そこかつ」

スネークは後方から冷静に魔物を狙撃する。

魔物は叫ぶ暇もなく、ばたりと倒れた。

「このまま一気にいくよー！」

「ええー！」

アイスクライマーは高く飛び上がり、二人同時にハンマーを振り下ろす。

衝撃波が周囲に広がり、クリボー、ノコノコ、カロロン、カキボーは一掃された。

「よし、やったぞー！」

「まだ敵は来ます！」

ゼルダがそう言うと、ハンマーブロスとファイアブロスの群れが襲い掛かってきた。

彼らは高くジャンプしながら、ハンマーやファイアボールを投げて

くる。

「知恵の女神ネールよ、災厄から我らを守りたまえ」

「えいー!」

「ふっ」

ゼルダはネールの力を借りてバリアを張り、ハンマーとファイアボールを跳ね返す。

デイデューとシークは遠くから飛び道具で攻撃。

ドンキーとスネークは体術でハンマーブロスを吹っ飛ばし、

アイスクライマーは氷の力でファイアブロスが投げたファイアボールを凍らせる。

さらにアイスクライマーはトルネードハンマーでブロス達をまとめて吹っ飛ばした。

「危ないから下がっている」

スネークは踏むと作動する地雷をブロス達がいる場所に設置する。

すると、スネークの予測通り、ブロス達は地雷を踏んで場外に吹っ飛んだ。

「これで、終わりだ! ジャイアントパンチ!!」

そして、ドンキーは渾身の力を込めたパンチをメガブロスにぶちかまし、吹っ飛ばした。

次の瞬間、周囲から魔物の姿が消えた。

これが最後の一匹だった事をスネークは改めて確認した。

「これで、魔物は全滅した。だが、オレ達はここから先には行けない」

「後は、キミ達が頑張るんだよ……!」

「ドンキーやデイデューが頑張ってくれた。その思いを無駄にはしないー!」

キーラとダーズを追いかけるスマブラメンバー。

妨害はなおも激しくなってくるが、歩みを止めるわけにはいかな

い。二柱の攻撃をかわしながら進むスマブラメンバーの前に、

多数の目玉がついた触手が生えた、小型ダーズを思わせる一つ目の魔物が現れた。

りよう、デイジー、ダックハント、ロゼッタ、ガオガエン、
ドクターが魔物の前に立ち塞がり、構える。

「君達は先に行って！」

「ああ！」

りよう達が食い止めてくれるため、スマブラメンバーは先に行つた。

「こいつの名は……」

「デイジー君、いけない、それは禁句だよ！ あえて言うなら、『土下座君』だよ……うわ！」

Z z z z z z z z……」

土下座君は催眠光線を放ち、ドクター達を一斉に眠らせた。

その隙にもう一体の土下座君がりように破壊光線、ドクターに石化光線を放つ。

「ぐっ、足が動かない……」

ドクターは足が石になってしまい、動けない。

「ばう！」

「おりやああああ！」

ダックハントは土下座君の攻撃をかわすが、直後に催眠光線で眠ってしまい、

さらにデイジーが無防備になり土下座君の触手攻撃を食らってしまふ。

ガオガエンはリアットを仕掛けるが、躓いてしまい、土下座君には当たらなかった。

「せえい、やあ！」

デイジーは野菜引っこ抜きでボム兵を抜き、土下座君の群れに投げつける。

ボム兵の爆発で土下座君はまとめて吹っ飛んだ。

「せいやあああっ！」

りようは岩をも砕くような勢いでパチンコを連射する。

土下座君の防御も崩して、ダメージを与える。

「当たるか」

「ばうばうー！」

一方、土下座君の攻撃は激しくなるが、ロゼッタとダックハントはかわして反撃する。

「応援ガンバやでー！」

「うおーっ!!」

デイジーは戦っているメンバーに激励を飛ばした。

彼女の激励により、メンバーの士気は上昇した。

「DDラリアットー！」

「えいつー！」

ガオガエンは両腕を勢いよくぶん回し、土下座君を場外に吹っ飛ばす。

りようもガオガエンに続き、傘で土下座君を攻撃。

「何をしている、ドクターー！」

「ぴぴいぴいー！」

チコがドクターの周りをくるくる回り、石になっていたドクターの足を元に戻した。

「ああ、ありがとう、ロゼッタ」

「りよう、怪我はないか？ ギャラクシーヒール！」

「ばうばうー！」

ロゼッタはりようの自然治癒力を活性化させる。

ダックハントはワイルドガンマンを召喚し、土下座君を狙撃して完全にダメージを与えた。

「石化する……っ！」

「危ない！」

土下座君がロゼッタ達に狙いを定め、石化光線を放とうとすると、

ドクターはカプセルを投げて阻止した。

威力は高くなかったが、土下座君を怯ませた。

「うわっ！」

「何するねんー！」

土下座君は触手から破壊光線を放ち、デイジーとダックハントに大ダメージを与える。

しかし、スマブラメンバーの猛攻は止まらず、次第に土下座君は追い詰められていく。

「それ！」

ドクターの心臓マッサージが、土下座君にとって致命的な攻撃となる。

「とどめだ！ ハイパーダーククラッシュャー!!」

そして、ガオガエンが腕を振り回し続け、黒い衝撃波が辺りに広がった。

衝撃波に巻き込まれた土下座君の触手はちぎれ、全て地面に落ち、

土下座君の本体も黒い霧になって消滅した。

「僕達が行けるのは、ここまでだ」

「後は、頼んだよ……！」

86 天秤は傾かない

「みんな、がんばってましゅね……」

プリンは後ろを見ながら呟く。

スマブラメンバーの数も、どんどん減っていった。

だが、スマブラメンバーは臆しない。

何故なら、キーラとダーズへ繋がる道を、仲間達が託しているからだ。

「ルカリオしゃん、てきがきたでしゅー！」

「……ああ」

「ウアアアアアアアアアア」

プリン達を狙う敵は、多数の屍兵だ。

戦士や魔道士、ソシアルナイトだけでなく、

ペガサスナイトやドラゴンナイトの屍兵もいる。

「いけっ、ブレイズ！」

「リザード！」

ロートはモンスターボールの中からリザードンのブレイズを呼び出す。

ブレイズは口から火炎を吐き、屍兵の群れを焼き払った。

「それっ！」

「……ぬうん！」

ルカリオは空を飛んでいるペガサスナイトの屍兵をはどうだんで撃ち、

パックマンがフルーツタワーゲットで追撃する。

「やあー！」

「健康になりますよー！」

ソレイユとリユンヌは協力してヨガのポーズにより屍兵を撃退する。

プリンはマジカルシャインで屍兵を怯ませ、攻撃するブレイズとルカリオを支援した。

すると、プリンの攻撃を受けていないペガサスナイトの屍兵が、プ

リン目掛けて襲い掛かった。

「きゃああー！」

プリンが吹っ飛んでしまい、場外に落ちかける。

空を飛んで復帰するが、ペガサスナイトの屍兵は見逃さず、プリンに槍を突き刺そうとする。

「ブレイズ、そらをとぶー！」

「リザアアアー！」

その直前、ブレイズは空を飛んでプリンを掴み、屍兵の攻撃範囲から逃れた。

ブレイズはプリンを安全な場所に休ませた。

「後は私達に」

「任せてくださいー！」

ソレイユとリュンヌの対空攻撃で、ドラゴンナイトの屍兵の体力は削られる。

「フィオーレ、あいつの翼を掴んで引っ張るんだー！」

「フッシーー！」

ロートはブレイズからフシギソウのフィオーレに交代し、

ドラゴンナイトの屍兵が乗るドラゴンの翼をつるのムチで絡み取る。

「大丈夫か、フィオーレ。私も手伝うぞ」

「フッシーー！」

引っ張るのは容易ではなかったが、ルカリオがやってきて共に引っ張り、

ついにドラゴンナイトの屍兵は墜落する。

そして、地上に墜落したドラゴンナイトの屍兵は、ルカリオのインファイトによって倒された。

同時に全ての屍兵が散り散りになって逃げていく。

どうやら、この屍兵がリーダーだったようだ。

「道は作ったぞ」

「みんな、頑張ってくれ……！」

戦った六人のスマブラメンバーに、疲れがどっと襲い掛かる。

彼らを見たスマブラメンバーは頷いて、先に進むのだった。

「また魔物が来たか!」

スマブラメンバーの前に、またもや魔物が現れる。

戦うのは、デデデ、ランス、パクンフラワー、ジユカイン、オリマー、ベヨネッタの六人だ。

「大王様はボクがお守りいたします!」

「おお、頼りになるゾイ、ランス!」

ランスはデデデの前に立ち、先陣を切って魔物と戦った。

槍による突撃攻撃と薙ぎ払いが、襲い掛かるワドルドウやサーキブルを倒す。

「ガブガブ!」

「シザークロス!」

パクンフラワーはシューリンガンやポイズンブレスで魔物を牽制する。

そこに、ジユカインの交差する一閃が入った。

オリマーは三匹のピクミンに的確な指示を出して攻撃させる。

「はっ! それっ!」

ベヨネッタの華麗なバレットアーツにより、天使の群れは次々と撃ち落とされた。

オリマーはピクミンを死なせないように、ピクミンを笛で呼んで魔物から離れさせる。

ランスはデデデにしっかりとついていきながら、デデデと共に皆を守っていく。

「これでも喰らうゾイ!」

「それっ!」

デデデはゴールドを投げて、ブロントバートやバードンを撃ち落とす。

墜落したブロントバートやバードンに、ランスの槍が突き刺さり、瀕死になった。

「ガブ!」

「それ!」

バックンフラワーが首を伸ばしてヘイホーを打ち上げると、ベヨネッタのバレットアーツが炸裂した。

「エナジーボール！ リーフストーム！」

ジユカインは距離を取り、エナジーボールを放って体力を削る。

そして、リーフストームによってこの場にいた全ての魔物を一掃した。

「これで、魔物は全滅した……よね？」

「そのようだな……」

魔物の気配が周囲から消えていく。

どうやら、後ろにいたスマブラメンバーが、キーラとダースがよこした魔物を倒したようだ。

スマブラメンバーの前には、ぶつかり合う光と闇の塊があった。

よく見ると、光と闇の中にはスマブラメンバーが今まで戦ってきたボスの姿がある。

「あの光は……！」

「お前達よ、我輩に続くのだ！」

「ああ！」

「僕は負けない……！」

クツパ、ジユニア、マルス、ロイ、アイク、クラウドは光の中に飛び込んだ。

六人が光の中に飛び込むと、恐ろしい容姿をしたクツパの姿がある。

それは、光の世界で戦ったギガクツパだった。

あの時、マリオ達が倒したはずだが、キーラの手でこの世界に蘇ったのだ。

ギガクツパと相見えたクツパは拳を握り締める。

「我輩はキーラにこやつに変えられて、マリオと戦わされていたのか……」

「お父さん……」

ジユニアが心配そうに父親の顔を見る。

「心配するな、ジユニア。こんな強敵に、我輩は敗れるかもしれない。」

我輩、一人だけではな！」

「そうだね。みんながいれば、必ず勝てる」

「スピリッツ達も僕達を信じてくれている。その期待に応えなきゃね」

「この世界を守るために、俺は立ち止まらない」

「だから、俺は、俺の道を進む！」

「みんな……」

マルス、ロイ、アイク、クラウドが剣を掲げる。

彼らの姿を見たジュニアは、勇気づけられた。

「よおーし！ ぼくも頑張るぞおー!!」

ジュニアは満面の笑みを浮かべて、片手を上げた。

ギガクツパとの戦いが始まる。

「おつと！」

「はあつ！」

「せいっ！」

「やあつ！」

ジュニアはギガクツパの腕振り攻撃をかわし、クツパクラウンのフオークで攻撃する。

マルス、ロイ、アイクは飛び道具がないため、ヒット&アウェイで確実にダメージを与えた。

「破砕撃」

クラウドはバスターソードを振り、衝撃波でギガクツパを切り刻む。

「グゴアアアアアアア！」

「ジュニア！」

「お父さん！」

ギガクツパは口から炎を吐いてジュニアを攻撃しようとするが、クツパが庇った。

すると、ギガクツパは大声を出してクツパ、ジュニア、ロイを金縛りにした。

「ぐううっ……！」

「か、身体が動かない……!」

「しかも、凄い攻撃をしそうだよ……!」

そうこうしている間に、ギガクツパが強力な攻撃の準備をしている。

このままでは、六人が全滅してしまう。

「その前に倒せばいいんだ。クラウドとアイクは力を溜めて待って」

「ああ」

「グオオオオオオオオオオ!」

ギガクツパがクラウドとアイクに襲い掛かる。

マルスはファルシオンを構えたまま、微動だにしない。

「……シールドブレイカー!」

「グオオオオ!」

ギガクツパが爪を振りかざす。

マルスはギガクツパが攻撃してくる寸前、ギガクツパの防御の薄い部分を狙い、

ファルシオンでそこを貫く。

ギガクツパは叫び声を上げて悶える。

「今だよ、アイク、クラウド!」

「ああ、いくぞ!!」

「はあああああああつ!!」

アイクは勢いよくラグネルを叩きつけ、蒼炎でギガクツパを燃や

す。そして、クラウドが高速で斬り払い、斬り上げ、斬り下ろしの三連撃を行う。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ギガクツパは叫び声を上げてのたうち回る。

「これで、とどめだ!」

クツパが右腕を大きく振り回し、ギガクツパに渾身の一撃を放つ。

ただのパンチだが、大魔王であるクツパの手にかかればそれすら致命傷となる。

「……来いっ!!」

こどもリンクが叫ぶと共に、魔王ガノンとの再戦が始まった。フオックス、ネス、リュカ、ジョーカーも、こどもリンクとガノンに続いた。

「グガアアアアアアアアアアアア!!」

魔王ガノンは両手に持った大剣を高く掲げて雷を宿し、斬撃と同時に雷弾を放った。

六人はすぐにシールドを張り、雷を防いだ。

「せいやつー!」

こどもリンクは魔王ガノンの尻尾目掛けて、コキリの剣で刺突攻撃した。

魔王ガノンはかわそうとするが、

こどもリンクはかわした場所に素早く動いて尻尾をコキリの剣で突いた。

フオックスはブラスターを撃ちつつ、相手の出方を伺っている。

「はあああつー!」

「PKファイアー!」

ガノンドロフは魔王ガノンに渾身の一撃を放つが、魔王ガノンには当たらなかった。

ネスは炎の弾丸を魔王ガノンの尻尾に放ち、尻尾を炎で包み込んで燃やす。

「スクンダー!」

ジョーカーはペルソナ、アルセーヌの力を借りて魔王ガノンの動きを遅くする。

これにより、攻撃が当たりやすくなった。

「ありがとう、ジョーカー! えいっ!」

リュカはぼうつきれを振り、魔王ガノンに会心の一撃を放った。

こどもリンクは魔王ガノンの尻尾をコキリの剣で斬りつける。

「グオオオオオオオオオオ!!」

「カウンター!」

魔王ガノンはガノンドロフに両手の大剣を振り下ろすが、リュカが

張ったバリアで跳ね返す。

すると魔王ガノンはリュカに向かって突進し、二本の大剣で切り裂こうとした。

「うわああ!?!」

「危ない!」

大剣がリュカに当たる寸前、フォックスが庇って斬られた。

浅くない傷を負ったフォックスの顔が苦痛に歪む。

「フォックスさん、大丈夫!?!」

「ぐっ……」

「今、治すよ! ライフアップ!」

リュカはライフアップを唱えて、フォックスの傷を癒す。

しかし、彼を完全に癒す事はできなかった。

「駄目だ、回復が上手くできない」

「無理はするな、下がってる」

「ああ」

ジョーカーは傷ついたフォックスを見て、

これ以上の戦闘は危険と判断してフォックスを後ろに下がらせた。

「エイハ!」

「どりゃあ!」

ジョーカーは素早く魔王ガノンの背後に回り、エイハを唱えて自身に注意を向けさせる。

ガノンドロフは魔王ガノンが振り向いたところに大剣を勢いよく振り下ろす。

「PKフリーズ!」

「せいやあっ!」

リュカはPSIで氷を作り出し、魔王ガノンに氷を投げつけた。

凍り付く事はなかったが隙ができたため、ネスは魔王ガノンの尻尾をバットで殴った。

「ゴガアアアアアアアアアア!!」

「サイコシールド!」

魔王ガノンは口からレーザーを放ち、フォックス達を一掃しようと

する。

ネスがサイコシールドを張り、レーザーを防ごうとするが、威力は高くサイコシールドは碎け散り、レーザーは貫通してしま

う。

「……」

全員、魔王ガノンの攻撃を食らって瀕死だ。

このままでは、全滅するのも時間の問題である。

「……俺があいつを倒す」

すると、瀕死のフォックスがゆつくりと立ち上がり、震える手でブラスターを構えた。

「フォックス！ 本気!?!」

「ああ……お前らは俺のために頑張ったんだ。今度は、俺がやる番だからな……!」

手がぶれていて、照準は合わさっていない。

それでも、フォックスの目は、魔王ガノンに向いている。

「フォックス、やめて!」

「ガアアアアアアアアアアアアアアア!!」

魔王ガノンの大剣がフォックスに振り下ろされる。

当たってしまえば、身体は真っ二つだ。

「とどめだ!!」

フォックスが放ったブラスターの光線が、魔王ガノンの尻尾目掛けて飛んでいく。

「ギャアアアアアアアアアア!!」

それが魔王ガノンに命中すると、魔王ガノンは大声を上げて苦しみ出した。

そして、魔王ガノンは黒い煙に包まれ、爆発四散して消えるのだった。

「や……った……」

フォックスはそう言って、ぺたりと座った。

勝利への喜びと疲労が、同時に来たのだろう。

「お疲れ様、みんな」

ジョーカーは魔王ガノンと戦ったメンバーを労う。
アルセーヌも表情には出さないが喜んでいた。

「は……はは……ははは、はは……」

ガノンドロフも疲れてしまい、ボタン、という音と共に倒れた。

「みんな、お疲れ様。後は私達に任せてくださいね。……さあ、ピット、いくわよ！」

「はい、パルテナ様！」

フォックス達の活躍を見たパルテナは、

彼らの活躍を無駄にしないためにピットと共に光の中に飛び込んだ。

ウオッチ、リイン、ヨッシー、バンジューとカズーイも、二人に続いて光の中に飛び込んだ。

「ゴガアアアアアアアアアア!!」

光の中にいたのは、火竜リオレウスだった。

リオレウスの巨体に、ピットはごくりと唾を飲み込んだ。

「ピット、慌てちゃダメよ。まずは準備するわ」

パルテナは味方全員を強化する奇跡を使った。

「それっ！」

「とおっ！」

ピットとバンジューの会心の一撃が、リオレウスの頭部に炸裂する。

強化された一撃は、リオレウスの体力を大きく減らした。

「ジャツジ……7！」

ウオッチはリオレウスに近付き、ハンマーで叩いてジャツジする。数字は7であり、チョコレートが落ちてきた。

直後にリオレウスが咆哮してウオッチにダメージを与えるが、

チョコレートを食べてすぐに回復した。

「それぞれそれ〜！」

「オート照準！」

「ロボビーム！」

ヨッシーがバタ足キックでリオレウスを攻撃している最中に、

パルテナは距離を取って杖から弾丸を放ち、リオレウスを撃つ。リインも遠距離からレーザーを放って追撃した。

すると、リオレウスは空を飛び、口から強力な火炎弾を放った。火炎弾は地面に命中すると、大爆発が起こる。

ピットは飛翔の奇跡を使ってかわし、残りの五人もかすり傷で済むが、炎が残ったため歩きにくくなる。

六人は炎が消えるまで、ジャンプなどで空中を飛び回った。

「ヤアツ」

「ジャイロー！」

ウオツチは炎が消えたのを見計らい、空中から鍵を刺してリオレウスを攻撃した。

リインはリオレウスが飛ぶ方向にジャイロを設置し、上手くりオレウスにジャイロを当てた。

「せいっ！」

パルテナの神弓から放たれた光の矢がリオレウスに命中すると、リオレウスは気絶した。

「今です！」

「どりゃあっ！」

パルテナの掛け声で、五人は一斉にリオレウスを攻撃した。

ヨツシーは卵とキック、ピットはパルテナの神弓、ウオツチは平面道具、リインは腕。

パルテナの奇跡がこもっているため、威力は極めて高く、リオレウスを瀕死に追い込んだ。

「カズーイ！ 今ならいけるよ！」

「ええ！」

「タマゴばきゅーん！」

カズーイがリオレウスに卵爆弾を放ち、爆発と同時にバンジローが飛び上がる。

そして、バンジローが勢いよく体当たりすると、リオレウスは大声を上げた。

「グアアアアアアアアアア!!」

そのままリオレウスは倒れ、衝撃波が起こる。
リオレウスは白い光になり、消滅した。

「もう大丈夫だよ」

「キーラもダーズも、必ずやっつけるのよ！」

「私達は貴方達の勝利を信じてますよ」

「だから、僕達を信じてくださいね！」

87 戦いの果てに

スマブラメンバーの活躍で、ボスが三体倒れた。

光と闇の数が合計で奇数になった事で、ぶつかる相手がいないものが出てきた。

フアルコン、ピーチ、ミュウツー、ロックマン、マール、テリーは闇の中に飛び込んだ。

「ハハハハハハハハ！ またボクに挑むのサ？ 返り討ちにしてやるのサ!!」

闇の中で待っていたのは、マルクだった。

この六人は戦った事がないが、マルクは強者のオーラを漂わせており、

六人は全員、唾を飲み込んだ。

「みんな、攻撃に気を付けて!」

「ああ!」

ピーチは魔法で不可視の壁を作り出し、味方全員の防御力を高めた。

「ロックバスター!」

ロックマンのバスターから、光の弾丸が放たれる。

マルクは抵抗したため、ダメージは入らなかった。

「それっ、それっ、それっ!」

ミュウツーはシャドーボールを3つ作り出し、マルクの視界の範囲外に設置した。

マールはスプラシューターを連射してマルクをとにかく攻撃していく。

「この戦いに、必ず勝つぜ!」

テリーがマルクを指差してそう言うと、マルクが一瞬だけ萎縮した。

「許さないのサ!!」

「うおっ!」

しかし、それに怒ったマルクはテリー目掛けて急降下し、

ファルコンの攻撃をかわしてテリーを吹っ飛ばす。

「いたいのとんでけ！」

ピーチが手から光を飛ばし、テリーの傷を癒す。

テリーは空中にジャンプし、マルクを殴る。

「それ！」

「??」

ロックマンはマルクに爆弾をくっつける。

マルクは少し困惑しつつも、六人に向かって爆撃しようとするが、

突然、爆発がマルクを襲った。

「な、何なのサ！」

実は、これはくっつけて時間が経つと爆発する、クラッシュボムである。

マルクはそれに反応できず、ダメージを受けた。

「えいっ！」

「……」

「ウアアアアアアアアア！」

マールがスプラシューターを撃つと同時に、ミュウツウが一斉にシャドーボールを放つ。

連続攻撃を喰らったマルクは、体力を一気に削られた。

「みんな倒してやるのサ！」

「きやつ!!」

「うおっ!!」

マルクは空中から爆弾を落とし、爆発によってマール達を吹っ飛ばす。

「ふんっ！」

ミュウツウは手を振り下ろし、マルクの空間を真っ二つにする。

マルクは冷気を放ってファルコンを凍らせ、さらにレーザーを放つて攻撃する。

「それっ！」

「とおっ！」

「パワーダーク！」

ロックマンはマルクにロックバスターを連射する。
テリーとファルコンの格闘技は、マルクが飛び上がってかわしたため当たらなかつた。

「このおっ……当たれ！」

「みんなげんきになあれ！」

チャージしたロックバスターがマルクに直撃。

直後にマルクは爆弾を落として攻撃したが、ピーチが回復魔法を唱えて傷を癒す。

「とどめだ」

「ギャアアアアアアアアア!!」

そして、ミュウツウがマルクの空間を切り裂き、マルクを再び倒したのだつた。

「これで大丈夫だ」

「みんな、後は頼んだよ……!!」

「ファルコン達が道を託してくれました。後は私達に任せてください……!!」

「ああ！ 油断禁物だぜ、セイバー！」

ガレオムに挑むのは、アルトリア、柊蓮司、クロム、ルキナ、ルフレ、カムイ、ベレスの七人。

強くなっているだろうと七人は身構えた。

ストライク・エア
「風王鉄槌！」

「薙ぎ払い！」

「残念だつたな！」

「マーベラス・コンビネーション！」

「トロン！」

「いきます！」

「……はっ！」

だが実際のところ、復活したガレオムは、今のアルトリアの前には歯が立たなかつた。

ガレオムは一方的にやられ、いつも落ち着いているアルトリアも、きよとんとしていた。

「……ガレオムは、弱かったですか？」

「いや……単に俺達が強くなっただけじゃね？」

「……そう、ですね」

そして、ドラキキュラに挑むのは、シモン、リヒター、サムス、ルイージ、シユルク、ミロの六人。

「みんな、攻撃に気を付けて！」

「1、2、3、4、5、6、7、8……」

シユルクが号令をかけて、皆の士気を上げる。

ルイージは準備運動をして、構えを取った。

「バックスラッシュ！」

「せいやあああ！」

シユルクは背後に回り、モナドで斬りつける。

直後にミロが、爪でドラキキュラを切り裂いた。

「ふんっ」

ドラキキュラは霧を呼び出し、部屋中に広げる。

ミロは口を塞いでいたため効果はなかったが、それ以外の四人は霧を吸い込んで混乱した。

ルイージはすぐにオバキュームで霧を吸い込む。

「ゴホッ、ゴホッ……い！」

リヒターが咳き込みながらヴァンパイアキラーを振るが、

ドラキキュラにはギリギリで当たらなかった。

シモンの投げた手斧もドラキキュラには当たらない。

「そこね」

サムスはドラキキュラがいる方向にミサイルを放つ。

爆発が起こると共に、霧が消えた。

「ドラキキュラが、倒れた……？」

「いえ、まだよ」

サムスが倒れたドラキキュラを見ると、ドラキキュラはゆっくりと起き上がり、魔神の姿に変わった。

「変身したか！ だが！」

リヒターはドラキキュラに向けて聖水を投げつけ、聖なる炎がドラ

キュラを包み込む。

ドラキュラはリヒターに爪を振りかざし反撃した。

「ぐああっ！」

「あああああああああー！」

ミロは暴走しながら、ドラキュラを攻撃する。

シルクは相手の出方を見極めながら、モナドでドラキュラを斬りつける。

ドラキュラの攻撃は激しいが、リヒターは的確にかわして鞭で反撃。

「モナドスマッシュ！」

「チャージショット」

シルクはモナドをレーザーのようにしてドラキュラを貫き、サムスがチャージショットで追撃する。

ルイージもオバキュームで吸い込んだドラキュラの炎をエレメントとして放つ。

「これで、とどめだ!!」

そして、シモンのヴァンパイアキラーがドラキュラの急所にクリーンヒットし、

ドラキュラは倒れた。

こうして、全てのボスは再び敗れ去るのだった。

「後はキーラとダースだけだ……」

「絶対に勝って、帰ってくるのよ……」

「たとえ悪い未来が見えたとしても、君達なら絶対に変える事ができるよ」

そして、マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウ、

イレブン、ソニック、シャドウ、ベルの八人は、キーラとダースの玉座に辿り着いた。

「よくぞここまで来た」

「我が軍を退けるとは……誉めてやろう」

「キーラ……ダース……！」

光と闇の化身、キーラとダースはゆっくりと玉座を降りて八人に語

り出す。

「お前達はまだ分からないのか？」

「我らの望む世界が、どれほど素晴らしいかを」

「なんだと……」

キーラとダーズは傲慢な態度を崩さない。

マリオ達はいつキーラとダーズが攻撃を仕掛けてきてもいいように、身構える。

「我は、誇りをもたらず光の未来を紡ぐ者。

それは人々が秩序立って行動する、災いのない理想の世界。我は眩き光でこの世界を照らす！」

「余は、安らぎをもたらず闇の未来を紡ぐ者。

それは人々が永遠の安息を得る、争いのない理想の世界。余は暗き闇でこの世界を閉ざす！」

「さあ、受け入れよ、新たなる創世を!!」

キーラとダーズの提案に対し、八人は全員首を横に振った。

「そんなの、お断り！ 理由？ 簡単だよ。

君達のせいで、僕のお昼寝タイムとご飯タイムを邪魔されたから！」

「災いも争いもない世界だと？」

お前達が災いや争いを起こしたのに、手のひらを反すとは……愚かだな」

「僕達は平和を取り戻すためにここに来たんだ。だから、僕達はここで、君達を倒す」

「正義の味方気取りが、戯言を！」

ダーズは怒りに震えながらイレブンに叫ぶが、イレブンは首を横に振った。

「……正義の味方気取り？ 違うよ。勇者は、正義の味方じゃないんだ。

何故なら、正義は突然逆転するほど不安定で、正義のための戦いはどこにもないからだ」

「この世界は灰色だから、全てを受け入れるのよ。」

光も闇も、強すぎたらこの世界じゃなくなるわ」
ベルの言う通り、光だけでも、闇だけでも、この世界の均衡を保つ事はできない。

そもそも、この異変が起きたせいで、争いの世界そのものが終焉へと向かっていったのだ。

「新たな創世こそ、災いのない世界なのだ！ 我が災いを起こさぬように導くというのに……。」

貴様は、災いのない世界を拒むのか!？」

キーラはベルに自らの理想を問うが、ベルは鋭い目でキーラを睨みつけた。

「災いは様々な事が絡み合ったから起こるものなの。」

それを無視して、あんたの都合だけで世界を思い通りに操るのは間違ってるわ!」

ベルが守りたいものは、あくまでも世界だ。

一柱の神の都合で世界をやり直されては、世界に生きるものが困るというのが本音だ。

「こうしてシャドウと一緒に戦ってる夢も、あと少しで覚めるな……。」

それでも、この楽しい夢を見せてくれてThank you!」

「お前らが言ってる新たな創世は、世界を思い通りにしたいだけの、ただの我儘だ」

「そのために俺達を巻き込んで、操って……。覚悟はできているだろうか?」

「キーラもダースもやっつけて、今の世界を守る!」

光も闇も関係ない! 侵略者は侵略者だ!!」

そして、マリオ、リンク、ピカチュウ、イレブン、ソニックも、

最初の攻撃で生き残ったカービィ、シャドウ、ベルの仲間として共に戦う事を決めた。

最早、八人に見えているのは、キーラとダースのみだった。

「我儘、だと……!?! 愚かな被造物め……!」

「どこまでも我らと敵対するか……!」

マリオに「我儘」と言われたキーラとダースは、

新世界の創世を拒否した八人を鋭く睨みつけた。

だが、八人がそれで怯むはずはなく、表情を引き締めてこう言った。「するぜ！ お前らみたいな我儘野郎に、この世界を渡してたまるかよー！」

「自分の世界のために関係ない奴まで巻き込んだ時点で、お前達は神様失格だ！」

「ああ……俺達にとつての神様は、もっとお茶目で、

トラブルは起こすけど世界を侵略はしない右手袋と左手袋だけだ」「どんな困難にも立ち向かう、勇気ある者。それが『勇者』の本当の意味なんだ」

「さあ、これがLast Gameだ。必ず勝って、この世界に帰るぜ」

「私、ベル・クリーブは、死神として、争いの世界の秩序を乱すものを排除する！」

お涙ちようだいだと思わないでよね！」

「僕は自分が信じた道を行く。そして僕は、その道のゴールに行こうとしている。

覚悟するんだな、キーラ、ダーズ。貴様らを必ず討ち、ゴールに辿り着いてみせる」

「平和な時間を邪魔する奴は、何度でもやっつける！」

未来なんか欲しくない。今がずっと続いて欲しい！ だから……僕達は、絶対に勝つ!!」

光と闇の化身との最終決戦が、始まる。

88 命の灯火

争いの世界を侵略した光の化身キーラと闇の化身ダーズと、
マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウ、

イレブン、ソニック、シャドウ、ベルの最終決戦が、始まった。

「はっ！」

「ぐああっ！」

ソニックは身体を丸めて、キーラにホーミングアタックを繰り返す。

「えいやーっ！」

「……っ」

「ファイアボール！」

ダーズはカービィの回し蹴りを食らうが、大したダメージにはなっていない。

マリオはファイアボールを放ってキーラとダーズを攻撃した。

「10まんボルト！」

「ぐあああああああ！」

「せやっ！」

ピカチュウはダーズに向かって強烈な電撃を放つ。

リンクはマスターソードを振って追撃した。

「我が光を受けよ！」

「くっ……！」

キーラは身体を眩く輝かせマリオの目を晦ませる。

「ぐっ!?!」

しかし、直後にキーラの身体に銃弾が命中し、キーラは癒えない傷を負った。

その銃弾を撃ったのは——狙撃銃を構えた、シャドウだ。

「……」

「Thank you、シャドウ！」

「相手の回避力は下がった、一気に攻撃しろ！」

「ああ！」

「イオラー！」

「ダークネスアロー！」

ソニックがホーミングアタックしたところに、ベルとイレブンは同時に呪文を唱え追撃する。

ダーズは周囲の空間に対して乱雑に断層を発生させ八人を一斉に攻撃する。

「ぐあっ！」

「きやあっ！」

「うわあっ！」

八人は何とか、気合で耐え切った。

しかし、キーラとダーズの攻撃は強烈で、体力を大幅に減らされてしまう。

「くそっ、状況を打開するしかない！」

「その程度か？」

ソニックは高くジャンプし、丸くなって突っ込んでいったが、キーラにあっさりで見切られる。

「ふんっ」

「俺の攻撃も当たらない！」

リンクが気合を込めて放った斬撃も、ダーズには当たらなかった。

「それっ、それっ！」

カービィは空中で二回、回し蹴りを繰り返す。

キーラに命中し、そこそこのダメージを与えた。

ベルは鎌に力を溜めながら、相手の出方を伺っている。

「おらっ！」

「効かんな……」

ダーズはマリオのポンプを触手でいとも簡単に打ち消す。

ピカチュウはキーラの攻撃が届かない高さにジャンプし、アイアンテールで攻撃した。

「はあっ！」

イレブンはキーラを勇者のつるぎで切り裂く。

ダーズは触手をリンクに伸ばすが、リンクは盾で防ぎ、ブーメラン

で反撃した。

「ベホマー！」

イレブンはリンクの動きが鈍っている事に気づく。

彼の手から光がリンクに向かって飛ぶと、リンクが負っていた傷が癒えた。

「ありがとう、イレブン」

「どういたしまして。……ソードガード！」

イレブンはすぐに微笑むがキーラの攻撃に気づくと真剣な表情になり、

勇者のつるぎでキーラの攻撃を打ち消した。

「おっと！ イレブンが真剣なら、私も真剣にならなくっちゃね！」

ナイトメア！」

「あああああああああ！」

ベルは大鎌をキーラに向かってぶん投げる。

大鎌はブーメランのような軌道を描き、キーラを二回とも切り裂いた。

「10まんボルト！」

「うおおおおおおお！！！」

ピカチュウも、ダーズに向かって10まんボルトを放ち、ダーズを麻痺させた。

「えーいっ！」

カービィは麻痺したダーズをハンマーで殴り、リンクは上に向かってダーズを突いた。

すると、キーラは無数の光の弾丸を飛ばした。

それは激しい威力だが、同時に美しい軌道も描いていた。

「綺麗……！」

「ベル、見とれるな！」

「はっ！ ……しまっ……きやああ！」

光に見とれたベルはうっかり攻撃を食らってしまい吹っ飛ばされる。

「うおっ！」

「No!」

リンクとソニックも防御が間に合わず、キーラの攻撃を食らってしまった。

しかし、流れ弾がダーズに命中し、ダーズもまたダメージを受ける。

「なっ、何をする!」

「ダーズ、貴様がぼんやりしているからだろう!」

「キーラは弾をばら撒き過ぎだ!」

いきなり喧嘩になるキーラとダーズ。

ヒーローもヴィランも共に手を取り合っているスマツシユブラザースとは、正反対だ。

「隙ありだぜ!」

「こんな時でもいがみ合うとはな」

「グアアアアアアア!!」

ソニックとシャドウは隙を突いて同時にホーミングアタックを繰り出す。

キーラとダーズは対応しきれずに攻撃を食らった。

「やるじゃないか、シャドウ」

「お前もな」

「流石は音速のハリネズミ……と究極生命体!」

「僕はついでか?」

ベルはソニックとシャドウのコンビネーションを見て拍手した。

「えーいつ!」

「そらっ!」

カービィは炎を纏いながらダーズに体当たりする。

マリオはダーズのカリングをかわし、空中からパンチを放って反撃する。

ベルは回転しながら大鎌でキーラを切り裂く。

「やるな……」

「これならどうだ?」

キーラは光の駒、ダーズは闇の駒を召喚して一斉に八人に襲わせる。

「うわっ！」

「なんだよ、こいつ！」

「数が多いよ〜〜〜！」

一体一体は弱かったが、数が多く一度に相手にする事は難しかった。

「……………こは、僕がやる」

そう言うとシャドウはどこからかロケットランチャーを取り出す。

普通の人では持つ事も難しい重量だが、シャドウは片手で軽々と持ち上げた。

「離れろ」

「ああ……………」

「食らえ！」

シャドウはロケットランチャーを放ち、

砲弾が光と闇の駒に命中すると大爆発が起こり、煙で包まれた。

そして、大爆発が治まると、光と闇の駒は皆、跡形もなく消滅した。

「私の駒が全滅したけど？」

「余の駒も……………さては其方の仕業だな？」

ダーズは不気味な一つ目でシャドウを睨みつける。

しかしシャドウは怯まず、逆にダーズを睨み返す。

「それがどうした？」

シャドウが指を鳴らすと、ダーズの周囲の空間が歪む。

「ぐっー！」

「はっ、せやっ！」

「はああっ！」

ダーズが苦しんでいる隙に、リンクがマスターソードで切り刻む。

ソニックもホーミングアタックでキーラに大ダメージを与えた。

「でんこうせつか！」

「ふん……………何っ!？」

ピカチュウは素早い動きでキーラに体当たりするがキーラは空を飛んで攻撃を回避する。

だが、素早く切り返したピカチュウが再びキーラに体当たりし、

反応できなかったキーラはダメージを受けた。

「ファイア掌底！」

「ベホイミー！」

マリオはキーラのコアが地上に現れたところにファイア掌底をぶちかます。

イレブンは体力が残り僅かのソニツクに回復魔法を唱えた。

「ぐあああああああああああー！」

すると、キーラが光の槍をピカチュウに刺した。

光の槍は背中まで貫通しており、ピカチュウは苦しみながら倒れた。

「ピカチュウー！ ピカチュウー！ 目を開けてくれ、ピカチュウ！！」

ソニツクはピカチュウに音速で駆け寄るが、ピカチュウは反応しなかった。

また、失ってしまうのか……と絶望しかけたその時だった。

「嫌だ、壊れるもんか!!」

なんと、ピカチュウはゆっくりながらも立ち上がり真っ直ぐにソニツクの顔を見た。

「ピカチュウー！ 自力で復活したのか!？」

「ああ……なんだか知らねえが、ソニツクが呼びかけてくれたら、俺の魂が熱くなって……お前が死の淵から引き上げてくれた。そんな気がするんだ」

「ピカチュウ……!？」

ソニツクとピカチュウは、互いに抱き合った。

その光景を見たキーラの中に怒りの感情が湧き、彼女の周りを強烈な光が飛び交う。

「おのれ、ねずみポケモンとハリネズミめ！ 何という事を……!!」

キーラは中央に陣取ると、光の玉がいくつか現れ、周囲に強烈な光の輪を何発も放った。

光の輪はゆっくりながらも、確実に八人を捉えようとしている。

「みんな、身を守れ！」

「駄目だ……!？」

八人はシールドで攻撃を防ごうとするが、光の輪の攻撃は強烈で、シールドに徐々に罅が入っていく。

「くううっ……」

「耐えられない……！」

そして、八人の張ったシールドが砕け散り、八人に光の輪が一斉に襲い掛かった。

「うわああああああああああああ!!」

攻撃をもろに食らった八人は、場外ギリギリへと吹っ飛ばされた。

「な、なんて威力だ……」

ソニックはボロボロになりながらも、歯を食いしばりながら立ち上がる。

だが、ソニックは満身創痍状態であり、まともに動ける状態ではない。

「これで終わりだな。キーラも、其方らも……」

ダーズは無数の触手をうねらせ、身構える。

どうやら、キーラ諸共、八人とどめを刺そうとしているようだ。もしまともに攻撃を食らえば、八人は倒され、世界はキーラとダーズのものになってしまう。

八人は立ち上がろうとしたが身体は動かなかった。

「……とどめだ！」

「させんっ！」

「ぐああっ!!」

そして、ダーズがとどめを刺そうとすると、シャドウがダーズに拳銃を一発だけ撃った。

ダーズにダメージを与える事はできなかったが、彼を怯ませたため、攻撃は届かなかった。

「貴様！ 許さんぞ!!」

それどころか、逆に触手がキーラの方に向き、

キーラに攻撃してしまったため、ダーズはキーラの怒りを買ってしまふ。

「消えろ！」

「其方もだ！」

「あれ、またいがみ合ってる……」

キーラとダーズはいがみ合い、互いを排除するべく攻撃に入っている。

こうなった時がチャンスである、とイレブンとベルは立ち上がった。

「ギガデイン!!」

「ダウンリーパー!!」

「ぐああああああああああ!!」

イレブンは呪文を唱えて聖なる特大の雷を落とし闇の存在であるダーズに大ダメージを与えた。

さらに、ベルの大鎌もキーラの翼を真っ二つにし、彼女を瀕死にまで追い込んだ。

「よくも我を追い詰めたな……」

「このままでは終わらんとぞ……」

「ま……まだやるの……!?!」

キーラとダーズは致命傷を負い、

最早戦えない状態なのにも関わらず、まだ諦めずに八人を睨みつけている。

それに対し、八人もまた、力を使いすぎていた。

どちらが先に倒れるのか、時間の問題だった。

「くそ……あと一歩のところなのに……!」

マリオが悔しそうに呟いた、次の瞬間。

—あの光と闇の化身を相手に、一歩も引かなかった。

—スマッシュブラザーズよ、よく、頑張った。

「マスター、クレイジー!?!」

突然、八人の脳裏に声が響き渡った。

その声は、マスターハンドとクレイジーハンドだ。

「終わったのか!?!」

—ああ。光と闇は、完全に打ち払えた。

「よかった……!」

「生き残ったのね……！」

「どうやら、光と闇のファイターを全滅させ、光と闇を打ち払う事に成功したようだ。」

カービィとベルは安堵の笑みを浮かべた。

「そして今、スマッシュボールを完成させた。」

「それを、今からこちらに送る。」

「ファイターよ、私達が作ったスマッシュボールをどうぞ使ってください。」

「私達の大切な世界を、どうか守ってくれ。」

「そう言ってマスターハンドとクレイジーハンドが出したのは、」

「光り輝く八つの玉——スマッシュボールだった。」

「これを使えば、ファイター達は「最後の切り札」という強力な技を使う事ができる。」

「マリオ、リンク、カービィ、ピカチュウ、」

「イレブン、ソニック、シャドウ、ベルは目を閉じ、スマッシュボールを受け取った。」

「彼らの身体は今、スマッシュボールのように虹色に光り輝いている。」

「これが、僕達の全力だ！ 全部、全部……お前達にぶつけてやる!!」

「八人はキーラとダーズにとどめを刺すべく、最後の切り札を放つ体勢に入る。」

「お前ら如きの我儘で、この世界を巻き込むな！ マリオファイナル!!」

「マリオは両手から巨大な炎の塊を放ち、キーラとダーズを同時に包む。」

「どっちが偉いか勝負するってなら、他のところでしやがれ!!」

「リンクはシーカー族の技術を利用した古代兵装の弓に矢を番え、矢を放ってキーラとダーズを貫く。」

「俺達の未来は、俺達自身で切り開く！ ボルテッカー!!」

「ピカチュウは放電しながら高速でキーラ目掛けて体当たりする。」

「みんな、僕に力を貸してくれ。ギガストラッシュユ！」

イレブンは勇者達から力を借りて剣を雷で包み、剣を一閃すると強力な雷がダースを包み込む。

「……アデイーマ、キーラ、ダース。決めてやる!」

ソニックはカオスエメラルドの力でスーパーソニックに変身し、超光速でキーラとダースに連続で体当たりする。

「頼んだぜ、シャドウ!」

「ああ。これが……究極の力だ! カオス……コントロール!!」

シャドウはカオスエメラルドの力を解放し、彼のみが使える真の力オスコントロールを発動。

神であるキーラとダースの動きを完全に封じる事に成功した。

「ベル!」

「あんた達の属性なんて、私には関係ないわ! インサージエンシー!!」

さらに、ベルが闇を纏った大鎌を連続で振り回してキーラとダースをバラバラに切り刻む。

鎌には彼女の意志が宿っており、光の化身キーラだけでなく、闇の化身ダースにも、効果的なダメージを与える事ができた。

「カービィ! とどめはあんたが刺すのよ!」

「よおーし! キーラ、ダース……お前達の野望は……これで終わりだ!!」

ウルトラ……ソオオオオオオオオオオオオオオオオオド!!!」

「グアアアアアアアアアアアア!!」

そして、カービィが高く飛び上がって、巨大な剣を振り下ろし、衝撃波を起こした。

キーラとダースはその一撃を受け、大きな叫び声を上げ、苦しみ出す。

やがて、キーラとダースは墜落していき、

彼らが使役していたマスターハンドとクレイジーハンドは消滅する。

そして……光と闇の化身が海に沈むと、二つの光が大爆発を起こし、争いの世界を包み込んだ。

エピローグ

こうして、最終決戦に終止符が打たれた。

光の化身キーラと闇の化身ダーズは、スマブラ四天王と、悪魔の子と呼ばれし勇者と、

青き音速のハリネズミと、黒き究極生命体と、秩序を守る死神の手により敗れ去った。

そして、美しい夕焼けが八人を照らす中、キーラとダーズはゆっくりと墜落し、

大きな水しぶきが舞い上がると共に、身体は完全に海に沈んだ。

「スピリッツボールが……い！」

キーラとダーズが海に沈むと、ベルが持っていたスピリッツボールがひとりでに開いた。

「魂が……天に昇っていく……」

開いたスピリッツボールの中から、スピリッツが次々と天に昇っていく。

解放された無数のスピリッツは螺旋を描き、青と紫が混ざった、美しい光の柱となった。

それはまるで、戦いを終えたスマブラ四天王、イレブン、ソニック、シャドウ、ベルを祝福しているかのようにだった。

「すっごい綺麗……い！」

「僕は……いや、僕達は……この世界を光と闇の魔の手から解放したのだな……」

「ああ……世界は、元の美しさを取り戻したぜ」

「僕の冒険は、まだ終わっていない。でも、この世界を巡る冒険は、終わった」

「ふー、これで丸く収まったな」

「空が綺麗……安心して走りたくなる空だ」

共に戦ったメンバーが、空を見上げる。

色とりどりのスピリッツが、元の世界に次々と帰還していく。

キーラとダースと戦った八人と、彼らを支えてくれたスマブラメンバーのおかげで、

スピリッツは居場所を取り戻したのだ。

光り輝く太陽が、世界を照らしている。

それはキーラが持つ邪悪な光ではない。

全てのものを温かく照らす希望に満ちた光だった。

スマブラメンバーが、キーラとダースと戦った八人のところへやってくる。

「みんな、ありがとう！」

「この世界を救ってくれたのね！」

キノコ王国の姫君、ピーチがマリオに真っ先に抱き着く。

「おわっ、やめろってば……」

「私、ずっと信じていたの。マリオが勝って、この世界を救ってくれるって。」

その通りになってくれて、嬉しいわ」

「はは……でも、キーラとダースに勝ったのは俺だけじゃないんだぜ。」

リンク、カービィ、ピカチュウ、イレブン、ソニック、シャドウ、ベル……。

頼もしい仲間がいてくれたからこそ、キーラとダースを倒して世界を救ったんだ」

そう、キーラとダースを倒したのは、マリオだけの力ではない。

スマブラメンバーが協力できたから、この大きな戦いに勝利したのだ。

「よく頑張りましたね、リンク」

「フツ……」

「お帰り、リンク！」

「やったあ〜！」

「……」

ゼルダ、シーク、ガノンドロフ、こどもリンク、トウーンリンクもやって来る。

彼らは皆、笑顔でリンクを祝福していた。

「みんな……ありがとう……！」

リンクも、彼らに釣られて笑みを浮かべた。

異なる世界の出身ではあるが、気持ちは同じだ。

「ピカにいちゃくん！」

「ピチューー！」

ピカチュウの弟のピチューが、ほっぺすりすりで近寄ってくる。

普段はあまり笑顔を見せないピカチュウだが、弟の前では満面の笑みを浮かべていた。

「やつぱり、このきようだい、なかよしでしゅ」

「……ああ、そうだな」

「俺は一人っ子だからな、兄弟が羨ましいぜ」

「はっはっは、仲睦まじいなあ」

「こういう光景は、平和になった証だな」

プリン、ミュウツー、ロート、ルカリオ、ゲッコウガ、ガオガエン、

ジュカインも陰で二匹を見守っていた。

「カービィ、シャドウ、ベル。三人とも、よく頑張りました」

「お前達、すっげえ頑張ったってな！」

「……フツ」

「カービィさんの戦いを見守ってましたが、かつこよかったですよ！

ね？ 大王様」

「そうだゾイ。キーラとダースにとどめを刺す時のカービィは、かつこよかったゾイ」

そして、アルトリア、柊蓮司、メタナイト、デデデ、ランスは、

戦いを終えたカービィ、シャドウ、ベルを祝福した。

カービィ、シャドウ、ベルは最初の襲撃で生き残った三人のファイターである。

それだけに、この三人は他のファイターと比べて一際特別な存在だった。

「……そんなわけないだろう。ただ、僕の邪魔をしていただけだ」

「当然でしょ！ 私、死神なんだから！」

「美味しいご飯をいっぱい食べて、いっぱいお昼寝するのが、僕の一番

の幸せだからね」

三人の反応は、文字通り三者三様だった。

それもまた彼らだ、とアルトリア達は笑みを浮かべた。

「では、そろそろ帰ろう」

「君達にも戻る場所があるからな」

「本当に、全てが終わったのですね」

「ええ……この空がそれを表しています」

広がっているのは、澄み切った空。

マスターハンドとクレイジーハンドは、スマブラ屋敷に帰るための魔法陣を作り出した。

螺旋の光になったスピリッツが天に昇る中、スマブラメンバーは全員魔法陣に乗り、

帰るべき場所に帰還するのだった。

そして、スマブラ屋敷では、

キーラとダーズが起こした異変を解決した記念のパーティーが開かれていた。

ヨッシー、カービィ、パックマンなど大食い組は出された料理をたくさん食べている。

「あゝ、幸せです〜」

「……ヨッシー、そのメロン、一口で？」

「はい〜！ とっても美味しかったです〜！」

マールは、ヨッシーの食べっぷりに驚いていた。

ドンキーとデイディーは夢中でバナナを食べ、

パックマンは自分と同じ世界にあるマーボーカレーといも大福を食べていた。

バンジョーとカズーイも、笑顔で食事をした。

「美味しいね、兄さん」

ルイージは双子の兄マリオと共に、普段はあまり飲まない酒を飲んでた。

「おつ、ルイージも付き合いが良くなったな」

「へへ……みんなと一緒にいると、断ろうにも断れなくて……」

「でも、あまり無理はするなよ」

「はい」

そんなマリオとルイーダの席の近くでは、ピーチとデイジーが談笑していた。

「なんやかんやで、やっぱりマリオとルイーダはめっさ仲が良いんやなあ」

「うふふ、この二人こそマリオブラザーズなのよ」

「これが平和になった証なんだな」

「ぴかにいちゃん、これ、とつてもおいしいでちゅ」

「ピチューが食えない分は俺が食ってやるよ」

「ありがとうございまちゅ！」

ピカチュウとピチューの兄弟は、ワイワイと楽しみながら食事していた。

マルス、ロイ、メタナイト、アイク、シユルク、ルキナ、クラウド、クロム、

そしてイレブンはみんなで談笑していた。

ピットとブラックピットが火花を散らす中、パルテナは微笑みながら見守っている。

パッくんフラワーとジュカインは意気投合しながら野菜ジュースを飲み、サラダを食べた。

リュウ、ケン、テリーの三人は拳を交わす者として酒を飲みながら笑い合い、食事をした。

フォックスとファルコはウルフに絡まれ、サムスはリドリーとダークサムスを睨んでいた。

リンクとゼルダは笑いながらロンロンミルクを飲んでおり、

こどもリンクとトゥーンリンクはリンクが作ったお子様ランチを食べ、

ガノンドロフは一人で酒を飲んでいた。

ファルコンはというと……いつも通り、黙々と出された食事を食べていた。

しずえは砂糖とミルクたっぷりのモカコーヒーを飲みながら、りよ

うと共に食事をしていた。

「やっぱりみんな、仲が良いんだね」

「そうだね」

剣士達の様子を遠くで見守っていたのは、

ルフレ、カムイ、ベレス、アイシャ、ドリイ、ミロ、そしてジョーカー。

ベレス以外は全員オレンジジュースを飲んでいた。

「そういえばあたし、あなたみたいな真っ赤な怪盗が主人公の本に興味があるの」

「真っ赤な……」

「その主人公とパートナーは、いところ同士なの。読んだ事ないけど、是非、読みたいわ」

「そうだな、俺もその本を読んでみたい」

ジョーカーは同じ「怪盗」という事で、ミロが言った本に興味を示した。

ベレスは相変わらず、無口で食事をしているが、肉を食べた瞬間、微妙な表情になった。

「……これ、誰が作った？」

「私わたくしですが、何か？」

ドリイがさらりとベレスに言う。

彼女はメイドだが、お菓子作り以外の料理はお世辞にも得意とは言えないのだ。

全くの下手ではないのが、救いだが……。

「あ、お口直しにわたしのお菓子は……」

「やめなさい」

アイシャがお菓子をベレスにあげようとすると、ドリイがお菓子を取り上げる。

彼女は、アイシャがお菓子を作ると微妙な味になってしまう事を知っているのだ。

「そのお菓子、一口食べていい？」

「構いませんよ」

「いただきます」

そう言つて、ルフレがお菓子を食べると、ベレスと違って特に問題なく完食した。

「大丈夫なの？ ルフレ」

「うん、平気さ。……僕の料理は、鋼の味だからね」

一方、どこかのテーブルにある三つの席では、ソニックがチリドツグ、シャドウが栄養剤、

ベルがカキフライ膳を食べていた。

今回、ベルは健康を重視して食事を選んだらしい。

「あれ？ シャドウ、珍しいわね。ソニックと一緒に席にいるなんて」「マスターハンドとクレイジーハンドが、こいつと僕を一緒に席にさせただけだ」

「何だよ、こいつつて！」

シャドウはソニックに対し憎まれ口を叩いていた。

でも、とベルがカキフライを食べてから言う。

「闇の世界でソニックを助けたのは誰だったかしら。私は知らないから、よく分からないけど」

「……」

シャドウは何も言わず、黙々と栄養剤を食べた。

気になったソニックは、シャドウに声をかける。

「シャドウ、楽しめないのか？ せっかく、世界を平和にしたんだぞ？」

「やめなさい、ソニック。それだと逆効果よ」

ベルが、ささつとソニックの前に手を置く。

「シャドウは、あんたみたいに自分のやりたいようにやっているの。

だから、シャドウの方から来るまで待つてなさい」

「へいへい……」

ソニックは用意されていたソーダを飲み、シャドウが話しかけてくるのを待った。

そして10分後、シャドウはようやく、食事をしているソニックに反応した。

「それで、ソニック。僕に何の用だ？」

「このパーティーを楽しめないのか、って話だ」

「楽しむ、か。騒がしい事は好きではないが……」

やはり、シャドウは騒がしいものが嫌いらしい。

ソニックは口を尖らせていたが、ベルは逆に、微笑みを浮かべていた。

「あら、楽しんでないわけじゃないわよ？ 楽しめないなら、すぐに出ていったはずでしょ？」

でも、シャドウは今、席にずっと座っている。

それだけで、パーティーを楽しんでいるんじゃないかと私は思うわ」

確かに、シャドウは難しい顔をしながらも、席から離れずに栄養剤を食べている。

言われてみればそうだな、とソニックは思う。

そして、ベルは小声でソニックにこう言った。

「シャドウはね、ああ見えても繊細なのよ。『繋がり』つてもものには弱い。

大好きな子のために一生懸命頑張ったり、あんたが一度死んだ時に弱音を吐いたり。

50年前に生まれたけど、中身はまだまだ子供。内面は……あんた以上にね」

「ベル……」

「もちろん、この事はあいつには内緒よ。あいつのプライドを傷つけちゃうからね」

「……ああ」

こんな近寄りがたいシャドウにも、意外な一面はあるんだな、と思うソニックだった。

と、その時、シャドウの耳がピクリと動く。

「……ん？ 何か言ったか、ソニック、ベル？」

「さあ？ あ、そろそろ時間みたい。私、準備してくるわ！」

「いつてらっしや〜い」

こうして、みんながパーティーを楽しんでいる時。

「みんな、そろそろベルから話があるぞ」

「おっ？　なんだ、なんだ？」

マスターハンドの掛け声により、全員がベルのいる方を向く。

彼女は、今回の異変の解決において大きな功績を残した英雄の一人だ。

一体何の話があるのだろうか、カービィやネスなどの子供組は興味津々だ。

「——皆さん、聞いてください」

ベルは凛々しい表情でメンバーの方を向くと、マスターハンド、クレイジーハンド、

そしてこの場にいる全てのファイターに演説した。

「この最大規模の戦いで、ある1つの事実が証明されました。

それは、光も闇も善悪はなく、本質は同じという事です。

光は善、闇は悪と思えますか？　違います。

あなたは、疲れた時はどうしますか？　疲れが取れるまで休みますよね。

しかし、それを光が許さなければ？

あなたは人々の期待に応えるために無理をし、限界を超え、やがて疲れ果てて永遠に休みます。

それは『引退』『活動休止』という形で、最悪の場合は『死』という形で表れます。

それを防ぐために、闇という安らぎがあるのです。

闇も同じです。あなたは、色々な事を色々な手段で表現したいでしょう。

しかし、それを闇が許さなければ？

やりたい事ができなくなり、自由がなくなり、やがて多様性が失われます。

だから、光が照らし、可能性を生むのです。

光も闇も長所と短所があり、それだけでは成り立たないのです。

キーラは光を以て、ダースは闇を以て、新たな世界を創世したいと

いう信念がありました。

しかし、彼らが望んだ創世は、この世界に生きる人々の未来を閉ざすものでした。

光に満ちた世界も、闇に覆われた世界も……。

世界は時間に合わせ、常に変わります。しかし、変わる事は悪い事ではありません。

確かに時に悪くもなり、時に良くもなります。でも、どちらも同じ、未来に進む事です。

私達は永遠の存在ではなく、誰かに行動を管理される存在でもありません。

だからこそ、結末はどうであれ、未来に向けて自分の足で走っていきます。

前で戦ってくれた皆さん、後ろから支援してくれた皆さん、

この世界の未来を守るために頑張ってくれて、本当にありがとうございます。ございました。

……私は秩序の守り手として願います。

いつか、全ての人が、自分自身の力で幸せに生きられる世界になりますように……」

ベルが演説を終えると、盛大な拍手が彼女に向けて送られた。

今回の光と闇の化身が起こした異変をきっかけに、外の世界への警戒心がより一層強くなった。

その一環として、マスターハンドとクレイジーハンドは、この世界を守る結界をより強めた。

これによつて、二度と異世界から悪意をもつて侵略する者が来る事は、なくなった。

亜空軍も、タブーも、キーラも、ダーズも、彼らに匹敵する脅威も、もうこの世界にはやってこない。

「この世界」は、本当の平和を取り戻したのだ。

ちなみにキーラとダーズは、この世界の住民を駒のように酷使したため、

マスターハンドとクレイジーハンドにより15000年の封印刑

に処された。

刑期は長すぎるかもしれないが、この世界に最大規模の異変を起こしたので、

スマブラメンバーはほぼ全員「当然」といった表情だった。

色とりどりの、炎の螺旋。

どこまでも流れる、果てしなく続く光の中、

戦い交わる全ての人達が、立ち上がり、踏み出して、明日へ進んでいく。

未来がどんなものかは、誰にも分からない。

また、誰かが勝手に決めていいものではない。

そう、スマッシュブラザーズの未来は、スマッシュブラザーズ自身が選ぶのだ。

何故なら、何者にも囚われない自由こそが、スマッシュブラザーズを表すからなのだ――

大乱闘スマッシュブラザーズ

S t e r n d e s L i c h t s 〉 灯火の星

完